
Muv-Luv Condition-Red of human

ガン = カタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

【Nコード】

N 0 9 8 9 M

【作者名】

ガン⇨カタ

【あらすじ】

『 漢には、曲げられない信念がある 』

激突する魂が、衝突する命が、新たな物語を紡ぐ。

愛と勇気の御伽噺の裏で展開された、1人の男が紡ぎ出す血と命の物語。

全ての物語が集約された先に、新たな光が垣間見える。

オリジナル機体・オリジナルキャラクターが出てきます
現在AL編突入

1の「おはなし」の諸注意

女好きな主人公が織り成す、人情味(?)溢れるストーリー。
基本的には「TE」を中心に物語が展開し、その裏でEXTRAな
どのキャラ達と絡んでいきます。

その1『主人公が、女好きである』

美しい女性を愛するのはイイ男の義務と言い張り、女性にアタック
することが多いです。

勿論、彼自身も本当の意味での恋愛がどう言うものかは理解してい
るつもりです…たぶん。

その2『ヒロインは唯依嬢である』

メインヒロインは彼女です。

うん、コレ以外は何も説明出来ません。

その3『オリジナルの戦術機が登場する』

この話独自の戦術機や兵器などが登場します。ご了承ください。

オーバースペックの兵器などは登場しませんので、1人俺Tuee
eeeeee!!はちよつと無理かと…

その4『主人公が強い』

普通に強い。ランク的には武 オリ主。

でも、どうしようもない女好きだから認めて貰えないジレンマ。

以上の内容を含んでおりますので、ご注意ください。

読み辛いこともあると思いますが、最後まで頑張って往こうと思ひますので

感想・指摘・誤字などの指摘を宜しくお願い致します。

興く 歓ゲイしよう、盛大にな！ >干

1 (前書き)

どうも、はじめまして^^

処女作って緊張しますね

何をして良いのか、とか

どうすれば良いのか、なんて色々と無駄に考えすぎちゃいます

『テストLV1をクリア。続いて、LV2へ移行』

戦術機とは莫大な金を掛けて作った、人類の為の巨大な棺桶である。俺はこの頃、そう思うようになった。

《了解》

何十年、何百年戦おうが駄目だった。

何千人、何万人死のうが無駄だった。

人類とBEATの戦い。

平行線なんて生易しい物では無く、圧倒的な大差を見せ付けられた負け戦だ。

……こんなことを考える時点で、衛士としてはポンコツだなあ。

『状況開始。敵は不知火が3機です、気を抜かないで』

《いつでも真剣だよ、俺は》

まあ良いか。

どうせ、人間なんて死ぬ時は死ぬ。

その死期が早まったと思えば何とかかなるかな？

リーダーに浮かび上がる3機の不知火は部隊を2：1に分けて此方へ進軍する。

1機を突撃させ、その隙を2機で確実に叩くのだろう。
分かり易いな。俺みたいな捻くれた軍人には、少々物足りない前戯
かも知れない。

《サツサと終わらせて煙草吸いてえ……》

愚痴と同時に、此方へ突撃する不知火。
適当に突撃砲をバラ撒き、適当に流す。

回避行動でビルの影へ飛び込んだ不知火は取り敢えず無視、残りの
2機を潰しに掛かる。

左右から襲って来る不知火の大刀をバックステップで回避。
同時に射撃。

1機は管制ユニット付近、1機は腕。

『2番機撃破。3番機腕部破損』

内心で焦りながらも、距離を取る為に跳躍ユニットに火を入れる。
ビルの影から此方へ向って来る不知火と、後ろへ後退する俺を執拗
に狙って来る”腕無し”。

わざわざ、チャンバラごっこに付き合うつもりも無い。

突撃砲で”腕無し”を集中的に攻撃する。

例え手負いだろが武器は持てる。

2対1の状況は辛い、サツサと落ちてくれればもう戦況はコッチの
ものだ。

『3番機被弾、撃破』

バラ撒いておいた弾が上手い具合に腕無しの回避先へ食い付いた。
回避後の隙に丁寧にブチ込まれたそれは、回避の隙などと与えずに”
腕無し”を退場させる。

残り1機。

漸く登場した最初の1機の手には既に刀。

《テスト、だよな？やっぱり近接戦闘もやった方が……》

『上は喜ぶでしょうね』

あまり得意じゃないが、やれと言われればやりましょう。

両腕にマウントされていた突撃砲を向って来る不知火へブン投げる。易々と叩き斬られたが、そんなことは最初から関係無い。

ナイフシークエンスからナイフを両腕に装着。市街地では長い刀よりも短いナイフの方が戦い易い。

何よりも、俺は ナイフが好きだ！

『 不知火、来ます！』

ほぼ野生動物の直感と同じ様に、此方も飛ぶ。

刀にナイフで挑む。相変わらずのバカさ加減に上官は驚愕、整備班は茹蟄だろうな。

そんな下らないことが脳裏に浮かぶ。

接触寸前、ナイフ1本目を投合。弾かれる。2本目を投合、頭部に命中。

敵の動きが鈍い、此方は武器など無い。それなら

《借りるぜ》

不知火の腕を引き千切り、その腕に握られていた刀ごと管制ユニットに突き刺す。

幻想的なオブジェクトの様だ。考えた奴の頭は狂っているとしか思えないが……

『3番機を撃破。今日の分のテストは終了です、お疲れ様でした』

目に直接投影される管制の女の子の顔。

ビバ、大和撫子。

その人形のように美しい肌、まるで最高級の絹の様に艶やかな髪、君は俺の前に舞い降りた天使だ。

さあPXまでエスコートしよう、それが男の役目さ。

……フツ。こんなこと、口が裂けても言えねえぜ。

『少佐、お口が滑っています』

《え！？》

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

此処は帝国軍のPX。

俺の周りにはお上品に食事をする女の子達。

男？帝国の男は筋肉バカばかりだ。絶対に、半径2m以内に近付くな！

「今回のテスト、巖谷中佐は歓喜でしょうね」

「あの程度なら喜びやしないよ。次はもつと無理難題を吹っ掛けられそうだな」

「少佐なら大丈夫です」

「その根拠は？」

「女の勘ですよ。でも侮るなかれ、女の勘は良く当たりますから」

俺の隣に座る先程の大和撫子

藤代千枝ふじしろ ちえは笑顔で語る。

勘で当てたことを武勇伝の様に語るその姿、非常に可愛らしいが何せ食事中だ。

話し方にも段々と熱が籠り、口に物を含んで居ても喋る、怒鳴る、語る。

「食べ物を食べながら喋らない。常識だぜ、藤代中尉」

「はぶうつ!?!」

おう、救いの神よ。貴方は私を愛してくれているのですね!

そこに現れたのは技術開発局副長の巖谷中佐。テストパイロットを勤める俺の上司だ。

咽返る藤代中尉を捨て置き、巖谷さんは俺の向かい側の席に座った。心なしか、上機嫌に見える。

「機嫌、良さそうですね」

「お前のお蔭だ。テスト終了と同時にアレのデータを上に叩き付けてやった!」

いやあ〜上も目え丸くして驚いて、それを見たら気分も良くなる
つてもんだ!!」

「そりゃ良かった。でも、無理難題を吹っ掛けないで下さいね?」

「安心しろよ、俺も昔は開発衛士をやった身だ。限界は心得ている
つもりだぜ?」

流石は巖谷中佐。その893の様な顔の傷以外には惚れそうだ。

中佐の筈なのに権力を振り翳そうとしない姿勢、過去に戦術機に携
わった経験。

書類上でしか人の生死を判別しようとしなくソツたれの政治屋共
とは大違いだ。

俺も巖谷さんのことういった態度は見習ったなあ……

お互い、お茶を啜りながら雑談をする。

巖谷さんとの雑談と言えば、大抵は”彼女のこと”での相談が大多
数だ。

“彼女”に対する対応をどうすれば良いのか、色々と悩んでいるの
だろう。

中佐なんて地位に上り詰めた人にも苦悩なんてあるのか、と俺自身
もことう言ったところで巖谷さんが帝国軍の一部では無く、人である
ことを理解する。

周囲から見れば他愛の無い話だとしても、俺にとっては巖谷さんと
言う1人の人間を認識する為の大事な会話だ。

「誕生日に何を渡してやれば良いか、迷っていると」

「そりゃお前、年頃の女の子だぞ?しかもこのご時勢、何をやれば

喜ぶのか……」

「花束なんてどうでしょう？アッって貰うと嬉しいですよ、女の子って」

「巖谷さん、プレゼントなんて気持ちですよ。」

「迷う必要なんて最初からありません、『おめでとつ』の一言で全てを解決」

「相変わらずくっせえ台詞」

「渋いですね。若いのに」

「お、お黙り！！」

「で？やっぱり花束なのかなあ？」

「それが妥当ですよ。あ、でも、ネックレスも捨て難いですね」

「ネックレスウ？恋人じゃあるまいし、巖谷さんがあの子にネックレスって……」

「周囲に誤解されるだろ、確実に。『娘溺愛し過ぎだろ、気持ち悪いい〜！』」

「案外と有り得ますよ。じゃあ妥協して、ドックタグ？」

「軍から配備されているのに、か？それじゃ意味ねえだろ……何かねえのか、” 剣崎”」

あ、因みに剣崎は俺の苗字。名前は龍二。

「真面目に、ですか？」

「真面目に。あ！テメエ、やっぱり遊んでやがったな！？」

そこは華麗にスルーして、少々考える。

ネックレスはやめた方が良いと思う。このご時勢、少々重く感じるかも知れない。

やはり花が良いのでは？

花を育てると言うことは心の余裕。常に優雅に、余裕を持って生を謳歌する。

ギスギスとする軍人生活の良いはけ口になってくれそうだ。

「良いじゃないですか、花束。

薔薇やカーネーションも良いですけど、あまりにも安直過ぎますね。折角ですし、誕生花をプレゼントするって言うのも素敵だと思いますよ？

3月13日だと……確か、イカリソウだと思います。花言葉は『貴方をとらえる』。

1人の父として、娘を案じ続けるって意味合いだと中々深くて味も出るでしょう？」

「……」

「……」

「な、何ですか？」

「「流石は日本が誇る変態紳士」」

「お黙り!!」

巖谷さんは満足そうに帰って行った。

いやあ、あの人って顔に似合わず意外と繊細だから最初は戸惑った。初めて巖谷さんの部下として働いていた時は、あの人の冗談も緊張して真っ向から受け止めてしまつて、良く苦笑されたな。

そっか。それじゃあ、”あの子”との付き合いも随分と長くなるのか……

「少佐？」

「え？あ、ああ……いやあ、午後は休憩したいなあ！」

「午後は”新型”のデータを纏め上げるので、手伝って貰いますよ？」

「嘘おっ!?!」

追記。巖谷さんは彼女にキッチンとプレゼントを渡せたらしい。

1 (後書き)

此処まで読んで頂いて、有難う御座います

完結目指して頑張っていくので、よろしくお願いします！

2 (前書き)

ココまではサクサクと投稿できます

次の話はスラスラくっつと下書きを弄って
ポントと追加したいと思います

剣崎

朝。それは俺にとっての至福と同意。

「起きて下さい、少佐！早くしないとテストが……ああ、5分押しています！」

心地良い眠りを与えてくれる枕。

俺を包み込み優しさを振り撒く布団。

寝返りをする度にギシギシと呻くベッドの音も、今では愛おしい。

「おい、剣崎！昨日の今日で悪いが、お前に大事な話があったぞ！」

ああ素晴らしい。

戦時中だろうがこの至福の時だけは誰にも邪魔させる訳にはいかない。

起床ラッパが鳴ってからの30分。それが奴等、安眠妨害者共の活動時間でもある。

それさえ乗り切ってしまうえば、何と言うことはない。

あとは情眼を貪り尽くせば

「おつ、唯依ちゃん」

「あつ、おはようございます、簗中尉」

「グバラアツ!!???!?!」

跳ね起きると言うよりも、ベッドが俺を拒絶した様な錯覚に囚われる。

居るのか!?

この厚い扉一枚向こうに、あの子が居るのか!? いや、たった一枚しか扉が無いのか!?

取り敢えず新しいパンツを着装。

昨日、綺麗に畳もうと心に決めていたがそんな事はもうどうでも良い。

寝巻きを放り投げ、歯を磨く。

あまりにも焦り過ぎたので、きつと口の中は血だらけだろう。

がしかし、あの子の言葉の弾丸よりは千倍マシだ。

顔を洗う。早い、速度が早い。

今の自分が何処で何をしているのか、自分自身でも理解できていない。

本能だ、今の俺は本能で動いているのだ。

軍服に袖を通し、扉を半ば蹴破る。

因みに、何を言われても良いようにハンカチを手に握り締めていた。

「お、遅れてすまない!中尉、だが俺は　!」

……アレ?

「おはようございます、少佐。いやあ、効果抜群ですね!」

「朝に弱いつて……今後が思いやられるぜ、ったく」

中尉が、居ない?え?俺、騙された?

「こ、この鬼！悪魔！利益探求者！夢を返して、少年の夢を返して
！！」

「さあ少佐、シミュレータールームに行きましょうね」

千枝が笑顔で俺に迫る。

普通に怖い。顔が笑っていても、目だけは笑っていない。

その時の俺はきつと、殺されると錯覚したことだろう。それ程の恐怖だった。

「ああいや、その前に剣崎少佐に伝達事項がある」

ズイツ、と巖谷さんが俺と千枝の間に割り込む。

いつも一歩下がった場所で物事を見守る巖谷さんが自分から前に出て来ると言う事は余程重要な事なのだろう。それに、俺のことを

「剣崎少佐」と呼んだ。

俺も軍人の端くれだ。すぐさま、態度を改めて中佐を見やる。

千枝も俺の後ろへ下がり、巖谷さんへ視線を移していた。

「剣崎少佐及び藤代千枝中尉に特別任務がある。貴様等には
アラスカ”へ飛んで貰う”」

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

藤代

巖谷中佐から伝達された任務内容を私なりに要約すればこうなった。“ソ連とアメリカの国境近くで不知火を改修して来い”。計画名『X F J 計画』。つまり、私と少佐は其方に赴いて技術を提供。その見返りとして日本の94式 不知火を改修してやれば良い、と。

「日本だけでは94式の改修は難しい。

設計図から何やら、全てを白紙にして0から設計しなおしたとしても、出来上がった

機体では到底現場の欲求を適えるに至らない。外国機導入の意見も出ている始末だ」

「でも、それだと反発する人が多そうですね。帝国では外を嫌う人だらけですから」

「中尉は柔軟な思想を持っているようだな。

まあ確かに、全員が快く思うとは限らん。だからこそ、お前達の出番なのさ」

元々、ソ連とアメリカの国境付近ではプロミネンス計画と言う物が進められていたらしい。

X F J 計画とは即ち、そのプロミネンス計画に便乗する形になるのだらう。

……こつ聞くと、少々聞こえが悪い。

まあ背に腹は変えられないのだろう、何せ資金は有限だ。BETAも待つてはくれない。

「お前達が携わっている新型も向こうで多少なりとも改修して貰う。折角、汗水流してテストして貰って悪いが、より良い機体を作る為に我慢して欲しい」

「いえ、それで苦勞するのは私では無く少佐ですから」

「だそうだ。怖い相棒だな、剣崎」

「いつもの事ですよ」

XFJ計画の細かい点などをチェックする私の隣で、少佐は戦術機のカタログを捲っていた。

難しい話の時はいつもそうだ。

面倒ごとを全て私に放り投げて、自分は逃避。正直、ずるいと思う。

「お前達、やってくれるか？」

巖谷さんからの最終確認。

まあ上からの命令であれば、断れる筈も無い。一応、巖谷さんからの優しさなのだろう。

やっぱり帝国の中でも屈指の良い人だなあ。

「了解！」

「了解。何よりも巖谷さんの頼みですからね」

型に沿った敬礼を返す私と、読んでいたカタログを返して適当に右

手を上げる少佐。

私よりも付き合いの長い少佐だからこそ許される、巖谷さんに対しての対応だ。

それに苦笑をしながら、巖谷さんも敬礼を返してくれた。

「そうそう、同伴者がもう1人増えるかも知れん。

今からそっちにも通達するから、お前達はサツサと支度を整えてくれ」

思い出した様に言う巖谷中佐。その顔は何か含みが見え隠れしていた。

隠している、何か隠しているのは明らかだ。

協力者とは？と問おうと思っていたのだが、既に後ろでは少佐がドアに手を掛けていた。

「 篁中尉、貴様にはアラスカに飛んで貰う」

唯依ちゃんは明らかに動揺を見せたが、それを押し殺して相変わらず堅い敬礼を返す。

こんな一面を持つこの子だからこそ、剣崎はどうにも苦手なのだろ

う。

「まだ貴様には伝えていなかったが、2名の同伴者が居る。

其方は貴様よりも少しばかり早くアラスカへ向かって貰うつもりだ。

現地で合流次第、打ち合わせでもしておけ。なに、気の良い奴等

だから心配は要らん。

「同伴者の資料は部屋にでも送って置こう、部屋でゆっくりと確認してくれ」

「1人は帝国技術部が認める天才、もう1人は帝国が誇る古参のエンジニアだ。」

例え、向こうで何があるうがあの人なら解決してくれる事だろう。

それに 剣崎なら、安心して唯依ちゃんを任せられる。

変な男を傍に置いておくと、唯依ちゃんに何を仕出かすか分からんからな。

あのサボリ癖の強いバカ野郎には丁度良い刺激だろう。

資料を見ている中で、私が驚愕するに値する名前が書いてあった。同伴者の中に、藤代千枝の名があったことも十分に驚いたが、その下の名

『 剣崎龍二ノ少佐ノ男 』

一瞬にして顔が熱くなる。

この名前を見ただけで、出会った頃から今までのことを全て鮮明に思い出してしまう。

だから、私は彼を直視しない。軍人として生きて来た筈なのに、女になりそうで怖いから。

「ッ………！」

苦しい。でも、コレは任務だ。
きっと彼も同じ気持ちだろう。

任務だからこそ、彼はアラスカへと飛ぶのだ。下心など無い　　ッ！

「シャワーでも、浴びよう……」

私は軍人だ。他の何でも無い、私は国の為に戦う軍人なのだ。
自分にそう言い聞かせなければ、とてもじゃないが　発狂しそう
だから。

私は篁唯依。それ以上でも、以下でもない。

剣崎

「……」

何故こんなに空気が重いか、だと？

ハッ！輸送機の中で気付いたが、同伴者名簿の一番上にある名前を
見ればそうなるぞ。

『篁唯依／中尉／女』

彼女は俺達よりも遅れて到着との事だが、憂鬱だ。

何せ、あの子と一緒に居ると周りの可愛い子達も自粛して堅くなる。

顔は可愛いのに、俺の好みなのに、性格があまりにも”アレ”だから困る。

過去、何度も会話を試みたことがあった。

「中尉、ご飯でもどうです？何なら貴方の為に特製ディナーでも

」

「いえ、少佐を煩わせる訳には参りませんので」

「中尉、シミュレーターでも一緒にどうですか？」

「私の様な未熟者が、恐れ多くも少佐と共にシミュレーターなど言語道断！

どうか、気にせずにお続け下さい」

全て断られ、一時だが本気で落ち込んだこともあった。

それが彼女の個性だと割り切らなければ、今も割りとは本気で悩んでいたかも知れない。

俺自身、篁唯依と言う子は嫌いでは無い。

性格もキチンとしているし、叔父さん（巖谷さん）思いだし、仕事も出来る。

「はあ……………」

「どうかしましたか、少佐？」

「いや、まあ……………頑張ろうか」

「??? あ、もう直ぐユーコン基地が見えますよ」

ただ……怖いよね、あの子。
俺が女の子と話していると、もう目だけで射殺すくらいの勢いで
コツチ見るからさ。

そんなことよりも 俺自身、彼女を”あの子”に……

『 此方、ユーコン基地。 剣崎少佐及び藤代千枝中尉ですね？お
待ちしております！』

ハツとした様に顔を上げる。あまりの事だったので、少々だが驚い
てしまった。

通信画面に映る白人の男性。

此方の顔を見るなり、興奮した様子で喋っている。何か嬉しいこと
でもあったのか？

「どうも。わざわざ、派手な歓迎感謝します」

『いえ、此方にも少佐の武勇伝は聞き及んでいます！

そんな方と共に1つの戦術機を作り上げることが出来るなど、光
栄です！！』

そう言うことか。

別に、たいしたことはして来なかったけど……風評ってヤツは流れ
る間に美化されるのか。

「ありがとう。それじゃ、今日から宜しく」

『はっ！』

上空から見えるアラスカの大地は、広大だった。

此処が　新しい職場か。

俺はそんな不安と少しの期待を持って、アラスカへと降り立ったのだ。

不知火の改修と新型の完成。

それと、出来るなら篁中尉とのギクシャクした関係も終わらせたい。

大変だなあ、と1人愚痴る。

久しぶりに踏み締めた地の感触を確りと感じながら、俺と藤代は迎えのジープへと向った。

2 (後書き)

アラスカッ！アラスカッ！！アラスカッ！！！！

次の話もササッと投稿できるように頑張ります

3 (前書き)

展開が早いかも知れませんが…
何度も読み返して、気に入らない様ならば書き直したいと思います

《アルゴス02、準備完了！力の差ってヤツを教えてやるよ！！》

《アルゴス04、準備完了》

《アルゴス03、準備完了だ。いつでも行けるぜ、少佐》

《……酷え》

1つ聞かせろ。

どうしてこうなった！

歓迎会じゃないのか！？

普通、初めてアラスカに来た俺達が早く現場慣れ出来る様に歓迎会をしてくれるとか、

そんな雰囲気だろう！バトルジャンキー 幾ら戦闘狂だからって、こんなバカらしい歓迎の方法があるか！？
いや、ある訳がねえっ！！

『少佐、準備は宜しいですか？』

そうだった！藤代おっ、テメエが原因だ！

あの色黒のチビと喧嘩しやがって、何が『侍魂です』だよ！
訳分かんねえよ！！

《声も出ないってことか、”少佐”。負けを認めるなら今だけどさ、
どうする？》

《……あ？》

……いや、今は良いや。

この有り得ねえ歓迎会も、藤代に対する言及も、今は良い。
今はただ

【システム起動】

《泣いて謝っても許さねえぞ、クソガキ》

目の前の気に入らねえ奴等を、オリジナルハイブまでブツ飛ばす！！

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

31

タリサ

気に入らない。

最初に日本から来た2人に対して、ワタシはそう思った。

良い所育ちのボンボンが、私達の部隊の臨時指揮官を務めることも。
中尉のポジションを奪い取ったことも。

権力だけでのし上って来たヤツが 気に入らない。

最初は、そう思っていた。

《沈めよ》

《ッ！？》

A C T Vの急激な加速、速度に劣る所かその速度　いや、移動先に先回りしての執拗な攻撃が、日本人から繰り広げられる。私の得意な近距離戦に移行しようにも、相手はどんな事よりも距離を優先して来る。

完全に、ペースを持って行かれた……ッ！

《アルゴス03、アルゴス02は俺1人で十分だ。アルゴス04を足止めして欲しい》

《了解。追いかけてこは得意だぜ、少佐》

相手の使う機体はTYPE-94。如何考えても、機動性はコッチが圧倒的に上の筈なのに！

右からの突撃砲に対して横への回避、先読みしているかの様に左から支援砲が狙い撃つ。

前方へA C T Vの機動力を生かしての接近戦を挑もうにも、ビル郡の間を上手い具合に潜り抜け、ヒョイヒョイと距離を離される。

《ッ！逃げ回るな、チキン野郎！！》

《戦法と言え、人間きの悪い》

頭に来る！！

さっきからずっとコレだ。苛々しない方が狂ってやがる　ッ！！！！

幾ら相手がどんなマジックを使おうが、機体の性能では此方が上だ。それに、相手の攻撃は十分回避出来る範囲内だ、攻め込めば勝機はコッチにある！

《終わりにしてやるよ、”少佐殿”！！》

ACTVが 爆ぜる！！

加速により、従来の15Eとは比べ物にならない速度でTYPE-94の目前へと躍り出る。

対するTYPE-94はACTVを見ようともし動じることはいない。寧ろ、誘っているかの様に装備していた突撃砲と支援砲を地面へと投げ捨てたのだ。

サムライらしく、斬り合いつてわけか！

私自身、嬉々としてそれを望んでいた。

接近戦は私の得意分野だ、こんなヤツに負けるつもりは無い。

《 終わりだ！！ 》

ACTVの凄まじい三次元機動が披露されようと、TYPE-94は反応すら示さない。

背中に背負っていた刀を装備し、ユラリと構えた程度だ。

既に1つの弾丸と化したACTVと、その先に居る 少佐の駆る、TYPE-94。

速度で攻めるタリサと、待ち構えるだけの龍二。

故に、勝負は僅か一瞬。

《うるせえ八工だな》

軽やかにナイフの機動からずれ、先程まで自分の居た場を突き抜けるACTVの腹ごと、

《うわぁっ!?!》

一刀の元に斬り捨てる。

上半身と下半身が生き別れ、後ろで爆散するACTV。

そして、その破片を堂々と身体で受け止める　不知火。

シミュレーターだからこそ撃墜で済むが、現実ならば確実に死んでいる攻撃だ。

CPからの勝ち誇った様な少佐の勝利宣告が、今は途轍もなく悔しく感じた。

劍崎

少し、自分が大人気なく感じた。

幾ら何でも真つ昼間、上官の目の前で軽々と斬り捨てられればシヨツクもデカイだろう。

いやぁ失敗した。力を見せ付けて、仲良くなるうかと思っただけどコレじゃ逆効果だな。

「お疲れ様でした、少佐」

「お前の尻拭いをするのは今回限りだ。二度とくだらねえ真似するなよ」

強化装備を着替え終え、アルゴス小隊と会合した部屋で一服していた。

そんな俺の隣で、椅子に座りながら嬉しそうにキヤツキヤと喚く藤代中尉。

余程、あのチビに俺が勝ったことが嬉しいのだろう。

何がお疲れ様だ。お前が巻き込んでくれたお蔭だよ、バツキヤロー。

それにしても……あの3人、凄まじい技量持ちだった。

1人1人がどう考えてもエース級の実力者ばかりで、こりゃウカウカしていたら一気に追い抜かれる。俺自身も、このアラスカで良い技術経験が積みめそうだ。

本日2本目の煙草を取り出し、火を付け様とした時と同タイミングでドアが開かれる。

慌てて煙草を仕舞い、行儀悪く机の上に座っていた態度を改める。

一応、上官な訳だが……印象を重んじるからな、人間って。

「お疲れ様です、少佐」

入って来たのはイブラヒム・ドゥール中尉。

俺よりも明らかに年上なので、何とも対応に困るタイプだ。

相手の方が年上なのに、此方の方の階級が上と言うことで如何対処して良いか分からない。

取り敢えず、軽く「どうも」と言って相手の言葉を待つことにした。ベラベラと喋って、印象を悪くしても仕様が無い。

「タリサ……アルゴス02ですが、悔しがっていましたよ」

「え？あ、ああ」

「……いや、俺としては彼女の三次元機動の方に驚きましたよ。凄いですね、ACTVって」

「アレは彼女の成せる技です。機体の性能を生かしている証拠ですよ」

そうか……アクティヴって付いただけで、実際のイーグルと大差無いとも思っていたけどやっぱり戦術機は奥が深い。パーツの1つ、設計図の一部を変えただけで機体1つ1つの動きが嘘の様に変わるのか。

こりゃ、新型のテストをやり直すって意見に大賛成だな。

日本だけじゃなくて、世界の技術を取り入れた国際機を作るのも良いかも知れない。

まあ……気に入らないなんて怒鳴るバカが絶対に居るだろうが。

「彼等1人1人、何かを失って此処に來ています。どうか、あまり奴等を責めないでやってくれませんか？」

「い、いや、彼等は立派ですよ。少々、上官に対しての礼儀がなっていない様ですが……」

「面目ありません」

この人からは巖谷さんと同じ感覚がする。

何だろう、こっ……おっさん、と言うか……兄貴肌と言うか……

まさかアラスカに飛んで、巖谷さんと同じ気質を持った人に会うと

は思えなかった。
世界って広いな。

申し訳無さそうに頭を下げるイブラヒム中尉の重たい雰囲気を取り除く為に、適当な話題を振りながら世間話を続けることにした。

彼の話聞く限り、彼自身も昔はテストパイロットだったとか。凄いな！此処まで巖谷さんにソックリだと生き別れの兄弟か何かかと勘違いしそうだ。

イブラヒム

私に言えることは1つ。

目の前で笑うこの男　　剣崎龍二は、間違い無く世界でも5本の指に入るエースだ。

機体の性能差を戦闘経験と天性の直感のみで埋め合わせるなど到底私には真似出来ない。

推測だが、相当な数の戦場で鍛えこまれたのだと思う。

まだ若い筈なのに、戦術機乗りとしての技能は最古参のエースと同等かそれ以上。

尚且つ、どんな状況下も至って冷静に対応する精神力。

此処アラスカ……いや、米軍やソ連軍を探し回ってもコレ程の逸材は存在しないだろう。

間違い無く、この男は天才だった。

剣崎

「私はまだ、認めた訳じゃねえからな！」

「ヴァレリオ、お前は甘い。女だろつが容赦はするなよ？戦場だろつが、ベッドだろつが」

「ハツハアツ！流石は少佐、ベッドの上での対人戦もお得意ってことか！？」

その辺りのテクニック、是非ともご教授願いたいぜ！」

「ガキに見せられるほど優しくねえよ。俺の技は激しいぜ？」

「ヒュウッ」

「ガキって言うな！」

ユークン基地の近くにある小さな町、リルフォート。

そんなリルフォートにある酒場で、俺はアルゴス試験小隊のメンバーと酒を飲んでいた。

最初に誘って来たのはヴァレリオだ。

「コレからも宜しく頼みますよ、”ケンザキ少佐”。

アレ程のことをやってしまったのに、どうやら認めてもらえたようだ。

いや、正直言うと驚いた。まさか本当に認められるとは露ほども思っていないくて……

ま、まあ、認めてもらったのなら結果としては最上だな！

因みに、藤代は昼間の罰として留守番を任せてある。まあ新型の整備もあるから、アイツにとっては好都合かも知れないが。

「良いか、坊や？腰は動かすんじゃないねえ、ねじ込むのさ」

「こづか？」

「違う、こづだ」

因みに、今のところ俺はヴァレリオと最も仲が深まっている気がする。

一度とは言え二機連携を組んだことも大きいが、この男 俺と途轍もなく気が合う。

同じ波長と言うか、紳士と言うか。

「Let's party yeah!!」

「……ハイハアツ!!」「」「」

着ていた堅苦しい軍服を脱ぎ、上半身裸になって突然酒をラツパ飲みするヴァレリオ。

それに釣られ、盛り上がっていく酒場の中。俺は、何と無く辺りを

見渡していた。

色黒チビは盛り上がるバカ共の中に見える。

ヴァレリオに至ってはその中心地点だ。まるで御山の大将だ……

はて？もう1人ばかり、俺のセンサーがビンビン反応する美女が居た筈だが？

やっぱり、居た。

酒場の隅の席に、1人で静かにグラスを傾ける美女。

混沌とした空間の中で見つけた僅かな光だ、まるで天使。否、女神！我が世の春が来た、と言う訳だな！！

ステラ

「男って……ホント、バカばかり」

酒場の端、女神様はテーブルの上でとても口に出したくない様な動きを見せるバカを見て思わず愚痴る。やっぱり男なんてろくな生物じゃない、と。

「日本人は嫌いか？」

そんな彼女が顔を見上げると、ビールジョッキを片手に持った剣崎少佐が、1人で酒を飲んでいたステラの所まで駆け寄っていた。周りの喧騒で気が付かなかったが、結構な距離まで近付かれていた

のは驚きだ。

「人種で男は選びませんから」

「なら顔？」

「……顔、だけじゃダメ。中身も見ないと」

「君みたいな女性はガードが固いな。俺みたいな軽い男には振り向いてもくれない」

「女はね、本当に自分を見てくれる男にしか寄り添わないのよ」

「俺が君だけを愛すると誓ったら？」

「フフツ。神にでも？」

「神なんて役にすら立たねえ偶像さ。そうだな……コイツに、なんてどうだ？」

そう言っつて、テーブルの上にコトンと置かれたのは 数発の銃弾だった。

「俺の命を救ってくれる”相棒達”。折角だ、コイツに君との永遠の愛を誓おうか？」

意外と、ロマンチストなのね。

最初に見た時のイメージではもっと粗暴な扱い方をする男だと思っただけど、案外と女のツボを的確に付いて来る。何よりも、目を見詰められて”永遠の愛”なんて言われたら動揺しない女は居ないでし

「よし」。

「何がお望み？」

「君の望みを叶えることこそ俺の望みさ」

「なら、踊って下さらない？」

「踊る？」

「ええ。まさか、断らないでしょう？」

「勿論、いいとも」

椅子から立ち上がった私の手を取って、バーの中央までエスコートする少佐殿。

今は上官だとか、部下なんて関係は要らない。彼の表情がそう強く語っていた。

「リードは其方がなさって下さるの？」

「レディファースト。まずは、君の全てを知ることから始めるよ」

ホント……バカな男。

静かなクラシックだ。

この曲……初めて此処へ飛ばされた時も、一人で聞き惚れていた曲ね。

いつの間にか、周りの喧騒は沈黙へと変わっていた。

バーの中央で、2人の男女が周りの視線を釘付けにする。

熱い、そして長い　　アラスカの夜は深まっっていく。

3 (後書き)

なるべく次の話もすぐに出せるように急ぎたいと思います

下書きへササッと肉付けをする作業開始!!

4 (前書き)

色々な人たちの作品を読み、勉強させて貰いながら
少しでも文に『引き付ける魅力』を付けられたらいいな、と…

剣崎

久しぶりに戦術機に乗った気がする。

アルゴスの坊や達との親交を深めるのに一生懸命で、“新型”のテストなんて頭の隅だった。

気が付いたら、『ああ』 所謂言えばあったねえ』程度感覚。

正直、自分のアホさ加減に何となく馬鹿馬鹿しくなったのはご愛嬌だ。

『まだ機体の完成は先になるので、シミュレーターにデータだけは着床させました。

今回は取り敢えず、“この子”の機動力と反応速度をテストして貰う事になります。

ココまでは宜しいですか？』

《要するに、落ちなきゃ良い。そう言うことだろ？》

『……………認めたくありませんが、要約するとそうなりますね』

網膜投影されるのはシミュレーター戦闘で使われる市街地では無く、辺り一面が焦土と化してしまった荒野。即ち敵は BEATとなる訳だ。

自然と、操縦桿を握る指に力が入る。

奴等の何よりも怖いのは数。

次に光線級の照準範囲。

最後に跳躍ユニットの燃料切れ。

《まつ、”コイツ”との付き合いは俺も結構な年数だぜ？今更回避運動なんて朝飯前。

午前中でハイスコア叩き出して、サッサと休憩入らせて貰おうかなあつ！！》

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

剣崎

新型と言われる不知火・高機動戦闘型 通称、不知火F 型装備

は不知火の純粋な速度を追及したバリエーション機体だ。

不知火の最大時速は700km/時と言われているが、そこへ届くまでのタイムラグを圧倒的な跳躍ユニットの馬力で補う。それに伴い、武装にも変更点があるらしいが今の所の変更点は機体のフレームのみだ。

全体的に通常の不知火よりも、空気抵抗を減らす為に刺々しいフォルムになっている。

それがカツコいいとか何とか藤代中尉が言っていたが、俺には到底理解出来ん。

乗れば分かるが、1回目の操縦ではF型の速度で死にそうになる。

現に、俺は吐いた。2回目も多少は覚悟していたが、結局は吐いた。3回目になると速度を身体が覚え始め、今になると時速700km /時の壁にブチ当たる瞬間などアドレナリンが爆発する最高の瞬間として受け入れられる。

所謂、マゾ体質へと変貌することとなった。

『ルクス、次のインターバル終了まで3、2、1……0、光線来ます。』

回避を確認。続いてマグヌス ルクス、インターバル終了まで6秒切りました』

的確な管制の指示に従って、インターバル内は空中で地上のBEATに対して突撃砲二丁での牽制及びインターバル終了時の足場確保の為に射撃を繰り返す。

兎に角足場だ、足場。

場合によっては小型種を踏み潰して着地するが、最悪の場合は高度を上げて要塞級の背中に着地することだってある。いや、実は結構コイツの背中は安全だったりする訳だが……

『敵の増援を確認。距離2500、11時方向』

今はそんなに余裕が無い訳では無い。

弾数こそ心許なく感じるが、足場の確保だけはどうにかなっている。流石は新型。速度は従来の不知火と比べるのがバカらしいほど早い。反応速度も上々だ。

取り敢えず、着地した時に1番怖いのは光線級から要撃級に変わる。突撃級のウスノ口な突進はF型の速度があれば十分に回避出来が、その回避先で要撃級と顔を合わせましたじゃ洒落にならない。

光線級がインターバルに入れば上空へ飛び、インターバル内に出来るだけ数を減らす。

インターバルが終了次第、確保してある足場へ着地。光線をやり過ぎす。

そんな作業を何十分か繰り返し続け、光線級の群れを一通り蹴散らし終わると網膜に投影されていたBEATの死体やら肉片やら何やらが全て消え失せ、機械的な装置が目映る。

『ご苦労様でした、少佐。テストの結果は 最高点ですね』

《当たり前だ。俺は”やる”って言ったら”やる”男なの》

……正直、疲れたけど。

単調な動きを繰り返し続けるっていうのも案外とストレスが溜まる。いやあ肩凝った。それに煙草も吸いてえ。

どれ、着替えて休憩室でも行って吸っちゃおうかなあ〜っと。

シミュレーターからササツと飛び出して、俺は1人上機嫌にロツカールームへと向う。

そんな彼の余裕を打ち砕く、新たな”参加者”の姿がユーコン基地へと赴いていたことなど、今の彼が知る由も無かった。

篁唯依中尉、アラスカへ到着。

“ジャツカル”の名を持った部隊は、帝国が誇る最高峰の衛士達で構成された少数精鋭。

殿下直属の部隊と言われるジャツカル隊は、命令一つで過酷な戦場に赴き、幾万のBEATとの死闘を繰り広げてきた帝国の英雄達だ。しかし、過酷な状況下へ身を置くと言うことは如何せん人員の消耗が激しい。

いつの間にか彼等は、時代の波へと押し潰されて行ってしまった過去の遺物となっていた。

そんなジャツカルの名を引き継いだ物好きな男が1人居た。

その男は性格にこそ少々難があつたが、衛士としての腕は日本トップクラス。

世界を相手にしようと、彼ならば十分に活躍出来ると尊敬される衛士であつた。

そして私は　そんな男の過去を、昔から影で見続けて来た物好きな女である。

昔から、“剣崎龍二”は何一つ変わらない。

だから私も、せめて彼に認めて貰える様な　いつか、比肩することが出来る様な衛士になろうと日々努力を惜しまなかつた。

それでも、埋まらない壁。

篁唯依に才能が無かった訳では無い。寧ろ、彼女は一流の戦術勘と技術を持っている。

それでも差は埋まらない。

少女の才は、努力から生まれた努力の結晶。

剣崎龍二という男は、天から与えられた才を持つ。 即ち、天才

なのだ。

いつしか彼と私の間に出来た壁。

やっぱり、ダメなのかも知れない。

そう思い始めたのはアラスカへ旅立つ直前。

輸送機に揺られながら、彼女は剣崎と言う男への思いをキチンと整理していた。

このアラスカ行きで、せめて少しでも彼との距離を縮めよう。

『中尉、あちらがユーコン基地になります』

「……………あそこに……………武御雷の搬入はどうなっている？」

『中尉到着と同時に速やかに行います』

「そうか。色々と、迷惑を掛けるな」

『いえ、コレが我々に出来る精一杯の”戦い”ですから』

皮肉にも彼女の願いと龍二の願いは あまりにも酷似していて、滑稽だった。

剣崎

A C T V にへばり付く俺と、それを後ろから嫌そうに眺めるタリサ。先程の F 型の機動は良好だったのだが、まだまだ改良出来る余地がある筈だ。

と言う事で百聞は一見に如かず。

A C T V の動きを参考にすべく、俺は渋々と付いて来たタリサと共に A C T V が整備されている格納庫へと遊びに来ているのだ。それに一応、俺はこれでも少佐だ。

技術力の向上とか、部下とのコミュニケーションなんかにも気を使っ
つていかないといけない。

まあステラとヴァレリオの 2 名とは既に良好な関係を築いている。特にステラ。

酒場でのダンスの件で、彼女と会話することが多くなった。

その度にヴァレリオから浴びせられる小言の数々が煩わしいが、まあどうとでもなる。

問題はさ、コイツだ。

「イモムシみてえ」

「っるせえ」

人のことを上官とも思わずに踏ん返り返っているガキ　タリサ・マナダル。

初日には模擬戦でグーの音も出ない程に叩き潰してやったのに、未だに突っ掛かってきやがる。勝手にしろ、バカヤロウ！なんて言えないのが臨時とは言え部隊を引つ張る俺の困った所だろうな。

兎に角、F型の為に取り入れられるデータは全て欲しい。

装甲の種類、間接部の設計、背部追加スラスタの出力などなど。

それはもう、滝の様な汗が出るまで必死にACTVにしがみ付いて見て回った。

そんな俺を珍獣でも見詰めるかの様に見るタリサの視線は気に入らなかつたが、中々に有意義な時間を過ごさせて貰った。

場所は移り、PXとなる。

「TYPE - 94の改修なんて資金の無駄じゃねえの？」

「悪い言い方になるが、次の主力機の為の礎になってくれるだろ。無駄金じゃねえよ」

「へえ、踏み台か」

「俺が何の為に言葉を選んだのか、分かるか？」

「知らない」

昼時を少し過ぎていたので、PXに居る人数はあまり多くは無かつた。

コレがピーク時だと人の波が出来る。それはもう恐ろしい、ヒューマンウェーブが。

にしても、さつきから……こ、このガキ……
上官が、相手だろうが疎みもせずに堂々と喋る辺り、相当の度胸を持っていることだろう。

まあ度胸があるうが、年上に対してこの態度はいかん。

……朝日すら押めなくしてやろうか、このガキ。

いや待て。まずは落ち着こう。相手は子供だ、熱くなくても仕方が無い。

ココは大人の対応で望もうじゃないか。いつでも冷静なのが私、そう私だ！

「まあ何だ、少尉。軍に入った理由でも教えてくれるか？」

「行き成りかよ、気持ち悪い」

コイツ、ブッコロシテヤリタイ。

いや、でも確かに行き成り過ぎたか？

まず何事からでも自分からって言うのが常識だな。

とは言っても、俺の軍に志願した理由なんて……クソ野郎の為の胸糞悪い尻拭いだ。

誇らしい事柄じゃない。

「……クソ親父が」

「何だよ」

「あ、いや、何でもねえ」

失敗した、思わず喋っちまったか……

聞かれてないだけマシだが、”あんな奴”のことを部下の目の前で言える筈もねえ。

それに、俺としては一刻も早く忘れたいことのトップクラスだ。

「もしかして、女の名前？へえ、ステラだけじゃ物足りないってわけか？」

「女じゃねえよ」

「なら男？へえ、そっちの趣味が」

「勘弁してくれ。お前との会話は疲れるぜ……」

「なら何だよ。家族？」

「……」

惜しいな、正解だが”正解じゃない”。

まあコレは単に俺の気持ちの問題で　あのクソ親父を家族と認識していないだけだ。

「へえ、親御さんが恋しいってわけ？だったら今すぐにも国に帰れば良いだろ」

帰る、なんて考えたこともなかった。

どうせ帰っても、石に刻まれた家族の名前を延々と拝み続けることしか出来ない。

それに俺は2人の事を一瞬だって忘れた事は無い。

母さんと、妹の笑顔は　俺の記憶に刻み込んである。

「確かに、”墓石”に会えるな」

「え？」

タリサの顔が、知らずの内に強張っていく。

そんなことにすら気付かず、懐かしむ様に俺はポケットへ手を入れていた。

そこに握られていたのは、ロケットのキーホルダー。

死んだ妹から渡された、俺への誕生日プレゼントだ。無骨で、無駄に大きくて、首に下げると肩が凝るのでいつもポケットに入れて持ち歩いている。

「……………家族って良いよな」

「あ、ああ」

「……………俺にとつちや……………この基地に居る奴等は……………俺の家族だ」

今までだって、それにコレからだって。

俺はこの”生き方”だけは変わらないし、変える気は毛頭無い。

背中を守り合う衛士、機体を整備する整備班、作戦を立てるH.Q.それぞれが支えあつて漸く、戦場で1つの”戦い”が行える。

そんな風に共に手を取り合う人々を使い捨ての駒と割り切れる程、俺は冷徹にはなれない。

だからしがみ付きちゃう、もう置いていかれるのだけは嫌だから。

諦めるんじゃない。泣くんじゃない。俯くんじゃない。

そう言つて、何人の仲間を鼓舞して来ただろうか？
何人の仲間を、置いてきてしまったのだろうか？

「……………わ、悪かつたな」

「ん？」

少しブルーになっていた俺の自責の念を打ち消したのは、タリサからの言葉だった。

小さな声だったが、タリサは申し訳無さそうに目を背けている。

少しは仲良くなれたかな？

嬉しくなつて、自然と声のトーンも上がる。

コイツも、俺と一緒に戦つていく家族の1人だ。家族が増えるのはとても嬉しい。

自分が1人じゃないと言うことを認識出来るからこそ、なのかも知れないが。

「そ、そのさ。話したくないこと聞いて……………」

「ああ……………刺激強かつた？」

「ガキじゃねえ！」

まっ、コイツとの犬猿の仲は続きそうだけどね。

藤代

今日も今日とて、私は必死に自分の仕事をこなす。

F型を最良の機体にするべく、あらゆる技術を吸収し改良し変化させ、そして組み合わせる。

0から1を作り出す訳では無いので、そこまでの苦労は無い。

だが、日本に居た頃と比べて人員が少ないのは問題だった。

仕事は進むが、1人が受け持つ仕事量が格段に多くなってしまふ。それが、アラスカへ来てからの不満な点だ。

「藤代中尉、F型の武装の件ですが……」

「それは後ほど。今は兎に角、本体を完成させることに全力を注ぎましょう」

「了解しました。おい、聞いていたな！？速度を上げるぞー!!」

元気が良い返事が聞こえた後、10人程度の男女がF型へ群がっていく。

このペースで行けば、何とか式型と共にロールアウトする事が可能かも知れない。

式型と同じ日ではF型の影が薄くなるかも知れないが、それでも私が手掛けた機体だ。

米軍の技術者程度に劣る程、日本の技術と私の頭は柔じゃない。

勝つ。

負けず嫌いな性格が災いし、この日は少佐とのテストを終えた後は昼食も食わずに整備班と共にF型の傍につきっ切りだった。

そして、今の時間帯は夕飯時。

PXにて、アルゴス試験小隊と私、そして少佐は静かにご飯を食べていた。

いえ……静かなのは、少佐があまりにも沈んでいたからでしょうね。

「な、なあ藤代中尉？うちの少佐は……どうかしたのか？」

「……（昼間のこと、か？）」

「昨日の夜は何も無かったわよ？」

「夜……って、ステラ！？まさかお前、少佐を部屋に」

「何もしていないし、されてもいないわ。ただ、彼の話を聞いていただけよ」

少々気になる単語があったが、それは後ほど言及する事としよう。

しかし、今更彼が何を恐れる必要があるのだろうか？

天下に轟く帝国斯衛軍の衛士達ですら恐れる”黒獅子”なんて言われている彼が、一体どうして此処まで……ああ、そうか。実に簡単なことだった。

「篁中尉」

「いつ！？」

Jack Pod!! (大当たり!!)

やはりと言うか、何と言うか……私達がアラスカへ降り立ってから4日程。

そして先程PXへ向う途中で、イブラヒム中尉から少佐へ何か伝達があったことを私とアルゴス試験小隊の計4名は目撃している。

『篁中尉』が関わるのであるう内容が関与する事が少佐へ伝達されていたのであれば、少しばかり思考すれば簡単に分かる事だ。

推測だが、アラスカに篁中尉が到着したのではないだろうか？

私にとっては優秀な助手。^{パイトナー}

少佐にとってはとても怖い戦友。^{パイトナー}

気付いた時点で、何とも彼女は嫌われてしまったものだ。

彼女は奥手過ぎるので、少佐も気付かないと言うことも事を遅延させる原因なのだろう。

何よりも、少佐は”攻める”タイプの人間故に、”受け”に関しては素人級。

思ったよりも彼等の仲が深まるのは遅くなる事だろう。

いつの間にか、1人で納得する形になっていた。

「タカムラ”中尉?なあ少佐、その”タカムラ”中尉って知り合いなのか?」

「タカムラ”中尉、ね。私も気になるわ」

「誰だよ、”タカムラ”中尉って。またアンタみたいな化け物か?」

「……まあ、何と言いますか……良い子というか、堅物というか……」

私は”少佐”の相棒として。彼等の成り行きを見守らせて貰うしよう。

最初から私は手を出すつもりは無いし、手を貸すつもりも無い。クツクツと喉の奥で笑いながら、私は料理を口へ運んだ。

4 (後書き)

自分としても少しでも良い作品にしたいので、
皆さんの意見やココをこころしたほうが、などの意見をお待ちしてい
ます

5 (前書き)

今回の話ではまた新しいキャラに登場して貰っています

この先、どの様にキャラクター達と絡ませていくのか…
練って、練って、練り込んで少しずつ考えていこう

剣崎

俺と彼女の接点はお互いに巖谷中佐と言う上司に直結する。

俺と巖谷中佐は上司と部下の関係。もうそれなりに続いている関係になる。

そして彼女と巖谷中佐の関係は義父と養子。かなり円滑な関係だと思っ。

いや、しかし俺と彼女の関係は如何せん円滑には進まない。

何よりも性格が違い過ぎた。

自分で言うのも何だが、柔軟な思考を持つ俺と他者だけでなく、己にも厳しい彼女。

悪いが、全く馬が合わない。

日本人としての誇りよりも人々との繋がりを重んじる俺。

人々との繋がりによりも日本人としての誇りを重んじる彼女。

だが、あの子のことは決して嫌いじゃない。

寧ろ俺自身はあの誇り高い心構えってヤツには心から尊敬の念を抱いている。

俺には無かった何かを持っている彼女だからこそ、俺も彼女のこと
が気掛かりではある。

だが、根本的が異なる俺達2人は　まるで、水と油なのではない
だろうか？

ああ……それなら道理だな。

決して混じりあう事は無い2つの”個”。

結局、《剣崎龍二》は《篁唯依》の縛られた生き方に共感出来ねえ
ってことか。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

久しぶりに見た彼女はやはりと言うか、凜々しかった。

キツチリと背筋を伸ばし、ビシツと言う擬音が似合いそうな形式に
沿った敬礼。

大和撫子を絵に描いた様な容姿。

それでも、俺はどうしても彼女から一步距離を置いてしまう。

堅苦しいとか、心の底から拒絶してしまう訳では無い。

ただ　今は亡き人に、彼女を重ねてしまうのが怖かった。

「篁唯依中尉です、本日から宜しくお願い致します！」

「藤代千枝中尉です。沢山の苦勞もあると思いますので、遠慮なく私に仰って下さい。」

「微力ですが、力になりますから」

藤代の差し出した手を遠慮がちに握り返し、僅かに微笑む唯依。

昔なら きつとそんな2人の姿に俺も混ぜて、などと割って入っていくことだろう。

ただ、それは昔の俺だったらと言つのが条件だ。

既に時は経過しており、過去と今では俺の心情や考え方も万華鏡の様に変化していく。

例え、昔は受け入れていたものでも今となつては そんなことも珍しいことではない。

「」

「……」

此方を見る視線を感じるが、目は伏せたままだ。

今の俺は感情すら、何よりも表情すら、相手に伝えることを拒絶していた。

このまま居ない事として扱ってくれるのなら、それはそれで結構なことではある。

「 あの、」

それでも、彼女は口を開く。

何から何まで、律儀だな……此処まで来ると感心を通り越して呆れ返る程だ。

「……うん？」

「お、おっ！……お……お久しぶり、です……」

「久しぶり」

それでも内容は簡潔に、手短に纏め上げる。

サッサと話を切り上げるとまた目を伏せ、壁に背を預ける。

『兄さん、また遊び呆けて……！』

『兄さんはやっぱり凄いです。流石、私の自慢の兄さんだけありますね』

『またこんなに汚して……母さんに怒られますよ？』

兄さん

そう言っていた、俺のたった1人の妹の顔が脳裏に浮かぶ。

よく笑う、良い子だったと俺は自負している。まあ少々兄バカ過ぎるかも知れんが……

別段、妹と彼女が似ている訳では無い。

外見から始まり、性格、拳動、才能に至るまで何から何までも共通する事が何も無い。

それでも、何処かで俺自身が彼女をそう”見て”しまつのかも知れない。

心に刻み込んだ大切な家族の笑顔……

正直、仲良くしたいと思う。

巖谷さんとの付き合いには劣るが、彼の娘である篁中尉との関係もそれなりに長い。

彼女の訓練兵時代から、何かと世話を焼いては居た。

でも、それは表面上だけの関係。

今の俺では、心の底から篁唯依と言う少女を歓迎し、見守っていくことが出来ない。

やっぱりダメだ。

頭の中は殺伐としているのに、心の中は混沌としていて、今も尚、こんな風に矛盾を抱えている自分が気持ち悪くて、とても不愉快だった。

俺は、この子が苦手だ。

藤代

「此方が篁中尉の私室です。あつ、PXの場所も案内しますね」

此処ユーコン基地の案内を始めてから早数時間。

藤代千代中尉はそう言って、先ほどからどれだけの場所を私に案内したのだろう？

凄まじい広さを持つユーコン基地の内部を案内するには、必然的にかかりの時間を要する事となってしまうた。しかし、それなりに

有意義な時間だった。

道中での藤代中尉による話では、国外技術を取り入れた新型機体の整備は順調であり、将来的にはその技術を日本の戦術機に組み込むこともそう難しくは無いらしい。

機動力の向上、反応速度の鋭敏化、関節の稼動範囲拡大、レーダーの強化などなど。

たった4日間程で既存のデータを元にして形を完成させるとは驚愕だ。

帝国随一のメカニックでもあり、巖谷中佐や帝国の整備班達が認める天才少女の肩書きを持つだけのことはある。

「此方がPXです。日本食が少ないですが、そこは慣れていただくしかありませんね」

しばらく歩いているとPXの前まで来ていた。

行き成りのことに驚いて顔を上げるが、藤代中尉は特に気にした様子も無い。

「いえ、食事が摂取出来ると言うだけで十分です」

「流石は帝国軍人の鏡。件のテストパイロットにも爪の垢を飲ませてやりたいですね」

「わ、私はそんな立派な人間では……そ、それに少佐は十二分に立派な」

「あら？私、”少佐”なんて言いましたか？」

「ッ!？」

思わず、口ごもる。

確かに彼女は少佐の話などしていなかったし、そう勝手に解釈したのも私だ。

気を緩めすぎた結果がコレか……まだまだ未熟だな。

「冗談です、冗談。ユーモアもないと、此処ではやっていけませんから」

「……は、はあ」

納得出来ない、と言う表情をしていたのだろうか。

藤代中尉は急に真面目な顔を見ると、姉の様に優しく微笑みながら私に話しかけた。

「ゴメンなさいね。貴方と彼のこと見ていると……ちょっと、ね？」

「わ、私は別に、何も……!」

二度目の墓穴、と小声で呟くと藤代中尉はクスリと笑いながらPXに入っていく。

多少の気恥ずかしさと共に、私もそれを追って、いそいそとPXへと足を踏み入れた。

篁中尉との会話をサッサと引き上げて、俺はと言うとリルフォートへ買出しに出掛けていた。真面目な話をすると、俺自身の野暮用と篁中尉に少々何か買って行こうと、上官気取りで街へ繰り出した訳である。

しかし

「此処はカップルしかいねえな……」

周りを見ても男&女、男&女、男&女のオンパレード。

無理を言ってもステラを連れて来るべきだっただろうか？そうするとヴァレリオが煩そうだが……まあ、すぐに黙るから気にしないけどな。

「……憂鬱だねえ」

煙草を吹かしながら、日用品の入った紙袋を持った日系人が一人で歩いている。

フツ……同情を誘うには最高の条件だな。

見ている分には楽しいが、実際に己の身に降りかかるとなると本当に勘弁して欲しい。

凄く、泣きたいです。

ショーケースの中に入っている服やら玩具、そしてそれに群がる子供から大人まで。

今の堅苦しい日本に比べれば 幾分も平和な街だ、此処は。

BETA、BETA、BETA、テスト、BETA、BETA、BETA、B

ETA、テストの繰り返し。

それこそ毎朝毎晩毎日気が遠くなりそうな感覚で。

撃つて、撃たれて、斬って、斬られて、殺して、殺されて

そんな日々をついこの間までは当然の様にこなしていた俺だった筈なのに。

今じゃ、こんな平和な街で暢気に買い物まで出来る様になるとは思
いもしなかった。

少し、感慨深いな。

そんな呆然とし続ける俺に、ドンツと何かがぶつかった。

胸元までは届かないが腹辺りに当たった”何か”に驚きながらも、
それが倒れる前に咄嗟に抱え込む。咄嗟のことだったので、辺り一
面に買い物袋の中身が辺りに散らばった。

「大丈夫か？怪我は無いか？」

小さな　それこそ、目に入れても痛くは無いと言い張れるほど可
憐な少女は、俺の腕の中でビクリした様に目を見開いていた。
いや、まあその何だ。ビクリさせて悪かったね、って思うよ。

「悪いな。オジサン、じゃなくて……”お兄さん”ちょっと考え事
があつてね」

「かんがえごと？」

抱えていた少女を離すと、俺は少女に話し掛けながらブチ撒けた荷
物を拾う事にした。

それにしても、少女の瞳は……無垢な瞳ってヤツだろうか。

何色にでも染まる様な純粹さと危うさを兼ね備えた危なっかしい子
だ。

……逆に考えれば、この年でこんな目が出るこの子は只者じゃねえってことだろうな。

「お兄さんは寂しがり屋だからな、一人で居るのが寂しかったのさ」

「??？」

特に寂しかった訳じゃ無いが、子供に兵隊の云々を語っても分かる事でもない。

今は、親近感を覚えて貰う為に適当な嘘でも垂れ流しておこう。…強ち、嘘でもねえか。

しっかし、この子を見たところだが親と離れた迷子って所だろうか？警察でも軍の関係者でも何でも良い、今はこの子の親御さんを探してやらないと。

「お嬢ちゃん、お名前は？」

「イーニア」

「じゃあイーニア、お父さんとお母さんは？」

「いないよ。でも、クリスカが居るから」

「クリスカ？……ああ、保護者ね。」

それじゃ、迷子の子猫ちゃんを心配しているのであろう親猫の下に届けますかね」

「??？」

頭に”？”を浮かべるイーニアを前に、俺は俺で苦笑を浮かべる。子供と触れ合うなんて久しぶりだ。表にこそ出さないが、心の何処かでイーニアとのやり取りを楽しんでいる自分が居た。

「コレでもこの街のことは詳しくてね。それじゃまずは」

と、ココで突如グーっと鳴るのは腹の虫。

勿論、俺じゃない。

ともすれば、自ずと誰かは察して欲しい。レディに聞くことじゃないだろう？

「食事でも済ませようか、ミス・イーニア」

さて、敏腕保育士とまで言われた”菩薩のリユウちゃん”の腕前に恐れ戦け！！

イーニアの手を引きながら歩き出す。

イーニア自身も、何ら抵抗の色すら見せずに黙って付いて来た。

なあ未だ顔すら知らぬ”クリスカさん”。

この子に危機管理能力を与えるべきだと、俺はつくづく思うね。

~~~~~  
G o t o n e x t S t a g e

~~~~~  
ごく有り触れた喫茶店。

その店に並ぶテーブル達の中から、出来るだけ人通りが確認出来る窓際の席に座ることにする。

外でイーニアを探す”クリスカさん”がこの子を見つけられるように一応、配慮したつもりだ。

まあ普通なら問答無用で警察でも軍にでも届けて親御さんの情報を調べて貰うのが手っ取り早い訳だが、如何せん目の前で腹の虫を鳴らされると……ねえ？

「煙草、煙たくない？」

「うん。へいき」

「そうだと助かる。仕事場だと吸えないから……怖い女の子が来ちゃってから」

「リュウジ、そのひとのこときらい？」

「寧ろ逆。大好きだよ」

そんな腹の虫を鳴らしたイーニアは、小さな口でモグモグとスイーツを食べていた。

「単調な箸の”食べる”と言う動作1つ1つが小動物の様にチョコチョコと動いていて、見ていると飽きる事がない。こんな所で新たに人間観察なんて特技が欲しいとは思わんが……」

取り敢えず、食べ終わるまで待つか。

俺もあとちょっとで1本吸い終わるところだからな。

喫茶店を出た後は彼女を送り出すだけだったのだが

「いらつしゃいませー」

いやいや。最初はね、黙って交番に直行のつもりでしたよ？

でもね、イーニアの爛々とした笑顔を見ていたらただ静かに”さよ
うなら”じゃ味気ないので、今は少々寄り道をして、イーニアの希
望したぬいぐるみの専門店に居る。

所狭しだと言わんばかりに置かれる人形達。くま、うさぎ、サル、
ネズミ、目に映るありとあらゆる人形が新たな来客である俺とイー
ニアを出迎えている様に錯覚してしまった。
怖いのも、とっても。

「お子さんですか？」

「いや、迷子」

「へ？」

「ただの”さようなら”じゃ味気ないから。それに、どうせ独り身
だし」

店員と下らないことを駄弁っている最中。

イーニアは彼女独自の世界と言うものに入り込んでいるのだろう、
人形に夢中だった。

何だ、少し無口だと思ったがキチンと笑えるじゃねえか。

子供は笑顔が一番だな、やっぱり。

「イーニア、折角だから誰か連れ帰ってやるか？」

「いいの?」

「任せろ。俺とイーニアが出会った記念だ」

「ありがとう、リュウジ」

イーニアの真っ白な肌と相成って、彼女の笑顔は雪の妖精の様に見える。

可憐で、儂く、それで居て不思議な暖かさを持った少女　イーニア。

存分に笑え、イーニア。子供は笑って、泣いて、怒ることが仕事だ。大人はそんなお前達を護ってやらなきゃならねえ。

だったらお前達の為に　俺が死ぬほど戦ってやるさ、あの化け物共と。

俺とイーニアの記念となったぬいぐるみは　真っ白な”ウサギ”のぬいぐるみになった。

その後、俺はイーニアを近場の警官に任せて、基地へ戻ることになった。

いくら何でも小さな子供をこんな場所へ置いて行くことなど俺の安いプライドが許せなかったが、如何せん相手が相手だ。流石にアラスカへ来たばかりの俺が反発したなど笑えないジョークになることだろう。

再会の約束だけは済ませて、俺はイーニアから離れることとなった。

イーニア

『イーニア、君を此処に置いて行くことは辛い。だが分かって欲しい……
きつと、また君と俺は再会する。君がそう望み、俺が君のことを忘れなければ必ず』

リュウジはそういって、いってしまった。

かえるときのリュウジのかおはかなしそうで、ないてしまいそうだったから。

わたしも、かなしくなった。

またあいたいな、リュウジ

“望めば会える”

龍一の言い放ったその言葉通り、2人は再会する事となる。

片や、日本から派遣された技術提供者　そして、孤高の獅子として。
て。

片や、ソ連内でも恐れられる衛士　誇り高き紅の姉妹として。

戦場で出会う事になるなど、今の彼等には想像出来ないことだった

だろっ。

5 (後書き)

本編に向けて主要キャラ達に少しずつ登場して貰います

感想などがありましたら、待っています

6 (前書き)

話を練っていくのが楽しくなってくる

やっぱり、こういった物を書いている時は内容を考えている時が
何だか一番楽しい気がします^^

「イーニア！」

見間違える筈が無い。

その真っ白な肌と透き通る様な銀色の髪。

心配して、探し回って、漸く見つけることが出来た。

思わずイーニアの小さな身体を抱き締める。もう離さない、離れたくなど無い。

「こんな所に居たのね……」

こんな所、そう交番だ。イーニアは交番の前にある小さな椅子に腰掛けていた。

絞り出した声だったが、少し曇っていた。

瞳にはうっすらと涙が浮かび、頬は赤みを帯びている。

「クリスカ……ごめんなさい……」

「良いのよ、イーニア……でも、もう戻りましょう。遅くなるわ」

「うん……！」

私の手を握る。イーニアが、私の手を握る。

それだけで、自然と心が温かくなっていった。

でも、私の手を握る方とは逆の手には大きなウサギのぬいぐるみ…
…誰がコレを……？

いや、今はやめておこう。

イーニアが此処に居てくれる幸せを噛み締めて、今は私達の居場所
へ戻らなければ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

剣崎

ユウヤ・ブリッジス、男。

本人は日と米のハーフ。

米軍に所属。

手元にある資料を捲っていくが、こんな紙切れ1つで人間の性質が
理解出来れば苦労なんてしない。俺がわざわざ、現場で人間関係に
気を使うことなんて無いだろう？

適当に資料を放り投げ、俺も俺でサツサと飯を食うべくPXに向う。

式型のテストパイロットとして選ばれたのは米軍のエイスクン、か。

恐らく、タリサ辺りから熱烈な　それはもう頭が痛くなるような
歓迎を受けるだろう。
未だ見ぬ若き猛者に同情するね、俺は。

「おう。元気が、野朗共」

「よう、少佐あ〜！」

「ういっす」

「相変わらずね、貴方も」

PXに到着するなり、いつも通りのアルゴスマンバーが俺を出迎える。

あらまつ、見ない間に皆で私を出迎えてくれるほどお利口さんになったの！？

感激！リュウちゃん、感激！

……嘘です、すみません。

コイツ等はどうせ、今日来る予定の米軍エースとソ連との広報任務のことでも聞きに来たのでしょうね！ハハッ、俺って人気ねえな才イ！！

「名前も、出身も、大抵はお前等の所にも行った情報通りだ。

それに、ドイツの”スツーカーの悪魔”に比べたら可愛い子猫ちゃんだろう？」

「例えが酷すぎるぜ、少佐！

あの存在自体が出鱈目なおっさんを相手にするなんて幾らなんで

も無謀だろ!？」

ヴァレリオ、良く考えてみる？

あの”悪魔”は制空権を握っていたからこそ、あんな出鱈目な戦果を叩き出したのさ。

光線級が登場した今は過去の遺物だ。

過去のデータを漁っていた時、スツーカーの悪魔は光線が飛び交う上空を曲芸飛びで楽しそうに、狂った様に飛行していたと記載されていたが……

気のせいだろう、きっと。

「そうかねえ……」

「そうだって！タリサ、お前から何か言っただれよ！」

「なあ少佐」

ヴァレリオは一人でギャーギャー喚き立て、ステラはそんな彼を無視して優雅に紅茶を嗜んでいる、そんな時。タリサは一人、再度確認する様に此方へ視線を向けてきた。

「別に、ソ連の速度に合わせる必要なんてねえよな？」

……その問い掛けに思わず、眩暈を覚えてしまう。

このチビっ子は、どうにも獰猛というか好戦的というか……

俺の部下はどうしてこう……頭のネジが吹き飛んだヤツばかりなのだろうか？

真つ当な人間は居ないのだろうか？

いや、居る筈がねえか……

“類は友を呼ぶ”。きっと、コイツ等が騒ぐ所為で変人は集まって来るのだろう。

(この男も十分変人です)

「まあ良いさ。痛感させてやれ、力の差ってヤツを」

「Yeah!!」

勢い良く、向けられていた俺の手を叩くタリサは意気揚々と言う具合にPXを後にした。

今からACTVの整備でもするのだろう。

この後に控えている広報任務の為だ、今は彼女の好きにやらせてやるでしょう。

俺自身も、この広報任務中に届くであろう”荷物”の搬送の準備を進めないとな……

つたく、忙しくなりそうだけ。

篋

一方、その頃の格納庫。

日本人に与えられた格納庫内では、向かい合う様に2機の戦術機が鎮座していた。

全身を山吹色に塗装された、日本の斯衛だけに許された機体 武

御雷。

そして、今回の演習で初の実機機動を行う可能性のある試作品
不知火・F型装甲。

静かに作業を行っている武御雷の班よりも、不知火側の班は幾分も
騒々しい。

それも当然である。

つい先日、今回の広報任務で不知火・F型装甲を使用する事を伝え
られたのだから。

整備班達は怒涛の勢いでF型の整備を始め、今に至る訳だ。

そして、そんな不知火側の整備を静かに見詰める女性 篁唯依。

彼女は何よりも、今回の広報任務のことを考えていた。

ソ連と行う広報任務、此方からはF-15 ACTV、相手側はS
u-37UBが出撃する。

両者共々、直接見るのは初めての機体だ。どのような性能を持ち、ど
の様な技術を使用しているのか是非とも解析したいのである。

「作業を急ピッチで進めて！保険とはいえ、有り得ないことなんて
ありませんから！」

そして 私の目の前で、不知火・F型装甲も急ピッチで整備が進
められていく。

藤代中尉号令の下、整備班達が1つになって1つの機体を一所懸命
に作り上げていく。

上官の部下達に対する絶対的な”信頼”。

部下達の上官に対する忠実な”忠義心”。

この2つがなければ、決して成り立たない程の立派な作業だ。

私の武御雷の整備班達も優秀な人材の筈だが この人達には、ま
だまだ及ばない。

「ケーブルの配属がコレで……よし、接続しろ！」

「了解！……っと、機動しますよ！……！」

「うん、機動確認！偉いぞ〜」

男だから女だからなんて差別も無く、お互いを1人の職人として認識し、信頼する。

「凄い……」

思わず息を呑む程、その作業は完璧で、一切の妥協も無駄も無かった。

汗に塗れ様とも、指を傷付けようとも、オイルを被ろうとも、不満を漏らすことなど無い。

彼等はお互いを信頼している。

そして何よりも、彼等はこの機体に乗る男 剣崎龍二を心の底から”愛していた”。

「急ピッチだが、手え抜くなよ！？この機体には少佐が」

「頭あつ、手が止まっていますよ！……！」

「つるせえ！中身はどうだ！……？」

「完璧ですよ、頭！あとは装甲さえ付ければ、いつでも機動出来ます！……！」

「潰されたくなくや退け！お待ちかねの装甲様の登場だ！……！」

クレーンによつて運ばれたブラックの装甲が、ゆっくりと中身のむき出しになった不知火へと運ばれていく。
その巨大な装甲をたつた2人だけで固定し、次々に装備させて行く。段々と、その全貌が明らかになってきていた。

「お疲れ様、休憩にしましょう！」

藤代中尉の一言により、各々がその場へ倒れ込んで行く。

漸く終わったと言う疲労感と、急ピッチながらもやり遂げた達成感。

格納庫に黒の不知火が登場した瞬間、その2つも相成つて辺りから喝采が沸いた。

剣崎

此方から参加する衛士はタリサとヴァレリオ。

それに、緊急時の保険として試作段階のF型装甲の不知火が1機。

対してソ連側だが　　紅の姉妹などと言う大層な2つ名を持った衛士が相手だそうだ。

随分と戦場には似合わない2つ名持ちだな……姉妹って言うと、2機なのか？

いや　ソ連には確か複座式のチェルミナートルって機体があった筈だ。

つうことは何か？珍しい複座式の戦術機で人外な機動でも見せてくれるってことか。

アラスカに来てから、何から何まで悪いような気がする。

わざわざ、見せ付ける為に技術力を披露して貰えるなんて思いもしなかった。

「……良い国だな」

「ええ、良い国ですね。最高です、此処は」

「まだ見ぬ新しい戦術機と概念。確かに、楽しみではありません」

そんな俺が現在待機している場所は、タリサとヴァレリオの飛行が見える様に滑走路脇にジープを止め、藤代中尉・篁中尉を連れて待機していた。本来なら到着する定期便の受け入れやら何やらがあるので、俺は管制室に居た方が良い訳だが、どうせタリサは俺の言葉を聞くタマじゃねえ。

それに、ああ見えても分を弁えている筈だ。

挑発されなければ、それが大前提だが。

「おつ、ACTVが飛びましたね」

そうこうしている内にACTVが大空へと飛び立って行く。

対峙するのでは無く、第三者の視点からACTVの機動を見るのは初めてだ。

不謹慎だが、俺も興奮してきた。

「速い」

「あつ、篁中尉はACTVの動きを見るのは初めてですね。凄いで

すよね、アレは。

背中 of ハンガー取っ払って追加ブースターを付けるなんてBET A戦じゃ有効的とは思えません、

対人に関しては最高レベルの機体です」

確かに、BEATが相手では速度よりも何よりもまずは弾薬だ。

弾薬が無ければ、本当に何も出来ない。

ただ奴等の前をハエの様に飛び回り、撃ち殺されるだけの的以外の役目は皆無と言える。

機動性よりも弾薬、俊敏性よりも弾薬、兎に角まずは弾薬。

俺が任官して、今まで戦場で戦って来て心の底から思ったこともある。

「うん、流石はメスザル。空中をまるで木の枝みたいに飛び回りますね」

「メ、メスザルですか……？」

「中尉も覚えておいて損はありません。アルゴスの中で一番小さな色黒チビは」

「黙って見る、取り敢えず!」

藤代のタリサに対する毒舌攻撃が始まる瞬間、何とかそれを宥めて空を見詰める。

空を切り裂く様に突き進むタリサのACTV。

堂々としているその姿は、まるで大空を支配するかの様に駆け回っている。

「……空の支配者、か……」

丁度、俺がその言葉を吐き出した時 視界の隅に紫色の閃光が光るのが見えた気がした。

イーニア

「リュウジ、きづかない……」

リュウジにあいたっておもったら、ホントにあえたのに。わたしだけみえてもしょうがないのに。リュウジは、きづいてくれない。

「イーニア、任務に戻りましょう?」

「ダメ、リュウジのところにいきたい……」

「でもね、イーニア。コレは任務で」

リュウジ、どうしたらきづいてくれるのかな?

クリスカ

剣崎龍二、男性。階級は少佐。

出身国：日本

現年齢：28「部隊入隊当初は14」

身体情報：身長184cm / 体重74kg

適正結果：歴代最高記録、適正結果S

所属部隊：XFJ計画補佐及び94式改修計画開発衛士

・総合戦跡

出撃回数160回

被撃墜回数7回

戦闘による負傷3回

・戦果

光線級約870体

重光線級約250体

要撃級約1800体

突撃級約5400体

戦車級約2100体

要塞級約60体

兵士級不明

闘士級不明

総計敵撃破数約10480体「実際はこの数値を大きく上回ると思われる」

家族構成：

母 剣崎千代美【死亡】

妹 剣崎久留巳【死亡】

父 剣崎剛

このデータが、剣崎龍二という男の全てだった。
出撃回数は160回　つまり、10年の間で160回以上BET
Aと殺し合いをしているのだ。

尚且つ、その状況下で無事に生還している。

英雄と言っ言葉が相応しい実績を残す男だった。

ただ　それだけではイーニアが彼を気にする理由が分からない。

他の衛士達と何が違い、何故彼だけを特別に扱うのか。

何故、先ほどのアラスカの衛士共ではダメで、彼ならば良いのか。

私は、それが知りたいのだ。

剣崎

先程からヴァレリオと並んで飛行するタリサの奴、少し挙動が荒い。
推測だが、どうせソ連の連中に何か言われたのだろう。短気なアイ
ツのことだ、前を飛んでいるチエルミナートルを撃ちたくて、気を
抑えられないと言ったところか。

ただのハネムーンが死の旅路になるなんて聞いていない。

知っていたなら、最初からこんな場所で奴等の遊覧飛行など見てい
るものか。

サッサと部屋に引き籠もって、今頃は眠っている頃合だろうに……

「　　ッ、ACTVがチエルミナートルをロックした……ッ！」

「そんな……コレは、広報任務の筈ではないのか!？」

ああ神よ。

何故、私を見捨てるのだ？私が貴方に何をした？何を奪った？

ただ一方的に奪うのが貴方の仕事ならば、貴方は賊徒と何ら変わらないじゃないか！

「ったく。迷惑掛けることに関してだけは一丁前だな……ッ！」

ジープのハンドルを切り、ユーコン基地へと直行する。

このまま行くとタリサの野郎がそれこそナパーム弾の勢いで辺りを焼け野原にし兼ねない。

それに、もうすぐ定期便が此処へ降りて来る。

それまでにバカ騒ぎを終わりにしなければ後は目も当てられない大惨事だ。

あのバカを止めるには、同じ舞台に立たなきゃ話にすらならねえ。

まだ本調子では無いとは言え、俺の”愛人”に一仕事して貰わなきゃならないかも知れん。

6 (後書き)

ココをこつすると良い！ココはこつじゃないと思う！
そんな意見も大歓迎です

感想、待っています

7 (前書き)

下書きを少しアレンジを加えながら投稿していくので、
前回までよりも少し遅れることになるかも知れませんが

堪忍して下さい(汗)

剣崎

ジープから飛び降り、基地の格納庫まで全力疾走で走る。

後ろから藤代の制止の声が聞こえた気もしたが、んなあことはどうだって良い。

今は兎に角あのバカ2人を止めて、説教して、風呂に入って、寝る！！

道中、凄まじい速度で走る俺を見てどれだけの人が此方を振り向いた事だろうか。

今の俺なら、世界を取れる　！

「F型は!?!」

「整備は何時でも完璧です。後は、少佐の号令1つでコイツは飛べますぜ」

「最高だぜ、頭あつ!」

日本からF型整備の為に連れて来られた整備班の連中は、皆が皆嬉しそうに笑っていた。

公の場で、自分達が汗水流して作った最高の機体が大暴れする。

シチュエーションとしては確かに、鳥肌物だな。

整備班の中でも若い男が、俺の強化装備を投げて寄越す。

右手を軽く上げて挨拶すると、彼も鼓舞された様に綺麗な敬礼を返

して来る。

俺も、新しくなった”コイツ”も、最高のフライトはしてなかったよな!!

強化装備がパチンツと身体に密着し、気持ちも引き締まる。

これから出て行く先には身内のお馬鹿さんとソ連からのお馬鹿さんが居る訳だ。

「実戦だな、新しくなったF型装甲の！」

興奮気味に語る数人の整備班達。

実戦？ハツ！まだまだ青いな、坊や達。コイツは実戦なんて難しいことじゃねえ。

主の登場を今か今かと待つF型を見上げ、拳を握り締める。

実機での戦闘介入、なんて甘美な響きだろう。

「今からは2人だけの時間だ。俺とお前の、最高のデートにしよんぜ」

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

急加速、急降下、急停止。
戦術機でコレを行うには、人体に掛かる負担があまりにも大き過ぎる。

それを克服しようにも、その為だけに設計書を弄っては埒が明かない。

ならば 耐え得る人材を育成してしまうのはどうだろうか？

“速い”機体など幾らでも作れる。ただ、それに乗れる人材が居ないだけのことなのだ。

ならば訓練すれば良い。凄まじいGに耐え得る衛士を1から。

その成果である俺だからこそ、今でも尚此処に居る。

新たな技術を身に付けて、新たな機体を手に入れて、漸くスタートラインに立てた。

だったら後は、周りの奴等が付いて来られない程の速度で駆け抜ければ良い。

生まれた時から、俺はスピード狂なのさ。

A C T Vの後部にピッタリと張り付くチェルミナートを視認出来る距離まで来た。

そこら辺の衛士とは比べ物に成らない程の、良い腕だ。

《ただし、腕が良かろうが》

0からの100。

スタートダッシュから急激に掛かるGすらアドレナリン沸騰の為の刺激に代えて、俺とF型が空を駆ける、飛ぶ、フツ飛ぶ、突き抜ける、ブチ抜ける。

《絶対に逃がさねえっ……っ！》

ACTVの後ろにへばり付くチエルミナートルの後方を、俺も同じ様にマークする。

此方へ気付こうが気付くまいが、何ら変わらない。

俺はストーキングの天才だ！特に、こんなに”良い尻”を持ったヤツを逃がすつもりはない。

……取り敢えず、まあ何だ。最初はイーグル1に確認だな、確認。

《聞こえるか、イーグル1。聞こえるか、イーグル1！

貴様は予定ルートから大きく外れている！イーグル1、直ちにコースを戻せ！！》

《》

沈黙が答えてっことか。

チツ……コレだから国のイザコザってヤツは面倒くせえ。犬も食いやしねえよ！

《アルゴス2、聞こえるか？つうか聞け！サツサと予定ルートに戻れ！》

《何だよ！アタシとコイツの勝負だぞ、邪魔だ！！》

コイツも人の話を聞いちゃいねえ……

コレで優秀じゃねえなら、すぐさま撃ち落されて終わりだろうに、何処の軍も人材不足だから、こんな下らないことで優秀な人材が失われるのは痛いのか。

にしても　くだらねえな、オイ。ガキの喧嘩じゃあるまいし。

《テメエ等、予定ルートから大きく外れやがって……
運ばれて来る荷物が吹き飛んだら責任取れるのか！？このボンクラ
アツ！》

《ハツ、上等だよ！サツサとコイツとの追いかけっこ終わらしてや
る！！》

《やってみろ、ウスノロ！》

《うるせえ、オタンコナス！》

まあ良い、取り敢えずコイツは無視だ。

今は滑走路を滑って来るのである。荷物の安全確保が最優先事項だ
な。

《C P、荷物の到着までの時間は？》

『もう間も無いです、少佐』

《了解した。あのバカ共が介入しそうな時は、此方側も”本
気”でやらせて貰う。

それだけ伝えておいて欲しいけど、お願い出来るか？》

『了解』

《ああ、それともう一つ。定期便の方にも回線を繋いで欲しい》

『分かりました。直ぐに行いますので、少々お待ち下さい』

あと数分もすれば滑走路に定期便のご到着って訳だ。
いや、しかし、申し訳ないな。アメリカからの長旅で疲れているだ
ろうちに……

初日から、波乱万丈の地獄絵図を見せられるとは。

ヴィンセント

《ええ〜……ユーコン基地に所属している剣崎龍二少佐だ。調子は
どうだ?》

滑走路へ降りる直前のことだ。

定期便の隣を戦術機が1機 コイツは、日本製のTYPE-94
か? 並走して来た。

それに乗っているのは日本人か。こりゃユウヤのヤツ、不機嫌だろ
うなあ。

「こ、此方は特に異常なしですが。しかし少佐、予定の演習コース
は此方では」

《いや、ちょっと厄介事があったね。直ぐに着陸の態勢に入ってく
れると助かる》

「いえ、しかし……了解しました」

その機長の言葉に満足した様に、TYPE-94は定期便の傍を離

れて行った。

「すげえな、あのTYPE-94。コッチにピッタリくっ付いて来やがったぜ？」

「アレくらい、誰にだって出来る」

「またまた。お前の日本嫌いは治らねえなあ」

「……つるせえ」

相変わらず、ユウヤのヤツは日本人が話しに絡むと口調が荒むな。まっ、無理もねえっちゃ無理もねえことかも知れねえけど？

にしてもあのTYPE-94……見たこともねえフレームの形式だったな。改修機か？

そんな中、機体が大きく揺れやがる。何だ、なんて声を出す程の間も与えずにユウヤはサッサと機長室へ向って行きやがった。

「こ、後方から2機の戦術機が接近！」

「いや、3機だ！まさか……このままじゃ直撃コースだぞ！？」

機長達からは焦りの声上がるが、ユウヤは特に焦ることも無く滑走路を睨み付けている。

計算中、か？このまま後ろから来る2機を回避する為にどうすべきか考えているわけだ。

「高度を下げる、ぶつかるぞ！」

ユウヤは高度を上げようと考えていた機長の言葉とは反対に、高度を下げる為にレバーを思い切り下げる。ガガガツ、と嫌な音が何度か機内に響いたが何とか無事に着地に成功。

そして、何かを叩き付ける様な激突音。

「「「「ツ!?!」「」「」

思わず機内に居た俺達が身構える程の巨大な音だ。

何が起こったのか、何故そんな音が出ていたのか、その時は全く分からなかった。

その後、TYPE-94が2機の戦術機の高次元戦闘に介入。

何とか説得して事なきを得たらしい。

いやあ………任官初日から凄え見世物だったな、ありや。

剣崎

《イーダル1、アルゴス2に”警告”する。それ以上、戦闘行為を続行する場合》

……無視、だな。

いや、タリサの場合は攻撃を回避する事に全神経を使ってやがるのか。

コレ以上続けりゃ、お互いに無傷じゃ済まねえだろうが……さて、どうするか。

撃墜、が1番楽な方法だが”向こう”もトラブルが無いに越したことはない訳だ。

こりゃ話し合いで解決しろ、ってことか？

バカ2人を止める程の話術も、あの戦闘に介入する程の技術もねえ俺にとつては超が付く程の難関だぞ！？難しいとかの問題じゃねえ、無理だ！

《イーダル1、此方はユーコン基地所属の剣崎龍二少佐だ！

直ちに戦闘行動を停止しろ、其方がそれ以上暴れまわるつもりなら此方も相応の》

《》

……ッ、テメエッ！！

最後まで無視決め込むつもりか、この野郎！良い度胸じゃねえか！！
今すぐその脳天ブチ抜いて

《 リユウジ？》

《へ？》

間抜けな声を出してしまう程、有り得ない事実が目の前に現れた様だった。

何処からともなく聞こえた回線からは有り得ない何かがある。揺さぶる。

そんな中、チエルミナートルが此方へ反転。手に持っていた突撃砲が此方を狙っていた。
バンツ、と右側の跳躍ユニットが撃ち抜かれ、F型はゆっくりと墜落していく。

そんな瞬間でも、あまりのことに俺は悪態を吐く事すら忘れていた。

一瞬の油断が招いたバカな出来事だと自分でも自覚している。

ただ、あの時俺は確かにイーニアの声を聞いた筈だけど……気のせいだったのか？

藤代

結果として、東西共に実戦データが撮取出来たと言うことで今回の件は不問にされた。

上の連中はそれで良いのだろうが、地面に激突した上に修理までに時間を要することとなったF型と少佐にとっては最悪の結果なことだろう。

忌々しいと言わんばかりに煙草を吸っている。

いつものあの人からすれば、結構珍しい光景だ。

「お疲れ様です、少佐」

「劳いか？ 嫌味か？」

「お好きな方をお選び下さって結構ですよ」

「……はあ〜っ」

呆れた、と言わんばかりの盛大な溜息。

ごめんなさいね、私ってコレが素だからどうしても人を見下している様に見られちゃうの。

でも、私と彼の付き合いもそれなりの時間になる。

彼もそろそろ、”私”の性格が分かって来る頃合じゃないかしら？

「F型の整備には4日程度。幸いですね、被害は跳躍ユニットとフレームだけでしたから。」

それと、ACTVは無事に基地に帰還しましたよ」

「聞いた。チツ……俺を落としたらサツサと降りやがったらしいな、”アイツ”」

憎々しいと言わんばかりに呟くと、煙草の火を掌で一気に揉み消した。

相当、苛々が溜まっているのだろう。

「貸し1つ……」

「え？」

「紅の姉妹に、貸し1つだ」

……本気だ。こりゃこの人を落とした人に同情するわね。

この人が此処まで怒るとなると 報復は100倍返しが確定だな。まあその前に

「それよりも病室、抜け出しましたね？」

「……何のことだか」

「篁中尉が怒っていましたよ。病人が動き回るとは何事だ！って」

「うげっ……！」

先の戦闘で、地面との激突時に計器に思い切り頭を叩き付けた少佐は念の為に病院に担ぎ込まれる事となった。対して、本人はそれ程重要視をしておらず、病人であると言う認識なんて全くもって皆無である。

それでも、篁中尉の名前が出ると悪戯がばれた子供の様に首を竦ませて、女の子1人にビクビクするなんて、普段からは想像も出来ないほど弱々しい一面を見せる。

まっ、今回は自業自得。

たっぷり絞られることが良い勉強になるでしょうしね。

7 (後書き)

色々な人の作品を読んで、自分もこんな風になりたいなあ
と思う今日この頃

ネタ仕入れの為に、今日1日はPCの前から離れる訳にはいかぬ！

8 (前書き)

間違って次の話をアップしてしまった…
何というミス…文章が…文脈が…穴を、穴を掘ってくれえっっ!!

剣崎

「なあ中尉、煙草「ダメです」……なら散歩「ダメです」

現在、俺は入院中だ。まあ入院と言っても、怪我が酷いって訳じゃ無い。
ただ形式上、入院扱いになっているだけだ。

因みに何故入院したのかと言うと、実にバカバカしい理由だ。

紅の姉妹に叩き落された時に計器に頭をコレでもかゝって程打ち付けたらしい。

痛みは無かったが、俺を見た時の唯依ちゃんは発狂ものだったとか。
……有り得ねえな。この子が発狂なんてする訳ねえ。

「暇だなあ」

「読書でもしたら如何ですか？」

「生憎、小難しくして活字だらけの本って物体は俺が世界で1番大嫌い」

「……………」

……呆れたか。

いや、当然そうなりますよねえ。

少佐にもなった良いおっさんが”難しい本は嫌いです！”なんてバカバカしいよな。

俺だったら言った本人殴り飛ばしてサッサと仕事に戻るけどね！

「……散歩でも、行きますか？」

「へ？」

「あ、いえ……その……昔のことでも、少し話しながら……私で良ければ、ですが……」

ちよつと意外。

唯依ちゃんって、堅苦しいイメージばかりだったけど、融通も利くじゃありませんか！

流星は巖谷中佐の娘（仮）だな、話が分かるぜ。

「そっか……そうだね。行こうか、散歩」

「は、はい！」

元気に挨拶するのは嬉しいけどさ、車椅子なんて大袈裟だな。

自分の足で歩けるぞ、俺は。そんな物は要らん、今すぐ元あった場所に返して来なさい。

篋

外は案外と、静かなものだ。

車椅子で出歩くことを勧めたのだが、頑なに拒否されてしまった。

“自分の足があるのに、歩かないとは何事だ！”と云うことらしいが……

それでは余計に……貴方との雰囲気、その……気まづくなってしまふ。

昔のことでも話せば良いのだろうか？でも……覚えていなかったらどうしよう。

だったら、怪我をした彼をどれだけ案じたか言ってしまう？……何だか説教臭い。

「X F J 計画のことですが」

「ん？」

口を開けば、聞きたい事よりも先に軍人としての私が言葉を選んでしまふ。

どうしてだろう、とても虚しい気分になる。

「不知火・式型のテストパイロットは今日着任したユウヤ・ブリッ
ジスで決定のようです。」

後ほど、腕の程も確認したいと思いますが……少佐は、どの様にお
考えですか？」

「上からの意見じゃ、俺達みたいな佐官の話は聞いちゃいけないよ。
今は黙って従う。」

「もしも彼が使い物にならない時は　まあどうせ、新しい”駒”を
用意するだろうさ。」

吐き捨てる様に呟く少佐の顔は、憎々しく歪んでいた。

それ程まで、彼が上層部を嫌悪する様な”事件”が過去にあったの
だろうか？

私の様な未熟者と出会う前よりも更に前の、彼が若かった頃の
出来事。

きっと、私の想像も出来ないような人生を送っているのだろう。
帝国の中で”黒獅子”とまで言われる程に優秀な彼が送った過酷な
人生など……今の私には到底、理解など出来うる筈も無いのかもしれない。

「……堅苦しいなあ」

「え？」

ふと、彼は私の顔を見下ろすなり呟いた。

その顔は先ほどの様に歪んでは居らず、どちらかと言えば困った様
に笑っている。

何にそこまで困っているのだろうか？私は最初、それが理解出来なか

った。

「XFJ計画の主任であり、白き牙隊の中隊長……若いながらも優秀な衛士。

部下からの信頼も厚い。座学の成績も優秀。戦術機の操縦技術も相
当な物を持つ。

立派だけど、それだけじゃダメだな」

「あ、あの……何を……」

「中尉、俺は戦場で一番大切な物は”仲間”だと思っている。
CPからの情報も大切だし、作戦を立てる指令官の指示も重要だと思
う。

それでも、俺達の背中を護ってくれるのは一緒に戦う”仲間”だ。
違うか？」

「い、いえ……」

「 此処では数少ない日本人同士だ。

それに、コレから先、何が起こるか俺達には予測出来ない。頼りに
させて貰うよ、”相棒”」

「!？」

唐突に紡がれた言葉に、思わず息が止まる。

彼のような衛士が、私を”相棒”と言ってくれた。そして 私を信
じる、と……!？」

「ツツツツ……!!」

「何だ？真つ赤だぞ、顔」

「な、何でもありません！た、ただの風邪です！」

あまりの羞恥に顔の火照りが治まらない。

認めてくれるだけではない。彼から、彼の口から私を”相棒”と呼んでくれた。

「風邪え〜？体調管理はしっかりしろ。いざと言う時、居なきゃ困るぜ？」

それが衛士として、軍人として、何よりも 女として嬉しかった。

剣崎

何となく、中尉と打ち解けられた気がする。

彼女の堅苦しかった雰囲気は少し和らいでくれたので、幾分も話し易くなった。

「いつそのこと3サイズとか聞こうかなあ？……いや、流石にそれは殺されるか。」

それにしても中尉は恋の1つや2つしないのかねえ？

こんなに可愛いのに勿体無い。周りの男共もこんな子を放って置くとは万死に値する！

まあ本人の性格が災いして、男が寄り付けないってところかな？

それとも意中の相手は既に決まっています、なんてことだったりするのか……

どっちにしろ、先輩である俺がこの子を見守るのは俺の役目か。

失うにしろ、何にしろ、俺よりも先に逝かせるのだけは嫌だ。

生きるのが嫌になったと言われ様が、俺の自己満足の為に地獄に逝こうが連れ戻してやる。

人間なんてさ、自分が世界の真ん中って思っている連中の塊だろ。

俺が”こんな事”になったのも、どうせクソみたいな狂人共の所為だ。

アイツ等みたいな奴等は国の利益よりも自分の探究心を追い続けやがる。

俺もその成果で今じゃ、立派なスピード狂の一員。
こんな思考にしゃがったヤツを恨むね、ホント。

時速700kmの壁を突き破って、
空気の壁を引き裂いて、
常識の壁を貫いて、
非常識へと大手を振って飛び込んでいく。

そんな人生、誰が望んだのか。

そんな一生、誰が望むものか。

戦う為に、戦う故に、俺は死に物狂いで突っ切る、突っ走る、突っ込む。

そんな戦い、誰が欲しがるのか。

そんな争い、誰が欲しがるものか。

教えられたことは1つだけ。

此処に居る俺達は人間では無い、”弾丸”なのだ。鼓膜を震わせ、空気を裂き、敵を貫き、人々の為に命を捨て逝く弾丸なのだ。

放たれてしまえば戻ることは無い。

放たれてしまえば帰る場所は無い。

私達は弾丸。

私達は道具。

私達は進む、空へ、陸へ、海へ、敵陣へ。

ただ、殺す為に逝け！逝け！逝け！逝け！　　ツツツツツ！！！！！！！！！！

「　　剣崎少佐？」

「え、あ、う、うん！？」

ビックリしたなあ……

行き成り名前呼ばれちゃったから、驚きも二倍だ。

しかし、懐かしいねえ。白昼夢って言うのかな、こう言うのってさ。

帝国で働く前のこと、珍しく思い出しちゃったよ。いやあアレは胸糞悪い、気色悪い。

コキコキと首を鳴らしながら、前へと進んでしまった中尉の後を追う。

どうやら、足が止まっちゃったらしい。

こりゃ年だな……どうにもならん。

「遅れてゴメンね、”唯依ちゃん”」

「ゆ、唯依ちゃん、ですか……？」

「部下とのコミュニケーションは隊長の役目だろ？」

仲良くやるにはお互い、名前で呼び合うのが一番手っ取り早いと思うのよね、俺」

「で、ですが……その……」

「“剣崎”とか”少佐”なんて堅苦しいからさ、”龍二”って呼び捨てにしても」

「いけません！私の様な者が、恐れ多くも少佐を呼び捨てなどと……ッ！」

「じゃあ”龍二お兄様？”」

「うっ……」

因みに、龍二お兄様はまだ訓練兵だった頃の唯依ちゃんの俺の呼び方だ。

まだ若々しかったから、きつと今ほど鋼鉄の女って訳でも無かったのかな？

巖谷さんのことも”巖谷叔父様”なんて呼んでいたわけだし。

「妥協して”龍二さん”だね。まっ、俺の方が年上だからコレ位が丁度良いのかな？」

「うっ……」

「はいっ、言ってみようっ！」

「あ、あうう………」

「はいっ!」

「うづうづ………」

「Say!」

「りゅ、龍二……さん………」

「Good!」

まだまだ青いなあつ、そんな柔じゃこの先生きのこれないぜ?

……いや、俺がキチンと助けるけどさ。簡単には死なせねえよ。

ああ追記だが、その後に散歩がてら俺の担当医とやらに会いに行くことにした。

その人もその人で変人と言うか何と言うか、

『元気なら退院してくれて構わない。もう此方で出来ることはしたからね』とアツサリと退院を認めて下さった。

唯依ちゃんが開いた口がふさがらないと言う風に驚いていたが、俺としては好都合だ。

サツと部屋に帰り、

ササツと荷物を纏め上げ、

サツサと病室を後にする。

休憩終わり。本日から剣崎龍二、職務に復帰します!

病院……とは言っても、ユーコン基地内部にある基地病院みたいなものだが、そこから部隊へ復帰早々、問題が起きていた。直接的に俺が苦勞を被る程の大問題じゃ無いのが幸いだったが、それでも洒落にならないレベルの問題である。

「アタシはお前が中尉の機体に乗るなんて、認めないからな！」

「……」

捲くし立てるタリサと、呆れたようなブリッジス。

正直、タリサの熱烈な歓迎が本当にあるとは思わなかった。

流石に冗談で言ったつもりだったのに……案外と、俺の勘も捨て切れない。

「よう。ステラ、ヴァレリオ」

「意外と早いご帰還だな、ケンザキ少佐」

「怪我はもう良いの？」

「別に騒ぐ程でもねえ。ちょっと頭を打ち付けただけだ」

「けどさ、頭だぜ？もしかしたら洒落にならねえ症状とかさあゝ、考えられるだろ？」

「勘弁してくれよ。俺にとっちゃ、今のこの状況の方が苦しいよ」

「……タリサの悪い癖ね」

基地に帰還して早々、まさかこんな歓迎があるとは思ひもしなかった。

まあ要約すれば、イブラヒム中尉のACTVにブリッジスが乗る事が気に入らない。

それで文句を付けて突っ掛かっている、と。

……正直、馬鹿らしくなる。

どうでも良いだろう、たかが機体の1つや2つ。

実力があれば文句はないし、役不足ならサツサと祖国へ帰って貰えば良い。

別にギヤーギヤー喚く程のことでもないと思うが

そんな俺の思考を読んでいた様に、ステラは静かに補足を加えてくれた。

「タリサにとっては、イブラヒム中尉の機体は”特別”なのよ」

「特別？……ああ、そう言うことね」

「嫉妬の嵐だな、まさに」

前言撤回。

タリサ、喚け。

恋は時として人の限界スペックを底上げする最終兵器だ。リーサル・ウェポン

まあ自重するなら、好きなだけ騒げば良い。

それよりも、俺はイブラヒム中尉に挨拶でもしておくか。

俺が居ない間はその人がこの部隊を纏め上げてくれた様だし、きっと何かしらの命令も与えていると思うし。

何よりも、この部隊を纏め上げる事が出来る中尉にコツなんかを聞き出したい。
ハッキリ言おう。俺1人では、この部隊を纏め上げる自信が……無いのだ。

イブラヒム中尉とは、PXで巡りあう事が出来た。
彼は静かに食事を取っており、俺はその席に同席させて貰うことにした。

「まずはご帰還おめでとう御座います、少佐」

「此方に来てから早々、まさか病院送りになるとは……情けない話です」

「試験機でアレ程の機動を見せたのです。上も、文句は無いでしょう」

俺が落とされた後、あの大騒ぎは暴発事故で処理されたと言っただ。

国連の面子を保つ為の処理なのだろう。
それに、此処ではああ言った騒ぎが滅多に無いと言っ訳ではないらしい。

成る程、食べ放題ってことか。

「……とことで、アルゴスには何か命令を？」

「ええ。CASE・47を行う様に、と」

「CASE・47？市街地で行う二機連携での模擬戦、ですか。
……ブリッジスの腕を見るには、確かに都合の良いケースですね。
感服します」

「いえ、此方こそ申し訳ありません。少佐への伝達が遅れてしまい
……」

「俺の指示よりも中尉の指示の方が的確ですから、此方としては大
助かりです」

未だに、俺は誰かの上に立つって言うことに慣れていない。

戦場では指揮を執ると言うよりも、共に戦場を突っ走る事に重点を
置いて来ていたのだ。

アラスカへ飛び、実質的にアルゴス試験小隊に命令を与える立場に
なった俺は少々、混乱していた。

だからこそ、イブラヒム中尉の存在は大きい。未熟な俺の支えにな
つてくれる。

「今回は本当にありがとうございます。助かりました」

「いえいえ。頑張ってください、少佐」

イブラヒム中尉に礼を述べ、俺はPXから出た。

さて、と コレからのカリキュラムを組む為にも必要になるだろ
うからな、アイツ等の模擬戦をゆっくりと、じっくりと観戦するこ
とにしよう。

8 (後書き)

今後はこのようなミスが無い様、注意したいと思います
大変申し訳ありませんでした

9 (前書き)

私のミスで、この話を 8 として投稿してしまいました

見てくれた方の中には、いきなり飛んでしまって訳が分からないと思った方も居ると思いますので、もう1度 8 を読み直して頂けると幸いです

巖谷

『拝啓 巖谷中佐へ

アラスカへ来てから、今日で1週間程経過しようとしています。
其方は如何お過ごしでしょうか？

私達はとても元気です。現地の人々達とも仲良くなりました。

本題に入ります。

突然の願いで申し訳有りませんが、この便を横浜基地に居る香月
夕呼に渡して下さい。

帝国の兵として見たとすれば、あの女は信用ならないかも知れま
せん。

ですが、現状では如何しても彼女の力が必要となる場面に出くわ
してしまいました。

実際、あまり借りを作りたくは無い相手なのですが、
如何せん部下達の疲労を考えると彼女の力を借 りざるを得ない
状況となつてしまいました。

上官として、そして1人の男として何とも情けない現状です。

私の名を使って、彼女へ連絡を入れて下さい。

巖谷さんに迷惑を掛けるつもりはありません。
自分の尻拭い程度、自分で出来ますから。

追記

身体に気を付けて下さいね、もう若くない事でしょう。

食物繊維を沢山とると、長寿になるらしいのでコレでもかと言うほど摂取して下さいね。

剣崎龍二より
『

……』

剣崎からの便が届いたのは、彼等がアラスカへ飛び立つてから2週間程した頃だった。

手紙に明記してあった”1週間程”と言う場所を見て、思わず頬を綻ばせる。

しかし内容を読むにつれて、巖谷中佐の手紙を読む手に力が籠る。

あの男が他者の力を欲する状況など、想像も出来ない。

例えば性格が多少ばかり抜けていようとも、帝国随一の衛士だぞ、ア
レは。

それに何故、あの女を指名するのもかも理解出来ん。

過去に何か接点があったのか？

それとも

「危ない橋を渡ろうとするなよ、剣崎……」

本日の帝都付近の天気は曇り。

それは、剣崎龍二という男の未来を示しているようで酷く不気味だった。

M U V - L U V C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

剣崎

熱烈な嫉妬爆撃は一先ず、終わりを迎えた。
理由は至って簡単だ。

“ 此処は最前線なので、実力だけが物を言う ”

此処まで言えば分かるだろうか？
イブラヒム中尉が彼らに与えた機会、CASE - 47を行うことになったのだ。

タリサとヴァレリオのAチーム、ステラとブリッジスのBチームでの模擬戦闘だ。

勝てば文句は無いし、負ければサッサと荷物を纏めて家に帰るって訳だ。

相手が気に入らねえ、認めさせてえ、ならば どうする？
簡単だ。自分の持つ力ってヤツを見せ付けてやれば良い。
今のブリッジスはまさにそれ、だな。

しかし熱いね。まあ俺の好みだぜ、こつこつ馬鹿騒ぎは特に。
蟠りがあるなら、ぶつかり合えば良い。気に入らなきゃ殴り飛ばせば良い。

Simple is best。

特に軍人なんてそんな連中ばかりだ。

“力”が信仰すべき対象で、俺達は”力”を持った奴等に従って生き残っていく。

だったら見せ付けてくれよ、トップガン。

まさか 此処で無様な姿は晒さねえよなア？

《へッ！アイツの泣き顔、直ぐに拜ませてやるよ！》

《ホットだなあ、タリサ》。少しはクールに行こうぜ？》

今回は俺に出番は無い。

大暴れするのはコイツ等だけで、俺は基地で寂しくお留守番って訳だな。

モニターに写ったタリサとヴァレリオのAチームは既に臨戦態勢で、一方のBチームはまだモニタリングされていない。機体の整備に手間取っているのか？

「頼むぜ、お前等。米国のエリート君の実力、しっかり引き出してくれよ？」

《了解。任せろ、少佐》

《ハッ！どうせ、瞬殺だろうけどさ！》

ヴァレリオの余裕を含んだ返答と、タリサの興奮気味の返答。

まあ何だ、この2人のチームは相性が良いのか？如何にも正反対の2人だけに不安だ。

取り敢えず、今はコイツ等に任せるとするか……

当事者は俺じゃない。今回の俺はただの第三者だ。

「Good Luck!!」

俺のその一言を皮切りに、格納庫からタリサとヴァレリオが大空へと飛び立って行く。

目指すは御大将の首1つのみ、だな。

さて　あとはBチームだけか。

もう暫く掛かるかも知れんからな、到着までもう少しだけ待つとしますかね。

ローウェル

流石は俺のテクニク。

ユウヤの機体は完璧の2文字以外上げられねえ。

グルームレイクでコイツが乗っていたF-15Eとの誤差は全て0、

1以下だ。

「OK、相棒！蹴散らして来い！！」

シャフトから飛び立つユウヤのF-15Eに激励を飛ばす。

砂埃を撒き散らしながらも、雄々しく空へと飛び立って行くユウヤとF-15E。

相手があのだ『Black Lion』じゃねえ限り、アイツは負けるタマじゃねえからな。

『此方は管制室だ。聞こえるか、ローウェル軍曹』

噂をすれば何とやら、だ。

インカム片手にモニターに写り込んだ剣崎少佐は、此方を急かす様だった。

「聞こえますよ、剣崎少佐」

『其方の整備は完了したか？まだモニターには彼の顔が写っていない様だが……』

モニターに写らないって……

ユウヤのヤツ、もしかして通信をオフにしゃがったのか！？

あのバカ、せめて出撃報告ぐらいしていけよおっ……

「Ah」。アイツ、日本嫌いだから……」

その単語に、思わずと言う具合に顔を顰める少佐殿。

自国を貶されていることに腹を立てているのか、それとも他の理由か……

まっ、オレには関係ねえけど。

『……早速の問題児か。君もそうなのか？』

「いやいや、オレは違いますよ〜！」

『まったく。勘弁してくれ……』

「ご愁傷様、そんな言葉しか掛けられませんよ」

『人事だな、お前。もう少し上官に気を使ってくれても……っと、タリサか』

ん？通信に割り込みか。タリサって言うと、アルゴスの隊員の名前じゃなかったか？

何だあ、喚き立てる声がかっちにも聞こえるぜ？

『チツ、だったらサツサとやれ！勝手にドンチャン騒ぎを始めろ、バカ共が！』

「始まりました？」

『始まったよ』

もう勝手にしろと言わんばかりに、少佐は煙草に火を付ける。

よっほど苛々が溜まる仕事なのかね、佐官ってヤツは。額に青筋が………おお怖い。

「うちのユウヤは強いですよ」

『らしいな』

「アルゴスの奴等は、どうですか？」 Black Lion”さん

『……強い』

アンタが言っと、皮肉に聞こえるぜ。米国にも轟く武勇を掲げた真正銘のエースさん。
本当の化け物ってヤツは 得体の知れない”何か”を言うのかも
しれねえな。

剣崎

タリサのバカが急かすお蔭で、ローウエルとたいしたことは話せなかった。

と言う訳で、取り敢えずは直接戦闘を見て判断するしかないと言うことだ。

戦術の組み立て、機動のクセ、射撃の腕、距離の取り方などなど。

正直、ユウヤ・ブリッジスは良い腕を持っていると思う。

整備士であるローウエルが信頼する理由も、何と無くだが分かる気がした。

奇抜な戦闘センス、卓越した技術、荒さと丁寧さが同居したような機動。

決して悪くない。

唯依ちゃんがブリッジス少尉に対して酷評を述べていたのは、”実力が伴わないから”では無く、”アメリカの衛士だから”と言う私情が大部分を占めるだろうな。

それにコイツなら 弍型を任せても良いだろう。

タリサのACTVをF-15Eで十分に押さえ込める点も評価に値する。

態度さえ改めれば、優秀な衛士にもなるだろう。ただ

「日本嫌いか……厄介な奴が来たな」

日本の機体の開発衛士が、日本嫌いとは……何とも情けない話ではある。

予想だが、日本とアメリカのハーフである事をネタに何かしらのハンディを負っていたと言うところか？それで日本と言う国に対して嫌悪感を抱いた、と……

「迷惑な”ガキ”だな」

今の所は腕が良からうが何だろうが、部隊の統率を乱すバカは”要らない”。

少なくとも、この坊やが態度を改めるまではコイツの動向に注意すべきか。

また面倒臭い仕事が増えたな……

俺自身は開発衛士の筈だったが、部隊の指揮を執る立場になり、少佐であつて、日本から送られて来る事務処理にまで手を付けないといけない。

まるで地獄だ。いや、まさに地獄だ……ッ！

「ん？」

AチームとBチームの模擬戦を中継している画面上では、ACTVがF-15Eにタックルをブチ込む映像が流れていた。

土煙を上げながら倒れ込むF-15Eと、何とか体勢を立て直すACTV。

いや、驚きだな。タリサが此処までホットな奴だったとは……恐ろしい女だな、オイ。

バカな奴だな。もう少し周りを見れば無様な結果は避けられただろうに。

「終わったな」

リーダーを見ることをお勧めするぜ、”タリサ”。

直後、タリサのACTVはアルゴス04 ステラ機からの射撃を受けた。

命中したのはコックピットブロック。

実戦ならば戦闘不能、搭乗者は死亡判定だろうに。

「コックピットブロックに被弾、致命的損傷。大破だ、タリサ」

《はあっ!?!?》

ステラからの射撃が見事に直撃したタリサのACTVは戦闘不能。リーダー機を失ったBチームは敗北って訳か。

いや、何だ……案外アツサリだったな。

「お疲れ様、とでも労おうか？ブリッジス少尉」

ブリッジス

歓迎会は終わった。

いや、歓迎会なんて最初から如何でも良い。

そんな事よりも、あそこに居た衛士だが　あのTYPE-94に乗っていた日本人か？

お疲れ様、とても労おうか？ブリッジス少尉

……まるで、勝って当然と言うようにアイツは俺を見て笑っていた。少佐だろうが何だろうが、気に入らねえ　ッ！

「オイオイ、ユウヤ。随分とご機嫌ナナメだなあ」

「……別に、普通だろ」

いつも通りの調子のヴィンセントを軽くあしらひ、ロッカールームへ直行する。

堅苦しい強化装備を脱ぎ捨て、国連の制服へ着替える。

今までよりも実力主義と言う分だけやり易いが、此処に居る奴等はBEATの所為で祖国を失った奴等ばかりだ。

オレは合衆国国民だ。コイツ等とは違う。

そう思わなければ、オレ自身が如何にかなりそうだった。

オレは日本人じゃねえ、アメリカ人だ。あんな国に住む奴等とはッ！！

「ん？何だ、トップガンじゃねえか」

「…………お前…………」

ロツカールムで大体の着替えを終えたオレの後に続いて、さっきの戦闘でチヨビの相棒を務めていた奴が、オレに声を掛けて来た。此処まで来て、因縁でもつけにきたのか？

拳を握る力が強まる。相手の動きに即座に対応出来るよう、足にも力が入る。

「少佐がお褒めだぜ？

『技術も、戦術も、度胸も良い。日本じゃ考えられない戦い方だった』だとさ」

「あんなカタナ振り回す国と一緒にするんじゃないやねえ」

「言うねえ。昔の女でも？」

「……………違いよ」

アルゴスに居た男はテキパキと強化装備を脱ぎ、着替えて行く。随分と急いでいる様だが……………何かあるのだろうか？

「ああそつだ。お前も行くか？トップガン」

「あ？？」

「エンカイだとき、エンカイ。日本流のフェスティバルらしいぜ？」

日本、と言う言葉に過剰に反応している自分が居る。

あんな奴等と一緒に酒を飲む？正気じゃねえ……………酒が不味くなる。

オレの中では既に答えが決まっている。答えるまでもねえ。

「…………誰が行くか」

奴は食いつく事もせず、『そうか』とだけ言い残してロッカールームを出た。

先に入った筈なのに、何故か後からロッカールームを出る事になったオレに対して、ヴェンセントは在らぬ疑いを掛け様としたが話す気にもならねえ。

藤代

格納庫と言えば、何かしらの機械や兵器が置かれている場所である。そこでの作業がし易い様に、案外と中はサツパリしていたりする。そんな場所だが

今の格納庫は、かなり異質だった。

リルフォートから取り寄せた何十本ものお酒が乱立され、合成食とは言え、数々の料理がテーブルを埋め尽くす。

その周りに集まるのは衛士、整備班など多種多様である。

「…………なんてバカ騒ぎ」

思わず、痛む頭を抑える。

少佐が急に言い出した『宴会でもするか』の一言で、リルフォートからは酒が届けられ、PXのコック達は急遽食事を作ることとなっ

ただ。

経費は何処から落ちるのかなあ、なんて関係の無い事を考えて現実から目を逸らす。

「つまんねえのか？」

後ろから声が近付いて来る。昔からの付き合いだ、何と無く気配で察知出来る。

それに、私は今の状況がつまらないと思っている訳じゃ無い。ただ、昔から人が沢山集まる場所は好きじゃないだけだ。

「酒でも飲んで、ゆっくり休め。F型の整備はその後でもゆっくり出来る」

「誰かさんが壊さなければ、こんな面倒な事にはなりませんでしたが？」

「そう言うなって。俺も一生懸命やったさ」

「どうだか……」

思わず、身体を彼に預けた。

彼自身もそれを拒絶することなく、静かに私の身体を受け止める。

何故だろう？

ずっと一緒に居るのに、ずっと一緒に居たのに、急に彼が心配に思えて来る。

きつと、それは

「死なないで」

「うん？」

「……何でもないわ」

彼が紅の姉妹に落とされた時、初めて味わった焦りと恐怖。

今まで数々の武勇を上げて来た彼が”死ぬ”。そう思うと、酷く怖かった。

死なないで欲しい。

今の私には、それ以外の言葉が見付からない。

「すぐにF型用の武装も仕上げるつもり。

利点である機動性を落とさない様に特注で作っているから、少し時間が掛かるのよ」

「衛士は前に出て殴り合うだけだが……開発者は気苦労が絶えねえな」

口を開けば関係の無い事ばかり。

素直に慣れないのは、篁中尉だけじゃないみたい。

私自身、この人に面と向って死なないで欲しいなんて言う勇氣は無い。

……ふざけた性格をした男だ、大笑いするに決まっている。

ああ何だか苛々する！！

日常でまで悩み事を作りたくないのに、このオタンコナスッ！！

「少佐、今晚は付き合っ下さります？」

「ん？お、おい。目が」

まるで何か信じられないモノでも見たかの様に、少佐は口を開けた。

その様は酷く無様で、滑稽で、先程の苛々も幾分か和らいでいく。

ああその様は、とても素敵。

今夜はもう、貴方を含む皆様が酔い潰れるまで酒瓶は決して離さないことにしましょう。

9 (後書き)

今度こそ、キチンと香月博士の登場です

うん、頑張ろう

TE本編にあまり関わる事のなかった夕呼さんをどう絡ませていくか、
カッコよく書けると幸いなのですが…

9・5 (前書き)

気分を転換する為に1つばかり番外編をば……
本編とは違った唯依ちゃんを楽しんで頂ければ幸いかなうと

デート、と言つ言葉をご存知だろうか？

知らない？

では説明致しましょう。

デートと言つのは恋愛関係にある、もしくは恋愛関係に進みつつある男女が連れ立って外出し、一定時間行動を共にする事を指しています。

古くから日本ではコレを逢引と言っています。

「お待たせ。いやあ、書類仕事を手間取っちゃってさ」

「い、いえ、そんな……ッ！」

現在私は、その逢引と言つ行動の最中です。

相手は剣崎少佐、今日はリルフォートへ買い物に……買い物。そう、買い物！

逢引ではない。コレは買い物だ、ただ日用品を買い足す為に行動を共にする為であつて、決して何か下心があつたとかそんな事は無い、様な……気がする。

「買い物がある時はドンドン言ってくれよ？荷物運びくらい、手伝うからさ」

「少佐にそんなお手数を掛ける訳には参りません！今回はその、偶然ですから……」

相変わらずだなあ」と苦笑しながら、龍二さんは煙草に火を付ける。

藤代中尉に教えて貰ったマメ知識だが、龍二さんが煙草に火を付ける行為は案外と珍しかったりするらしい。何せ、本人が気を許す数少ない人物の前でしか披露しないからだ。

故に、帝都内で彼が重度のヘビースモーカーである事を知る人物はあまり居ない。

煙草の臭いで分かりそうなものだが……

やはり、その辺りは本人が気を使って臭い消しでも使っているのだろうか？

「んじゃ、行くか？」

「あのお……！」

「ん？」

「あつ、つ……歩き煙草は、良くありません！」

「お、おう」

リルフォートへ向う前に、龍二さんが煙草を吸い終わるまで多少だが待機時間が発生した。

この僅かな時間に、この先に待ち受けるのであろうあらゆる状況をシミュレートする。

まずは衣類だ。

衣類と言え、下着……下着！？

龍二さんを連れて、リルフォートの下着店に入る？そうしたら、やはり周りからは

(……何だか唯依ちゃん、熱暴走気味だねえ)

鬼姫様奮闘劇

取り敢えず、下着は後回しにする事にした。

下着の見立ては自分が1人の時にでも出来る事だ、龍二さんと共に
行ふ必要性は無い。

全く、無いのだ。

だから残念でも無い。

そんな私は今、公園に居る。

日用品を大きな袋に入れ、ベンチに腰掛けていた。

龍二さんと言えば先程から煙草を買う為に入っていた店先で、見知らぬご老人と話をしている。どうやら、その店を随分と利用しているらしい。仲睦まじく談笑をして居た。

アラスカへ来ることとなり、

XFJ計画を完遂する為に龍二さんと協力し、

藤代千枝中尉という友人も増え、

私は有意義な生活を送っているような気がした。

日本に帰れば民の為に刃を振るい、また血みどろの戦場が待っているのだろう。

例え、そうだったとしても私は

「ねえ君、1人？」

「へえ、可愛いね。何処の子？アメリカ……じゃないよな、アジア？」

何処に行こうが、どんな場所だろうが、下種は居るようだ。

馬鹿を相手にしている暇は無い。

苛々を抑え付ける為に、目を瞑り、相手の言葉を全て遣り過ぐす。何を言っているのか等は理解したくも無いが、私を何処かへ連れ出そうとしているようだ。

馬鹿馬鹿しい。こんな下種共に付いて行く程、私は軽い女では無い。

「一緒に遊ばない？オレって此処のこと詳しいからさ」

「折角此処に来たのに、買い物だけじゃつまらないでしょ？オレ達と一緒になら」

「煩い」

ただ一言の拒絶の言葉。

それだけで、この男達の小さな自尊心と言う物を叩き壊すには十分

だったらしい。

乱暴に　とは言っても、所詮は訓練している者にとってじゃれ付いているかの様な貧弱な腕力で腕を捕まれ、無理矢理立たされる。男の目は敵意に満ちており、どうやら私を如何にかしたいらしい。

剣崎

自分の後方、連れである女の子が悪い男の子2人に絡まれている。

目の前のおばちゃんの「あらあら、まあまあ」なんてすすり呆けた声が聞こえるまで俺自身も唯依ちゃんの危機に気が付かなかったのは失態だったと公言するべきである。

だって、あそこで止めておけば悪い男の子達……泣かずに済んだもの。

もうグダグダ何かを語ってもダメなので、一言で説明しよう。

唯依ちゃんが男の子2人にした事は過度の自己防衛　所謂、一方的な虐殺である。

右腕を捕まれ、無理矢理立たされたと思いきや、その場でCCC。掴んでいたと思っていた腕が行き成り捻り上げられ、男Aと言ったらあまりの事に声すら上手く出せていない様だった。

流石にそれは不味いと思ったのか、男Bは唯依ちゃんの締め上げを止める為に拳を振り上げる訳だが、男Aを蹴り飛ばし、男Bの拳を

綺麗に捌く。

呆ける男Bの両腕は空を切り、ノーガードだった顎に強烈な拳が一発。

ありやダメだ。絶対に、立てない。

流石の男Aも自分の不利を理解したのか、サッサと走り去ってしまった。

何と言う男勝りの無双劇。

あの派手な舞台は、君の為だけに用意された特別な場所だったようだ。

「…………ふう」

「あ、あの……唯依ちゃん？いえ、篁さん？」

「しよ、少佐？！」

あ、ち、違います、アレはただ……そう、彼等と少し戯れていた程度です……！

彼等が煩わしいから強攻策に出た訳では無いですね！？」

必死に弁明するのは良いですがね、篁さん。

先程の男Aが、少々ガラの悪い連中を引き連れて戻って来ましたよ。どう考えても報復ですね。いやね、そんな気がしましたよ……だって彼、見た目からして三下だったと言っか、この後の展開なんて容易に想像出来ませんがね？

「あ、あはは〜！……取り敢えず唯依ちゃん、後ろ」

「ふんっ ……！」

後ろを振り向く事なく、気配だけを察知したかの如く回し蹴りが後方へ炸裂する。

ぐえっ、と言う断末魔な叫び声と共にドテンと1人が地に伏した。

……何と言う事だろう。

ただの買物に行つた先で、こんな騒ぎに巻き込まれるとは思ひもしなかつた！

いや、思う筈がねえっ！！

「ああ〜皆さん、此処は平和的に解決しましょう。ホラ、暴力は何も生みま

「ハツハアツ！つるせえよ、ジャツブルアアアアアワワワアアアアアツ！?!?!?」

鉄パイプを振り下ろして来た雑魚兵Aに条件反射で拳を振り抜く。物の見事に顔面を打ち抜かれた雑魚A君には断末魔と共に速やかに退場して頂いた。

人だかりの向こう側で、嬉々として人を殴り飛ばす篁唯依中尉。

あんな馬鹿力を持っているのに、俺よりも年下だから世の中は分からない。

兎に角、俺も目の前の迫り来る悪ガキ軍団を捌ききらなければならぬ事は理解した。

「正当防衛だからな、正当防衛！！」

言葉と同時に此方へ向つて来た3人に足払いを仕掛ける。

やはりと言うか何と言うか、コイツ等は動きが絶望的なまでに鈍い。無様に顔と地面がキスしてくれた。きつと、顔には小さな小石が突き刺さる事だろう。

次いで、両脇からの同時攻撃。

身を屈め、頭上を交差する拳を避ける。ズシリ、と音がすると1人が地に伏していた。

どうやら相手の拳が運悪く当たったのだろう　ご愁傷様。ともすれば残るは1人。

既に相手は拳を引き、両腕を顔の前に持って来ている。ボクシングのスタイルだろうか？どの様に攻めようと、拳は相手を捉えられる位置だった。

まあ、こつちが使うのは”殴り合い”じゃなくて”殺し合い”に特化したCQCだ。
白兵技能で負けるつもりは毛程も無い。

「　　シッ！」

空を裂く、とでも言って置こう。

町の悪ガキにしては、それなりに早い右だ。

頬を僅かに掠り、俺の後ろへと流れて行く右腕を掴み上げ、捻り上げる。

苦悶の表情を浮かべたボクサーが開いていた左の拳で俺の顔を狙うが、その前にボディに一撃入れて、昏倒させて置く。

因みに言つと中身を抉る様な強烈なヤツでは無い。あくまでも気絶させる為に軽く、だ。

6人のガキを片付け、すぐさま唯依ちゃんの下へ駆けつけ様として止めた。

そこにあるのは阿鼻叫喚の光景、その死体の山の頂上にて女王は

「貴様等あつ、その程度で倒れ込むとは何事だ！！」

コレほど貧弱とは情けない……サッサと立て、私が直々に鍛えなお

してくれる!!」

ボロ雑巾となつた悪ガキ共を更に地獄の底へ落とそうとしていた。何ともまあ恐ろしい光景だ。

此方が6人昏倒させている間に、彼女は死体の山を作り上げているのだ。

唯依ちゃんを怒らせるのは止めよう、命に関わる。

俺の中で1つ、新たな確約が成された瞬間だった。

「すみません、すみません、すみません　っ!!」

帰りのジープの中。

助手席に座る唯依ちゃんは必死に頭を下げていた。

その後、俺と唯依ちゃんは地元の警察官のお世話になってしまった。

その時は多少強引な手を使って俺が事情を説明し、尚且つユーコン基地に所属している衛士である事をチラつかせて事なきを得たが、一歩間違えれば犯罪者のレットルを貼られていただろう。

……罪状は傷害罪か殺人未遂のどちらか、だな。

それに俺も俺で、久しぶりにあんな風に戯れたので身体中の筋肉が痛かった。

年は食いたくないモノである。

ピクリとでも身体が動けば、筋肉が拒絶するかの様に痛む。

地獄の様な責め苦だが、運転手は俺なので必死に耐えるしかない。生き地獄此処に極まる。

兎に角、必死に謝り続ける唯依ちゃんの頭の上に手を置くことにした。

女性特有の髪質なのだろう、男相手には決して味わえない心地良さがある。

それに、小さい子共はこうして親に宥められると静かになると言う。よしよし、なんて子共にしかやったことが無かったが 不思議と唯依ちゃんは静かになっていった。何故だか知らんが、頬も朱に染まっているようだ……

「……………今日はお疲れ様」

ただ、破天荒な1日だったが楽しませて貰ったことは事実だ。心からの感謝と共に、今日は彼女の柔らかな頭の感触を味わうとしてしよう。

9・5 (後書き)

唯依姫無双

すみませんごめんなさい調子に乗りました許し(r y

兎に角、唯依が強いと言うことを書きたかった。

乙女というよりもバリバリの武闘家だぞって言うのが書きたくて

……

すみません、キャラ崩壊すみません！

10 (前書き)

何とか今回の話を上げることが出来ました
週末に私用が出来てしまったので、執筆の速度が落ちるかも知れま
せん

お許しを……ヨヨヨ(泣)

剣崎

XFJ計画の主任である唯依ちゃんをアルゴスのメンバー達に紹介する。

正直な話、彼女の若さと日本嫌いであろうブリッジスの行動が頭を酷く痛ませる。

唯依ちゃんの若さは何とか、俺と藤代の2人で補って行くつもりだ。その為に此方まで飛ばされた訳だし、何よりも主任なんて結構な大任だと思う。

まだまだ経験不足の若者1人に計画の全てを押し付けるには幾分も荷が重かるう。

何よりも、巖谷さんの娘さんだ。

何かあればその叱責が俺の所にまで飛び火しかねない、それだけは御免だった。

そして、もう1つの原因であるブリッジス。

腐っても軍人だ。アレはアレで、集団での最低限度のルールは守るだろうと踏んでいる。

ただ、根本から唯依ちゃんを認めていないのだとしたら？

もしかすれば、計画自体が水の泡に帰す可能性だって捨て切れないだろうに。

「サムライ？」

アルゴスに与えられた部屋。

そこに集まったタリサ、ヴァレリオ、ステラの3人。

そして新たにブリッジスを加え、今から来るのである。う期待の主任とやらの思いを馳せている様子だった。逆に俺は憂鬱以外の何者でも無い。

「ああ例のX F J計画の主任が、何でも日本の由緒正しき軍人家系らしいぜ？」

「グルカみたいな奴ら？」

「それとはニュアンスが少し違うと思うわ。其方は世襲制だしね」

グルカ ああ、勇猛果敢なネパールの戦闘民族か。

山岳戦や白兵戦の技能に秀でてしていると聞いている。

そう考えるとタリサの優れた白兵戦の技能も納得出来るな、グルカ特有のスキルか？

「サムライだか忍者だか知らねえが、接近戦でBEATとやり合おうって連中だろ？」

そんな運用、時代遅れにも程が」

珍しく、ユウヤが自分から突っ掛かって来た。

そりゃそうか、日本嫌いなコイツにとっては我慢ならない話の一つだろうな。

「最前線を抱え込む国で接近戦を意識しない国なんて無いわ。そう

でしょう、少佐？」

「う、うおうっ?!……な、何だ。俺か……」

まあ確かに、四六時中銃撃戦を行うなんて訳にもいかねえな。

弾は有限だし、金も掛かる。それに金を出してくれるのは国民からの血税だ。

無駄な浪費はストップして益を少しでも多く得る。

その為には必然的に、ローコストな近接戦闘武器を採用するってことだ」

急にステラに話を振られたので、驚いて言葉に詰まってしまった。

どうやら、本当に俺自身が参っているらしい。思考が上手く纏められない。

……疲労が溜まる。無駄に溜まる。

ダメだ、もう考えるのは止めよう。

コレ以上は俺の突っ込むべき所では無いし、各々が解決すべき因縁の問題だ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

ユウヤ

「レクリエーションの時間は終わりだ、諸君！！」

オレ達はイブラヒム中尉の登場と共に、彼とその後ろに居る女に注目する。

何だ？見たことの無い顔だが、イブラヒム中尉の秘書官か？

最初ならば、きっと誰しもがそう考えるべきことだろう。

しかし　オレの予想は尽く裏切られる事となった。

「我々が開発を担うX F J計画がスタートする。

本日はその顔合わせと計画の概要について、”彼女”からの説明がある」

「　X F J計画の開発主任を務める篁唯依中尉だ。宜しく頼む」

　　こんなガキが主任！？

じゃあこの少佐の存在は……チツ、ホントにコイツは何の為に此処に居る！！

そもそも日本は何を考えていやがる、ハイスクールの生徒会じゃねえぞ！

「上官がお前達に”宜しく頼む”と言っているこの状況で、まさかテメエ等はただボーっと

見ているだけじゃねえだろうな」

各々、思う所があったのだろう。

上官からの敬礼を見ても、誰も何も反応をしなかった。

そんなオレ達の耳に、良くドスの利いた声がゆっくりと、確実に浸透していく。

その声を出した本人がオレ達と共にこの部屋に居るのか、そんな事すら考えることの出来ない程に強烈な”何か”を叩き付けられた様な感覚に陥る。

「けつ、敬礼!!」

誰がその言葉を発したのだろうか。

ほぼ条件反射の様に、オレも言葉通りに敬礼を返していた。

何が起きた？この小さな部屋の中で、一体誰が、何の為にこんな事をした？

今分かることは　この部屋の中に、化け物が居るって事くらいだ。

剣崎

……過保護が過ぎたかも知れない。

第一印象が重要と言っても、別にアルゴスのメンバーには悪気があった訳じゃ無い。

XFJ計画の開発主任が唯依ちゃんのような若い子だと知ってしまったので、各々が驚いてしまったのだろう。それなのに俺ときたら、大人気なくドスまで利かせちゃって……

気が付くとステラが、俺に対して驚愕を浮かばせた視線を投げ掛けている。

申し訳ない気持ちと、恥かしい気持ちがグルグルと渦巻いて、思わ

ず頬を？いていた。

ただ何も言わないのは不味いと思い、口だけで「す・ま・ん」と形を作って謝っておく。

それを理解してくれたのか、ステラは何処か安心した様に視線を前に戻してくれた。

「日本軍の不知火を米国企業の手を借り改修する、それがXF
J計画の主旨となる」

丁度、唯依ちゃんの計画の概要の説明も終盤に向い掛けていた。

この後の予定は確か、ブリッジス達には演習を行って貰う筈だったな……？

だったら、俺は此処ではもう不要か。

イブラヒム中尉に任せておけば、あとは如何にでもしてくれる事だろう。

それに 俺も俺で、サツサと紅の姉妹に借りを返して置きたい。

まあ後半の理由が主立っている訳だが、サツサと部屋を後にするか……

取り敢えず、近場に居るイブラヒム中尉を手招きで呼び寄せることにしよう。

「後は頼みます、イブラヒム中尉」

「其方の計画に戻られますか？」

「元々、私は此方の”補佐官”です。まずは自分に与えられた仕事を全うさせて貰いますよ」

「お疲れ様でした、少佐」

「彼女を宜しくお願いします」

流石は出来る男、イブラヒム・ドゥール中尉。

俺が抜けることなど予測していたかの様に反応し、静かに敬礼を返すその様は素敵だ。

まだ説明を続ける唯依ちゃんを尻目に、俺は部屋を後にする事にした。

藤代

F型に採用される武装が決定した。

まず1つ目は着脱可能な35mmバルカン砲。

腕部に”持つ”のでは無く、”装着”する事によってF型の特徴である機動戦と言う利点を損なう事無く快適な戦闘を行う事が可能となる筈だ。

2つ目はガトリングシールドと呼ばれる物だ。

あまりにも機動性を重視する為、F型には防御能力が欠落している。それを補う為に、軽量化した盾を装着しようとしていたのだが、整備班の方々からの指摘で、

「こんなモンスターマシンを乗りこなす男が、盾を真つ当な物として使う訳が無い」

残るのは正常に稼動するのかを確認する実機訓練ね。

まだまだ問題点は残るが、まずは何よりもF型に乗れる唯一の搭乗者を待つしかない。

話は結局、それからなのだ。

今頃は多分、篁中尉の紹介に付き添っているだろう。

あの人は正直じゃないから、遠ざけているのに何処か過保護と言うか……

彼、きつと果敢に攻めるよりも何気ない仕草で自然にして居た方がカッコいいのでは？

そう思ってしまうのは彼との付き合いが長いからなのか、それとも

「待たせたなあっ!!」

格納庫を慌しく開け、主役が堂々と登場した。

全身が黒の強化装備とそれに相反する様な無邪気な仕草。

外見が成長しようとも、彼は決して中身まで比例して成長しようとはしなかった。

否、するべきでは無いからこそ無邪気な姿で居るのだ。

きつと、その方が彼にとっては都合が良いのだろう。私には分からない彼なりの

馬鹿馬鹿しいわね……

私は彼に仕える専属の整備士だ、それ以上でも以下でもない。

自分に与えられた仕事をこなすだけ。それ以外、何も必要だとは思わない。

例え、それが普通ならば抱く感情でも必要など無いのだから。

剣崎

格納庫へ登場と同時に、何だかんだ言われて実機を使つての演習を行うことになった。

何でも新しい武装のテストを行う為に、アルゴス試験小隊の演習に便乗するそうだ。

……向こうからこっちに来た意味があるのだろうか？

イブラヒム中尉にカツコよく”アディオス！”なんて決めた自分が酷く惨めだ。

まあ新型を完成させることが俺に与えられていた当初の任務だ。

それを全うするまでは、俺自身も満足して弑型の開発には関わる事が出来ない。

それに　もとを糺せば、俺が此方側よりも向こうを優先していた節がある。

その結果として招いてしまった事象だと言つのなら、今は甘んじて受け入れるべきだ。

既に幾度とテストを共にした恋人に、そつと触れる。

そのフレームは新しい物に交換されていて、それでいて冷たくて、懐かしくて……

自分の不甲斐無さを思い出し、思わず齒噛みする。

本来ならば受ける必要も無かった銃弾を受け、開発計画にまで遅れを来たしたことはこの先、俺の人生に残っていく最大の汚点となる

事だろう。

もう、お前には誰も触れさせない。

硬く握る拳には決意を込め、強く思う心には信念を秘め、ただ真つ直ぐに恋人（F型）を見上げる。

このアラスカは、俺とお前だけのステージだ。

答えてくれるかの様に、F型のコックピットが開く。誰かが操作してくれたのだろうか？いや、今はそんな事はどうでも良いか……

この最高潮まで高めた気持ちを、テストにぶつけよう。いつもの俺とは違って少々、真面目だが

「行くか」

今日の俺は、最高にノっているのは確か。
こんな気持ちにはなつたのは初めての实战と撃墜された時以来である。

目の前に広がる機械の群れ。それを操作し、支配し、共に戦って往くのが俺の仕事。

開発衛士であり、ただ生きる為に戦う腰抜けでもあり、ジャッカルに固執する物好きでもあり……

『 此方はCP。少佐、発進準備をお願いします』

如何しようも無い程の、”負けず嫌い”でもある訳だ。

《……悪いけどさ、久しぶりにコールサインで呼んでくれ。その方が気分が良い》

『コールサインですか？……了解しました、”ジャツカル01”。

今回の演習の目的はあくまでも新型兵装のテストです。

テストとは言え、装着されている銃弾は実弾ですのであまり無駄弾を使わないように

注意して下さい。それに、あまり無理をしないで……機体も、貴方自身も』

《了解》

ゆっくりと開かれていくハンガーと外を隔てていた扉。

徐々に開かれていくにつれ、ゆっくりと差し込んでくるアラスカの日差し。

本日も晴天。最高のフライト日和になりそうなのは確定事項だ。

『撃破目標を設定。それではジャツカル01、どうぞ！』

《ジャツカル01、テストを開始する》

急激なGが身体を覆い込み、網膜に直接投影される景色が一気に後ろへと飛んで行く。

最高に気分が、良い。

一度着地、そしてもう一度跳躍噴射。

飛距離を伸ばす為に断続的に跳躍ユニットが火を噴き、少しでも先へと鉄の巨体を押し上げてくれる。それが嬉しくて、楽しくて、まだ飛べるのではないだろうかと調子に乗ってしまうのは俺の悪いクセだと思う。

《 当たれよ 》

機体を地面へと落とし、今まで機体を押し上げていたブーストの力を地面へ逃がす。

その反動を利用し、機体を1回転。

ビルの上に設置してあったダミーを3つ、視界に入れてトリガーを引く。

一瞬にしてダミーが掻き消え、画面端に小さな文字でHITとだけ浮かんでいた。

新型の武装だと言うバルカン砲だが 小さいながらも射撃の精度が良い。

狙った目標着弾地点までの誤差が本当に僅かしか存在していない。

これは藤代中尉と整備班の人達に流石、と言うべきだろう。

やはりと言うか何と言うか、コレを設計したのであるう藤代千枝は天才だ。

まあ本人の前で言ってやると調子に乗るので、決して言わんが。

《次は……ガトリングシールド？物騒な名前だなあ》

『名前よりも性能です』

《そりゃそうだが……まっ、使い易けりゃ何でも良いさ！》

左腕に装備されていたガトリング砲をダミーへと向ける。

ゆっくりと銃身が回転し、間髪入れずに耳を引き裂かんばかりの勢いでズガガガッと弾が連続して発射された。クセになりそうな発射音だ、トリガーハッピーでは無いが……

気分が良いのも否定出来ない。

《ヒュウ〜》

後に残るのは原型を残さぬ程、ズタズタに引き裂かれたダミー。
こんな物をBEATや戦術機相手に使えば 結果など、言わずと
知れたものだ。

《……軽いし、威力もある。それに着脱可能か……良い武器だ》

『ありがとうございます、少佐』

さも当然の様に笑顔で俺の賞賛を受ける千枝。

コレさえ無ければ、俺ももう少しだけ褒め称えてやれるが……あま
りやり過ぎると調子に乗る。そうなる何と云うか、止めるのが面
倒なので賞賛の時間は終わりにしよう。

《テストを再開する。次はF型の速度について来られるか、だな》

『了解。カリキュラム変更します』

さて……新しい玩具が手に入った子共の気持ちはきつと、今の俺と
同じことだろう。

遊びまわりたくて仕方が無い。違うかな？

まあ俺はコイツを使って、遊びまわりたくて仕方が無い。

悪いね、節操が無くて。生憎と、俺は首輪を付けられた飼犬とは
訳が違う。

躰を受けていないからな、俺は獰猛だぜ？

それは偶然だった。

そう、偶然にして起こってしまった事なのだ。

偶然、その場に居合わせた紅の姉妹が同じく偶然演習を行っていたユウヤの目に留まった。

そして 偶然にも、その光景が龍二の目にも入った。

それだけのことなのだから。

己の存在意義を見出す為に銃口をターゲットへと向ける紅の姉妹。

己の存在を認めさせるが為にトリガーに指を置くユウヤ・ブリッジス。

己の存在を己自身が知る為にスコープから目標を撃ち抜く剣崎龍二。

「あと1機……イーニア！」

「クリスカ……もっとはやく……っ!!！」

標的機を追い掛け、凄まじいまでの二次元戦闘で魅せるSU-37 UB。

紅の姉妹

「やっぱり標的機相手じゃ燃えねえよなあ……ッ!!！」

気に入らない演習を終え、紅の姉妹相手に血が滾るF-15E。

ユウヤ・ブリッジス

「へえ、わざわざ俺の前に面あ出すとは驚きだ」

いつかの屈辱的な借りを返すと常々心に決めていたTYPE - 94
／F。

剣崎龍二

知る由など無い。

まさかこの場が

想像を絶する獣達の狩場になる事など、彼等には想像など出来る筈
も無いのだ。

10 (後書き)

次回予告『修羅場』

……こんな風にみると、次が不安になってくる
カッコ良く3つ巴の戦いを書ければ問題は無いのですが……

感想、待ってます

11 (前書き)

何とか完成しました

やはり書き続けないと自分の頭が書き方を忘れてしまいそうで怖い

取り敢えず、何度か自分の書いた物を読み直して間違い直しても…

…

藤代

「相手国への介入は認められません、今は抑えて下さい！」

《……お預けか。ハッ、ますます犬らしいな！》

完全に、完璧に少佐は戦闘態勢だ。

しかし、此処で手を出させる訳にはいかないだろう。目の前に自分の誇りや自信に汚点を付けた気に入らない相手が居るとしても、下手をすれば軍法会議モノの大罪だ。コレほどバカバカしい理由で、彼が軍法会議に掛けられるなど納得が出来るだろうか？否、出来る筈など無い。

「演習中のアルゴス試験小隊！聞こえますか！？」

《あ？おおっ、中尉じゃないの。どうかしたのか？》

《アンタ、確かあのTYPE-94の……》

「私1人じゃ彼を抑えきれない！お願い、絶対に彼を相手国へ入れないで！！」

こうまでしなければ今の彼は抑えられない。

何時もならば、温厚な少佐なのに　1度でも闘争本能に火が付くと、周りを焼け野原にしようが止まる事を知らない。それが発揮される相手が敵ならば問題は無いが
“国”が相手となると、話は別だ。
計画の廃棄、下手をすれば日本とアラスカ、そしてソ連との関係を悪化させかねない。

《ライオン用の檻でも持つてくりやなあゝ！》

《……Black　Lionか。より取り見取りだな、これじゃ》

今は彼等に全てを託す事しか出来ない。

私は言葉を伝える事しか出来ないが、彼等ならば……彼等ならば、あの燃え滾った火山の様な少佐の本能を、何とか宥めることも出来るのではないだろうか？

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

クリスカ

叩き付ける様な敵意。そして、劈く様な銃声が目標機へと向けられ

る。

先日、跳躍ユニットを撃ち抜いた男の機体？だが、私達に向けられたこの敵意は何だ？

刺々しく、荒々しく、冷たく、何処までも深い。

それを真正面から浴びる事で、私の身体に僅かな感触が芽生える。

“ 生きている ”

《 目標機じゃ満足出来ないだろう？ 》

男の声は笑っていた。それは相手を嘲る様な嘲笑とは違う、私の知らない 何か。

そくだ。私は今、確かに “ 生きている ”

《 遊ぼうや、存分に 》

一段と増す鋭い敵意。いや、それはゆっくりと敵意から殺意へと成り代わって行く。

身体の中から突き刺す様な鋭い痛みを感じる。

巨大な獣と相対している様な、そんな錯覚を覚える程の強烈な殺意だ。

気が、ふれそうになる。

だが私は今 ツー！！

《 フツ、フツ…… 》

確かに、この世界で、息衝いている ツー！！

お互いに向けられる銃口になど目も暮れず、ただ網膜に相手の姿を目に刻む。

黒のフレーム、ファイル内にある日本製のTYPE-94とは違う造りをされた改修機。

コレに乗っている衛士は 先日、アラスカへ着任したばかりの剣崎龍一。

漸く、私と渡り合える”化物”に出会えたのだ。

直ぐには殺してなるものか……じつくりと、ゆつくりと髑り殺してやる。

決して、逃がさない。お前は私の獲物だ、私だけの獲物だ。

私の狩場に来た事を、後悔させてやる ツ！

《 泣き叫べ》

《 許しを請え》

その声は、私の耳にハッキリと届く。

良く澄んだ声だった。人を殺すことに、微塵の恐怖も感じていない様な声だ。

まるで、殺戮を楽しむような

《《 地面に這い蹲るのは、お前だ！！》》

両者が、同時に空を駆ける。

誰かに合図された訳でも無い筈だが、その動きは驚く程にシンクロしていた。

まさに 兄妹だ。

それはきつと、当人達にとっては生きる事よりも重要で、

『CPよりイーダル1へ。カリキュラムは終了した、直ちに帰投せ

『よ』

《少佐、国際問題に成りかねねえ！今回は退こうぜ！？》

この制止を呼び止める声を、どれだけ振り切りたいと思った事だろうか。

願うことならば、こんな線引きに縛られた場所などでは無く、もっと真つ当な戦場で
今すぐにでも、殺し合いたい筈なのに。

《イーダル1、了解》

《すまん、ヴァレリオ。少し熱が入り過ぎた。迷惑を掛けたな、ブリッジス》

《……ふん》

今はこの憤りを、別の何かに叩き付ける事にしよう。
そうしなければ……私はもう、壊れてしまいそうだから。

ユウヤ

オレ達の誰かが口を開くよりも先に、少佐はオレとヴァレリオに頭を下げていた。

ただ一言、”すまん”。

正直な話だが、オレの周りに居る上官は権力ってヤツを振り翳す様な奴等ばかりだった。

だからそれを見て、オレは意外に思ってしまった。

“こんなヤツも居るのか”、と。

「少佐なんて地位に居ようが、結局は俺も未熟みたいだな。精進あるのみってね」

「お？じゃあ少佐、チョンマゲか？それともハラキリか？」

「バカか、お前。腹斬ったら死ぬだろうが」

「いや、まあブリッジスの言うことも一理ある訳だが……昔なら絶対に、切腹だな」

他の奴等が待つ格納庫まで無駄なことを喋りながら歩いて行く。

日本人である筈の剣崎少佐だが 何故だか、あまり敵意と言うものを抱けなかった。

だからと言って、慣れ親しむつもりは無いが……

「ん？じゃあ何か、ヴァレリオはブリッジスのお守りってことか？」

「まっ、そう言うことだな。

女と一緒に居るよりも俺の方が良いって言うからさ、喜んでエスコートさせて貰ったぜ」

「……へえ」

「ち、違えぞ！？オレは至ってノーマルな」

「慌てるなよ、余計に怪しいぜ？」

「ぐっ……!!」

「オレ達、もうおホモ達だからさ。遠慮はなしだぜ？」

「ブウツッ!!!!」

「き、汚ねえ！いきなり噴出すなよ!!」

「ホモ達って何だ！？アレか、やっぱりお互いの尻の貞操を奪い合
うって言う例の」

「違えよ！仕舞いにや殴るぞ、アンタ!!」

「「おホモ達」」

「歌うな!!」

「……頭が痛い。」

何だ、コイツ等。新手のコントなのか？息まで揃えやがって……

いや、まあそれよりも今はあの中尉だ。

今回のオレが叩き出してやった記録は他のアルゴスのメンバーが出
していた過去の記録を上回っている。既に十分な成果を出している
筈だ。

これで、生意気な口も利けなくなるだろうな。

「ラララ〜 おホモ達〜」

「ヴァレリオ、お前天才だな!!」

「このヤロウ共は……!!」

待っていた中尉の下へ到着するまで、そのバカ騒ぎは続く事となつたのは言うまでも無い。

調子に乗っていた2人は待ち構えていたアルゴスの2人と中尉の前に到着しようとする関係なしに歌っていたので、その時は遠慮無しでブン殴ってやったが。

剣崎

まあ勝手な予想になるが、ユウヤが乗る機体は不知火からじゃ無いだろうな。

米国と日本の戦術機開発での概念の違いってヤツを身体に叩き込む為に、まずは練習機の吹雪辺りへの搭乗が命じられるだろう。

……それをユウヤが納得するか否かは、俺が直接手を下す問題じゃない。

これも唯依ちゃんの成長を促す為に必要な刺激の1つだ。今は見守ることしよう。

「まあ俺の事は気にせず。ささ、今回の演習の結果を伝えて下さいな、中尉」

「……了解しました」

まあ本人はあまり納得していないことだろう。

俺の予測だが、この結果報告終了と同時に俺に対する説教が開始されると思える。

当然と言えば当然か。あと少し間違えば国家問題並みの大事件に発展し掛けた問題行動だ、説教されるのも当然でしょね、こりゃ。でも怖いからなあ、唯依ちゃんの説教……隙を見付けて、逃げ出そう。

「お前の実力は良く分かった。お前には明日から早速乗って貰う事になる」

「お褒め頂き光栄です、中尉殿。で、シラ……ああ何でしたっけ？どんな機体ですか？」

「……勘違いするな。お前に搭乗して貰う機体は不知火では無く、吹雪と言う機体だ」

ピンゴ。

やはり最初は吹雪からのスタートか……

これ以上、唯依ちゃんに喋らせるのは不味いな。

この子の言い方は日本特有の固さを持っている。その物言いじゃ結果として、ユウヤの感情を逆撫でするだけになってしまう。

「吹雪はTYPE-94……不知火の直系となる高等練習機だ、ブリッジス」

「練習機！？オ、オイ！何かの冗談だろ！？」

「コレは予定通りのカリキュラムだ。次のブリーフィングまでには目を通しておけ」

そう言い残し、此方へ目配せをして去って行く唯依ちゃん。

ど、どうしようかね。まあ取り敢えずはブリッジスのことだが……

このタイミングで俺が

関わるのは火に油を注ぐ結果にしかならないだろう。

今はそっとして置こう。

……何よりも、俺の命も危うい。まだ死にたく無いので、俺もサツサと唯依ちゃんの下へ向かわなければ不味いのだ、非常に。

「すまん、ユウヤ」

唯依ちゃんはお前で遊んでいた訳じゃない。

あの子は、出来る子だからこそカリキュラム通りに進もうとするクセがあるだけだ。

今のお前の屈辱は良く分かる。

だから耐えてくれ、ユウヤ。いつか お前には盛大に暴れて貰う。

「先ほどの件ですが」

重苦しい空気を纏った格納庫。

そこは、折檻室と化したと言って差し支え無い事だろう。

理由は2人の般若にある。

1人は我等が誇る天才、藤代千枝。

いや、まだ此方は我慢出来る範囲内であろう。

何せ彼女は、純粹に少佐を心配している為に出てしまう苦言なのだ。それも数少ない。

「以後気を付けて欲しい」とか、「今後は一切無い様に注意して欲しい」など。

少佐には長い折檻よりも、気持ちを込めて話せば分かっていると知っているのだ。

だから、言葉は要らないと理解しているのだろう。

対するのは見目麗しい大和撫子、篁唯依。

私達は知っているのだ、彼女がどれだけ少佐を好いているのかを。

だからこそ心の底から彼の身を案じてしてしまうのだろう。気持ちは痛いほど分かる。

……いつそのこと、鎖で縛り付けて置きたいのかも知れない。しかしっ！

彼女の言葉は藤代中尉の苦言とは違い、折檻なのだ。

クドクドと始まり、ガミガミと怒鳴り、最終的には周りからの制止が入るまで止まる事を知らない。

……まあ、コレも少佐を愛するが故なので微笑ましいと言えるば微笑ましい。

「ソ連側の演習領域にあった目標機を破壊した、と聞きました。実弾で狙い撃ったと」

「い、いや、アレは此方側の領域に入りそうなので処理をただけですてね……」

いえね、故意じゃないよ！？アレは偶然だからね、偶然！」

「偶然？偶然、目標機が此方側へ来たので実弾で撃った、と？」

「そ、そうです」

「そんなことがある訳が無いでしょう！？」

彼女達の実力を知っている貴方なら、アレを撃ち漏らす筈が無い事程度理解出来る筈ですが、それに対して弁明はありますか！！」

「い、いえ……無いです……ゴメンなさい」

180後半程の身長を持つ筈の少佐が、たった1人の少女の言葉で此処まで縮こまるとは。

こんな姿を見ては、彼が本当に”黒獅子”と呼ばれていたか如何か疑いたくなる程だ。

「あの時、アルゴス試験小隊のメンバーの制止の声が無かったら

」

それにしても……

「だいたい、龍二さんは」

この説教は夜まで続きそうだな。

とある整備士視点・終

時刻、既二陽ガ沈ンダ後。俺、喉カラカラ。

PXにて、俺と唯依ちゃんは同席していた訳であります、Sir!!

格納庫でのお説教は先程、千枝の一言で如何にか終わりを迎えることが出来た。

彼女が居なければ、そう考えてしまつともう目を閉じる事が出来ない。怖いのだ、凄く。

「……」

「……」

そして無言と言つ凄まじい破壊力を持つ兵器が、俺を襲つ。

お互いに特に何も喋る事も無く、ただ只管に食べ物をお口に運んでいった。

俺達の周りは驚く程に人が居なかった。まるでドーナツ化現象だ、周りの奴等は俺達を居ない存在として扱おうとしているのだろうか？ その中でも、唯依ちゃんは特に気にした様子も無く、食べ物を口に運んでいた。

まあ前線でBETA相手に殺し合いをしていた頃に比べれば食事もあるし、文句は無い。

前線に出てしまえば食事を取れる時間なんて有りはしない。

周りで死んで逝った仲間が作った穴を埋めるのに必死で、食事など考えている暇すら無いのだ。そんな時は、BETAを殺して回るこ

としか考えられない。

「……ありがたいなあ」

口からは、咄嗟にそんな言葉が漏れていた。

無意識だったので唯依ちゃんの視線にすら気付かないまま、俺は食事を再開する。

合成食だろうが、物を食べられるということはどれだけ裕福な事だろうか。

この世界にはきつと、飢えに苦しむ人々も居る事だろう。

そんな人々が居る筈なのに、俺は当たり前のように食事を食べている。それは何て幸せな事なのだろうか。

「ごちそうさまでした」

そんな人達を他所に、俺達は飯を食べられるのだ。

こりゃ死ぬ気で働かないと不味いな……まあ俺はいつでも全力だが。

「唯依ちゃん、今日はごめん。迷惑掛けちゃってさ」

「え？い、いえ、此方こそ申し訳ありませんでした、こんな時間まで……」

「んじゃ、仲直り」

仲直りと言えば握手だ。

俺は静かに彼女の手を握ると、しっかりとその手を握る。

彼女の手は柔らかくて、暖かくて 何処か、懐かしい感じがする。

最初こそとても驚いた様に目を見開いていた唯依ちゃんだったが、

次第に顔が俯いてしまった。何か失礼なことでもしたのだろうか？
思わず、手を離してしまった。

「あつ………！」

「それじゃ、おやすみ。しっかり休めよ？」

「あ、う………お、おやすみなさい、少佐」

彼女に手を振りながら、俺はPXを後にする。

明日からは本格的にXFJ計画も始まることになるだろう。

唯依ちゃんには相当な負担が掛かる事だろうし、千枝辺りをサポーターとして送るとするか。

此方の計画は一応、一段落着いた筈だ。

俺も、夕呼の連絡が来ない限り動けやしないだろう。

………今はもう少し、様子を見るとするか。

11 (後書き)

今回は「ユウヤ、吹雪に乗る」

案外と忙しい中で時間を見つけて書くことが楽しくなってきた
生粋のMですね、本当にありがとうございました

感想をパソコンの前にて全裸で(r y

12 (前書き)

少々、オリ主の過去に触れておこうと思ったので
この話を書いておこうと思いましたが

BETAと戦った事がある衛士ならば心の底ではきつと、こつ思っている事だろう。

“死にたく無い”、その一点だけだ。

国の為、民の為、故郷の為、恋人の為、家族の為、皆はそう言つて戦場へ行く奴等。

違つ、何もかも自分の為だ。

嬉々として、己の命を国の為に捧げる。

後悔など無いと言えるのだろうか？

本当に、死んで逝つた者達は幸せなのだろうか？

人の一生を決めるのは神でも無ければ、偉い人達でも無いと思う。

きつとそれを決めるのは、純粋な”力”だ。

強くなければ、すぐに死ぬ。

強くなければ、何も守れない。

記憶に新しい明星作戦。

目の前でBETAに蹂躪されていく戦友や、街。

きつと奴等が来るまでは人々の笑顔を写していたのであろう公園の噴水には、気味の悪い液体がどつぷりと溜まっていて、それを辿つて行けば何が原因なのかは直ぐに分かる。

戦術機から流れるオイルと、殺されたBETAの血液だ。

何て言う地獄絵図なのだろうか。

きつと、あの戦いが初陣だった新人達は遅しく育つてくれる事だろ

う。

……まあ生きているのなら、の話だが。

そつだな、懐かしい昔話でもするとしよう。

唯依ちゃんに出会う前、藤代と知り合う更に前、俺が
明星作戦に参加した頃の話でも1つ、話してやるとするか。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n
1 4

《敵の数が多過ぎる……ッ、援護はまだなのか!?!》

人使いが荒いのは偉い奴等の特権か何かなのだろうか？

死に物狂いで戦う俺にとっては、まさしく地獄へ一直線に行進して
いる様な気分だった。

前方の防衛ラインが一瞬で崩れ去り、波の様にBETAが迫る。

真正正銘の肉の壁だ。1発の銃弾では、その堅牢な壁を崩せる訳が
無い。

一点集中以外、手段は無いのだ。

《そこの陽炎の衛士、俺と同じ場所を狙え!!》

《だ、だが》

《言う通りにしろ！死にたいのか！？》

“死”と言う単語をチラつかせれば人間は思ったよりも従順になってくれる。

悪態を吐く事もせず、陽炎の衛士は必死に突撃砲を肉の壁にただ只管に撃ち続けた。

間髪要れずに、俺の放ったグレネードが肉の壁を僅かに削る。

まだ足りない。

陽炎の弾幕だけでは役不足だ、俺の乗る不知火も背部から全ての腕を総動員して肉の壁に弾をばら撒く。最初こそ全く見えなかった壁の向こう側だったが、今では僅かにだが小さな穴が目に入る。これならば

《頼む……ッ！》

最後のグレネードだ。

銃口から真っ直ぐに突き進む弾丸は、BETAの壁へ到達と同時に、弾ける。

十分……いや、最上の結果だ。

戦術機1機が何とか通り抜けられる程度の穴が、あの恐ろしい壁に開いているのだ。

《開いた……ッ！》

閉じる前に、滑り込む　ッ！！

推進剤を気にする事無く、全力で跳躍ユニットを飛ばす。今まで身体に掛かった事の無いような強力なGが身体を押さえ込んだが、そ

れも一瞬のことだ。

不知火は既に肉の壁を駆け抜けており、後方ではそれに続く様に陽炎も此方へと移動している所だった。

《ありがとう、助かつ》

しかし、陽炎の衛士が言葉を喋り終えることは無い。

微かな光と共に、通信画面が掻き消える。そして、目の前で起こる爆発と炎上。

光線級が放ったレーザーだろう。

中に居た衛士の安否など、確認する必要も無い。アレでは、確実に即死だ。

《……クソッ》

この作戦で、何人もの名の知らぬ戦友との別れを経験した。

人の死をたった一言で言い表せる様になるとは、慣れとは恐ろしい物である。

だが、俺は見知らぬ人々の為に涙を流す様な御人好しでは無い。

死んだと言うのなら、それまでだ。もう俺は彼等に何をしてやる事も出来ないのだから。

《……サツサと他の奴等の援護に向うとするか》

今は人の死について考えるだけ無駄だろう。

この戦場には腐る程の死体と血が捨て置かれている。

こんな場所で、道徳心が如何のこつと言っている暇は無い。サツサと殺す、それだけだ。

爆発音と絶叫が木霊する戦場を、1匹のジャツカルが駆け抜ける。

孤立した部隊なんて、こんな戦場じゃ珍しくも無い。

あまりの数で攻めて来るBETAに日頃から鍛えていた連携の息を乱し、戦線が混乱するのは別段珍しい事とも思わないからだ。

ただ、目の前で見せられるのは勘弁して欲しかったが。

《 ったく、ガキのお守りは勘弁して欲しいぜ》

目の前でBETAを相手に必死に食い下がる2機の不知火。
いや、2機じゃない。もう既に1機は

《援護する。まっ、密度の濃い弾幕は張れんがね》

《ッ?!……強力感謝する》

お互い、顔を見せる事無く音声のみで言葉を交わす。

僅か数秒と満たない言葉のキャッチボールだったが、まあ相手の力量程度は理解出来る。

この地獄を1機で乗り切ったとあれば　コイツは間違いなくエースだろう。

あくまでも敵を殺すのでは無く、近付けさせない事を念頭に置いた戦い方は見ていて清々しい程にこの戦場での効果は抜群だった。

ただ、その戦い方をすると弾の消費が多い事が難点だ。

発想は悪くないが、65点つてところだろうか？

暫く弾幕を張っていた不知火だったが、遂に両手の突撃砲を投げ放った。

どうやら、弾薬が底を尽いた様だ。

……しかし、このままだと特攻でも仕掛けかねない勢いだな、コイツ。

此処は、俺がフォローでも入れて置くか。

《使え、不知火の》

《なっ！？》

1番弾を消費していない突撃砲を投げ渡し、撃ち尽した弾倉を捨てて新たな弾倉に交換する。

最初こそ驚愕していた様子だが、腐っても衛士だ。直ぐにBETAに対しての射撃を開始する辺りは流石と言うべきであろう。

しかしまあ幾ら殺そうと蟻の様に溢れやがる。

ハッ、至れり尽くせりの食い放題って訳だ！最高じゃねえか、腹がパンパンだな！！

《おい、不知火の》

《どうかしたか？》

《いや、お前の名前でも聞いておこうとね。どうやら、此処で年貢の納め時らしいぜ？》

《……伊隅みちるだ》

《宜しく、伊隅。俺は剣崎龍一》

《剣崎だと?!あの、ジャツカル隊の……!》

《相変わらずジャツカルは有名だねえ》

明らかに狼狽する伊隅を他所に、俺はと言うとジャツカルの名前が持つカリスマみたいな物を再認識させられた。やはり、先任達が行ってきた偉業は伊達じゃないって事か。

まあ今となっっちゃ、ジャツカルの名前を受け継いでいる衛士なんて俺1人だね。

取り敢えず、今は一匹でも多く殺しておくでしょう。弾薬が底を尽けば、少しずつ咀嚼されて行く運命だけが爛々と待っていることだろうが。

伊隅機の背後へ移動し、彼女の背中を守る。

僅かに残されている可能性を示唆し、1%の確立に全てを掛けるのがジャツカル流儀だ。

それが 俺の戦い方の筈だ。

《 時間か》

《時間?》

《G弾だ》

伊隅の何かを諦めたかの様な言葉が、印象的だった。

G弾? G弾って……何だ? 弾つつうことは新手の兵器か?

こんな場所での新兵器の実験とは、上の奴等は相変わらず考えることが派手だねえ。

《で？そのG弾ってヤツの威力は？》

《少し待ってくれ……推定だが、この街1つを廃墟に変えるには十分な威力だな》

《……オイオイ》

告げられた真実は、あまりに絶望的な物だった。

今現在、俺と伊隅が戦っているのは街の中心近くのモニュメントが、目と鼻の先に見える距離だ。 巨大なハイブ

兵器を落とす為に効果的な場所など、今の状況ではあのモニュメント以外には無いだろう。

まさか人間の手で、あの世に逝くとは思いもなかった。

《まったく、偉い人は死体の数を書類で確認して”さようなら”ってか……！》

《衛士になった時から、覚悟はしていた筈だろう》

《冗談だろ？俺はまだ死にたくねえさ》

《……貴様、それでも男か？》

《お前みたいに命に価値を見出していない奴は、そうやって簡単に死のうとする。

バカか？もつと敵を殺せよ。生き永らえて、この地獄で敵を殺し続ける。

無駄死になんて笑えねえぜ？

生きる為に、全力を尽くせ！本能の赴くままに、全てを”生きる”事だけに傾ける！

それが俺達の戦い方だ。
死肉を漁ろうと自然の中で生き抜こうとする、偉大なジャッカル
の戦い方だ!!」

……本能の赴くままに行動する。

もう策略を練る知識も、余裕も、時間も無いのだ。全てを 直感
に任せる。

生きたい。

俺は、ただ生きたいのだ。

《突貫するぞ、伊隅!!》

《 生きる、か》

《返事をしろ、伊隅みちる!!》

《そつだな……やってやろうじゃないか!!》

2機の不知火が、刀を構えて真つ直ぐに跳躍噴射をする。

目の前から迫る突撃級の突進を交わし、要撃級が腕を振り上げるよ
りも早く刀で斬り捨てる。戦車級など弾き飛ばし、要塞級の巨大な
足の下を死に物狂いで潜り抜ける。

《おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!
!!!!!!!!!!!!》

死にたく無い、死にたく無い、ただ、死にたく無い。

駆け抜ける、何処までも。お前はまだまだ飛べる筈だ。まだ終わら
ない、終わらせない。

こんな所で、俺の物語は終わらない筈だ。

虚しくなってくる。

こんな事の為に戦っていたのか？何故だか、自分が戦っている事に疑問を抱き始めた。

「剣崎！」

《……あ？》

僅かに残った伊隅みちるが率いる部隊の衛士達が、そこには集まっていた。

各々が沈痛な面持ちをしており、勝利に喜んでいるとは言い難い。

「礼が言いたい。降りて来てはくれないか？」

《……おう》

律儀なヤツだな。

そう思いながら、不知火のハッチを開ける。

風と共に漂い、僅かに漂う肉が焼けた臭いと火薬、そして腐敗臭。思わず顔を顰めるが、そんな顔をしたまま伊隅の前に出るのは悪いと思い、直ぐに表情を改める。

「先程はすまない。助かったよ」

「いや……それにしてもお互い、ボロボロだな」

「そうだな……私の部隊も、お前の機体も、街も……心も」

言葉の通り、俺の後ろに控えている不知火は起動することがやっと

いや、それは既にスクラップと言って差し支え無い物だろう。

右足は半ばから？がれ、頭部は上半分が消し飛び、両腕の回路も完全に逝ってしまった。

それに、街もそうだ。

真ん中に開いた巨大な穴と、薙ぎ払われたように倒壊している建物。

昔は、あそこに誰かが住んでいたのかも知れない。

此処ではきつと、俺の知らない誰かが笑って、楽しい人生を送っていたのかも知れない。

思い出と共に、街が1つ消えてしまったと言う現実が心を抉る。

「生き残れただけで、儲けだな」

「……そうかも知れん」

「まあもう少し欲を出せば……誰も死なないって結果が良かったがね」

「それは……無理だろうな」

「例え夢だとしても、見るだけならタダだろ」

「……自由な男だな」

「自由？勘弁してくれ。首輪が見えないのか、首輪が」

「なら、私の部隊に来るか？」

「……もう少し帝国でやりたいことがある。

それに、お前の所の副指令とは……まあ何だ。昔からの腐れ縁と
言うか……」

「驚いたな……香月副指令と知り合いなのか」

「お互いのことは誰よりもよおおおおく知っている仲だな」

「……失礼だとは思うが、恋仲？」

「アレに媚びる男が居るのかどうか、それはある意味で人生永久の難題だろ」

「……」

それを皮切りに、お互い無言だった。

軽口を叩くだけの余裕は有る様だが、やはりと言うか疲労は色濃く顔に出してしまう。

もうそろそろ、この会合もお開きにした方が良いかも知れない。

「……また世話になるかも知れないぜ？」

「その時は今回の借りを返す」

その言葉が、俺と伊隅の別れの言葉になった。

伊隅は去って行く俺に敬礼し、俺はそんな伊隅に軽く右手を振っていた。

伊隅と別れ、俺はと言うと取り敢えず戦術機の駐屯所へ足を運んで

いた。

まだ小型種が残っているかも知れないと言う理由で、ジープでも借りて行こうかと思っただが、そんな物よりも今は死んで逝った者達を労わりたい。そう思っていた。

結局、それ自体が俺の自己満足の様なモノだが……

沢山の人々が死んで、

沢山の人々が泣いて、

沢山の人々が怒り、

沢山の人々が絶望した戦い　　明星作戦。

それで俺達が手にした物は何だろうか？分からない、何を得る為に戦っていたのかも。

「……………孝之……………」

そんな俺の前に、ただ呆然と　　今は廃墟と化した街を見詰める1人の少女が現れた。

その目は悲しみに暮れていて、ただ強く、手を胸の前に翳しているその姿。

今は沈み行く陽射しを浴びるその姿は、不謹慎だが俺には天使の様に見えた。

だが、その翼は悲しみに靡れ、もう飛ぶことは二度と無いだろう。

だから、だろうか？

その姿はいつかの俺みたいで　　このままだと、彼女も間違った道に進みそうで怖かった。

彼女みたいな子に、俺みたいな馬鹿な戦いをして欲しいとは思わない。

理由も無く戦争に身を投じる戦いなんて、空ろなだけだから。

「この世界から誰かが居なくなるうとも、君がそれを忘れぬ限り繋がりは永遠に続く。

無くしてしまったモノの存在が大きいのなら、心に刻め。

だが、それにしがみ付こうともするな。前を見て、しっかりと歩んで行け」

驚いた様に此方を振り返る少女。

その目を真つ直ぐに見返して、俺はただ、言葉を紡ぐ。

説教臭いかも知れんな……まあ、親が子に何かを教えるならこんな口調になるだろう？

「間違えるなよ、選択を。

俺の様な屑には……君の様な優しい子になっちゃいけない」

「うおッ!?!」

「な、何だよ、人が折角起こしてやろうと思ったのにさ」

「……タリサか……」

気が付いた時には、眠っていたみたいだ。

自室のベッドでは無くてシミュレータールームで眠っている辺りから察するに、俺自身も相当疲れが溜まっているのだろうか。

「そろそろ演習、始まるぜ？」

「演習？……ユウヤのヤツ、不機嫌か？」

「そりゃオムツ付きを預けられりゃ不機嫌にもなるさ」

「……悪いことしたなあ」

元々、カリキュラムに含まれていたからと言っても練習機を宛がわれるなど屈辱以外の何でも無いだろう。それでも今は、耐えて貰うしか無い。

「悪いな、起こして貰って」

「別に良いけどさあ……」

「どうかしたか？」

「別にいゝ？」

何か含みのある様子で先を歩くタリサの後を、俺は疑問に思いながらも追い掛ける。

後でタリサに聞いた話だが、眠っていた俺の顔はとても悲しげだったそうだ。

12 (後書き)

最後に登場した少女……それはきっと

次回こそは前回の後書きに書いた『ユウヤ、吹雪に乗る』が実現出来る筈なので、ユウヤ好きの方は楽しみにしていてください

感想を書いて頂けると嬉しいです

13 (前書き)

遅くなりました

TEを読んでからそれなりに時間が経過してしまったので、

今は空き時間などにTEをチラチラと読みながら書いているます

それにしても……不知火はイイ

剣崎

A C T Vと2機のF - 15 E、そして吹雪。

格納庫では文句を垂れ流していたユウヤだったが、流石に命令無視までして搭乗を拒否する程、間抜けでも無いらしい。

文句はあったが、見返してやれば何ら問題は無い。

そう言うかの様に、吹雪へと搭乗していった。

その後姿を心配そうに見詰めるローウエル。

何だ、コイツ等は最高のパートナーじゃねえか。女も裸足で逃げ出すアツアツカップルだ。

「心配か？」

「やっぱり、そう見えますか……」

不安を隠そうとしているローウエルは、ポリポリと頬を？いていた。昔からの仲だからこそ、彼には彼なりのユウヤに対する思いやりがあるのだろう。

日本嫌いのユウヤが日本の機体に乗る。

それだけで、彼は気が気じゃないのかも知れない。

だからこそオイルの臭いが身体中に染み付くまで、必死に整備をしていたのだろう。

「良い女房役だな」

「……女房、か……そう見えますか？」

「ああ、最高の”女房”だ」

「へへッ、言われてみると悪くないですね」

屈託無く笑うローウエル。

本当に良い奴だ、俺は心の底からそう感じる事が出来る。

ユウヤの野郎、良いダチに恵まれやがって……羨ましいじゃねえか、チクシヨウ。

「アイツなら出来るさ。今は信じてやろっぜ？」

「……当たり前ですよ」

この演習で、ユウヤには日本製の戦術機のことを理解して貰わなきゃならない。

今は苦痛だろうが、耐えて貰うしか無いのだ。

次の世代に新たな力を残す為に、人が生き残る為に、大事な何か”を護る為に。”

まあカッコつけた割には結局自分で出向く時点で信じる、信じない
以前の問題の様な気もする！

《何だよ、少佐！パーティーに参加するなら最初から言ってくれよ
！》

嬉々としてACTVで空を飛び回り、銃撃のシャワーをばら撒いて
いるタリサの後を追い掛けながら、撃ち漏らしたBETAを1匹ず
つ丁寧に刈り取って行く。

今回の演習では俺が大暴れする必要は無い。
取り敢えずは、部下に笑われるような無様な死に様を曝さなければ
それで良いのだ。

《日本製の玩具を使うユウヤのバックアップにはヴィンセントとス
テラに向って貰った。

残念だったな、お前とのランデブーは俺1人だけだ》

相変わらず出鱈目な三次元機動を見せ、光線級のレーザーを尽く回
避しているその様はエリートと言言葉がピッタリ似合う。

まあ負ける気は無い。

その三次元機動の横にピッタリとくっ付き、低空移動を続けるAC
TVを狙う要撃級や突撃級に牽制弾を撃ち、足止めをしておく。

簡単には落とさせてなるものか、俺がわざわざコイツを護るのだから。

《やるね、少佐！》

《当然だろ？》

A C T Vと不知火（目立ちたくないの、通常装甲）の2機がポジションを完全に抑える。

そこからは一切のB E T Aを通す事は許さず、完璧なガードを実行して居た。

《流石だねえ、少佐！》

《……安定した安心感ね》

《ハハッ、もつと褒めろ！ それよりもアルゴス01、吹雪の乗り心地は如何だ？》

ステラとヴァレリオの奴等は余裕があるみたいだな。

流石に前線を抱え込む国にとっちゃ、この程度の数は朝飯前ってことか。

それに比べて 何だ？ブリッジスの奴は。動きが悪いな。

初めて乗った吹雪とは言え、あそこまで動きに硬さが出るだろうか？

それとも初めての吹雪よりも初めてのB E T Aとの戦闘に戸惑っている性質か？

《チクショウツ……！》

《アルゴス03と04は01の援護。02は引き続き俺と共に敵に攻撃を仕掛ける。》

ステラ、ヴァレリオ！ブリッジスのガードはお前達2人だ、確りやれよ！！》

《《 了解》》

俺が直接手を下したところで、結局は何の解決にもならない。今はブリッジスに少しでも日本製の機体のクセに慣れて貰わなければ、困るのだ。

俺の指示の後、直ぐ様にブリッジスの両脇に移動する03と04。弾幕を張り、少しでも襲い掛かるBETAの数を減らそうとしているのだろう。
必死の奮闘だ。

《タリサ、ラインを下げよう。このままじゃ他の奴等がジリ貧だ》

《まったく、トップガンの奴……ッ！》

《そう言っなよ。新しい戦術機で戸惑いがあるのさ》

タリサは文句を言いつつも、ACTVの速度を落として戦線を下げる。

それに合わせ、俺も少しずつ速度を落としていくことにした。後ろから此方を狙う奴等には弾をばら撒きながら牽制し、少しずつブリッジスの近くまで後退する。

本当に不味い。このままじゃ、ジリ貧になってしまっ。

《……各機散開しろ。

02と03は数の少なくなった前方へ行け。01と04は俺と共に後方の敵を討つぞ》

《良いのか、”トップガン”》

《舐めんじゃねえっ……っ！》

この時点での最良の選択は、ブリッジスを切り捨てることだ。彼1人を守る為に防衛ラインを崩してしまっただけは元も子も無い。それに、今回が駄目だったとしても次に期待すれば良い。まだ彼は若いのだから。

《散開しろ》

《《《 了解！！》》》》

号令と共に、先程言われた通りに各々が散開して行く。何処か慣れない動きだったが、ブリッジスも今は必死に俺達の後を付いて来ていた。

今はそれで良い。

後々に成長する可能性を残しているお前なら、きっと 誰よりも高く飛べる筈だ。

結果として、ユウヤと吹雪は叩き落された。

俺達が防衛していたラインを潜り抜けてユウヤの前へ躍り出た要撃級の拳の前に、アツサリと落とされてしまったのだ。タリサも咄嗟に”刀を使え”と怒鳴ったがそれで如何にかなる訳が無い。

「今日は本調子じゃないだろうが、次はやれるか？」

「……やってやりますよ、言われなくても」

何に対してユウヤが不機嫌なのか、それは今の俺には理解出来ない部分もある。

日本製で、しかも練習機に乗せられた事が不機嫌なのか。

皆の前で叩き落された事で多少なりとも気恥ずかしさがあるのか。それは結局、ユウヤにしか分からない事だろう。

「今日はお疲れ様。まあこの後は唯依ちゃんに絞られるだろうが、我慢してくれよ？」

俺も隣でフオローしてやるさ」

「あのジャパニーズドールか……何であんな奴が開発主任に……」

「実績を認められれば階級も上がるし、重要な仕事も任せられる。あの子は斯衛で、仕事が出来る。上から見れば都合の良い”駒”なのかも知れないな」

「……少佐は？」

「それなりに」

それなりに俺自身は頑張っているつもりだ。

そりゃ国の為に命を賭けると言われりゃ御免被るがね？

だが、俺は生憎とそれなりの戦果を戦場で叩き出している筈だ。

上の連中から見れば相当に使い辛い駒だろうに、”殿下”の唾が掛かっているとなると急に大人しくなりやがる……嫌になるな。

つと、何だ？ヴィンセントにヴァレリオ、タリサにステラまで。

メンバー勢揃いでユウヤをお出迎えとは良いご身分だな、コンチク

シヨー。

「……さんざんだったな」

ヴィンセントは残念そうに、だが何処か悟っていた様にユウヤに軽く手を振る。

触らぬユウヤに祟りなし、と言う事だろう。流石は長年連れ添った女房だ、心得ている。

「おいおい。どうしたよ、ユウヤ」

「オマエ、練習機を押し付けられたからってワザとあんな真似したのか!？」

「止めなさい、タリサ」

それに比べてタリサ、頼むからコレ以上コイツを煽るな。

俺1人でお前達の大喧嘩を止められる程の体力も、気力も今の俺には残っちゃ居ない。

つたく、俺はガキのお守りじゃねえ。

コイツ等みたいないい歳”をしたガキ共の後始末なんて、笑える話じゃない。

「……取り敢えずは整列。篁中尉が来るまでは待機」

まあこんな感じで命令を出しておくしかないだろう。

あと少しすれば唯依ちゃんも此方に合流するだろうし、そうしたらたっぷりと説教を聞いた後にコイツ等を解散させてやれば良い。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

ゆっくりと、此方へ向って来る軍靴の音が耳に入る。
それをアルゴスのメンバーは静かに待ち、俺はと言うと音源を見詰める。

相変わらずの無表情だが、あの仮面が剥がれた時のギャップはもう辛抱溜まらん。

そんな素顔を知っている俺だからこそ、唯依ちゃんの鉄仮面を拒絶出来ないのだろうか？

「 本日の結果。少しは恥じているのか、少尉」

「 最悪ですよ、中尉」

開口一番の重苦しい発言に場の空気が一層重くなるのを感じる。

口の中がカラカラに乾いて来るが、ユウヤにフォローを入れてやると言った手前に此処で退く訳にはいかない。

それに ユウヤの闘争心が燃え滾っていることは直ぐに分かった。目が死んでいないのだ。それ所か、射抜く様に唯依ちゃんを見据えている。

こりゃ…… 確実に波乱が来る。俺の勘が、そう告げていた。

「 貴様は当初、吹雪の挙動に戸惑っていた」

唯依ちゃんが言い聞かせる様に、ゆっくりと言葉を選ぶ。
だがユウヤにそれが理解出来て居るのだろうか？
彼に、それ程の精神的な余裕はあるのだろうか？
……こりや確実に面倒ごとが襲い掛かって来るぞ……

「乗りなれない機体である以上、それはやむを得ない事ではある。
だが、機体特性を理解していれば
例えば、急速後退では無く螺旋回を選ぶことも可能だった筈だ」

「……お言葉ですがね、中尉。米軍機であれば問題なく行えた挙動
ですよ」

ホラ、来た。

日本が嫌いなのは別に俺が関わる問題じゃ無いがね、頼むから面倒
ごとだけは増やさないで欲しい。

なら、此処で止めるか？いや、まだユウヤの言い分を聞き終わ
っちゃ居ない。

面倒ごとが増える云々は置いておくとして、少しでも機体を良い物
としたいと考えている今の状況で、例えばそれが皮肉だったとしても
それは重要な課題となる事も有り得る。

「吹雪は単なるF-15の改悪模造品……と言った性能ですね」

それにしてもユウヤの度胸には恐れ入るな。

俺だったら、絶対に唯依ちゃんの前でこんな無謀な発言をする度胸
も勇気も無い。

無謀なチャレンジャーになるつもりなんて、俺には最初から無い。

「我が国では吹雪は実戦配備されている。貴様の直面した状況より

も更に過酷な状況でも、帝国の衛士 達は十分な戦果を出しているが？」

「こんな機体で前線に？……酷い話だ」

ムッ！

カチーンと来るな、今の台詞。

確かに吹雪は米軍機に比べるとピーキーな所があるが、コイツと“寝た”俺には分かる。

吹雪は真正正銘の第三世代機だ。

轟負などせず、1人の衛士としてコレを乗りこなした俺が言うから間違いは無い。

逆に俺個人の意思としては、米軍機は作り込まれすぎているのだ。マニュアル通りに動くこうとする余り、操作性が優し過ぎる。

多少は暴れて貰わないと、機体を乗りこなしていると言う実感は全く湧かない。

それは実力を過小評価する事に繋がり、結果としては命を左右する問題にまで発展する。

「その帝国の衛士達は貴様の言う陽炎（F-15）も問題なく乗りこなしているが？」

ユウヤの顔色が変わる。

当然だ。

自分では操れない機体を平然と乗りこなす尚且つ、F-15も当たり前の様に搭乗しているなどと聞かされれば気持ちに焦りが出るのも無理は無い。

咄嗟に此方を見るユウヤに、俺は軽く頷く。

俺自身、陽炎と吹雪をそれなりに乗りこなすことは出来る。

前述の通り、あまり米軍機は肌に合わないが　それでも一定の戦果を出すことは可能だ。

「つまり、帝国軍衛士に比べて貴様の技量は劣っていると言つことだ。

ハッキリ言おう、貴様は　ッ！」

「ストップ」

思わず、唯依ちゃんの前に躍り出る。

コレ以上彼女に喋らせればユウヤはきつと激昂することになる。

そうなつてしまえば、部隊の動きにすら支障を来たすだろう。

こんな短時間で部隊が空中分解など　笑つて済む話じゃない。

それだけは、何があつても回避すべき事態の筈だ。

「中尉、感情に流され過ぎている。少し頭を冷やそう」

「し、しかしっ！！」

「全員解散しろ。サツサと身体を休めて、明日の訓練に供えてくれ。それからブリッジス少尉、今日はシミュレーターを使える様にしておく。

お前は明日の演習までには吹雪の動きに慣れておいてくれ。良いな？」

「ッ………了解」

渋々、と言つた具合に敬礼を返すユウヤ。

そんなユウヤの視界には入らない様に、唯依ちゃんは俺の身体の陰に隠している。
此处でまた下らない口論が起きれば頭痛の種が増える。
それだけは、勘弁願いたいのだ。いや、流石にこつも激務続きだと俺も疲れるからさ。

篁

ユークン基地屋上。

既に陽が傾きかけ、夕陽が2人を照らす。2人とは　私と剣崎少佐だ。

剣崎少佐は申し訳そうに頭を？き、私はそんな彼を不謹慎にも睨み付けていた。

「何故、止めたのですか？」

「ん？いや、だってさ……あのままじゃ喧嘩に　」

「ふざけないで下さい！！」

思わず、激昂する。

そんな理由である時、私を止めたと言うのか？

そんな理由である時、貴方は日本の命運を左右する作戦を貶した男を見逃すと言うのか？

そんな理由である時、貴方は　　ッ！！

きつとその時、私は何も考えていなかったのだろう。
怒りに我を忘れていたと言った方が正しいかも知れない。
誰よりも尊敬する彼がそんなふざけた理由で日本の命運すら左右する
のであるう作戦に支障を来たしたと言う事実。

「ッ……」

だから 私の手は、彼の頬を全力で叩いた。

口を切つたのだろう、唇の端を一筋の血が伝つて行く。

だが、そんな事すら考えられる余裕が無かった。怒りに我を忘れて、
ただ強く彼を睨む。

そんな私の視線を彼は動じる事無く、真っ向から受け止めていた。

「貴方はそうやって……ッ！」

国を、人の命を、人類の未来を何だと思っているの!?

貴方のそんな考えが、日本の人々をどれだけ苦しめていると思っ
ているの!?

そんな事すら考えないで、喧嘩をしそうだから止めたなんて……ふ
ざけないで!!」

「……」

「私は、この任務に誇りを持つて来ました!

きつと、X F J 計画が成功すれば人類は戦える筈だから……!!

人々の心に、希望を抱かせる事が出来る筈だから!

それを邪魔すると言つのなら、私は貴方でも許さない ッ!!」

ただ静かに私の怒声を聞いていた彼は、静かに目を開ける。

その瞳には本当に何も写っておらず、感情すら読み取ることが出来

なかった。

真っ暗で、深くで、恐ろしい程の冷たい目を見て私は初めて、彼が

「……………なあ中尉」

怒りの臨界点に達したことを知った。

「歯あ食い縛れ」

13 (後書き)

次回は「修羅場その2」

今週末には何とか次話を投稿したいと思っているので、チヨクチヨクと書いていききたいと思っています

感想を頂けると嬉しいです

14 (前書き)

物語を動かす為の潤滑油的な話

此処から先、オリジナルのストーリーが展開していきます

剣崎

ただ、呆然と目の前の少女を見やる。
それは、力を入れたら簡単に押し折れてしまいそうな程に弱々しい少女。

いや、普通の神経をしているのなら弱々しいなどと口にする筈が無い。

健康的で、引き締まった良い身体をしている。

特に腿の肉は良い。今にもバラバラに引き裂いて、じっくりと堪能したい程だ。

拳に、思わず力が入る。

殺してしまえば少女は今すぐにも俺の物に

「ッー！」

目に、恐怖に慄いて目を瞑る少女の顔が写る。

どうして？何が怖いのだろうか？ ああ、そうか……俺が殴ろう

としているからだ。

殴る？この子を、殴る？

どうして？ 理由など決まっている、彼女は”俺”の覚悟を……

ッー！

そう考えていると、身体から何故か力が抜けて行く。

暫くすると頭の中は一度冷静になり、自分を第三者の視線で見やる。

彼女に命の価値やら未来やらの説教を受け、頬を殴られた。

確かに、俺がふざけ過ぎていたのかも知れない。

彼女にそう思われて、殴られるのも必然だろう。

だったら何故、俺は今こんなにも怒っているのだろうか？

「……俺が、悪い」

それは、誰に対して紡がれた独白なのか。

篁唯依は今日と言う日で、初めて 剣崎龍二の裏側を見た唯一の人物になった。

いつも、笑顔と余裕で隠された裏側。

怒り、悲しみ、絶望、孤独、恐怖。そして

「俺が……悪いよなあ……」

子共の様に、瞳に僅かに滲む涙。

先程の怒りが、嘘の様に衰えていく。

自分は何故、こんなにも脆弱な彼を追い詰める様な事を言ったのだろうか？

何故、こんなに背負い込んでいる彼に追い討ちを掛けようとしているのだろうか？

ゴメン、と彼は言い残して去って行った。
その後姿は酷く不安定で、危なっかしくて、思わず手を伸ばすも空を切る。

静かにドアが閉まるまで、私はただ呆然とその姿を見ることしか出来なかった。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

藤代

「で、私の所に相談に来たと？」

目を真っ赤にしながら私の私室のドアをブチ壊すが如く唯依ちゃんが入って来た時は凄く驚いて、思わず手元にあったボールペンを突き刺してやろうかと思った程だ。

別に、F型の装甲を一新しようと思って作画をしていて、その紙に呑みかけのコーヒーが零れた腹癒せに突き刺そうと思った訳では無い。断じて、違う。

私の問いにも彼女は泣きじゃくるだけで一向に言葉を発しようとは

しない。

それもそうか。惚れた男にビンタした拳句、俺が悪かったとまで言わせるとは……

逆に、その根性に敬意を表しても良いレベルではないだろうか？

「……まっ、コレでも飲んで落ち着きなさい」

そう言つて、淹れたばかりのコーヒーをそつと差し出す。

湯気に隠れて表情が見えなくなったが、どうせ未だに涙を流していることだろう。

この子は如何にも経験が浅い為か、恋愛事はすぐに人に頼ろうとする。

それは仕方の無い事だが……如何せん、頬を赤らめられて話されようと煩わしいだけだ。

どうせ自分の中では答えを出しているクセに、それを人に後押しして貰おうとするのは悪いクセと言うか、甘えっぱなしと言うか……

「……す、すみません」

「良いわ、別に。今になって始まった事でも無いし」

申し訳なさそうに肩を竦めるのは其方の勝手だが、話があるのならサツサと話して欲しい。

私自身はどうでも良いが、貴女がそれで悩むと作業の効率が落ちる。それだけは避けて欲しい事態でもある。信頼して下さった巖谷中佐の顔にドロを塗る事に繋がるのだから、余計にそう思うのだ。

「剣崎少佐にあんな真似をして、今更どんな顔をして会えば良いのか分からない。

予想だけど、強ち間違いでも無いでしょうっ？」

「……ッ」

「だったら簡単よ。サッサと謝って、仲を取り繕いなさい。別に、彼だって貴女のことを嫌いなわけじゃ無いわ。」

ただ偶然が重なり合った結果として、彼は貴女に本当の自分を垣間見せる事を選んだ。

貴方はね、寧ろ彼にとっての”特別”なの。

そんな貴女が日々、彼に対する対応でビクビクすることも無いでしょう？

堂々と胸を張りなさい」

「し、しかし私は少佐にあんな……だから、きつと少佐は……ッ！」

「……本当にどうで良い相手なら、彼の”覚悟”を貶した時点でズタボロでしょうけど。」

まあ今は関係ないわね。

兎に角、今は自分の気持ちを彼に伝える事が重要じゃないかしら？
誠心誠意気持ちを込めて謝って、許して貰う以外の道は無いでしょうし」

それだけ言っと、私はまたデスクに向う。

あと少しでF型に新たなギミックを搭載することが可能かも知れないのだ。

彼女には悪いが、今は恋物語を聞いている暇は無い。

彼の命を預かる者として、最高で最良の品を作り上げる。

それが私の開発者としての誇りであり、生き甲斐なのだから。

一方、場所が変わり龍二はソ連領土に居た。
何故？そう思う者が沢山居る事だろう。

説明しよう、ユウヤがソ連軍の施設に入っていくところを目撃した龍二は、その行動が余りにも不審だったので思わず後を付いて行くことにしたのだ。

セキュリティは前を歩くユウヤと”誰か”がスラスラと解除してくれているので、あまり手古摺ること無くスラスラと進んで居たのだが

「何処だ、此処」

一瞬目を離れた際に視界から消えていたユウヤの姿。
あまりの事に声を上げそうになったが何とか堪え、辺りを見渡してみる。

……知らない場所だ。いや、当たり前だな。

ユーコン基地とはまた違ったソ連の施設の造りだ。

もしかしたら、何か秘密の通路に出るギミックでも仕掛けてあるのかも知れない。

そう思い、壁伝いに辺りを探って行くが 何もある筈が無い。
鼻歌を口ずさむ余裕こそ無いが、もう半ば諦めながら龍二は道なりに進む事に決めていた。

もう知らん、例えソ連の関係者に見付かろうが構いやしない。

寧ろ見つけて下さいと言わんばかりの勢いだ。
先ほどの唯依ちゃんとの遣り取りも相成って、彼は自暴自棄になりかけていた。

だからこそ、前方の曲がり角から現れた人影に反応する事も出来ず、

「うおっ!?!」

「っ!?!」

盛大に、それはもう盛大に衝突することとなるのだ。

そう言えばこんなシチュエーション、前にも体験した様な気が……
なんて思いながら、尻餅を付きそうになる相手を何とか支える。

「俺の不注意が招いた結果だ、許してくれ」

「い、いや、此方こそ……ん?」

”何か”を疑問に思った様に、倒れ掛けていた少女は俺の顔を見上げる。

そうだ、イーニアだ。イーニアを髣髴とさせるシチュエーションなのか。

それにこの子自身、何処と無くイーニアに通じる感じがする。

もしかしたら、イーニアの言っていたクリスカと言う保護者が

「君がクリ」

「剣崎龍二、貴様が何故此処に……ッ!?!」

額にピタリ、と当てられた冷たくて黒光りする例の物。

引き金を引くと弾が出て、人間の頭など一瞬で貫通するのであろう
ソレの名前は
拳銃、である。

俺に悟られる事無く、一瞬の内に彼女は俺の額に銃口を向けたのだ。
俺が一生懸命に支えていると言つのに、何と言つ事をしてくれるの
だろうか。

普通に怖い。

「流石に、銃は、怖いです」

「黙れ、貴様が何故此处に居る！答える！！」

人の話を聞いちゃくれねえ。

まあ確かに、許可も無しに此方側に入った事は許されざる行為だ。
つうか普通だったら銃殺されてオシマイって所なのに、彼女は俺を
生かしている。

これは逆に、ラッキーなのでは無いだろうか？
見つけ次第、即殺害よりも道徳的な思考である。

「ああいや、俺は……身内が此方側の領土に入って行く所を見掛け
てね。

もしも何かをしていると言つのなら、其方側に連絡を入れてからで
は遅過ぎる。

そう言うことを考慮して、単身で乗り込んだ訳だが……」

「私が易々と信じると思つか？」

「……で、ですよねえ」

トリガーを握る指に力が籠る。

こりゃ失敗した、どうやら自分が虚仮にされていると踏んだらしい。このタイプの子には慣れ始めていたと思ったが 成る程、俺もまだまだ学習不足だ。

「まあ何だ。取り敢えず、俺が身内を見失った場所に案内する。

その近くに人が隠れる様なスペースが無いかどうかだけ、確認してくれないか？

それから殺すか殺さないかを決めてくれると、有り難い訳だが……」

「……」

「信じられないのなら、手錠でも掛ければ良い。

最初から俺は疚しい事をするつもりは無い訳だが、そっちからすれば安心だろう？」

「……ふん」

かなり不服そうだったが、一応納得してくれたらしい。

俺の後ろに回り込むと、背中にゆっくりと固い何かの感触が広がっていく。

「不振な行動を取れば撃ち殺す」

「上等」

此方を睨み付ける少女と、それを見返す俺。

普通ならば下手に出るのだろうが、俺にはそんなこと関係ない。

例えどれだけ美しい女性だろうが、”リード”は絶対に譲らない。

それが 俺のルールだ。

クリスカ

銃口を向けられようと余裕を崩す事無く、剣崎は私を見返した。それは長い間BETAと戦って来たことから来る余裕なのか、それとも私をただの小娘だと甘く見ているのか……

恐らく、どちらでもないだろう。

この男は決して油断をする馬鹿ではない。

彼と相対したあの一瞬に感じた殺意は、並大抵の衛士が出せる様な物ではなかった。

そんな男が、自分の命を私の手に握られているこの状況……
表面上では余裕を保っているのだろうが、内面ではどれ程の怒りが煮え滾っているのだろうか。

イーニアが興味を持つ理由が、少しだけ分かる気がした。

決して誰にも何も悟らせようとせず、全ての感情は己の内面に抑え留める。

人ならば出てしまおうであろう表情の変化が、彼には全く見られない。それは完全な、ポーカーフェイスだ。

「……………」

「……」

そして、全てを拒む様な沈黙。

真つ直ぐに目線を通路の先へ向け、ただスタスタと歩いている。

時たまに此方を振り返り、歩調を合わせようとしている辺りからも威厳が伺える。

「ああ一つだけ、確認したいことがあった」

そんな彼は突然足を止めると、此方へ振り向いた。

思わず驚きが顔に出そうになったが、寸での所でそれを留める。

銃口は彼の背部から腹部へ。この至近距離で撃たれてしまえば、内臓の損傷は避けられない。

「質問を許可した覚えは無い」

「取り敢えず、俺も仕事があつてね。

とある怖い”魔女”からのお願いでお城に閉じ込められた”お姫様”を連れ出さなきゃいけない」

飄々と語るその仕草とは裏腹に、その瞳には僅かに感情が籠った。

まるで、壊れてしまいきり”何か”に触れる様な、そんな表情。

「それは貴様の都合だ」

「そうでもないらしい。強ち、君も関係が無い訳じゃない。

寧ろ君は関係者側の人間でね、少々強引な手段になるが魔女が裏で手を回している頃だろう」

そう言いながら、彼は困ったように首を竦める。
その仕草は、使い古された様に今の彼にフィットしていたのが記憶に刻まれている。

「その内、王子様が迎えに来るかも知れないな。
その時は白馬とお姫様を迎え入れる綺麗な力ボチャの馬車付きだろ
うね」

それだけ言い終えると、剣崎はスタスタと歩き始めてしまう。
僅かな時間だけ呆けてしまった自分に驚きつつも、私は彼の背中に
銃口を向けた。

剣崎

案外と、ユウヤはアツサリと見付かった。
ただ単に俺が見逃していただけなのだろう、そこにはユウヤともう
1人が何やら談笑しているようだ。
何だ、邪魔しちゃ悪い雰囲気か？
いやあでも一応、何故ソ連側の領土に入ったのかキチンと説明して
貰わなければならない。
煩わしいのは俺も一緒だ、文句は言わないで欲しい。

「動くな!!」

「ちよっ!!」

「ッ!？」

そんな俺の心情を察してくれたのだろうか、俺の後ろで銃を構えていた少女の銃口が今度は真っ直ぐにユウヤを捉えていた。

「待て、子供が居る!！」

ユウヤは子供を庇うように、此方を振り向かず胸の中に何かを抱き込む様な体勢を取った。

それを見て、流石に今の状況の危うさを今一度再認識する。

「銃を下ろしてくれ。身内を目の前で殺されて黙っていられるほど、俺は我慢強く無い」

黒く光る銃を握る彼女の腕を力強く握り、その銃口をユウヤには無く無理矢理俺へと向けさせる。

驚愕の表情を浮かべる少女を尻目に、俺はただ懇願する事しか出来ない。

「……頼む」

本当は撃たれたくなど無い。

痛いのは御免被るし、何よりも死ぬなんて絶対に嫌だ。

ただ、部下を預かる身として命を賭けて部下を護るのは当たり前的事だ。

死ぬのは嫌だが、部下は護る。

矛盾を抱えた内容だが、そんな矛盾も今じゃ当然の様に豪語出来るさ。

「　　”イーニア”、お願いだから部屋から出てちょうだい」

今度は此方が驚愕する番の様だ。

必死に懇願する様に、銀の少女は　　イーニアは彼女の銃へと手を掛ける。

「クリスカ、ダメ！ダメ！」

まるで縋る子犬の様に、クリスカと呼ばれた少女へと迫るイーニア。そして、俺はユウヤへと視線を向ける。

敵意が無いことを証明する為に、両手は既に頭の上へと置かれていた。

「ユウヤ」

「ッ?!その声、少佐か……ッ！」

「どうしてお前が此処に居る?ソ連の施設に何の用だ」

「俺は、その子供を此処へ連れて来ただけだ!そう言うアンタこそ、何で此処に　　ッ！」

「俺はお前を追って来た。すまん、疑って」

ユウヤは僅かに視線を此方へ向ける。

その顔には怒りは見えないが、多少なりとも諦めが浮かんでいた。まあ当たり前だろう、こんな場所で発見されたとあっては営倉入り

最悪は銃殺刑だ。

「まっ、2人仲良く営倉でも何処でもブチ込まれるとするか?」

「最高だな……アンタと最良の友好関係を築けそうだよ」

そりゃ素敵。

良いね、地獄の底まで付き合っぜ？

死ぬも生きるも2人一緒か。ローウェルも真っ青な浮気だな、ユウヤ。

俺とユウヤの2人は抵抗の意思が無いことを示しながら、クリスカの指示に黙って従う事にした。

まあその後は有無を言わずに2人別々に営倉へブチ込まれて取調べを待つことになった訳だ。

俺の方は何とか逃げ切れるかも知れんが……
無事で居てくれよ、ユウヤ。

お姫様を迎えに来る

「まったく、相変わらず人使いが荒い奴ね……」

それは白馬の王子様

「……ふうん、確かに面白い人材ね。”紅の姉妹”、か……」

カボチャの馬車を引き連れて

「手は尽くしてあげる」

いつか貴方を迎えに行くから

「まつ、優秀な駒も有効活用出来ないバカの下にあっちゃん惜しいわね。」

……それに、邪魔な奴も居るみたいだし」

待っていて、愛しい姫様

「オルタネイティヴ？を成功させる為に……踏ん張りなさいよ、龍
」」

いつか貴方を抱き締める日まで

14 (後書き)

戦闘描写が少ない……

何とかバトルを書きたいのですが、どうしても話がそこまで進まない

もう少し短くすれば良い！

……そんなに器用な文を書けない自分が憎い

感想や指摘など、待っています

15 (前書き)

不知火F型の改造プランを募集しています
何か良い案がある方は感想の方へドンドン書き込んでいただけると
嬉しいです

剣崎

営倉にブチ込まれている間、特にやる事も無いので呆然と天井を眺める事にした。

最初こそ、ベッドの隣にトイレがある事に激怒した。

寝相の悪いヤツがこんな所に足を突っ込んでしまったらどうするの
だろう？

誰の寝相が悪いか、だと？

まあ俺の知り合いの中には何人も居るが、それでも俺の寝相は特に
最悪だ。

酒の席で酔っ払い、そんな夢現な気分で自室に戻ったとは言え、気
が付いた時には廊下で熟睡していた時は、自分は夢遊病なのでは？
と自身の健康を本気で心配した。

だが、そんなことを考えていた自分についていバカらしくなっちま
う。

あと1歩間違えば殺されていたかも知れないこの状況で、ベッドの
隣にトイレがあるから云々と怒っている暇があるのだろうか？

ある訳がねえ、あるとすればそれは末期の薬物中毒者だろうさ。

俺は薬を使うことも無いし、薬に頼らなきゃいけないような身体で
も無い。

実にクリーンで清々しい肉体である。

……そんなこと、今は関係ねえか。

「……クリスカに、イーニアか……」

口からは自然と彼女達の名前が出ていた。

夕呼の傍に居た、ウサ耳カチューシャの……何て子だったかな？

俺の推測だが、クリスカとイーニアは彼女に何らかの関係を持っていると踏んでいる。

俺も過去に1度、ウサ耳カチューシャの少女の顔なんて本当に僅かな時間しか見た程度なので上手く言い表せないが、それでも印象深いので脳裏に焼き付いている。

自分の存在理由を探している様な目は　ガキが出来るものじゃない。

あの2人だって、そんな目を持っていたからこそ記憶に焼き付いているのだ。

彼女達が紅の姉妹だと言う事実も、

彼女達が特別な”何か”を持っていると言う事実も、

特に興味は無い。

俺にとって一番興味があるのは

彼女達の本当の笑顔以外、何も無い。

「出る」

つと、どうやら俺をお呼びらしい。

物騒な物を抱えた兵士が1、2、3、4……オイオイ、何人でお出

迎えだ？

こんなビップ待遇で何処に連れて行かれることやら。
つたく、人気者は辛いねえ。

ゆっくりと開かれる扉。

重厚な音と共に、俺は無理矢理立たされた。

1人で立てるなんて馬鹿なことを言つつもりは無い。今は黙って従うとしますか。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

疑う、と言うことはどういったタイミングで行われるのだろう？
やはりと言うか、各々が浮かべるシチュエーションが存在すると思
う。

それはまさに十人十色。個性がある人間だからこそ、少なからず差
異が出るのだと思う。

そんな俺はと言うと、今だ。

今程、人の精神と言う物を疑ったことは無いと思う。

純白のテーブルに広げられた豪勢な食事。

テーブルの中央には、氷で冷やされた庶民には到底手の届きそうも

無い高そうなワインが数本、入れてある。

そして俺とは反対側に座る男　イエージ・サンダーク。

イーグル試験小隊を指揮する、ソ連軍の中尉である。

「はじめまして、リュウジ・ケンザキ少佐」

その胡散臭い微笑みの中に、ある種の汚らしさが見える。

このクソ野郎……頭の中身割り開いて、脳みその隅々まで調べてやるるか？

まっ、実際にそんな事をすれば俺の身が危ないけどさ。

「どうぞお座り下さい。これは全て、貴方の為に用意させましたので」

「……この様な席を用意頂き誠に有難う御座います」

「いえいえ。貴方の様な”天才衛士”がわざわざ、此方側へお越し頂いたのです。

この程度の持て成しは当然でしょう」

「私は其方から見ればスパイ容疑が掛けられるではありませんか？
確かに、私も急を要していました。ですが国境を越えたと言う事実
は覆しようが無い。

本来ならば　銃殺では？」

「貴方を銃殺？面白い冗談だ」

お互い、腹の探り合いが続く。

まるで狸同士での化かし合いだ。

言葉の裏に見え隠れする本当の意味を探る為に、1つ1つの言葉に細心の注意を払う。

隙があればそこを重点的に攻め、少しでも多くの情報を得ようとする。

姑息な真似だが、実に効率的な情報収集だ。

「私の”何か”を知っている様な喋り方ですね。

実に面白い、是非とも問い質してみたい所です。私の”何を”知っているのか、を」

「今までに上げた戦績。特に、”城落とし”と言われた偉業……

確か要塞級を含める200体程度のBETAを1人で蹂躪したと聞きますが？」

「噂でしょう。風に乗れば、自然と色は付きます」

「流石は名の轟く衛士だ。」ご謙遜をなさる」

「噂ですよ、サンダーク中尉。ソレに対して何かを追求しようにも、証拠が無い」

「ワインはお飲みになられますか？」

「あまり飲みませんが……折角なので頂きましょう」

突如として机上の戦いは終わりを迎えた。

それはサンダーク中尉がこれ以上の詮索を無駄だと感じたのだろうか？

それとも既に、情報は十分に集まっているのだろうか？

恐らくだが、後者だろう。

この男は何だか良く分らんが、かなり危ない臭いがする。

成る程、彼が紅の姉妹を此方側に回す為に立ち塞がる最大の壁になるだろうな。

俺を此処に呼んだ理由も、一応は釘を刺して置く為か。
紅の姉妹に手を出すな、とでも言いたいのかねえ。

「もしも、このワインに毒が入っていたとしたら。

貴方の存在を疎ましく思うソ連側の兵士が、貴方を殺害する為に毒を盛っていたら？

貴方はそれでもこのワインを飲もうと思えますか？」

サンダーク中尉は、此方を見て薄気味の悪い笑みを浮かべている。
クソツ、気味が悪い……本当にコイツ、人間か！？

「その時は、」

まあ 此処で退いてやる義理は無い。

グラスに注がれた真っ赤なワインを口元に寄せ、それを一気に煽る。
ワインの持つ独特の味が口の中に広がり、それはやがては静かに霧散していく。

「 例え死のうが、毒を盛った奴だけは殺す。それだけです」

空になったグラスに力を込め、一瞬で粉々にする。

受け取れ、このクソ野郎。

コレが俺からテメエに送る、最大で最高の挑戦状だ。

血だらけの拳を握り、俺はサンダークに負けまいと冷たく微笑んで見せた。

ソレから暫くした後、俺は五体満足で解放された。

ユーコン基地へ向う途中、俺を連行して居たソ連の兵士達に聞いた話だったが、既にユウヤは釈放されているそうだ。どうやら、俺の方が遅れる結果となっただらしい。

良かった、心の底からそう思える。

アイツは気難しい一面を持っているが、根は良い奴だ。こんな所で無駄死にして欲しくは無い。

親切にもソ連の兵士は俺をユーコン基地の近くまで送ってくれるそうなので、お言葉に甘えてジープに乗り込むことにした。どうせコイツが何かをやらかそうとしても、先程からのコイツの拳動で確信したことだが、この程度の腕前では俺は殺せないだろう。

安心して、今は休むことにしよう。

今日1日を振り返り、あまりの目まぐるしさに眩暈すら覚える。いかん、このままじゃ過労で倒れる……そうなりや唯依ちゃんに

意識が掻き消える寸前、

やっぱりと言うか何と言うか……不思議と名前が出て来たのは、唯依ちゃんだった。

まるで嵐の如く忙しかった昨日の夜。
それが過ぎ去れば、後に残るのは静かで穏やかな

《クツ……ソオオオオツ！》

演習地獄の日々である。

モニターから漏れるユウヤの悪態を聞きながら、俺はと言うと本日何度目かになる溜息を吐いた。

昨日の今日でまさか、ハイブ内攻略のシミュレーター訓練に駆り出されるとは……

いや、ユウヤの口から「アンタに俺の機動を見て欲しい」と言われた時は素直になったユウヤの態度に少しばかり嬉しさが込み上げたが、いざ実施するとなるとこれまた

《ッ、危っいな……！》

あまりの数に、ハイブ内の地面を埋め尽くす事となったBETA達。その上に不知火のスタンプを食らわせながら、俺はユウヤが無事に着地出来る様に必死の援護を続けていた。ユウヤの到着を今か今かと待ち焦がれる群れに向けて、4門の銃口が同時に火を噴き、綺麗に吹き飛ばす。

その穴を埋める為にゾロゾロと集まって来るが、集まり切る前にユウヤは無事に着地。

直ぐに飛ぶ。

そんな作業を続けながら、必死にハイブ内を疾走していた。

俺は特に問題は無いのだが、やはりユウヤと吹雪は危なっかしい。先程から、俺がフォローを入れなければ叩き落されていた様な場面が何度もあった。

少しずつだが、ユウヤも確実に日本の戦術機に慣れ始めている。今はまだまだ甘ったるい機動を見せているが、あと少し扱いてやればコイツは化ける。

ユウヤは斯衛に負けず劣らずの良い腕を持っているのだ。復帰能力は天才的だし、機動も良い。

格闘の腕は未熟だが、射撃の方は米軍特有の射撃方法で魅せてくれる。

性格こそ少々粗暴さが見えるが、それでも協調性が全く無い訳じゃ無い。

今だってそうだ。

吹雪と共に、俺に付いて来ようと後ろから必死で追って来ている。それに、最初にユウヤに言っておいた”敵を相手にする必要は無い”と言う言い付けもキツチリと守っている。そのお蔭でユウヤの弾倉は潤っていることだろう。

しかし、俺は少しばかり条件が違う。

こんなバカらしい数を相手にするつもりは無いが……ユウヤの足場を確保する為には、最低限奴等を殺して進まなければならぬ。

だが、それでは弾薬がバカ食いする。もう既に先程交換した弾倉が最後の1つであり、未だに俺とユウヤは中層にすら辿り着けていない。

いや、普通に考えれば2機で中層にすら行ける筈は無いが……

それよりも今は、あまりの弾薬の消費に弾倉が　　ッ！！

《弾切れかよ……クソッ！》

無駄な努力で健康状態を損なうよりも、今は丁寧に一歩を進んでいく方が得策だろうさ。

まあユウヤも言うことを聞いてくれるからさ、最初に比べりゃやり易い。

その内、俺とユウヤ、アルゴスのメンバーでハイブ攻略も有意義かも知れないな。

結果はどうなるか分からないが、中々に有意義な訓練になるだろう。

おっと。いつの間にか、俺が興奮しちまったみたいだな。

休憩と言うことで俺とユウヤ、そして合流したヴィンセントの三人組は取り敢えず、少し遅くなった昼食を摂る事にした。

ヴィンセントが開口一番の「腹減った」発言には笑わせて貰ったぜ。「お前は子供か……」ってユウヤの突っ込みも的確で実にツボに綺麗に入った。

いやあ〜 確かに腹減ったな。

PXでも行つて、ゆっくり飯でも食つか。

「TYPE - 97の操縦には慣れたか、ユウヤ？」

「1日2日で慣れりゃ苦勞しねえよ……」

「初日に比べりゃ動きは大分良くなったさ。流石はエースだな」

「ホントか？」

「おう。お前の動きを隣で見て来たのは俺だぜ？俺の目利きを信じるよ」

「何だあゝ、浮気かよ？」

PX 男3人での食事と言うのも色気が無く、寂しいものがある。だが、ステラとタリサ、それに荷物持ちのヴァレリオは買出しに出掛けているようだし、今日はユウヤとヴィンセント、それと俺の男だけで寂しく飯を突くとしますかね。

先程からシミュレーターで胃の中を掻き乱されているのであろう。ユウヤは軽めの食事であるサンドウィッチを口に運んでいる。

対するヴィンセントも腹が減ったと言っていた割には少なめで、ユウヤのサンドウィッチとは別のハンバーガーを口に運んでいた。因みに俺はハニートースト。

何故か？いや、そりゃ糖分の力を借りようと思ったただけだ。

「まあ折角だ、愚痴でも聞いてやるぜ？」

ユウヤはどうせ、唯依ちゃんに対するウンザリする位の愚痴があるだろ？」

「どうでも良いぜ、あんな日本人形。

それよりもさっきのハイブ内の戦闘だ……アンタ、凄いな。的確な援護だったぜ」

「オレもモニターから見させて貰いましたけど、凄い技術ですよ。

ユウヤが着地するのであろうポイントだけを的確に狙って攻撃するなんて、そうそう簡単には出来ませんって」

「戦闘に対する慣れと、地形の把握が追い付いていただけだ。偶然だよ、偶然」

愚痴でも聞いてやろうかと思っていたが、いつの間にか話の内容は先程のハイブ攻略へと移って行く。ユウヤは俺の話す内容に耳を傾け、ヴィンセントも興味津々と言った具合だ。

「ハイブ内であんな数の敵と真正面からやり合うには弾が少な過ぎる。」

その為には、地形の理解と仲間との連携が重要だろう？

そう言う意味では俺はユウヤのクセが少しずつ分かって来たし、サポートもし易い。

ユウヤの性格から言うと、格闘戦よりも射撃戦を軸に置くからな。俺は確実に、ユウヤに近づく敵だけを片付けてやればいいって寸法だ」

「ユウヤが前に出て、少佐が援護するか……責任重大だな、ユウヤ」

「……上等だ。次こそは必ず中層まで辿り着いてやる」

ユウヤのヤル気は鰻上りで上がって行く。

こりゃ、午後も結構ハードな演習になりそうだなあ……

まあ望んだ結果がコレだ。

文句は無いし、ユウヤが1人前になるまでは面倒を見てやるとするか……まるで子守担当の父親だな、これじゃ。

「昼食終了と同時に5分は休憩。休憩と同時にハイブ攻略を再スタ

「トするぜ」

「任せろ」

「それじゃ、俺はお2人さんの機動でも見させて貰いますかねえ」

やる事は決まった訳だ。

だったら、あとは行動あるのみ。

XFJ計画の補佐として、全力でユウヤ・ブリッジスを一人前に鍛え上げてやる。

15 (後書き)

改造プラン募集中です

感想の方も頂けると幸いです、宜しくお願いします

16 〈前編〉 (前書き)

アイディア募集中です
宜しく願います

剣崎

パラパラと昔のアルバムを捲る音だけが、静かな部屋に響いていた。少し古臭くなつた写真に写るのは、沢山の人々の笑顔。

皆が、それぞれの場所へと赴いていく。

ある者は海へ。

海上から人々を護る盾となり、犠牲となる事を選んだ。

ある者は陸へ。

無数の敵を倒す剣となり、人を守る為に自らを散って行った。

ある者は空へ。

大空を取り戻すべく飛び立つ鳥となり、空の欠片となった。

俺だって、その1人。

若い頃から無鉄砲をやりつ放しだ。

今だってそうじゃないか。

ユウヤや唯依ちゃんに比べれば若くは無いのにな前線に立ち、堂々と戦線に参加している。

仕方ないだろう？

それしか、俺は生き方を知らない。

BETAと宜しくやったのはそれなりに昔の事だが、この任務が終われば従来と同じ様に腸プチ撒ける為に戦場に立ち、ゴミの様に必死に戦場で這いずり回る道具の1つになる。

それが怖いと思った事は無いし、それが待ち遠しいと思うほど頭のネジが狂っている訳じゃない。俺は俺に出来る最善を尽くす、それだけのことだ。

ただ、死に方は1つだけと決めている。

国の為に、そんなカッコいいことを言うつもりは全く無い。

“答え”に到達するまでに時間は掛かったが、今では堂々と言ってやれる死に様だ。

俺が地獄に堕ちる時はきつと、何もかも置き去りにして、限界を突破した先にある。

空気を切り裂きながら進む機体の装甲は剥がれ、腕は吹き飛び、足は消し飛び、頭は消失し、そしてその先に俺を迎え入れるのは爆発と言つ終焉。

それが、俺が望む終わり。

それが、今まで人々の命を見捨ててきた俺への戒め。

誰かの隣で死ぬなんて夢物語……俺に許される訳がねえ。

ハイブ攻略のシミュレーション。

俺とユウヤは前回と同じく、中層に到着する為に必死になっていた。

ただし、前回とは違って俺は一切ユウヤを援護しない。

それはイツ自身が望んだ事だ。

何よりも俺自身がシミュレーターとは言え、ユウヤに”ハイブの中”と言う物を実感して欲しいと思ったこともある。これから先、きつとその知識が必要になる時が来る。

今では無いかも知れないが、知っておいて損は無い筈だ。

それとは別に、管制として千枝に付いて貰っている。

的確な指示があれば、多少なりともユウヤに余裕を与えられる筈だと言つ余計な配慮だ。

まあ認めたくない事だが、千枝の管制は優秀だ。

的確な指示と此方が求める情報を丁寧に、迅速に届けてくれるのは有り難いことである。

既に俺はユウヤより先行しており、BETAを無視しながらハイブ内を飛び回っている。

眼下で這いずり回る兵士級から要撃級。

それは、本来ならば絶望的なまでの色合い。

ただし今回は、敵を相手にする必要が無いハイブだ。

最終的には反抗炉を壊してしまえば此方側の勝ちだし、バカみたいに戦闘を行って命の遣り取りをする必要は無い。たまたに壁に張り付

いている数匹を叩き落すだけで事足りる。

『CPからアルゴス01及びジャツカル01へ。
坑道内にBETA群出現、距離270。接触まで 30秒、カウ
ントダウン入ります』

送られて来たマーカーを確認し、出現すると予測される位置と現在位置を照らし合わせる。

コウヤよりも先行している分、此方が接敵する可能性が高いだろう。眼下を駆け回る群れだけでは飽き足らず、更に増援まで送り付けるとは……

数が多いからこそ出来る戦法だ。成る程ね、確かにこりゃ絶望的だ。

《少し足止めする。アルゴス01はその間に死ぬ気で潜れ》

《アルゴス01了解！》

その返事を聞くや否や、俺と不知火は坑道へ進行方向を変更する。目の前まで迫っていた要撃級に突撃砲で牽制射撃を行い、薄い壁とは言え何とか後ろへ流れる数を少しでも減らそうと奮起する。

後方から此方へ迫って来る吹雪と、それを追う形となるBETAの群れ。

怖い。そりゃ怖い。

前門と後門に居るのは虎でも狼でもねえ、化物だ！

耳に届く跳躍ユニットのエンジン音。

それが近付くにつれて、少しずつ大きくなって行く地を踏み締める様に響く轟音。

敵の大群はかなり此方に近付いている様だ、このまま行くと一瞬の内にミンチだろう。

『アルゴス01ポイントを通過。
ジャツカル01は直ちに戦闘を中断、アルゴス01の援護へ向って下さい。危険です』

つと、早いな……流石はユウヤだ。

この数日間でグングンと力を付けて来ただけはある。無駄じゃねえな、その努力。

《ジャツカル01了解。戦闘行動を中断し、直ちにアルゴス01の尻を追うよ》

4門の突撃砲での密度が濃い弾幕合戦は終わりだ。

俺はサツサと機体を反転させ、坑道から本道へと進路を戻す。

その際に天井から落ちて来た戦車級に捕まったが、機体をロールさせる事で振り落とした。

壁に当たり、ミンチになるその様は見ていて気分の良い物じゃない。もしかすれば、次は自分がああなるかも知れないのだから。

あとは問題が無ければ真っ直ぐ進むだけだが……まあそんな事は有り得ないか。

次の敵からの援軍はユウヤ1人に任せる事になる。

今のアイツでは落とされる事は明白な事実。かなり荷が重い戦闘になるだろう。

前回よりも幾分もマシになったとは言え、2機でのハイブ内攻略は流石に辛い。

例えば、ユウヤに与えられた機体がF-15Eなどなら話はまた違って来るのかも知れないが実際彼に与えられている機体は吹雪だ。

慣れない機体に乗らされれば、そりゃ効率も大幅に落ちることだろ

う。

『ッ、アルゴス01！前方に大規模のBETA群……気をつけて！』

《クソッ、こんな場所で……ッ！》

俺の考えた”悪いこと”は良く当たるな。正直、溜息しか出て来ない。

まあ何れは、俺とユウヤのツートップでハイブを1つ潰す。

それが未来の目標だな。まあそうなるまで、お互いに生きていられるかの問題だが……

《ユウヤ、気合入れる？》

《早く来いっつうの……！》

その内、コイツも俺みたいな軽口を叩きながら戦える様な衛士になるのだろうか？

いやぁコイツに限ってはそんな事は有り得ないか。

無駄に真面目だからな、精々皮肉の1つや2つ程度のことと済むだろう。

ユウヤ

「ふう……」

叩き付ける様にベンチに背を預け、オレは息を吐く。
隣には静かに少佐が座っており、その手に持ったミネラルウォーターをオレに手渡した。

「どうも」

一応、礼を言っただけを一言に煽る。

喉から胃に向って冷たい液体が真っ直ぐに駆け抜け、身体の緊張が少しだけ解れた。

目を閉じ、背中をベンチに預けてリラックスするオレを他所に少佐は少佐でミネラルウォーターをチョコビチョコビと飲んでいる。一気に煽る程、疲れている訳でも無いのだろう。

こんな所で年季の差を思い知らされる。

「……辛いなあ」

「はあ？」

「いやあくたつた2人だけのハイブ攻略ってさ、疲れるだろう？」

俺も得意な強襲前衛じゃなくて、2人だけって事で弾数を考慮して強襲掃討だしさあ。

やっぱり欲しいよな、もう何人かくらいさ」

「……最低条件は強襲掃討仕様で戦ってくれる奴、か……」

何だよ、結局は条件に当て嵌まりそうな奴ってアイツ等以外いねえじゃねえか」

「まっ、都合も良いだろ？」

そう言いながら、少佐はニヤリと笑う。
最初からアイツ等とも演習をするつもりだったクセに……今更、何
つう態度だよ。

「勝手にしてくれ。オレはフブキを上手く制御する、それだけだ」

実際、まだオレはフブキに慣れちゃいない。

未だにそのスペックを全開まで引き出す事には至れて居ないのだ、
練習機程度の。

それが、悔しい。

だから少佐にまで頭を下げて、細部に至るまで細かく説明を受けて
いるのだ。

「じゃあ、勝手にするぜ。さうと、次は楽しい演習になりそうだ
な」

鼻歌混じりに、少佐はサッサとその場を去って行った。機嫌はかな
り良さそうだ。

まあ次回からは今まで我慢し続けていた本来のポジションで盛大に
暴れまわれることも多少なりとも起因しているのだろうな。

「……ガキかよ」

思わず口から零れるのは少佐に対する率直な意見。

少佐の隣で戦って始めて分かった事がある。それは、アイツの性格
だ。

純粹なクセに冷酷で、冷酷な一面を見せたと思えば御人好しでもあ
り……

正直、良く分からない。

まるで子供の様にコロコロと変わる性格をした、何処が変わった佐官。

それに日本人の筈が日本という国を意識させないのは アイツの特徴なのだろうか？

本当に、良く分からない奴だ。

剣崎

直進、一時停止、直進、一時停止、直進、一時停止。

身体が不調を告げている。

やはり連続で3時間もの訓練は辛い。

歩を進める為に足を動かすが、一歩一歩が重く感じてしまうのは仕方が無い事だろう。

直進、一時停止、直進、一時停止、直進、一時停止。

何歩か歩む度に足を止め、疲れを少しでも和らげる為に休ませる。

精神はいつまでもヤングなつもりだが、若い奴等と比べると体の方は如何しようもない。

まあゆっくり休めば特に問題は無い。

今は休んで、明日の訓練にでも供えることにしよう。

直進、一時停止、直進、一時停止、直進　割り込み。

前方の通路を歩いていたら千枝は此方に気付くと、軽く敬礼をする。それに苦笑とも取れる笑顔で返すと、千枝は俺と歩を並べた。相変わらず両手には大量の資料。コイツァ、凄えぜ……何冊あるのか気になる所だ。

「今日はお疲れ様です」

「何だ……千枝か」

「何だ、とは随分な挨拶ですね。私も今日は3時間も管制に付き合わされて疲れました」

「まあ良いじゃねえか。」

「XFJ計画にはユウヤの腕が必要だしさ。部隊全体の技量を引き上げる結果になると考えれば悪い話じゃないだろう?」

「……それに付き合う貴方も如何かと思えます。もう若くは無いの」

「若い奴等に比べりゃ体力は無いな。まあ技量でカバーするさ」

両手にある大量の資料の使い道を聞くと、F型の改修作業も第一フェイズは終了したらしいので、今は第二フェイズに移行する為のデータ収集をしているそうだ。

何だ、第一フェイズと第二フェイズって?

特に何も聞いてねえが……もしかして更にF型を改修する作業か? より本格的な高機動戦闘機にするつもりなのかも知れない。そりゃ

凄いな、素直に感心だ。

「……………XFJ計画ですが」

「ん？」

「ブリッジス少尉の提案で予定カリキュラムを早め、実戦機動試験を行うそうです。

その際も篁中尉と衝突していたそうですが……………失礼しました、関係はありませんね」

「……………あのバカ共が」

本日何度目になる溜息だろうか。

と言うか、ユウヤとの訓練を始めてから何度溜息を吐いたことだろう。

数え切れん。ああ、数え切れん。

所詮はコレもその内の1つだが内容が濃い分、溜息も長く、深く、大きかった。

「そろそろ、バカにはお灸を据えるのも良いかも知れんな」

「……………それは乱闘の意思あり、と汲み取っても？」

千枝が探る様に此方を見詰める。

まあ勘の良いコイツの事だ、どうせ俺が何をしたいのか程度は直ぐに分かるだろう。

それよりも今はバカにお灸を据える為の方法だ。

やっぱり試験に乱入、乱闘、殲滅の作業が一番分かり易いか？

「実戦機動試験までにはF型を完璧に」

「いつでも出撃可能です、BOSS」

あまりの即答に、俺が驚いて千枝を見やる。

彼女は当然だと言わんばかりに、不適な笑みを携えていた。

いや、もう、流石。此処まで来ると関心を通り越して尊敬の念すら抱かせるレベルだ。

「ハッ、流石は俺の相棒だ」

イブラヒム中尉にでも相談しておくか……

あの人が実戦機動試験のオペレーターを任される事になるだろうか
らな。

しかし、どうやって伝える？

【我に乱闘の意思あり】

頭の中に浮かんだのは、そんな一文。いや確かに簡潔だ、短文だ。

……だが何だ、この脅迫文の様な文章は。やり直しいっ！！

特に何も、考え付きませんでした。

その後、千枝と別れた後に1人で必死に考えた結果がコレだ。

何の為の「集中したいから1人にしてくれ」だ、恥かしいじゃねえ

か！

「ハア〜……」

相手は階級こそ下だが、年齢では向こうが上だ。

上官としての威厳を保ちながら、年上に対する敬意も忘れない一文を考える。

それは、何と難しい事だろうか。

この際だから先程考えた【我に乱闘の意思あり】で通してしまおうか……？

「ダメですよねえ」

自重を忘れた壊れ掛けの人形のように、ケラケラ笑う。

如何考えてもダメだ。軍隊を舐め切っているとしか思えない、礼節の欠片も無い駄文だ。

笑っていると、何だか自分が情けなく思えてくる。

此処まで必死にやって来たが、まさかこんな事で躓くとは……

「君達はこんな情けない俺をどう思うのかな？」

視線は向けず、ただ後方にある気配だけに意識を向ける。

動いた気配は2つ。

1つは此方へそつと近付こうとしていたが、俺が声を掛けると少々落胆したようだ。

もう1つは此方へ注意を払っていたが、俺の声を聞くや否や身体が強張るのが分かる。

感じたことのある気配は　前者がイーニア、後者がクリス力だろ
う。

「こんばんは、リュウジ」

「こんばんは、イーニア。相変わらず君は可愛いね」

柔らかな笑顔を見せるイーニアは、俺の隣に静かに腰を下ろす。手に持っているのは 熊の人形とウサギの人形？オイオイ、こんな物騒な場所に随分とファンシーな物を持って来るな。

「リュウジのだから、たいせつ」

「……そりゃ嬉しいね」

人の心を読み取る様に、イーニアは俺の考えに対する答えを口に出している

勘が良いと言う訳では無いだろう、ただの偶然として処理するつもりは今の所は無い。

「イーニア、早く帰らないと……」

「もうすこし、リュウジとおはなしする」

「でも……」

それに対して明らかにクリスカは狼狽していた。

イーニアに対して、強く出られない理由でもあるのか。

イーニアが心の底から大切に、自分の下から離れて欲しくないとでも思っているのか。

そのどちらか、だろうな。

「イーニア、此処は西側の領域だ。こっちにイーニア達が居るのは良くないことだ。」

俺も困るし、イーニアとクリスカも困ってしまう。だから今日は帰った方が良い」

「リュウジとクリスカ、こまるの？」

「ごめんね、イーニア」

「だからイーニア、帰り道で話をしよう」

「リュウジ、こまらない？」

「うん」

「クリスカも、こまらない？」

「ええ」

「じゃあ、そうする！」

笑顔を見せて喜ぶイーニアを見て、俺は思わず視線をクリスカに向ける。

彼女は、何とも言えない表情で俺を見詰めていた。

ふと視線が重なり、彼女は慌てた様に視線をイーニアに向ける

……もしかして俺のこと嫌い？

そんな如何でも良いことを考えながら、イーニアと手を繋ぎながら帰り道を歩く。

右側に俺。真ん中にイーニア。左側にクリスカ。
まるで、それは仲の良い親子のよう。

「イーニアは冒険家だなあ。こんな所まで散歩に来たのか？」

「うん！でもね、ミーシャもいつしよだから怖くないよ」

「困った時はクリスカが助けてくれるからな」

「え？」

「クリスカは、やさしい！」

「綺麗だしな」

「ッ、茶化すな！」

夜の月が影を生み、その優しげな影絵は 万人の為の地と言う紙
へと映し出されていた。

今だけは良いだろう。

こんな、こんな夢の様な時間を楽しんでも……

神様だって、怒りはしないだろう。

16 〈前編〉 (後書き)

次回は

『激突、武御雷VS不知火・式型VS不知火F型装甲』
をお送りする予定です

16 〈中編〉 (前書き)

この速度での投稿に自分がビックリ
前書きに書く内容すら思いつかない……

どうしよう

剣崎

誰にでも無く、いつか人は思う。

私は世界にとっては何十億と居る内の1人であり、決してオンリー1では無い。

アフリカ、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア。

様々な人種が、様々な定義を持ち、様々な生き方を展開していく。

だが、それはオンリーでは無い。

全てのルーツとなるべく存在がある筈なのだ。

私はオンリーになりたい。

俺はオンリーになりたい。

僕はオンリーになりたい。

世界を前にして、言い張りたい。

全ての人々と前にして言い張りたい。

私は1人だけです。

俺は1人だけです。

僕は1人だけです。

「……………くだらねえ」

待ち時間の間、暇なので少々ロマンチックな本でも読もうと思いつき、手にとって見た。

が、成る程ね。慣れないことなどするなと言う教訓にはなつた。

胸がムカムカする。何がオンリーだ、バカ野郎、くだらねえ。

そんなにオンリーになりたきゃ、周りの奴等を見てから鏡をみる。テメエの顔と俺の顔、皮膚の色、髪の毛の数、肉付き、性根は何もかも違うだろう。

何を悩む必要があるのか、俺には理解出来ない。

この世界に生まれた時点で人はオンリーであり、同時にロンリーでもあるのだ。

人との差異を感じ、劣等感を抱き、孤独に耐えながら生きて行く。

そんな人間が全て同じ？バカバカしい、金返せよ作者。

「ああ〜 苛々する。つたく、くつたらねえ宗教の方がマシだったな」

薄い冊子だったとは言え、無駄な時間を浪費させられたと考えると腹立たしい。

つうか誰だ、あんな冊子をベンチに置き忘れやがった野郎は？

くたばれ、お蔭様で気分は最高にローテンションだ。

今から、派手な戦いが楽しめるって矢先にそれかよ……………

ああ〜俺の悪運を呪うぜ、チクショウ！

折角だ、歌でも歌うか……………そうだな、歌う歌は俺も度肝を抜かれた例の歌にするか。

「Mama & Papa were Laying in bed」

機嫌を少し修正しながら、俺はご機嫌で格納庫へ向う。

途中で驚愕した様な表情で俺を見て来た何人かの視線など気にしない。

何の歌か、だつて？

ハッハア！お子様には千年早いさ、帰ってママに愛して貰えー！

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

簞

瞼を閉じれば、いつだってあの時の記憶が蘇る。

あの時 龍二さんと、始めてあった時のことだ。それはもう随分と前のこと……

訓練兵の時代にまで遡ることになる。

その時から相変わらず私の性格は変わらず、他者にも己にも厳しい

頑固者だった。

故に、部隊の仲間と打ち解けることも出来ずにただ訓練に身を投じる日々。

退屈だったとは思わない。

有意義だったとも言えない。

私は延々と、訓練と言う”作業”を繰り返しているだけだった。

武家として、衛士達の先頭に立つ者として、自分が出来得る精一杯をして来たつもりだ。

《ッ!?!》

上に跳ぼうものなら狙い撃ちにされ、地に足を付けていれば物量と言う壁に押し潰される。

初めての实战　他の者は死の8分を乗り越える為に他者を必要とする。

だが、私には頼るべき他者の存在が無かった。

何万と言う数の壁に、たった1人で何が出来ると言うのだろうか？

死と言う明確な現実を突き付けられて初めて人は、本当の恐怖を知るので。

《フッ……フッ……フッ》

声など出ない。自分が今まで、どんな風に息を吸っていたのかも分からなくなる。

今、自分は何故か知らないが生きている。

機体にベツタリと染み付いたドロリとした血液が、機体を侵食していく。

間接部各所は既に悲鳴を挙げており、無理な着地をした所為もあつてか右足は半ば程から引き千切れていた。

小さな奇跡を起こせても、神は私を見捨てた。

もう、ダメだ。もう、死ぬ。

倒れ込んだ撃震に押し掛かり、外側から戦車級が圧力を掛けてくる。聞こえて来るガリガリという何かを削るような音。

私は食い殺されるのだらう、あの憎き化け物共に。実に腹立たしい最後だ……

ならばせめて、一矢報いてやらなければ ツ！

心が死のうとも、本能は負けを認めた訳では無い。

計器もいかれ始めていたのは最悪な展開だが、まだ奴等を殺す手段は残っている。

ユニット内に設置されていたハンドガンを手に取り、静かに入り口へと向ける。

いつでも 来い。

1匹でも多く撃ち殺してやる！

例え私が此処で朽ち果てようが、お前達を1匹でも多く道連れにしてやる ツ！

来るべき時を待ち、ひたすら待つ。

るか、 の ！！

こえるか、撃 の 士！！

聞こえるか、撃震の衛士！！

え？

どう、して……だって、此処の近くには先ほどまで誰も居なくて……
そ、それに私は平凡な衛士だ。

それを助ける為に、こんな所に来たと言うのか！？

そんなバカな……！

ユニツトを抉じ開ける、危ねえからな！！

壁一枚挟んだ向こう側から聞こえる暖かな人の声に、安心を覚えて
思わず口を塞ぐ。

涙が、止まらない。

先程までの恐怖を押さえ込んでいた興奮が収まり、一気に恐怖が襲
い掛かって来た。

足が震える。

視界が霞む。

「良く頑張ったな、偉いぞ」

抉じ開けられた世界に、青い空が顔を見せる。

そんな青い空と私の間に、1人の男性が此方へ手を差し伸べていた。
震える手で、何とかその手を握る。

私の震えはきつと、相手の衛士にも伝わっていたのだろう。彼は何
度も私を安心させるように、「大丈夫だ」と言い聞かせながら私の
頭を撫でていた。

「死なせないさ、絶対に俺が守ってやる」

あの後すぐに彼は私を基地へ連れ帰り、また戦場へと戻っていった。
その時の私の命を救ってくれた恩人 剣崎龍二と言う男を、忘れ
る筈が無い。

それから数週間程してからの事だと思う。

私は少尉となり、剣崎大尉は各地で呼び出しを食らって数々の戦場に赴いているらしい。

そんな風評を耳に挟んで暫くした頃の事である

「本日から技術廠で預かることになった剣崎龍二大尉だ。

ご存知だとは思いますが、彼は帝国に多大な戦果をもたらす貴重な人材だ。丁重に扱え」

彼は、巖谷叔父様が受け持つ技術廠に入局する事となった。

何故？

そう問われれば、私には分からない。ただ叔父様の話では 厄介払いらしい。

彼は日本という国が為に刃を振るうのでは無く、己が信念の為に刃を振るう。

そんな彼を妬ましく思った上の者が、彼を此処へ飛ばしたのだそうだ。

「本日付で帝国技術廠に所属する事になりました、剣崎龍二です。

皆さんと共に、新しい機動兵器を作る事を誇りに思います。あの世でも自慢出来ますよ」

拍手と共に、彼の周りに人だかりが出来る。

それもそうだ。

剣崎龍二と言えば、帝国内でもその名を知らぬ者は居ないと豪語せしめる程の猛者なのだ。

更には彼のバツクには殿下が控えている、などと噂が絶えない。日本が誇る偉大な戦士……そして、私はそんな彼が偶然に救った救助者の中の1人。

「凄えよな、帝国随一のエリートだ」

「ああ、英才教育を受けて育った天才衛士だって聞くぜ？」

「へえ〜 あの年で凄えなア」

本人には聞こえない様に、ヒソヒソと話す者達の声が聞こえる。その声の中にもやはり尊敬の念が込められていて、立場の違いを改めて痛感した。

「お前等、サツサと仕事に戻れ！いつまでも休憩時間じゃないぞ！」

叔父様の一括が響くまで、人だかりは騒ぎ続け 私は、途方に暮れてしまった。

それからどれだけした頃だろう。

彼は、私と共に食事を取っていた。

巖谷叔父様が、私のことを彼に話したらしい。

特に同情する訳でも無く、彼は黙って私と共に食事を取っていた。

緊張する。

場の空気が、いつもとは違う感じられた。

「あの時の撃震の衛士、だよな」

「え、あ、はいっ!？」

「いや……君ってさ、あの時の撃震の衛士でしょう?」

「覚えて……いるのですか……?」

「戦場で会った衛士のことは忘れない。無駄に記憶力が良くてね」

「……本当に、ありがとうございました。大尉に助けていただかなければ、私は」

「偶然だよ。偶然、俺はあそこに居た。それで、偶然に君を助ける事が出来た。」

「たったそれだけの事だ、わざわざ礼を言われる筋合いは無い」

「ですが……」

「なら、貸し1つ」

大尉はズイッと私の前に人差し指を突き出した。そして、笑顔で言ったのだ。

”いつか、俺の背中を君に任せる。その時に俺を助けてくれれば、それで良い”

その言葉を受けて、私は必死に訓練に勤しんだ。必死に努力を続け、死に物狂いで訓練に明け暮れる日々。

白き牙中隊に入隊し、数々の戦場に赴いた。

そんな事を数年ばかり続けていたある日、彼は唐突に私にこう告げた。

人に用意された才は数に限りがある。

全知全能なんて存在しない、そんなのは幻だ。

そんな奴が居るのなら、今頃俺達はこんなに悔しい思いをしていない筈だろう？

喉けた俺が言うのも何だが、焦るなよ。

お前は確実に成長するし、何れは俺の最愛のパートナーになれる存在だろう？

まずは自分の全てを知ることから始めるべきだ。

結局、話は全てそれからだからな。

その言葉の真意は、未だに分からない。

ただもっと強くなろう、そう誓ったのは覚えている。

私は、もっと強くなってみせる。

いつか彼の背中に届くように、いつかその背中を預けられる様に私は、もっと強くなりたい。

そう強く思いながら、私は仮面を被った。

強固な壁を作り、ただ生真面目な軍人として生きて行くことを誓った。

そうしなければ、とてもじゃないが彼の様にはなれない。

彼はきつと、こんな風になってしまった私を怒るだろう。

そんな人だから。優しくて、無邪気で、ちょっとだけ冷たくて、強くて

「中尉、武御雷の用意が出来ました」

「……すまん」

「いえ、コレが我々の役目ですので」

少々、昔のことを思い出していた自分がそこには居た。

いつまでも理想を追い求め、そして破れていった自分が確かに、そこに存在して居た。

私は彼を拒絶した。

コレはもう、覆しようの無い事実。

好きなのに。言っちゃえば？ そんな事、言える筈が無い……ッ！

龍二、さん……ッ！お願い、気付いて……こんな私の思いに、気付いて……ッ！！

それでも尚、少女の願いは届く事無く 2人は

剣崎

機体が空気を切り裂く音が、耳に届く。

網膜に投影される景色が一瞬で吹き飛んで行く感覚は、いつ味わっても気分が良いものだ。

最高速度までは達していないとは言え、空を飛んでいると言う感覚が俺を満たす。

そつだ、コレだ　良いぞ、もつと来い。まだまだ足りない、もつとだ！

もつと早くなるだろう、まだまだお前は飛べるだろう、もつと来い……もつと、もつと！

跳躍ユニット内のエンジンが高速で回転し、機体を更に上の高みへと押し上げる。

700……750……800……850……900……ッ！

確かに俺は、今までに感じたことの無い高揚感を覚えていた。

最高だ、最高だぞ、クソ野郎！！

ああ最高だ、最高だとも！！

何だ、この感覚！頭まで一気に駆け抜ける様な電流と痛みの嵐！まるで台風だ！！

ハハッ、身体中が軋みを上げてやがる！助けて、止めてってさあ！止められる訳がねえだろ！？

もう俺のスイッチは完全に入った、それを押さえ込もうなんて誰に出来る？

出来る筈がねえ、させねえ、やらせねえ。

もう俺を止める奴は誰も居ない。

だったら 最高のフライトを楽しむだけだ！！

アドレナリンが沸騰する。

グツグツと、脳内で、身体が、満たされて 熱い。

まるで熱砂の地獄だ。喉の渇きに飢えているのに、飢えを満たす術が見当たらない。

探そう 獲物オアシスを。

その日、その場所で、今から何が行われるのか。

もしかしたら、その時の俺は何処かで悟っていたのかも知れない。

“ただ”終わる筈が無い。

必ず何かある。

まあそんな事を思っていようが居まいが、今の俺には関係の無い話だ。

首輪を付けられていた犬から首輪が外れたとしたら、どうなる？

決まっている、最高にハイになって自由に外を駆け回るのさ。

怖いご主人様が帰って来るまでの束の間の自由を必死に噛み締める。

まさに、今の俺がそれだ。

紅の姉妹との戦闘すら行えず、ただ訓練・雑務・訓練・雑務・訓練

俺は風を感じていたい。

俺は命のぶつけ合いをしたい。

俺は 首輪付きになんて、なりたくない。

『アルゴス試験小隊の演習場に　　これは、所属不明機？……まさか……ッ！』

何だよ、千枝。

俺の最高のフライトを邪魔するつもりか？

良いだろ、別に少しくらい。

アイツ等とは軽く踊る程度だ、今更ギヤーギヤー喚く程じゃ無いだろウシワ。

『　武御雷を確認！数1！どうして、こんな所にアレが……ッ！』

《あ？》

武御雷？

オイオイ、何だよ……最高の獲物オアシスじゃねえか。

最高の性能、最高の名誉、最高の技術力、そして

《縛られた狗の為の、特別機か……ッ！！》

それは、最高級の首輪だ。

従属と言う名の屈辱を与えられ、意思など踏み躪られ、空を飛ぶことを禁じられる。

ふざけている、ふざけている、ふざけている、ふざけている、ふざけている……！

アレは敵だ、アレは敵なのだ。

倒すべき敵であり、俺に仇なす敵であり、害であり、屑であり、存在して良い筈が無い。

《 何も、変わらない。見敵必殺、それだけだ》

嬉々として、壊してやるよ……！

鉄の仮面を被る少女、既に狂い始めた獣、未だ力が開花しない戦士。
何と素敵な戦いだろう。

少女は戦士と戦う事を望み、
獣は少女を打ち倒す事を望み、
戦士は未だ己に降り掛かる運命を知らぬ。

アラスカにて、
今世紀最大の戦いがヒッソリとゴングを鳴らそうとしていた。

16 〈中編〉 (後書き)

と、とりあえず感想、F型の改造案お待ちしております

16 〈後編〉 (前書き)

後編

短いですが、すみませんorz

案外淡泊な内容になってしまった事に後悔が……
何れ、時間を見つけて少しずつ書き足していきたいです

儂くて、弱々しくて、貧弱で、脆弱で、もう愛しくて堪らない。

壊れ物のクセに必死になっている様を見ると、抱き締めて、愛して、身体の随まで砕きたくなる。

バラバラなんて生易しいだろう？五体満足なんて有り得ない。

脊髄まで引つ張り出して、ホルマリンに漬けて薄く輝くガラスケースの中で幸せを感じさせてやりたい。

クルクルクル

ネジが回る

クルクルクル

意識が消える

クルクルクル

理性が崩壊する

最高だ。

最高傑作の喜劇だ。

頭から何もかも消し飛んで、理性の壁をぶち壊して、本能だけで行動する獣になる。

腕に込める力。

鋭くなる眼光。

集中する意識。

そんな俺は差し詰め、ドラキュラか？狼男か？フランケンシュタインか？

違う、違うさ。

俺はそんな格好の良い奴等には程遠い未完成のクソガキだろう？

俺は純粹無垢なガキで、

世の悪すら知らないバカで、

どうしようもない屑で、

人の愛し方すら知らない

愚かな野獣なのだから。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

ユウヤ

『訓練区域内に侵入？……ッ！！』

あまりの事に、思考が追い付かない。

突如としてウィンドウの向こうが騒がしくなったかと思うと、随伴機との通信画面を残して全てのデータリンクが遮断された。

先程まではステラがウィンドウの向こうで此方のCPを担当して居たのだ、それが突如として姿を消してしまった。

それだけでは無い、戦域内に戦術機らしき光源が接近している。

数は1……いや、その更に後方にもう1機。

前方を疾走する機体よりも更に早い、この速度はまるで

(……少佐の、F型……？)

ユウヤは考える。

この基地に、あの高速戦闘に特化されたモンスターマシンを越える機体があるのだろうか。

答えは 否。

もしかすれば、機体はあるのかも知れない。

だが、あの速度の機体を制御出来る衛士は居ないだろう。

少佐が特例中の特例なだけであり、実際にあんな化け物が何人も居ればそれこそBETA相手に遅れを取るなど無い筈だ。

ならば、アレは少佐のF型？

《前の機体は知らねえどさ、後ろの機体は”少佐”だ》

網膜にタリサの顔がアップになる。

その顔には前方に居る正体不明機に対する不信感と言う物を抱いておらず、多少の余裕が見え隠れしていた。

ユウヤ自身、その気持ちは分からない事でもない。

演習場に接近する正体不明機と同時に出現した少佐の登場。

不明機には悪いがアルゴス《オレ達》だけでは無く、少佐まで相手にして生き残る確立は限り無く0に近いだろう。

いや、寧ろ0だ。断言しても良い。

《01、不明機体に対する行動は少佐の指示を仰ごうぜ？》

《……》

それでも何だ、この胸を抉る様な不快感。

ヴァレリオの返答に対してすら反応が遅れてしまう程の違和感が、

身体を静かに蝕む。

《……アルゴス01より各機。不測の事態に備え、警戒態勢》

《え？あ、ああ分かったよ》

《……03、了解したぜ》

取り越し苦労なら、別にそれで良い。

寧ろ、そうであつて欲しいとオレは切に願っている。だが、もしもの話だが

“少佐がオレ達の援護など、最初からするつもりは無かつたら？”
寧ろ少佐の登場とは援護とは逆であり、”オレ達を殲滅することに
あつたら？”

不明機と共に”偶然”に現れた少佐のF型と思われる機体。

その登場はあまりにも出来過ぎていて、オレにはそれが如何にも引
つ掛かる。

それを怪しむからこそその警戒態勢。

不明機が此方へ向かつてきて居るのだ、警戒して置くことも別に不
思議では無いだろう。

そして、オレ達の元へと先に到着したのは前方を突き進んでいた不
明機。

数百メートル程先にある小さな湖面に着水し、大きな水飛沫を上げ
る。

《オイオイ、随分と派手な機体だな……デモンストレーターか？》

《何処の試作機だよ、アレ》

山吹色の不明機。

何処か、日本の鎧武者を連想させる芸術品の様なその機体。そいつは静かに、だが威圧感を含めてユウヤ達アルゴス小隊を睨み付ける。

《 アルゴス01、そっちのライブラリにデータがある》

《データ？》

機体識別データを映し出し、そこから件の機体のデータを洗い出す。直ぐ様に目の前の機体と適合したデータを見つけ出すと、ユウヤはそれに目を通し始めた。

《タケ、ミカツチ……？》

山吹色の機体が、光を反射する。

跳ね上げられた水飛沫がまるで雨の様に、鉄の身体にポツリポツリと当たっていた。

《配備先

インベリアルロイヤルガード
帝国、斯衛軍……ッ！？》

武者鎧 武御雷はゆっくりと、その刃の切っ先をユウヤ達へと向ける。

帝国斯衛軍と言う事は、あの機体に乗っているのは……唯依以外には考えられない。

いや、もしかしたら少佐が……違う、あの人は斯衛軍と言う物を毛嫌いしていた。

やはり、少佐じゃない。

《ヤル気かよ、上等だ　　ッ！！》

誰よりも素早く動いたのはタリサだった。

随伴機と言う退屈な任務の為に満足にACTVの速度を生かせない。そんなジレンマを残したままミツシヨンを終わらせようとして居た矢先、現れたのが彼女なのだ。開発衛士を貶した許せない相手自分から戦場にやって来たと言うこの状況、彼女にとっては願ったり叶ったりだ。

彼女にとっては最も有り得ない筈の”妨害”さえ無ければ、だが。

今まさに武御雷へとナイフを突き刺さんと動こうとしていたACTVの頭部を鷲掴みにし、速度を殺さぬまま地面へと頭部を叩き付ける。

凄まじい音と共にACTVの行動はキャンセルされ、土煙の中からゆっくりと影が現れる。

それは、少佐のF型。

黒の基本色とアイカメラの赤。

それは、興奮状態に入った野性の獅子の様な恐ろしさを存分に秘めていた。

沈黙するO2を細身のF型が軽々と投げ飛ばし、此方へ視線を投げ掛ける事無く武御雷へと凄みを利かせている。

即ち、最初からオレ達など眼中には無かったと言う事だろうか？

《少佐、アンタ……ッ！！》

オレの怒りの籠った声になど反応する事無く、F型は武御雷へと向かい疾走する。

兵装担架から長刀を一本取り出すと振り被り、一気に振り下ろす。相手を殺す事に躊躇いすら感じない、純粹な殺意を持った太刀筋は武御雷に触れること無く、長刀の柄部分で受け止められていた。それでも尚、F型は攻勢を止めようとはしない。寧ろ、受け止められる度に一撃の速度が早くなり、より鋭くなつていく。

斯衛に配布された武御雷と不知火では性能差がある筈だ。

だが、それすら感じさせないのは衛士の腕に拠る所なのか……

それとも、

才おオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!

通信すら開かれていない筈なのに聞こえて来る、この獣の様な雄叫び故なのか。

《ッ、やってやるさ……!!》

《アルゴス1!?!やめろ、お前じゃ無理だ!!》

もしもこの2機の戦闘が終われば、アルゴスはその勝者と戦う事になるだろう。

ならば この混戦で、何とか此方側に勝利を抱き込む以外に道は無い。

《何のつもりだ、ユウヤ!!》

突如として開かれる回線から聞こえる少佐の声。

それは既に、模擬戦を共に戦った優男とは程遠い……力強く、荒々しい獅子の怒声。

《貴様……ッ》

それとは別に、刺々しい程の冷たい言葉を突き刺す中尉の声。
鋭い操縦を見せる鎧武者を操る衛士らしい、深層にすら届きそうな
刃の様な声。

《来いよ、相手になるぜ》

この場にて漸く、ユウヤ・ブリッジスも1人の戦士として成長する
事が出来た。

些か成長の場としては皮肉だが、それでも彼の成長は喜ぶべきこと
だろう。

コレが、”真つ当な演習”であれば。

ほぼ同時に、

武御雷が、

不知火・弐型が、

不知火F型装甲が、

それぞれの首を刈り取る為に己が持てる全てを振り絞り、爆ぜた。

弐型に武御雷の必殺の一撃が迫る。

ユウヤはその一撃を何とか鏢迫り合いに持ち込むが、F型も傍観するだけでは無い。
拮抗している力場である鏢迫り合いをしている長刀同士を弾き飛ばし、勢いを殺さずに弍型を敬遠するかの様に湖面近くまで吹き飛ばす。

《ったく、危なっかしいな……！》

吹き飛ばされた先には既にヴァレリオが回り込んでおり、致命的な隙を曝す前に何とかACTVが弍型を受け止める。網膜にはヤレヤレと言った具合に首を竦めるヴァレリオが写っていた。この様子では、どうやらタリサは無事のように……

《ッ……今度は2機で行くぜ》

《おうー！》

またもや武御雷とF型の2機だけでのオンステージを広げていたが、武御雷の前にユウヤが、
F型の前にヴァレリオが、
それぞれ乱入する事によってそのステージを妨害する。

《……ッ！》

だが、お互いにその程度で戦闘の手を緩める事等無い。
敵同士の筈の2人の動きが、一時とは言えアルゴスの2人を絶望の淵まで叩き落していた。

武御雷の一撃を受け止めるユウヤは、辛うじて後方で戦うヴァレリオの姿を確認する。

アチラは、正直此方よりも絶望的だろう。
武器が無い事も大きなウェイトを占めているが、何よりも少佐の腕が良い。

それが迂闊に攻撃すら出来ずに苦戦する理由の大半を占める事になる。

《クソツ!!》

《 往くぞ!! 》

対して此方も絶望的だ。

武御雷が振り下ろした刃を刃で受け止めるが、それを受け止めただけで機体の間接部に絶大な負荷が掛かる。一撃で、中破寸前まで追い込まれるのだ。

《チクツ、シヨオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!》

!!!!!!》

ならば残された道など、特攻以外に何がある。

偶然に全てを賭ける、それはある意味で 悪くない。

今までに味合った事の無い、機体と共に風を切るこの感覚。

ああ、確かに……少佐が速度狂いになる理由も今なら、少しだけ理解出来る。

《食らええええええええええええええええええええええつ!!!!!!》

金属と金属がぶつかり合う様な音が響き渡り、弧を描きながら長刀が地面へと突き刺さる。

それ即ち、長刀を手放した者の負けを意味する事。
そして長刀を手放した機体は

《 …… 貴様の負けだ、” ユウヤ・ブリッジス” 》

ただ静かに、山吹色の機体は己の腕に握られている長刀とゆっくりと相手へと向ける。

刃は少しばかり欠けているが、未だに刀としての能力は失ってなど居ない。

《 ツ …… 》

半ばから折れた刃を見詰め、ユウヤは己の敗因を必死に探す。
何故、オレはコイツに負けたのだらう。

そう考えてみると、やはりと言うか何と言うか……

近接戦闘のことをもう少し、少佐に教わっておいても良かったのかも知れない。

負けた、と言う現実よりも今はただ、少しでも強くなったのかも知れない己の手応えに、僅かな希望と、僅かな期待感を見つけることが出来た。

今回の模擬戦……もしかすれば、それだけでオレにとっては意味があつたのかも知れない。

《終わったか……》

どうやら、向こうの騒ぎは終わった様だ。

ユウヤ参戦の辺りから既に闘争心と言う物が削がれていたの、最早俺がわざわざヴァレリオと戦う必要は無い。此処で手を引いても良いが

《動きが悪くなっただぜ、少佐!》

《まずは攻め落としてから言え、又ケサク》

未だに俺とヴァレリオの戦闘は続いていた。

俺は長刀を抜くこと無く、ヴァレリオとの追いかけてつことを続けている。

ヴァレリオは俺の隙を伺い、隙を見つけ次第特攻チャージでも仕掛けてくるつもりなのだろう。

つたく……F型の速度を生かすべき、か。

そろそろ俺自身も 飽きて来た。

《ッ!?!》

フットペダルとブレーキペダルをほぼ同時に踏み込み、噴射飛行を地面が抉れる様なブレーキでキャンセル。まるで独楽の様に一回転しながら、強烈な蹴りを叩き込む。

何々と言う衝撃が加えられたACTVの両足は簡単に地面へと膝を付き、一瞬で勝負の決着が付く。

如何せん味気無いが、俺が今回狙った敵はヴァレリオでは無いのだ。

《ッ、クソ……！》

《本来の予定とは違う大幅なミスが出たか……まあ良しさ、良い経
験になっただろう？》

《日本の衛士はデンジャラスだって教訓かよ！》

《……まあ、そんな所か》

許せよ、ヴァレリオ。

後で酒の一杯でも奢ってやる。

16 〔後編〕（後書き）

次回、”仲直り”

ご期待下さい！……なんちゃって

17 (前書き)

遅れてしまって申し訳ありません
リアルが少々忙しくなって来まして、
投稿の速度が落ちてしまいか
も知れませんが

剣崎

格納庫に到着後、直ぐにF型をハンガーに納める。
気分は最悪。精神面に至っては既に限界と言う名の最終防衛線突破している事だろう。

ドカツと乱暴に長椅子に座り込み、足を組みながら呆然とF型を見詰める。

……暴れ足り無い。

こんな考えこそ不謹慎だが、仕方ないだろう。

折角新しい武装や微チューンを行っているのだ、飛び回りたいと思うのは自然なこと。

目の前には広大な陸と雄大な空があるのに、首輪1つあるだけで何も出来やしない。

「横浜基地、か……」

何と無く、口に出してしまつ。

このままユーコン基地に演習と有るかも分からない実践の為に身を置くよりも、横浜基地へ行き、前線に出て戦っていた方が”俺個人”としてはやり易いかも知れない。

部下に気を使う事も無く、ただBETAを殺していれば良いのだ。
楽だろう、凄く。
だが……

「まだダメだな」

ユウヤが、タリサが、ステラが、ヴァレリオが、見捨てるには惜しい人材なのだ。

如何にかしてユウヤを1人前に叩き上げ、式型が完成するまでは踏ん張るしかあるまい。

千枝は機体の整備と改造案、唯依ちゃんは計画の首尾を決めてくれるだろうからさ。

俺は”操縦技術担当”として此処で頑張ろう、そうしよう。

「お疲れ様です、少佐」

労いだろう、千枝が此方へと向って来ていた。

手に持つトレイには軽食と飲み物。一応、疲れていると思って居るのかも知れない。

「お疲れって程に暴れちゃいねえ……殆ど、武御雷の独壇場だよ」

「それでは”彼女”に一本取られましたね」

「……いや、別に対抗意識を燃やす訳じゃねえ」

「でも、武御雷は嫌いでしょう?」

クスクスと笑いながら、長椅子にトレイを置いて千枝は去って行く。彼女には彼女にしか出来ない仕事があるのだろう、そう言う風に考

えると長年連れ添ってきた藤代千枝の才能に、何処か嫉妬しそうだ。ただ命令され戦い、ただ渡された機体に乗る、そんな無様で滑稽な人生を送る俺よりも幾分も有意義なことだろう。

「……飼いだな、コレじゃ」

自分のバカバカしい境遇に思わず笑いすら込み上げて来た。

此処まで滑稽だと涙など誘わず、純粹な笑いしか生み出してはくれそうにない。

もう止めだ、こんな思考。

トレイに乗せてあった軽食に手を伸ばし、今はただ無心で食べ続けることにしよう。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

食事を取り終わり、空になったトレイをPXへ返した後にボーっと基地内を歩く。

やらなければならぬ事も無いが、やる事も全く無い。

即ち俺は今現在、暇なのである。

訓練をしようにも先程殴りあったユウヤ達の下へ行くつもりは無く、

今さつき分かれた千枝の後を付いていく訳にもいかず、

まさに八方塞。

取り敢えずは空になったトレイを片付けてから考えようと今はユルユルとPXに向って暢気に歩を進めていたのはつい先程。今現在はそんな目的すら消え失せてしまった。

ああ……こんな時は何をすべきだろうか？

過去のログを確認する？

それとも基地内に居る衛士のデータ収集？

紅の姉妹の後ろに付いている”何か”に探りの手を入れる？

否、どれもコレもが全て否。

実際に頭の中でどんな事を考え、行動を起こそうと思考し、その為に筋肉に指令を伝達しようにも、結局は俺の思考とは無関係に足はある場所で”止まって”しまうのだから。

「……………」

屋上へと続く階段。

唯依ちゃんに強烈な一撃を貰ってからは一度も立ち寄っては居ない場所でもある。

「煙草、吸うか」

何と無く口元が寂しく感じる今日この頃。

過去に起きた出来事を気にする事も無く、あっさりと俺の足は屋上へと歩を進めていた。

屋上へと続くドアからは既に夕陽の明かりが漏れており、その眩し

さに思わず目を顰める。

直にその光にも目が慣れ始め、ゆっくりとドアノブに手を掛けた。ガチャリ、と。

暖かく迎え入れてくれる様に、ドアは俺を夕陽が満ちる屋上へと招待してくれる。

視線の先にはゆっくりと雲に沈んで行く太陽。

普段ならば紫外線やら熱やら送って来る太陽であっても、この沈み行く最後の時はどうしても儂さを醸し出してしまうものなだろう。

ポケットから煙草を取り出し、火をつける。

紫煙はゆっくりと空へ昇り、やがては視認すら出来ない様な色になって霧散していく。

そんな煙の後をただ呆然と眺めながら、近頃の目まぐるしい日常の事を少しばかり思い出してみると何ともまあ、自分のハチャメチャな生き方に頭を抱えなくなるものだ。

「……いつまで二十歳気分だよ、俺は」

まあ何とも情けない自分の姿を思い浮かべ、呆れた様な笑い声が響く。

それから暫く自分を笑い続け、何と無くだが屋上と空を区切る様に張られているフェンスに背を預け、呆然と空を眺める事にした。

別に、何か考えがあつた訳じゃ無い。ただ時間が欲しかったのかもしれない。

色々な事が起きているこのアラスカ。

俺は一体どんな立場で居れば良いのか。

どんな役割を演じていれば良いのか。

今までは、そんな事を考えられるような時間は与えられていなかったのだから。

「…………ふう〜」

1本目の煙草。

既に短くなつたソレの火を掌で揉み消し、新しい煙草に火をつける。半ば落ち掛けた陽の光を背に、俺は新たな自分探してもしてみようかなあ等と少しばかり何か外れた様な考えを頭の中に過ぎらせる。

「…………はあ〜」

ゆつくりと陽が沈んで行く。

ああそう言えば

「…………唯依ちゃんに思いつきり引つ叩かれたのもこんな夕陽だったなあ」

そんな事をぼんやり考えている際、ガチャリ。ドアが開く音がする。それは俺を迎え入れてくれたドアの音に似ていて、何処か弱々しく響いていた。

影に埋もれていた誰かの姿が、夕陽に当てられて次第に明るみにされていく。

綺麗な髪だな、なんて柄にも無く思ってしまったのは何故だろうか？
そう言う事を考えるタイプの人間だったのだろうか、俺は。

「…………ツ?!」

「…………」

まあ何にしる　そこにはお互いの顔を見た瞬間に表情を変化させる2人。

篁唯依と俺が居た訳だ。

篁

何気無く、本当に何気無く私はそこへ足を運ばせていた。

弑型の実戦機動試験。

私の介入もイレギュラーの筈だろう。

だが、今回の出来事を企てた私ですら知り得なかった突如としての乱入。

私の駆る武御雷の前に現れ、疾風の如き勢いで攻撃を加えて来た”彼”。

あまりの事に、思考が追いつかぬまま戦ってしまった。

まだ謝ってすら居ない。

だから、戦闘中だと言つのに私の声帯はあの人に声を送ろうとする。

だが、無理だった。

あまりにも攻め手に無駄が無さ過ぎる。

相手を完全に叩き潰そうとする殺意すら籠った斬撃の前に、私は声すら発せられない。

あまりの変わり様に、頭の中が真っ白になっていたのだ。

そんな彼の姿を見て、私は彼の何を1つ理解していないことを

知る。

だから、あの場所で少しでも1人になれば。そう思い、足を運んでいたのだろう。

「……………」

「……………あ、あの……………」

屋上にて1人、煙草を吸っていた彼は私が現れた事で少しだけ表情を乱す。

怒りにも見えず、焦りにも見えず、ただ本当に驚いているだけのようだった。

「 …… こんばんは」

それでも尚、表情を笑顔へと変えて私へと言葉を掛けてくれる。その優しさが嬉しくて、痛くて、悲しくて…………

「う、うっ……………ひっぐ……………！」

「え！？ちよ、おまつ！！！」

たった一言の言葉で、私の涙腺は完全に崩壊した。

まるで止まる事を知らないダムの様に、涙が溢れ出して来る。

何事かと此方へ急いで駆け寄って下さった少佐に思わずがみ付き、涙で制服が濡れてしまう事すら考えずに、私は只管に”ごめんなさい”と繰り返していた。

それを聞きながら、最初こそ焦っていた少佐。

それでも暫くすれば私の両肩を抱き寄せ、我が子をあやす様に優し

く頭を撫でる。

何気無い事なのであろうそんな仕草にすら、今の私は涙を流す事
しか答える事が出来なかった。

剣崎

女の最終兵器は”涙”である。

何と無くだがその理由が分かる気がする。

確かに、目の前でこんな風に涙を流されてしまうと慰めないといけ
ない、と無駄に責任を感じてしまう。それが純粋な彼女の心からの
涙だとすれば、尚更の事ではないだろうか？

今現在、胸の中で泣きじゃくる唯依ちゃんを抱き寄せている最中。
俺はそんな事を考えていた。

堅実な軍人を演じていた彼女にとっては涙を見せると言う事すら論
外なのだろう。

だったら、今は思う存分泣いて貰わなければ困ってしまうではない
か。

何事も溜め込んでしまえば毒になる。

少しは吐き出しておかないと、後々身体……この場合は精神に不調
を来たすかも知れん。

「よしよし」

何度も何度も、泣きじゃくる唯依ちゃんの頭を優しく撫でる。唯依ちゃんの年相応とは言い辛いその泣き方に、何処か安心している自分が居た。

心の底までガチガチに固められている訳では無い。未だに成熟しない子供らしい部分も持ち合わせている事に、実の妹を見ている様なそんな感情が芽生えてくる。

それは果たして、彼女に向けての”本心”なのか。それとも今は亡き妹へ向けられた”贖罪”なのか。俺自身、未だにその部分が不鮮明だった。

「思いつきり泣いて良いよ、唯依ちゃん」

「ひっぐ……っぐっ……！」

「誰も文句は言わないし、言わせない。君の頑張りは俺が知っているから」

「っ……っうっっ！」

「よしよし」

それでも今は、彼女に向けられた俺の”本心”であると信じたい。例えどんな感情だったとしても、彼女は俺に涙を見せることを許してくれたのだ。それはきつと凄い事で、それはきつと嬉しいことで、不謹慎ではあるけど彼女との強固な繋がりを何処と無く認識出来てしまっ出来事でもある。

「　　ありゃ？」

その内、胸の中に確りとしがみ付いていた手から少しずつ力が抜けていくのを感じた。

何かあったのかと反射的に彼女の顔を覗き込んでみる。

そして、思わずと言った具合に俺は笑ってしまったのだった。

「……泣き疲れて眠るなんて、子供みたいだな」

これじゃまるで眠り姫じゃないか。

彼女の安らかな寝顔を間近に見て、俺の胸の内は案外とサツパリしていた。

だってそうだろう？

こんな綺麗な寝顔を見せられちゃ、いつまでも喧嘩したままで居られないさ。

眠ってしまった唯依ちゃんを抱かかえ、取り敢えず千枝の部屋に向う事にした。

唯依ちゃんの私室とも考えたが、部屋を開ける鍵が無い。

俺の部屋は……女の子を入れるにしちゃ、汚過ぎる。

そこで妥当な案として浮き上がったのが藤代千枝の私室へ唯依ちゃんを運ぶ事である。

同じ女性、同じ階級、年は千枝が2つ程年上。

うむ、良いお姉様役をこなしてくれる事だろう、そうだろう。

道中は細心の注意を払いながら進み、前方に誰かが見える度に唯依

ちゃんを隠す事に必死になっていた自分が居た。いや、何ともバカらしい行為である。

「うおーい、千枝」

と、言う訳でやっとの思いで付いた千枝の私室前。

現在背中で俺の苦勞も知らずに眠るのは我等が眠り姫、篁唯依である。

『…………少佐ですか？…………珍しい事もあるものですね』

「いや、まあ、その、だな…………頼みごとだ」

『頼みごと？…………少々お待ち下さい、直ぐにロックを解除します』

いぶかしむ様に此方を見詰めた千枝ではあったが、一応部屋に入れてくれるらしい。

そんな所が彼女の良い所だなあゝなんて馬鹿な事を考えながら千枝が部屋から出るのを待つ事にした。

…………しかし、女の身支度が長いのは何故だろうか？

「お待たせしました、少佐。どうぞ」

「悪いな」

背中に背負っている唯依ちゃんを見ても表情1つ変えず、さも当然の様に部屋へと招き入れてくれる千枝の度量、流石に凄まじい。

普通に考えてみれば先程まで喧嘩をしていた2人がこんな格好で部屋の前に立っていれば少しくらいは動揺や驚嘆が表情に現れる筈だろう。

それすら出ないとは……ポーカーフェイスの達人だな。

「丁度良い所でした、F型を操縦している少佐に聞きたい事もありましたし。」

ああベッドは其方になります。中尉が起きないように細心の注意を払って下さいね」

「お、おう」

「ああそれから、”何も”していないでしょうね？」

「するか!?!」

「………そうですか。それならば結構です」

それだけ言い終えると千枝は大量の書類と設計図、それに何色ものペンを机の上に置く。

いや、正確に言つと叩き落したと言えるかも知れない。

思わず唯依ちゃんの方を振り返ってしまう程、大きな音が鳴ったのだ。

「では始めましょう、少佐。F型をより良い物にする為に」

……?

……???

何故だろう、一瞬だが千枝がマッドサイエンティストに見えた。

17 (後書き)

時間を見つけて、微妙に修正して行きたいと思っています

感想やF型の改造案など、まだまだ募集中です

18 (前書き)

唯一の生命線でもある扇風機がお亡くなりになりました。
イイヤツフウウツ!! (ラリってる)

この熱い中、水分補給をしながら必死にPCへ向うなんて……

剣崎

必死に何かをやり遂げようとするその様、尊敬に値する事だと思つ。何かに対して全力になるなんて、昔の俺 いや、今の俺から見ても有り得ないだろう。

尊敬じゃない。

きつと、それは俺が持っていない物を持っている者に対する羨望。

それはとても眩しくて、

それはとても美しくて、

それはとても高い所にある。

手が届かないからこそ憧れて、

手が届きそうだからこそ高望みして、

手が届かない事を知った時は心の底から絶望する。

目の前で一枚の図面に俺が感じたF型に関する感想を一言一句漏らすまいと書き記す千枝を見詰め、何と無くだがそんな事を考えてしまった。

真剣な表情に見惚れ、思わずと言った具合に笑っていた自分が居る。

「……………何か可笑しいでしょうか？」

そんな俺の視線に気が付いたようで、千枝は拗ねた様に口調を尖らせる。

あまりの子供っぽい仕草に少々可笑しくなったが、笑いを堪えて平然と答える事にしよう。

「ありがとう」

「何に対してのお礼であるか。問うても宜しいでしょうか？」

「うん？そりやお前、毎日俺の為に働いてくれる千枝の頑張りに対してだろ」

呆れたと言わんばかりに盛大な溜息を吐き出し、千枝はテーブルに置いてあったカップに手を伸ばした。並々と注がれたコーヒーに口を付け、黙って目頭を揉み扱く。

疲れも相当溜まってきているのだろう、首や肩、身体の節々をコキコキと鳴らしている。

その姿に苦笑いを浮かべながら俺もテーブルのカップに手を伸ばす。並々と注がれたそれは甘さなんて微塵も感じさせないブラック。徹夜で仕事をする千枝の様な人には欠かせない物なのかも知れない。俺には縁が無い物だが、今は彼女に習って一杯頂く事にしよう。

「 案外、コーヒーもいけるな」

「私は緑茶が恋しいですがね」

篁

部屋には、静かな寝息が響いている。

質素なソファ―に背を預け、まるでそれぞれの物が彫像であるかの様な完璧な姿勢を保ちながら静かに寝息を立てる　剣崎龍二少佐。
普段とはまた違う、静かで美しい一面を覗かせていた。

「随分とゆっくりしていたようね、篁中尉」

「えっ!?!」

思わず、と言った具合で声のした方向に目をやる。

そこには国連の制服では無く、Yシャツだけを羽織った無防備な姿を晒す藤代千枝中尉の姿があった。いつもの優雅さはそこには無く、ただ妖しく光る美しさが私を魅了する。

寝息を立てていた少佐を一瞥できると、対して気にする事も無くテーブルの上に広げられた数々の書類や設計書、小物の片付けへと移っていった。

「あ、あの……私はどうして……」

「さあ？私が知る事では無いし、知っていた方が良い事でも無い」

いつもの彼女とは何処か違つ、素つ気無い返答の仕方。僅かばかりだが、身体が緊張していくのが分かる。

「ただ、1人の女としての意見を言わせて貰うと”羨ましい”の一言でしょうね。」

だつてそうでしょう？

彼に”愛されている存在”なんて、とても珍しいのに。

本人は全くそれに気付くことなく無く、自分は愛されていないと勘違いを続ける」

贅沢ね、と山積みになされた設計書をドンドン運び出して行く。

この部屋の奥は 資料室、なのだろうか？

私に宛がわれた部屋より幾分も広い此処は、藤代千枝と言う人物がどれ程有益であるかをコレでもかと言うほどに物語っていた。

「対等な立場で居たいと願うのなら、まずは彼に心の内を打ち明ける事から始めること。」

お互いが何も知らない状況では物事は決して進展する事は無い、後退するだけよ。

それが嫌だと言うのなら、そうね……まずは彼を知る事から始めなさい。

良く言うでしょう？”まずはお友達から”ってね」

藤代中尉は微かな笑顔を浮かべ、満足そうに頷いた。

人に何かを諭すその様はまるで教師の様であり、現に私は彼女を師の様に尊敬している。

「わ、私が……愛されて、いる……？」

「そうそう」

「少佐に……少佐に……あ、あああ、ああ、愛……？」

「もうメロメロよ」

「はうあっ!？」

紅潮を通り越し、臨界点を突破し、意識が一瞬にして混濁する。

愛、あい、アイ、ラヴ、LOVE。

思考が保てなくなり、口からはただ慌てふためく私の声だけが漏れだしていた。

有り得ない、いやでも、もしも本当にそうなのだとしたら如何なのだろう？

叔父様は祝福してくれるのだろうか？

部隊は如何しよう、龍二さんは私と一緒に？

……それとも、ジャツカルに誘ってくださるのだろうか？

「あわ、あわわっ……!!」

思考がオーバーヒートするまで気が付く事は無かったが、壊れていく私を見詰めて……

「良い退屈凌ぎにはなったわね」とお茶目に笑う藤代中尉の顔を見たのは 内緒だ。

朝、起きたら目の前に唯依ちゃんが居た。

何で？なんて起きたばかりの頭で考えていたら、そう言えば昨日は千枝の部屋で寝ちまったのかぁと如何でも良い事を思い出した訳だ。

ああ……だから唯依ちゃんが此処に居るのか、納得したよ。

半ばボケ掛けている頭でそんな風に物事を考えていると、唯依ちゃんがこう……ガーンと一気に喋り出してさ、何が言いたいのか良く分からない。

だから面倒臭くなって”ハイヴ攻略に付き合え”って言った訳だ。

勿論、このハイヴ攻略を手伝えと言ったことにも理由は無い。

ただ口から自然と零れた単語だったと言って良いだろう。

意識せずに出してしまった言葉ではあったが、唯依ちゃんの顔は見る見る内に明るくなる。

何か良い事でもあったのかなぁ？

なんて、人事の様に考えていましたよ。

それが今日の朝のこと。

《出過ぎ。死ぬぞ》

《す、すみません ツ！！》

そして、コレが現在の状況。

俺が搭乗する機体は不知火F型。

唯依ちゃんはデータだけ持ってきてある不知火・壱型丙。

流石に機密だらけの武御雷のデータなんて引つ張り出せる訳も無いので、不知火・壱型丙に乗せているのだが……案外、満更でもないのかも知れない。

まあ俺は朝に人の話も聞かずに適当に流してしまった結果としてこんな事をしている訳だ。

いや……まあ珍しく唯依ちゃんと訓練出来る訳だから、嬉しいけどさ！

俺達は今の所、普通では有り得ないであろうBETAを無視すると言う驚きの戦法でひたすら反抗炉を目指している。いや、流石に反抗炉までは無理だろう……

だが、コレが有効的なのは確かな事実だ。

あんなアリの様に増え続ける奴等と対等に殴り合うには強力な兵器
それこそ点では無く、面で攻撃出来る様な凄まじい威力と攻撃
範囲を持つていなければならぬ。

何よりも低コストである事も重要な項目だ。

幾ら何でも無理があるだろう、そんな贅沢な物。

だからこそ、今の目標は2人揃って中層まで辿り着くことにしておこう。

差し迫る時間と言う壁を掻い潜り、どれだけタイムを掛けずに目標地点まで到達出来るか。

今はそれを全力で追及する訳だ。

《 追うよりも追われる方が良いのかねえ、今はさ》

俺は唯依ちゃんを先に行かせる為にガトリングシールドを後ろから追って来るBETAに向ける。

空中を飛行しているとは言え、奴等は天井にも張り付きやがる。

俺の仕事はそんな張り付いた奴等を下に叩き落とし、少しでも時間を稼ぐこと。

砲身が回転し、無数の弾丸が戦車級や突撃級、果ては要撃級に食らい付く。

あまりの一方的な攻勢に、返り血まで飛んで来る始末だ……チクシヨウ、気持ち悪い。

ついでに言うとな唯依ちゃんの役目は進行方向の確保。

なるべく無駄弾は使わず、必要最低限の弾数で最大の結果を出す様に言っている。

それを忠実に護ってくれる辺り、彼女の優秀さが手に取るように分かるぜ。

《ジャツカル01へ、進路確保しました！》

《了解。流石は巖谷さんの娘さん、良いペース配分だ》

言っている傍から迅速に進路を確保する唯依ちゃん。

こりゃ……ウカウカしている暇はねえな、追いつかれない様に俺も頑張らないとねえ。

先を疾走する壱型丙を追い掛ける様に、F型の速度が一段上がる。

跳躍ユニットのエンジンが回転し、先程よりも更に強く火が吐き出された。

瞬きを一度する頃にはF型は壱型丙の隣に辿り着き、当たり前のように並走を開始する。

《……凄い……》

圧倒されたように、モニター越しの唯依ちゃんの様子は驚愕を映していた。

いやあ、気分が良いね、こんな風に驚いて貰えると衛士冥利に尽きるぜ。

《圧倒されるのは後にしろ。どんどん潜るぜ、足だけは引つ張るなよ？》

《は、はいっ！！》

華がある訓練ってヤツは実に良いね。

自分のヤル気が上がるだけじゃなくて、連携も出来る。

何よりも”女性”と言う事で色んな奴等との交流を聞きだせたりするのは案外良い事だ。

まあそれにしても

《ぐっ?!》

『篁機に攻撃が直撃。防衛目標の護衛に失敗、ミッション失敗です』

余裕が有る状況じゃ無い筈だが、随分と俺は思考に没頭しているな。

唯依ちゃんが撃破され、間髪入れずに無慈悲な事実を突き付ける千枝の管制が耳に入る。

どうやら、坑道へ入った瞬間に天井から降って来たBETAに叩き潰されたらしい。

目標地点の中層までは……十分、届く範囲内だったのだが実に惜しい。

《……まっ、次に期待するかね》

取り敢えず、今は楽観的に考える事にしよう。

唯依ちゃんとの仲も深まり、初体験（注意しておくが、演習である）も無事に終わった。

相変わらず国の飼い犬に止まっている所は好きにはなれないが、それも人それぞれの生き方なのだろう。俺には到底、理解出来ないがね。

《すみません、少佐……私のミスで……》

《いやいや、俺にとっては良い訓練だったよ。

唯依ちゃんの腕も十二分に分かったし、信頼に足り得る人物かどうかも見極められた》

《え？》

《まあその内、唯依ちゃんにも呼び出しが掛かるさ》

《少佐。あの、それは一体……》

困惑した唯依ちゃんの顔を見て、俺の悪戯心に火が付くのが分かる。娯楽が少ないこの世の中だ、きっと誰しもがこんな行動を取ってしまふことだろう。

《今は秘密。でも、デートしてくれたら教えてあげるぜ？》

イラストとするウィंकを投げ掛け、俺はサッサとシミュレーターを後にする事に決めた。

この状況を見ているのである。千枝は俺が今の台詞を吐いた瞬間に此方をまるで信じられない物でも見るかのように見詰めたのだ。とてもじゃないが、耐えられない。

もう怒られるのは勘弁だ。

痛い思いをするのも真つ平御免だし、誰かの悲しい顔を見るのも御免被る。

俺が自重する事で皆が真つ当な人生を遅れると言つのなら喜んで自重しますよ。

部隊を纏める大任も任されていますからな。

そんな事に比べりゃ朝飯前つて事だ。

考えても見てくれ、暴走するタリサを止める事と俺1人が自重する事。

どちらが楽勝だ？無論、俺は速攻で前者を指し示すだろう。

つまりは、今の状況もそういう事に由縁している訳だ。

さて、と……次の任務が言い渡されるまでは部屋で待機しますかね。

そんな事を思い浮かべながら、唯依ちゃんと千枝に別れを告げた後の事である。

部屋に戻ろうと廊下をダラダラと歩いている事が仇となるとは思いませんでした。

前方に居た数人の兵士が俺の事を見るなり、直ぐにミーティングルームに集合する様に命令が出ていと伝達して来たのだ。

生憎と疲れきっていた俺は断ろうとした訳だが、何でも急な話だが

ソ連との広報任務が決まったそうなので、その為に色々俺に確認したいことがあるとか。

無論、唯依ちゃんも干枝にもすぐ様この事が伝わるとの事。

……まあ此処は2人の代わりとして俺が聞きに行く方が良いだろう。2人も俺以上に疲れ切って居る筈だ、負担は少なければ断然良い事だろうさ。

そう言う訳で、俺はその話し合いが行われるのであろう場に出席している状況である。

……大事な話でもあるのかと思いきや、目の前に居る国連軍の広報官であるオルソン大尉と現状を確認し合う程度らしいのだが。

「対環境試験を行う事は良く分かります。

ですが、何故タリサに広報任務を任せるのか理解出来かねます……如何なお考えで？」

「規定の条件に当て嵌まる衛士が彼女しか居ない為です、少佐」

「……女性であり、アジア人である事か……それだけの理由で彼女を推薦した、と」

「ええ」

眼鏡を押し上げ、オルソン大尉は此方を見据える。

答えを聞きたいのだろう。

全く、せつかちな奴だな……急な話で俺も混乱している最中だって言うのに。

「……最終的な判断を下すのは私が保持している訳ではありません。それに、私自身も反対する理由が特にありませんから。貴方達の

「お好きなように」

「まったく、タリサの奴を宥めるのに無駄な時間を使う事になりそうだな……」

厄介以外の何者でもねえぞ、チクシヨウ。

「難去つてまた一難。」

「こりゃタリサのヤツ、相当荒れることだろうな……」

「イブラヒム中尉と一緒に何とか説得する事にしよう。俺1人じゃ、到底敵いっこない。」

「と言う訳で、その後の出来事を簡潔に説明しても良いだろうか？」

「OK？」

「では説明させて頂こう。」

「タリサは最初こそ荒れては居たものの、上官（主に俺）の必死の頼みに屈してくれた。」

「因みに、俺はアルゴスのメンバーにボコボコにされたと追記しておこう。」

「理由？察してくれ。」

「最初こそ広報任務を怪しんでいたユウヤをヴァレリオが休暇だと思えば良いと嗜め、」

「実機訓練に乱入した俺に怒り狂ったタリサを宥める為に当日は俺がタリサの奴隷となり、」

イブラヒム中尉には実機訓練に乱入した事を何度も何度も謝り続け、取り敢えず千枝に休暇が出来た事を伝え、

そして

「海だな……」

上から順にヴィンセント、

「海だぜ」

ヴァレリオ、

「海か……」

ユウヤ、

「海だろ」

タリサ、

「海ね」

そしてステラと順々に己が心境を吐露していく。しかし、凄まじい熱気だ。

対環境試験を行う為にはコレ程の環境が必須なのだろうか？
そんな事を考えながら俺は、

「重い……重いぞ、チクシヨウ……」

アルゴス小隊全員の荷物を若かりし身体に括り付け、一面が青の麗しい世界

グレイプール基地に足を踏み入れたのである。

18 (後書き)

次回は『水着美女、来襲』
乞うご期待！

それにしても……PCが熱い……

19 (前書き)

昨日の夜からの徹夜作業……
この連続投稿が終われば、こんな自分にも安らかな眠りが

剣崎

降り注ぐ太陽の下、式型のついでに持ち込まれたF型を運ぶ作業の最中の事である。

滴る汗を拭いながら、俺は水平線の向こうに広がる色を見詰める。青、蒼、藍。

一面が青に染まった素敵な光景、塩水が溜まった大きな水溜り。地球上の7割を占めるのであろう巨大な水溜りの名は 海、である。

「暑い……」

腰に下げられていた水筒から水を摂取し、作業に戻る。

本来ならば日陰からあぁしろ、こうしろと命令するだけでも良かったのだが……

それじゃあ、F型に申し訳が無い。拗ねられちゃ困るしね。

と言う事でクソ暑い炎天下な青空の下、俺はまるで地を這う虫の如く仕事をする訳である。

嬉々として輝く太陽の光に照らされた装甲が通常では考えられない熱量を持ち、掌をジワジワと熱していく。

首元に掛けられたタオルで額の汗を拭うが、その程度では到底追い

つけはしない。
ダラダラと流す汗が頬から装甲へポタリと落ち、一瞬で……蒸発した。

「……」

その光景に思わず息を呑み、現実を逃避する為にもう一度海を眺める。

そつだ、この作業が終われば俺は海にいける。泳げる筈だ、力いっぱい。

俺……この作業が終わったら、海に行くよ。

心の中でそう強く誓い、また作業に戻る。

今現在の作業は機体の各部に異常が無いかチェックする簡易な作業だ。

しかし、コレが完璧でなければ試験結果に異常が見られるかもしれないので手は抜けない。

流石の俺でも、全力で臨まなければならない。

きつと、俺達とは少し離れた場所では唯依ちゃんとヴィンセントもこの地獄の様な苦痛をもうそれは嬉々として受け止めている事だろう。

そう考えると気分が少し楽になった。

いや、人はそういう生物だろう？

人の不幸を喜ぶ様に出来ているというか、歪んでしまっているというか……

まあ俺自身もその例に漏れぬ1人でありましてね。

こんな苦痛を受けるのが1人だけだったのなら、速攻で仕事を投げ
ていた事だろう。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

作業を終え、漸く日陰で身体を休ませる頃には身体中が真っ赤だっ
た。

日焼けしたのだ、それはもう盛大に。

タンクトップを着用して居たので布が掛かる部分を除いて。

上半身が真っ赤だ。

とても、痛い。

「おおおお〜 広報官殿は気合の入れ方が違うねえ」

向った日陰の先には既に先客が居り、そこに座るのはユウヤとヴァ
レリオの2名。

最初、俺の姿を見たコイツ等はそりゃ俺の顔から表情が消える程に
笑いやがった。

「アレじゃ、サボれねえな」

「ご愁傷様ってヤツだな。ヴィンセントのヤツには丁度良いだろ？」

「ユウヤ、女房のピンチだつつうのに冷静だなあ」

「知るかよ。今回はオレ達の仕事じゃねえだろ」

木に背中を預け、機体の上を必死に這いずり回るヴィンセントの姿を3人で見詰める。

先程まで同じ作業をしていた俺にとっては、それは同情に値する物だった。

この太陽の下で働く事がどれ程の苦痛であるか、この2人が知る事は無いのだろう。

非情に残念だ。

ヒィヒィ言いながら作業をするコイツ等を前にして、俺は優雅に休もうと思ったのに。

「少佐のF型は広報官殿の管轄外、なのか？」

「ああ。アイツの開発には巖谷さんつつ俺の上官が携わっていて……

簡単に言っちゃえば、あの気に入らねえ広報官殿の出る幕は永久にねえって事さ」

「そりゃ楽で良いねえ」

「それでも無い。元々用意されている10人程のスタッフで作業をするしか無いからな……

人材は貸してくれねえ、用具もダメ。ケチ臭い奴だぜ、あのクソ野郎」

「管轄外の事には知らん顔、か」

「まあ頭を下げても人で材を借りるつもりはねえけど」

男3人のむさ苦しい談笑は続く。

日陰とは言え、この暑苦しい場所に居るのだ。

汗の1つや2つ、当然の様に出る。

特にヴァレリオ。アラスカの涼しげな環境に慣れているので、この暑さは堪えるらしい。

先程から俺の水筒の水まで飲みやがる……

いや、まあ演習の件もあるから強くは出られねえが。

「いやあ……それにしても良いねえ」

突然、ヴァレリオはニヤニヤと顎を擦りながら弐型の方へ視線を向ける。

ユウヤは急な事で頭上に？を浮かべているが、成る程……この紳士は流石に出来る。

“この状況下でしか拝めない例のブツに気が付くとは”

「ヴァレリオ君、俺の同志である君ならば既に気付いた事だろう？」

「ああ当然だぜ。いや、グアドループ万歳だな」

「クツ……この炎天下すら己の欲を満たす事に変えるとは。俺達は業の深い生き物よ」

「ハッ！紳士と呼びな！！」

意気投合する俺とヴァレリオを他所に、ユウヤは何に対して反応しているのか分からないと言った具合だった。そりゃ当然だろう、お

前みたいながきに分かる訳が無い。

露になった柔肌。

仄かに香る汗の臭い。

チラチラと見える胸元。

おお神よ……楽園^{エデン}は此処か……ッ！！

エロオヤジ2人の視線の先には通常の軍服姿では無く、熱帯標準軍装を纏った我等の癒し　篁唯依の姿が映っていた。

「おおグアドループ万歳！！」

力強いガッツポーズ。

俺とヴァレリオは、きつと今　最高に輝いている事だろう。

ユウヤ

オレは、バカを知っている。

それが誰か？急かすなよ、その話なら今すぐにもしてやるさ。

……外での作業を終え、オレとヴィンセント、ヴァレリオに少佐は更衣室に集まっていた。

ヴァレリオは威力偵察　覗きにも行くらしい。

それに対してヴィンセントと少佐は内部偵察　即ち、実行犯であるヴァレリオの援護だ。

友人であるヴィンセントを含め、オレはコイツ等が生粋のバカである事に気が付いた。
有り得るか？

あのステラやタリサ、それに日本人形を覗いて何が楽しいのだろうか。

そう問うと、

「目の前の華すら逃す事になるぜ、お前」

ヴァレリオ

「ユウヤア、ラスベガス市街でも言っただろ？もう少し女に興味を持ってよ」

ヴィンセント

「……やらないか（覗きを）」

少佐

生粋のバカから真つ当な答えなど返って来る筈も無かった。

ヴァレリオは熱帯迷彩などと口走り、ハイビスカスを宛がった真紅のアロハを身に纏い、

ヴィンセントはヴァレリオとは正反対で、海をイメージした青を基調としたアロハ、
そして

「少佐、アンタ……」

「此処は戦場だ、気を抜けば一瞬で命を持って行かれるぞ！！」

口でクソ垂れる前に言葉の前と後ろにSir！！を付ける、ウジ虫が！」

フェイスペイントに迷彩服まで装備した姿。

一体、この短時間の間にこの男の脳細胞には何が起こったのだろうか？
戦場では凶暴さの中にも誇り高さを忘れぬ獅子の筈だろう、アンタ
は。

それが”覗き” 1つの為にこんな姿まで晒すとは……有り得ねえ。

「準備は出来たな、ウジ虫共！」

「Sir, yes sir」

「ふざけるな、大声出せ！！タマ落としたか！？」

「Sir!! Yes Sir!!」

「宜しい！では諸君、我々の楽園^{エデン}探索へと往こうではないか！

目標地点は目と鼻の先、僅かばかり手を伸ばせば届くであろう
距離だ！

何を疑い、何を恐れる？我々には戦神であるオーディンが付いて
いる！

ヴァルハラすら我等が味方よ！」

まるで新手の宗教……いや、性質の悪い洗脳の類だ。

少佐を筆頭に、ヴァレリオとヴィンセントも「ガンホー！ガンホー
！」と叫んでいる。

既に目が正気では無い。

その目は 戦いに命を捧げる覚悟をした猛者の目だった。

オレは……どうして此処に居るのだろうか？

口にこそ出さなかったが、胸の中ではこんな所に飛ばされてしまっ
た不運を呪うしかない。

見たければ、「見せてくれ」と言えば良い。
こんなアンフェアな事自体、オレには納得出来なかい事だった。
……一応、アイツ等にも伝えておくか。

野に放たれた野獣3匹を見送ったユウヤは静かに、ステラとタリサに割り振られた部屋へ向う為に歩を進めていた。

剣崎（迷彩服使用）

『ピーガガッ……此方エデン01、コテージに到着したぜ、どうぞ』

『ピーガガッ……エデン02、周囲に人影無し。安全を確認した、
どうぞ』

「宜しい。作戦開始時刻は1400だ。それまでは自家発電でもしている、どうぞ」

『Yes Sir』

コキコキと肩を鳴らし、俺はグアドループ基地を見渡せる巨大な大樹の上で待機している。

双眼鏡でコテージ周囲の状況を探り、赤外線カメラ、生体センサーなどあらゆる機材を投入してコテージに入退場する人物の数をカウントしている状況である。

ステラが居るのであろうステージは先程から温度が上昇していた。恐らくだが、ステラがシャワーを浴びているのだろう。

即ち、今は絶好の機会である。

だが、俺は此処で攻め入る様なバカでは無い。

そつだ。絶対に覗いても安全である状況を作る事から始めるのである。

戦争でもそつだ。

まずはステージ造りから始まるのは基本中の基本である。

敵を陥れ、友軍が有利に事を運ぶ為には必要な事でもあるのだから。

「ん？……エデン02、コテージに誰か向った様だが……誰だか分かるか？」

『誰かって……ん？……コイツッ……まさか！』

『どうかしたのか、02』

『ユウヤだ、CP！ユウヤの野郎が接近中だ、どうぞー！』

「ユウヤ、だと？……まさか、我々の作戦を妨害するつもりか！？」

『そりゃ不味いぜ！？このままじゃ、俺達のヘブンが失われちゃう

！！』

「だ、だが……無理だ、間に合わん。ユウヤを止めるには我々はあまりにも遠過ぎる。

距離的に一番近いのは01だが、01の場所がターゲットにはなれ
てしまつては意味が無い。

……ミッション失敗、か」

マイク越しに、各々が悔しがって居るのが分かる。
それはそうだろう。

男のロマンを、まさかチエリーボーイ一人に邪魔されるとは思いも
しなかった……

迷彩服まで着込み、数々の機材を木の上に運んだ俺は一体何だった
のだろう？

死にたくなる、チクシヨウ。

『……CP、02……オレはやるぜ』

『お、おい！01止める！！はつきり言ってやる……お前、死ぬぜ
……？』

「01、止める！無駄死にするだけだ！結果は見えている！！」

『少佐……オレ達は、僅かな希望にも手を伸ばす……”紳士”の筈
だろう？』

「ッ！」

『オレは、お前等にも夢を届けるぜ』

『「ヴァレリオオオオオオオオツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
』

突如として切断される回線。

どうやら、ヴァレリオは独断行動に入ったようだ。

それ即ち、敵地の中央を裸で駆け抜ける様な物である。奇跡が起き
ない限り

否、奇跡が起きようとも覆しようの無い事象であろう。

『エデン02、帰還するぜ……』

「……俺の采配ミスだ。すまない」

『いや、イレギュラーの介入は誰も予想していなかった事だからさ。コイツは……神様に裏切られた結果だけ、少佐』

マイク越しに聞こえるヴィンセントの声は、何処か悲しみを含んでいた。

きつと戦友を失った事による苦痛が胸を締め付けているのだろう。俺だってそうだ……ヴァレリオ、惜しい男を失ってしまった。

「『敬礼!』」

今は静かに、彼の死を悼もう。

そんな事を思っていたのは数刻前。

現在はビーチで東西試験部隊の交流を深める為に交歓会を開こうとしている最中である。
俺は用意を始めている他の連中を眺めながら、ビールを飲み漁っている。

ダメな大人だと？

ハツ、藤代が参入すれば一瞬で地獄絵図だ。それまでに酒は楽しんでおきたいのさ！

「何だ、ヴァレリオ。夜間迷彩か？お盛んだな」

「当然だろ、少佐。此处はリゾートだぜ？」

「しっかし、酷い面だな……日焼けでもしたのか？」

「熱烈なスコールの歓迎があっただけさ。何なら、お前等も浴びるか？」

「いや、遠慮する」

俺とヴィンセントは既に昼間の事は忘れていた。

否、実行犯はヴァレリオ1人。罪を被るとすればそれはヴァレリオのみ。

ヴァレリオ自身もそれを承諾しているのか、俺達の関与を黙認している状況下である。

「……熱いスコールねえ」

憶測だが、ステラに熱湯でも掛けられたのだろう。

まあ流石に窓の向こう側に居る相手を引き摺り込む訳にもいかず、最も効率的な方法で撃退した、と言う訳だ。恐れ入る……流石は鉄の女と言われていただけはある。

「あら、少佐もお望み？」

俺の独白に食い付いて来たのは今回の被害者(?) でもあるステ

うだ。

顔は”何か”あったのだろうか？ 覗きです。
愉快そうな笑顔を形作っていた。

「熱烈なのはベッドの上だけで十分だ。

その他の激しいアプローチは基本的に全て受け流す性質でね、俺は」

「あら、残念ね。”不審者”は全身で受け止めてくれるわよ、きつと」

「不審者？我等が麗しきお嬢様を襲うバカが居るとは驚きだね。
まさか被害にでもあったのか？

ならば安心してくれて良い。夜の警護は俺がしよう。

勿論、君が望むのならベッドの上まで付いて行く覚悟だよ」

「いいえ、結構よ。不審者なら撃退したもの」

「撃退？」

「ええ、熱いスコールがね」

「……ああ、熱いスコールか。どうやらグアドループの気象は変わり易いらしいな」

お互いの腹の内を探る様な会話が続く。

いや、コレはまさに口撃である。隙さえあれば 即、相手の首を切り落とすだろう。

そんな雰囲気さえあった。

俺としちゃ、ステラとの楽しい談笑だった訳だがね。

「そのペーパーコンテナ、俺が持とうか？君の様な美しい美女には不釣合いだ」

「あら、じゃあお願いしようかしらね。」不審者さん」

「俺は君の守り神だぜ？そんな相手に不審者は酷いなあ」

話題を転換しようとした彼女が持っていたダンボールに視線を逸らさせたが、どうやら言葉の攻撃は続くようである。こりゃ、俺よりもヴアレリオの方が酷いだろうな。

俺はあくまでも未遂。だが、アイツは現行犯だ。

罪は重いぜ。

「まあ良いさ。今日は君の素敵なエプロン姿を見ただけでも、眼福って事にしておこう」

「あら？私の裸には興味が無いのね」

「何れ、君が俺に心を開いてくれたらタップリ堪能するさ」

そう言うと、ステラは何がツボに入ったのかクスクスと笑い始めた。俺としては特に何も可笑しなことを言ったつもりは無いのだが、何か面白かったのだろうか？不思議な面を引っ提げていると、ステラは俺の顔を指差しながら一言。

「何だか、オヤジ臭いわよ？貴方の台詞」

「うるさい！！」

知り得る筈の無い、俺最大のコンプレックスを的確に射抜きやがっ

た。
流石はアルゴス1の狙撃手だ。俺の急所を見事にブチ抜いたぞ、このヤロウ。

19 (後書き)

次回『遭難んん!?!?』

修正してやるうっ!!!(主に自分の作品に対して

20 (前書き)

ほのぼのとした情景が書きたいのに…
書きたいのにっ (泣

剣崎

楽しい東西合同交歓会になる予定だったのだ。

多分、この場に居るアルゴスのメンバーは全員ソ連の連中と仲良くやろうと思っている。

いや……まあ、”多分”だが。

それでも自分から率先してケンカをしに行く様な事は考えていなかっただろう。

最初、は。

ガシャーン。

耳を劈く騒音。

それは、まるで食器を引っくり返した様な音。

その音の音源に皆が振り返り、原因となった状況を探るべく各々が思考を開始する。

その場に居るのはタリサとイーニアだ。

タリサにとっては因縁深いであろう紅の姉妹の1人であるイーニア。だが、イーニアにとってタリサはどう写っているのだろうか？そこは流石に、俺も神様じゃないから心は読めんがね。

「なんだよ！人が折角気を利かせてやったのに、その態度は」

「 いらない」

オルソン大尉至つての要望である『東西仲良く夕食を食べようね（はあと）』は早速中止。

コイツ等も良い度胸だ。イブラヒム中尉とサンダーク中尉が良く言い聞かせた筈だが、それすら速攻で叩き潰すとは……何だ、血湧き肉踊る肉体言語の時間でも始まるのか？

「ここにきたのはめいれいにしたがっているだけ。だから、いらない」

「別に無理に食べなんて言っていないだろ！」

「すぐどなるのは、こころがよわいから」

「ッ、なんだと!?!」

流石に止めに入らなきゃ不味いか……

このまま行くと、タリサの野郎もイーニアに殴り掛かる勢いだな。

俺の監督不届きだった所為もあるのだ、此処は大人しく止めに入るとしましよう。

「タリサ」

「ッ、何だよ！」

軽く肩に手を置いただけだが、凄まじい勢いで睨み返された。

余程、腸が煮えくり返っているのだろう。こりゃ本当に 今日

タリサは面倒だ。

「もう止めておけ。暴力沙汰になれば俺もお前を擁護出来かねるぞ」

「で、でもさっ！始めたのは向こうで」

「挑発に乗り、先に手を出してしまえば結局はそいつが悪者だ。

お前なら耐える事の出来る範囲内だろう？彼女だって少し緊張しているだけさ」

「……分かったよ、分かった。大人しくするよ」

渋々、と言った面で引き下がるタリサ。

思わずその頭をコレでもかと言う程、撫で回している俺が居た。条件反射だろう、多分。

やめろー！と捲くし立てるタリサとそれを無視して笑みを浮かべながら頭を撫で続ける俺。

このまま、何事も無く終わると俺は思っていた。

「ちびでびくびくしている。だから　ちよび」

爆弾投下。

俺の努力は一体何だったのか。

イーニアの一言でピクリ、とタリサの身体が強張るのが分かった。

それは彼女の頭を撫でていた俺だからこそ分かる変化なのか、それとも万人に分かってしまう程分かり易い変化だったのか。

少しずつ、少しずつタリサの身体が震える。

俺は知っている。

俺は知っているぞ。

人がこんな風に身体を震えさせるのは何か強大な物に”恐怖”した時、
己が赴く戦場に何かを見出そうと”武者震い”と言う強がりをする時、

そして 腹の底から、燃え滾る様な怒りを吐き出す時だけだ。

「タリサ、落ち着け！俺の心温まる話を聞いただろうか？！

手を出したらお前の負け！此処は耐えろ、耐え抜いて明日を生きる
！！！」

「がああああっ！！もう負けでも良い、ブン殴らせろおっ！！！」

殴り掛からんとしたタリサをやつとの思いで羽交い絞めにし、ブン
ブンと振り回される拳を何とか回避しながら怒鳴る。が、まったく
効果は見られない。

寧ろ、タリサの力はどんどん強くなっていく。

このままじゃ 押し切られる！

「落ち着け、俺も監督不届きなんて馬鹿な書類を書くのは真つ平御
免だ！

だから落ち着いて下さい、いや落ち着け！落ち着けこの野郎！黙
れ、シャラップ！！！」

「埋めりや良いだろ！？」

「埋めりや……埋める……埋める？い、いや、その方が不味い！

止める、タリサ！乱心するな！心だけは平静を保て、それが最後の
砦だぞー！！！」

「うがああああああっ！！！！！！！！！！！」

「ふんがあああああつ!!!!!!」

力と力の激突。

チビのクセに、何処にこんな力を溜め込んでいたのかと言う程の馬鹿力でグイグイと俺の手の拘束を外そうとして来るタリサ。

それをさせまいと必死に彼女の腕力に抗う俺の弱々しい腕ちゃん。

もう本当に無理です、限界だろ。腕の関節が激痛を訴えている。

そんな時、颯爽と姿を現したクリスカがイーニアを静かに抱き寄せていた。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

羽交い絞めにしていたタリサの力が、少し弱まるのを感じる。

いや、確かにそうなってしまふのは当然だろう。

周りに居る全てが敵、敵、敵、敵。

敵意を剥き出しにした瞳を俺達に向ける、ソ連の衛士 クリスカ・

ビャーチエノワ。

こんな視線を向けられれば、誰だって冷え込むものだ。

特に先程まで一生懸命、”彼女達を含めて楽しもうと考えていた”

俺達にとってのそれはまさに宣戦布告と同じ意味を明確に示す行為でもあっただろう。

「これは何かの罠なのか？何が目的だ！？」

剥き出しの敵意を曝け出され、流石に俺も黙るしかない。

何かの罠、なんて言われるとは思っても居なかった事もあるのかも知れない。

まさか、楽しもうと思っていた交歓会でこんな事を言われるとは思ってもしなかったのだ。

相手がクリスカだと言う事も俺の思考にショックを与えている原因なのかも知れない。

「どうやらロシア人は他人が信用できないようね　可哀想に」

そんな殺伐とした雰囲気の中、意外にも口を開いたのはステラだった。

怒りなど微塵も感じさせず、ただ哀れむ様な意思が言葉に乗って耳へと伝わっていく。

「少しは周囲と上手くやろうとは思わないのかしら？」

「私達は命令で此処に居る。それ以上でも、以下でもない」

「命令？そう、ソ連では意思を持つ事すら許されていないのね」

ゆっくりと、だが確実に脳が回転していく。

この場でも最も確かな言葉を紡ぐ為、止まっていた思考回路をフルに稼働させる。

敵意を向けられた事など気にしない。

敵だと思われて居るのなら、俺は俺のやり方で仲良くなるうと努力するだけだ。

例え、それで蟠りが解けずとも良い。

俺は 後悔だけはしたくないのだから。

「肉の最良の焼き加減は、まだ赤さが残る程度らしいぜ」

そんな事を口に出しながら、グリルに火を付ける。

ゴゴゴツ、と威勢の良い音を出しながらグリルに火が付いたのを確認すると金網を載せる。

あたり一面に炭の香が広がっていく。

「アメリカじゃ、バーベキューをする料理人を確か……」

「ピットマスターだ、少佐」

俺の隣にズイっと顔を出すのはユウヤ。

その手には既に軍手が装備され、両腕いっぱい沢山の具材を抱え込んでいた。

ニヤリと、お互いの顔を見て笑う。

「肉が1番美味しく食べられるのは焼き立てが1番だろうな。

そう言うことを考慮すると、食べる分だけ焼くつつうのが1番だろうが……」

「今回は大人数だ。それなりの数を焼いても食いきれるぜ」

「それもそうか。じゃあ、そうするとしますかねえ」

ピーマン、たまねぎ、キャベツなどなど。

たくさんの野菜から焼き、その後で肉を1つずつ丁寧に焼いて行く。あたり一面に広がっていく肉の香を楽しみながら、俺とユウヤは談笑を繰り返していた。

主に、内容はバーベキューの事だが。

流石に、此処まで来ると他のアルゴスの連中も俺の意図が分かったらしい。

先程まではポカーンと眺めていたヴァレリオとヴィンセントまでが食器を並べたり、テーブルを拭いたりと仕事を始めていた。

タリサに至っては俺達の仕事を手伝いたいと言い出す始末だ。

まあ火遊びは危ないから1人じゃダメって事で、もう1つグリルを出してステラのサポートを任せる事にした。

……此処で困惑するのはクリスカとイーニアだろう。

先程まで険悪な雰囲気だと思えば、今度は行き成りバーベキューだ。立ち上がるうにも俺が先程から「待て！待て！」と犬を躡ける様に繰り返しているの、何とか足止めする事には成功している。

「ヤキソバ、って分かるか？」

「いや、知らねえ」

「バーベキューの締めにやるらしいが、塩味とソース味。どっちが
良い？」

「グリルも2つあるし、どっちも作れば良いじゃねえか」

「それもそうか。んじゃ、こっちはソースにしよう」

アルゴスのメンバーは楽しそうに、バーベキューの準備を進めて行く。

そんな光景を見詰めていたクリスカとイーニアは、何処か困惑を隠せずに居た。

「サツサと着席。肉配るぞ」

「あつ！その一番でつかいやツ、アタシだぜ！？」

「おいおい！オレだって働いたぜ？それを貰う権利はオレにもあるだろ、少佐」

「あら。だったら私も貰えるのかしら？」

「へえ〜 だったらオレも参加しちゃうかなあ〜」

「ヴィンセント、お前は黙れ」

「ユウヤ、何で！？」

肉を配ると言った瞬間に急に騒がしくなりやがる。

別に、ただ肉を焼いて食うだけだろうが……ガキか、お前等は！いや……まっ、良いか。

こんなガキみたいな事、楽しそうにやっていたのは何を隠そう俺自身じゃねえか。

「席に着けよ、お前等も」

「ッ!？」

「

俺の参戦理由なんて単純明快。

紅の姉妹……”この子”達に参加して欲しかった、それだけのことなのだ。

「馬鹿な……何のつもりだ、私達はあくまで命令で　!」

「だったら尚更だ。食えって」

「ッ、必要としない!」

「だって、お前達の方も焼いちゃったぜ?」

「だったら捨てれば良いだろう!」

「この食糧不足の時代に、か?そりゃ随分と酷な選択肢だねえ」

相手の揚げ足を取る様な言動を繰り返す。

コレじゃ完全に嫌な野郎の真似事だが……まあ今だけはそんな俺でも悪くないか。

何よりも、この子達との友好を深めておくのは後々に影響を与える事になるだろう。

今のうちに、接点を深くする。

そんな邪な気持ちも、含まれているのは秘密だがね。

「りゅうじがやいたなら、たべる」

おっ？

全ての元凶が彼女だとしたら、それを終息するのも彼女って訳か？
粹な選択肢だねえ。

イーニアはアルゴスのメンバーとは少し離れた場所にチヨコンと座り、俺に向けてニコリと微笑む。いや……何だ、普通に感動しそっ
だぞ？

「嬉しいねえ〜！もっと食べたくなったら言ってくれよ？追加で焼
くからさ」

「おかわり！！」

「タリサ、テメエはテメエで焼け」

「はあっ!?!」

湧く笑い。

浮かび上がる笑顔。

そして　ますます、意図が読めないと困惑を深くするクリスカ。
馬鹿だな。

俺達は何も難しい事は考えちゃいねえ。

笑って、騒いで、食って、仲良くなりた。たったそれだけの事な
のだ。

「イーニア……」

「別に何の目的もねえし、罨を張るつもりもねえ。

俺達は笑って飲み食いできりゃそれで満足だ、何も難しい事は考え
ねえ。

特に俺みたいな単純馬鹿は酒と食べ物、それに可愛い女の子が居れば満足なのさ」

「……」

「別に、俺達と仲良くやれとは言わない。だが……イーニアを1人置いていく訳にもいかないだろう？」

「ッ
」

「今はまあ、アレだ。その……楽しくやろうぜ、クリスカ」

そう言つて、彼女に手を差し伸べる。

最初こそその手に困惑を示していた彼女だったが、その手の意図を読み取つたのだろう。

ゆっくりと

だが、力なく

柔らかな感触が、俺の手に伝わる。

「エスコートはお兄さんに任せなさいな」

「ッ、からかうな!!」

羞恥の色が、頬に浮かぶ。

良いね。恥らう乙女なんて、いい歳のおっさん……じゃなくて、お兄さんの大好物さ。

「クリスカ、りゅうじはりょうりがじょうずだよ」

「……そうなの？」

未だに困惑を隠せずに、それでも串に刺さった肉を1つ手に取るクリスカ。

場が少しだけ静かになり、皆の視線がクリスカの口元に集まる。食うのか？行っちゃう？

少しずつ、少しずつ、その唇に肉が近付いて行く。

もどかしい。今すぐにも食い付け、さあやれ！直ぐ行け！どんどん食え！

「……………おい、しい」

クリスカの絶賛する私の焼いた美味しいお肉ちゃん。さあどんどん焼いて行くでしょうか。

何たって、今日は楽しいバーベキュー。

こんな幸せをお裾分けするには、良い日だとは思わないか？アンタ等だって、そう思うだろ？

【ヤキソバの反応集】

「アタシ、塩ヤキソバの方が好きだぜ！」

タリサ

「俺は断然、ソースだな」

ヴァレリオ

「塩も良いわね……………サッパリしているわ」

ステラ

「カァ〜！良いね、少佐！両方美味いぜ！！」

ヴィンセント

「……ソースだな。何となくだが、そう思う」

ユウヤ

「しおがいいな」

イーニア

「……私も塩……い、いや、ソースで頼む」

クリスカ

こんな事があったような……いや、忘れちゃったな。

20 (後書き)

今回も楽しんでいただければ幸いです

感想などありましたら、是非書き込んで下さい
自分の様な未熟な作者の小さな楽しみでもありますから(汗

21 (前書き)

今日は少しばかり涼しかったので書き易かったです

剣崎

バーベキューのあった翌日。

オルソン大尉の提案で今現在、ビーチバレーとボートレースの2組に分かれる事になった。

俺みたいな野郎の所為で気を使わせるのも如何かと思ったので、今回俺は待機組と言う事で静か〜に

ビーチバレーでも眺めていようと思っていた訳だが

「うみなんて、いきたくない!」

「クリスカとはなれたくないよ……」

「……りゅうじ」

イーニアの連続攻撃三連発。

こう、俺の良心と言う物に直接突き刺す様な……刺した後は捻り込む様な?

奇天烈な言動を発した訳である。

最初こそイーニアは、子供の様に泣き喚いていた。

つか、人前で泣く時に俺の背中に隠れて泣くのは止めて欲しい。罪悪感が募る。

しかし考えても見て欲しい。

ある意味で、コレはオルソン大尉からの提案と言うオブラートに包まれた命令なのだ。
流石に酷だとは思うが、従うしかあるまい。

そんな時はやはりと言うか何と言うか、クリスカが動くのだ。

私とイーニアの交替を認めて欲しい、と。

だが、気のせいだろうか？

まるで今から敵に特攻を仕掛ける兵士の様に、クリスカの目は据わっている。

海に……何かあるのだろうか？

まあそんな事は置いておいて、結果的に組み合わせは変更された訳だ。

人数不足を補う為に急遽、唯依ちゃんまでもが召集された事は予想外だったが無事に組み合わせも終了し、オルソン大尉は満足そうに職務へ戻っていった。

……アレ？コイツ等のお守りをするのって、また俺？

思わずオルソン大尉に講義しようにも、サッサと何処かへ消えてしまつのはご愛嬌。

昨日に引継ぎ今日も面倒ごとを引き受ける、と言う事が……

下士官からの嫌がらせとは、佐官にもなるとストレスが溜まるねえ。

まあ取り敢えず、今は唯依ちゃんだ。

どうやらポートレースで唯依ちゃんがクリスカと同じ組に入るようだし、先程のクリスカの拳動や据わり切った目も気になる。

此処は信頼する俺の”相棒”にお守りを任せるべきだろう。

「唯依ちゃん！」

「少佐……あの、すみません……少佐はお休みになられて居ない筈なのに、私が……」

「そんな細かい事は気にしないつつうの。」

それより、ビヤーチェノワ少尉の事だが……確り面倒を見てやってくれよ？」

「あ、はい。了解しました」

ビシツとした敬礼を返され、それに軽く右手を上げて答える。にしても、クリスカのことだけを気に掛けるのもアレだな……

唯依ちゃんも折角、水着を着込んでいる事だし。

何か気の利いた事でも言っつてやれば良いが　おおそうだ、アレだな、うん。

「唯依ちゃん」

「はい？」

まだ何かあるのだろうか、と言う具合に首を傾げる彼女にウィンクを返す。

フツ……覚えておけ。

イイ漢は女性の扱いに長けていると言うことを、な!!

「　ボートレースで勝つたらさ、明日はデートしようぜ？」

それだけを告げると、俺はクールにその場を去る。

後ろを振り向く？

フツ……怖くて出来ねえぜ。流石に調子に乗り過ぎた。

しかして、その時の唯依嬢はと言うと

まるで酸欠の魚の様に口をパクパクと動かし、真紅の薔薇よりも一層赤く頬を火照らしていたのは、龍二には分かる筈も無い事ではある。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

イーニア

「」

「……りゅじゅじゅ」

りゅじゅじゅ、ねむっちゃった。

おこしちゃかわいそうだから、しずかにするね。

ミーシャは……きつとだいじょうぶ。つよいし、やさしいし、”バ
ーニィ”もいるから。

「 まりも」

「??？」

りゅうじ、ねむりながらしゃべれるのかな？
すごいな。もっとしゃべらないのかな？

「 夕呼」

ゆうじ？

りゅうじのおともだちのなまえなの？
でも、りゅうじのおともだちはユウヤじゃないのかな。
しらないひとだ。

「 「

……りゅうじのこと、まだまだなにもしらない。
おしえてくれるかな、りゅうじ？

剣崎

「寝ちまつたか……」

蒸し暑い浜辺だが、駆け抜ける風はカラッとしていて気分が良い。
先程まではビーチバレーを観戦していた筈だが、どうやら睡魔に負

けちまったらしい。

いや、でもこの頃は激務続きで休む暇も無かった。俺の身体としては丁度良かったのかも知れない。

「くう〜っ!」

大きく伸びをすると、背骨がゴキゴキと盛大に音を立てる。相当の時間を寝ていたのだろうか？

いや、そんな事はない。時計は……組み合わせを決めてから40分程しか経過していないのだから、何も問題は無い筈である。

背中が盛大に音を立てたのはアレだ、俺が年寄りで誰が年寄りだ、ゴラアツ!!!

「あ?」

ふと、自分の太股辺りに感じる違和感に気付く。

重りを足に付けていると言いますか、少し自由を束縛されていると言いますか。

まあ取り敢えず視線を下に移してみなければ何も始まらない。つう訳で視線を移す。

そこには ああもう、抱き締めたい!!

安らかな寝息を立てるイーニアが、気持ち良さそうに眠っているのだ。

決して”そっち”の趣味では無いがコレを間近で見て、和まない奴は居ないだろう。

寝息を立てる純白の少女は幸せそうで、此方の頬まで思わず綻んでしまうのだから。

「……ありがとう」

何に対しての礼なのか、自分でも分からない。

ただ、こんな幸せな気分になんてさせてくれたイーニアの笑顔に何故かは分からないが、自然と口から零れてしまった言葉だったのだ。

“ありがとう”。

俺が伝える事の出来る、最高の賞賛だ。

「さて、と」

流石に起き上がるまでこのままで居させる訳にもいかないだろう。

僅かだが、水平線の向こう側に翳りが見える。アレは多分、小規模のスコールじゃないか？

些か、この可憐なお姫様を置いていくには忍びない。

つたく、いつもならお姫様を護る騎士が居るだろうに……

「今日に限っては俺が執事バトラーの真似事か」

まっ、良いさ。

お姫様の無垢な寝顔を見た応酬としてはこの程度、お安い御用ってね。

ヴィンセント

オレ達は今、グアドループの基地内に居る。

場所はミーティングルーム。メンバーはアルゴスに少佐、それに藤代中尉だ。

「落ち着いて聞いてくれ、少佐。」

……唯依姫と紅の姉妹の片割れを乗せたボートがその、遭難しちまった……」

「あ？」

何のジョークだ、とでも言いたげに少佐の顔が歪んだ。

それは今までに見た事の無い様な表情の歪みで、思わずその場に居た全員が息を呑む。

ピクリ、と右拳が痙攣するのをヴァレリオは見逃さなかった。

その拳が振りあがる事だけは決して無い様に、言葉を慎重に選びながら報告をする。

「ビャーチエノワ少尉、だったか？アイツが急に倒れ込んで……それをユウヤが発見した。」

それで、ユウヤは唯依姫達のボートに乗り込んだが……運悪くスコールが……」

「ッ、それでノコノコ帰って来たのか！！」

部屋に居る誰かが反応するよりも早く、少佐の右腕が俺の胸元を締め上げる。

未だに殺意が湧いていないのは、もしかすれば少佐自身がこの行為の意味の無さに気付いているのかも知れない。まあ、それでもオレの危機には変わりねえ。

「やめるよ、少佐！そんな事をしたって何の意味もねえだろ！？」

「そうだぜ。今は捜索隊を編成して、スコールが弱まったと同時に探しに行くしかない。

「そうだろ？いつものアンタらしくもねえ、もっとクールに行こうぜ？」

「……………焦っても、結果は何も変わらないわ」

アルゴスメンバーの言葉を聞き、徐々に締め上げる手から力が抜けて行く。

それに伴い、少佐の顔の表情が少しずつ沈んで行った。

「……………すまん、ヴィンセント……………俺は……………」

「いや、俺は別に気にしてないぜ、少佐。

「アンタの愛しのお姫様が遭難したとあっちゃ、焦るのも無理はねえよ……………」

「焦りは禁物……………そうだな、焦りは禁物だ……………」

漸く、いつもの少佐らしいクールさが戻って来る。

「ブツブツと何か呟き、今自分に出来る最善の策を検討しているのだろう。」

「オレ達には想像も出来ない様な、奇天烈な逆転劇……………」

「それを見つけるのが、リュウジィケンザキを英雄足らしめる理由なのかも知れない。」

「……………藤代！！」

「出番が来たと思えば、遭難者捜索の為ですか……………仕方ありません

ね。

ええ、少佐の意思は汲み取れているつもりですよ？

ですが上からの許可は如何します？ たった3人の衛士の捜索に、許可が下りますか？」

「結果を出せば、過程は自ずと付いて来る。今は 頼むぜ」

「Yes, sir」

落ち着き払った挙動で、あくまでも冷静にミーティングルームを後にする藤代中尉。

オレ達が疑問を浮かべる中、少佐はあくまでも落ち着き払ってオレ達に指示を飛ばす。

だが、まずは何をやってくれるのかを教えて欲しい。

それは、オレよりもタリサの方が一段と上だったらしい。

好奇心の塊みたいな奴だからな、コイツは。

「なあ少佐、今から何するつもりだ？ 上とか、許可とか……訳わかんねえぜ」

不思議そうに呟くタリサを見て、少佐は面白そうに笑う。

多少なりとも優越感に浸って居るのかも知れない、たまに……ガキっぽいよな。

「戦争に使われるだけじゃ、勿体無いだろう？ 戦術機ってさ」

それと、その月まで届くぶっ飛んだ考え方、止めた方が良いぜ？
アンタいつか絶対、上の奴等から狙われるからさ……

剣崎

雨に濡れる機体を見上げ、3人が無事である事を心から祈る。

漆黒の装甲が俺の心情を表す様に煌びやかに光り、俺の意思も漸く定まった。

行かなければならない。

俺が、助けなければならぬ。

クリスカ・ビャーチエノワ、アレはまだ利用価値のある人間だ。

もしかすれば、オルタネイティヴ計画の手助けになるかも知れない人材でもある……

此処で失うとなれば、その損害は計り知れない。

それに裏で動く夕呼にどんな仕打ちをされるか分かったものじゃない。

ユウヤ・ブリッジス、アイツもまだまだ成長過程の衛士だ。

だが、本当の価値は別にある。それは いや、今はまだ確定事項では無い。

それでも弐型のテストパイロットに任せられ、俺の管轄下に居るのだ。助けられない訳にはいかない。

「少佐、基地内の観測機に少しばかりハッキングを仕掛けました。

今から1時間程度ならば、誰に気付かれる事も無くF型を起動させる事が可能です」

「 1時間以内に見つけて来い、って事か」

「そうなりますね」

そして 篁唯依。

今となつちや、こんな不安定な俺の支えになるうとして……

大体、巖谷さんの娘さんだ。こんな所で何かあったと知れちゃ俺が殺される。

「 んじゃ、サツサと見つけて来ますかねえ。

まあ精々、”死体になっていました”なんてふざけた結果じゃ無い事を祈るよ」

「同感ですね。此方も危険を犯す以上、結果を出さなければなりませんから」

サツサと機体に乗込み、コンソールを叩く。

ゆっくりと起動するOSにイラつきはするが、今の心境を如何にか整えるには良い時間だ。

……息を吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸って、吐いて。何度か繰り返す後にゆっくりと目を開ける。

直接眼球に映し出される映像に写る空は黒雲が満ちており、ザーザーと降り注ぐ雨が機体の各所を打ち付け、乾いた雨音を響かせていた。

《 行くか》

それじゃ、宝探しと洒落込もうじゃねえか。

見つける宝はクソガキと生意気な小娘と鉄仮面と来た。

ハッ、楽し過ぎて狂っちまいそうだな……ッ！！

雨を切り裂き、漆黒の機体がグアドループ基地から消えていく。
闇夜と同化していく様と激しい雨音のお蔭で、誰もその出撃に気が
付いた者は居なかった。

21 (後書き)

次回、『はじめての無人島合宿その1』

俺……この話を書き終わったら、唯依ちゃんとイチャイチャ(r y

登場人物紹介 『剣崎龍二に情報追加』 (前書き)

剣崎龍二の枠に情報を追加しました

登場人物紹介 『剣崎龍二に情報追加』

登場人物

『オリジナルキャラクター』

剣崎龍二

性別：男

階級：少佐

髪の色：白（夕呼からは白髪頭と馬鹿にされている）

日本帝国軍技術廠・第壹開発局に所属する衛士。

自他共に認める如何しようも無いスピード狂であり、彼の為に開発されたと言っても過言では無い特別製の不知火F型装甲を操縦する。肩に描かれるエンブレムは黒いライオン。

城落とし（ ）なる偉業を成し遂げた英雄とも言われているが、その実態は謎に包まれている。

本人曰く、それは単なる噂であり信憑性は無いとのこと。

性格は大雑把であり、何処か繊細。

戦闘の後には死者に祈りを捧げるなどセンチメンタルな一面も持ち合わせている。

それと女好き。

あと、ウィークポイントは「オヤジ臭い」と言われること。

言うと怒る、半分泣きながら。

夕呼との関係だが、帝国軍白陵基地からの同期。

今でも尚関係は続いているらしく、昔からの腐れ縁と言うよりは”お互いを対等なパートナーとして信頼している”との事。(神宮寺軍曹談)

【 81より】

試験管ベイビー

禁忌の果てに産まれた忌まわしい命

肉体的な優位は圧倒的な耐久力のみだが、一般人と比べればお話にならないレベル。

彼が不知火F?型などのモンスターマシンを完璧に乗りこなせる理由が上記。

自分を産み出した人物に対する復讐心などは持ち合わせておらず、ただ人間を愛している。

兄弟たちとは龍二と同じ試験管ベイビーの龍二以降の数字

十数名居たらしいが、現在は残り4名。それ以外は全て龍二が抹殺して来た。

戦闘能力は高く、能力吸収も早い為に龍二が世界で最も恐れる人類の敵。

本人からの一言

「あ？俺がどんな性格かって……そりやお前、紳士だろ？」

こんなイイ男、世界中探し回っても居やしねえぜ？結婚するなら俺で決まり！

………何い？嫁が居るだろ？バツキャロー、覚えが　へウンッ

!??」

【篁中尉が投げ放った灰皿が”偶然”直撃した為、撮影を中止します】

城落とし

詳細な情報は不明。

撤収する部隊の殿を務めた不知火が単機で要塞級を含むBETA200匹以上を相手に奮戦、見事に殲滅したと言う事が最も有力な情報。

藤代千枝

性別：女

階級：中尉

髪の色：黒

剣崎龍二に付き従う副官。

一応、衛士としての適性もあつたが本人曰く「人間には得手、不得手がある」とのこと。

第壹開発局屈指の天才と謳われ、若いながらも数々の機体開発に関わって来たエリート。

技術開発だけでなく、CPとしての管制や直接整備に携わるなど多彩な才を持つ。

何故、剣崎龍二の副官になったのか。

その詳細は一切不明。

本人のコメントでは「分岐点を間違えた結果であり、人生最大の汚

点」と愚痴を零していたが、その顔は何処か満足気でもあった。

性格は几帳面。しかし、マイペース。

篁中尉を弄ったり、篁中尉で遊んだり、篁中尉で笑ったりする。篁マニア。

しかし、誰よりも彼女の事を考えていたり居なかったり。

人生の先輩と言う事で、篁中尉は勿論のことタリサにも良く相談される。主に胸の事で。

因みに、本編ではその関わりをあまり描かれていないがステラと仲が良い。

あと酒豪。

ユーコン基地の全員がぶっ倒れても、彼女だけは酒を飲む手を休める事は無いだろう。

本人からの一言

「特に明言する事はありませんが……

強いて挙げるとすれば、裏方である私の事を忘れている人が居ないか心配ですね。

コレでも結構、苦勞が絶えない生活を続けて居るのですが。

まあ苦勞を持ち込むのは7割方は少佐ですが。

え？好きな物、ですか……お酒が好きですよ。日々の苦勞を癒してくれますから」

セレナ・エニックス

性別：女

階級：少尉

髪の色：薄い青（本人曰く、青空の色）

元・ソ連軍ダイナモ小隊の副隊長。

現在は龍二率いるジャツカル部隊で強襲掃討を務める予定。

才能を周囲から認められた事は無いが、射撃の才は天から与えられた贈り物だと龍二ですら認めている。射撃に関して言えば、ジャツカルで彼女の右に出る物は居ないだろう。

本人曰く、好きなポジションは少佐の隣だそうだ。

性格は良くも悪くも幼い。

基本的には確りとしているが、肝心の場面でミスをしでかす事も見られる。

その度に「セレナだから仕方が無い」と諦めた様に言われるのは「愛嬌である」。

ガラクタ弄りが趣味の1つであり、その為に整備兵達からは良き妹分として可愛がられている。

ユークン基地では主な彼女の手綱制御はヴィンセントの役目であり、彼女もヴィンセントを慕っている。

本人からの一言

「僕ですか？ いやあ、いきなり何かを喋るって難しいですね。

そうですねえ、日本に来てから好きになった食べ物はいしおからですね。

え？ オヤジ臭い？

アハハ！それは仕方ないですよ、だって少佐の
え、少佐！？

きゃっ！？あ、

違いますよ、冗談ですって！！」

【剣崎少佐の乱入があったので、撮影を中断します】

番外 学び舎の檻へ夕呼編 (前書き)

この話に出て来る剣崎龍二は性格が少々、真面目です

番外 学び舎の檻へ夕呼編

生命とは何だ？

生命とは生者と死者を分別するモノである。

生物が活動する為には”命”と言うモノが必要不可欠であり、目に見えない”命”や”魂”と言ったモノが、人間を含める様々な生物を動かしているのである。

では、”生きている”とはどのような状態を言うのだろうか？

普段我々が当然の様に活動している今現在、もしかすれば死んでいるのかも知れない。

誰にも”生きている事”を定義など出来やしないだろう。

死人に口無し、とは良く言ったものだ。

当然だ、生命活動を停止すると言うことは一切の行動を起こせなくなるだろう。

それは即ち、喋る事すら出来ないのだから”喋れない”のは至極当然の事。

もしかすればコレに如何論議をしても明確な答えと言う物は返って来ないのかも知れない。

では、次の質問に行くとしよう。

目に見えない命、魂、そして私達が理解出来ない”生きている”と言う状態。

それよりも更に複雑で、有耶無耶で、面倒な事象が存在する。

“愛”である。

明確な証明をする事が出来ず、本当に相手を好んでいるのか如何か自分では分からない。

他人に指摘されようと、結局はそれにすら気付けずに一生を終わる事も有り得るのだ。

愛とは何であるか？

これは、愛を求める我々人類にとっての永遠の課題ともなる事象である。

そこまで読み終え、パターンと本を閉じる。

「如何にも好きになれないのよねえ、こつ言う哲学チックって言うか……」

オカルトまで含まれると、苛々するのよね」

「それを俺に伝える事に何の意味があるのか、俺はその是非を問いたいがね。」

静かに本も読めんのか、お前は……呆れ返るな、天才（自称）くん」

「自称は要らないわよ。つうか、アンタそれ何の本よ？」

「『人体の秘密』女体の神秘』 R 18』」

「……この変態が」

「紳士としては当然の知識だ。何なら、実践するか？」

「そのウネウネ動く気持ちの悪い手の動き、私の前で二度と見せないでくれる?」

学び舎の檻

片腕には持ち切れない量の本を何とか持ち、目の前を歩く女の尻
いや、背中を見やる。

先程の悪ふざけが癪に障ったのか、機嫌が悪くなってしまったよう
だ。

まったく……こいつの機嫌に左右される様な生活は些か疲れる。

「それ、部屋に運んでおいて」

当然の様に命令して、サツサとPXに向いやがった。

こっちは嫌々ながらも言う事を聞いていると言うのに、何と自分勝
手な事が……

思い返すのは彼女と仲の良い女性の事。

いやはや、彼女の我慢強さには恐れ入る。

俺ならば正直、今頃アイツの顔面に拳を減り込ませているかも知れ
ん……

「ふう」

女性の部屋に男が入ると言うのも問題ではあると思うが、もう慣れ
てしまった。

何年間も当たり前の様に顔を合わせていれば、相手の事を異性とし
て認識する以前に別の何か……例えば、床に散らばっている紙屑程
度に認識する事も容易だ。

まあそんな事を本人の前で言ってしまうえば、次の日の朝には晴れて
脳味噌をシリンダーの中に入れられ、素敵な人生を送る事になるだ
ろうから口には出せんがね。

何冊もの本を散らかった部屋の、最も混沌とした机の上に置く。
その拍子に何枚かの紙が床へと落ちていったが、気にする必要も無
い。

あの女の事だ、どうせ全て頭に叩き込んであるだろう。

「……さて、と。俺もPXに向うとするかね」

時刻は既に昼を過ぎている。

あの馬鹿も気を利かせて、席程度は取っておいてくれるだろう。
いや、多分だが……

まあ期待するだけ悲しい現実を突き付けられるだけだろうな。

どうせ、アイツの頭の中では俺と言う存在は家畜程度の価値しか見
出されていない。

そう考えてみると、まるで執事のようにアイツの身の回りの世話を焼
いている自分が如何にも、滑稽に思えるが……考えるのは止めよう。
これ以上は、俺の小さな自尊心が砕かれてしまいそうだ。

PXに到着と同時に、周りを見渡すと端の方に見知った顔が2つある。

どうやら、席は取って置いてくれたようだ。

「1つだけ空席があるのは、”どちら”が気を利かせてくれたのか……まあ1つ言える。」

あの性悪女では無いだろう、絶対に。

「案外早いわね。ちゃんと置いて来たでしょうね？」

「あのなあ……俺が今まで一度でも、お前の頼みでミスをしたことがあったか？」

「さあ？記憶に無いわよ」

「……何だか、目の前が霞んで見える」

「大丈夫よ。血反吐吐くまで扱き使ってから捨ててあげるから」

何が大丈夫なのか、疑問を持ってしまつのは俺だけでは無い筈だろう。

つまりは、何か？

俺は血反吐が出るまでお前の為に働き、忠義を尽くし、結局は最後にポイ捨てされると。

何だ、その救いようの無い人生は。

悪いが俺はマゾヒストじゃないし、自分を傷付けて喜ぶ様な趣向も持ち合わせていない。

勘弁して欲しいよ、本当に。

「いい加減にしなさい、夕呼。それに龍二くんも、そんなに気を使
う事無いのに……」

それでも、この場に居合わせた精神が比較的真っ当な者ならば今の
発言は聞き逃せない。

夕呼の隣に座っていた美女　神宮寺まりも　は、夕呼を嗜める。
相変わらず、夕呼に切り掛かる事が出来るのは彼女程度のモノだ。
俺の場合、平和的解決よりも先に暴力による制圧が行われる。
女性に拳を振るうのは自称・紳士としては有るまじき行為だと思っ
のだ。

「ちよつとおく、まりも。」

コイツは私の奴隷よ？ド・レ・イ。アンタが口出しする事じゃな
いでしょ？」

まあ、それでもコイツの圧倒的な自己主義には勝てんがね！！
もうナルシストとか、自己中心的とか、自己陶醉とか、そんなチャ
チなレベルじゃない。

世界は私が回している、そう豪語する様な女だから仕方が無いが。

「俺には人権すら尊重されんのか……ああ、眩暈が……」

「龍二くん、大丈夫！？」

「それより喉渴いたわねえ。水」

「夕呼！！」

ブツ倒れ掛けた俺を支える様に抱き寄せた神宮寺、しかしそんな事
すらお構いなしと言う様に夕呼は唯我独尊を地に突っ走っている。

流石だ、と褒めるべきなのか……

まあ通常の感性を持ち合わせている神宮寺は抑え切れなかったのか、僅かながらの抗議を込めた視線で夕呼を睨み付ける。

俺ならば　まず、考えられない行為だ。

何故だか知らんが、香月夕呼と言う存在には逆らう気力すら湧かない。

それは過去に植え付けられた（強制的に、だが）優劣の差から来る一種の主従関係なのか、

それとも俺が純粹に彼女の唯我独尊な正確を好んでいるのか。

……後者で無い事を祈りたい。

もしも後者であったのならば、自分を信じられなくなりそうだ。

似た者同士ね。アンタと私って。

は？

両方とも、他の奴等に感心すら持たない。そうでしょ？

……自分の事で手一杯なだけだ

如何だか。それよりも、アンタって戦術機の適性検査の成績良いらしいじゃない？

いくつ？

……ランクはS

へえ、最高ランクじゃない

たまたま運が良かっただけだ。他にも何人かは居るだろ、多分

アンタが良いのよ

何？

面白そうだしね

俺が香月夕呼と初めて会話した時、それはお互いが未だに独りだった時。

俺達は、始めて”群れる”事の楽しさを知った。

「ん〜！楽で良いわねえ」

「あのなあ……俺は小間使いじゃない。身の回りの世話くらい、自分でやれ」

「頼んだ事無いけど？」

「……危なっかしいからだろ。お前はお茶の一杯も淹れられない」

「うっさいわねえ〜。ちょっと失敗した位じゃない」

「お前の場合はその失敗で消えていく資産の事を考えていない。

資産は無限じゃないぞ、夕呼。失敗を恐れぬ事は良いが、勇気と蛮勇を違えるな」

こんな台詞を言っているにも、やって居る事は夕呼の肩揉みだ。
俺自身もいつの間にか小間使いとしてのスキルが上達していく様だ
な……

今なら、合成食だろうが何だろうがより一層美味しく味付けする自信
がある。

……待て、俺の本職は何だったか？

「もっと強く」

「人の話に耳を傾けてくれ……」

もう慣れたがね……

ああクソ、こっちの肩は凝る一方だ。

……医務室にでも顔を出せば、肩を揉んで貰えるのだろうか。一度
試してみよう。

「ラスト10秒」

最後の10秒間程は力を強め、丁寧に肩を揉む。

コイツの肩が凝っていないのは絶対に俺のお蔭だ。断言しても良い、
絶対にそうだ。

ん、などと気楽な声を出す夕呼の頭を引っ叩いても良いが
……

コイツ、頭を引っ叩くと脳細胞が云々つまらない説教を2時間聞
かされる事になる。

……諦めよう。

「ありがとう」

「良いご身分だ。王族になったつもりかな、夕呼？」

肩を揉み終わると、労いの声が飛んで来る。

しかして、それに平静で居られる程に俺は成長し切っては居ない。皮肉気な笑顔を浮かべ、皮肉を浴びせる程度の報復を返す。

それでも尚

「王族ねえ。そんな滑稽で窮屈な生活よりも、私は女神の方が良いわねえ」

「人を超越して行き成り神の領域か……恐れ入る強欲女だな」

この女は当然の様に、俺の予想を裏切る様な答えを返して来る。見習うべきか、嗜めるべきか……

まあ良いぞ。

この女のこう言う所、俺は結構気に入っているのだから。

世界の中心へと駆け上る事など夢にも思っていなかった、男と女の薄れた記憶。

今を生きる2人の心の奥底に眠る、硬き絆の昔話。

片や、聖母になる事を望むこの世で最も優しき女性。

片や、聖母を護るが為に修羅の道突き進む愚かな獣。

これは、そんな聖母と獣の、出会いが描かれた話。
新たな道が紡がれる　その為の序章でもあった話である。

番外 学び舎の檻へ夕呼編（後書き）

息抜きに1つ、番外編を書いてみました

夕呼と龍二の絡みは……その内、もうちょっと話が進んでから……
絶対に書きたいと思っている内容だったり……

22 (前書き)

何ていうか、甘酸っぱい展開を書くのは難しいですね…

空を疾走する機体に、殴り付ける様な雨が突き刺さる。
それでもアイカメラは忙しなく動き、部下の3人を見付ける為に躍りになっていた。

『この嵐が強くては……センサーが機能しませんね』

《無いよりはマシだ。続けてくれ》

『了解。レーダーの範囲を拡大します、少々タイムラグが発生しますがご了承を』

暗い闇夜の中を疾走するF型と俺。
前すらマトモに見られない状況であろうとも、部下を見殺しにするよりは何倍もマシだ。

例え手探りであろうが、必ず見付けてやるからな！

海上スレスレを飛ぶF型の装甲が水面を削り、激しい水飛沫を巻き上げる。

もしかすれば、もしかすれば手掛かりが残っているかも知れない。

僅かでも良い……ほんの些細な事でも良い……

もう二度と、俺に部下を失わせる酷な思いだけはさせないでくれよ、
神様　　！！

『ッ、前方よりトルネードが接近中！？そこに居ては駄目、離れて
！！』

《 なっ！！！ 》

注意が、海上にだけ向けられていた所為か。

前方に接近している巨大なトルネードにすら、気が付く事が出来なかった。

巨大に捻じれ上がるソレを根元から見上げながら、あまりの脅威に思わず目を見張る。

《 何つうデカさだ……ッ！！ 》

戦術機を丸々1つ……いや、この大きさなら一撃で中隊規模すら壊滅させる事が可能だろう。

そんな常識では考えられない程の巨大なトルネードが唸りを上げ、此方へ接近している。

回避など 間に合わない！？

《 なら、対ショック！？……チイツ、この際なら何でも良い！！ 》

コンソールを叩き、目の前に迫る圧倒的な脅威に備える。

今更逃げようとも間に合う筈が無い。全ては 集中力を欠いた俺の自身の責任だ。

この巨大な自然の驚異を受け流すしか、道は無い。

ナイフシークエンスから射出されたナイフを手に取り、トルネードを怨敵の如く睨み付ける。残された手段は、ナイフを使つてのトルネード切断。

勿論、出来る筈が無い。

だから少しでも良い、あの暴力の塊に少しでも割れ目を入れられれば或いは……

生存する為には、そこから抜け出す以外に方法が無い ッ！！

声を上手く出す事すら出来ず、鈍痛が走る頭に手をやる。
薄っすらと目を開けた先に映ったのは水浸しの身体と、その水に溶ける様に混ざった赤。

赤……どうし、て……？

思考が働かず、鈍く続く痛みにも耐えながらも何とか立ち上がる。
何度か倒れそうになったがそれも暫くすればスツと良くなって行った。

段々と、フリーズしていた脳に記憶が流れていく。

トルネードに突撃し、何とか中央部まで辿り着く事が出来た。

しかし、その風力が予想を大幅に上回る力を持っており、機体ごと吹き飛ばされたのだ。

なら……此処は何処かの陸地、か？

クソツ、遭難者を探しに行った先で遭難するとは……バカバカしすぎて話にもならん。

「…………チツ」

浜辺、だろうか。僅かばかり雲から漏れる太陽の日差しがその場を照らしている。

いや……今はそれよりも俺の容態とF型の損傷状況だ。

俺が此処に居るのなら、F型も近くにある筈。
まずはF型を探す。それから、中にある医療キットで応急処置する様にしよう。

「クソツ、頭痛え」

随分と頭が痛みやがる。

それに、視界も半分程赤に染まっていて全く見えない。

もしかすればF型から外に放り出された時にハッチか何処かに頭を打ち付けたのかも知れない。ったく………そういや、紅の姉妹と始めて一戦やらかした時も最後に頭を打ち付けなかったか？

何だよ、アラスカに来てからは俺の脳細胞はガリガリ削られていくな。

文字通りの出血大サービスか？

笑えねえジョークだ。

視界の半分が奪われていようが、獣の本能には何の問題も無い。平衡感覚を失う事すら無く、スルスルと平然と歩く事が出来る。頭部に傷を負い、それでも平然と行動出来る俺は……人間と定義されるのだろうか？

成長するにつれて明確になって行く他者との差。

それを”オ”と呼び喜ぶのか、それとも”異常”として自身の事を今一度見極めんとするのか。

人によって違いはあるだろうが、俺は独自の答えを導き出していた。俺は他の者が持ち得ない“オ”を持ち得てしまった”異常者”である、と。

幼いながらにして己を異常者と認識していたからこそ、俺はこうして存在出来る。

苦汁を飲んだ日々があったからこそ、俺はこうして”英雄”などと持て囃されている。

今思えば、俺の人生は他人と比べても異質では無いだろうか？

母が死に、妹が死んだ。

戦争をしているのだ、当然の事だろう。

では何故だろう。

俺は何故あの美しかった母を、優しかった妹を、何処か”遠慮がち”に見ていたのだろうか？

「おっと」

僅かな段差に躓きそうになり、足が纏れる。

倒れそうになる身体を何とか整えると、ふと足元に視線をやった。

何かの、断片？

微妙に色が剥げ落ちてしまっている。

だが、これは確か　グアドループでボートレースに使われて……
ツ！？

「此処に、居るのか……？」

思わず辺りを見渡すが、勿論答えてくれる相手など居ない。

だが、一歩前進した事に心の何処かから僅かな安堵感が湧き上がる。

“生きているかも知れない”と言う希望が、足へと活力を送ってくれるのだ。

だが、ゴムボートが無いと言う事は帰還する手段が無い事と同意の筈だ。

これは益々、F型が必要になって来たな……

身体は痛むが仕方あるまい、アイツ等を見付ける前に如何にかしてF型を見つけよう。

機体が動かなかろうが、通信さえ繋がれば如何にでもなる。

最悪、通信が繋がらなかつと3日程は耐えられるレーション程度の食料ならば入っている事だろう。3日もあれば、余程の馬鹿でも無い限り探す事は出来る筈だ。

「……あとは神に祈るのみ、つてね」

ズキズキと頭は痛むが、今は歩を進めるしかないだろう。
生きて帰る為にも。

…

…

…

と言つか、この場を何と無く総合評価演習の場と被らせてしまったのは俺だけだろうか？

無人島に放り込まれ、ナイフ1本で1週間生き残れと言われた時に比べれば些か楽だな。

F型さえ見つけければナイフだけで無く、銃まである。
それに簡易なテントも搭載されている筈だ。

「……俺の受けた試験って、厳しかったのか」

漸く、その事実に向り着いた時は少しだけ凹んだ。

浜辺を探索すること1時間……程度だと予測している。

とは言っても体内時計だ、大雑把にも程があるレベルだが。

取り敢えず、目標のF型を発見するに至った。

頭の上から塩水と海草を被り、先程までの雄々しい姿は成りを潜めている。

右腕は肩から先が完全に消し飛んではいたが、他には目立った損傷は見られない。

装甲板に付いた小さな傷程度なら、実機演習をした際にも付く程度のレベルだろう。

まあパツと見た程度で分かれれば苦勞はしない。

一応、跳躍ユニットが正常に稼動するのかわだけは確認した方が良さだろう。

「つたく、海草だらけだな……俺の特等席だぞ、そこは」

半ば程まで開け放たれたハッチから中を覗くと、そこはまるで海の中を切り取った様な場所だった。つまり、海草だらけなのだ。見事なまでに一面が。

それを払い飛ばしながら何とかコンソールを目の前まで持つて来て、機体の状況を引き出す。OSが機動したのを確認し、取り敢えずは一息吐く。

何とか、機体のコンピューターは動くらしい。少々嫌な音が混じってはいるが……

まあコレならば、何とか基地に救難信号を送る事も出来るだろう。

一先ず、第一難関はクリアしたと言っても差し支えは無い筈だ。

救難信号を出しておけば、何れはグアドループ基地の奴等も気付く事だろうからな。

救難信号を出した後、直ぐに救急キットで頭に出来た裂傷を消毒。

その後すぐ様、使えるであろう物だけを外に放り投げてF型の傍を離れる事に決めた。

此処に居ても、3人は見付からないだろう。

取り敢えずもう少し奥に言ってみる事にしようと思っている所存だ。

何よりもゴムボートはあそこに”あつた”と言つよりも、”漂流”して来た様に感じる。

その事から考えても、此処の近辺に3人は居ないのではないだろうか？

潮の流れから考えて……此方の反対側、では無いかと睨んでいる。

「まっ、行けば分かるがね」

今は行動あるのみ。

少し大きめなテントは此処に置いていこう。嵩張るだけで、邪魔になる。

持って行く物は最低限の食料と水、それにナイフと銃さえあれば良い。

ああでもこう言った感じの場所では洞窟が入り乱れている可能性もある。

ライターもあつた方が吉か……煙草が無いのにライターを持ち歩くとは、寂しいねえ。

ユウヤ

目の前に出て来た見知った顔が血だらけで、それでも気楽に「よう」などと挨拶して来たとしたら、アンタ達なら如何思う？

中尉からの命令でクリスカと行動を共にして居た俺は、草を掻き分けて突如として現れた謎の”何か”に思わず身構える。

それは此方を警戒する事もせず、溜息と共に安心した様に笑っていたのだ。

「よう。元気か、お前等」

右目は塞がっており、その上を真紅の血がコーティングしている。決して開こうとはせず、左目だけで此処まで来たのだろうか？

……ん？

「アンタ、何で此処に……ッ!？」

「お前達が遭難したって聞いて飛んで来た。

まあ……恥かしい限りだが、途中でスコールと正面衝突して今はこの様だ」

恥かしそう、と言うよりも心底参った、と言う様に頭を掻くのはオレ達が良く知る人物。

リュウジ「ケンザキ少佐だった。

その姿はいつもオレ達が思い浮かべる様な余裕を持った姿では無く、長旅で疲労が溜まった旅人の様に見えてしまうのは、彼が本当に疲れているからなのだろう。

と言うか、この男は片目が使えない状態でこの島を探索したのか？

どんなサバイバルスキル持ちだよ、アンタ……

「クリスカ、元気そうで何よりだ」

「あ、ああ」

心底驚いたとでも言う様に、クリスカは口を開けている。

オレだってそうだ。

こんな場所まで、まさか少佐が探しに来るとは……

しかも話を聞く限り、許可を取らずに戦術機で探しに来たと言う。後々、どんな処罰を受けるか分かった物じゃない。

最悪 降格される事だつて十分に有り得る筈だろう。

それでもこの人は、オレ達を助けに来たつて言うのか？

「取り敢えず水にレーション、一応救急セットもある。怪我人は居るか？」

「……目の前に、1人」

至極当然の事だが、混乱の極みに居るのであるうクリス力は少佐を指差し言う。

確かに、そうだ。

怪我人は如何考えてもアンタだろう。

「ムツ。コレでも一応、止血はしてある。顔の血は……擦ると痛いから取りたくない」

「そんなガキみたいな理由で ツ！」

「うるせえな。別に良いだろ」

サツサと会話を切り上げると、少佐は案内しろとも言いたげに此方を見詰める。

中尉が此処に居ない事から、既に”動けない”状態であると察したらしい。

力強い目から感じるのは、中尉に対する心からの心配。

一刻の猶予も無い状況ですら無い筈だが、それでもこの男から感じる勢いと言う物がオレとクリス力を急かす様に告げていた。

剣崎

案内された横穴。

そこには、確かに唯依ちゃんが居た。

フツフツと湧き上がるのは怒りか、それとも生きていた事に対する感嘆か。

まあそれでも

「返って来たのか、少　っ!？」

「こんの、バカムラアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

今は関係など無い。

コイツを怒鳴ってやらねばならんと俺の本能が告げているのだ。

辺り一面に響き渡る怒声と、その後続く直下型ボム《げんこつ》
落下の轟音。

ギンギンと耳に音が響いているが、今はそんな事如何でも良い。

「いつもならお前が俺を叱責する立場だろうに、今回ばかりは立場
が逆だな!

何か弁明はあるか、篁中尉! あつたとしても聞く気など無いがね
!!

取り敢えず、そこに座れ! ああいや、楽な格好で結構。

本題から外れたか……兎に角、なああにやっとなるか、お前は!!」

二発目の直下型ボム《げんこつ》が辺りを響かせる。
横穴に入る前に、既にユウヤとクリスカを入り口に待機させている。
「直ぐに終わらせる」と少々ドスを利かせた声で警告しておいたの
で入って来る事は無い。

「す、すみません、すみません　ッ！」

「拳句の果てに怪我まで……応急処置が乱雑うっ！！

何の為に、俺が、お前に、キツチリと、キツチリと、応急処置を教えたか分
かって居るのか！？」

はい、訓練兵時代の俺の口癖復唱！！！」

「た、隊の者が不慮の事故により　」

「声が小さい！！！」

「隊の者が不慮の事故により負傷した際、他者の迅速な処理によっ
ては一命を取り留める事もある！！　決して、応急処置を蔑ろにし
ない事！！！」

背筋を伸ばし、薄っすらと涙を浮かべながらも昔の俺の口癖を復唱
する唯依ちゃん。

うむ、覚えては居た様だな。
だったら何故

「もっと丁寧な応急処置が出来ないのか？このバカムラ。お前など
一生バカムラだ」

「うっ……」

はあ、と溜息混じりに唯依ちゃんの足元に膝を付く。
足は折れては居ない様だが、随分と腫れ上がっている。
たいした処置も出来ずに放置してしまった結果だろう。
恥ずべきは教えていた自分、か……まったく、必死になって教えて
やったというのに。

「捻挫は良く3日冷やし、4日目から温めると効果的だと言われている。

打撲や捻挫によって内出血を起こると、酸素を供給する血液が不足してしまう。

その為、患部が酸欠状態になる。

そこで患部を冷やすと代謝を抑えて酸素の消費量を少なくし、炎症を抑えることが出来る様になっている。血腫ができて回復に向かう頃に患部を温めると、新陳代謝を活発にし、内出血で生じた血の固まりを早く吸収する事が出来る。

血腫ができるまでに2〜4日のタイムロスがあるからな。

こつ言った意味で「3日冷やして4日目から温めるとよい」と言われている」

ウエストポーチから取り出したテーピングを巻き付ける。

処置をしている最中も口は止まる事を知らず、過去に記憶した捻挫についての記録を掘り起こしていた。ただ単に、俺が満足したいだけなのかも知れないが……

「教師から教え子に教えるのは、今回で最後にして欲しいがね」
最後にテープを切り、確りと固定する。

気分は少々ブルーだ。

怒鳴り込んで、頭まで引つ叩いて、最終的には怪我の治療の面倒を

見る。

何と言うか……

甘やかしてしまってるのは俺自身と言いますか、今回のような結果を招いてしまったのは俺の所為と言いますか。まあ悪いのは俺であって、決して彼女じゃ無い訳だ。

そりゃ、こんな場所で怪我をした唯依ちゃんに全く罪が無いと言っ訳では無い。

だが、もとを糺せば俺の監督不届き。

どうやら、罰則だけでなく何枚もの書類を書き連ねる事になりそうだな……

「おい、バカムラ」

それでも、俺は”教える”立場に立っていた人間だ。

教え子が傷付く様を見ても平然としていられる程の、強固な心臓は持ち合わせていない。

だから、言っておかないといけない。

「は、はい？」

このバカムラに。

「心配掛けさせやがって。もう二度と、俺の傍から離れるな」

先程の拳骨とは違う。

優しく、親が子を諭すように。

俺の手は自然と、唯依ちゃんの頬へと触れた。

「！？」

驚いた様に見開く唯依ちゃんなど、知ったことか。

クソツ、この野郎。

ホントに迷惑掛けやがって……グアドループに付いたら何させてやるうかな。

取り敢えず、水着の撮影会か？

いや、そりゃもうメイドの如く奉仕か？

それより、もう一度初めから知識を叩き込むか？

「おい、バカムラ」

聞こえるか、バカムラ。

見えるか、バカムラ。

分かるか、バカムラ。

俺は、泣いているぞ。

俺は、喜んでいるぞ。

俺は、嬉しいぞ。

これも全部 お前のお蔭だ。

「もう、勝手に居なくなるなよ……？」

まあ兎に角今は生きていてくれて、ありがとう。無事で良かった。

心に湧き上がるそんな思いと共に、俺は彼女を強く抱き締め
いた。

22 (後書き)

感想を頂けたら幸いです

23 (前書き)

ウオオオオオオツ!!

燃え上がれ、俺のコスモオオオオツ!!!!

……駄目だ、こんな暑い世界じゃ生きていけない

篋

暖かな体温が、私を包む。

首筋に掛かる吐息が人間的で、この時が永久に続けば良いのにと心の中で願ってしまった。

思わずと言った具合に、彼の背中に両手を回す。

そうすれば、もっと近くで彼を感じられるから。

筋肉質な胸に顔を埋める事は恥かしくて出来ないけど、今はそれでも良い。

今、この温もりは私だけの物なのだから……

それがどうしようもなく嬉しくて、切なくて、胸が張り裂けそうになる。

「少佐、あの……」

顔を上げれば目と鼻の先に迫る” 剣崎龍二” として、彼の素顔。

……？

顔の半分を覆うのは、赤い何かの……液体？

それは生物の身体に流れている物。

傷を付ければ体外へと流れ出てしまう物。

既に硬くなってしまったそれは 血液。少佐の、血液が目を塞いでいる。

何故、貴方がそんな事になっている。

傷は？

消毒は？

止血は？

誰の所為で？

誰の為に？

何故？

どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？

どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？

どうして？どうして？どうして？どうして？

「うおッ！？」

右目に触れた時、彼は思わずと言った具合に身体を退いた。

痛むのだろうか？

何かで消毒をしなければ、菌が入ってしまう。それではいけない、

駄目だ、絶対に。

「あ、あの、唯依さん？」

まずは……血を綺麗に拭き取らないと。

そうしなければ、傷口を見る事すら出来ない。

顔を確り固定して 逃げられない様にしなければ。

ああ、コレで逃げられない筈だ。

「ちよっ！痛い！頭が痛い！！俺、そう言う性癖の持ち主じゃないからね！？」

何で血を拭き取れば良い？

此処には血を拭い取れる様な物は無い。

ああ　ならば、

「か、顔が怖い！顔が近い！瞳孔が、瞳孔があああああつ！！！！」

舐め取つてしまえば良い。

「ピギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！！！！！！！」

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

ユウヤ

「……………」

「ッ……………私は、一体何を……………？」

洞窟から出て来た中尉と少佐。

洞窟へ入って行った時よりも明らかに少佐は疲弊しており、この中

で中尉と何か悶着があったのだらうとオレは予測する事にした。
しかし、少佐の顔に張り付いていた血糊が今はスツキリと剥がれ落ちている。

その事を聞いてみようと言を聞いたが、次の瞬間に返って来たのは感情の籠っていない瞳と、「何も無かった」と機械音声の様に繰り返す少佐の声だけだった。

……聞くのは止めよう。
本能が、そう告げている。

「……無事か、少佐」

「っ?!……問題無い。そうだ、今は至って何も問題は無い。平然としろ、俺……」

そう、アレはただの洗浄行為だ。それ以上の何でも無い。意識する必要は無い」

1人ブツクサと何か呟いた後、「無事だ」といつもの飄々とした声が返って来た。
何度か頭を掻くと、調子を取り戻すかの様に2、3度軽く飛び跳ねている。

「F型が直ぐそこにある。
救難信号を出して未だに数刻と経過しては居ないが、此処に居るよりは安全だ」

「F型つて……ホントに戦術機引つ張り出したのか、アンタ……」

流石のオレも驚くしかない。

たった3人の兵士搜索の為に戦術機 しかも、試作型 を引つ

張り出して来たのだ。

戦闘中もブツ飛んだ事を考える奴だったが、まさか此処までやる事は……

「部下の為だ。上のクソ野朗共の文句なら、後でタツプリ聞いてやるぞ」

上からの輦盛を買う事は間違いないだろう。

だが、この人は下からの圧倒的な支持を受ける。

佐官でありながら階級の差など気にせず、いざと言う時は自分の降格すら厭わずに俺達の為に此処までする男なのだ。

日本人ではあるが尊敬出来る男だろう。

「アンタ凄えよ」

口からは感嘆しか出て来ない。

自身の階級も、今までの功績も、評価も、何もかも投げ捨てて行動出来る男。

コレが、日本人という物なのだろうか？

……いや、違う。

こんな事が出来るのはきっと、この人だけだろう。

“Black lion”……孤高の獅子として君臨し続ける影には、こんな優しさがあるのか。

「何だよ、急に」

俺の賞賛をフツ、と鼻で笑い飛ばしながら少佐は首を竦めた。

その後も話を聞いていたが如何やら、F型の元へ行く為には問題があるらしい。

それは足を負傷している中尉では間違い無く辿り着けないという事。その為、中尉を背負う事になるのだが

「すまん、お前が頼む」

目を逸らしながら俺に一任された。

アンタがやれば良いだろ！？と言い返そうと思ったが、洞窟の中で何かあったのだろう。

……目が、口ほどに物を言っている。

「じゃあ、少佐。アンタがクリスカを背負えよ」

「ああ、そっぴや病人だったな。良いぜ、別に」

「なっ………！」

少佐の気楽な返事と、驚愕を露にするクリスカの表情の温度差が激しい。

何か言われる前に、サッサと行動しちまおう。

訳が分からず、と言った具合の中尉に状況を説明し、取り敢えず後ろを軽く振り向く。

そこには 険悪、と言って差し支えの無い状況が広がっていた。

「乗れ」

「断る」

「乗れ」

「断ると言っている」

「乗れ」

「断固、拒否する!!」

肩膝を付き、背中をクリスカへと向けて居るのだが一向に話が進まない。

先程から”拒否”だとか”断る”だとか、その繰り返しだ。いい加減にして欲しいとは思うが、それなりの理由があるのだろう。俺には分からない。例えば、男性恐怖症とか？

「……なら、自分で歩くのか？」

「当然だ」

これ以上の押し問答は無駄だと判断し、クリスカを歩かせる事を選択する。

何を言ってもこの頑固者には通じやしない……
本日何度目になるか分からない溜息を吐きながら、第一步を踏み出し

「ッ!？」

ふら付いたクリスカを右腕で支える。
面倒臭い奴だな、と呟きながらガミガミと文句を言われる前に後ろに回りこみ、ふわりと彼女の身体を浮き上がらせる。
俗に言う「お姫様抱っこ」って奴だ。

「騒ぐなよ」

「何をする！降ろせ！」

「ああ〜ハイハイ。ちゃんとゴールまで到着したら降ろしますよ」

「私に、触れるな　　ッ！！」

流石にいつまでも我侷を言われて黙っている程、俺も大人じゃない。ギャーギャーワーワーと喚かれ、反論ばかりされて苦言の1つも出ないだろ？

馬鹿を言うなよ、悪い子にはお仕置きだ。

「…………お前がぶっ倒れなければ、俺も無駄に怪我を負う必要性すら無かったがね」

少々、棘のある物言いになってしまったがこれ位言わなければ黙らないだろう。

喚かれるよりは黙っていて貰った方が運び易い。

此処でどれだけ関係が悪化しようが、修復は出来るのだ。

…………このタイプが相手となると、時間は掛かるが。

「　　ッ」

それ以来、クリスカは急に大人しくなった。

黙っていれば年相応の小奇麗さがコレでもかと言つ程に漂つて来るが、普段は辛口過ぎる。

まあ、それすら性格の一端として愛してやらなければ一緒にはやっていけないだろう。

……将来に不安が残る子だな、クリスカは。

それに比べてイーニアはイイ!

アレはもう、存在が癒した。存在しているだけで癒してくれる。

イーニア万歳! イーニア最高! イーニア、是非とも俺の養子にッ!!

「 私は、海が恐ろしい! 」

半ばトリップ仕掛けていた俺の耳に、小さく消え入りそうな声が響く。

何事か、と声を発した本人 クリスカへと視線を向ける。

まるで独白の様に、淡々と、彼女は己の心情を静かに吐露し続けた。

「イーニアも私も、海をこんな間近で見たことが無かつたのだ……」

「……」

僅かながらも、クリスカの身体が震えていた。

内心で俺は彼女を”恐れる者を知らぬクリスカ様”と認識して居たが、如何やら違うらしい。

何かに対し恐怖し、それを誰かに見せまいと必死に隠すその姿。

俺の様に恐怖せず、怯えず、ただ突貫と殲滅を繰り返す機械の様な男よりかは

幾分も、人間らしい仕草であろう。

「あんな巨大で、底知れぬ水の塊がある事が……信じられない……」

それが動くことなど、信じられない……
見るだけなら、平気で……せつ、戦術機に乗っていけば平気なの
に……

沖に出ると……吸い込まれてしまいそうで、恐ろしい」

吸い込まれる、か。

強ち間違っても無いのかも知れない。

地球上の7割を支配する海と言う”王者”に対し、俺達のような人間
は小さ過ぎる。

そのスケールの違いに、心の何処かで恐怖してしまう。

それは 致し方の無い事だろう。

恐怖し、拒絶し、理解しない。それでは前には進めないが、無理に
進む必要も無い。

怖いのなら仕方が無いだろう。

無理に強要しては心の傷を抉る事に他ならないのだから。

「俺もさ、あんまり海は好きじゃねえな」

「……え？」

だが、その恐怖を持つのは自分だけじゃないと言うことを知って欲
しい。

お前と同じ様に”何か”に恐怖し、悩む存在も居ると言う事を。

「海の中じゃ全身に風を感じられない、風は俺にとって命と同等の
存在だ。」

一時的とは言え、その存在を感じられないのは俺にとっても怖い
事だ。

それに、あんまり泳げねえし」

実際の所、後半の理由が大部分を占めるのは秘密だが。

それでも彼女を安心させる為ならば、コレ位の嘘は許される範囲だろう。

嘘はあまり良くないが、誰かを安心させる為の嘘は優しさの現われでもあるのだから。

「……十人十色。人が十人も居りゃ、それぞれ違いが出るだろう？
良いじゃねえか、海が嫌いでも。まあ、それで無茶しちや世話ねえが……」

でも、お前がイーニアを護る為に無理してまで沖に出たと言つのは評価出来るな」

一度言葉を区切り、耳を澄ませば聞こえて来る水面の音に集中する。柔らかな中にも力強さを感じるそれは、広大な海の力を教えてくれる。

「お前が羨ましいよ」

F型へ向つ為に歩き出すと同時に、俺はただそれだけを告げる。その後、F型へ辿り着くまではお互いが終始無言だった事を追記しておこう。

クリスカ

“お前が羨ましい”

TYPE-94/Fと呼ばれる改修機の上に辿り着いた後も、その言葉を反復し続ける。

何故、羨ましいのだろうか？

それが理解出来ない。

何者にも縛られず、己の道を突き進む様な男が私に何を見出したと言うのだろうか？

最初の出会い。

イーニアの声に明らかに動揺し、その隙を付き跳躍ユニットを撃ち抜いた。

お互いが相手を認識出来る様な時間は無い。

それが、初めての出会い。

二度目の出会い。

鋭い敵意　アレは、敵意を越えた殺意　を向けられた。

一触即発の状況。

今すぐにも激突する瞬間、お互いに制止の声が掛かる。

渋々だが、洗浄を後にした。

三度目の出会い。

ソ連の軍事施設の中。

ウロウロとしていた所を発見した。

銃口を向けようが、一切怯む事無く真っ直ぐに此方を見返す瞳は今でも覚えている。

思い起こしても、何も分かりはしない。
だが、1つだけ”感じた”こともある。

“羨ましい”の一言がリュウジ・ケンザキと言う男の全てだと、
理解してしまった。

鎖に縛られる事を嫌い、

己の信念を貫き通す強き心を持ち、

誰にも負けぬ圧倒的な武を持つ男が　何故、私を羨ましいなどと
言うのだろうか？

分からない。

分からないのだ、私には……

「一応、テントは用意しておく。狭くて悪いがお前は唯依ちゃんと
一緒にゆっくり休め。」

流星にその格好じゃ寒いだろうからな。毛布も何枚か置いてある」

「あ、ああ」

何故、お前は今までに出会って来たどんな人間とも違う。

お前は一体、”何”だ？

23 (後書き)

感想など書いていただけると幸いです

しっかし暑い……

扇風機も大破したことだし、折角だからエアコンにでも買い直そうかしら

24 (前書き)

まだだ、まだ終わらんよ……！
終わらせる訳にはいかん、この投稿ラッシュを此処で終わらせる訳には
ッ！

剣崎

張り詰めた緊張感からの開放。

それは、俺の意識を奪い去るには十分過ぎる出来事だった。

俺自身が無理をし過ぎて居たのかも知れない。

漂流と同時に唯依ちゃん達を探し回り、疲労すら無視して歩き続けた。

その結果として 耳を貫く轟音が聞こえた瞬間、膝の力が抜けるのを感じる。

……グアドループから来たヘリだろう。

俺達を探す様にライトが煌き、それを見たユウヤがF型の足元に置いてあった信号筒を手にとって走り去っていった。

どうやら、無事に助かったらしい。

もしかすると、F型を運び出す為にも、ワイヤーでも降ろして来るのだろうか？

だったら手伝わなければ……

開発衛士になったと言うのに、俺は”彼女”を傷つけてばかり居る。せめて、彼女の為に少しでも恩返しをしなければ 少しでも……

「あ、れ……？」

一歩踏み出そうと足を出した瞬間、グラリと視界が揺れる。

そのまま力を入れるまでも無く、身体は地へと伏した。立て、と脳に指令を伝達しようが筋肉が一切働こうとはしなかった。何と無く、こうなる事は分かっていたがまさか容易く倒れ伏すとは思ってもしなかった。

予想を超えるダメージのようだ。

ああ……頑張り過ぎちまったのか。

瞼が重い。

せめて、アイツ等が救助されるまでは起きて……居なければ……

もう無理だ。瞼を閉じてしまえ。

目が覚めれば、きっと全てが元通り。

何事も無かった様に、日常は動き出してくれる。だから、今は瞼を閉じよう。

今だけは、瞼を……

意識が深い闇へと落ちて行く。

俺の意思とは関係無く、深く暗く心地の良い地の底へと ゆっくりと。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

「無茶のし過ぎですね。風邪です、ケンザキ少佐」

薬の匂いが鼻を吐く医務室。

あの後、ヘリによって救助された俺は直ぐ様に医務室へとブチ込まれた。

それなりに危ない状況だったらしい。

身体は衰弱し、体温も雨によって奪われている。

その為、あと1時間遅ければ命にすら関わっていたとセンサーは言っていた。

「いやあ〜年甲斐にも無く羽目を外しちゃいまして」

「あらあら。駄目ですよ？」

クスクスと笑い、センサーはゆっくり休んで下さいと言い残して医務室を出て行った。

どうやら、俺の様子を藤代に報告に行く様だ。

こりゃ、相当な罵倒の嵐だろう。

ああ〜……不貞寝でもしようかねえ。

1人で使うにしては少し大きめのベッドで寝返りをうち、真っ白な天井に視線を移す。

そう言えば、他の奴等は元気だろうか？

唯依ちゃんの足は？

クリスカの奴は、”お姫様抱っこ”を未だに恨んで居るのだろうか？
ユウヤは……特にねえ。アイツ、元気だったし。

「……つう事は、ダウンしたのは俺だけか」

無性に恥かしい現実。

女の子陣ですら無事に帰って来たと言うのに、俺はダウンか!?

恥かしい、凄く恥かしい!

このまま穴を掘って埋まりたい!

寧ろ、埋めて欲しい!

早急に、迅速に!! あ、でも怖いのは嫌だ。

「チツキシヨウ。何か楽しい事でもねえかなあ……」

そんな事を呟きながら、天井を見上げる

今の俺にはそれしか無かったのだから、仕方ないと言えば仕方の無い事である。

そうだ。

俺は知らなかったのだから仕方が無い。

いや、知らなくても良かったかも知れないが……

俺がダウンし、医務室でグータラと惰眠を貪り尽くしている時。

外では 唯依ちゃん、クリスカ、イーニアの3人による”撮影会”が行われている事を。

知っていたら行動を起こして居たさ。

例え、医務室の前に兵士が立っついていようがそいつ等を薙ぎ倒して見に行っただ筈だ。

イーニア可愛いよ、イーニア!!

きっと彼は、彼女等と獣達を分かっフェンスの前でこう叫んでいた事だろう。

近頃はクール路線を辿り続けていた彼にとって、此処最近の目に余る言動は全て抑えられていた気持ちと言うか、叫ばずには居られない思いと言うか、ストレスが爆発したと言うか、まるで馬車馬の様に扱き使われていた過去の傷と言うか……

兎に角、グアドループ基地にて剣崎龍二のイーニア愛は爆発して居た。

その後、撮影会の写真が裏ルートで取引される事になる。

その際に、何故かイーニアの写る写真だけは全てレートの3倍以上の価格で落札された。

誰が落札したのか。

何の為に。

それは未だに、謎のまま闇の中へと葬られていった。

「癒されるぜ……ふう〜」

その後、アルゴスと俺達は無事にユーコン基地へ戻る事となった。帰りの飛行艇の中、千枝から凄まじい小言の攻撃を受けたのは……また今度にしようか。

風を切る音を響かせながら、1機の機体が宙を掛ける。

狙い済ました様に飛来するレーザーを回避する為、機体が回転する。

ロール、ロール、ロール、ロール ショット。

インターバルへ入ると同時に銃口が火を噴き、一撃で数匹の光線種を撃ち殺した。

それでも尚、高速機動は止まる事を知らない。

眼前で発射体勢へ移行しようとする重光線級の胸元に飛び込み、装備された武器による一斉発射が展開された。

ズガガガガッ、と盛大な音と共に血液がシャワーの様に流れ出る。

それを一切拭う事もせず巨大な死体を蹴り飛ばし、光線級を数匹下敷きにしてしまう。

戦術では無く、一方的な暴力とも言える戦い方である。

光線級を捌き切ると、機体が嬉々として空へと飛び上がって行く。

縦横無尽に空を飛び回り、抗う事の出来ない災厄の様に死をばら撒き尽くす。

要撃級は上空から頭を吹き飛ばし、

突撃級は後方から身体を消し飛ばされ、

小型種など機体が地面スレスレを滑空するだけで吹き飛ばされて行く。

見ている痛快なその光景。

しかし、それすら慣れてしまえば 至って当然の結果である。

「……少し改良を加えてみたけど……改良の余地アリ、か」

機動力は相変わらず申し分無いが、機体が如何せん少佐の技術に付

いて来られて居ない。

先代のF型であればフィードバックデータの補助で何とか少佐の機動を叩き込み、ギリギリで付いていける程度にはなっていたが、2代目には受け継がれていない。

いや、正確に言つと未だに入れていないだけでデータ自体は残っている。

だが、直ぐ様搭載してしまえばそれは成長を止めてしまう事に繋がってしまうだろう。

今はまだ、その時では無いのだ。

「少佐、具合は如何ですか？」

現在進行中で、必死になりながらもシミュレーターをこなす少佐へ声を掛ける。

返つて来たのは声では無く、激しいノイズと画面に浮かび上がる墜の二文字だった。

《常識的に考えて……いきなり新しい機体は、難しいだろう》

良く言う。

既に敵の撃破数のカウントは一向に役目を果たしていない。

カウントストップ限界まで敵を殺し続けた男が、”難しい”とは言つた物だ。

これでは一般的な衛士が己を卑下しかねない事態だろうに。

「作業時間3時間と22分……良く集中力が持続出来ますね」

《そんなに、か……？》

「ええ」

《そうか……気付かなかった》

大層驚いたと言う様に驚愕を露にして居たが、一度呼吸を取り戻す
といつもの飄々とした余裕を取り繕っていた。
戦闘中とは違う、いつもの気の抜けた姿だ。

《でも、良い機体って事は確かだぜ。

俺のフィードバックデータさえ積みめば、間違い無く最高タイムを
叩き出してやれるさ》

「まあこの”機体”が世に出るか如何かは未だに決定していません
し……

それに、コレはあくまでもデータ上の話です。実戦では感覚が

「

《天才開発者の藤代千枝が、随分と弱気だな》

「……私は徹底した現実主義者なので」

頭が痛くなる。

つたく、誰が貴方の為に毎日機体案を考えていると思ってるのか
……

遭難から帰った後の始末書に報告書、それにF型の整備などなど。

それと何故かは知らないが、上から少佐に言い渡された罰則は3日
間の自室待機。

軽過ぎると思っただが、何かしらの”力”が彼に働いているという
事だろう。

そつでも考えなければ納得出来ない事態だ。

無論、私にとってはF型を完成させる為には少佐の力が必要になる。その為、罰則がコレほどまでに軽いと嬉しいのだが。

それにしても、彼の性格は何故こうも飄々としているのだろうか？日常生活でも戦闘中の様な、静かな一面を見せてくれれば些か楽になるだろうに。

「ではシミュレーターは引き上げましょう。

後日、今回のシミュレーターのデータを纏めて送って置きます。確認して下さいね」

《了解つと》

さて

では、もう一苦労するのでしょうか。

F型の改造案を幾つか提示し、データだけでも纏め上げなければならぬ。

それに巖谷中佐にする報告もある。

まったく……お酒でも飲まなければ、到底やってられない事態だ。

剣崎

テストは無事に終了。

新しい概念の元に造られた新しいF型は中々、面白い機動が出来た。単純な機動性能だけで見るのなら、きっと先代を超えている事だろ

う。

つう訳でシミュレーターを無事に終え、多少なりとも時間的余裕が出来た。

このままPXに雪崩込み、飯を食っても良いが……それじゃ詰まらん。

折角だ、アルゴスでも突っついてみるか。

俺が暇だからな。

いつも可愛がってやっている礼だ、今日位は暇潰しに手を貸しやがれ。

「いやあくやっぱりアルゴスはアラスカ最強だな！」

幾分も楽しそうに喋るタリサの音が、廊下にまで漏れて来ていた。

何だ、アイツ等もシミュレーター上りか？

折角楽しめると思ったが、人生上手くいかねえのは世の常だな……非情に残念だ。

まっ、少しくらい話を聞いて置くのも悪くは無いだらう。

そんな訳で、ドアからひょっこりと首だけを覗かせてみる事にした。

「今まで散々脚を引っ張っていたユウヤが立派に成長して、漸く元のレベルに戻ったって感じだ！」

よくやった！！」

上から目線で偉そうに語るタリサの後頭部を見詰めながら、軽く部屋を見渡す。

ヴァレリオは気付いている様で、軽く右手を挙げて来た。

ステラからはウィンク。

ユウヤはやれやれと言った具合に頂垂れている。

何だよ、お前等の大好きな上官様だぞ？もうちいっと良い反応を示してくれ。

「随分と偉そうだな、マナンドル少尉」

つう事でタリサの頭部側面を両の拳でグリグリと締め上げる。

声にならない悲鳴が部屋に響き渡り、他の3人はあまりの絶叫に耳を塞いでいた。

おお、良いリアクションだ。

これこそ俺の求めていたリアクションその物だ。流石だな、タリサ。

「ハア……ハア……、ツ……ハアツ……！」

「何だ、随分と機嫌が良いな。何か良い事でもあったのか？」

「ああ、うちのユウヤ先生が絶好調って事かな」

「へえ、そりゃ結構。俺ああの遭難事件の一件から如何にも調子が悪くてなあ……」

「もしも今BETAに攻められでもしたら、余裕綽々で叩き落されるだろうな」

「おいおい。怖い事言わないでくれ、少佐！」

「もしも生きていたりしたら、その回収任務はオレ達の役目になるかもしれねえのに！」

「何だ、その言い草。サツサと死ねってことか？」

「言葉の綾だ、言葉の綾。怖い顔するなよ、少佐」

「でも、貴方が死ぬところなんて誰も想像出来ないわ。
直接貴方と戦った私達なら貴方の実力がどれ程の物が、理解して
いるつもりだから」

ヴァレリオのジョークの後に来る、ステラの切り込み。

スツと喉元にまでナイフを突き付けられる様な感覚に一瞬だが身体
が強張る。

そりゃアレか？

実機演習に乱入した事に対する当て付けか？

いや、待ってくれ。アレは確かに俺が悪いと言う事でキツチリ謝

「痛ってえじゃねえか、このポケ少佐あぁっ！！！！！！！！！！」

「痛えっ！！」

「何しやがる！テメエ、殺す気か！？」

「テメエ、殺す気か！？いきなり飛び膝とは、良い度胸じゃねえか
！！」

「いつその事テメエ始末しちゃうかなあっ！少佐権限とか使っちゃ
おっかなあっ！！」

「やってみやがれ、クソツタレ！！」

「っるせえ、サル！テメエ、今すぐ檻の中にブチ込まれてえらしい
な！！」

「上等だよ！やってみやがれ！！」

「やってやるうじゃねえか！！面貸せ、クソ猿！！」

激化する罵倒暴言。

お互いの顔が接触するまで僅か1cmと言う所になると、関係無い。

鼻息が掛かるのが、

鼻と鼻がくっ付くのが、知らん。

このサル 初日と同じか。

また、俺の怒りの炎を着火させたい訳か？今回は不完全燃焼じゃすまねえぞ。

完全に燃焼し切るぞ、この野郎。

「シミュレータールームだ！サツサとしゃがれ、ウスノロ！！」

「上等だ！アンタが負けたら、裸でグラウンド20周だぞ！！」

「だったら、テメエが負けたら頭スキンヘッドだ！！」

「上等だ、ゴラアツ！！」

見事に声がダブリ、俺達は怒りに身を委ねながらシミュレータールームへと向う。

お互いに先程までシミュレータールームでタップリ絞られていたと言いつのに、こつ言つ時にはその事すら忘れて喧嘩を最優先にする辺り

「どつちもガキじゃねえか……」

ユウヤがいつも通り、呆れた様に溜息を吐いた。

因みに、この演習だが呆気無く中断された。

原因は唯依ちゃん。

何やらアルゴスのメンバーに劣いの言葉の1つでも掛け様と思った矢先、病み上がり（とは言っても、もう不調は感じられないが）である俺がシミュレーターをすると言うので猛反対したと言う訳だ。

俺は頑張って抗議しましたよ。

でもね、唯依ちゃんには勝てんのよ……グアドループの一件もある事だし。

何やら唯依ちゃんのお説教のターゲットはタリサに移動したようだし、

此処はサッサと逃げ出す事にしよう。

ああでも……また唯依ちゃんの尻に敷かれる生活の始まりか。

24 (後書き)

今日はいくらか涼しいです

コレなら書き溜めも出来る筈……っ！
勝つる、コレで勝つる……！

25 (前書き)

物語の分岐と言いますか……

新たな『TE』への一歩と言いますか……

こんなヘタレ文ですが、最後までお付き合い頂けると嬉しいです

「お前からの通信とは、明日は電か？それとも二度目の嵐かな？勘弁して欲しいがね」

『……連中、随分と調子が良いみたいね。この所は上機嫌よ』

「それは結構。最終的に何もかもブチ壊しちまう様な存在だ。今だけの短い一生を精々、とても楽しい物とする為に踊り続ければ良いさ。だろう？」

『まあ苦勞するのはアンタだから、別に何も言わないけど……何か必要な物は？』

「SVDが1つだけ要るな。

ああでも、弾薬は必要無いぜ？」 獵犬共” に臭いを嗅がれちゃ溜まらんからな」

『まさか ” 暗殺 ” ？』

「そりゃSVD持って殺す相手の正面には立たないだろう？何の為の狙撃銃だよ」

『驚きね……まさか、そんな強攻策に出るとは思いもしなかったわ。でも、証拠の揉み消しはどうするの？

データ上にハッキングする程度なら、コッチでも出来るけど……

流石に、いくら何でも人間を操る様な宗教チックな真似は出来ないわよ?』

「データ上にハッキング出来れば上等だ。後はコッチが上手くやる」
『相変わらず……破壊工作と暗殺は得意分野?』

「そりゃ訓練兵の頃限定だ。今は……偉そうな”魔女”の小間使いさ」

『満更でも無さそうよ?』

「そう見えるか?だったら、今すぐベッドに横になって寝る。お前、クマが怖い」

『っさいわねえ……色々あんのよ、コッチにも』

「深くは追求しないが、無理だけはするなよ。
お前が倒れちまえば何もかもが水の泡だ。未来、希望……縛られる事の無い自由」

『大丈夫……まだ平気よ。まだ、終われない』

『「人類に勝利を」』

剣崎

通信を受ける為に与えられた一室に通され、何分程経過した事だろう。

久しぶりに懐かしい声を聞いたのは良いが　お互いに残された時間はあまり無い様だ。

向こうは研究に活路を見出せず、

此方は人材を手に入れる為に狙撃の段取りを決めなければならない。しかも、両者共々明確な時間が示唆されて居ない時点で焦りが更に加速するだけだろう。

「はあ………」

辺りに誰も居ない事を確認すると、ポケットの中に入っていた煙草を口に銜える。

此処は禁煙の筈だが、まあ仕方ない。

面倒事が重なり合った結果として、娯楽の1つでも楽しまなければやっていられない。

気持ちの良い椅子に背を預け、口の中から煙を吐き出した。

紫煙は、決して止まる事無く回り続ける換気扇へとゆっくりと吸い込まれていく。

折角俺が円の形を作ったと言つのに……勿体無いな。

「……面倒臭え仕事だな」

手だけで銃の形を作り、空中に浮かぶ紫煙に対してバンバンと撃つ動作だけを繰り返す。

5発中5発命中。

射抜いた先はあの子のハートってね。

……ああチクシヨウ、こんな軽口を叩いても俺自身には余裕がねえ。与えられたタイムリミットは 不知火・弐型が完成するまでだろう。

それまでに紅の姉妹を此方側に引き込む為に障害となる者を殺害しなければならぬ。

無論、相手に気付かれる事無く下準備と場所の下見を済ませなければならぬのだ。

何もかも、”1人”だけで。

お伽話に出て来る忍者でもあるまいし、俺1人で何処まで食い付けるか……

最悪、俺が死のうとも目標さえ殺せれば何の問題も無い。

回収は頼まれずとも夕呼が行う事になるだろうし、俺が居なくなろうが夕呼にとっては私兵の1人を失った程度の認識でしか無いだろう。

少しだけ、寂しさを覚えてしまうのは軍人としては失格だな。

自嘲気味な笑いを零し、短くなって来た1本目の煙草を揉み消す。吸殻を携帯用吸殻捨てに入れ、2本目の煙草を口に銜えた時だ。

入り口のドアがスライドする音が聞こえる。

誰か来る？

何故？何の為に？

通信……とは言っても、此処は国外通信だぞ？何の為に国外にまさか”奴等”か？

此処で無駄な警戒をされてしまえば全てが無駄になる。

どうする……どうすれば良い。

どうする事が最善の対処法だ？

俺が思考する間にも、無慈悲に足音は此方側へ向って来る。

思わずと言う具合にだが 本来ならば椅子を入れるべきである足のスペースにその身を無理矢理押し込める。カモフラージュとして、俺の姿が見えない様に椅子を前に置く事だけは忘れていない。

此処が暗くて助かった……もしも明るければ、瞬時に気付かれていた事だろう。

厄介な話じゃ無ければ此方も楽が出来るが、もし面倒事だった場合は 基地内だが仕方あるまい。そいつには”消えて”貰うしか無い。

死体処理はお手の物だ。情報操作は……夕呼がやってくれるだろうさ。

(……神様、頼む)

右手が祈る様に、ホルスターへと手を掛けた。

通信室に僅かに残る煙草の香り。

此処は喫煙室の筈だろうに。

私はその臭いに対し、微かにイラついた。

規律を護ろうとはせず、己の欲求に従い行動するなど獣と同じでは無いか。

俺ね、我慢しない男なの

……何故だろう、ふと頭の中に昔の少佐の顔が思い浮かぶ。

それは私が任官仕立ての頃だったのか、それとも白い牙に入った後だったのか……

私の隣で煙草を吸い続ける少佐に、私は苦言を申したのだ。

煙草は身体に悪いから止めるべきだ、と。

そう言った私に彼は笑い掛け、ただ一言だけ告げた　我慢が嫌い

なのだ、と。

案外、通信室に広がるこの煙草の香りも彼なのかも知れない。

今はそれよりも大事な事があるだろう、唯依。

自分に静かに喝を入れ、目の前に広がる巨大なモニターに目を向ける。

そこには多少ノイズが走っているものの、決して見紛う事が無い彼女の父が笑顔を浮かべ、此方を見返していた。

「巖谷……中佐、何かあったのですか？」

「ん？いや何、娘の顔が急に見たくなっただけさ。

それと剣崎は働いているか？」

報告書を見る限りじゃ殆どの仕事は千枝ちゃんに押し付けているみたいだからな。
「つたく、困った奴だ」

そう言いながらも、嬉しそうに頭を掻く巖谷中佐。

その変わらないの表情を見て、自然と私の頬も緩んでいた。

「働いていますよ。少佐なりに」

『アイツなり、か。そりゃ信用出来ねえ言葉だなあ……』

その答えにお互いがクスリと笑みを零し、近頃の報告を開始した。

X F J 計画の事、情けないがグアドループで遭難した事。

その時に 少佐が助けに来てくれた事。

隠す事なく、自分が体験したあらゆる事を巖谷中佐へ伝えていく。

剣崎少佐の名が出る度に、巖谷中佐の顔が歪んでいくとは知らずに。

『アイツは、相変わらずか』

どれだけ通信を繋いでいた事か。

ふと、巖谷中佐は搾り出す様に声を出した。僅かだが、その声には迷いが見られる。

どうしたのか？そう問おうと口を開いた私よりも一拍早く、巖谷中佐は己の心内を吐露する様に、言葉を噛み締める様にゆっくりと言葉を紡いで行く。

『篁中尉、貴様に新たな命令を言い渡す』

「え？」

一度目を閉じ、ゆっくりと呼吸を整える。

そして次に目を開けた時、そこには巖谷叔父様では無い”何か”が私へ視線を向けていた。

モニター越しであると言いつのに伝わる気迫に、背筋が伸びる。

『龍二は……いや、剣崎龍二少佐はどうやら”横浜の牝狐”と繋がりがあつたらしい。』

今の所は確かな証拠を掴んでは居ないが、奴からの手紙に彼女の名前が書いてあつた』

「しかし、それはただの　ッ！」

『そうだ。ただの”考え過ぎ”かもしれん。俺達が考える様な事は何も無いかもしれん。』

だが、絶対に”無い”と言い切れる状況でも無いのだ。

スパイ容疑が掛かった者がどの様な道を辿るのか、貴様も分かるだろう？』

「ッ………！」

『命令だ、篁中尉。貴様には　　剣崎龍二少佐の監視をして貰う』

その言葉は重く、冷たく、私の心に押し掛かる。

監視？

何故？叔父様は、誰よりも彼と仲良くしていたのに……此処に来て、どうして？

彼には何も無い。

家族も、友と呼べる人も、恋人も、何も無いのに　　ッ！

『篁中尉、命令を復唱しろ』

「……ッ」

『篁中尉！！』

「……了解、しました。劍崎龍二少佐の、監視を……
行います」

『……俺からの伝達は以上だ。貴官の武運を祈る』

通信は、その言葉を皮切りに断たれる。

後に残るのは呆然と立ち尽くす私と、仄かに残る煙草の残り香だけだった。

劍崎

如何やら、前回の手紙で巖谷中佐は俺を疑い始めたらしい。
何をやらかしているのか。

無論、それは彼が知る所では無いだろうが……
だが動き辛くなるのは明白なる事実だろう。何せ、彼女が俺を”監視”するのだ。

正直、あまり考えたくない事象でもある。

フラフラとした足取りで唯依ちゃんが完全に通信室を去った事を確認すると、俺もゆっくりと机の下から顔を覗かせる。

一応、周囲の確認。

それと 先程は急いでいた為に来なかったが、通信の記録を消去しておく。

この短時間で俺と夕呼の遣り取りに気付いた者は居ないだろうが……

「消しておく事に損は無いぞ、っと」

コンソールを操作し、先程までの俺と夕呼のログだけを綺麗サツパに消去する。

多分だが、コレで一応は大丈夫だろう。

後に残る問題は サンダーク中尉の殺害と、唯依ちゃんの監視を如何掻い潜るか。

前者は流石にホイホイと案が出る程では無いが、後者は些か面倒だ。さて サクツと殺るか？

「……………」

まあそんな事を考えた時点で、俺が彼女を殺すつもりが無い事は分かり切っている。

ったくよ……分かり易い性格だな、俺って人間は。

裏表が無いっつうか、頭空っぽっつうか……

言っている自分が一番虚しくなって来るのはお約束だな、こりゃ…… 苛々する。

だが、敢えて俺は俺に問おう。

お前は”篁唯依”が俺の前に障害として立ち塞がった時、一体如何するつもりだ？

今までと同じ様に躊躇う事無く、一切の情け無く、消し去る事が出

来るのか？

「 当たり前だ」

覚悟を認識する為に、口に出して問いに答える。

当然だ、と。

今更何を恐れる事があるのだろうか。

オルタネイティヴ計画の為に、一体どれだけの人々が犠牲になった
と
思っている。

それが俺個人の意思で左右されるだど？

ふざけるな、ふざけるな ツ！

俺は殺す、殺してみせる、必要とあれば誰であろうが容赦なく殺し
てみせる。

剣崎少佐

揺れるな、俺の心。

忘れ去れ、彼女の事など。

龍二さん

俺は、作戦を遂行する為の螺子で良い。

それ以上の存在は望まないし、それ以上の存在になるうとも思わな
い。

香月夕呼に利用される駒で結構。

アイツの計画の為に俺の命が必要と言うのなら、喜んで捧げてやる。

そうだ、そうだとも。

邪魔ならば殺す。いつもの事じゃ無いか、だったら何故躊躇う。

迷うな、俺の心。
戸惑うな、俺の信念。

龍二お兄様

「唯、依……ッ!」

握り締められた拳から零れ落ちる血。
強く噛み締める唇から漏れる血。

今まで俺が抱いて来た信念が、覚悟が、強き思いが、音を立てて崩れ去っていく。

たった1人の少女と全人類。

俺は、その2つを手にとって悩んでいるというのだろうか？
有り得ない、普通ならば有り得ない事だろう。
何故選べない。何故選ばない。

俺は一体……如何しちまった……ッ!

たった1人の少女の命。

地球に住まう全ての人類の命。

天秤に掛けられたその2つを前に、愚かな獣は選択を迫られる。

掛け替えの無い者達の命。

それを前にして、彼はどの様な答えを導き出すのだろうか。
それを決めるのは

もしかしたら、この”おとぎばなし”を読む『貴方』なのかも知れない。

25 (後書き)

貴方なのかも知れない(キリッ

……調子乗りました、すみません

ガン!!カタの連続投稿はまだまだ続くッ……答!

26 (前書き)

Chroniclesを無事、我が家へ迎え入れた

ふむ……このおっぱいマウスパットとやら……

実に興味深い

新しい……惹かれるな

剣崎

「遅いぜ、少佐」

「ああすまん。少しばかり野暮用があったから、そいつを先に片付けて来た」

基地を出て直ぐの場所に、ユウヤは俺を待っていた。

今日はアルゴスのメンバーでリルフオートに飲みに行こうと言う話しになっており、俺も誘われたので付いて行くことにしたのをすっかり失念して居た。

先程の通信で少しばかり時間を食ったが、まだ十分間に合う時間帯であろう。

靴のつま先で何度か地面に蹴り、身体の疲れを解す様に軽く体操をする。

机の下には……二度と潜りたくは無いな。

「中で何かあったのか？」

「ん？いや、別に……ただ面倒事が立て込んでいるだけだ」

「オレ達絡み、なのか？」

「いや、”俺自身”の問題だ」

「……そうか」

その後はお互い、終始無言。

と言うよりも俺が会話を拒絶して居たのかも知れない。

色々と考えたい事もあったのだ、頭の中はグチャグチャしているし。

“変わっちまった”俺自身に対する戸惑いと憤り。

何よりもそれが、俺の頭を支配する。

何故、篁唯依にだけこうも特別な感情を抱くのだろうか？

他の奴等は何も無かった。殺す最後の瞬間まで、至って何も思う事は無かった。

女を殺すこともあった。

だが、何の感情も抱かずに一切の情を与えずに殺せた筈なのに。

何故？

俺は何故、篁唯依にだけ殺意を抱けないのだろう。

「、少、少佐！」

「え！？ど、どうかしたのか？」

そんな戸惑いを露にする俺の思考に、ユウヤから声が掛かる。

案外と大きな声だったので最初は素っ頓狂な声を上げてしまったが、何とか気持ちを落ち着けて平常心を保ちながらユウヤの顔を見返す。

「なあ、アレって……イーニアじゃねえか？」

「何ですと!?!」

……落ち着け、俺。

幾ら錯乱しているからと言って、声の上擦っているのは恥かしい事だぞ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

ユウヤ

「なあユウヤ、いくら何でも酒場に子供を連れて行くのは如何かと思っぜ?」

「良いじゃねえか。本人も賛成らしいし」

「でもよお……クリスカに見付かったらまた怒鳴られるだろうなあ」

「その時は少佐の役目だろ。お得意の話術で上手く纏めてくれよ」

「てめえっ、この野郎! 最初から俺頼みかよ!」

少佐はイーニアを肩車しながら、オレ達はシャトルバスの停留所へ

向っていた。

イーニアは楽しそうに頬を綻ばせながら、少佐の上で上機嫌だ。そんな表情を見せられてしまえば、オレと少佐の顔に自然と笑顔が浮かぶと言う物だ。

「イーニア、何か食べたい物でもあるのか？」

「りゅうじはなにをたべるの？」

「俺は……取り敢えずウオッカ」

「少佐、それ食べ物じゃねえ。飲み物だ。つうか酒だ」

「口に入りや何でも同じ。結局、胃の中でグルグル溶かされる運命ですよ」

相変わらず、いつも通りの飄々とした態度。

まあそれでも上で楽しそうに揺られるイーニアを楽しませる為にならざとジャンプするなど、今の少佐はそれなりに大忙しだった。

いつもの仕事放棄主義者からは考えられない様子だな……藤代中尉が泣くぜ。

「りゅうじ、ミーシャとバーニイはげんきだよ」

「バーニイ？ああ、あのウサギさんか……そりゃ結構。悪い事はしていないか？」

「うん！」

「良かった。俺の知っているウサギちゃんは悪戯大好きな子が多く

てね……

イーニアのところに居るウサギちゃんはきつと優しいウサギちゃんなのかな」

「りゅうじみしたいに？」

「……うん、俺よりも優しいさ」

何だ、ミーシャとバーニイって？

ミーシャは……確か、イーニアの持っていた人形の名前だった筈だ。だったらバーニイも人形の名前か。

まさか……少佐からのプレゼントなのか？

驚きだな、この人が人にプレゼントを贈る主義のタイプだとは思わなかった。

生粋の軍人　とまでは行かないが、それでも根は真面目な軍人タイプだと思っていたから、コレは少々意外な事だ。

まさか小さな子供を喜ばせる為に人形を買うなんて……

「何だよ、ユウヤ。呆けた顔しやがって」

「え？い、いや……アンタってロリコンか？」

「つざけんじゃねえぞゴラアツ！！殺す、お前確実に殺す！！」

「ああ〜ハイハイ。それよりもバスだろ？」

適当に誤魔化しを入れながら、俺と少佐とイーニアはバスの停留所を目指す。

目指す場所はリルフォート。

そこで、少しでもイーニアとの蟠りを解ければ良いのだが……

「貴様等、何をしている……!？」

辺りに響く様な底冷えしそうな声。

耳に入れば暫くは脳の奥底にまで浸透していく様な、忘れられない声の持ち主。

振り返った先に、クリスカが此方を睨み付けながら立っていた。

剣崎

クリスカか……

これは随分と面倒な事になったな。

怒り狂う親鳥を説得する役目など、最初からするつもりは無かったが……

一歩間違えれば面倒事が倍加していただけだろう。

まったく、俺たった1人で何個の面倒を背中に背負えば済むのだろうか？

このままアラスカで過労死するのでは？等と如何でも良い事を考えながら現実逃避。

いっそ、軍人など辞めて農家でも営もうか？

毎日毎日、汗水を流しながら仕事をする。

BETAが居るから大変だろうが、それでも幸福な日常を過ごせるに違いない。

ああヤギを飼いたいな。では、ヤギの名前は何にしよう？

“シロ”、なんてヤギの体毛とマッチしていて凄く

「少佐！」

「え？あ、おう。どうかしたのか？」

「どうかしたのか、じゃねえよ。アンタからも何とか言ってくれ……さっきからコッチの話に耳を傾けてくれねえ」

「いつもの事だろ」

「だから困るんじゃないか」

「……面倒臭え」

率直な自分の心境を口に出しながらも、気だるげにクリス力を見詰める。

此方を刺し殺す様な勢いだな。相変わらず怖い奴だ……目も疲れな
いのだろうか？

ああダメだ。

もうダメ。

本当にダメだ。

暗殺、オルタネイティヴ、唯依ちゃん、

計画、信念、唯依ちゃん、

約束、思い出、唯依ちゃん、

唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、

唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、

唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、

唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依、唯依。

このまま俺の頭の中で篋唯依がゲシユタルト崩壊しないだろうか？
そうすれば何もかも頭の中が空っぽになって、晴れやかな気分で任
務と向き合えるだろう。

「で、何だっけ？」

「ッ、私達は貴様達と馴れ合うつもりなど　　！！！」

「ああ良いや、そう言う決まり文句。記憶に刻み込む必要も無い下
らない台詞だ。

で？イーニアを返せとか、何とか……ご自由に、勝手にしろ。

大体一々断りを入れる事自体が面倒臭え、その気ならサッサと連
れて行け、ド阿呆」

「な、に……ッ！」

「馬鹿の1つ覚えか？

それとも、他人のことを罵倒する事でしか他人との接点を作れな
いのか？

空っぽだな、お前。

頭の中も。胸も中も、何もかも。全部中身がありやしない。

その中身の代わりとなるイーニアは今や自分の意思を持つ으로써
時にお前はソレか。

……いつまでも赤ん坊で居られると思うなよ」

分かっている。

分かっているさ、コレが八つ当たりだって事くらい。

任務すら真っ当出来ない俺が、当り散らしている事だってくらい。

コレは悪い事だ。

分かっている。

でも、頭の中がグチャグチャで俺は何を喋っているのか分からない。

「そもそも、お前がイーニアを護っている訳じゃ無いだろう。

俺にはお前がイーニアに護られている様にしか見えないがね。

ああ反論は結構。どうせ、記憶に刻む価値の無い言葉の羅列だろう？

下らない時間、下らない関係、下らない。ああ下らない。

お前の口にする言葉は何だ？

マニユアルか？それとも遠隔操作でもして貰っているのか？

お前の意思は何処にある？

イーニアの中か？俺の中か？ユウヤの中か？

違うだろ、テメエの中だろ。それすら分からない、気付けない、気付かない。

いや……気付かないフリをしているのか？

だったら尚更、お前はイーニアに護られている存在だ。

お前は ウォーキングデッド 歩く死体だ」

「ち、違う……私は……ッ！！」

「何が違うのか、是非とも教えて欲しいがね。

生きているって何だ？心臓が動いていれば生きているのか？

それだけじゃ生きているとは言わねえだろ。

まあ俺の勝手な考えだが、生きているって事は”考える”ってことだ。

自分の意思で、自分の頭で、自分が進むべき場所について。

だがお前は如何だよ？

お前、何について考えている？

命令、祖国、計画。どれもコレも何もかも、一切テメエの意思はねえ。

マトリヨーシカよりも中身がねえな……それじゃ、誰もお前を救えねえよ。

当然俺は、お前を救うつもりはねえ。

俺達が手を伸ばした所で拒絶する様な奴は、救う価値もねえ。

……精々、お前の大事なイーニアにでも助けて貰え」

もう、言う事など無い。

恐怖に慄く者の様に、此方を見据えるクリスカの視線を背に浴びながら俺は丁度停留所に止まったバスに乗り込んだ。

今まで驚きで黙っていたユウヤも、止まっていた時が動き出したのかバスに乗り込む。

「……少佐、流石にアレは……」

「誰かが言わなきゃ、誰もあの子に教えてやら無いだろ。

だったら……良い。汚い役は俺がやれば良い。お前は……あの子を慰めてやってくれ」

何が”汚い役だ”。

後付の理由のクセに偉そうに語るな、ド阿呆。

ただの八つ当たりだろ、馬鹿野郎。カッコつけんじゃねえよ……

大体、歩く死体？ウォーキングデットハッ、俺自身じゃねえか……！

偶然、空いているバスの中。

俺は一番後ろの端の席、ユウヤは前から5番目程の席に腰を下ろす。この微妙な距離は、アイツなりに気を使ってくれたのかも知れない。

僅かばかり窓を開け、一瞬で後ろに流れていく景色を眺める事にした。

薄ら寒い風を肌を感じながらも、その心地良さに身を委ねる。

戦術機に乗っている時程の爽快感は無いが、ウスノ口なバスにはバスの良い所がある。

綺麗に輝く星空をゆっくり眺める事が出来るなど戦術機では出来ない事だろつ。

戦術機で空を眺める時は撃墜された時か、空から来る援軍に思いを寄せる時のみ。

「……綺麗だな」

俺の心とは正反対だ。

誰にも聞こえる程の無い小さな声音で呟かれた言葉は、窓の外へと消えていった。

26 (後書き)

おっばいマウスパットを手に入れたところで使用する気は無い
と言っか、コレ……どうすんの？
的な感じが今現在の私であります

一応、男だからさ……突っついちゃったよ

27 (前書き)

連続投稿失敗

今はただ、それだけが悔しい

巖谷

劍崎龍二。

既に、その存在は帝国内でも知らぬ者は居ないと言わしめる天才的な技能を持つ衛士。

母である劍崎千代美も、精鋭で構成されたジャツカル中隊も纏め上げた衛士である。

その腕は富士教導隊ですら舌を巻くと言われ、幾度も勧誘を受けたと言つ。

しかし、彼はその勧誘を断り続けた。

何故と俺自身も一度、彼にその理由を問うた事がある。

気になるだろう、何故アレ程優秀な部隊である富士教導隊の勧誘を断るのか。

そして返つて来た答えは至つて単純で、凄まじくバカバカしい物。

首輪は嫌いだからですよ

詰まらなそうに此方を見詰めながら、ただ奴はそう言った。

どれだけ鍛え上げられた部隊であろうとも、

いかに精鋭を集め抜いた強力な部隊であろうとも、

奴は興味すら示さないだろう。それ所か、笑いながら喜んで叩き潰

しに行こうとする。

と言っか、アイツは富士教導隊に喧嘩を売りに行った。

あのまま行けば、両者共々血を見ずには居られない様な凄まじい現場だったので俺が必死の思いで何とか止めはしたが……

そんな男が、横浜の牝狐と言われる香月夕呼と繋がっている。

首輪を付けられる事を何よりも嫌う男が人の下で、当然の様に扱き使われているのだ。

俺には考えられない事だった。

それ故、疑う心も大きくなる。

何の為に、龍二は香月夕呼と接触する必要があるのか？
何故、香月夕呼で無ければならないのか？

そんな俺の疑心故に、唯依ちゃんには過酷な任務を強いる事になっちまった。

相手は剣崎龍二。

あの子の想い人であり、敬うべき師であり、命の恩人でもある男。
こんな俺は外道だろうな……

だが、俺もコレだけは譲れん。譲るわけにはいかん。

もし龍二に何か疑うべき所があれば、その時は迷わず

剣崎

「少佐と共に仕事をしていると、大抵の事では驚きませんね」

「良いのか？俺みたいな怠け者の隣で休憩して。下じゃ部下が必死に整備中だろう？」

「関係ありませんよ。コレだけの設備と装備が揃った基地で、何を恐れる必要があるのか。

下らないですね。上の馬鹿共が余程の無能でも無い限り、死にはしませんよ」

「そりゃ怖い。俺も精々、お前に怒鳴られない様に頑張らないといけませんね」

降板の上。

ライトブルーが斑になった空を見上げながら、俺は千枝と下らない世間話をしていた。

お互い、この程度の侵攻では動じる事すらない。

日常と何ら変わらない平静のまま、詰まらなそうに空を眺めていた。

カムチャツカにBETAが侵攻。

その迎撃の為に撃出したソ連の衛士達は尽く突撃級の餌食となった。

防衛ラインが崩壊し、その尻拭いがユーコン基地にまで回って来たと言う事だ。

艦内アナウンスが響いているが、別に気にする事も無い内容だろう。それを聞いた所でどうせ、俺達のような下っ端共は戦場へ放り投げられた後は各々の力で生き残るしか無いのだから。

水面を切り裂きながら進む戦術機揚陸艦。

そして、たいして珍しくも無いBETAとの戦闘に借り出される俺達捨て駒共。

別に嬉々として向う訳では無いが、軍人なのだから仕事はすべきだろう。

国民の税金の上で成り立っている様な存在なのだ、取り敢えずは1匹でも多く敵を殺さなければ話にならない。腰抜けなら1匹も殺せずに御陀仏するだろうがね……

「ソ連の兵士共は一体何をやっているのかしら……」

まったく。国民の血税を水の様に使っているのは、何処の国も変わりませんね」

「そう怒らないでくれよ、終わった事を責めても仕方がないだろ？」

「はあ……少佐は甘過ぎると思いますよ。」

もう少しばかり、他国に敵しい目を向けてもバチは当たらないと思いますかね」

千枝のそんな答えに苦笑を返しながら、目の前に広がる戦場の跡を目に収める。

相変わらず、一見しただけでは廃墟のような基地があるだけだ。

半壊した軍用艦が海岸へ打ち揚げられ、そこから漏れたオイルが海

を汚す。

腐敗した様な腐乱臭が足元から上へ上へと昇って行き、人々の鼻を刺激していた。

「懐かしい臭いですね」

「……………相変わらず、肥溜めみたいな場所だな」

「肥溜めよりも酷いでしょうね。掘り返せば、人骨でも出て来そうな雰囲気ですよ」

「ハッ……………人骨、ね」

此処で敢えてそんなジョークを入れるということは、状況は余り芳しくないのだろう。

BETAとの戦闘にはジャール大隊が宛がわれていると聞いているが……………

こりゃそう遠くない内に、俺にも出番が回って来るかも知れんな。遠慮願いたいこと山々だが、そんな事を言っていられないのは軍人の性だろう。

「少佐、サイレンの音がします」

「ん？……………ああ、カムチャッキー基地からか。敵襲でもあったのか？」

「……………いえ、如何やら敵襲では無く”名誉の帰還”の様ですよ」

千枝のその言葉に基地方向へと目を凝らすと、確かにアヴァチャ山の南側に数機ばかりの戦術機の編隊が見える。アレは……………MiG-

23か？

「MiG-27の……元・中隊と言う所でしょうね」

おっと、如何やら23では無く27だった様だ。

手酷くやられたその機体達は我先にと言わんばかりに基地の滑走路を指しながら滑空し、戦線で起きた凄まじいまでの絶望をヒシヒシと此方に伝えていた。

中隊規模あつた部隊だつたらうに、今では片手で数える程しか残っていない。

いや、もしかすれば大隊だったのか？

まあ今となってしまえば分かんが、それでも生き残れただけ儲けだろつ。

死ななければ、何れチャンスは巡つて来るのだから。

「前から5番目。跳躍ユニットに異常がありますね」

ふと、千枝が呟く様にそう告げた。

何を言っていると突つ込む前に、突如として俺の耳に爆音が響く。

場所は……カムチャツキー基地の滑走路だ。何故？そう思っている時、あくまでも冷淡に千枝は状況の説明を開始していた。

「上昇噴射の時に体勢を崩し、前の機体につつ込んだのでしょね。緊急脱出した事も確認出来ませんでしたし、接近戦でフレームもやられたのでしょね。」

折角此処まで辿り着いたと言うのに、最後の最後で運が無かつたようです」

興味無さそうにそれだけ告げると、千枝はサツサと艦の中へと戻つて行つた。

濛々と空へと上る黒い煙。
弾け飛んだ2機の残骸の炎を消そうと、わらわらと蟻の様に人が群がっている。

「……運も実力の内。せめて、苦しみを味わっていない事を祈るよ」
数秒間だけ2人の名も知らぬ衛士に黙祷を捧げ、
俺も千枝の後を追う様にカムチャツキー基地に背を向けた。

薄暗い艦内での静かなブリーフィング。

そこに集まったのは俺と千枝、そしてF型専属の整備班達である。

「X F J計画の方は既に篁中尉に一任していますので、我々は我々の仕事をこなしましょう」

そう言いながら、千枝はモニターに画像を投射させて行く。

その中には先程の戦闘での被害数や敵の規模、カムチャツカ半島のマップなど戦場の事が詳細に記載されていた。

今回は俺単機での出撃となるので、作戦を立てる事が出来ない。

随時状況を確認し、遊撃役としてアルゴスの連中に随伴する形になるのだろうか。

「現在の所、何も異常は確認されておりません。

まあ異常と言っ程ではありませんが、お子様が戦場に出るようなのでその援護を。

それと、整備班は何時でもF型の整備が出来る様に準備して置い

て下さい。

「何せ搭乗する衛士は自分も敵も壊し尽くすデストロイヤーですか
ら」

「……………了解しました、中尉！」「……………」

「……………誰がデストロイヤーだ」

悪態を吐きながらも、今回の戦闘での自分の役割を如何にか認識する。

つまりは 好きだけブチ殺して、好きだけ飛び回って、好きなだけ暴れ回れ。

そう言うことだろうか？

“お子様”の子守を担当するのは些か不満だが、暴れまわる事が出来るのなら別に良い。

それに明星作戦に比べりゃこの程度の作戦、遊びにしか思えない。あぁいや、あの時は仲間も撃墜されて1人で2時間程BETAと”死の追いかっこ”を続けていただけか……………まあそれに比べりゃ精神に掛かる負担も少ない。肩に余計な荷を背負う必要も無い、俺にとっては数少ない全力で臨める戦闘だ。

不謹慎だが、楽しみでもある。

「本作戦での我々の目的は陽動です。

アルゴス試験小隊の”道”を作る為に、少佐には1時間程前に出撃して貰う事になります」

「任せる……………派手なレッドカーペットで出迎えてやる」

「宜しく願います。」

では、詳しいブリーフィングも必要ないでしょう。

どうせ、出撃前に現地部隊からの情報が提供されます。

私が何を推測したとしても、外れていれば結局は無駄な労力になっ
てしまいますから」

「仕事放棄か？お前らしくも無い」

「職務怠慢は少佐のお家芸ですよ。まったく……」

溜息と共に、部屋に明かりが灯る。

あと数日の内に何かしらのアクションがある筈だ。

その時こそ 俺達の本当の戦いが始まる。

千枝の管制、俺の操縦、整備班達の整備。全てが詰まった集大成が、
戦場で発揮される。

やってやるうじゃねえか……ッ！！

久しぶりの大一番だ、盛大な花火で盛り上げてやるさ。

つう訳で、出撃まで特にする事も無い俺はそこ等辺を散歩する事に
決めた。

因みに格好は堅苦しい国連の制服では無く、うちの整備班の連中か
ら借りて来た作業服。

意外と、フライトジャケットよりも動き易いってのは驚きだ。

俺も一着ばかり用意して貰おうかな……

まあ作業服のお蔭で階級が見えていないので、先程から何人かの兵士に絡まれている。

どうやら、アラスカから来た腑抜けた連中はお気に召さないらしい。良い迷惑だ、俺は前線出身の根っからの戦闘狂であり、スピード狂だ。

たかが物資が足りない程度の状況で他の奴等に当り散らす様な馬鹿を相手にする気は無い。

それでも気が済まない奴には”キツイ”お仕置きをブチ込んでやったが。

「ん？」

……また喧嘩か。

此処の兵士は随分とストリートファイトが好きらしい。

いつその事、生身で戦場に叩き出してやった方が良いのでは無いだろうか？

きっと豚の様な悲鳴で喚きながら、助けってくれと哀願する事だろう。無論、俺は見捨てるが。

「その辺りで止めておいたら如何ですか？」

帽子を深く被り直し、作業服のボタンを一つ開ける。

所謂、俺の戦闘体勢だ。

相手が不用意な動作をする様ならば、一撃で勝敗を決する構え。

しかし……目の前に居るのは10代前半のガキばかり。さつきから飛び交っている言葉を聞いていれば、”金網の刑”だの”オヤジに食われる”だの……過激な発言ばかりだ。

察するに、やられている相手は女だろう。

どの様な経緯でこんなゴタゴタに巻き込まれたのかは知らないが、不運だな。

「何だよ、テメエ……整備班が何の用だ？」

「まさかコイツ等助けて正義の味方気取りかよ！」

「イイ年の”オッサン”がカツコつけんなよ！後で泣き見るぜ、オッサン？」

「まつ、コイツ等を庇うつつうんならやって見」

最後の1人が言葉を発する前に、その鳩尾に拳が減り込む。

一々、勘に触る喋り方をする野郎だな……苛々するぜ、クソガキ。

あまりガキを殴るのは好きじゃねえが、こりゃ教育が必要だな。それも特別なヤツ。

“直接肉体に刻み込む”様な特別な教育が。

「がつ……！」

鳩尾を殴られた少年が地面へと膝を付く。

胃の中にある物が口から溢れ出し、ボタボタと地面へと零れ落ちていた。

正直、汚い。

「テメエツ！！」

激昂したもう1人の少年から放たれる蹴り。

大雑把であり、尚且つまだ成長途中の少年が放つ蹴りを受け止める事も容易い事だ。

つうか威力も、気迫も、覚悟も、殺意も何もかも足りていない。まあ1番足りていないのは”速さ”だが。行動を起こす際に一々喚くな。相手に直ぐ気付かれる……バカなのか、お前達。

「取り敢えず、まずは構えて下さいよ」

蹴りを受け止めた少年にお返しとばかりに蹴りを　安全の為に、寸止めで放つ。

あと数ミリと言う所で止まった俺の脚に、少年は思わずと言った具合に声が引き摺った。

こう言う所は年相応と言うか……

ハア、中身がもう少しガキらしくしていりゃ可愛げがあるだろうに。

「大体ねえ、数が居るのにサシでやり合おうって考え方が間違いですね。

相手は自分よりも体格も、経験も上でしょう？」

まずは相手を囲み、逃げ道を無くす。

その後は簡単でしょう、全員が息を合わせて同時に目標に攻撃を仕掛ければ良い」

言われるまでも無い、と言わんばかりに数人の少年少女が俺を囲む。数は……5人。

1人はまだ吐き続けているのでカウントしない。

それと、寸止めの蹴りを見せ付けられた1人は腰が引けていた。

「……サッサと来いよ」

面倒臭え。

歩いた先でトラブルばかりに遭遇している気がするぞ。コレがトラ

ブルマンってヤツか？

だったら、俺は歩くトラブル野郎？

俺の存在がトラブルを生むのか？

それとも、俺が行く先にはトラブルがあるのか？

どちらにせよ、良い迷惑なのは確実なではあるが。

一斉に殴り掛かる子供達を軽く張り倒しながら、俺はそんな事を考えていた。

クリスカ

「喧嘩を売るなら人間じゃなくてBETAにしろよ、バカ野郎。ああ面倒臭え」

深く帽子を被っているので素顔は見えないが、整備兵は呆れた様に咳きながら肩を回す。

その整備兵の後ろ 現在は皆、気を失っているが 先程まで私達の前に立っていた衛士達が山のように積まれていた。

作業服に付いていた土埃を軽く拭いながら、何かを思い出したかの様に男はまた歩き出す。

微かに耳に届いた言葉から察するに、彼は何かの”途中”だったらしい。

此方を振り返る事もせずに、当たり前のように去って行ってしまった。

「ッ……イーニア、大丈夫……？」

「……クリスカぁ……ひつく」

「大丈夫、大丈夫だから」

泣きじゃくるイーニアを抱かかえ、その涙を受け止める。

今は深く考えるのは止めよう。

イーニアが無事で居てくれた、それだけで私は嬉しいのだから。

「……クリスカ」

どれ程経っただろうか。

イーニアの泣き腫らした赤い瞳からは涙は流れなくなり、次第に周りの景色も夕闇へと染まって行こうとしている時だった。

おずおず、と言った具合にイーニアから話しかけて来たのだ。

「なあに？」

「あのひと、いっちゃった？」

「うん。行っちゃったよ」

「……ちゃんと、ありがとっつていわないかね」

「でも……何処の整備兵かも分からないし、お礼を言うのは」

「わかるよ」

「え？」

「わかる。だって とくべつだから」

“とくべつ”。

イーニアはそう言って、嬉しそうに笑った。

27 (後書き)

初めての实戦、ユウヤは乗り越える事が出来るのか!!
龍二にとっては久しぶりの実戦、コイツは一体何を仕出かすつもりだ!?

波乱を呼ぶ戦いの幕が開ける!!

と言う感じの次回予告でした

28 (前書き)

まさか、そんな……

このタイミングで……ッ、オリキャラを出すとしても言っのか
ッ

!!

狂っている……

この『作者/自分』は狂っているッ!!

藤代

「砲撃が薄いだと！？仕事すら出来んのか、バカ共が……ッ！！
F型はいつでも出撃出来るのか！？」

私は苛立つ。

理由など一つしか無いだろう。

これから出撃だと言うのに、如何考えても戦車部隊の数が足りていないのだ。

これでは出撃と同時に撃墜なんて、無様な真似すら有り得ない話じゃない。

寧ろ、有り得てしまうからイラつくのだ。

「は、はい！あとは少佐の到着を待つだけです！」

「チツ、予定が早まりそうだな。」

何の為に開かれたブリーフィングだ！ただの時間の無駄じゃないか……ッ！！」

格納庫の壁に当り散らしながらも、現在の状況を詳細に調査する。もうこうなってしまうえば、後は後方支援である我々が補うしかないのだ。

1つでも多く、少しでも詳細な情報を、前衛である少佐に伝える。そうしなければ後悔するのは我々だろう。

何もかも、無くなってしまう後では遅過ぎるのだから。

「中尉、堅物共からの通達では『現在はそのが出せるだけの最高戦力』だそうです。

クソツ……コレじゃただの生贄じゃないか！悪戯に人を殺しているだけだ！」

「現在の前線の状況ですが、あまり芳しくは無いようですね。

連中、随分と生温い訓練をして来たらしい。中にはシエルシヨックになる輩も居ます」

「まさに当て馬か……前線からのデータを此方に回せ。

データを得る為ならばハッキングだろうが何だろうが好きだけ行って良い！！

我々が今成すべき事は”少佐”を無事に戦場へ送り出す事だ！
戦場にさえ送り出せば、勝てる　ッ！」

「了解しました。サツサと本部の堅物共の幼稚なプロテクトを壊しますかね！」

BETAの行動原理など、人類には理解出来ない。

ただ食らい、ただ壊し、ただ突き進む化物共の思想など理解したくも無いが……

だがそんな化物共を相手に、人類は戦わねばならない。

勝たなければならぬ。生き残らなければならぬ。死んではならない。

生き残り、未来へと繋げなければならぬ。

勝たなければ我々に、未来など訪れないのだから。

剣崎

千枝から伝えられていたとは言え、要求数に達しない戦車部隊を展開するとは……

本当に余裕が無いのか、俺達に割り当てられる戦力など無いと言う事か。

まあども道、俺が生き残る為には今までに養って来た経験を全て活かさなければならぬと言う事だろう。何と言う無理難題だ……此方としては、派手な戦いは好きだがマニュアルが指し示す様な”基本”的な動きは嫌いだと言うのに。

『此方CP、出撃までの待機時間は私が話し相手になりましょう。下手な真似をされると面倒なので。ソ連側に目を付けられるのも嫌ですしから』

《ジャツカル01からCPへ。随分と過激な発言だな……また何かあったのか？》

『特に何もありませんよ。相変わらず馬鹿揃いなクソツたれの軍隊

です』

……額に見える青筋には突っ込まない様にしよう。

本気で怒り狂う千枝は、冗談抜きで怖い。いつも温厚な分、反動が大きい。

多分、今ふざけた事を言ったら　確実にKILLされる。

《あ、ああ………装備だが………ガトリングは相変わらず？》

『え？あ、はい。』

今回の武装は突撃前衛仕様を基本とし、突撃砲をガトリングシールドに変更します。

予備弾倉は4。多目的追加装甲が必要では無い場合は其方で”好きに”処理して下さい』

《好きに、ね》

つまりはそれを構えて堅実な戦い方をしようが、戦闘開始と同時に投げ捨てようが俺の自由と言う事か。良いのかねえ、一応金の掛かっている武器だろうに。

いや、きつと千枝もイラついているのだろう。

だから仕方が無い。

そうだ、仕方が無いのだ。

《　んじゃ、まっ！

俺はお前が清々しい気分になるまで奴等をミンチにすれば良いって事だな？》

『ついでに現地部隊も叩き潰して構いませんよ』

《いや、それは遠慮する》

『……ジョークです』

《ジョークがブラック過ぎるだろ！！真っ黒で腹の底が見えねえぞ、オイ！！》

平然とした顔から放たれる千枝の辛辣な毒も何とか受け止めながら、機体の電源を全てオンにして行く。だんだん、明るくなって行くユニット内部。

そして、網膜に投影される肉厚な鉄の壁。

コレを潜った先には 想像を絶する地獄が待って居るのだろう。

怯えるな。

震えるな。

負けるな。

前を向け、敵は何処だ、残弾数は、味方部隊は、CPとの通信は。

そうだ、いつもの通りに確認して行けば良い。

怯える事は無い。所詮、奴等も俺達と同じ血の吹き出る生命体なのだ、何れは死ぬ。

震える事は無い。戦う力も、技も、経験も積んで来た俺に恐れる事など無いのだから。

負ける事は無い。俺を此処まで叩き上げた誇り高き魂達が叫ぶ。

《 此処は、俺の死に場所じゃない》

眩き、ゆっくりと開かれて行く鉄の壁へと視線を向ける。

耳に響く砲撃音。

目に見える火の手。

湧き上がる怒声と、落ちて行く様な断末魔。

何もかもがグチャグチャになった戦場の上に、俺が降り立つ。
派手な登場は好きだが、いつもこの時だけは気が滅入る。

それは死んで逝った人々の想いを背負ってしまう俺の性分からなのか、それとも何か別な理由があるのか。

初めて戦場に出た時から今まで、俺はその答えを見つけられては居なかった。

もしかすれば、答えなんて無いのかも知れない。

それでも戦う度に考えるのだ。何故、俺はアレ程までに気が滅入るのだろうかと。

『CPからジャッカル01へ。出撃許可が下りました、出撃を許可します。』

気を付けて、なんて形だけの言葉に意味は無いでしょうね、きつと。

では、そうですね……ああ、”頑張つて下さい”なんて如何でしょうか？』

《止めてくれ、気が滅入る》

出撃の際まで己の道を貫き通すとは……

藤代千枝、昔に比べれば随分と成長したものだ。

長い間共に歩んで来たからこそ分かる些細な変化に、思わず微笑を浮かべ

《……行って来る》

フットペダルを、強く踏み込んだ。

???

僕は確かに、生きている。

いや、確実に死んでいた筈だった。要撃級の振り被られた拳が眼前に迫っていた筈なのに。

目の前の、まるで嵐の様に暴れ続ける戦術機に助けられた。

……もしかしたら、本人は助けたつもりなんて無いのかも知れない。偶然、僕の前に居た要撃級を殺したただけなのかも知れない。でも

《す、凄い……ッ!!》

どちらでも、構いはしない。

目の前で暴れ続ける衛士の魅せるテクニク。

まるで踊る様に、舞い散った花弁を掴み取る様に、豪快な中に見える隠れする繊細さ。

後方で甘い汁を噛み締めていた甘ちゃんも馬鹿にしていた僕自身が、その力の差に途轍もない年季の違いを見せ付けられていた。

この衛士は、僕達なんかよりも場数を踏んでいる。

それこそ、今の状況よりも過酷な修羅場を潜り抜け　今も尚、生きているのだ。

要撃級にはわざと拳を振り上げさせ、一瞬で距離を開けての射撃を展開。

弾け飛んだ頭部を確認する事も無く上空へ飛び、戦闘機顔負けの変則機動を見せ付ける。

上空からの一方的な攻撃で地上に居るBETAは成す術無く殺され

て行き、光線級のインターバルが終了すると共に地上へ凱旋。
頭上を通過した光線を確認した後、直ぐ様上空へ飛び上がり光線級の元へ直行する。

僅かなインターバルの時間を最大限に活用し、最大限の戦果を叩き出す。

今までの”上空は危険”と言う概念を根本から否定する様な戦い方だ。

『……ちら、CP!……えるか、…ナモ02!』

《ダイナモ02だ、聞こえている!そ、それよりもCP!あの機体は何だ!?!》

『…体?……ッ、それ……”英雄” Black Lion』

断片的に聞こえて来る言葉から察するに、あの機体の衛士は英雄……確かに、分かる気がする。

これ程までに凄まじい技量を持つ者が、頭角を現さない筈が無いのだから。

《ダイナモ02は件の英雄の指揮下に入る!

この現状じゃ、あの人にくっついて行くのが一番生き残りやすいだろ!?!》

部隊の半数は撃墜され、仲間とも逸れてしまった。

通信を入れようにも回線が開かれず、マーカーを追おうにも敵の壁が厚過ぎてそんな場所に到達出来る気がしない。

生き残る為には 英雄の尻を追っ掛けるしか無いだろう。

『…解した、…ちらから、……には伝え……く』

《死んでたまるか……ッ!!》

マップには、1箇所だけ凄まじい勢いでBETAを蹂躪している場所がある。

距離的に考えても危険を犯さずに行ける範囲内だ。

コレなら、十分届く。

近付いて来る戦車級に支援砲を、突進して来る突撃級には突撃砲を撃ち出す。

弾幕を張りながら、機体の制御を一時的にOSに任せ、俺は”英雄”に通信を開いた。

《…此方はダイナモ02!貴方の指揮下に入らせて欲しい!!》

剣崎

《…此方はダイナモ02!貴方の指揮下に入らせて欲しい!!》

通信が来ていたので取り敢えず回線を開いてみると、画面には少年の顔が写った。

…この前、俺に絡んで来たガキ達と同じ年程だろうか?

10代前半であろう少年の瞳は、僅かながらも”懇願”する様に揺れていた。

《部隊の奴等は如何した》

《隊長は突撃級に……それに、他の奴等とも今は連絡が取れずに……》

《 チツ 》

此方に接近する機体を見やる、ソ連のSu-27だ。

戦力的には……背中を任せるにはまだ幼いが、後を付いて来る程度ならば可能だろう。

《俺には俺の仕事がある。精々、出来るとしても貴様の為に道を開く程度だ》

《ッ、ありがとうございます!!》

そう言うや否や、先程までは友軍反応を出していなかったSu-27から友軍反応が確認される。最初からそのつもりだったろうに……思わず、と言った具合に苦笑を漏らした。

ただ、必死に生き残ろうとする姿勢は評価出来る。

それにまだ若い命だ。

此処で散らせてしまうには 惜しい逸材かも知れん。

《ジャール大隊が来るまで、俺は此処で奴等の間引きをしないといけなくてね。

ジャール大隊の到着と同時に、其方に貴様を引き渡す。後は自分で如何にかしろ》

《了解!》

チツ……それにしても、数が多い。
厄介事は歩く先々に待ち構えて居やがる。何かの呪いか？それともコレが俺の運命か？
ああ腹立たしい、今すぐにでも何もかもブチ壊してやっても良いが……
出来る訳ねえだろ、こんな数相手に。
捌き切る事がやっとの状態だ。

それに、この坊主との一時的な共闘。

……わざわざコールサインを決める必要も無いだろう。
俺だって敵を倒しながら味方の安否を気遣うなんて戦い方、あまり慣れたものじゃない。

出来る範囲で尻拭いはしてやるが、最悪の場合は諦めるしか無いのだ。

そんな相手に情を移す余裕など、今の俺には微塵も無い。

理想論を語りながら生きていける場所では無いのだ、此処は。

この化物共が闊歩する戦場には。

藤代

『此方イブラヒム・ドゥール中尉だ。藤代中尉、少佐のご様子は？』

『お膳立ては既に完了しました。』

レッドカーペットは既に敷かれています、”威風堂々胸を張って進め”とお伝え下さい』

『了解した。ブリッジス少尉は運が良い……初の実戦で彼と共に戦えるとは』

『運が悪いとも取れます。次回から、彼の力を借りる事が出来なくなるのですから』

『麻薬と同じか……』

イブラヒム中尉は苦笑を浮かべ、私もそれに対して微笑を返す。

麻薬 確かに、その例えに近い物を彼は持っているのかも知れない。

戦場に立てば衛士達を奮い立たせ、一度鎖から放たれば獅子の如く食い漁る。

百獣の王。

今となつては滅多にお目に掛かる事が出来ない、獅子の名を冠した男。

仲間達の死の間際にすら、己の戦いを決して止めようとはしなかった”非情”の英雄。

戦い、戦い、戦い、そして勝つ。

それを神に約束された神に選ばれた神童。

例える言葉は、腐る程ある。

ただ、私はそのどれにも彼を当て嵌めて考えた事は無かった。

だって、どれもこれも彼のイメージとは全くと言って良い程似つかわしくないから。

『此方C P。ジャツカル01へ通達する、アルゴス試験小隊が出撃するそうです。』

至急アルゴス試験小隊の元へ急行、戦線に参加して下さい』

“百獣の王”

威風堂々、正々堂々戦う様な男じゃないのに付けられた肩書き。

本当は弱々しい内面を持つ男なのに、それを隠す為に覆いかぶさった嘘の皮。

《ジャツカル01了解した。前の連中も食い飽きた頃だ、そろそろデザートに移る。》

それと、ジャール大隊に荷物がある。指揮官にでも伝えて置いてくれ》

“非情の英雄”

仲間が死んだ時、彼は涙を流しながら戦った。

悲しいが、戦わねば自分が死ぬ。それを心得ているからこそ、彼は戦ったのだ。

『荷物？……Su-27、ですか。』

了解しました、ジャール大隊へ”荷物が届いた”と通達して置く事にしましょう』

“神童”

神に選ばれているのなら、彼はきっと世界を救って居る筈だろう。

仲間を失う事無く、心の底からの笑顔を浮かべている筈だろう。

だが 彼は人間だから。

《宜しく頼むぜ！俺も、サツサとこなくなくだらねえ舞台に幕引きしてやるよ！！》

私が、彼に肩書きを付けるとすれば　それは、運命を切り裂く1本の刃。
決して動こうとはしない絶望に僅かな亀裂を生む細く、弱々しい短剣。

“グラディウス”

そう名付ける事だろう。

『　そうですね、こんな舞台はサッサとお開きにして下さい!!』

《Sir! Yes, Sir!!》

黒き獅子王は嬉々として戦場へ躍り出る。
中央へ切り込み、成す術も無く吹き飛ばされて行く小型種などを目を向ける事も無い。

”雑魚に用は無い”

黒き不知火の赤いアイカメラが、戦場の皆にそう告げていた。

ええ、自分の我侭ですとも！

『俺』とか『私』とか『アタシ』とか『オレ』はあっても
『僕』だけなかったから……
だからあっ！！

嘘です、調子に乗りました
流石に彼がいつまでも一匹狼を続けて行くには限界があるでしょう
そろそろ、”戦友”を見繕ってやる時期かな……などと思い至りました

10代前半……1人称は『僕』

次回より活躍(?) 予定

29 (前書き)

そう言えば、こんなに話を投稿していたんだ…
と、少し話数の多さに驚きました

此処まで読んで頂いている皆さんには感謝してもしきれません
こんな未熟な私ですが、これからも応援して貰えるなら感激です

《へえ、それじゃ親御さんの為に軍に入ったのか？》

《は、はい。こんな時代じゃご飯を食べて行くには軍に入らないと

……

ケンザキさん、後　　ッ！！》

後ろに急速接近していた要撃級に気が付き、咄嗟に銃口を向ける。

だが、撃てない。

斜線軸にはケンザキさんの機体が入っている　　コレじゃ何の意味も無い。

《親孝行は良い事だ。親御さんに感謝しろよ？》

必死に策を巡らせていた僕の目の前で、ケンザキさんは当たり前の様に刀を振るう。

後ろを振り返る事もせず、さも当然と言う様に要撃級を切り裂いていた。

この人に死角など無いのでは？

思わず、そう疑ってしまう程の反応速度だった。

崩れ落ちて行く要撃級を一瞥する事も無く、刀を投げ付け　　突撃級を串刺しにした。

戦い慣れていると言うよりも、もう未来を知っている様な戦い方だ。

背中を汗が伝う。

僕はこんな相手を格下だと思っ込んでいたのだろうか？

だったら、今すぐにでも僕は死ぬべきだ。サッサとさっすすべきだろ

う。

此処まで圧倒的ならば、ケンザキさんは人間国宝と言っても良いだろう。生きた宝だ。

アメリカ、ドイツ、フランス、イギリス、中国。

きっと何処を探してもこんな人は居ない。いや、居る筈が無い。

エース中のエース　騎士勲章を与えられるに相応しい働きを見せて付けている事だろう。

この戦場で彼に会えた事を、幸運に思うべきかも知れない。

もしも彼に会えなければ、いや彼じゃない人だったとしても僕は死んでいただろう。

出会い方によって、その人との付き合い方が変わるなんて言う人も居るが、このご時勢なら運命すら感じる劇的な出会いだ。

白馬に乗った王子様

彼は違う。彼はそんな生易しい者じゃない。

例えてしまふのならば……そうだ、血染めの鎧を身に付けた魔剣士。その姿はまさに、立ち塞がる全てを斬り殺して来た”最強の人類”。

《どうかしたのか、”セレナ”？何か考え事か？》

《え?!あ、いえ………戦場でケンザキさんと出会えた事に、神に感謝していました》

《お、おう。だが、まあ生き残ったのはお前の実力だけ?自信を持ってよ》

《……そう言って貰えると、嬉しいです》

そんな事を面と向って言われたのは初めてだったので、上手く笑えなかった。

この人は恥かしがらずに堂々と人を褒める事が出来る。

その時の台詞がちょっとオヤジ臭かったりするけど、それを笑うのも失礼だろう。

それにそんなオヤジ臭さも見事に彼の魅力を引き出している。

《それじゃ、サッサと連中の下に向うとするか。死なれちゃ困るか
らな》

《はい!》

黒い機体が跳躍噴射し、その後には僕も続く。

既に半数以上の光線級は狩り尽した。

上空は既に此方側の領域になっているので、煮るなり焼くなり好き
放題に出来る。

全て、目の前のケンザキさんのお蔭だ。

本当に……この人には感謝しても仕切れない。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

ユウヤ

通信モニターが開き、そこには見慣れた顔が浮かんでいた。

この戦場では不釣合いな笑みを携え、余裕綽々といった具合に手ま
で振って居やがる。

圧倒的な戦闘経験の差を感じると同時に、肩の荷が少し下りた気が
した。

《ジャツカル01からアルゴス01へ繰り返す、ジャツカル01か
らアルゴス01へ。》

現在、其方の領域に向かっている。

此処に居たウスノ口共は大抵食い尽くしてね、後はお前達のお守
りを残すだけだ。

頼むから、俺が辿り着く前に突破されるなよ？》

《アルゴス01からジャツカル01へ。オレよりも他の奴等に行っ
てくれよ、頼むから》

《案外と緊張は無いらしいな。そりゃ結構、戦果を出してくれるな
ら尚の事結構だ》

少佐は軽口を叩いている間にも此方はグングンと接近している。

赤いマークを一切無視しての此方への急行だ、その速度は今まで
見た中でも1番速い。

それに、後ろに機体が見えるが……アレはソ連の機体だろうか？
大方、戦場で拾ったと言う所だろう。

《戦車部隊の数が少ない事は上の連中には伝えたか？いや、この場

合はジャール大隊か》

《ああ、オレ達は此処を動かすなとき。

連中は今頃、弾切れしたヘリの退却援護だろ。クソツ……バカにしゃがって》

《物資豊富な俺達が気に入らねえのさ。

後ろでノコノコ試験だなんて、前線の連中から見たら贅沢以外の何者でもねえよ》

そう言つて少佐は呆れたと言つ様に溜息を吐いていた。

余程、思う所があるのだろう。何度か頭を掻くと仕切りに”忘れよう”と呟いていた。

《ジャール大隊の隊長はラトロワ中佐だな？まあ良い、俺は少し挨拶をして来る。

5分もしない内に戻るだろうから、それまで確りお留守番は頼んだぞ》

言うや否や、急遽進路を変更。

少佐のF型はジャール大隊が居る方向へ駆け出し、その後ろから付いて来ていたソ連の機体は真つ直ぐ此方へ向つて来る。

通信から僅かに聞こえた”奴等を頼む”と言つ言葉を聞く限り、援護してくれるのだろう。

カムチャツキーの基地でクリス力達に絡んでいたガキみたいなヤツじゃないことを祈るとするか……真つ当な常識人を期待するとしてしよう。

《アルゴス01から各機！少佐の到着には少し時間が掛かる！

それまではオレ達が此処を死守！それと今、此方に向つているソ

連機は援軍だ！

撃つなよ！？》

《了解したぜ。何だよ、少佐も”狩り”に成功したのか？》

《了解！つたく、アイツはいつでもマイペースだな！》

《了解よ。まあ……彼らしいわね》

各々が少佐に対する気持ちを吐露し、僅かに笑う。

先程までの戦車隊の数が少ない事に対する不安が掻き消え、余裕が見え隠れしていた。

コレも少佐が持つカリスマってヤツの効果なのか？

……いや、でも、アイツにカリスマなんて大層な物があるのだろうか？

ラトロワ

黒い戦術機が、要塞級を粉碎して現れた。

言葉の綾では無い。文字通り粉碎したのだ。

群がっていたBETA共を吹き飛ばしながら、要塞級の巨大な身体を地面へと擦り付けながら此方へ急速接近。無論、地面に頭を擦り付けられていた要塞級は既に絶命して居た。

先程まで掴み上げていた要塞級の巨大な頭を投げ捨て、血だらけの

機体を此方へ向ける。

相對しただけでも感じる歴戦の猛者の威圧感。
後衛から来た”坊や達”との格の違いに、思わず笑みが漏れる。

《此方はジャール01、ファイカーツィア・ラトロワ中佐だ。派手な登場だな》

《此方はジャツカル01、剣崎龍二少佐です》

サウンドオンリー。

顔こそ見えないが、年齢的には……私に近いものを感じる。

如何やら、向こうもそれを感じ取ったのか安堵した様に張り詰めた空気を緩めた。

《何をしに来た、少佐。此処は我々が受け持つ筈だが？》

《ダイナモ隊のセレナ・エニックス少尉を救助しましたが……》

《ダイナモ隊は如何なつて居るのでしょうか？マーカー上では既に》

《全滅だ》

《戦場では珍しくないとは言え、胸が痛む話です》

飄々とした態度を崩す事無くそんな事を言われても、一切の同情の余地が無い。

寧ろ私は、彼の態度で戦場を”楽しんでいる”様に感じられてしまった。

胸が痛む……か。

せめて、もう少し悲しみを込めて喋るべきでは無いだろうか？

《それだけを伝えに来たのか？》

《ええ、それだけです》

サウンドオンリーだと言うのに、少佐の顔は笑っている様に感じた。要塞級の死体の陰から敵を撃ち殺している隊の部下達すら放って置きながら、私は機体を少佐の機体へと向ける。

BETAの返り血とは言え、その姿は血染めの……殺戮者。見ていて気分の良い物では無かった。

《ならば、サツサと”坊や”達の下に戻れ》

《ええ、では。

ああそうそう、次に出会う時はもう少しガードを下げてくださいと嬉しいですね、中佐》

《貴様 ツー!!》

《おっと、呼び出しかな？では失礼》

帰り際だと言うのに、意味不明な事を言い出しやがって。新手のバカ、なのか？

……だが、腕は確かだ。

アレ程 要塞級を徒手で殺す 派手な事を考える衛士は居ないだろう。

いや、居たとしても出来る訳が無い。

溶解液の雨を潜り抜け、ヤツの頭を地面に擦り付けるなど……自殺行為だ。

……ならば、あの男は何者だ？

赤いアイカメラが此方に興味を無くしたとばかりに視線を外し、やがて先程の坊や達の居た方角へと向って行く。

その後姿を睨み付けながら……静かに、私は息を吐き出した。

劣勢、とも言える状況。

流石に龍二一人で戦場が如何にか出来るなど、有り得ない。

圧倒的な数を相手に一人で勝てるほど、彼自身も思い上がったは居ないだろう

だが……アレ程まで必死に一人で戦だ、報われて欲しいと思っ
てしまふ。

やはり、彼も人なのだ。

負ける事が耐え切れない、とても負けず嫌いな性格。

『CPからジャツカル01。』

アルゴス小隊がBETAへ砲撃開始、繰り返すアルゴス小隊がBETAへ砲撃開始。

至急向われたし』

《ジャツカル01了解。千枝、最短ルートを頼む》

『了解……マップ、転送します』

直ぐ様、千枝から受け取ったマップを展開し、マップ上に示された最短ルートを辿る。

道中、大小様々なサイズのBETAからのお出迎えを受けるが華麗に全てスルー。

流石に要塞級の腹の下を潜る時は肝が冷えたが、生きて居るので結果オーライと言う事でアルゴス小隊の元へ急ぐ。

何機ものへりとすれ違い、その度に爆音と爆散する鉄塊が機体に当たると音を聞いていた。

いい加減、自分達に出来る事の範囲を理解して欲しい。

飛距離や高度を謝って死ぬなんて無様な真似、曝して欲しくは無い。

しかし先程からマップ内にあるマーカーは一切変化しない。

どうやら、アルゴスの連中は良い子でお留守番が出来ているらしい。

これは”ご褒美”が必要になるだろう。

だが、手元にそんな良い物は無い。

では如何する事が、彼等にとってのご褒美となるのだろうか？

『アルゴスまでの距離100！射線に重ならない様に、気を付けて！』

弾丸と肉が飛び散る上空から、目下の連中に向けてガトリングを放つ。

上空からの予想外の援軍に、面白いように弾が命中する。

小型種までは流石に確認出来ないが、中型や大型が地へ伏して行く様は心が躍る。

《 良い子でお留守番は出来たかな？ 》

血染めの機体が、アルゴス小隊の前へ空から降り立つ。

着地と同時に干からびた大地にヒビが入り、身体に付着していた血

液が飛び散った。

それすら構わんと言わんばかりに、式型の護衛を務めていた2機からの通信が入る。

兩名とも彼と言う援軍が心強いらしく、切羽詰った状況には似つかわしくない笑みを携え、龍二の登場を歓迎していた。

《遅過ぎるぜ！もうとっくにパーティーは始まっちゃったぜ？》

《遅刻だな、少佐！このまま撃破数トップはアタシが貰うぜ！？》

《お前達は少し喚き過ぎだな。

教えておいてやる。》 外見は冷静に、中身は熱く”、コレが俺の鉄則だ。お分かり？》

子供に諭す様にゆっくりと彼等に語り掛けている龍二の回線に突如として新たな介入者が現れる。ユウヤだ、初陣にしては随分と余裕を見せている。

それでも、戦い慣れた者達から見れば随分と焦っている様にも見えるのは事実だ。

《少佐、”電磁投射砲”を使う！援護してくれ！！》

電磁投射砲 帝国技術廠の連中が威力に喚起していたアレか。

実際に使った事は無いが、データだけなら手元に残っている。

威力は十分だが、放熱に時間が掛かるとか……まあ、今の様な状況では関係の無い事か。

既に出来上がっている『Z』とも『X』とも取れる不可思議な隊形の前に陣取り、眼下でジャーナル大隊と白兵戦を繰り広げるBETA達に視線を向ける。

此処は急斜面。

一々飛ばずとも、滑り落ちれば話は早いと言う事か。

ユウヤの次の言葉を待たずに、F型が斜面を滑り落ちる。

その格好は滑り台から滑り落ちる子供と近い物があるが やつて
いるのは戦術機だ。

想像を越えるスケールと衝撃がユニット内部を襲い、凄まじい勢いで機体が揺れる。

だが、ただ降りるだけでは無い。

降下最中にすらガトリングを構え、狙う必要の無い要塞級などの大型達を次々に射抜いて行く。致命傷、とまではいかないが確実にダメージは蓄積している筈だ。

『何て無茶を……ッ！……整備班が見たら卒倒するでしょうね』

斜面を滑り終えた時点で、千枝は”怒り”を通り越して”勝手にしろ”と言わんばかりに溜息を吐いた。彼の身を案じる彼女にとって今の様なデンジャラスな行為はただ心臓に悪い以外の何物でも無いだろう。

心労が溜まっていくのも、無理は無いと言える。

《フウツ〜！良いね、盛り上がったよ！！》

そんな彼女の事などお構いなし、と言わんばかりに龍二は笑った。

今まで左腕に装備されていた多目的追加装甲で要撃級を殴り付け、頭部を粉碎する。

その後、右から接近する戦車級の群れに投げ付け下敷きになって貰う。

先程までは目の前のジャール大隊の連中に群がっていたと言うのに、

仲間の血の臭いが染み付いた俺が降りて来た途端に目の色を変えて此方に突っ込んで来やがった。

好都合と言えば好都合だが、コレだけの数を捌き切れるか？

《貴方は、無茶ばかり　ッ！！》

左舷から接近する突撃級に対しての上空からの射撃。

意外、それはセレナのS u - 27。

ウインドウが開かれ、呆れた様に”仕方ない”等と言っておきながら顔は笑みを作っている。

《何だ、お前も俺と同じ戦闘狂じゃねえか》

《なっ！誰が戦闘狂ですか、誰が！！　それよりも第二波が来ます！！》

《おうとも。受け止めきれるな？》

《僕が誰だかお忘れですか？》

自信を浮かべた笑顔が、俺に語り掛けていた。

任せろ、と。この野郎……こんな短時間で、随分と立派に成長したじゃねえか。

若い奴等の成長は早いと聞くが、コレ程の成長速度とは驚きだ。

《……まっ、精々踏ん張るとしようか》

盾が無くなった事により、両腕からガトリングが敵を狙い撃つ。

先程とは違い、純粋に弾幕の量が2倍だ。密度も2倍、威力も2倍。何よりも俺が撃ち漏らしたBETAを的確に、セレナが撃ち抜いて

行くのが大きい。

1人で何から何まで行つ事とは訳が違う。

格段に、楽になった。

《良い腕だ！射撃は得意か、セレナ！！》

《僕の得意分野です！！》

《そりゃ結構……ッ！突貫するぜ、援護頼む！！》

《了解！！》

誰もが、その2機に見惚れていた。

この時代、一般的な衛士程度ではBETAを殺す前に自分が死する
場合が多い。

勿論、エースと呼ばれる者も居るが彼等でも二桁が限度だ。

1人で三桁など、夢のまた夢とも取られていた時代。

だが、その2機は如何だろうか？

損傷は軽微。

装甲の表面が少し歪んでは居るが、機動には全くの問題は無い。

弾薬は寧ろ足りないくらい。

群がって来るBETAを捌く為には、搭載されている程度の弾数で

は少な過ぎる。

人員は、たった2名。

それでもその2人は、鬼神と呼ぶべき活躍をしていた。

『少佐、前方14時方向から突撃級接近！数30、距離250！！
エニックス少尉は後方の要撃級を担当！36mmの残弾数が有り余っています。』

確かに威力は微々たる物ですが、足止めさえ出来れば結果としては最上です！

貴方は足止めだけを考えて下さい！！』

何よりも大きいのは、この2人の戦いを支える指針。

戦場の変化を的確に読み取り、誰よりも早く2人にその情報を送り届ける。

1手、2手先は当たり前。

時には5手先まで見透かす様な優秀な管制のお蔭で、被害は最小限以下である。

《了解。歓迎してやるよ》

《了解しました！！》

不知火が前方へ、

後方にはジュラーブリクが。

国の枠を超え、お互いの背を護る為に行動を起こす。

その光景に、その戦場に居た数々の”英雄達”が己の内に眠る熱い心に突き動かされる。

『戦車隊より通達！ “貴官等の為に祝砲を上げる！”との事で』

『す』

藤代中尉の伝達だけでは、終わらない。

次々にモニターからサウンドオンリーで色々な人々からの声が聞こえる。

《此方はTu-22のパイロットだ。援護する、道を抉じ開けてくれ！》

《期待させて貰うぜ、ヒーロー！オレ達の領土を踏み躪った奴等をブツ飛ばしてくれ！》

《補給車両は何時でもお前達の帰還を待つ！弾が足りなくなったら、いつでも来い！》

国の枠を超え、2人の衛士に期待が掛かる。

それは純粹な想い。

勝ってくれ、と言う人々からの願い。

《此方は突撃級の撃退を完了！セレナアツ、随分と鈍間だな！》

《ツ！十分捌き切れませ、ケンザキさんは周辺のBETAを！》

《大口叩くようになったじゃねえか……ツ！死ぬなよ、フロイライン戦闘処女》

《了解いっ！！》

鬼神の如き活躍は、決して1人では成し得ない。

剣崎龍二は確かにこの状況を生み出す切欠を作っただろう。

だが、彼1人ではこの戦場を動かす事など出来ない。だが、此処には彼だけでは無い。

部隊が全滅した若き衛士、セレナ・エニックス。少数ながらも必死に戦術機部隊を援護する戦車隊。決死の覚悟で上空からの爆撃を続けるTu-22の部隊。後方で構えているとはいえ、前衛で戦う者達の為に命を掛ける補給班。

そして、全ての指針を握る羅針盤 藤代千枝。

彼等が揃わなければ、決して成し得る事は無い偉業であった。戦場に描かれたマーカアの赤が少しずつ減少し、僅かではあるが母なる大地が人々の目に写って往く。

彼等が全て揃い、初めて”英雄”となるのだ。

『ツ！海岸からBETA群接近！』

ジャール大隊の後方です、このままではジャール大隊が……戦車隊は援護射撃を！

少佐とエニックス少尉はジャール大隊の後方カバーをお願いします！

本部へは私が連絡を！』

《また援軍か……コレだから人海戦術は嫌いだ！》

《 僕も、流石に疲れて来ますね》

だが、彼等とて所詮は人。

疲労を感じるし、集中力も持続する事は無い。

もう終わってしまうのか？この怒涛の快進撃は此処で幕を閉じるのか？

《 よしっ！少佐、発射準備完了だ！！》

否、断じて否。

今この場に居る者達は、神すらも味方にしたのだ。
敵など居る筈も無い。

ユウヤの声がユニット内に響き、それが勝利の鍵となる事を龍二は直感的に理解する。

試作兵器とは言え、威力だけは十分な筈だ。

分の悪い賭け？違うな、最高に分の良い賭けだろう。

何せ、此方は”戦の神”を従えているのだから。

《 主役はくれてやるよ、ユウヤ！たっぷり食いやがれ！！》

龍二が吼え、それに呼応するかの様に電磁投射砲の光も収束して行く。

射線軸に控えるジャール大隊の兵士達は既に後退を開始しており、優秀な羅針盤の仕事の早さに思わず感嘆の拍手を叩きそうになる程だった。

『 ジャール大隊の射線軸からの離脱確認！ブリッジス少尉、発射ど
うぞー！！』

《 任せろ ツー！！》

全ての想い。

全ての願い。

人々の勝利。

それは強く輝く光と共に、群がるBETAを飲み込んで行った。

29 (後書き)

TEの小説としては丁度、2巻程までの内容が終わった事になります

残るは3、4巻……

龍二はイーニアとクリスカを仲間として引き入れる事は出来るのか
!?

唯依に与えられた龍二監視指令はどうなってしまうのか!?

波乱を含んだ展開……

それを上手く、丁寧に書ける様に尽力します

30 (前書き)

30……

何か、30って凄まじい圧力がある様な錯覚を覚えます

ユウヤ

カムチャツキー基地

オレ達を出迎えたのは、凄まじい数の人々からの歓声だった。

少佐はそれに対して別に何の興味も示さず、サツサと機体をハンガーへ向わせる。

しきりに目元を揉んでいたので、相当疲れが溜まっているのだろう。

……当然、と言えば当然か。

オレ達が出撃する1時間前から出撃し、1人で戦い続ければそうなるだろう。

今回の戦闘は、少佐無しじゃ成し得なかった勝利だ。

あの人が居なければ、もっと大きな被害が出ていた事は想像出来る。

……少佐は、こんな歓声の出迎えなんて聞きなれているのだろうか？

それもそうか。

日本でも英雄と言われる程の男であり、その実力は国外にまで聞こえて来る。

そんな男が、今更歓声の1つや2つで動じる事も無いだろう。

単機でありながら、一個大隊並みの価値があると言われる男。

出撃する前の中尉からの激励の中で、微かに漏れた少佐への意見を1人で大隊と同じ働きをされると言われる程、アイツは凄まじい戦果を叩き出す。

確かに、今回の戦闘で身に染みた事だ。

少佐は初陣が終り、心の底から歓喜しているオレには到底届かない場所に居る。

衛士の最先端。

“最強”と言う称号を冠する日本からやって来た衛士。

まあ、何だ。

日本も結構やるじゃねえか。

先程の篁中尉からの通信でも言った事だったが、日本は日本なりに頑張っている。

この戦闘で、それを感じ取る事が出来た。

肩から重荷が取れた気がして、少しだけ気が楽になったのを感じる。誰しも経験する初陣の緊張感がゆっくりと抜けていく。

少佐と、アルゴスの連中と、ジャール大隊。

皆のフォローがあったからこそ、オレは今もこうして生きている。

オレ1人程度じゃ如何しようも出来なかった戦場だったが、皆が支えてくれた。

感謝しきれねえな……

その後、ユニット内に残ったのは、いつものオレらしい面構えだった。

剣崎

久しぶりの実戦だったが、それ程まで気分が高揚する事は無かった。些か、絶望感と言う物が足りない。ジャール大隊に電磁投射砲、優秀な物が揃い過ぎていては達成感が味わえないのだ。

「おかえりなさい」

F型から降りると、目の前に笑みを浮かべる千枝が立っていた。律儀に戦闘終了と同時に此方へ迎えに来たのだろう。彼女に気を使わせてしまった事が少しだけ、胸をチクリと刺す痛みになる。

「ただいま」

それでもそんな無様な顔を見せない為に、いつも通りの笑顔で偽る。偽らなければ、また彼女を心配させてしまう。ただでさえ苦勞が絶えない役職についているというのに、更に気苦勞を増やしてしまっては申し訳が立たない。せめて、少しでも気を

楽にしてやりたかったのだ。

「ユウヤのヤツ、キルスコアが3000オーバーだって？ 凄いじゃないか」

「彼の射撃能力も優秀でした。ですが、何よりも電磁投射砲の威力がウェイトを大きく占めていまず。侮っていた訳ではありませんが、コレ程までの戦果を出すとは正直驚きました」

素直に感心しているのか、千枝は何度も頷いていた。

手に持っていた資料をペラペラと捲り、今回の戦闘での成果を確認しているのだろう。

相変わらず、仕事の手が早い。

「あのタイミングでトリガーを引き絞った。アイツの技術さ」

「"だとしても"、彼1人では成し遂げられなかった偉業です」

「……皆の勝利ってヤツか？」

「ええ。少佐はお嫌いかも知れませんが」

昔の俺なら、確かに『下らない』の一言で流していた台詞だろう。

結局、戦場に立ってしまえば連携以前に己の覚悟が物を言う。

それを連携で補うのはシミュレーターまでの話だ、実戦では”空気”が違うのだから。

いつまでも甘ちゃんでは居られない。

「昔なら、な」

強化装備姿だった俺は、煙草を取り出そうと普段ならばポケットに当たる場所に手を伸ばす。が、強化装備にポケットなど存在しない。無論、煙草などある筈も無い。

そう言えばそうだったか……失敗したと言う様に、俺は頭を数度だけ掻いた。

「如何やら、今回のアラスカ遠征は私達にとっても有意義な物の様ですね」

そんな俺の姿に何か思う所があったのだろうか？

いつもよりも機嫌が良い千枝の声が、やけに記憶に刻み込まれている。

彼女にとっては自らの知識と技術を更に昇華させる素晴らしき遠征となり、

俺にとっては他国の戦術機に触れる事で新しい戦術概念と言う物が生み出された。

では、俺達の遠征で変わった者は居るのだろうか？

何と無く、心に浮かんだその言葉。

気にはなったが、直ぐに心の隅へと追い遣った。

藤代

少佐は、何かに迷いを抱いている。

それは長く付き合っているからこそ分かる物なのか、それとも誰にでも分かる物なのか。

その判別は、今の私には難しい物だった。

長く居過ぎると”反応”に過敏になるが、それとは別にそれが”心の底から”来ている物なのか、それとも薄っぺらな物なのかの判別が付き辛くなる。

結局、”困っている”と言う事しか分からなくなってしまっただ。

未熟であり、未だに彼の事を深く知らない私だからこそその悩みなのだろうか？

そんな事を相談出来る相手も居ないので、ますます心労は溜まるばかりだった。

今日は祝勝会でも開いてくれる事だろう。日頃の疲れを癒してくれ

別れ際、少佐は疲れ切った顔でそう呟いた。

いつもの彼から出て来る軽口も、飄々とした態度も何も無い。

それでも尚、私のことを気遣ってくれる事には少々の感動と大多数を占める憤りがあった。まずは自分の心配をしろ、思わずそう言うおうとして口を閉じる。

階級の違いが、私の言葉を喉元に止まらせる。

落ち着け、落ち着け。

私はそんなタイプの人間じゃない。動転するな、心を乱すな。

平常心を保ち、平静を装え。

心に言い聞かせ、私は静かに『おやすみなさい』とだけ挨拶を返していた。

それが、今でも悔やまれる。

結局、少佐に言われた通り祝勝会には来た者の、周りには特に親しい者も居ない。

第一私自身がこう言ったバカ騒ぎがあまり好きでは無かった。

少しだけお酒を飲んで、直ぐに戻ろう。

そう思いながらテーブルへと向う途中、数々の知った顔と擦れ違う。アルゴスのメンバー、整備兵、篁中尉にイブラヒム中尉。

皆の顔には笑顔があり、今回の勝利に対して心からの喜びを体現しているようだった。

「……………元気そうね」

「何だ、貴様は随分と辛気臭い顔をしているな」

咄嗟の事に身構えそうになったが背後に立った人物の顔を確認し、それが失礼な行動である事を察知し、私は敬礼を返した。

「ッ！？……………任務ご苦労様でした、ファイカーツィア中佐」

「貴様は……………フジシロ中尉だったな。確か、ケンザキ少佐の専属副官」

「はっ！」

「……………少し話を聞きたい。」

此処では話せない内容もあるだろう、静かな場所に行こうか」

後衛でノコノコとテストをしている私達に対する嘲りも、憤りも感じられない自然な問い。

もしかすればポーカーフェイスなのかも知れないが、彼女の話聞くのも有意義ではあるだろう。それに、折角此処まで来ているのだ。大隊を纏め上げる上に立つ者の意見と言うのも、良い参考になる。

言われるがまま、私は黙って中佐の後に付いて歩いた。

剣崎

騒々しいまでに響き渡る歓声。

耳に残るのは下で騒ぐ馬鹿共の雑音だけ。

海が近い事もあるのか、僅かに香る潮の香りを堪能しながら俺は酒を飲んでいた。

屋上へ来る道中、給仕の女の子から貰って来た1本だ。

コルクを歯で無理矢理抜き、まだ冷えているそれを一気に煽る。

噎せ返る程の熱が喉から胃へと流れていき、やがては心地の良い酔いが身体に回る。

誰も居ない、誰も気にする事は無い静かな空間。

だと言うのに、少しばかりの違和感を覚えてしまうのは　きつと、

「お久しぶりです、鎧衣課長」

闇の中から、静かに此方を見据える彼の所為でもあるのだろう。

鎧衣左近。

帝国情報省に勤める男　相変わらずの飄々とした具合が、癪に障る。

「君は相変わらず私に手厳しい。」

香月副司令も言っていたが、心労もとても溜まっている様だ。

そうだ、如何かな？折角此処に酒があるのだから、私と一杯」

「それは俺が用意した酒でしょう。つうか何も言わずに飲むのは止めてくださいよ」

「いやね、私も此処まで来るのには些か骨が折れたよ。」

まあ君の為となれば一肌脱ぐのが私の役目。香月副司令にも怒鳴られてしまっし」

「人の話を聞いてくれ……」

相変わらずの脈絡すら無い会話に眩暈を覚えたが、考えた所で意味は無い。

コレこそが鎧衣左近であり、鎧衣左近ならばこうなってしまうのだ。今更、心理の探求など始めた所で何の答えにも辿り着ける事は無いだろう。

何せ相手は神出鬼没のマイペースで我を通す鎧衣左近。

帝国七不思議の1つとも数えられる彼の事など、到底俺には理解出来まい。

「此方で用意出来る物は全て用意しておいた。」

物資は直ぐにでも基地へと送り届ける事が出来るが、如何するのかな？

ああ安心してくれて良い。痕跡など残さない。私はそんな二流では無いからね」

「送り届けて置いて下さい。後は、此方で何とか上手くやりますよ」

「ふむ。そんな切羽詰った顔をしている君が、ミスをしないうで暗殺をする……」

些か私には無理難題に聞こえるが？」

今俺の一番痛いところを平然と付いて来る……

確かに、切羽詰っている。それは認めたくは無いが事実だ。

時間、装備、場所、何よりも 篁唯依に言い渡された監視指令。今更だがあんな物聞かなければ良かったと、心の底から後悔している。

アレさえなければ、今の俺は平然と任務と向き合えた事だろう。

「やるしか無いでしょう。折角の逸材を、あんな馬鹿に食い潰されるのは惜しい」

「……紅の姉妹は君が認める程に優秀、と言う事かな」

「まあ、そうなりますかね」

暫く場を制する沈黙。

この人との会話の中では、最も珍しい事でもある。

思い返せば嫌と言う程に思い浮かぶ光景だが、大抵この人は一人で話しているだろう。

人の話を聞かないと言うか、何処までも我を通すと言うか……

まあ、真っ直ぐな所があるからこそ俺自身もこの人を嫌いになれないのだろう。

四六時中一緒に居るのは御免だが。

本当に、御免だが。

「君の母君からの借りを返すには、良い機会かも知れんな」

「借り？」

「いや、私の独り言だ。気にしないでくれたまえ、はっはっは」

鎧衣さんは笑いながら腰を上げた。

もう話す事は無い、そう言う事だろう。帽子を深く被りなおし、此方へ振り返る。

僅かに見える此方を見据える瞳には飄々とした雰囲気を感じておらず、情報相に勤める鎧衣左近課長としての顔が見え隠れしていた。

「香月副司令も寂しがっていたよ。そろそろ帰って来ては如何かね？」

「仕事が終われば、堂々と凱旋させて貰います」

お互い、口元にはニヒルな笑みを浮かべる。

僅かな時間だったとは言え、お互いにとってのそれは十分に有意義だった様だ。

鎧衣課長はまた闇に消える様に屋上を後にし、俺は小さく光る星空を見上げた。

何十、何百と浮かぶそれは遠目には確認出来ないが大小の違いがあるのだろう。

それぞれに特徴を持ち、自分に与えられた役を全うする為に俺に与えられた役目。まだ、俺には良く分からない。

だが、少しだけ気分が軽くなった気がする。コレも鎧衣さんの飄々とした雰囲気の成せる技なのだろうか？ だったら、珍しくあの人に感謝せざるを得ないな。

俺にとっての決戦日も、近い。

それがどんな結果を生み出すのか分からない。

もしかすれば何も起こる事無く、無事に俺は日本へ帰れるのかも知れない。

もしかすれば相手に勘付かれ、鉄の箱に入って帰国する事になるかも知れない。

だが、どんな結果になろうと俺は後悔してはならない。

例え何が起こきようと、どんな劣勢に立たされようと、諦める事だけはしない。

屈強な精神。常に他者を思いやる優しき心。

強き漢とは他者に優しく、己に厳しくあるべし。

珍しく母さんの事を他人の口から言われ、何と無く昔から言い聞かせられていた言葉を思い返す。俺の生きる信念は全て、この言葉から来ているのかも知れない。

剣崎龍二と言う人間を作った、所謂”初心”なのだろうか？

「後悔無く豪快に、竦む心無く尊大に、恐れる心無く盛大に。

信じる道を選び、信じる道を進み、信じた道の果てで後悔無く死ぬ。

……悪い、母さん。俺さ……危うく後悔しちまう所だったよ」

今は亡き優しく、強かった母に手を伸ばす。

届かぬ筈のその手は虚空を掴み、俺はただ空の手を握り締める。

否、空などでは無い。

そこには確かに温かみが存在し、柔らかな感触があった。

『堂々と生きる』と、俺が愛した母は俺の背中を押してくれたのだ。

堂々と、後悔無く生きる。

監視が何だ。

場所が如何した。

時間が無いから如何した。

後悔無く全力で生き、その結果として失敗したのならば満足してあの世に逝こう。

全力でやったのだ、後悔などある筈が無い。

「よっしゃっ！！！！」

強く拳を握り、握り拳を宙に突き出した。

誰でも無い。俺自身に約束する為に。

全力で、自分の道を進むと此処に約束する為に。

晴れやかな笑顔と共に、獅子が目覚める。

その瞳に迷いは無く、その瞳に戸惑いは写らない。

何故なら彼は思い出したから。

泥塗れで生きて行く事の偉大さを、泥水を啜ってでも生きる覚悟を。昔の自分が持つておらず、今の自分が持つ　偉大な”根性論”。

それを手にした彼の眼には、既に敵など居なかった。

30 (後書き)

龍二は完全に吹っ切れ、

千枝はラトロワ中佐と内緒話の途中であり、
唯依は未だに上官命令に対して葛藤を抱く。

グダグダに……なら無い様に頑張ります

31 (前書き)

……アッ?

この話で籠って寝てばかりじゃない？

香月

『彼の牙は抜け落ちた様ですね』

「……………何の事かしらね」

『昔ならば障害を殺す事に何の躊躇いすら起こさなかった彼が、何かに怯えている。』

『いやはや、年季が入るところまでも人が変わってしまったのですかねえ？』

「……………ッ！」

『おお怖い。そんなに睨まないで頂きたいものです』

「アイツに手え出してみなさい。殺してやるわよ」

『激情に身を任せる性質では無いと思っていましたが……………』

『成る程、香月夕呼も魔女だ等と言われていますが、結局は誰よりも人間らしいと』

「ッ……………うるさいわねえ。サッサとアイツの為に働きなさい。」

結局、それはオルタネイティブ計画成功の重要な切掛けになるのだから」

『了解しました。美しい女性の頼みです、喜んでお受けしましょう』
誰よりも忠実で、誰よりも堅実で、誰よりも信頼の置ける部下。そして友人。

それが剣崎龍二。

香月夕呼が持つ私兵の中でも突出した才能を持ち合わせた戦いの天才である。

彼の価値は常人では達成出来ない程の困難な任務を単独、もしくは少数で成功させると言う並外れた任務成功率がコレでもかと言う程に示していた。

最高の、駒である。

だが、鎧衣左近の話では殺しに対して怯えを見せたという。

彼女には到底想像すら出来ないその光景に、思わず頭が痛くなるのを感じた。

誰が想像出来ると言うのだ、平然と敵対勢力の人間達を殺して来た様な男が今更たった1人の軍人。それも、経歴も何もかも真っ黒な男。を殺す事に躊躇っている。

もし、彼が使い物にならなくなった時は？

……いや、その時はアイツが勝手にケジメを着ける事だろう。

そこは絶対に変わらない、変わり得ない剣崎龍二の生き方その物だ。他者に迷惑を掛けてまで生きていこうとする程、アイツは”精神的”に強くは無い。

だから覚悟を決めなければいけないのは私の方。
もしもの時は迷わず、アイツを切り捨てなければならぬ。
それが人の上に立つ者の役目であり、背負うべき咎でもあるのだか
ら。

「ピアティフ、居る？」

『はい、副指令。如何かなさいましたか？』

「少し疲れたわ。悪いけど、この後の予定は全部キャンセルしてお
いて」

『了解しました』

覚悟、か。

香月夕呼にとつての剣崎龍二は数少ないが、胸を張って言える親友
でも、“あの子”にとつては……鮮明に記憶へ焼き付いてしまった
初恋。

そんな彼女の気持ちすら踏み躪って、私は進む事が出来るのだらう
か？

否、進まなければならない。

人類に夜明けを与えるまで、私は悪女に徹しなければならない
のだから。

剣崎

格納庫の隣に設けられた大型のプレハブ。

しかして、中には此方へ赴いた後衛の甘ちゃん達が集合していると
言う訳だ。

とは言つても彼は数十分程の間に上からの伝令も無く、各々が談笑
ムードを取り払う事無く街中のパブの様に賑わっていた。

そんな彼等から少し離れた椅子に背を預け、俺はと言えば仮眠中
である。

周りの雑音すら子守唄に変え、既に半ば程脳内ではお花畑に片足を
突っ込んでいた。

ああいや、無論だがあの世では無いぞ？

確かに気分は良いが、昇天する程じゃない。

知り合いも手えなんて振って来ないし、船で一生懸命向こう岸に渡
ることも無い。

所謂、比喻だ。

「ぐあああああああ……ぬぬうつ……ぐあああああああ
……」

この世のものとは思えない寝息を立てているかも知れんが、疲れて
いると言つ事で見逃して欲しい。無意識に出してしまうのだ、仕方が
無いだろう。

それに周りの連中も気にする事なく雑談に集中しているのだ。

精々、上の連中が来るまでは実働部隊は此処でゆっくりするべきだ

と考える。

「つか、言われるまでも無く俺はゆっくりする。

昨日の戦闘に鎧衣課長との世間話、更に追い討ちの様に帰った自室に待っていたのは今回の戦闘のログ。つまるところ、俺には今回の戦闘データを纏め上げ、叩き上げ、ツラツラとノートに書き写してけば言いという訳だ。まあ、F型の為ならば仕方がない。お蔭様で寝不足だがね、チクシヨウ。

「うおおおつ、少佐！あなたの寝息は頭に……いだだだだっ！
！」

「飲み過ぎたのはお前の所為だろ、タリサ。少佐にまで八つ当たりか？」

「うっさい！つか、あなたも起きろ！負けず劣らず、うっさい！
！」

「……ぐおおおおおおお〜」

「ダメだ、こりゃ。熟睡だな」

「ぐぬぬぬっ！だったら叩き起して」

「タリサ。幾ら親しいとは言っても上官よ、無礼な真似は止めなさい」

昨日の晩から飲んでいたのである。タリサは今、どうやら頭痛が酷いらしい。

随分と贅沢な悩みだ。

自分は浮かれていたと言うのに、面倒事に巻き込まれていた俺から自由を奪うとは。

許せん、実に許せん。

だが許す、タリサだし。

まあこんな感じのグダグダした空気が派遣部隊の首脳陣が入室するまで続いた。

「気を付けえいっ!!」なんて大声を出された時は、流石に俺も眠り眼を摩りながら起きたがね。

怒られるのは面倒だし、何よりも唯依ちゃんが居ないのはつて、唯依ちゃんが居ない？

……まあ良いか。

あの子にはあの子のやるべき事があるのだろう、だったら介入する事は無い。

俺は俺の道突き進めば良いだけの事だ。

1番最後に入って来たイブラヒム中尉は部屋に居た部下達に楽にする様に言つと、此方へ視線を向ける。軽く頭を下げ、一応だが挨拶を返しておいた。

どちらかと言うと、俺は向こう側で情報を整理、作戦の管理などを行う側の立場で居るべきなのかも知れん。がしかし、如何にも細かい作業は得意としていない。

しかも考えられる作戦なんて、大雑把な物ばかりだ。

そんな大雑把な作戦で前線に出てみる？一瞬の後に大損害、部隊は壊滅。

雪崩れ込んで来るBETAに潰されて皆揃って御陀仏だ。

まあそんな俺の性分を理解してくれているのか、イブラヒム中尉は苦笑の後に軽い敬礼を返してくれた。流石はイブラヒム・ドゥール、出来る男である。

「急な話ではあるが、近日中に実戦試験をする可能性が高まった」

事務的で淡々とした口調で、イブラヒム中尉は口を開く。文官達が慌てた様にカーテンを閉め、大型のプロジェクターに画像が映し出される。

大陸を中心にオホーツク海沿岸部、そしてBETAの上陸地点。

目まぐるしいまでの赤マーカーの数に疲労感を覚えるが、奴さんの馬鹿げた物量は今に始まった事ではない。それに、俺はそれを戦って今まで生き抜いて来たのだ。

ならば、やる事は1つ。

見敵必殺、それ以外は何も必要とはしない筈だ。

「先日のK群は通常の3割増しの勢いで拡散し続けている。

このまま行けば、旅団規模の敵軍が此方へ二次上陸を果たす事となるだろう。

そこでソ連軍は通常の小隊で対処し、コレを掃討、殲滅する算段だ」

“数が許す限り食い尽くして構わない”、中尉が言いたい事を端的に現せばこうだ。

至れり尽くせり、だろうな。

特にユウヤは先日の電磁投射砲での戦果には納得していない様子だ。今回の実戦で、本当の”闘争”を肌で感じるつもりなのだろう。

まったく……コイツの無茶振りは何処まで吹き飛んでいくのだろうか。

このままなら敵に特攻でも仕掛けてお星様になるには時間も掛からないだろう。

とは言っても、無茶をするなど言って聞くタマでも無い。

此処まで事態が進行したのであれば、後は個人の問題である。

俺に出来るのは 精々、コイツ等に向かって来る敵の数を減らして

やる程度だろう。

「各試験小隊は護衛部隊と共に第二防衛線に展開。今回は少佐にも護衛部隊の1つとして参加して貰う事になります。が、宜しいですか？」

「問題無し」

「試験任務の詳細及び部隊の配置は、直前の観測データによって決定される。

その為、各小隊共に出撃前のブリーフィングにて伝達される事になるだろう」

……配置も、任務詳細も何もかもが出撃前の伝達？

ふざけていやがるのか？！

新兵を含めた小隊が僅かでも戦場で生き残る為には少しでも多くの情報が必要だ。

その為の情報がまさか、ぶつつけ本番で渡されるとは……

今回の演習、本当に生かしてアルゴスを帰還させるつもりはあるのか？

「イブラヒム中尉……それは上からの指示、なのか？」

「……そうですね、少佐」

納得していない、イブラヒム中尉からは十分に気持ち伝わって来る。

それは俺も同じだ。

だが、上の馬鹿共からの命令となってしまうえば……俺に出来る事は何も無い。

お互い、その後は終始苦虫を噛み潰した様な顔を浮かべていた。

タリサ

「何が動いて居るのやら……いつそ、何もかもブチ壊してやるうか……?」

ユウヤは何やらイブラヒム中尉と言葉を交わした直後にプレハブ小屋から飛び出して行き、それに続く様にイブラヒム中尉も文官と言葉を交わしながら出て行った。

既にその場に残されて居るのはアルゴスと少佐のみだ。

そして、その少佐自身も大変ご立腹のご様子。

右拳を開いたり閉じたりする度に、ゴキリゴキリと骨が鳴る音が部屋に響く。

流石に、この場で口火を切る猛者は居なかった。

無言の威圧感。

それが、少佐からは嫌と言う程に滲み出していたのだ。

喋れるかよ……こんな滅茶苦茶に気まずい場所では……

三者三様ではあったが、誰も自分からわざわざ火の中へ突っ込む度量は無い様だ。

つうかあんな不気味な笑顔を見せる少佐に話しかける度量はねえ。

目が完全にキマったヤツの目だ。

薬中よりも酷え、アレじゃ何をしでかすか分ったモノじゃないだろ
う。

ただ、それが全てアルゴス試験小隊の為、となると止める事も出来ない。
暴走気味とは言え、内面的には思い遣りのある良いヤツなのだ。
階級をチラつかせる様な奴等とは違って、誰にでも分け隔てなく接する。
戦場でも部下の気を使いながら戦って、それでも戦果は叩き出す。
普段は飄々としているが、僅かだけとは言え計算高い一面を覗かせる事もある。

きっと、あたしだけじゃない。
アルゴスの皆、勿論、ユウヤも含めて皆が少佐を認めている。
あたしも、
ヴァレリオも、
ステラも、
ユウヤも、
ヴィンセントも、
イブラヒム中尉も、
タカムラだってそうだ。

もう既に、あたし達の中じゃ、剣崎龍二って存在は必要な存在として確立している。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

それでも、この沈黙は辛い。

少佐は何やら呟くと急に黙り込み、何かを考え始めたし……

つか少佐は一度でも考え事が始まると次に目を開くまで2時間以上は要する。

その間は多分だけど、隣に戦術機一個大隊が通過しようが関係ないだろう。

どれだけ話しかけようが、銃を突きつけようが、絶対に目を開く事は無い。

とは言っても、寝ている訳でも無い。

一応口元に耳を近付ければ何かボヤいている事は分かるのだ。そんな事をしたのは誰かって？べ、別に誰でも良いだろうか　ッ

！！

「取り敢えず、私達も調べてみた方が良いかも知れないわね。」

自分達の身を守るには必要な事でしょう？まあ彼がやってくれるとは思っけど」

「あたしも賛成。積極的自己防衛ってヤツ？」

「まったくよお……少佐みたいに4つも5つも案件抱え込むのは御免だぜ……？」

アルゴスは同時に振り返る。

ついには机にまで脚を乗せ、完全に自分だけの世界へと入り浸った少佐の姿。

本来ならば注意されて然るべきなのだが、少佐がやると如何にも様になる。

本人に言えば確実に調子に乗るので誰も言わないが、黙っていれば

イイ男なのだ。

ステラも良く言っているが、あの尻軽ささえ無ければ女には好かれる。

と言っか、今の段階だっつて好かれている。

ユーコン基地に所属する女性兵士は半数以上が少佐に骨抜きにされた。

まあ彼女等は大抵”考え中”の少佐に巡り合っている事が多いのが原因の1つだ。

クール路線を地で突っ走る今時には珍しい男が居れば、それは興味も湧くだろう。

そして肩書きの力も大きい。

“日本が誇る英雄”、”Black Lion”、”城落とし”。

BETAに故郷を奪われた様な私達にとって、そんな肩書きを持った男が居るとなればそれこそ人気の的だ。まあ、幸いな事に相手が少佐なので誰も話し掛けないので飄々としたふざけた中身は誰にも知られちゃ居ない。

「で？この置物、どうする？」

「1人にすると後が怖いわよ。どうして1人した、って」

「じゃあ此処で待ち惚けかよ……少佐、早く起きてくれよお！」

ヴァレリオの虚しい叫びが、プレハブの中で大きく響き渡っていた。

藤代

…… F型改修案。

アラスカへと飛び、そこで更なる改修を施されたF型は以前と比べ大幅な性能の底上げに成功した。既に不知火とは別格の機体……武御雷に迫る勢いだ。

まあ耐久性には難があるので、馬鹿みたいに金の掛かった武御雷の様な万能機体と言う訳では無い。それに操縦者も選ぶモンスターマシンだ、実用性は低い。

それでも尚、このF型の改修案が進められているのには理由がある。

少佐の過去から現在までの全ての戦闘ログ。

それをチェックし、それを集計する事で新たな戦術機概念その物を作りだす。

そう、巖谷中佐は画策している。

理想的な案件ではある。

だからこそ技術廠は私達に出資しているし、私達は後衛で優雅にテストに専念する事が出来ていたのだ。そして

「中尉。ブースターの追加作業、完了しました」

「直ぐにフレームを専用の物に変えて下さい、期日はあまり長くはありません」

「ですが、こんなぶつつけ本番で……流石に少佐でもコレは……」

「多少の危険を冒さなければ、”この子”は完成しない……ッ！
だったら、私達が冒さなければならぬ危険とは今なのではない

のかしら？」

それでも納得がいかない、と言う様に整備班の1人は顔を俯かせた。誰よりも彼等は機体に乗る衛士を気遣う。

そして、彼等はこの子に乗る衛士　剣崎龍二　を愛していた。

「……分かっているわ、私だって。でもね、私達には限られたチャンスしか無い。

だったら今は　目の前のチャンスに全力の一手を投じる。それしか無いのよ」

自分でも、胸糞悪い事を言ってるのは分かる。綺麗事を飾り立てている事も分かる。

それでも時間が無いのは事実だ、チャンスが無いのは事実だ。

今日、此処に私達の今までの全ての集大成を完成させる。

ハンガーには、今か今かと新たな装甲を待ち侘びる機体が佇んでいた。

不知火・F型装甲　それはこの子の姉に当たる姉妹機の名前。そしてこの子は未だに名前すら貰えぬ”ナナシ”の戦術機。

しかし、その完成は　目前へと控えていた。

31 (後書き)

千枝が、空気じゃない……だと!?

迫る戦闘

急遽新たな搭乗機として用意された謎の戦術機

そして、暗躍を始める鎧衣左近

次回に乞うご期待!

そして私は期待に応えられる様に精進せねばならぬ

32 (前書き)

後は終わりに向けて突き進むのみよ……！

篋

「た、助けてくれえっ！頼む、命だけは……命だけは……ッ！」

「俺が此処に居るなら如何いう末路を辿るのか、分かるだろう？」

「仕方が無かった……アレは、私には関係の無い事だった！」

私は、あくまでも中立を守ろうとしていたのに、奴等が私を脅して……ッ！」

「中立か。最後の言い訳にしては、随分と面白味に欠けるな」

「ま、待ってくれ！止める……止めてくれえっ！！！」

「あぁったくよ。どいつもこいつも口先だな。」

無駄だらけの欠陥品の分際で俺の前に立つな、一瞬で地獄に送ってしまうぞ。

いや失敬、貴様等には考える思考回路が損失している訳だったな？
では サツサとおっ死ね、スクラップ欠陥品」

押し当てられた銃口から銃弾が射出され、脳髓が床に飛び散る。

一拍遅れながら、死体が床へゴロリと転がった。至近距離から撃たれた為か、そこまで顔は崩れてこそ居なかった。がしかし、それでも身元の判別が出来るか如何かと言われれば難しいだろう。

顔全体は崩れていないが、顔の中央には大きな風穴が開いていた。押し上げる吐き気を必死に抑えながら、私は殺人犯の顔を見る。見知った白髪、普段の飄々とした雰囲気纏わぬ真剣な表情。

私の知る“剣崎龍二”が、確かにそこには居た。

何が違うかと言えばサングラスを掛け、表情が分かり辛くなっている程度だろう。

「胸で十字を作りながら、頭に1つ。心臓に2つ」

祈る様に、心臓に銃弾を二発撃ち込む。

確認するまでも無い筈だ、何せ頭は既に吹き飛んでいる。絶対に死んでいた。

それでも彼は、油断無く確実に止めを刺した。

油断も慢心も無い、真正正銘の殺し屋。

その後の事後処理も見事の一言に尽きる。

身体に付着した血痕を素早くハンカチで拭い取ると、持っていたトランクから新たな上着を取り出し、新しく其方を羽織る。

最後に机の上に何かの封筒を一通、静かに置く。

それが何なのか、私には確認出来なかった。否、恐怖で動けなかったのだ。

人を殺しても依然として平然としていられる彼を前にして、平常心が保てなかった。

「任務成功だ。帰らせて貰う、”夕呼”」

疲労感すら感じさせる事の無い淡々とした口調。
それすら、この場を演出させる効果の1つとしてしか認識できなかった。

通信相手の声も、私には一切聞こえない。拒絶、されているのだろうか？

だが、今はそんな事すら私は思考する事が出来なかった。
憧れの人が、人殺しであると言う事実。
それが胸に重く、深く押し掛かる。

「オルタネイティブ？は認められる物じゃない。

アレは、人が越えてはならぬ最後の防壁すら容易く打ち砕く諸刃の剣だ。

貴方には　　？にも？にも関わる事無く、平穏な日々を過ごして欲しかった」

去り際に死体を一瞥した彼の瞳は、酷く冷たいモノだった。

今まで私が見たことの無い程に冷酷で、無慈悲な、”人殺しの目”。

やめて

誰かの声が、聞こえる。

やめて、りゅうじ

暖かくて、優しくて、直ぐにでも消えてしまいそうな儂い声……誰、なの？

りゅうじはきちやだめ

貴方は、” “ ?

りゅづじ、”こで”ころしちゃったら” ッ!

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

「ッ!？」

ベッドから上体を起こし、辺りを数度見回す。

未だに時刻は真夜中の2時と言った所。

それでも、”あの場”で起こった出来事が鮮明に思い出すことが出来た。

まだ脳裏に残る、真っ赤な景色が

「うつ……!」

腹から込み上げる吐き気を如何にか耐え、私はふらつく足を支えながら洗面所へ向う。

酷い表情だ。疲労を前面に押し出したような……まるで物の怪だな。自嘲的な笑いを零しながら、軽く顔を洗う。

冷たい水が私の気を沈め、僅かばかりに残っていた眠気すら奪い去っていた。

「……少し、散歩でもしよう」

本来であれば夜中に他国の基地周辺を歩くなど不謹慎であり、怪しまれる行為ではあるが一度眠気から醒めてしまえば中々寝付けるものでもない。

少し身体を動かした方が、安心して床に着ける筈だろう。

寝巻きの上に防寒用のコートを羽織って、私は静かな夜の基地へと踏み出していた。

剣崎

昼間、寝過ぎました。

お蔭で夜は一睡も出来やしない。

夕方、PXで飯を食った後からずうっと外で遠くに聞こえる海の音を聞いていた。

別に呆けていた訳じゃ無い、ただ単に海が珍しいな〜と思っていただけだ。

「……イエージー・サンダーク」

Mk・23のカートリッジを手で弄んでいた右手が、不意に止まる。ポケットに入っていたコインを手にとると、それを何度か回しながら空中へ放り投げた。

空中へ浮かび上がり、ゆつくりと地面へと落ちて行くコイン。
その一連の動作より早く、カートリッジを銃に装填。

一拍の呼吸も置かず、落ちて来るコインに銃弾をブチ込んだ。
サイレンサーも装着してある。

周りに騒音問題で小言を言われる心配も無いので、存分に銃弾を撃ち込めた。

俺の放った銃弾は2発。

1発目はコインを弾き飛ばし、その先を狙ったかのように2発目がコインを撃ち抜く。

……予定だ。

「どれ、射撃の腕は鈍ってないかな……？」

2発目によって本来の軌道からずれたコインを軽く手を前に出して掴む。

まだ少しばかり熱さが残っていたが、別段喚く程でも無い。

1発目の銃弾で付けられたのであろう傷はコインの淵、確かに存在して居た。

僅かに淵を抉る程度の傷を付けたそれは確かに狙い通り。

しかし、2発目は

「失敗だな」

中心部を大きく外れ、コインの右斜めを吹き飛ばす程度で終わっていた。

どうやら少しばかり銃に振れていなかったので身体が着いて来ないらしい。

頭の中でイメージは湧いているのに、身体が伴っていないのであれば意味が無い。

肩を軽く回しながら、取り敢えず基地に戻ろうかと思いい脚を動かす。

夜更かしするのは良いが、今はもう真夜中だ。
流石に、生活のリズムを崩してまで訓練する必要性は無い筈である
う。

と言いますか、そんな事を仕出かしてしまえば千枝に怒られると言
いますか。

意外と怖かった医務室のセンサーにも怒られちゃったりする訳です。

「さて、寝るとしますかねえ。明日も早いぞ〜っと」

いつも通りの飄々とした感じで家路（とは言っても宿舎だが）に帰
ろうとしていた俺の前に、影が1つ立ち塞がった。
いや、立ち塞がったと言うのは語弊か。

元々此処自体が狭い道なのだ、その様に捉えてしまつのは仕方の無
い事だろう。

まあ相手が

「篁唯依、か……？」

「ッ！？剣崎、少佐……？」

彼女だったと言うのは、驚きが隠せなかったがね。

奴さんの身体が僅かに強張るのが手にと取る様に分かった。

何せ息の吸い方からして普段とは全く違つものだから、気付かない方
が変だろう。

さてはて、歩くトラブルメーカーである俺が招いた新しいトラブル
なのか？

それとも、日々苦勞する俺に送られた神様からのプレゼントなのか？

どちらに転ぶにせよ、繊細な壊れ物を扱うが如く行動しなければな

らない訳だ。

ああ 面倒臭え。

篋

夢を見た等とは、口が裂けても言う事は出来ずに居る。

それもそうだろう。何故、上官に”私が貴方の夢を見ました”等と報告するのだ。

多分だが、この人は笑いながら合いの手を入れるだろう。

だが、それでは駄目なのだ。

もう私も、彼も、退けぬ場所に立ってしまった。

私は彼を知らなければならぬ 私自身の為ではなく、任務の為に。

「オルタネイティヴ？」

その言葉を口にしただけで、少佐の纏う空気が変わる。

今までの包む様な優しき風が一転し、身体全体を叩き壊す様な暴風雨へと変わる。

温厚な瞳に冷酷な色が灯り、目が彼の心情を嫌と言う程に語っていた。

「何処でそれを聞いた？」

「答えて欲しいのは此方です、オルタネイティヴ計画とは一体……」

それに、何故貴方は人殺しを！？今だって、貴方は”誰か”を殺そうとしている！」

「何かの冗談だろう？俺が人殺し？ジョークにしても嫌な」

「胸で十字を作りながら、頭に1つ。心臓に2つ」

その言葉を発した瞬間、明らかかな動揺が見て取れる。

当たり前だ、コレは彼の誰にも見せた事のない心情ボリシーなのだから。私を知る筈の無い事なのに、私が知っている。

それは彼にとつて、十分な驚異。

「俺の記憶を”見”たのか……ッ！」

誰が……まさか、イーニアか！！あの子は、そんな……有り得ない！！」

「記憶を、見る？シエスチナ少尉と何か関係が」

バシユン、と頬に熱い何かが掠る。

ゆっくりと頬から伝い落ちる血液に驚愕を隠せなかったが、それよりも今は目の前の存在から目を離すことが許されていなかった。

「オルタネイティヴ計画とは何か、か。

悪いがそれは極秘中の極秘事項だ。俺の口から軽々しく触れられる話じゃない。

それに”アレ”の認めた者以外は存在すら知らされない代物だ。

それをお前は”知っていた”。関係すら無い筈のお前が、だ。悪いが早急に処理させて貰う」

殺人者の瞳。

真っ直ぐでいて、何処までも透き通ったクリスタルの様な瞳が私を見詰めていた。

射殺さんばかりに此方を睨み付ける眼力は凄まじく、嫌な汗が額から滲む。

銃口は私の心臓に。

瞳は僅かな動きすら動かさない様に全体に。

完全に、捉われている。

「唯依ちゃんは優しい子だな、外道にまで落ちた俺をわざわざ救おうとするとは……」

呆れたと言うか、驚いたと言うか……まあそこが唯依ちゃんの気付かぬ魅力か」

最後の最期、私にとっての最後の光景。

それは今にも泣きそうで、今にも崩れそうで、今にも壊れそうな少佐の笑顔。

そんな彼の顔を見たのは初めてでこんな状況であるのに顔が赤くなる。

馬鹿みたいな自分の一途さに呆れながらも、私は

「さようなら」

「さようなら」

完全に迫る死を受け入れた。

銀の髪がそよ風に揺れる。

潮の匂いが鼻を擽り、眠り眼を擦りながらも少女　イーニアは外に居た。

クリスカすら、今は眠りに落ちている事だろう。

それでも彼女は確かめたかった。

剣崎龍二の心の色を。

彼が彼女に会う事で初めて吐露するかも知れない、彼の根底の声。

そして　無色だった彼の心が何色に染まるのか。

「ユウヤ」

今までに会った人々の顔が走馬灯の様に駆け抜け、やがて消えて行く。

「ユイ」

小さな少女にはそれが何なのか、未だに理解出来ないだろう。

いや、普通の人間だったのなら”理解出来る筈が無い”。

「チヨビ」

少女の頭は常人を凌駕する記憶量を持つ。

生まれた時から既に、彼女”達”は特別である事を強制された存在なのだ。

「　クリスカと、りゅうじ」

そして、それは”彼”も同じ。
生まれた時から既に運命が決まっているとすれば、彼の運命は”闘争”。
見知らぬ隣人など目も暮れず、
血すら繋がらぬ者には情けすら無く、
会話すら成立しないのならば問答無用で撃ち抜いて来た人生。

まだ思考が幼い少女ですら、その一生が哀れだと言う事を想像する事は難しくない。

哀れな獅子が人の為に働き続け、そして最後には果てて消える。
物語はそれで終わる筈だった。

だが、獅子はある女性を愛していた。
それがどの様な愛なのか、それは獅子自身にすら分からないだろう。
だが1つだけ言える、獅子は心の底から女性の幸せを”願っていた”のだ。

共に歩める事は無くとも、
彼女が幸せな一生を送れてさえいれば、何の悔いも未練も無い。
そんな獅子の愛する女性は

未だに明かす事は出来ない。
彼女は彼から向けられた愛にすら気付かず、日々を過ごしている。
このジレンマを断ち切らねば、名前を出す事すら出来ぬ日々が続くことだろう。

「りゅうじは、なにをみるの？」

銀の髪が、夜空に揺れた。

32 (後書き)

イーニアの真意とは？

龍二は唯依ちゃんを殺してしまうのか？

次回、『波乱万丈』

人生楽ありゃ、苦もあるさ……

焦らない、焦らない、一休み一休み

……流石に、冷房器具無しで過ごす夏は辛いですな！

33 (前書き)

このままだと話が膨大な量になりそうなので、
整頓作業に移行した方が良さのたろうか……

読み返せば、また新たな誤字やら脱字やら改訂したい場所も見付か
るかも知れない

剣崎

「何のつもりだか知りませんが、無闇に人を撃つのは如何な事かと」

未だに銃口から立ち上る硝煙。

銃口の先には女性が1人、倒れている。

が、その身体には外傷は見られない。あくまでも気絶しているだけなのだろう。

「女相手に遠慮無しで手刀を打ち込む様なアンタに言われても説得力がねえ」

手刀を打ち込んだ鎧衣　　まだ帰って無かったのかよ　　は笑顔を

崩さない。

それは余裕の表れか、彼の心情なのか。

鎧衣の心情など俺は興味がねえが、単純に気に入らないのは確かだ。何もかも隠蔽して、コイツは人に何も悟らせようとはしない。

“見ていて不快感を煽る”とは、こう言ったタイプを指して居るのかも知れん。

「彼女も私にとっては重要な”役割”ですからねえ、此処で殺され

ては私が困ります」

「……秘密主義って言葉、アンタには無縁だろうな」

「褒められても何も出ませんよ」

「褒めてねえよ」

ハツハツハと笑い、鎧衣左近は帽子を被り直した。

毎回毎回、立ち去る際には必ずと言って良い程に帽子を直すのは何故だ？

やっぱりアレか？

気に入らんのか、頭の上に中途半端に被さる帽子と言う存在が。

「彼女、殺さないで下さいね」

「だったら如何しろと？まさかとは思いますが、何もかも話すのか？」

「いえいえ、それは少佐に一任しますよ。ですが、”殺さないで”下さい。」

ああ危害も加えないで下さいね。傷物になって喋れなくなっているのは困ります」

「お前……それって、何もかも喋るって事じゃねえか……」

「おや。そう聞こえましたか？」

「そうとしか聞こえない様に喋られていましたからねえ、鎧衣左近殿は……」

何コイツ汚い、流石オヤジ汚い。

完全なる一択問題なんて、解く必要性すら感じねえじゃねえか。
つまりは何か？

俺は今から書類仕事に戦術機関連の訓練、最後には夕呼の怒鳴り声
がお待ちかねって事で良いのか。何だ、ただの地獄じゃねえか！…
…ふざけてやがる。

理不尽だろう、何故こうも俺にばかり不幸が回ってくるのだろう…
…？

「なあ、鎧衣課長」

「何かね」

「アンタ、俺の災厄の原因なのか？

いや、四六時中俺に付き纏って俺の嫌がる事ばかりをし続けるとか
……」

「やって欲しいのかね？」

「謹んで辞退させて頂こう、俺はまだ死にたくは無い」

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

静かな吐息を立てながら、未だに此方側の世界へ戻って来ない唯依をお姫様抱つこで運びながら、俺は話題を如何切り出せば良いのか真剣に悩んでいた。

何せ、これから話してしまう事は最重要機密の1つと言っても良い事だろう？

絶対に口を割ってはならない、絶対に情報が漏れてはならない。それを俺が話す訳だ。

夕呼からの信頼を裏切る結果にもなるだろう。

いや、待て。

此処は彼女の記憶の中に俺との遣り取りが残っていない事に期待するのは如何だ？

そうすれば「倒れていた君を運んできたのさ、ハハツ」なんて軽い口調で全てを誤魔化す事が出来るだろう。

よし。その線に俺の全てを賭ける事にしよう。

まさに一世代の大博打。俺の人生全てを賭けたココ一番の大勝負だ。

ハハツ！任せろ、俺は賭け事には滅法強いぜ？

「んっ……」

つと。如何やらお姫様が夢から醒めるまで長くは無い様だ。

外付けのベンチに彼女を静かに寝かせ、いつも通りポケットから煙草を取り出す。

何度も出したり閉まったりを繰り返していたので、箱はボロボロになっっていた。

最初こそ口が寂しかったので吸い始めた煙草だったが、今となっては俺の身体の一部とでも主張するかの様に欠かせない物へと変化し

ていた。

「っ……此处、は……？」

「まだ真夜中のカムチャツキー基地。眠り姫のお目覚めにしては優雅じゃねえな」

まさか誰かからの反応が返って来るとは思いもしていなかったのか、唯依は心底驚いた様子で此方を振り返り、僅かに息を呑んだ。

この様子じゃ、”何も覚えていませんでした”と言う訳にもいかんか……

「質問が腐る程あるのは承知しているがなあ……」

今の状況じゃ話せないのが現実だ。俺はお前をまだ信用出来ない。それに、話しちまえば俺はお前を殺さなきゃいけない。

……まあその何だ、殺すには惜しいだろ？

その若さで出世頭なのに、その芽え叩き潰しちまうのは些か愚かしいつつうか。

いや、別に俺の個人的な意見という訳じゃなくて、国家全体から見た意見と言いますか、

人の為と言った方が幾らか的確かも知れんが……でもそう言うアレじゃ……」

チクシヨウ、鎧衣課長。

アンタのお蔭で俺は今まで保って来た面子も何もかもブチ壊しだよ。

「 龍二さん 」

グダグダ話を引っ張ろうとしていた所、凜とした声が話の腰を折った。

場を支配していた筈のドロドロとした雰囲気が吹っ切れ、今は夜らしい少し肌寒い風が辺りを吹き抜けていた。

「私は、貴方を信じてても良いのでしょうか？」

…

……

……

……

……クツ、ククツ。コイツ、ついに頭のネジまで飛んだのか？
殺されかけた相手を見て、信じてても良いのかなんて普通の神経なら
聞く必要も無い。

馬鹿だろ。若しくは阿呆だろ。

いや、ただ単に何も考えていないだけなのか？

「正気か？」

「正気です」

「自分を殺そうとした相手に”信じてても良いのか？”なんて普通なら聞かんぞ」

「……私は、ツ……私は、龍二さんを信じたいから」

「はあ？」

素っ頓狂な声を上げてしまった。

馬鹿と言つか、コレじゃお人好しの部類じゃないのか？

そう簡単に人を許したり、信用するなんて言ったり……見かけによらず軽いのか？

いや、そんな筈は無いだろう。
相手は”あの”唯依ちゃんだ。
命令と有れば燃え盛る炎の中にすら嬉々として飛び込んでいきそう
な彼女が

「龍二さん」

「お、おう!?!」

「……私は、貴方を信じてても良いのでしょうか？」

仮面を被っている貴方じゃない！本当の、仮面を被る前の貴方を
……信じても……」

「今、俺からは何も話せねえぞ。少なくとも弐型が完成するまでは、
何も」

「それでもいつか話してくれるのならば、待ちます」

「……約束は出来ないな」

「それでも、私1人の勝手な自己満足だったとしても、良いです」

確固たる意思を携え、彼女の瞳が俺を見詰める。

縛られているだけの飼犬風情が、どうやら野生の血に少しだけ目
覚めたらしい。

一丁前に生意気な事言いやがって。

何だよ、女の子らしく”待ちます”なんてさ。似合わねえよ、お前
さんには。

“女である前に1人の衛士である”、お前の口癖だろ？

「まったく……腸が煮えくり返る程のイイ女じゃねえか、巖谷さん」
俺の答えを待つ唯依の頭を乱暴に撫で、握り拳をグリグリと押し付ける。

腕の中で「痛い！」と自己主張する彼女の事は無視して、俺は只管に頭をグリグリし続けた。……いや、別に変態じゃねえよ？

篋

どれだけの間か分からないが、頭に走る痛みが柔らかくなった頃。龍二さんは静かに、私の頬に触れた。

「俺は人殺しだ、否定はしない。

だが、俺にも小さいながらも正義感がある。

無関係の人々を巻き込むのは嫌だし、話し合いで解決するならそれに越した事は無い。

でも　もしも、目の前で悪事を企む大馬鹿野郎が居たら如何する？

BETAに蹂躪されている俺達を更なるどん底へ落とす奴等が居たとしたら？

俺は、悪いがそいつ等を許す事が出来ない。殺しちまうかも知れない。

歪んでいるかも知れんが、それが俺の正義ってヤツだからさ」

心から零れ落ちたような言葉は静かで、今までの龍二さんからは想

像も出来ない程に穏やかだった。慈愛の精神、そんな言葉が似合っているかも知れない。

いつしか、私は彼にしがみ付く。

信じたいけど、信じたいのに、どうしても不安が残る。

彼はまた、人を殺そうとしているから。

「約束は出来ないが、善処はする。なるべく誰も傷付けん様に、任務遂行を目指すさ。」

まあちよつとばっかり面倒が多いかも知れんが……

まさか面倒事を押し付けてくれた君が手伝わん訳じゃ無いだろう？」

「あ、当たり前です！私で出来る事があれば、何でもお手伝いするつもりです！」

「ほっほう？何でも？」

「っ……な、何でもです！」

「へえ〜？何でも、ね。ふう〜ん？それじゃ、唯依ちゃんが着た水着を」

「却下します」

「何で！？何でもしてくるって言ったたる！！」

「それは龍二さんの私情ですので」

「嘘吐き！俺の心を弄んで楽しいの！？」

良かった、いつも通りの龍二さんだ。
思わず安心した私は、途端に足の力が抜けていくのを感じた。
それもそうか、こんな短い時間の間に色々な事を詰め込まれてしま
ったのだ。
それは疲れも溜まる事だろう。

「ん？どうかしたのか、唯依ちゃん」

「あ、えっと……すみません、足に力が入らなくて……」

「……まあ俺の所為もあるからなあ、仕方ない。負ぶさりなさい」

「え！？い、いえ大丈夫ですよ！」

「こんな寒い所に女の子1人置いていけるか。サツサと負ぶされ」

「で、ですが……」

「ホラ、サツサとしないと朝になっちまうぞ。

朝までこんな場所に2人きりで居たら、どんな勘違いをされるか
分かった物じゃない。

今は黙って言う事を聞けつつの」

そう言うと、彼は無理矢理私を背負った。

思わず声が出そうになったが、流石にそれは失礼かと思いい何とか抑
える。

龍二さんの身体は少し煙草臭かったが、昔から何1つ変わらずに暖
かかった。

「……龍二さん」

「ん？」

「……ありがとうございます」

「おう」

道を歩く時のゆったりとした振動に全てを委ね、私は夢の世界へと落ちていった。

彼は無言で私を負ふさりながら歩いている。

その足取りは、先程よりは幾分も軽やかだった。

藤代

「昨日は随分とお楽しみだったようで」

「如何だったかなあ。記憶が曖昧でね、夢遊病なのかも知れんよ？」

「……言及はしないで置きましょう。」

私が関わらなければならぬのは少佐の私生活では無く、この子ですから」

「コイツは……また……F型の、改修機……だよな？」

「見た目は幾分か変わっていますが、クセは一緒です。
何せF型のフィードバックデータを元にして作られた少佐専用機
ですから」

そう言うと、少佐は啞然とした顔で目の前のハンガーにある機体を
見上げた。

今までに何機もの機体を乗り換えてきた彼には専用機など無かった
のだ。

F型は専用、と言うよりは彼が適応しただけに過ぎない。
完全な専用機とは懸け離れていた存在だった。

だが、F型を操縦し続けた事によって少佐には常人離れた対
Gがある。

これならば、彼専用の機体を造り上げる事が出来る。

新たなコンセプト、

新たな武装、

新たなフレーム、

そして既存の技術を取り入れた最高の国際機。

私の、藤代千枝の最高傑作。

名前は無いが、単純な性能面ならば弐型すら上回っていると自負し
ている。

……今回の実機試験、次は弐型の活躍など霞んでしまつたろう。
何せ戦場には”黒い閃光”と共に破壊を撒き散らす、黒獅子が降臨
するのだから。

「では早速ですが、データを取る為にシミュレーターを開始しまし
よう」

「え!？」

戦士達に与えられた僅かな休息は終わりを迎えようとしていた。また暫くすれば命の遣り取りの中に身を置く事になるだろう。だが、戦士達はそれすら厭わない。躊躇わない。

何故ならば、彼等は生粋の戦士だからだ。

34 (前書き)

TE、漸く終わりが見えて来たのだろうか
マシンガンの如く投稿を連続して繰り返して来たが、
流石にそろそろネタが切れてしまいそうな予感がして来ました
一度、充電期間に入りたいと思います

それから

(名前)

で今まで視点を変更してきましたが、今回は少し変えてみました

の文字で視点を変更する事になっています

- ・前の方が良いな！
- ・いやこっちの方がいいぜ！

教えて頂けると私自身も勉強になるので、感想の方にも書いて頂けると幸いです

フットペダルを浅く踏み込み、機体を加速する。

加速の際に一瞬だけ身体に浮遊感が漂い、その後押し付ける様なGが身体を覆った。

思わず唇を噛み締め、今までに感じた事の無い衝撃に耐え抜く。

眼前を通り抜けていった光線を確認するまでも無く、機体を光線級の待つ後方へと移動させた。後方でズッシリと構える光線級、重光線級の大きな瞳がギョロリと此方へ向けられ、思わずと言った具合に背筋に悪寒が走る。

狙われている

その感覚が恐ろしく、その感覚が堪らない。

両腕の突撃砲で光線級を狙い撃つ。

大小の違いはあれ、重光線級も光線級も躊躇う事無く地へと伏して行く様は圧巻だ。

数を減らさなければ、総射数を減らさなければ、殺さなければ、殺さなければ。

脅迫概念の様に脳内から送られる身体を動かす伝令と言う名の命令に、化物顔負けの変則的 変態的 機動を行う。

視界全てがアライトで真っ赤に染まり、それを確認するまでも無くフットペダルを連続して踏み込む。機体の各所に装備されていたスラスターがその命令に応え、淡い真紅の炎で巨体を前へ、前へと押し出していた。

そして　連続で身体を包み込むGはやがて、身体一拍を置く事無く断続的に身体を襲う。

一区切り事にしか行つて来なかった急加速から身体に休みを与える事無く飛び続けているのだから、当然と言えば当然の事でもあった。今の速度は時速　1000km/時。

何の訓練も行っていない衛士であれば、一瞬で嘔吐するであろう壮絶な速度。

だが、コレが良い。

コレで良いのだ。

身体を包み込むGすら心地良い物と変えなければ、俺は今まで生き残れなかった。

『ルクス及びマグヌス　ルクスからの照射が来ます、数は20!』

言われるまでもねえつ、機体脇を通り抜けて行く光線の余波を感じながら空になった突撃砲のカートリッジを投げ捨て、新たなカートリッジを装填する。

その隙に僅かながらも殺すペースが落ちたが、そもそも殺す術が一時的に無くなったのだから仕方が無いだろう。当たり前の中断行為だ。

問題を抱える事無く眼下から繰り広げられる光線による歓迎をスル―しながら、両腕の突撃砲を光線級が居る場所へ絨毯爆撃の様に、徹底的に撃ち込む。

下の方から飛び散る大量の血液は、蕾が花開いた時の様に辺りを彩っていた。

正直、気味が悪い花である……

『当初の訓練成功内容通り、光線級7割以上の撃破は完了しました。どうします？このまま訓練を続行するか、休憩を挟まれるのか。お好きな方を』

千枝から告げられる訓練成功の言葉に思わず気が緩む。が、俺はまだこの新しい相棒の事を何も知らない。知らなくてはならないのだ、戦場で生き残る為に。俺は死にたく無いからこそ。

この圧倒的な機動力、相変わらず速度の為に犠牲にされた装甲、動きに対して反応するまでの僅かなロスタイム、何から何まで全て、俺は知りたい。知らなければならぬ。生き残る為に、俺は相棒の事を全て、何もかも、知らなければならぬのだ。

《……奴等、綺麗に並んでやがる。無性に吹き飛ばしてやりたくないな》

『訓練続行の意思表示と受け取ります。では、彼等に鎮魂歌を送りましょう』

千枝とのウィンドウが一時的に表示されなくなり、狭い箱の中に残った俺は1人静かに息を吸って、吐き出す。

自然と、トリガーを握る指には力が入っていた。軽く指に力を入れれば、機体を揺らす事すら無く弾丸が飛び出し敵に命中する。

出来る、まだ殺れる。

再度自分の状態を確認し、まるで降り注ぐ隕石の如く機体を降下さ

せた。

今から行つのは血みどろの殴り合いだ。美しさの欠片も無い、ただの殺し合い。

だからこそ、面白いのだ！！

黒い流星が突撃砲を着地点に撃ち込みながら、豪快に着地する。

一瞬空気が震え、辺り一面に熱波が漂った。ああ　なんて心地の良い着地だ。

すかさず、此方へ近付いていた要撃級の頭を吹き飛ばす。

その後は詰まらない弾幕合戦だ。

辺りで此方へ向つて来るBETAに有りつ丈の弾薬を撃ち込んで行くだけの作業。

1人だけの寂しい弾幕とは言え、敵を近付けさせないには十分だったが。

「私達のエースは落とせない。貴方達も、直ぐに分かる」

管制室にて、千枝はその光景をモニター越しに確認して居た。

圧倒的に数で劣る1対多数の大乱闘。

それでも、彼女は何処か確信した様に呟いていた。

私達を守り抜いたエースが、死ぬ事を恐れる弱虫が、この程度では落ちる筈が無い。

彼の牙は抜け落ちない。

彼の翼には掠りもしない。

彼の闘争本能は　今でも真っ赤な炎の様に燃え滾っているのだから。

「Black Lionか」

黒い流星が画面内と表示されたマップ内を縦横無尽に動き回る。敵が蔓延るこの大地すら、我が領土の一端とでも豪語する王者の様に。

百獣の王である、ライオンの如く。

負ける気がしない。負ける筈が無い。

不思議な高揚感と共に、千枝は湯気の立つカップに唇を寄せた。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

“BETA上陸近し”

いつもならば平然と受け流し、本番でやりたい様にやっている筈だが……

今回はかりは少しばかり真面目にブリーフィングを受けなければならぬ。

何せ、新しい相棒との年月は未だに一週間にすら満たないのだ。

付き合つて一週間でやる事をやる様な単純馬鹿とは違い、丁寧に鉄壁のガードを崩しながら彼女の心理に触れ様と毎日毎晩頑張つて居るのである。

そのお蔭で、近頃は睡眠場所が自室から管制ユニットに代わるっていた。

別に、自室に戻るのには楽な事なのだが……

シャワールームから自室へ戻る距離と、格納庫へ戻る距離。

単純に格納庫の方が圧倒的に近いので帰り際に少し見ていこうかな？なんてノリで行くとそのまま一晩過ごす事になるのである。

閑話休題、少々話が逸れた。

タイムリミットは数十時間から数日と言つた具合だろう。

奴等の心境など人間には到底理解出来ないので分らないが、それでもこのまま順調に侵攻してくれば何れは顔を合わせる事になる。その時までにはコンディション、機体への慣れ、隊の士気を上げて置くべきだろう。

何せ、経験浅いとは言え一つの部隊を任される立場となっているのだ。

他の連中に気を配る事も重要な任務の一つだと考えている。

淡々とBETAの情報を告げるイブラヒム中尉の話を頭に叩き込みながら、部屋に在住している連中を軽く確認して行く。アルゴスは当然だが、見慣れない面がある……

確か、フランク・ハイネマン。

彼はX F J計画の技術顧問に当たる人物だった筈だ。

この計画に携わつてから何度か会つた事こそあるが、言葉を交わした事は少なかった。

どちらかと言えば、彼は計画主任である唯一にこそ用があるのだ。

ニコニコと笑いながら、彼はイブラヒム中尉の話を聞いている。

正直、あまり関わり合いになりたくない男の筆頭候補だろう。

続いて、俺がお近付きになりたくて堪らないイエジー・サンダーク中尉。

許されるのならばこの場で頭を消し飛ばしてやりたいが、グッと堪える。

見ていると本当に撃ち殺してやりたくなる……コイツの腹黒さは一級品だな。

「不知火・式型は出撃停止だ」

人間観察と言う名の作業中、誰かが席を立った様な音がした。それに対しては興味すら湧かない。

俺にとって今一番重要な事は目の前に迫る戦場なのである。

残念だが、今回は他者を一番に考えてやれる程の余裕が無い。何よりも優先すべきは最新作となるナナシ戦術機でのテストを無事に成功させる事だ。

「出撃……停止……ッ?!」

立ち上がったのは、ユウヤだ。

自分が開発衛士を務める式型が今回の戦闘で出撃をさせて貰えない事に対して納得出来ない事があるのだろう、無駄に責任感の強い奴だ。

「まだ質問は許可していないぞ、ブリッジス」

「……は」

渋々、と言った具合で着席したユウヤよりも、アルゴスの連中はイ

ブラヒムの告げた内容に如何にも納得出来ない物があつたのだろう。何とも言えない視線をイブラヒム中尉へと向けていたのは遠目であれ、理解出来るものだった。

「イブラヒム中尉。任務概要の伝達が終わったのなら、俺は戻りたいのだが？」

これ以上此処に長居すれば、確実に面倒事に巻き込まれる。認識としてはそれで十分だ。

これ以上何かに巻き込まれ、貴重な時間を無駄にするのは我慢なら無い物がある。

部屋の中に居た誰もが予想していなかった男の開口に驚きを隠せないで居た。

「試作機を任せられた、と藤代中尉からは聞かされております。私からの任務概要伝達はこれで終了です。お手間を取らせました、剣崎少佐」

(……おいおい、タリサよ)

タリサは、捨てられた犬の様な目で俺を見ていた。

別に、此処から退室するのはユウヤを見捨てた訳じゃない。

出撃中止に関しては何も言えないが、実戦経験を積むべきだとは思っているのだ。

それに、ユウヤは波に”乗った”。

今出撃させれば順風満帆なスタートダッシュを切る事も出来るだろう。

「イブラヒム中尉……俺は式型をACTVの随伴機として推薦するよ」

イブラヒム中尉は、驚いた様に見開く。

それを最後まで確認する事無く俺は部屋を後にして居た。

その際に、ハイネマンは小さく俺に会釈して居たが……気にする事は無い。

アレが今、何を考えているのかは知らん。知りたくも無い。

だが、敵として俺の前に立ち塞がるのなら喜んで殲滅するだけ。

奴等の策に便乗した様で、少々だが自分が滑稽に思えるのは致し方の無い事だと割り切るべきだ。こんな下らないファルス、いつまでも長引かせる物じゃない。

この後にもう一波乱程あった様だが、俺には関係の無い事だ。

コレ以上関わってしまえば時間が本当に足りなくなってしまうだろう。

あの何とも言えないブリーフィングから抜け出し、格納庫へ戻る通路の途中。

辺りをキョロキョロと見渡す少女が通路の先から此方へ向って来ていた。

着用している軍服はソ連の物か。

何やら新たな面倒事の香りが漂うが……もうこの至近距離だ、逃げられん。

「珍しい物など何も無いだろう、別に。お前達も見ている光景の筈だが？」

仕掛けられるのなら、此方から仕掛ける。

如何にも怪しいオーラが醸し出されていた少女に声を掛け、少しだけ敵意を見せる。

殺意では無い為、それ程驚く事も無いと思ったが

「ひゃうっ!?!」

……過剰な反応を示されてしまった。

頭の中に入れておこう、無闇やたらに人に敵意など見せるものではない。

寧ろ、トラブルを招いてしまった気もするが　この際は諦めてしまおう。

後はトラブルに対してどれだけ迅速な処理が出来るのか否かの問題なのだから。

「驚かせるつもりは無かったが、無礼を働いた。許してくれ」

膝を折り、尻餅を付いた少女と視線が合う様に調節する。

何事も出会いと言う物が肝心であり、出会いによっては運命すら左右するのだ。

「あ、い、いえ、僕は大丈夫です……ッ、あの、失礼しました、少佐!」

「……」僕」?

「ふえ?」

記憶を探り、今までに女性でありながら一人称が『僕』であった者を探す。

つい最近出会った気がするのだが、如何にも思い出せない。

いやいやいや、優秀な人材だった筈だろう。

確かSu-27辺りに乗っていて、射撃が得意で、一人称が僕な

「セレナ・エニックスか？」

「は、はい！？ど、どうして僕の名前を……」

「剣崎だ」

「ええっ！？」

何故名前を出した時点でそこまで驚かれなければならないのだろうか？

別に、あの時は……いや、音声通信だったのか。

気が散る事を避ける為に極力、画面に人の顔を出さない様に計らった訳だ。

それで顔も見て居なかったもので、此処まで驚いて居る訳なのだろう。勝手に納得しているとセレナは直ぐ様立ち上がり、敬礼を行う。

楽にしてくれ、と笑いながら言っているとセレナは恐る恐ると言った具合に敬礼を止めた。

普通ならば上官が此処までフレンドリーな筈がない。

そう言う意味では通常よりも緊張してしまうだろうが、敬語を使われる様な立派な行いをしていない剣崎龍二にとっては譲る事の出来ない事柄なのだ。

「わざわざ此方側に来たのにも理由はあるだろう？」

「は、はい。やっぱり部隊の皆は全滅していて……それを報告に」

「そうか……戦時中とは言え、胸が痛む話だ」

「それで……それで、ですね……ッ！」

僕……上官に頼み込んで、少佐の指揮下に入れて貰える様に頼みま
した!」

「そうか、俺の指揮下に……え?」

「エレナ・エニックス臨時少尉です！」

本日より剣崎少佐の部下として、誠心誠意尽くしていくつもりであ
ります!」

「え?」

「え?」

「少し、待て。俺の部下?」

いやいやいや!お前はソ連、俺は日本だぞ!?!常識的に考えてみる
!」

つうか上官って誰!?!それなりの権力者だろうが……」

「ラトロワ中佐です」

「oh…」

出て来た人物の名前に思わず眉間を押さえてしまった。

まさか、こんなタイミングで登場するとは思っても居なかった人の

名前だ。

予想外と言うよりも、奇想天外だ。訳が分からん。

「まあ待て、あくまでも君はジャーナル大隊の隊員じゃない筈だな？
だったらラトロワ中佐が人事異動させる権利を持って居る筈が無
いだろう？」

「いえ、中佐は上の連中に声を掛けて下さっただけです。
悪い言い方になってしまいましたが、パイプ役を務めていただいた
と言う事です」

この借りは10倍にして返させて頂きますよ、ラトロワ中佐。
その端正な顔歪むまで『ピー』が『ピー』で『ピー』してやります
よ……へへッ。
おっと、涎が……

「ああもう、知らねえぞ！？後で後悔しても遅いからな！」

「はい！」

まあ、取り敢えず新たな戦力を手に入れた事を前向きに考えて良い
のだろうか？

セレナ・エニックス少尉 優秀な射撃による援護を得意とする後
衛。

まだ開花こそしていないだろうが、潜在能力は高いと見積もって良
いだろう。

こりゃまた、ユウヤ以降2人目の付きっ切り訓練をする羽目になる
のだろうか？

34 (後書き)

- ・視点変更の際の意見
- ・新型戦術機のお名前
- ・新型戦術機のビックリギミック

などなどの意見を募集しております

「こんなの考えた!」「コレなんか良いんじゃない?」
そんな気軽な意見大歓迎です

お待ちしております

35 (前書き)

ヒヤッハッー！

反省しました…… アイディア募集中です

“愛しています”

そう言われると、少し言葉を重く感じてしまう。

それ程の時間を重ね、2人の関係は恋から愛へと昇華したというのか？馬鹿を言わないでくれ。俺には到底、誰か1人を愛し続ける勇氣など無いのだ。

放って置いてくれ、自分ならそう言って相手を捨てるだろう。

“好きです”

そう言われると、一体こんな自分の何処を好いてくれているのだろうか。

そんな疑問を投げ掛けたくなくなってしまふ。

何の束縛も無く、ただ傍に居たい等と言う発言は問題外だ。想像すら出来ない。

益を求める事無き行動を取ろうとしようと思つ程、人間は優しくは無いだ。

まあ総合して考えてみると、見事に”自分”は捻くれ者だと良く分かる。

愛も恋も要らない。

ただ戦場に立ち、
ただ敵を憎み、
ただ銃を求め、
ただ弾を漁り、
ただ当たり前のように死んで逝く事を望んでいるのだろう。
悔しいが、結局小さな人間1人程度では大きな意思等に抗える訳が
無いのだ
成されるがまま流され、そして消えて行く。

それが軍人として正しい有り方だ、とでも言うのならそれはきつと
間違いだ。
一切の自由が認められない程、軍人とはガチガチに縛られた存在で
は無い。
確かに、民草の為に命を賭す覚悟が無ければやっていけない職種で
はあろう。
だが、軍人達は縛られているのでは無い。
命令されたから、嫌々戦場に赴くのでは無い。

軍に入る。
そう決めた奴等の考える事など、大抵は1つ。
誰かを守りたい、そんな綺麗でキラキラと輝く理想を掲げる奴等ば
かりだ。
中には純粹に戦いを求める者も居るが、そんな奴程サッサとあの世
へ逝く。

残ったのは命を捨ててでも誰かを守ろうとする英雄気取りの大馬鹿
野朗の集まり。
そして、自分の命を何よりも大事にする臆病者で小心者の集まりだ。
勿論自分は後者に該当する人物である。
そもそも、自分の命を差し出す様な相手を見付けていない。

この先も見付かるとは思えないが、探す事は探してみようとは思っている。

本当の意味で、背中を預けられる相棒。

見付かるのはまだまだ先かも知れないが、気長にやって行こう。ゆっくりと、だが確実に破滅へと向って行くこの星だろうと関係は無い。

剣崎龍二は新たな一步を踏み出す。

そうしなければ、俺はいつまでも変わる事の無い”俺”のまま
で居る事になる。

それだけは我慢出来ない。

それだけは耐えられない。

亡くなった人を思うだけの一生に、何の価値があると言うのか。

そんな日々を終わらせる為に、新たな”何か”を探しに行こう。

命を賭けても惜しくは無いと言える程の、俺の大切な”何か”を探して見せよう。

そして、母さん達の墓前に報告してみせる。

俺も漸く人間らしく生きられたよ、と。

いつになるのかは分からないが、その時が来れば笑って報告してやるのだ。

いつか、必ず。

「なあ、千枝よ。突然だがソ連から」

「あら、エニックス少尉ですね？其方の上官からはお話を聞いています。」

本来ならば別な対応の仕方もあったのですが、今回は時間が惜しい。

雑な出会いとなってしまいましたが、貴方の入隊を歓迎しましょう」

「あ、ありがとうございます！」

セレナに驚く事も無く、寧ろそれを予め知っていたかのように千枝は冷静だった。

差し出した右手をセレナが掴むと、満足そうに微笑を浮かべる。

つまりは、何か？全て知っていたのか貴様。

それで俺に何も喋らずに此処まで来たと言うことか……死んでしまえば良い。

「じゃあ何か？

俺はエニックスをこのままシミュレータールームに拉致監禁すれば良い、と」

「監禁する必要はありませんよ。そうですね……F型にでも乗せて下さい。」

何の訓練も行っていない衛士が何秒程度アレの速度や強烈なGに耐える事が出来るのか私自身、些か興味があります」

「鬼畜だな、オイ」

「何と言われようが構いません。ああ、エチケット袋は各自持参と言う事で」

1人頭上に？を浮かべながらも俺の後に続き、千枝が居た格納庫の監督室からシミュレータールームへと向う。道中、俺は幾度と無くセレナに対して同情するしか無かった。

訓練も無しにあんな物に乗せられてみる、女の子ならお嫁に行けなくなる。

共に過ごした時間が僅か数時間の男の前で、胃の内容物をブチ撒ける？

彼女には可哀想だが、気が引け過ぎて何も気の利いた事を言っていられない自分が憎い。

如何、切り出すべきだろうか？

「あの、少佐。」

僕が乗る機体って、ソ連製の物では無くて日本製の物に代わるのでしょうか？」

無言の空間に堪えかねたのだろう、先にセレンから切欠を作ってくれた。

感謝しても仕切れない程だ、これから語る事になるのであろうシヨッキングな内容を想像すると少しばかり気持ちブルーになるのは

「一先ず置いておくが。」

必死に『任務だから』と唱え続けなければきつと話す事無く本番へと向う事になっていただろう。そうなれば 想像はするまい。

「そうなるな。」

さつき千枝……じゃなくて、藤代中尉が言っていたF型って言うのはTYPE-94の改修機に該当する機体の略称だ。まあ、その、何だ……エチケツト袋は必須だな」

「エチケツト袋？大丈夫です、僕だってこう見えても立派な衛士ですよ？」

どんな機体でも乗りこなして見せます！」

「……そ、そうか」

意気揚々と応えてくれたセレナの眩しい笑顔を直視する事が出来ない。

胸に渦巻く罪悪感故なのか、それともこの少女の未来を知っているからなのか。

どちらにせよ、未来が目に見えている今の状況では

「セレナ、一応確認するが……適性結果のランクは？」

「ああ訓練兵時代の検査ですね。僕のランクはAでした、えっへん！」

A。

普通に考えれば、大変に優秀な結果だ。

大抵の部隊ではコレで活躍する事も可能だろう。

それに、過去のジャツカル中隊を顧みてもAランク程有れば採用圏

内だ。

即ち、”普通”ならば何の問題も無い。

ただ問わせて頂くとすれば、このF型は普通だろうか？

フットペダルを1度踏み込むだけで起きる急加速。

停止状態から一気に最高速度まで駆け上る爆発的な瞬間。

それを初回で耐えられる衛士は居ない。世界中を探しても居ない。断言してやっても良い。

何なら全財産を賭けてやっても良い。

居る筈が無いのだ。人間の身体はそれ程、丈夫では無い。

耐性すら出来ていない人間が平然と乗りこなす事が出来る甘っちょろい機体では無いのだ。腐っても製作者は藤代千枝である、搭乗者の事など『知らぬ・存ぜぬ』と言わんばかりに追求されてしまった性能に偽りは無い。

即ち、日本が産んだ世界に誇る事の出来るモンスターマシンなのである。

「……覚悟は良いか？」

「??? はい、日本製の戦術機だろうが僕が乗りこなして見せます！」

「そつか……乗りこなす、か」

乾いた笑いを零しながら、ゆっくりとシミュレータールームへの扉が開かれる。

シミュレータールームの中は、案外と静かだった。

寧ろ好都合だ。今から地獄絵図が展開されるのだから、人は少ない

方が良い。

それに、F型もセレナを待っている事だろう。

新たな犠牲者となる彼女を、幼き残虐性を胸に秘めながら。

「コイツが不知火・F型装甲。

あらゆる点で従来の戦術機概念を捻じ曲げた化物が立体化した様な機体だ。

今回はあくまでもコイツの機動に触れてほしいだけなので、武装は無い。

もしかすればお前に配備されるかも知れない機体だ。確り学習しろよ?」

「この機体が、僕に……?」

コンソールを操作し、画面に展開したF型の資料を次々に展開していく。

その1つ1つの資料に対して表情がコロコロと変わるセレナは見ていて飽きない。

因みに、今回俺は管制をする為に外で待機する事になっている。

取り敢えずセレナに強化装備を着て来いと命じ、今回のシミュレーターの設定を行う作業に入る。F型の速度を堪能して貰う為に、何も無い平地にして置こう。

……案外と、俺も外道だな。

日本製の機体に触れるなんて、初めての体験だった。

もし剣崎少佐と出会い、あの戦闘で生き残る事が無ければこんな事は有り得なかつただろう。少佐には感謝しても仕切れない程の恩義を感じる。

『機体の操作は此方で行う。お前は座って、体感してくれば良い。限界だと思ったのなら緊急停止ボタンを押してくれ。良いな？無理はするなよ』

《大丈夫です！》

でも、少佐は先程から僕の事を侮って居るのだろうか？

それは少佐に比べるまでも無い技術だとは思うが、僕自身そこ等辺の衛士よりは優秀だと言う意識があるのだ。この訓練で、少しは見返してやりたい。

『そうか……では先ず、500？/時だ。この程度ならば余裕だろう』

そう言うと、一度ウィンドウが消える。

その後を感じる身体の浮遊感から、漸く訓練が始まったのだと思い、僕は

『う、ぐっ！？』

従来の戦術機との違いに愕然とした。

何だ、この機体は。

何故スピードを上げるまでの加速を必要としない？

何故ほんの1秒にも満たない程で500？/時へと到達するのだ？

そうか、少佐は侮っていた訳じゃ無い。

コレの凄さを知っているからこそ、心配していただけたのか……ッ！

『続いて、加速・緊急停止・加速の3連行動を行う』

《え、ちょ……ッ！！》

ある程度降り掛かるGに耐え抜いたかと思えば、間髪入れずに少佐が次のカリキュラムへと進行している。つまり、緊急ボタンを押さなきゃ休ませてくれないと言う事か。

負けない、僕は負けない……ッ！

今回程、負けず嫌いな性格が災いした事は無いだろう。

加速した時に掛かるG、そして急停止した時に掛かる身体への負担。それを一気に身体で受け止めながら、何とか歯を食い縛って吐き気に耐える。

中身を何もかも吐き出して楽な気分になりたいと思う自分が居る。でも、負けたくない。

その一心で只管、歯を食い縛って耐える。

『……あまり長々と続けるつもりは無い。

サッサと最大速度を体感して貰うが、お前自身の覚悟はもう良いのか？』

《ッ、ふうっ……ふうっ……僕は、まだまだ、いけます……ッ！！》

『良い度胸だ』

僕はまだまだ余裕がある事を見せ付ける様に気丈に振舞う為に、

少佐はそんな僕の事など見透かしているかの様に、ニタリ、とお互いが笑う。

『次の速度は950?/時。先程までの500?/時の約2倍だ…
…どうする?』

《やります!是非とも、やらせて頂きます!!》

『宜しい。では、最終カリキュラムを行う』

その号令の後の浮遊感が身体を包み、僕は…その後の事を覚えていない。

950?/時と言う大きな壁に真正面からぶつかり、砕け散ったのだろう。

気が付いた時にはシミュレータールームに設置されている長椅子に寝かされていた。頭には濡れたタオルが置かれていたが、それにしただって少し気分が悪い。

御腹の中身が、丸ごと引っくり返った様な感覚だ。

それに兎に角水が欲しい。気持ち悪いけど、喉がカラカラで仕方が無いのだ。

「(愁傷様)」

そんな私の今の状態を見透かしていたかの様に、少佐は私にペットボトルを差し出す。

そうか、少佐はこの機体に乗っていた衛士なのだ。私がこんな状況になるのも最初から分かり切っていたと言う訳か…。だったら、教えてくれても良いだろうに。

「分かつちゃ居たが、中々切り出せなくてね。

まあ百聞は一見に如かず。何事も体験してみろつつう事を言いたかった訳だ、俺は」

「うう……それにしたって、他にも色んな方法があると思いますけど……？」

「まあそれは置いておくとしよう。それで？コイツ、乗りこなす気はあるのか？」

少佐は問う、と言うよりも挑戦するかの様に口の端を吊り上げる。むうっ……見れば見る程イラッと来る顔ですね。まあ上官ですし、我慢しましょう。

「やります。此処までボロボロにされて、負けられません」

「流石は俺の部下になると言った女だ。好きだぜ、そう言う勝気な性格」

笑いながら、少佐は乱暴に私の頭を撫でる。

そのあまりにも突拍子の無い行動に、振り払う事も出来ずに僕はただ「うううう」と唸りを上げる事しか出来なかった。

でも、ちょっとだけ……気分が良かったのは内緒。

まあそんな気持ちをブチ壊す様に吐き気が襲って来たのはもっと内緒だけ。

モニターに映し出された機体の映像、そして仮想ではあるが予測される可能性。

ハイヴ単機攻略を目的とした、私の造り出した最高の決戦兵器。

既に第三世代の枠を越え、新たな領域へと足を踏み入れようとしているのだ。

誰も踏み込んだ事の無い、新たな戦術機の可能性。

実現してみせる。

やってみせる、他の誰でもないこの私が。

新たな戦術機と最優の機体適合者と共にこの星を 人類を救って

みせる。

下らない夢物語になど縋らない。

私は何よりも”力”を尊重し、誰よりも”力”の持つ重大性を知っているつもりだ。

武御雷？

あんな高コストで応用性の利かない機体など、既に私の眼中には無い。

あらゆる戦場で戦闘行動を行う事が可能であり、尚且つ理論上では一定数以上の戦果を叩き出す事が可能な万能機、今の私が手掛けている期待はまさにそれなのだ。

「 やってやる 」

誰にでも無く、呟く。

ACTV? 弑型? あんな物、ただの時間稼ぎに過ぎないでは無いか。私は違う、私の機体は違う、もっと根本的な事から改革してやる。

革命を起こしてやる。

その為ならばありとあらゆる物を利用して良い。

悪女と言われようが構いはしない。

何を犠牲にしたって良い、この命さえ惜しくは無い。

だから完成させてやる、完璧に仕上げてやる、圧倒的な性能を見せてやる。

この戦術機界に、藤代の名を轟かせてやる。

私は、この世界で必ず申し上がってやる　　ッ！！

35 (後書き)

話が進まない

いや、それは私の所為なのですがね

残るはユウヤ・龍二無双の見せ場

コイツぁ、難問だぜ……ッ!

今の自分で何処まで表現出来るのか、やってやるぞ!

番外 獅子奮闘劇、少女と夢と恋と希望（前書き）

今日、久しぶりに本棚を整理していて何となく読み耽ってしまった
「北斗の拳」

「帝王は引かぬ、媚びぬ、省みぬ」

聖帝は我が心の師であります

うおおおおおっ！！！！

聖帝バンザイッ！！

……失礼しました

では番外編です、どうぞ

番外 獅子奮闘劇〜少女と夢と恋と希望〜

本編とは一切関係の無い、平行世界だと思いお楽しみ下さい

番外 獅子奮闘劇〜少女と夢と恋と希望〜

「エキシビジョンマッチとしては最上位だな、コイツは！楽しみだぜ〜」

「まっ、あんな堅物よりうちの少佐の方が強えだろうな。」

何せ、あたしのACTVでも追い付けねえ程の腕だったし。傑作の出来レースだぜ」

「……くだらねえな」

「武御雷のスペックは戦術機最高峰だろ？ だったら、勝負は分からねえさ」

「まあそのスペック差を覆すのが少佐ですけどねえ〜」

上からヴァレリオ、タリサ、ユウヤ、ヴィンセント、セレナの順である。

そして現在、彼等の前では史上最高の模擬戦エキシビジョンマッチが行われようとして居

た。

篁唯依が操るのは、日本が誇る最強の戦術機 武御雷。

その性能は他の追隨を許さず、ランクが上がる事に性能も格段に上がる特別製だ。

対する剣崎龍二が駆るのは、速度のみに全てを捧げた特化機 不知火F型。

防御を捨て、安全性を捨て、ただ可能な限り速度を追求したモンスターマシンである。

その2機の激突。

それはある種、このユーコン基地始まって以来のビックイベントでもあった。

退屈と言う訳では無いが、この娯楽の少ないご時勢だ。

こんな滅多に無いスター機同士の激突など、彼等にとっては祭りに等しかった。

篁

『此方HQの藤代千枝中尉です。準備は宜しいですか、篁中尉』

《 はい 》

ふうっ……と一息。

何処か緊張した面持ちでありながら、何故かその顔には僅かな笑顔が見られた。

クスリ、と千枝もつられた様に笑う。

『行きましよう、あの人をブツ飛ばしに』

《ええ、行きましよう!!》

山吹の武御雷は空を舞い、彼の者が待つ戦場へと降り立つ。

目前には、既に武装を構えた不知火が……大きな男の背中が聳え立っていた。

越えよう。今日、この場でこの大きな壁を。

私がこの人と比肩する為には、それ以外に方法なんて無い。

数々の敵を屠り、数々の武勇を打ち立て、数々の戦場で勝ち残った”絶対強者”。

打ち勝とう、この場で

《お待たせしました、少佐》

《レディの身嗜みには時間が掛かる。君みたいな可憐な少女は特にな》

《では、お礼に1曲》

《良いね。激しいのは大好きだ》

モニターに写る少佐の顔は笑っていた。

此処に私が辿り着いたことを褒め称える訳でも無く、自身を鼓舞する訳でも無く、ただ静かに笑っていた。

ああ、そういうことなのか……

今の私達に、もう言葉など要らない。

この舞台は私と貴方の2人だけの舞台。
誰にも邪魔されることなく、誰にも邪魔など許されない舞台。
なら、言葉など不要。

語りたいのならば 拳で語れば良い。

ああやっぱり、私は貴方が……

《往きます ツ!!!!》

《応ッ!!》

どうしようも無い程、好きみたいです……龍二さん。

剣崎

『娘の成長を見守るのはどう?複雑?』

《……茶化すなよ》

待ち時間の間。

俺は、ステラと少しばかり何の意味も無い話をしていた。
因みに今回の俺側のCPはステラが担当する。
それに比べて向うは藤代だ、煩い事だろう。

《親なら……娘の成長は喜ばしいことだろ》

『表情が逆ね』

《良いだろ、別に。そう言う時もあるってことさ》

俺の答えが気に入ったのだろう、ステラはクスクスと上品に笑い出した。

おいおい、真面目に考えた結果がコレか？お前の勝手だが、案外と胸に突き刺さるな。

『クスツ……ゴメンなさいね、貴方の可愛いところを見ちゃったから』

《嬉しくねえ褒め言葉だな、それ。男に可愛いは……なあ？》

『なら言い直そうかしら？そうね、”お父さんみたい”なんて如何？』

《……おいおい》

呆れて物も言えないって言葉はきつと、この事だな。呆れて何も考えられねえ。

まだまだ俺としては十分な年齢だと思っていたが、世間一般じゃ俺は”オジサン”のレッテルを貼られる部類なのだろうか？

それはそれで凄まじくショックだな。如何にかして欲しいぜ……

『お客さんよ』

《そつらしい》

遠くから此方へ向つて来る山吹色の武御雷。

確認するまでも無い、首輪に繋がれても尚己の意思を貫き通した彼女の機体だ。

……なあ相棒、俺を越えたいか？

《 まだまだ、負けられねえな》

あんなガキに、

あんな若輩者に、

あんな半端者に、

まだまだ”獅子”の名を譲ってやるのは早過ぎる。

《お待たせしました、少佐》

《レディの身嗜みには時間が掛かる。君みたいな可憐な少女は特に、な》

愛しいお前を俺の手から離れさせてやるものか。

最初で最後の俺が出来る我俣だ、神様だって許してくれるだろう？

ありがとう。お前のこと、好きだぜ？

確かに、性能上で見ればF型は武御雷には及ばない。

1つの動きが綺麗に、尚且つ丁寧に洗礼された武御雷の精密な動作に対して、どうしても不知火には荒さが目立つ。1機に掛かるコストパフォーマンスの違いもあるのだろうが、やはりその差は大きか

った。

《チイツ……！！》

明らかに、F型が押されていた。

得意と言うよりも、唯一の勝ちパターンである機動戦をシンクロする様に此方へ張り付いて来る武御雷が封じ、性能差を埋め合わせる龍二の直感を見切ることなど　彼の背中を任された唯依には、造作も無い事だった。

《はあっ！！》

振るわれた長刀を紙一重で避け、距離を取ろうと後方へ下がるも

《逃がさない！》

此方の動きを把握しているかの様に、寸分変わらず武御雷も距離を詰める。

あらゆる戦場で生き残って来た男が　たった一人の少女に圧倒されている。

それは、このユーコン基地を沸き上がらせるのに十分な刺激となっていた。

龍二が勝つだろうと高をくくっていたタリサでさえ、声すら出せずにその光景を見守ることしか出来ない。

あまりにも優雅で、一方的で、そして　時代の変わり目を差す様な戦い。

大地を支配していた獅子が今、膝を付こうとしている。

それがどれだけのことが、戦っている少女は理解しているのだろうか？

勝てる、勝つ、勝ってしまう。

絶対強者である彼に、彼女が、篁唯依が勝ってしまう。時代が

《だあああああつ!!!!!!!!!!!!!!》

《うおっ!?!》

変わる　　ッ!

不知火の持っていた突撃砲が右腕ごと吹き飛び、体勢を崩した不知火の速度がなし崩しの様に減速して行く。コレでは追い付かれる、しかも片腕だ。相手にすらならない　　ッ!

《　　ったく》

それでも尚、何故!

この男は　　ッ!!

《遊び足りねえよな、唯依iiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!!!!!》

一切、闘争心を衰えさせないのだろうか!!

この絶望的な状況下で尚、衰えることを知らぬこの闘争心は既に一級の武器である!

0からの急加速。

それは既に、此処に居る皆が見た事のある凄まじい光景である。だからこそ、篁唯依と言う少女はそれを見切る自身があった。

数秒前までは、だが。

《連続での急加速！？》

急加速が1度でダメならば2度、2度で不安ならば3度。機体の動きを追い掛ける唯依の視線が、完全には不知火の姿を捉え切れない。

思わず、唯依は歯噛みする。

この戦いで最も重要なのはペースを先に此方が握ること。そのまま押し込めば、そのまま維持出来れば、今の彼女ならば勝つことが出来ただろう。

だが、もしも剣崎龍二という男にペースを握られてしまったのならば？

待ち構えているのは、敗北の2文字のみ。

《ぐうっ！？》

機体を襲う衝撃に思わず呻き、衝撃を銜えた方向へ視線を向けるが既に何も無い。

耳にはブオンツ、ブオンツという空気を切る音だけが響く。不味い、なんて生易しい物じゃない。

完全に飲み込まれた、此処は既に 獅子の狩場なのだ。

二度目の衝撃。

肩に射撃が直撃し、機体のバランスが大きく崩れる。

だが、対応出来ない……ッ！

『肉を切らせて骨を絶つ』などと言うのが姿すら捉え切れない相手には、そんな事をする余裕すら与えられない。

三度目の衝撃。

それは、剣崎龍二が完全に、武御雷を潰しに来る攻撃。

その攻撃は静かだったが、決して、外れることは無かった。適確に四肢を撃ち抜き、戦闘機能を完全に奪い去る。両手両足を桜色に染め上げ、ゆっくりと地面へと落ちて行く武御雷を見ながら

観客達は、一斉に喝采を上げた。

勝者：剣崎龍二

篁

652

「お疲れ様」

そっと手渡されたドリンクを一気に飲み干し、身体をベンチに預ける。

たった1度の模擬戦で、こんなに疲れるとは思っても居なかった。そして、あの状況で逆転されるなど……

「やっぱり……驚かされることばかりですね、少佐には」

「そう？彼は人間ビツクリ箱だもの。今更、驚くことなんて少ないわ」

いつもの真剣な口調では無く、プライベートの時の様にリラックス

していた。

私の隣に座り、足を組みながら優雅にお茶を嗜む姿は 魔的な美しさを宿している。

私も、彼女の様に美しくなれるのだろうか？

「……そう、かな」

「そうよ。まだまだ、知らないことだらけね」

「女が好きで、本が嫌いで、筋肉質な男が嫌いで、友人思いで、自分勝手に……」

「偽善者で、夢想家で、どうしようも無い御人好しで、根本からして子供なのよ」

「……そうかなあ」

「そうよ」

思わず、私は笑ってしまう。

やっぱり千枝さんは少佐との付き合いが長いから、あの人のことを私よりも沢山知っている。いつも呆れながらも、彼女だって少佐のことを認めているじゃないか。

「……思い出し笑い？若いのに大変ね」

「そんなことじゃなくて……千枝さんは天邪鬼だって思ったら可笑しくて……」

「天邪鬼？」

バカバカしい、と千枝は呆れながらサツサと歩いて行ってしまった。その後を笑いながら続く私。

うん、やっぱり千枝さんは面白い。

「 よう、主演女優。今日はお疲れ」

並んで歩く私達に、後ろから声が掛かる。

今日の勝者である龍二さんだ。その顔に携わって居る笑顔は本当に嬉しそうで、楽しそうで、幸せそうだ。こんな演習でも彼にとっては何か得る物があったのだろうか？

「ところで、今日の夜は開いているのかな？」

珍しい。

龍二さんからのお誘いがある事自体が珍しい。

いや、誘ってくれた事はあるのだがあの時は仕事が忙しく行く事が出来なかったのだ。

次からはそれを考慮してくれたのか、龍二さんは私をあまり誘わなくなつた。

それでも、暇を見つけてはちよくちよく遊びに来るので私としてはあまり寂しいとは思つた事が無かつたが。

「 どうする、篁中尉？」

「 ……まだ、仕事が……」

「 だったら私に任せて、2人で行って来たらどう？」

「 えー!?で、ですがそれは 」

「少佐、彼女をお願いしますね」

「アイサー、キャプテン。ではお嬢さん、お手を拝借」

差し出される右手。

他意の無い感情を向けてくるからこそ、私は自分の頬が熱くなるのを感じた。

恥かしい……恥かしい、けど　！

「エ、エスコートは……確りお願いします」

「当然」

俯き加減な言い草だった私の答えに対し、少佐は微笑を見せた。藤代中尉の笑い声が耳に入るが、直ぐ様出て行ってしまふ。それ程、緊張している。

「命短し。人よ　恋せよ！！」

そんな私の今の状況を悟ってか、藤代中尉は激励のつもりでそんな事を言った。

ううっ……今の私には、ただの重りにしかなりません……。

番外 獅子奮闘劇〜少女と夢と恋と希望〜（後書き）

本編は明日には投稿出来ると思います（あくまでも予定、ですが

アイディア募集は継続中、

感想も頂けたら幸いです

あとですね、お気に入り小説登録数が200になりました！

記念すべき200人目は誰ですか？！

是非ともお話がしたい、名乗り出て下さい！！

何かリクエストがあつて「× のカップリング書け」って言

つて貰えれば喜んでご要望に応えさせていたただきますぜ！！

いや、まあリクエストは皆さんに言えることなんですが……

こんな駄文使い（なんかスタンド使いみたいだな）で良ければ、リ

クエストさえ貰えれば頑張つて書きますよ〜

36 (前書き)

TEのキャラで好きなキャラは唯依姫です
男性キャラならヴィンセントです(キリッ

いや、強いパイロットって言うのもカッコイイとは思っているのですが、
私はいつもそう言う目立つ人よりも裏方さんを好きになる特性を持
っているといえますか……

ええ、ですからオリキャラの藤代は書いていてちょっと楽しいです
^^

剣崎

突如のことで悪いが、今現在俺は戦場に居る。
それも面倒な事に奴等のド真ん中だ、昂ぶる気持ちが湯水の如く溢れ出る。

《雑魚が》

戦車級の頭部を36mmの銃口が的確に撃ち抜く。
群がっていた戦車級の処理に追われる面倒な生活はまだまだ続きそ
うだ。

今度は4時方向、マップに写る赤いマーカーが津波の様に押し寄せ
て来ている。

別段、それに対して驚く事も怯える事も無い。

ただ 非情にクソ面倒臭えと言っただけだ。

この単調な作業とも言える一方的な虐殺行為は、わざわざ新型のデ
モンストレーションとして掲げ上げる意味のある物なのだろうか？
些か、疑問に思う内容だった。

《此方はジャッカル02、流石に数が多いですね……ッ！》

詰まらなそうに溜息を吐いていた俺の事を見透かしていた様に、セ

レナは通信を入れて来た。数が多い、と言つのは同意するが所詮は突撃する馬鹿の集まりだ。的確に距離を取り、決して深追いしなければ恐れる程の敵では無い。

《泣き言は聞かんぞ、セレナ》

《僕はまだまだ余裕です！》

それに呼応する様にセレナの援護射撃が俺の後方で拳を振り上げていた要撃級の身体に穴を開ける。一瞬動きが鈍った要撃級に向け、俺は拳をお見舞いしてやった。

《良い援護射撃だ。後方支援機としては優秀だな》

《当たり前です、何せ僕は少佐の一番弟子ですから！》

俺の隣に着地するのは、黒のカラーリングから水色へと機体色が変わされたF型。勿論、中でコイツを操っている衛士はセレナ・エニックス。二代目のF型適合者だ。吐いたり、戻したり、グロッキー続きだったが漸く

《遅い！それじゃ僕は捕まえられないよ！！》

空中を縦横無尽に駆け回る程度までは機体を動かせる様になっていた。

まあ流石に連続での回転ロールなどは無理だろう。

まだ身体が馴染んでいない筈だ。

それにしても、まだ馴染み始めたばかりの機体で戦場に送るとは……幾ら俺のデバックデータを搭載してあるからとは言え、千枝のヤツは何を焦って居るのだろうか？今まで順調に進んでいた筈だが、此

処に来て何か大きなミスでもあったのだろうか……なら、そのリカバリーは此方が補うしかないだろう。

《まっ、それは置いておくとして》

背部ユニットが跳ね起き、設置されていた刀を右腕に装備。群がり来る戦車級や小型種と同時に、要撃級の巨大な体躯を薙ぎ払う。

鮮血が飛び散らない事を考えると、有効打とはなり得なかったと言う事が……

《千枝、戦況はどうだ？アルゴスの連中は生きているのか？》

『ええ、好調なスタートダッシュです。』

A C T Vは1番機と2番機共に健在、残りの2名も無事です。 ” 柳 ” はありません』

二タリ、と千枝が笑う。

つまりは全力で行って来いと言う事か？

この野郎、自分の欲を満たす為なら人の身すら省みようともしやがらねえっ……！

『F？型は前線にて敵部隊を引き付け、その力を存分に振るって下さい。』

キルスコアはそうですね……1000を目指しましょうか』

《1000……大丈夫ですか、少佐？》

《お前は人の心配しねえでF型の事だけ考えろ、アホ！

それと千枝、F？型って……もうちょっと捻れねえのか？面白味が

ねえ!」

《す、すみません!》

セレナは俺の喝を受け、すぐ様ウィンドウを閉じた。どうやらコレから本格的に暴れ回るつもりの様だ。

頼むから、俺の分まで刈り取らないで欲しい。スコアは大事だからな、一応。

『名前なんて後から決められますよ。今は目の前の敵に集中して下さい』

それにしたって千枝の野郎は……

まあ良い、確かに名前なんて生きて帰ればいつでも決められる事だ。

《キルスコア1000?ハッ、カウントストップまで殺し続けてやるよ》

取り敢えず、夢は大きく。

1000を目指すのでは無く、自分の限界を目指さなければ意味が無い。

1000匹を殺す戦い方では何の意味も無いだろう?

奴等は数だけは腐る程居るのだ。たった1000匹殺した所で、何の意味がある。

それならば目に付いた敵は全て殺すつもりで戦った方が気も楽になる。

まあ結果は変わらんかも知れんが、要するに気の持ちようって事だろ。

《オラアッ！ラスト1匹いつ！！！》

弾丸を撃ち尽くし、残り100匹程度の辺りからは延々と長刀での戦闘を強要される事となっていた俺にとって、BETA共を疎ましくも思うも何処か満ち足りた達成感を感じていた。

キルスコアは……1000を越えているだろう。

セレナにもかなりの数を持って行かれたが、それでも前衛と後衛の差はある。

ただ突き進み続けた俺の方がスコアは上の筈だ、多分。

もしもコレで俺の記録がセレナを下回っていたのならば 想像し
たくも無い。

機体色は既に何色なのか判別が付かない程に汚れており、飛び散る体液に吹き荒れる砂埃、そしてこびり付いた肉片で機体の機動も僅かながらに低下している状況だ。

コレだけ気合を入れ、敵を殺し続けたのだ。

基地に帰ればそれはもう、盛大な歓迎を受ける事になるだろう。

……折角だ、ファンファーレでも吹いて欲しいがね。

《セレナ、そつちは無事か？》

《うっぷ……流石に限界です、此処まで密度の濃い戦闘は初めてですから》

死体の山を1つ越えた所に、セレナのF型は居た。

その機体は俺よりも幾分も綺麗で、後衛らしく美しさを保つ美麗な戦い方を心掛けて戦場で暴れまわったと言う事を否が応でも理解出来た。

……少しばかり、自分の突貫型戦闘スタイルが嫌になって来る。

《早くメンテナンスをしないと、血で錆びちやいそうですね……》

《俺もお前も千枝特別製の専用機だ、そこまで柔な造りじゃねえ。

それよりも俺達の周りに敵が無くなったのは良いが、次の命令は来たか？

さっきの戦闘中にやられたのか、如何にも通信状況が悪い》

《あつ、僕も同じです！藤代中尉に連絡しようとしても、繋がらなくて……》

《……”繋がらない”？》

《はい、ノイズばかりで相手側との一切の連絡が出来なくて》

繋がらない、と言うのは流石に有り得ない。

此処は十分、通信圏内の筈だろう？それに前衛で戦い続けていた俺ならば有り得るかも知れんが、後衛で援護射撃を展開していたセレナまで繋がらなくなるとは如何言う事だ？コレでは、まるで誰かに妨害されている様な

《妨害……？》

まさかとは思うが、BETAでは無く人からの妨害工作？

一体何の為に……こんな所で俺達に対して妨害電波を発生させたとしても、それは戦場を混乱させるだけに過ぎない。いや、それとも”そこまでしなければならぬ”程に重要な何かがあると言っ事なのか？

《セレナ、何か分からんが嫌な予感がする……基地に戻るっ》

《嫌な予感、ですか？でも藤代中尉からの伝達が無いと基地には……》

俺の提案だったが、セレナは渋っている。

帰還命令も無しに戦闘区域から離脱し、基地に戻るなど言語道断な行為だろう。

それは俺自身も良く分かっているつもりだ。

《何か有ってからでは遅過ぎる。セレナ、此処は俺の言っ事を聞いてくれ。

……頼む》

だが、何かが失われてからでは遅過ぎる。

そして俺は勘付いてしまった、今から起きるかも知れない何かの予兆に。

だからこそ動かなければならない。

誰かが犠牲となってしまうぬ内に、俺達がそれを止められる立場に居るのだから。

俺は目の前で何か失われる瞬間を黙って見ている程、冷酷にはなれない。

《……元々、僕は少佐に付いて行くつもりですよ》

《セレナ……》

《今の僕の居場所は少佐の隣だけですからね、えへへっ!!》

無邪気に笑うエレナに同じく笑い掛けながら、妨害工作に対する意識を一時的に中断させる。今、俺達が成さねばならない事は妨害先を突き止める事でも、戦場で暴れまわってスコアを稼ぐ事でも無い。俺の仲間と共に、無事にアラスカへと帰る事なのだ。

《セレナ、飛ばすぞ!》

《了解!!》

F?型の後を追う様に、F型も空へと舞い上がる。

空から見渡せる戦場では数々の部隊がBETAとの激闘を繰り広げており、その戦いを援護出来ない事に僅かな罪悪感が募った。

だが、今は足を止める訳にはいかないのだ。

フットペダルに力を入れ、機体を前へと押し出す。

今は一刻でも早く基地へ戻らなければならない。

何も起こらず、俺の取り越し苦労と言う結果で無事に終われば良いのだが……

セレナ

基地まであと僅か数十?の時点で、それは起きた。

揺れている。地面が、揺れている。

自然災害ならば良かったが、僕はこの揺れを良く知っていた。

いや、戦場に立つ者ならば皆が忌み嫌う最悪の展開

《少佐、BETAです!!目視出来るだけでも旅団規模、基地に近過ぎます!!》

基地から見て北西側へ突如地を突き破り現れたBETA群。

たった数十?だ、避難している間も無くBETAは基地へと突撃を開始するだろう。

《……セレナ、武器を寄越せ》

《まさか、1人で戦つつもりですか!?無茶です、僕も　ッ!!》

《馬鹿!!》

今の俺達がやらなきゃいけない事は基地の連中を守る事だ、勘違いするな……

それに、死ぬつもりはねえ。他の部隊だって、何れはコイツ等に気付くさ。それまでは俺1人で抑える。任せろよ、死にはしねえさ》

有無を言わさぬ威圧感。

僕は、ただ武器を渡す事しか出来なかった。

僅かに弾の残っている突撃砲を1丁、

まだ弾が潤っている支援砲を1丁、たったそれだけだ。それだけ受け取ると、少佐は「ありがとう」とだけ告げて機体を反転させた。向う先には蠢く巨体が密集する地獄だ。そこに、何の躊躇いも無く向う事が出来る彼はまさしく猛者と呼べるだろう。

《……少佐……》

今はただ、身を案じる事しか出来ない。僕には僕の仕事がある、命を賭けた時間稼ぎをしてくれた少佐の為に僕が頑張らなきゃいけない。早く基地に帰投して弾薬を潤せばあの程度の数

『こちら、HQ！ジャッカル02、聞こえる！？』

突如としてウィンドウが開かれる。

映像は不鮮明だが、声だけははっきりと判別する事が出来た。多分、映像よりも声の質を高めたのだろう。やはり現場慣れしている人は違う。

《その声……藤代中尉ですか！？》

『よかった……無事のようなね。少佐は？』

姿は見えなくとも、その安堵は此方にも伝わって来る。戦場での彼女達は通信と言う手段で僕達と繋がっている、だと言うのに今回はその通信手段が断たれてしまったのだ。

《少佐は、現在基地に接近中のBETAと戦闘しています。ですか

ら 》

『戦闘……ッ!?!』

戦闘、と言う単語に藤代中尉の顔は一気に絶望へと染まる。
何故そんな表情を浮かべるのか、情報が入って来なかった僕には一切分からなかった。

《あの、藤代中尉?》

『……基地上層の出した最終決定は、各試験部隊の”待機”。当然、貴方にもその命令は該当するわ。基地に戻ろうにも、そこに居ようにも交戦は許可されていない。つまり、今の少佐の行動は『勝手に交戦を開始した違反者』として処理される……誰も援護にはいけないのよ』

《何ですか、それ!そんな……それじゃ、ただの罠り殺しじゃないですか!!》

『でもね、コレが連中の下した決定よ。私達には覆せない』

《だったら、僕だけでも　ッ!!》

『止めなさい!武器も無い貴方が行った所で、ただの足手まとい。……上官命令だ、セレナ・エニックス少尉。基地に戻れ、その後の対策は私とドゥール中尉で検討する。良いな?』

《ッ……》

納得いかない、そう思いウィンドウを睨み付ける。

そこには優しい表情を浮かべるいつもの藤代中尉は居なかった。本当に悔しそうに唇を噛み締め、それでも涙だけは流すまいと必死に堪えている。

誰よりもこの命令に納得していないのは 彼女自身だったのに。

『復唱しなさい、セレナ』

《……基地に、戻ります》

そんな顔を見せられては、反論など出来る筈も無い。今は信じるしかないのだ。僕達の英雄の力を、リュウジさんの生きる為の覚悟を。

音声のみ

『やあ』

《……へえ、珍しい。テメエからわざわざ俺にコールするとはね》

『いえね、私としては非常に残念なのだが……君には此処で消えて貰う事になった』

《はっ！この程度の数相手に、俺が死ぬとでも》

『援軍は来ないよ』

《ツ!?!》

『弾薬の補充も、戦術機が援護に向かう事も、戦車隊の援護射撃も無い。』

文字通り、今の君は孤高の王様と言う訳だ。コレでも生き残れるのかね?』

《……テメエツ》

『君は嗅ぎ回り過ぎている。この場で死んで貰わねば、我々が困る』

《ク、ククツ……アハハハハハハツ!!!!!!》

『……何が可笑しいのかね?』

《可笑しい?ああもう楽し過ぎて狂っちまいそうだ、最高だ!!!

まさかテメエからこんなネタを振って来るとは、芋づる式で組織事壊滅だな!

いやいやいや、良い気味だぜ!俺が”何も仕掛けていない”とでも思ったか?

その声、確りと聞き取らせて貰った》

『貴様……ツ!?!』

《……こんな絶望慣れっこだね。

お前の所のお姫様、俺が有り難く貰っていく事にしようかねえつ!
!》

36 (後書き)

新型の名前ですが

感想に書いて貰った「雷牙」と

自分的にカッコいいな〜と思った「伊邪那岐」

の2択となった……

そろそろどちらかにした方が良いのですが……

皆様のには、どちらがお好きですか？

37 (前書き)

いよいよ大詰め！

つて所まで書くとテンションの上がり方が半端じゃないですね
今日は寝ずにハッスルしちゃうぞー！

……明日、仕事だ

セレナ

良い？もしも私との関係を問われた時には、惚け続けなさい。
貴方は貴方の人生があるし、貴方の人生は少佐と共にあるべき物だと私は思う。

その短い人生、此処で無駄にするには惜しいわ。

基地に帰った私を待っていたのは、藤代中尉のその言葉だった。
藤代中尉はそれだけ告げると、私の前から姿を消す。
駆け足、なんてレベルじゃなかった。

文字通りの俊足、藤代中尉の持てる身体機能を全て活動させた様な状態。

即ち、彼女は今本気だ。

本気で、少佐を助ける為に奔走しているのだ。

僕には何か出来る事は無いのだろうか？

必死に、今の状況を考える。

少佐は単機で孤立。

しかし、各試験部隊には待機命令が出されているので援護は期待出来ない。

それは僕も例外じゃない。

きつと、此処から出撃はさせて貰えないだろう。

もし、少佐だったらこんな状況の時はどうやって解決しようとするのだろう？

彼の突発的な考え方ならば、きっと僕には思い浮かばない様な奇抜な策を投じて、何もかもが丸く収まる様になるのに……
いや、だったら少し観点を変えては如何だろうか？
保身を考えず、人々を救う事だけを考えたのなら……

答えは決まった。

藤代中尉からは遅れたスタートダッシュとなるが、僕には僕にしか出来ない事がある。
だったら　僕はそれを全力で行うまでだ。

藤代

流石に、急に身体を動かすと反動が大きい。

通路のカーブを滑り込む様に曲がる、やはり足に掛かる負担は通常の倍以上だ。

明日は筋肉痛かな？……何と無く、現実から逸れた事を考えてみる。
私が必死に目指すのは99式電磁投射砲の構える格納庫。
あそこにさえ付けば、後は如何にでもなる。

戦術機を1機奪い去る程度の事、幾ら身体が鈍っていようが容易な事だ。

何の為に、小さな頃から訓練を繰り返し続けたと思ってるのだ。

今の私は各国の精鋭部隊に匹敵するエリートソルジャーだ、このヤロウ。

「中尉！此処に居ましたか、直ぐに脱出用のへりに」

「退け！！」

道を塞ぐ様に現れた兵士に対して私は身体を沈め、拳を思い切り突き出す。

そこに一切の迷いなど無い。

加速に加速を重ねた拳は兵士の気を一瞬の内に刈り取り、その場へたり込ませた。

一瞬、流石にやり過ぎたかと思ったが今はそんな事を考えている時間はない。

「借りるわよ」

ソ連の兵士に配られているのであろうカラシニコフを肩に担ぎ、また加速を開始する。

場所など迷う筈も無い。

この基地の地図は到着日と同時に頭に叩き込んである、格納庫へ向うまでは

5分と掛からない。

だが、戦場で戦い続ける彼にとってはその5分がどれだけ長く感じられるのか。

戦場に立った事があるとは言え、日の浅い内に情報支援に回った私にはその恐怖が良く分からない。だが、少佐が途轍も無く高次元の衛士であり、そして戦場で5分生き残るといふ事がどれだけ難関な

のは分かっているつもりだ。

「時間が無い……ッ！」

こんな場所で、

こんな下らない戦闘で、

彼とあの機体を失う訳にはいかない。

例え、どれだけ思い厳罰を下されようが私は構いやしない。

お願い、間に合って　　ッ！！

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

677

ユウヤ

99型投射砲が狙われている。

ソ連の連中が、1つの基地を潰してまでそれを手に入れようとしている。

先程、ステラがジャーナル大隊の副官からデータを盗み見た結果として出された結論はそれだった。

1ヶ月前、オレ達にさえ知らされなかった今回以上の規模のBET

A 侵攻。

それによつてジャーナル大隊が被つた大規模な痛手。

そして今回、前回の戦闘によつて出来た地下の空洞を潜つてBET Aは今は基地の数十？先に出現したという訳だ。

国連を敵に回さず、奴等は99式を奪おうとしている。

だが、本当にそれが目的なのだろうか？

たつたそれだけの為のお膳立てとしてはリスクが大き過ぎる。

《ドゥール中尉と篁中尉は初めから気付いていたのかも知れない。

それに、少佐……彼はもしかしたら誰よりも事の真相に近付いていたのかも。

本人は完璧に処理したつもりだったのかも知れないけど、何個かだけアクセス先を特定する事が出来たわ。まあ1つだけ、私程度の階級じゃ開けられないパスがあつただけ》

《1つだけ？へえ、誰のパスが必要になるの？》

《世界有数のロックよ。私達程度じゃ破れないわ》

《世界有数つて……まさか、少佐はこの事を知つていて……！？》

《それは無いわ。彼がしたアクセス方法は正規の手段では無く、ハッキングだった。

多分だけど、彼は私達の味方よ。それにそんな重要な事、彼が口に出して私達に伝えると思う？「気を付けろ」とか「注意しろ」なんて》

《まっ、少佐だったらやらねえな。自分1人で決着を付けるだろ》

《そう言う奴だからなあ》

じゃあ、少佐はオレ達の面倒を見ながら情報収集までやっていたって事か。

此方に来てからあまりオレ達との関わりが無かったと思っていた矢先、こんな事を言われてしまえば少佐のお人好し具合にホトホト呆れ果てるぜ。

誰かに迷惑を掛けるのが面倒だから、面倒事はテメエ一人で片を付ける。

それの方がよっぽど面倒だろうに、それすら厭わずに面倒臭えと愚痴りながら作業を繰り返していたのだろう。だが、それならば少佐は如何なってるのだ？

《アルゴス01からジャツカル01へ。ユウヤだ、少佐。アンタの調子は如何だ？》

無音。

と言うか、ノイズしか返って来ない。

これは流石に変だ。確かに待機命令しか下されて居ないとは言え、あのお喋り少佐だったなら回線は常にオープンの手筈だが……

《おい、少佐？少佐！応答しろ！》

《おいおい、ユウヤ。いきなり少佐なんて叫び始めて如何したよ》

《ッ、少佐との連絡が通じない！》

《はぁ？何言ってる……ホントだ、少佐の回線だけ開けない！》

《少佐、何が……》

各々が少佐へと回線を開こうとするが、返って来る音は全てがノイズ一色。

撃破された、と一瞬だけ考えたがそれを否定する。

確かに繋がらない理由としてはそれが最も高い確率だが、相手はあの”少佐”だ。

その力は、此処に居る全員が肌身を持って体感している。

真つ先に撃破されたと言う選択肢が消える。

では何故？

状況が混乱へと陥るオレのウィンドウが突如開き、此方へ向う重輸送ヘリ2機のマーカーを捉えた。全員が秘匿回線を通常回線へと切り替える。

『アル……スー！！聞こえ……、……ゴスー！！』

《その声、ヴァインセント……ヴァインセントか！？》

相棒であるヴァインセントは無事に脱出する事に成功したようである。一時的に混乱状態に陥っていたオレの心境に、僅かな光が満ちた。基地に居た彼なら、何かしらの情報を握っている筈だろう。

『ユウヤ！ちくしょう、やっと繋がったぜ……！』

向こうもオレの生存を喜んでいる様だった。

あまり嘗めないで欲しい、コレでも少佐の扱きに耐えた男の1人だぜ？

《ヴァインセント、他の連中は無事なのか！？》

『ああ整備班に帝国のスタッフ、それにイブラヒム中尉は別の輸送ヘリで退避中だ。』

だが、ノンビリ話している暇はねえ！

良いか？よく聞け！

篁中尉に藤代中尉、それと新入りのセレナ・エニックス少尉は基地の中！

”少佐”は旅団規模のBETAと単機で戦ってやがる！もう武器もねえ！！

藤代中尉からの言伝を伝えるぜ！？

99式は私に任せろ、だから貴様等は一刻も早く少佐の援護を頼む。
オパー
以上！！』

《単機で戦闘って……何で誰も援護にいかねえ……ッ！》

《オレ達の待機命令ってつまり、少佐への死刑宣告って事だろ……！探りいれが知られたって事か？そんなヤバイ山に突っ込んでやがったのか！》

タリサとヴァレリオから上がる声は最早、怒りだ。

オレだってそうだ。まさか、少佐が人間の手によって此処まで追い詰められるとは思いもなかった。クソツタレ、たった武器1つの為にオレの　オレの仲間を殺して溜まるか！！

『ユウヤ、気を付けろ！敵は　』

《ッ！？ヴィンセント！ヴィンセント！！》

結局、その後もヴィンセントはユウヤの問い掛けに応える事は無かった。

だが行動は既に決まっている。

後はただ、アイツの口癖通り ”後悔無く”先へ進むだけだ。

剣崎

《ハ、ハハツ……俺が食いたいらしいな……ッ！》

長刀は半ばから折れていた。

だが、斬る事は出来なくとも突き刺す事は出来る。

そう思い使い続けていたが、血でコーティングされた長刀は要塞級の背に突き刺さったまま二度と抜ける事は無かった。

コレで武器と言えるのはたった2本のナイフのみ。

遠距離定番の突撃砲や支援砲は1番最初に使い切った武器だ。

今更、無駄撃ちをしたかも知れんと後悔しても遅過ぎる。

既に敵は迫り、此方はその大群にナイフ2本で喧嘩を挑むしかないとは……

いよいよ、覚悟を決めなければならぬらしい。

《良いぜ、来いよ……来やがれ、掛かって来い。

関係ねえっ、テメエ等は一匹でも多くあの世にブチ込んでやるよ！
！！》

それでも諦める訳にはいかないのだ。

諦めてしまえば、俺はあの馬鹿共の顔を拝む事は出来ない。

それは 寂しいじゃねえか。

先程殺したばかりの要撃級の腕を引き千切り、豪腕を構える。

そうだ、武器ならば腐る程転がっている。

奴等が振るう豪腕や殻、それに骨。

この場で生き残る為に必要な武器は腐る程散らばっているじゃないか。

戦える。

まだ、俺は戦える。

跳躍ユニットが轟音を轟かせながら、足元に群がっていた小型種を焼き尽くす。

フワリ、と体が浮かび上がれば準備は完了だ。

後はただ

《来やがれえつ、雑魚があああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!》

大地を揺るがす獅子の雄叫びを上げ、敵へと突き進めば良いだけである。

痛いのが怖い。

死が怖い。

辛いのが怖い。

だが、俺は この世界の人々から忘れ去られる事が怖い。

ならば名を刻もう。敵を殺し続けた鬼神として、慰霊碑に名を刻み込もう。

“鬼の子、此処に死す”。

俺の墓には、そんな文字を是非とも刻み込んで欲しい。

カラシニコフが跳ねる。

いつものお淑やかなお嬢様である彼女とは似つかわしくない程、今の彼女の姿は何と言うか……ハードだった。

先程走る際に邪魔だと言う事で切り込みを入れた国連のスカートから覗く太股。

既に上着を脱ぎ捨て、下に着込んでいたYシャツのボタンは3番目程までが開けてある。そのお蔭で、魅力的で柔らかな2つの核兵器が作る谷間が覗いていた。

いつもならば鼻の下を伸ばし、ゆっくりと堪能出来る時間があつたかも知れない。

だが、今は一刻を争う緊急事態だ。迷う事無く、彼女は駆け出した。

「オ、ラアツ！！」

道を塞ぐ扉を、蹴破る。

そのまま扉の向かい側 構えていた闘士級に対して射撃を開始。どうやら、こんな場所にまで奴等は侵入し始めているらしい。

これは本当に不味い事になった。99式を機動させてから戦術機を奪い去るのでは無く、せめて先に戦術機を奪って来ていれば……

【後悔無く進め】

「っ……そうね。そうよ、今は今で私の出来る事をするだけよ」

脳裏を掠める私を勇気付ける魔法の言葉。

どんな逆境だろうが、どんな苦痛だろうが、耐え抜く事が出来る不思議な言葉。

生きて帰ってきて欲しい。

生きて帰ってきてきて、また私の名前を呼んで欲しい。

【よっ、千枝！！】

「あああああああああああああああああッ！！！！！！！！！！」

先のカラシニコフの弾丸により怯んだ闘士級に銃弾を撃ち込む。狙う場所は頭以外の何処でも無い。

一点集中による短期決戦。どれだけ耐久力が高かろうが、頭が無くなれば生きていられる筈が無いのだ。

頭の上半分を消し飛ばし、その死体を踏み台として大きく飛ぶ。下に見えるのは、シートが掛けられた99式電磁投射砲。

このまま落下しては、死んでしまう。死んでしまうが　ッ！！！！

「そこに居やがれ、クソツタレEEEEEEEEEEEEEEEEッ！！！！！！！！！！」

着地点は戦車級の背中。

上空から落下する物体に気付く事無く、戦車級は千枝の落下を受け止めた。

軽く身体がバウンドし、地面へと跳ね飛ばされる。

背中を強く打ち付けた時は流石に一瞬息が詰まったが、どうやら今も私は生きている様だ。

まあ　絶望的な展開と言う事に代わりは無いが。

「ふ、藤代中尉……ッ！？」

って、何？

篁中尉も居たの……

そつ。だったら2人居るって事ね。何よ……諦めきれないじゃない。大人しく死ぬのも已む無しかと思っっちゃったけど、後輩の前じゃ死ねないわね。

「ご機嫌麗しゅう、パーティーの参加には間に合ったかしら？」

ニヒルな笑顔とカラシニコフ。

ボロボロの国連軍制服のスカートと、血塗れのYシャツ。

一体彼女の目には、今の私が如何映ることやら　やれやれ、ね。

37 (後書き)

藤代千枝・アサルトモード

彼女は銃を持てば強さが激増します

具体的には某ゾンビを撃ち殺すゲームの主人公ズ並の身体能力(オイ

いよいよ大詰めを迎えるTE編!

ハッピーなエンドを迎える事が出来るのか!?

千枝と唯依の運命は!

龍二は生き残る事が出来るのか!

ユウヤ達は間に合うのか!

セレナ、お前はいったい何をしでかしてくれるのか!?

次回を待て!!

感想お待ちしてます

38 (前書き)

迫るラスト

逆境に陥った者達に、神は微笑むのか

剣崎

ああチクシヨウ、死ぬのか……

目の前が真っ赤だ。

赤一色で、まるで焼け野原みたいだな。まあ気分が良い光景とは思えねえ。

もうちょっとだったけどなあ。

流石に、ナイフ2本じゃこの数は捌ける筈がねえか。

突撃級の突進を回避した先に構えていた要撃級に突っ込んだ時だろ
うか。

目の前に構えていた計器の画面が弾け、その破片が顔に突き刺さった。

最初の焼ける様な痛みには別に何の感情も抱くことは無い。

ただ、”終わってしまった”と心が生きる事を諦めていた。

次の瞬間に来る虚無感やら虚脱感やらもう何もやる気が起きない感
覚。

それが、何処までも終わりの無い穴へと俺を引っ張っていく様な錯
覚を覚える。

いや、もしかしたら引っ張られて居るのかも知れない。

こんな場所で死ぬ。

こんな場所で終わる。

こんな場所で 消える。

それは虚しいが仕方ない事で、悲しいが誰にでも訪れる事。

死と言いつわりを迎え、漸く俺も今までの人生を振り返る余裕が出来た様だ。

それとも走馬灯ってヤツか？

だったら尚更、過去の自分に思いを馳せるのも

諦めるな

あきらめないで

あ？誰だよ。折角、こんな時に。

お前は1人じゃない

りゆうじはひとりじゃない

…… 1人だろうが。今も1人で死への旅路一直線コースだろ。

私が居る

わたしがいるよ

…… 誰だよ

お前が私を必要としてくれるから

リュウジがわたしをひつようとしてくれるから

…… つるせえな

《《だから 》》

《つるせえな、ガキじゃねえだろ……泣きそうな声出すなよ……》

血に濡れた瞼を開ける。

視界に映写される光は明るいが故に、暖かった。

生きている。

何故？そう思うよりも先に、本能が理由を理解出来た。

あの声も、この温かみも、生きている感触も

《……迷惑掛けるぜ、”紅の姉妹”》

お前達が俺に与えてくれた、僅かな希望って事かよ。

俺に戦え、そう言う事か？

俺に足掻け、そう言いたいのか？

良い度胸じゃねえか、ヒヨッコ。

こんな場所でしたらばつちまえば、あのクソ女に何を言われるか
分からねえ。

F？型に襲い掛かろうとしていた戦車級が容易く吹き飛ばされ、
他のBETA群を近付かせぬ為に突撃砲が弾丸を放つ。

その機体は、ソ連製のSu-37。

特徴的な紫のカラーリングを持つチエルミナートルを操るのは、俺
の知っている顔の中じゃ2人しか居ないだろう。

クリスカ・ビヤーチエノワ

そして、イーニア・シエスチナ

《悪い……貸し1つだな》

《りゅーじ、ごはんつくってくれる？そしたら、いいよ》

《……だそうだ。私はどちらでも良いが》

しねえな。

しねえよ……

先程まで心を支配していた虚無感が今は一切感じられない。

身体中を駆け巡る血管が忙しく身体中に血液を送り、その反動で胸が昂ぶる。

もしかしたら、俺は緊張しているのかも知れない。

当然だ。こんな劇的な救出劇、俺は今までに体験すらした事が無いのだから。

ああだからこそ　今の俺は、負ける気がしねえ。

《サツサと立て。いつまでも座り込むな》

《こっちは怪我人だぞ、テメエ……もうちょっと優しく……》

《てき、きたよ！》

《　失せろ》　《　失せな》

藤代

振るわれる豪腕。

まったく、必死になっているのは向こうだけで十分だと言うのに
ッ！

しかし、弾を使うには勿体無い相手だ。

「藤代中尉！！」

ああ分かっていているから、貴方は貴方の出来る事をしなさい。

一々過敏に反応しないで貰えるかしら？頭に響くわ。
掴む、と言うよりも潰すに近い威力で振るわれる戦車級の豪腕を回
避。

痛む身体に鞭を打ち、背を屈めて振るわれる腕を掻い潜り決死の思
いで戦車級の股の下を潜り抜ける。大の男だったら無理な事だろう
が、小柄な女ならではのトリッキーな戦術だ。流石の敵も易々と

「っ！？」

後ろ足が私の直ぐ横を踏み付ける。

コンクリートに確りと叩き込まれたそれは、私にコレでもかと言う
ほどの威力を見せ付けていた。自慢、でもしたいのかしらね……ッ！
目が届かないならば大雑把に攻撃するとは　それでは先が読めず
に厄介だ。

「篁中尉、何をボサっとしているの！？逃げなさい！！」

「で、ですが……」

「貴方のお守りをしながらコイツを殺せる程、私は余裕じゃないのよ……ッ！」

ゆっくりと此方へ振り向いた戦車級を睨み付ける。

鼻を刺激する金属臭はコイツの血液が発する独特の臭いだ、集中力を乱すには打って付けの臭いだな……本当に厄介なヤツ。
だが

「アンタ達、今回は本気で殺してやるわ……ッ!!」

何の考えも無しに、私が戦車級の背中に着地したと思うか？

何の考えも無しに、私が危険を冒してまで奴の腹下を潜ると思うか？
基地周辺にBETAが出現した時点で奴等からのアプローチは目に見えていた。

だからこそ選んだこの場所だ。
数々の工具、そして油。更にはあまり使いたくは無いが、最終兵器である99式の自爆と言う奥の手まで備えた今の私にとっては要塞とも言える場所。

戦車級の上空、吊り上げられていた鉄工をカラシニコフの弾丸が穿ち、僅かなバランスで保たれていた均衡が崩される。後はただ、落下するのみだ。

数々はあるつとと言う物体が落下し、その直撃を食らえば例え奴でも耐えられる筈も無いだろう。埃が舞い、耳を劈く様な金属音が鳴り響く。

1匹撃破だ。

生身で戦車級を倒すなど、普通の開発者からしたら考えられない事

だろう。

だが私を侮るなかれ。

そこ等辺のデスクワークに勤しむ頭でつかちの奴等とは違うのだ。

馬鹿にしないで欲しい、あの少佐の傍に居る女がただの女の訳が無いだろう。

文武両道。

故に、私は天才なのだ。

まあ

「予想外な事が起きるからこそ人生って事？ハッ、神様なんて信じられないわ」

目先の出来事に捉われ過ぎ、戦車級が1匹だけの訳が無い事に失念していた。

仲間の内の1匹が殺された事でゾロゾロと集まって来たと言う事が計4匹。

こんな小さな女1人殺すのに、その巨体が4つ必要か如何かは些か疑問に思える内容ではあるが、良いだろう。相手になつてやる。

先程からカラシニコフを撃ち込む度に悲鳴を挙げる右腕の事など知るか。

例えこの腕が碎けようが、私は諦めない。

諦めないで、必死に生きてやる。

「貴様等なぞに、私の 私の夢が食えるものか！！！」

その怒声は、確かに

《確かに、藤代中尉は食べても美味しくないですよ！》

神でも無く、
剣崎龍二でも無く、
この場でも最も力のある者……即ち、戦術機『TYPE - 94 / F』
に乗り込んだ衛士。
セレナ・エニツクスの耳に、ハッキリと響いていた。

セレナ

無断出撃。

普通に考えれば、厳罰は免れない違反行為だ。

お父さんとお母さんに仕送りをする為に必死になって軍で働いている僕にとって、軍からの収入と言うのは大きなウェイトを占めていた。

コレが無くなれば母さんと父さんにまた辛い思いをさせてしまう。

決して裕福では無い僕の家だから。

僕が必死になって頑張らないとこんな世界じゃ養っていけないから。だから僕は模範生の様に良い子の仮面を被って生きて来た。

でも、龍二さんはそんな僕の仮面なんて、直ぐに見破ってしまった。そして言ってくれたのだ。

【仮面を被らなきゃ生きていけない世の中なら、お前はその仮面を剥がすな。

でも、もしも泣きたくなった時。どうしても仮面を脱ぎたい時は俺

の所に来い。

こんな陳腐な背中だが、お前1人の涙くらい背負ってやれる】

今まで、誰もそんな言葉を掛けてくれなかった。

皆自分の事ばかりで、虚勢を張らなくちゃ生きていけない様な弱い奴ばかりの世の中だった筈なのに、彼はそれを当たり前の様に呟いた。

初めて出会った本当の”強者”。

強さの意味を始めて知った。

だから逃げない。

“命令違反”に怯える事無く、僕は”僕”の道を進む。

そして、堂々と龍二さんにも言っただけでやるつもりだ。

【貴方の部下は、世界一立派でしょう？】と。

戦術機から見れば、障害にすらならない戦車級だ。

F型の拳が上から戦車級の頭を握り潰し、ハンガーを閉じていた鉄の扉。

憎らしい敵の身体を、コレでもかと言うほどに力強く遠投する。

「セレナ……貴方、どうして……ッ!？」

《少佐なら、きっと誰も見捨てない!

僕は少佐の部下です、それに僕だって此処に居る誰も失いたくない!!

皆、僕の家族だから!!》

残り3匹の戦車級の内、2匹が足に噛り付いた。

振り払えば下に居る藤代中尉達にも被害が出る。だったら、1匹1

匹丁寧に捻り潰すしか無い……ッ！

《邪、魔だあっ！》

両腕で両足にへばり付いていた2匹の頭を鷲掴みにし、万力の様に力を込める。

2匹からの必死の抵抗など、所詮は可愛い物だ。

鮮血が辺りに舞い散り、動かなくなった2匹を1匹目と同じ様に投げ捨てる。

盛大な音を立てて吹き飛ぶのは良いが……残りの1匹は何処に行っただ？

先程の2匹に気を取られ過ぎて、姿を見失うなんて無様な真似失態だけは曝す訳には

「エニツクス少尉、上だ！！」

篁中尉の声が聞こえる。

咄嗟に反応し、上から来るか如何かも分からない存在に向けて拳を突き出した。

僅かに拳が触れた感触。

そして、何かを砕く様な音。

《仕留め損なつた……ッ！？》

半身を砕かれても尚、戦車級は存命していた。

流星はBETAと言う事か、タフさ加減だけを見れば一人前と言う事だろう。

腕と足を吹き飛ばされても尚、戦車級はF型にへばり付いて来た。

握り潰そうと頭に手を伸ばすが、上手い具合に避けているので中々掴めない。

コレじゃ、埒が明かない！

《しっ、こい！！》

身体に戦車級がへばり付いたまま、僕は機体をハンガーの出口へと向寄せた。

そんなに離れたくないのなら、離れてしまう程の衝撃を与えてやるだけだ。

壁に身体を押し付け、戦車級を機体とコンクリートで板挟みにする。ジタバタと震える身体を押し付ける様に強く、圧力を掛けて圧殺する。

やがてはドロリとした内容物まで辺りに噴出しながら、戦車級は沈黙した。

少々グロテスクな勝利だが、勝ったのだから良いだろう。

《おい、お前達無事か！？》

おっと。

まさか此処でブリッジス少尉が登場するとは思いませんでしたね。

一応乙女ですし、この血だらけの機体を見せるのは少々恥かしいですな！

外では式型が此方の状況を確認したのか、ハッチを無理矢理抉じ開ける作業へと移行していた。此処からでは確認出来ないが、他のアルゴス小隊のメンバーも控えているのでは無いだろうか？

まあどちらにしろ、私達は助かったと言う事だ。

クリスカ

《クリスカ、りゅうじがあぶないよ!》

《うん……でも、コイツ等の数も多くて……ッ!》

中途半端な弾倉。

大人しく帰還すれば、きっと彼女達は上官達に迎え入れられた事だろう。

冷たい視線、人を物として扱う様な仕草。

それでも、クリスカにはそんな居場所しか無かった。与えられた環境が、それしか無かったのだ。

【生きているって事は”考える”ってことだ】

あの日、奴は私にそう言った。

奴は、今まで与えられた事を忠実にこなしていた私に選ぶ事を教えてくれた。

だから私は選んだのだ。

剣崎龍二に死んで欲しくは無い、と。

《俺の事は気にするな、お前達は自分の面倒を》

《怪我人がしゃしゃり出るな! 貴様は黙って私達の後ろに下がれ!

！

《だ、誰が怪我人だ！》

《……自分の顔を見る》

呆れ半分に溜息を零し、私は通信を切った。

コレ以上何かを話してもそれは結果として無駄な労力の消費に他ならない。

奴は一度決め込むと頑なだ。

だからこそ、間を与えずに此方が言葉で叩き込めば弱い。

……奴に出会う前の私だったのなら、こんな事すら考えもしなかっただろう。

“誰か”の事など考える筈も無かった。

《クリスカ、たのしそう》

《え?!》

《わたしもたのしいよ。りゅうじといっしょにいと、たのしい》

《……そう、かな……》

《わたしはそう。クリスカはちがうの?》

……イーニアの無邪気な問いに、思わず口籠ってしまふ。

剣崎龍二と言う”個”をコレ程までハッキリ意識した事は無かった。だから、こんな事を問われても私は何も分からないし、答えられない。

そう 答えられないだけなのだ。

《ッ！イーニア、敵が来る》

《……うん！》

今は考えるな。

私達はただひたすらに、襲い来る敵を殺し続ければ良い。

渋々と言った具合に漆黒の機体が後ろへ下がる。それでも、臨戦態勢な事だけは変わらない。いつでも突撃出来る様に、腰を低く構えている。

それ程、私達が”信頼”出来ないのか？

なら良く見て置くが良い。

コレが ”紅の姉妹”スカーレット・ツインの戦い方だ。

寧猛に、そして果敢に攻める獅子とは異なる優雅さと余裕を兼ね備えた私達の戦い方を、精々その目に焼き付けるが良い。

38 (後書き)

TEの話が一息吐ける状況になりましたら

話の題名付けと修正の作業に入ろっかな〜と思っています

このような駄文ですが、

あと少しばかりでTE編が最終回を迎えようとしています

どうかお付き合下さい

39 (前書き)

脳内では 40には完結させる事が出来る筈なのですが……
多少長くなるうと、綺麗に 40に纏めた方が見栄えも良いかも知
れませんか

次回は長くなる……かも知れない予感

篋

《結局、99式は破壊するのね?》

《はい……これを他国に渡すならば、コレが最も有効な手段かと》

《分かった。その仕事は貴方達に任せる。

タリサ、ヴァレリオくん。貴方達はすぐに少佐の所に向って!このままじゃ危険よ。

ステラはユウヤくんの護衛をお願いね》

《任せてくれ、姉御!》

《了解。帰ったら是非とも上手い茶でも飲みたいぜ》

《了解したわ》

《ヴァレリオくん、私のお茶で良ければ幾らでも淹れて上げるわ。それじゃセレナ、私達も少佐の下に向いましょう。彼なら大丈夫だと思っけど、一応ね》

《了解です》

藤代中尉は直ぐ様、エニックス少尉の機体に乗り込んだ。

強化装備無しで戦場に戻るのは危険だとエニックス少尉は申告したが気にするな、の一言で黙らされてしまった。

それに、話の途中で少佐の事が出ていたがそれは如何いう事だろうか？

任務の途中だと言うのに、99式の事で頭が一杯だった私には理解が追い付かない。

危険とは、一体……

「少佐は単機で旅団規模のBETAと交戦中だ。知らなかったのか？」

そんな私の思考を読み取ったかの様に、ブリッジスは此方を見た。

その目には一切の不安など写っておらず、逆に私は疑問に思ってしまう。

何故心配しないのか、と。

「……はあ。考え過ぎだろ、おまえ」

「ッ！上官の安否を気遣って何が悪い！！」

「ただ”の上官か？」

ブリッジスは勘繰る様に、だが私の怒りを煽る様に笑った。

安い挑発だ。いつもの私ならば冷静に対処出来た筈だったが、今回はそう簡単には事が運ばなかった。冷静さを欠いていた、そう言われれば頷くほか無いだろう。

「なっ……貴様、私をからかっているのか!？」

「あの人も難儀だな……こんな堅物が未来の嫁か」

「か、堅物……よ、嫁……ブリッジス少尉、それは私に対する」

「今は如何でも良いだろ。サッサと決着を付けようぜ」

決着。

99式を破壊し、技術の漏洩を防ぐ。

そうだ、コレで良い。私達に必要なのは武器では無く、人なのだ。

武器は壊れたら作り直せば良い。

だから今は、決死の思いで戦う少佐の下に急がなければならない。

代用の利かぬ世界でたった1人の英雄を、此処で死なせる訳にはいかないのだ。

「やってくれ、ブリッジス」

「了解」

式型の放った弾丸が99式投射砲の装甲板を食い破り、中に蓄えてあった燃料に着火する。内側から装甲を食い破る様に出て来た炎を見ながら、私の胸中はただ1人の男の安否を気遣っていた。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

目の前で戦うチェルミナートルを見やりながら、俺は俺で今の自分に出来る事を必死に探す。基地との連絡は、今更意味など成さないだろう。ヘリが基地から飛び去って行く光景はこの目で確りと確認したのだ。

ならば残された手段は、機体の自爆。

搭載されたS-11の火力があれば、この場で紅の姉妹を失わずに済む。

だが、千枝の覚悟を詰め込んだこの機体が消える。

それが彼女の心にどれだけの傷を残すのか、俺は分からんが……

まあ、可哀想だよな

そんな私情で確実な方法を消去するとは、随分と俺も甘つちよろい男になった。

だが後悔は無い。

随分と俺にも人間らしい感情が芽生えてきたと、寧ろ言ばしく思っている程だ。

残りの残量が少ない跳躍ユニットの燃料だが、まあ 圏程度は出来るだろう。

機体の稼働時間も……あと十数分が限界って所か。

それまでに殲滅または撤退出来なければ奴等に食われるとは、随分と分の悪い。

《クリスカ、俺が囮として前に出る。確り狙えよ?》

《バカか、貴様! 武器も無い機体で前に出るなど自殺行為だ!》

《お前を信じたからこうやって前に出るのさ。

まさか怖いのか? フレンドリーファイヤなんて素人みたいな真似をする事が》

《りゅうじ、むちゃしちゃだめだよ……?》

《おっと。イーニア姫からの命令とあれば守らなければ後が怖い。

信じるぞ、クリスカ。お前の腕と根性、それに決意。お前の意
思ってヤツを》

死体が重なった肉の山に立ち、辺りを軽く見渡す。

少なくとも残った敵の数は 2000。当初の半分以下には減つて来ている。

光線級は俺が徹底的に叩き潰してやったから、もう居ないとは思うが油断は出来ないな。要塞級の中に入っていました、なんて笑えないジョークが待っているかも知れん。

さて、それでは盛大な祭りで奴さんを出迎えるのでしょうか。

小型種くらいなら徒手でも十分捻り殺せるだろうし、そう言った奴等は俺が潰していくとしよう。クリスカとイーニアには突撃級と要塞級を重点的に狙って欲しい。要塞級は後で幾らでも相手に出来る。正直、アイツ等は鈍いからな。

《頼む!》

《この馬鹿が……イーニア、私達も》

《うん！》

後で干枝に弾数の多い武器でも作って貰おうかな。

それか、簡単には折れない長刀だ。

それさえあれば、こんな無様な失態を曝す事も二度と無いだろう。

次の課題は機体よりも武器だな。

現実逃避としては少しばかり硝煙臭い内容だが、今は気にしている暇も無いか。

《左方から接近する要撃級は高度を上げて対処する！

まずは要塞級を無力化するぞ、奴等さえ居なければ撤退もし易くなる！

それと小型種に無駄弾は使っな、接近して来た奴等はチエルミナールの標準装備のナイフでも使っっておけ、弾は使っな！良いな？》

《分かっている　ッ！貴様も、簡単には落とされるな！！》

《囹役を買って出た手前、簡単には落ちねえよ》

来るか分からない援護を期待しながら、今を必死に生き残るとするか。

最悪の場合、この2人だけでも逃がして俺だけが死ねばそれで

《少佐、援護するぜ！！》

《1人で逝くには早過ぎるな！折角だ、オレ達も付き合っぜ？》

《少佐、遅れながらも援護に来ました！！》

《流石に、生身で戦術機は辛いわね……サッサと終わらせて、帰り

ましよう》

覚悟を決め、前に出ようとフットペダルを踏み込もうとした瞬間。頭上を3つの影が通り過ぎる。

それらは眼前に迫る敵へと攻撃を開始し、俺とBETAを遮る様に着地した。

1つは俺の良く知る背中。

後の2つは戦場で世話になった背中。

不知火F型装甲を駆るセレナ・エニックス。

基地から脱出したのだろう、ウィンドウには藤代千枝の顔が見える。頼れる仲間である、ACTVを駆るタリサ・マンダルとヴァレリオ・ジアコーザ。

大きな期待はしていなかったが、やれやれ……神様ってヤツも、捨てたものじゃないらしいな。

《盛大に遅刻しやがって……こっちは死に掛けたぜ》

俺の呆れた様な、安堵した様な声と共に3機の銃口が敵へと向けられる。

合図も無くほぼ動じに発射された弾幕は敵を穿ち、削り、殺して行く。

……本当に、今日は俺にしてはとても運が良い日だ。

まさか1日に2度も命を救われるとは、戦い始めた時には思いもしなかった。

《みんな、りゅうじのなかま？》

《仲間つつうか……家族かな》

イーニアの不思議そうに問い掛ける声に、俺は何と無しにそう答えた。
もうコイツ等を”仲間”なんて括りで縛るのは無理だろう。
此処まで来れば　コイツ等皆、俺の家族みたいなものさ。

ユウヤ

ステラとヴァレリオ、それに藤代中尉とエニックスが飛び立った後、カムチャツキー基地にはBETAの一団が襲来した。そして、式型に迫る要撃級の豪腕。
くだらねえミスだ、まさか99式を破壊した余韻で隙を曝すことになるとは思ひもしなかった。左から来る衝撃に歯を食い縛り、吹き飛びかけた機体を何とか踏ん張らせる。
続け様に振るわれる2発目を回避するが、式型は既に左腕上半部を失っていた。

《コアモジュールは！？》

99式のコアモジュールへ山の様に重なるBETA。
それでも尚、彼がコアモジュールを諦めないのは篋唯依と言う少女の頑張りを知っているからだ。彼女がどれだけの思いで、99式電磁投射砲に対して命を賭けてきたのか。
それを知っているからこそ、ユウヤ・ブリッジスは諦めようとはしなかった。

操縦桿に力を入れるが

《ダメよ、アルゴス1！諦めなさい！！》

ステラの怒声とアラートが重なる。

咄嗟に唯依のバイタルモニターを確認するが、かなり悪い。
寧ろ最悪だ。

先程の緊急回避で、ジャケットの対Gを上回ってしまったのだろう。
その顔は青ざめていた。

(クソッ、こんな時にオレは……ッ！！)

迫る要撃級、そして突撃級に120mmを撃ち込みながら必死に後退する。

だが、急な加速は出来ない。

これ以上は唯依の身体に響くのだ。

だがこのままでは、此方が持たない。何れは唯依と共に共倒れだ。

何とか唯依だけでも……少佐なら、きつとコイツ等を助けてくれる筈だ。

後は頼むぜ、少佐。

《アルゴス01、貴方は中尉を連れて後退しなさい！！此処は私が》

《ダメだ！お前が中尉を連れて、離脱しろ！！》

《っ！？》

これ以上、中尉の心配をしながら戦っていられる程の余裕は無かった。

それに、こんなボロボロの機体に乗っているよりも戦闘慣れしているであろうステラと共に居た方が良さだろう。そうした方が、唯依はきつとまた少佐に会う事が出来る。

「ブリ……ッジス」

苦しそうに呻く唯依に一瞥もくれず、機体を自動制御に切り替える。唯依の意識は朦朧としているのだろう、その方が都合が良かった。

《アルゴス4、準備完了だ！》

《了解したわ》

管制ユニットへと伸ばされたF-15Eの腕を何とか唯依を支えて渡りながら、ユウヤはステラへと唯依を託した。既にグツタリとした唯依を確りと抱き止め、此方に視線を送る。

「心配要らねえよ。オレの機動は”少佐仕込み”だぜ？」

子共の背伸びの様な痩せ我慢。

それでも、何も言わないよりは幾分もマシだと思ったのだ。

管制ユニットが閉まり、ユウヤとステラを阻む壁が現れる。

この壁際の会話が精々、永別とならない事を今は祈るしか無いだろう。

「中尉を頼む」

「任せて」

それだけの応答で、オレは弐型へと歩を進めた。
1人になった事で先程よりも広くなった管制ユニット。
初めて、孤独と言う恐怖を知る。

ズドン。

ズシーン、ドン。

遠方から聞こえる銃撃戦の音。きっと、あそこには少佐も居る事だろう。

ズドン。

ズシーン、ドン。

違う。遠方じゃない、コレは……近い。

まるで巨大な何かが此方へ向っている様な、そんな

《ユウヤツ!!!》

ステラが怒鳴る。

それは既に、悲鳴に近かった。

ボロボロの弐型に、ゆっくりと影が掛かる。

《要、塞……級》

その巨体を震わせて、もっとも絶望的な壁がオレの前へと姿を現していた。

咄嗟に機体を動かそうとするが、それよりも早く奴の触手が動く。アレを食らえば、一撃で死ぬ。

確実に　死ぬ。

《チツ、クシヨウツ……!》

必死に操縦桿に力を込め、フットペダルを踏み込み、式型を立たせようと奮起する。
だが、それよりも触手の方が早い。
此方の一連の動作が終わるよりも速く、触手は振り下ろされた。

《武器を拾いに来たらこの有様か。トラブルメーカーは間違い無く俺らしいな》

溶解液が機体に触れるよりも早く、何かが要塞級とユウヤの前に立ちはだかった。

特別大きい訳では無い。

式型と同じか、それよりも一回り程大きな……“戦術機”の影。

《悪いな。パーティー会場はもう少し派手だと思って見逃しちまった》

こんな危機的状況だと言うのに、当たり前のように笑っていられる余裕を見せ、目の前の機体の操縦者は笑った。

この状況で笑っていられるなど狂っている、と言われればそれで終わりだ。

だがオレはそうは思わない。

この笑顔にオレ達は何度も助けられた。この笑顔があつたからこそ、オレ達は此処まで来られたのだから。知っている、皆が知っている。

《盛大な登場だな、少佐》

《主役つてヤツは遅れて登場するものだ。そうだろうか？》

先程の溶解液をオレと少佐の替わりに食らった要塞級の上半身を投げ捨て、少佐の機体が動く。

一瞬にして距離を詰め、要塞級の触手を叩き斬り、悶える巨体に銃口が向ける。

今度はけち臭い真似は一切無しだ。フルまで回復した弾丸の嵐が容赦無く要塞級の脳天から四肢、そして腹部の結合部を穿って行く。

最後の薬莢が排出され、巨体が地に伏した時には既に機体は完全から掻き消えていた。

後方から聞こえる爆音。

飛び散る鮮血と舞い散る肉片。

どうやら旅団規模の足止めをした男はまだまだ、元気満点の様だ。

《悪いが、向こうにも俺の帰りを待つ奴等が居てね。

今回はオマケ無しの本気で殺しに行かせて貰うぜ。覚悟しやがれ、

《ゴミ虫野朗共》

獅子は吼える。

その様はまさに、獲物を見つけた狩人の咆哮。

寧猛な野獣の咆哮。

《レエエエエツツパアアライイイイイイイイイッ！！！！イエ
アッ！！》

奇声を上げながら、獰猛な獅子が地を跳ねる。

背部担架に背負っていた銃など取り出す事は無い、少佐に向かい突撃していた突撃級の頭の上を飛び越え、その無防備な背後から蹴りを叩き込んだのだ。

無論、それだけでは終わらない。

あるう事が突撃級の殻を確りと手腕を掴み、ロデオの様に爆走を始めたのだ。

勿論回りに居た突撃級はそれを許そうとはしない。

必死に爆走する1匹に並走しながら、少佐を叩き落そうとするのだがその度にヒョイヒョイと突撃級の背中を渡り歩き、まるで綱渡りの様に器用に乗り換えていく。

乗り終えた突撃級には120mmのキスで熱烈な別れをする。

張り詰めた緊張感が台無しだった。

オレを含め、ステラも唯依も何のリアクションも取る事が出来ない。獰猛、と言うのは訂正しよう。

コイツは狂っている。

《ハッハー！イイね、グツと来た！！》

飽きたかと思えば暴れ回る突撃級の殻を離し、目の前の建物へと激突させる。

直ぐ様、突撃砲のシャワーを浴びせて敵は沈黙。

次の玩具を探す様に辺りを探り、楽しみそうな玩具が無い事を悟ると詰まらなそうに溜息を吐きやがった。

《退屈だな、ユウヤ。退屈だぜ。退屈って事は人生の七割を損しているって事だ》

《いや、さっきまであんなに楽しそうだったじゃねえか……》

《さつきはさつき。今は今だ。細かい事を気にしていると女に嫌われるぜ。》

ああ面倒臭え。流石に旅団規模は死ぬかと思っただぜ……寧ろ死んだな、ありや《

《コレでもかって程、頭から血を流すヤツの台詞とは思えねえな》

《ん？ああコレか。いや、またやっちゃまった。珍しくやっちゃまった》

そう言うと、額から流れ出る血を指で拭い取る。

その際に数滴程だが画面に赤い染みが出来た事は此方からは指摘しないで置こう。

何と言うか……酔っ払いより性質が悪い。

《オラオラオラッ、立ってくれよ。》

この俺を散々困らせた子猫ちゃん共、テメエ等をタツプリ可愛がってやるからよ《

担架から振り下ろされる長刀を多種多様のBETAに向けて、

少佐は 獰猛な、笑みを浮かべた。

39 (後書き)

最後に出て来ている龍二は完全にキレてます
主に大切な”家族”に手を出された事が理由です

ラストまで駆け足で行くとしましょう！
皆さん、どうか最後までお付き合い下さい！！

40 (前書き)

ついに、ついに終わった……

長くなってしまいました、とても長くなってしまった……

だが、後悔はしていません!!

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

TE編最終回です

お楽しみ下さい!

ユウヤ

その姿、まさにベルセルク。

たった1本の長刀で容易くBETAを捌いていく姿を形容するには、その言葉以外思い浮かばなかった。今まで共に戦って来たタリサもヴァレリオも、そしてステラも。基本は銃撃戦を主に戦闘を組み立てていたのだ、根っからの白兵戦など見た事が無かった。だから言える。

コイツは、滅多にお目に掛かれる物じゃない。此処で見逃してしまえば、きっとオレは永久に後悔する事になるだろう。

要撃級の振るわれる拳に合わせ、機体を軽く跳躍させる。

振り被られた拳は空を裂き、当然の事ながら隙を見せた要撃級の身体は切り裂かれた。

その際に後方から接近する突撃級には背部担架から取り出した突撃砲を振り向きもせず発射。殻を突き破り肉へと届いた事で突撃級の進路は少佐を避け、建物へとその姿を消していく。それはまるで、背中にも目が付いている様な神業と言えるだろう。

一瞬の攻防で分かる英雄と呼ばれる男の力量。

戦場を把握するのでは無く、戦場を掌握するかの様な圧倒的な威圧

感。

存在しているだけで感じる多大なプレッシャー。

《少佐……アンタってヤツは……》

自分を鍛え上げた上官は、恩師は、既にこんな領域にまで手を伸ばしていたのか。

ユウヤは思う。何れは、オレもその領域に手を伸ばす事が出来るのだろうか？

数々の戦場を渡り歩き、
数々の戦場で経験を積み、
数々の戦場で生き残れば、

オレにも少佐と同じ様に戦場を掌握する程の力が手に入るのだろうか？

無謀な夢かもしれないが、夢を持つのは無料タダなのだ。夢を見ても良いだろう。

だが、今だけは　ッ！

《ブツ殺されたい奴は綺麗に並べよ》

この場で最も自分達に危害がある存在を認識したのか、BETAが群をなして少佐の下に少しずつだが結集して行く。

兵士級、闘士級、戦車級、要撃級、突撃級、要塞級、いつの間にか光線級まで居やがる。

既存のBETA全種大集合って訳だ。

コイツ等が、たった1人の人間に此処までしなきゃいけないと認めやがった。

人間を”障害”として認識しやがった。

だからこそ、この戦場で踊る狂戦士の力強い舞いを目に焼き付けて

おきたい。
決して忘れる事など無い様に、目に刻み込みたい。
この世界で初めてBETAの天敵として認められた男の戦いを、目撃したい。

ラトロワ

《調子は良さそうだね》

既に放棄が決定されている筈のカムチャッキー基地。
そこで未だに暴れまわっている馬鹿達が居た。その馬鹿の大将に、通信を入れる。

《ラトロワ中佐ですか。ソ連の連中は随分な真似をしてくれますね》

この前は音声だけだったが、今回は顔が見えた。
その顔は血だらけだが、成る程。

この男は私に薄気味の悪い笑顔を向ける、思わず背筋に悪寒が走った。
怒りを越え、その先にある怒りの境地にでも突っ込んだのだろう。
画面越しでもヒシヒシと伝わる殺意が胸を締め付ける。

《……本心を言えばどうだ？ コレは秘匿回線だぞ》

それでも、そんな殺意を隠されるよりは堂々と見せ付けられた方が

良い。
いつ後ろからブツ放されるか分からない大砲なんて、存在だけでも脅威だ。

《……結局は俺の八つ当たりだ。悪いな》

《ふんっ、女にまで当り散らすとは情けない野朗だね》

《フレンドリーファイヤに気を付ける事をオススメするぜ、ラトロワ中佐》

《テメエの尻くらいはテメエで守る。

アンタも精々、奴等の餌にならない様に気を付けな。ねえ、” B l a c k l i o n ” ？》

お互い、首を掻っ切る仕草を取ってウィンドウを閉じる。
どうやら根本的な所で致命的なまでに私とヤツは分かり合えない様だ。

《あそこで大暴れしている化物の援護に行くぞ！

その隣で倒れている”英雄殿”の回収も忘れるな！奴等には無事にお帰り願うぞ！》

部隊を2つに分け、1つを周辺警戒に当てる。

もう1つを私自身が率い、暴れ回る黒獅子の援護に向う。
正直な話をすれば、援護するまでも無いと思うがね。

マブラヴ コンディションレット・オブ・ヒューマン

劍崎

フィカーツィア・ラトロワは不幸な女だ。

バカな奴だと思う。一生をただ、敵と戦う剣として捧げていけば下らない陰謀などに巻き込まれる事も無く、大好きな部下達と楽に死ねただろうに。

無駄な事に首を突っ込んでしまったからこそ、あの女は良い様に利用されるのだ。

まあそれを解決するのは俺の役目じゃない。

コレが無事に終われば、夕呼辺りを少しばかり突いてやるとするか。もしかすれば、もしかするかも知れん。まあ過度の期待はしないがね。

《ジャツカル01からジャール1へ。》

敵はコアモジュールと俺に狙いを絞った、フレンドリーファイヤだ
けはするな！

良いな！？》

《テメエの尻はテメエで守りな》

《言ってくれるじゃねえか……ッ！！》

ただでさえ燃料の残量が少ない跳躍ユニットを酷使する事は中々辛い
が、今は兎に角後ろで戦う1人とボロボロの英雄殿を逃がさなければ
先には進めないだろう。

東側の施設が爆散する。

何もかもを爆撃する事で白紙にしようとするクソツタレ爆撃部隊の
御出座しだ。

BETA共々、此処に残る証人を全て消すと言う事か。
成る程。腐った連中の考えそうな事だ。

《ステラ、サツサとユウヤを運び出せ!!》

《キーラ、トーニャ!その坊やを運ぶのを手伝ってやりな!!》

ほぼ同時に俺と中佐が命令を下す。

この場で重荷を背負いながら戦ってやれる程の余裕は残されていない
かった。

まあ基地の周りで戦っていた他の連中には命令を下さずとも大丈夫
だろう。

向こうには千枝が居る。彼女ならば、的確な指示を出せる筈だ。

今は解決しなければならぬのは俺達が直面しているこの絶望的な
状況のみ。

まさか仲間内から攻撃されるなんて体験をするとは思ひもしなかつ
た、アラスカに来てからは初体験のオンパレードだな……

《……上手く逃げ切ってくれ、唯依》

ウィンドウを閉じ、マップから遠ざかって行く弐型とF-15Eを
見守る。

彼女等の傍には中佐の命令で随伴する事となった2機が周辺を警戒

しながら付いて行く。あのクソガキ共の事だ、文句を言いながら作業をして居る事だろう。

《弱気だな。どうかしたか？》

《……アンタこそ何もかも知っている訳じゃ無さそうだな。

此処で切り離されるのは予想外の事態か？それとも知っていてその態度なのか？》

《軍人ならば、死の覚悟と言う物は出来ている筈だと思うが？》

《またそれか……嫌な世の中だな》

此方に向かっていた爆撃部隊が一瞬にして消え去っていた。

光線級が居るのだ。当然と言えば当然の事だろう、先程までは俺との戦闘で出払っていたとは言え、今は大人しくしているのだ。奴等が狙われるのは当然の事だと思われる。

《 お前も行け。坊やにはお前が必要だ》

《出来るなら、な》

《ッ！まさか……跳躍ユニットの燃料が無くなったのか！？》

《少しだけならあるがね、光線級に狙われながら移動するには些か不安》

《偽善者振った結末がそれ、か。笑えない最期だな》

それに、折角のお客さん無碍にする訳にはいかないだろう。

警告、未確認機の接近を確認。数は2。

本来ならば1機で事足りる所をわざわざ、念には念を入れて2機連れて来たと言う事か。わざわざ念を入れる事などする必要は無いだろうに……

どうせ、何もかもブチ壊されて俺の前に這い蹲るのだ。

《……お客さんらしいな》

中佐は呆れた様に眉を潜めた。

まず処理しなければならぬ相手は俺達では無く、光線級だろうに。それすら放置して俺達を消しに掛かる……それがバカらしくて、そんなバカの号令で働いていた自分が滑稽にでも思えたのかも知れない。

《アンタは行ってくれ》

《何？》

《……行け》

だから、アンタは精々必死に生きる。

“アレ”と関わる事無く、アンタは生き残らなくちゃならない。

本来ならば “アレ” はアンタを殺す為に出て来る筈だったのかも知れねえ。

だが、今は違う。

今は俺が居る。

アレは 俺の “兄弟達” は俺が殺さなければならぬのだ。

《お前は自分の部隊と俺の家族を必死に護れ！！》

アレは、俺が殺さなきゃならない……行け、ラトロワァッ！！！！》

残量の無くなったメインの燃料を廃棄し、サブ燃料へと切り替える。これで奴等と戦う程度ならば跳躍ユニットも十分に機能する筈だ。

帰れるか如何か、それはまた別の話になるかも知れないが。

《ッ！……貴様、必ず帰って来い！！》

長刀を構え、跳躍ユニットは使わずに愚直に直進する。

アレは”無邪気”だ。

無邪気故に、残酷でもある。

誰が嗾けたのかは知らんが、言う事など聞く筈が無い。

此処に来たのも俺が 同類の化物が居るから、それを殺しに来ただけなのだ。

操縦桿を握る手が震える。

誤魔化せない、真正銘の恐怖。

これから行われる殺し合いに対する、恐怖が身体を支配する。逃げてしまいたい。

だが、逃げてしまえば彼女達が危ない。

立ち向かわなければならぬ。

《イエジー・サンダーク……！》

先ほどまで沈黙が支配していた筈の管制ユニットに、光が灯った。その光の先に映る男は、人を見下した様に笑い、実に愉快そうだった。

「まさか、あの数のBETAを相手に無事生き残るとは予想外でしたよ。

まあ予想外ついでに保険として”2人”を派遣しておいて正解でし

た。

紅の姉妹と比べると、彼等は幾分か周りが見えない子達でしてね？
破壊工作程度にしか使えないのが難点でしょう』

《殺す、殺してやる……ッ！！》

『どうぞ。家族を殺してまで私を殺したいのであれば』

侮蔑の嘲笑を浮かべ、ウィンドウが掻き消える。

十分だ。

奴に十分な殺意が湧いた。

もう知らん。もう何も知らん、俺の邪魔をするなら何であろうと潰してやる。

《おいで。苦しまずに殺してあげるから》

今の俺ならば、恐れる事無くこの子達の命を刈り取れる。

歩を止め、上空から此方へ向う2機の姿を凝視した。

2人の機体は既にBETAの体液に染まっており、元がどんなカラーリングなのかは区別出来なかった。だが、関係など無い。

コレから死に逝く者に、興味など湧いては来ないのだから。

夕呼

『俺の兄弟に会った』

「!?!」

『……コレで、残りは4人って所か？

?の連中が堂々と表に出して来るとは思わなかったが、まあ当然と言えは当然か。

コレ以上の被害は向こうにとっても痛手だろうな』

「こつちの情報収集不足だったわ……ごめんなさい」

『止めてくれ。コレは俺の我俣だし、お前を巻き込んだのは正直悪いと思っっている。』

お前は、?を進める事だけを考えていてくれればいい。戦力削りは俺の役目だ』

アラスカからの最終通達。そして、今日の日付は8月28日。

不知火・弐型のロールアウトセレモニーが行われる日だ。

だが、今も私に通信を入れているとなると如何やらセレモニーに出るつもりは毛頭無い様だった。当たり前、と言ってしまえばそれまでかも知れない。

この顔では、出られる筈も無いだろう。

顔に巻かれた大量の包帯は、それだけでミイラ男を連想させるには十分だった。

それを笑うつもりは無い。

この男の”悲しみ”の勲章を、笑う権利など私には無いのだ。

「ねえ」

『ん?』

画面越しとは言え、訓練兵の時代は四六時中傍に居た様な奴だ。懐かしさも込み上げてくると言う物だろう。

何と無しに画面の中に居る龍二の頬に触れ、ただ溜息だけを吐いた。

『おお痛い。傷口が開いちまう』

「相変わらず元気な奴。それなら、心配要らないわね」

『ああ。そうだな……9月頃にはそっちに向おうと思う。』

安心しろ、”紅の姉妹”も必ず一緒に連れて行くさ。あの子達は…俺が護る』

「……頑張りなさいよ」

既に、サンダークと龍二の通信はソ連軍へと届けてある。

アレをチラつかされてしまえば、奴等もコッチの要求を呑むしかないだろう。

あんな物が他国にでも知られてしまえば、ソ連は周りからの反感を買う事になる。

たった1つの研究と国の命運など、天秤に掛ける事すら出来ない。直ぐ様、了承の言伝が返って来た。

龍二からの通信は数分で終わった。

彼は此方へ合流する事になるだろう。搬入準備を急がせなければならぬ。

それに部屋、制服と用意する物は腐る程有るのだ。

すっかり冷め切ったコーヒーを口に含み、私は上機嫌で通信室を後にした。

剣崎

通信を終え、病室へと戻るとそこは何と云うか……
地の底と言いますか、地の獄と言いますか、険悪な雰囲気渦巻いている。

その理由は……俺とラトロワ中佐の病室が同じ事にある。

あの戦闘で、それはもう盛大にカムチャツキー基地は破壊された。
施設の機能も再起不能、辺りは既にBETAの死骸だらけだ。

まあそれで、渋々と言う事だがジャーナル大隊の負傷者をアラスカまで引張って来たのだ。手引きしたのは決して俺じゃない。
ラトロワ中佐からのご所望だそうだ。

つと、話が逸れたか。

まあ何故此処がコレ程までに険悪かと言うと

「もとを糺せば、其方の上官が旅団規模のBETAと単機で戦おう
等と言い出さなければ此処までの被害を出さずに済んだ筈だ。無能
だな、日本の衛士は」

「イヴァノフ大尉、お言葉ですが少佐があそこで敵の侵攻を食い止
めなければ、もっと多くの犠牲者が出た筈です。その健闘を称える
のならば兎も角、無能と吐き捨てるとは見逃せません。訂正して下
さい」

「ふんつ。無能な男を無能と言って何が悪い」

「ッ、彼は無能じゃない!!」

ラトロワ中佐の副官であるイヴァノフ大尉とうちの唯依ちゃんの口論が原因である。

病室の前に居ても聞こえて来る怒声に眉を顰めながらも、俺は地獄へと一步踏み入れた。窓の傍にはタリサ、ヴァレリオ、そしてステラがパイプ椅子を並べて終わりなき論争を観戦しており、「ブッコロセー」などと物騒な事を言っていた。

……正直な話をする、関わり合いになりたくは無い。

「遅かったな。1人では小便すら済ませられんか？」

そんな彼女等の討論には我関せずと決め込んでいた様だったラトロワ中佐は俺の入室に気付き、美しい顔を歪めて言い放つ。この人と同じ病室になって思ったが、この人は案外とガキだ。中身が育っていない悪ガキと言う言葉がピッタリだろう。

「人の神経を逆撫でする事が好きな様で。

「いっその事、その小便すら出来ない様な”サオ”をアンタにブチ込んでやるっか？」

「考えただけでも身の毛が弥立つ」

「だったら考えるな。気色悪い」

対面する様に置かれた俺のベッドに座り込み、大量に送られて来た書類に目を通す作業を再開する。今頃、ユーコン基地に残っているのである。千枝は決死の思いで前回の戦闘の報告書を纏めている事

だろう。無論、セレナはその道連れだ。ザマーミロ。とは言え、俺の所にも書類は来る。

流石に副官と言え、介入出来ない書類もあるのだ。そう言った物を届ける為に、唯依ちゃんが使われるのだが

(……険悪になるから、セレナにチェンジって言っただろうか)

全くその辺りを考慮してくれないのが藤代千枝の良い所だろうな。ハハッ!

部屋の中央でバチバチと鳴り響く火花。

見詰め合う2人 両方女だが。見詰め合うと言うよりも睨み合うだが。

それに我関せずと決め込む上官2人。

そして、完全にそれを見世物か何かと勘違いし始めているアルゴスの3バカ共。

やれやれ、と思わず呟いてしまうのはご愛嬌だ。

「ステラ、そう言えばユウヤはどうした？」

「式型のロールアウトセレモニーが終わったら此方に向うそうよ。彼は式型の開発衛士ですもの。どうしても気になってしまつのも無理はないわね」

「でも、少佐コールが一番多かったのもユウヤだったなあ。」

基地に帰って来てからアンタがぶっ倒れる時も、誰よりも先にアンタの傍に駆け寄ったのはユウヤだったし？」

「案外、男に好かれるのかも！やったね、しょ・う・さ」

「タリサ、こつち来いよ。お兄さんとイイことしようぜ？キモチイ

「イヨ」

「わわっ！止める！アタシが悪かったあっ！！」

ジリジリと後退を始めるタリサに舌打ちし、また作業を再開。

部屋の中央で繰り広げられていたバトルはいつの間にかまた口論へ発展していた。

第2ラウンドだろうか？

いや、もしかすれば俺が戻って来る前にもやっていたのかも知れない。

計何ラウンドやるつもりだ？ボクシングなのか？

「少佐、見舞いに来たぜ」

「おおユウヤ！タバ」 ギンツ！！『コなんて、要らないからねえ』

危ない。本当に、危ない。

病院に要る時に”煙草”と言う単語を出すと唯依ちゃんに怒られるからな。

今だって凄まじい殺気を向けられちゃった。おお怖い。

「坊やか。気を利かせて、茶請け程度は買って来ただろっね？」

「アンタが何を好きなのかは知らないが、見舞いと言えは見舞い品だろ？」

買って来たぜ。まあ……此処まで大人数だとは思わなかったけどさ」

「よっ」

「おう」

「ほほほ」

「ターシャ、休憩にしま」

「唯依、お茶にしよう」

「はい！」

……「こう言う所は似た者同志だなあ。」

なんて、唯依とイヴァノフ大尉を見比べちまうのよねえ。

ユウヤ

「で？」

「あ？」

少佐がベッドの上から小声で話し掛けて来た。

何と言うか、どんな些細な言葉でも戦闘の切欠になりかねないこの場で言葉を選んで話すよりは、目的人物に対して小声で話し掛けた方が手っ取り早いと思ったのだろう。

誰にも悟られぬ様に、ベッドの反対側へ座った俺へと視線を向けた。

「あ、ちょ、まつ！今のジョーク、ジョ……ギャアアアアアアアアアアア！」

ゴホン、と少佐が一度咳払いをする。

先程までヴァレリオに鉄拳制裁を加えていたタリサの手が止まり、ヴァレリオもおふざけを止め、

ステラも少佐の真剣な表情に窓際から此方へと歩を進めた。

唯依は、ベッド脇に座っていたので動く事は無かったが姿勢を正したのは分かる。

「まあ、その何だ……俺はアラスカを発つ事になった」

「……え？」「」「」

部屋の空気が凍る。

既に仲間から家族へと昇華され掛けていた少佐の突然の帰国。

それは、オレ達に大きなショックを与えるには十分だった。

まるで脳天を金槌で叩かれた様な、そんな衝撃にオレは思わず歯を食い縛る。

「そんな、急に……」

あのタリサですら、あまりの驚きに言葉を失っていた。

少佐の帰国、それがどれだけオレ達にとってショックだったかを良

く表している。

滅多に表情を代える事の無いステラですら目を見開いていた。

「……式型の開発も十分、軌道に乗った。あとはお前達だけでもやれるだろう。」

俺は、日本に帰ってやらなきゃならない事がある」

「それって……それって、少佐じゃなきゃダメなのかよ！」

「ああ。俺がやらなきゃならない」

「そう……突然ね」

「悪いな、ステラ。だがコレだけは覆せねえ」

「……出会いもあれば別れもあるって事か。仕方ねえな」

「理解が早くて助かるぜ、ヴァレリオ」

XFJ計画からの少佐脱却。

それは、オレの中に多大な穴を残すことになった。

簞

他の見舞い客は全て基地へ戻り、部屋には私と少佐だけが残った。

ラトロワ中佐は、席を外してくれたようだ。それが逆に、今の私にとっては重く押し掛かるプレッシャーの様に感じてしまう。

「……アラスカを、発たれてしまうとの事でしたが……」

「最期まで一緒にやりたかったが、そう言う訳にはいけなくなっちゃった」

少佐の包帯を替えながら、私は呟く様に尋ねていた。認めたくは無かったのだ。

これで、こんな中途半端な気持ちのまま別れる事になる結果に自身自身が。

だが、返って来た言葉には強烈なまでの意思が込められていた。私1人では覆せない様な、大きな壁。

最期の最期で、結局私は躓いてしまった。

ハラリ、と包帯が床に落ちる。

まだ癒え切っていない傷が痛々しいが、確かにそこには少佐の顔があった。

目は瞑られており、感情は一切読めない。

最初と同じ様に、その仕草は私を拒絶している様に感じてしまう。

「……泣くなよ」

「泣いて、なんて……ッ！」

「首筋、さつきからポタポタ冷たい物が当たって寒い」

「が、我慢……して下さい……」

「まったく。我慢するのは俺じゃなくて、お前だろうが」

「あっ」

強引に少佐が私を胸に抱え込む。

涙が見られてしまう事を拒絶し、そこから離れようとした私だったが少佐は決して離さないとでも言う様に確りと私を抱かかえてしまった。

「痛い、です」

「我慢しろ」

「でも……」

「無人島で遭難しちまった時、俺は言っただろ？」俺の傍から離れるな”って」

確かに言っていた。

でも、それは此処に居る時の話だ。

私はまだ任務が残っている、だから

「巖谷中佐には俺から話を付けてある。娘さんを下さい、ってな」

「なっ……!?!」

「後はお前次第だ。お前が選んで、お前が決める」

それだけ告げ、少佐は私を離して布団を被ってしまった。

コレ以上、会話を続けるつもりは無いと言う事だろう。でも、彼の気持ちは素直に嬉しい。

私を必要としてくれていている事に、私自身も驚きながらも浮かれている自分が居る。

だって、顔に笑顔が張り付いてしまったままなのだから。

「龍二さん……ッ！」

「うわっ!?!」

人間、感情が爆発すると何をしでかすのか分からないと言う事が。流石に怪我人を相手に飛び付くなんて馬鹿な真似はすべきではなかっただろう。

……その姿も、ラトロワ中佐にも見られてしまったし。

ラトロワ

やがて、夜は訪れる。

周りには誰の気配もせず、この部屋には私と奴の2人だけになったと言う事だ。

「色々と聞きたい事があるが、どうせお前は答えてくれないだろう?」

「……内容にもよる」

長い沈黙の後に、鋭い声が病室に響く。
辺りの気配を探っていたのだろうか？やがて、ゆっくりとベッドから腰を上げた。

此方のベッドの隣まで歩いて来ると傍にあつたパイプ椅子に座り、私をただ静かに見詰めていた。

「貴様が戦った最後の未確認機の衛士だがアレは……お前の兄弟なのか？」

「そうだ」

「……どの様な経緯だ。まさか、同じ母親の腹から生まれた訳でもあるまい」

「それ自体は禁則事項だが……そうだな。確かに同じ母親じゃない」

皮肉気な笑顔を浮かべ、剣崎は足を組み直した。

まだ質問する事を許しているのだろうか、ならば遠慮せずに聞くべきなのかも知れん。

此処まで情報を伝えられず、そして危険な目に合わされたのだ。知る権利程度はあるだろう。

「次は、そうだな……」

貴様は一体何の計画に携わっている？何故、上は貴様をアレ程までに敵視する」

「自分達とは対極に居る人間をアンタは嫌わないのか？つまりはそう言う事だ。」

俺と奴等は敵同士、分かり合える事なんて有り得ないって事だよ」

適当に有耶無耶にされてはいたが、対極に存在していると言う事は理解出来た。

即ち、剣崎はその一方の組織の重要なポストに居ると言う事だろう。

「……私から聞きたい事はコレだけだ。迷惑を掛けたな」

ただ右手だけ挙げ、奴は自分のベッドへと戻って行った。

そのあまりにも傍若無人な態度に苦笑を漏らしながらも、私を睨みを閉じる。

明日になれば、またターシャが見舞いに来ることだろう。

そうなれば奴の所の部下と面倒事を起こすに決まっている。

体力は温存しておくに越した事は無い。

私が夢の世界へ落ちるまで、そう時間は掛からなかった。

剣崎

出発、そう言えば聞こえは良いかも知れない。

だがコレは別れなのだ。

俺にとっては出発点と言う訳では無い、幾万回と繰り返される別れの1つ。

病院から出た時、空にはこんな日に相応しくない程に晴れ渡っていた。

もう少し俺の心を表す様な曇天でも良かっただろうに。

はあつ、と1つ溜息。

纏め上げた荷物　と言つてもシヨルダーバック1つ程度の簡素な物だが　を背負い、もう一度病院を見上げる。

俺が最近までは入院していたのであるう部屋からは、ラトロワ中佐が此方を見下ろしていた。最期だつて言うのに、相変わらずあの人は声も掛けてくれはしなかったがそれが彼女らしいと言えばそうなのかも知れない。

下手糞な敬礼。

それに対し、ラトロワ中佐は苦笑の後に敬礼を返してくれた。

お互い、気に入らない相手ではあるが別れの時なのだ。

笑顔で出迎えてやりたい、そんな気持ちは万国共通の物なのだろう。

「一時的な退院、おめでとうございます」

「……ん」

病院の前までやって来ていた軍用ジープ。

運転席には千枝が腰掛けており、その助手席にはイーニアが。そして後部座席にはクリスカが着席して居た。此処に来るまでに回収して来た、と言う事だろうか？

流石は手の早い部下だ。

その優秀さ加減に思わず驚いちゃった。

「どつした。早く乗れ」

「りゅうじ、おくれちゃうよ?」

「あ、ああ……最後に聞いておくが、お前等は本当に良いのか？」

「命令だ。逆らうつもりは無い」

「クリスカとりゆうじがいるなら、いいよ」

相変わらずお堅い答えのクリスカに対して、イーニアは朗らかな笑顔を浮かべていた。

天使やあつ！そう思いながら、緩みきった表情のままジープに乗り込むとクリスカから「気味が悪い」と釘を刺された。ついでに、心も粉々になった。

「どうでしたか、ジャール大隊の隊長さんは」

「ありや俺とは気が合わん」

「残念。もう少し人脈を広げれば、いざと言う時には重宝するでしょうに」

「そんな詰まらん人脈は要らんね。

宴会を開く時に召集すれば直ぐに駆け付けてくれる様な仲間が是非とも欲しい」

「……私達は軍人ですからね？」

「アイサー、ボス。怖いから銃口を向けなくて欲しいです」

「Good」

「しかし、アラスカの大地とも今日でお別れかあ……名残惜しい

な」

「仕方ありません。上からの命令ですし、少佐はその後直ぐに転属でしたね」

「ああ、お前もセツトで」

「私も！？それは初耳ですよ！！」

「ついでに言うとかリスカとイーニアもそつちで預かる事になっている。

セレナはまだ基地か？付いて来る手筈だったな、確か」

「え、ええ」

「なら無問題。取り敢えず、俺寝るわ」

「……はあ。また面倒事になりそうね」

千枝は諦めた様に首を振っているが、仕方が無いじゃないか。俺の部下になるって事はこんな急なスケジュール変更にも対応出来ない。

草原よりも広い心を持ち、いつでも朗らかな笑顔を浮かべるくらいの気持ちじゃなければやっていけない。

それが俺と円滑な関係を続ける為の条件なのだから。

か）（……成る程。藤代中尉はこの男にコレ程まで振り回されているの

クリスカさん、違うよ。
俺はね、部下に優しいカリスマ上司なだけですよ。

迎えの輸送機を待つ為に滑走路へ立つ。
到着まで、あと10分程だろうか？

こんな俺の見送りが基地総出とは、いつの間にか俺も有名になった物だな。

「随分と派手ですね、イブラヒム中尉。
それにヴァレリオも。わざわざ、俺達みたいな奴等の出迎えに済まんな」

「ははっ。
我々の英雄が帰国なさるのです。コレだけの人数が集まってしまっ
のは自然ですよ」

「そうだけ、少佐。アンタとオレはもう家族も同然さ。
何か困った事があれば、遠慮無しに呼んでくれ。いつだって力にな
るぜ？」

笑いながら俺達はお互いの肩を抱き合った。
此方も、その笑顔に応えるが為に2人の肩を力強く抱き返す。

男同士の熱い友情。

「姉御、行っちゃまうのか？」

瞳に涙を携えたタリサの髪を指で梳かしながら彼女の身体を抱き寄せる。

いつもならば暴れまわるタリサだったが、まるで甘える猫の様に千枝の胸へと顔を埋めていた。俺が知らない所で、千枝も人脈を広げていたと言っことだろう。

「ええ。でもタリサ、貴方ならきつと出来るわ。頑張って」

「姉御、！！」

「もっつ！タリサったら、泣き虫ね」

そう言いながらも満更でも無さそうに、千枝はタリサを抱き締めた。

最愛の友

「あまり、彼に迷惑を掛けちゃダメよ」

「……ふん」

ステラとクリスカ。

普通ならば御目に掛かれない様なコンビが、静かに談笑を……楽しんでる様には見えない。どちらかと言えば、ステラがクリスカに

釘を刺している様だ。

「彼のお蔭でこんなに素直になれたのに。彼も難儀ね」

「私は奴に借りを返すだけだ!!」

「あらあら、あまり大きな声で怒鳴ると周りから注目が集まるわよ？」

「ッ……」

「でもね、約束して。必ず……最期まで彼を支えてあげて欲しいの」

「……奴が裏切らなければ、私は最期まで奴の背中を守るつもりだ」

「クリスカ、はずかしいの？」

安心したかの様に、ステラは笑った。

今までにクリスカには向けられた事の無い様な笑みに、クリスカは自分がバカにされている様に思っただけと共ニアと共ニサッサと滑走路を歩いて行ってしまった。
気の早いヤツである。

鉄の約束

「行くのか？」

「ああ」

「そうか……まあ、何だ。頑張れよ」

恥かしそうに、ユウヤは頬を掻いた。

こんな事を面と向って言う事自体、彼にとっては初めてなのだ。

「フツ……貴様も精々、少佐の背中に追い付く様に精進する事だな」
それを分かっているからこそ、唯依も何事も無い様に返すのだろう。
無理な緊張をさせない様に、軽い皮肉を込めて。

「ああそれと、オレの事はユウヤで良いぜ」

「……ならば、私の事も唯依と呼ぶが良い。同じ者の背中を追う者として、な」

「じゃあな、唯依」

「さらばだ、ユウヤ」

お互い、振り返る事はしない。

ユウヤはユーコン基地へ。

唯依は少佐の下へ、ただ一直線に向っていった。

同じ男の背中を追う好敵手

「いやあく迷子になっちゃった！ありがとね、ヴィンセントくん！

」！

「まったくよお〜。」

もうちよつと基地の中覚えるよ！最後までそれじゃ、先が思いやられるぜ〜？」

「僕は一生懸命です！それよりも、君も頑張つてね！」

「ああハイハイ。精々、お前も少佐に迷惑掛けるなよ？」

最後であろうと、セレナ・エニックスは決して自分のペースを崩さなかった。

それが彼女の良い所でもあるのだろうが、ヴィンセントは呆れた様に頭を掻く。

こんなヤツでも大丈夫なのかなあ〜？と。

「じゃあね、ヴィンセントくん！！」

「おう、お前も頑張れよ。セレナ！！」

笑顔で別れる者達

皆がそれぞれの別れを交わし、滑走路へと集合する。

雲の合間から僅かに顔を覗かせた輸送機に目をやり、アラスカの大地との別れを惜しむ。

「全員揃ったか？」

俺が振り返り、後ろの面子を見渡す。

国籍はバラバラ、思想もバラバラだが、コイツ等は俺に付いて来ると言ってくれた大切な戦友達だ。俺にとっては、愛おしい家族同然の奴等なのだ。

「藤代千枝」

「此方に居ります」

「セレナ・エニックス」

「僕は此処ですよ、少佐」

「クリスカ・ビャーチエノワ」

「……此処に」

「イーニア・シエスチナ」

「うん！」

「……篁唯依」

「御前に」

1人1人の名前を噛み締める様に呼んで行く。

全員、クセの強い奴等ばかりの変則部隊。

これから先、一体どんな面倒な任務が待ち構えて居るのかは全く想像が出来ないがこの面子ならば問題無く突破して行く事が出来るだろう。

俺は、コイツ等を信じている。

「んじゃ、行くか」

「「「「「おう！！！！！」」」」」

俺達の始まりを祝う様に、アラスカの大地を一陣の風が駆け抜けた。その風はやがて、何処かで途切れてしまいかも知れない。だが、俺達は決して途切れる事の無い風になろう。

俺達が世界最速の

t o b e M u v - L u v A L T E R N A T I V E

40 (後書き)

毎回、下書きをワードでやっているんですが

通常ならば用紙10枚程度で収める所が今回は……24枚

ええ、書き終わった時には正直「長過ぎるだろ……」と思いました

ですが、折角の40です

区切りの良い話数だったので……!

だから、無茶しちゃった (ー) (ノ) 。口 () グハッ!!

これからは1話毎に確認作業に入りますので、

次のオルタ編に入るのは少しばかり遅れるかと思えます

最後となりますが、

第一部とは言え、無事に完結出来たのは感想をくれた方々や、

こんな話を読んでくれた皆様のおかげです

本当にありがとうございました

41 9月2日 ALTERNATIVE始動(前書き)

厨二チツクなタイトルが思い浮かばない……ッ!

流石に何も考えずにタイトル付け様かな?なんて、甘過ぎるでしょ

!!

馬鹿なの、私!?

そんな状態で書かれた新たな始まり

ALTERNATIVE編スタートです

剣崎

日本。

そつだ、此処は日本。

アラスカから無事帰還し、俺は日本に居る。

背中では長旅で疲れたのであるうイーニアが眠っており、俺は一生懸命そんなイーニアを起こさぬ様に背負いながら、夜の長い滑走路を歩いていた。

遠くに見える管制塔の光がやけに悲しく輝いて見える。

ああ、コレは俺の涙か……

折角日本に帰つて来たと言うのに、迎えの1つも無い事にアラスカとのギャップを感じてしまい、俺の硝子の心は粉碎したぜ。見事にバラバラだ、修正不可能だ。

「星が綺麗ですね」

「え、ええ……」

「アラスカとはまた違った星が見えるわね。やっぱり此処は日本だわ」

「イーニアを起こすなよ」

「言われるまでもねえ」

各々が現実を逃避する。

いや、クリスカはイーニアしか見えていないのだろうが俺と千枝のダメージは特に酷かった。もしかすれば、千枝はもう目の前が真っ白なのかもしれない。

アレ程、輸送機の中で今晚には到着すると連絡を入れておきながら、彼女の部下は誰一人として迎えに来ないのだ。

……辛いだろうな。

俺も、折角帰って来たのに誰の出迎えも無いって事が心に響く。

心も、身体も（主に顔）ボロボロだつっうのに……

「ただいま」

いつもならば人が賑わっているであろう筈の格納庫が、今は人が一人も居なかった。

見捨てられた。何と無くそう思った、もしかしたら裏切り者か何かと勘違いされて居るのかも知れない。自然と涙が零れ落ちる、止まる事を知らない滝のようだった。

「真っ暗だな」

「……」

「まるで俺達の心境を現す様に」

「言わないで！それを、言わないで下さい！！」

「八、八八」

乾いた笑いを漏らしながら、俺達は歩を進める。

次は……そうだな、PXにでも行こう。

まあ誰も居ない様だったら俺が何か作れば良いだけの事だ、流石の長旅で皆腹を減らしている事だろう。

真つ暗な廊下。

5人分の軍靴の音だけが響き渡り、少しばかり不気味な雰囲気醸し出していた。

とは言っても此処に居る人物達の白兵能力は高い。

並大抵の変質者程度では、指先すら触れる事が出来ないだろうが。だが、誰一人として口を開こうとしないこの場の空気は如何な物だろうか。

空気を読むのは個人の自由ではあるが、空気を読み過ぎるのも問題だと俺は思う。まあ結局何が言いたいのかと言うと、流石に誰も喋らないのは気まずいと言う事だ。

「……いつも、日本はこうなのか？」

クリスカは俺に対して抗議の視線を送って来た。

流石にそれに対しては苦笑で返す事しか出来なかったが、クリスカの言い分もご尤も。

初めて帝都を訪れた者達がこんな状況を見てしまえば、何かしらの勘違いをしてしまうのも無理は無いと言えるのかも知れない。

いつもならば賑わっているPXも、今は電源すら落ちていた。物音一つしない静かな空間。

いつもならば快適な空間だと笑いながら着席して居たかもしれないが、今の状況ではただ俺達の不安を炙るだけの状況でしか無い。

それに、如何にも変だ。匂うのだ。

決して臭いと言う訳では無いが、本来ならば嗅ぐ事の無いであろう

匂いがPXから俺の鼻を刺激する。一度千枝に目配せすると彼女もそれを感じていたのか、唯依とクリスカ、そしてセレナにも合図を送る。3人共頷き合いながらイーニアを背負っている俺を後ろに下げ、PXの入り口の両サイドを固めた。そこで千枝は1人、前へと一步を踏み出す。電源はPXに入って直ぐ右側にある。音を立てず、気配すらさせず、千枝は身を屈めながらも迅速に行動し電源の下へと移動する。流星は出来る副官、何をやらせてもパーフェクトだ。

「……3」

千枝の小声のカウントダウンが始まる。

「……2」

自然とイーニアを抱える手にも熱が入り、どんな事が置き様とも即座に対応出来る様に脚部に力を溜める。コレで次に何が起きようと、落ち着き払って行動出来る筈だ。

「……1」

僅かな物音。

PXの中で、何かが動いた。

やはり、何かがこの中に居る。もしかすれば”敵”か？

「……0!」

千枝の言葉と同タイミングでPXに明かりが灯り、唯依達は携帯して居た拳銃の銃口を中へと向ける。千枝も同じ様に、誰も動くなと

意思表示するかの如く銃口を確りと目標へ向けていた。

「……………って、お前等どうして此処に？」

まあ電源を灯したPXに敵が居れば様になっていたかも知れな
い行為だったが、中で待ち構えていたのは大量の酒やらご馳走やら
と、良く見知った顔ばかりの帝国軍関係者達。……………どうやら、要ら
ぬ心配をしてしまった様だな。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

クリスカ

帝国軍の兵士達は心から剣崎少佐と藤代中尉、篁中尉の帰還を喜ん
でいた。

我が事のように飛び回り、先程から耳障りな程に大きな声で喝采が湧
いている。

剣崎から預けられたイーニアはそんな中でも安らかな寝息を立てて
いるが、正直な話をするとな私はこの様な場所に溶け込める気がしな
かった。

周りは全て日本人なのだ。

国連とは違い、此処は国が保有する軍隊。

日本国籍では無い者など、存在しない。

それでも、少なくともこの場に居る者達は国籍など気にした様子は無かったが。

「セ、セレナ・エニックスです！宜しくお願いしましゅ！……噛んじやった」

「うっわ、少佐！またこんな子ばかり引っ掛けて来て〜！この変態！」

「男の敵だ、男の敵！そんなミイラ男みたいな面しやがって……！」

「つるせえ、俺だつて好きでこうなった訳じゃねえわ、このポケナスが……！」

「……………ブー！ブー！……………」

「………つるさい、鉄拳制裁……！」

「……………ギヤアアアアアアアツ……………！！！！！！！！……………」

………階級と言う縛りすら感じない自由な場だ。

此処に居る誰もが剣崎龍二と言う1人の男を信頼し、絶対の忠誠を誓っていた。

それは彼が強制した訳では無い。

各々が心の底から、「この人になれば命を捧げても良い」と思っているからだ。

人々から溢れ出る暖かな光。

端で座ってその光景を眺めている私ですら、自然と心が躍ってしまう程。

藤代中尉は部下達と思われる人物達と酒盛りをしていた。

その時の藤代中尉の姿は私が今までに見た事の無い程に笑顔で、酒瓶片手に部下達に説教をして居た。大方、到着したと言うのに誰も出迎えに来なかつた事に対して怒りを露にして居るのだろう。

対する篁中尉は同じ部隊の衛士と思われる人物達を談笑していた。此方も、私やブリッジスに対して浮かべる表情とはまた違う柔らかな笑顔を向け、本来のホームである日本に居ると言う安心感が顔にも滲み出ていた。

「おい、クリスカ！お前の紹介もするから、コッチに来い！！」

「私は、別に……」

「またドえらい美人……少佐、アンタって人はねえっ！！」

「リンチじゃあっ！！困めえいつ！！！！」

「だああっ、テメエ等！女の1人や2人でいちいち過剰に」

「……今の一言、テメエは俺達を怒らせた」

「タイムンでは勝てずとも、束になれば勝てるでも？その思考が無駄あつ！」

襲い掛かってくる屈強な兵士達に対して、怯む事も無く「無駄」と連呼ながら恐ろしい速さの突きを繰り返す。1度のラッシュユで2人

以上は吹き飛んでいるだろう。

既にPXの半分以上は彼等の乱闘騒ぎで戦場と化していた。

「相変わらず賑やかな奴だな」

「ッ!？」

気配も無く、私の背後から声がする。

顔に傷を残した男は、警戒心を出した私に気付くと一瞬苦笑を浮かべ、申し訳無さそうに軽く頭を下げた。

「悪かったな。別に、驚かせるつもりは無かった」

「……貴方は？」

「おっと、紹介が遅れた。俺は巖谷榮二、階級は中佐だ。一応はあそこに居るじゃじゃ馬の上司って立場になるな」

そう言いながら、巖谷中佐は乱闘騒ぎの中心へと向って行った。千切っては投げを繰り返していた少佐の手が突如として止まり、驚いた様に巖谷中佐の顔を見詰める、その顔はこの場に彼が来る事を予想していなかったからの物だろう。

「いや、まさか、こんな夜中に……お出迎え感謝します」

「馬鹿野郎、こんな大騒ぎしやがって。外までお前等の馬鹿騒ぎが聞こえるだろうさ。それに、此処の修理費は俺持ちだろう? だったら俺も混ぜろ」

「巖谷中佐参戦だ!?! 中佐、是非とも我が陣営に! この男の夢を

容易く打ち破る外道に制裁を与えて下さい！」

「アホ。そんな乱闘騒ぎで明日の仕事に支障が出ちゃったら笑えねえだろ？男なら、黙って飲み比べだ」

「「「「オオオオオツ！ダンディズム、ダンディズム！！」」」」

飲み比べでも、十分明日の作業に支障を来たす事にはなると思うのだが。

私はそんな事を考えながらも、膝の上で眠るイーニアの髪をそつと撫でた。

剣崎

先程までは周りに居た兵士達は全て飲み疲れたのだろう、夢の世界へと旅立っていた。

それは彼等だけに言える事では無い。

酒瓶片手に眠る千枝、行儀良く椅子に座りながら眠る唯依、何故かは知らんが倒れ伏した兵士達が連なった山の上で眠るセレナ、イーニアと共に既に夢の世界へと旅立ったのであろうクリスカ。俺と巖谷中佐を残してPXに居る者達は意識を手放していた。

そして、俺の前に座るのは難しい顔をした巖谷中佐。

唯依からは俺の事を『問題無し』と聞いていたのかも知れんが、や

やはり自分の耳と俺の口から事の真相を聞かなければ納得出来ないの
だろう。

それでも酒瓶を煽りながら話しをするのは、彼なりの優しさと解釈
しても問題は無い筈だ。俺が何をしていようが、やはり彼は俺の事
を信じてくれる。それに胸が熱くなり、ただ黙って巖谷中佐に頭を
下げた。

「お前が……横浜と繋がっていた事は分かっている。

俺は、お前を信じたい。だが……だがなあ、『そうですか』と言っ
て全て丸く収まった訳じゃ無いのは分かっているだろう？」

「ええ」

「話してくれないか？横浜には何がある」

「すみません……内容は機密です。そう言う契約ですから」

そうか、とだけ呟いて巖谷さんは酒瓶を一気に飲み干す。

酔いが回って来て居るのだろう、敵つい顔は少しばかりの赤みを帯
びていた。

「巖谷さん、俺はね……俺は今までに自分の信念を曲げた事はあり
ませんよ」

酔っていたとしても、覚えていなかったとしても。

それでも、俺はこの人を裏切る事は出来ない。この人だけは裏切り
たくない。

だから、自分の本音を吐露出来るのだ。

この人だからこそ、俺は本音を言う事が出来るのだ。

「俺は殿下に忠義を誓った。その誓いだけは、何があっても破りません」

「……」

「俺が仕えているのは国でも無ければ、香月夕呼でも無い。俺が帝国に入り、生まれて始めて手綱を渡す事を許した相手は悠陽だけだ」

「殿下を呼び捨て、か。お前らしいな……」

巖谷さんは新しい酒瓶に手を出し、俺の前のグラスに並々と酒を注ぐ。

付き合え、と言う事なのだろう。

「何に乾杯しますか？」

「……日本の未来、なんて如何だ？」

「良いですね。じゃあ、”日本の未来に”」

「”日本の未来に”」

お互いのグラスが音を立て、そして中身を一気に飲み干す。

どうやら 俺自身も明日は二日酔いになる事は間違いないだろう。

因みに翌日の早朝まで、俺達は誰一人として目を覚ます事は無かった。

片付ける事も無く、ズタボロのPXを見た料理長は目を回したとか

何とか……
まあ俺には関係無いか。

誰も知る事など無い
これから先に起こる数々の出会いと別れ、決別すべき因縁の過去に
だが彼等ならば乗り越えて行く事が出来るかも知れない
命を預ける事に何の躊躇いすら感じない、頼もしき彼等ならば或い
は……

この長き地獄に、僅かな光を灯す事が出来るのかも知れない

今日の日付は9月2日。

この世を救う鍵となる彼が来るまでは　まだ幾分か猶予が残って
いる

風は既に吹き始めた

風と共にどの種子が飛んで行き、

どんな大地でどんな芽を出すのかは未だに誰にも分からない

未来は、決まっては居ないのだから

41 9月2日 ALTERNATIVE始動(後書き)

TEメンバーを織り交ぜた、新たなオルタネイティブ

次回には斯衛との接触やら何やら、面倒な出来事が起こる予定
もしかすれば、殿下との？

そんな短い次回予告

42 9月3日 龍の子と酒吞童子(前書き)

オルタ編からはタイトルを付けていこう！
そう考えています

42 9月3日 龍の子と酒呑童子

劍崎

さてはて、未だに二日酔いの頭痛が酷い俺は何処に居るかと言うと何人かの屈強な衛士に支えられながらも先の見えないクソ長い廊下をヒタヒタと歩いている途中だ。

場所は帝国軍の総本山である殿下のお膝元、帝都である。

普通に考えればこんな二日酔い野郎が斯衛の大将、そして殿下の前に立つなど有り得ない事なのだが殿下直々の命だったらしく無理矢理叩き起こされて今の形になったと言う訳である。

「ああ……すまん、そつと運んでくれ……うえっぷ」

俺を支えてくれる衛士達はそんな俺の姿に顔を顰めるが、まあ殿下の客人と言う事で咎める事も出来ないのだろう。難儀な生活を送っているな、同情するぜ。

暫く歩いていくと、巨大な扉の前へと連れ出された。

此処からは一般の衛士が立ち入るなど言語道断の場所だ。

俺を運んでくれた衛士達も、敬礼をすると駆け足する様に立ち去っていく。

つまり、一人で入って来いと言う事だろう。

一応は日本で最も偉い人の前に入るしか無いのだ。少しばかり身嗜みにも気を使うとしようか。国連の制服は乱れていないな？シワも無いし、シミも無い。

まあこんな包帯だらけの顔で謁見すると言う事そのものが無礼な気

もするがね。

「失礼します、第壹技術廠所属剣崎龍二少佐であります」

扉を開いた先に控える数十人の屈強な兵士達。

殿下の傍に付く事を許された選り抜かれた真の精兵。ある意味で、この日本で最も優れた衛士達の集まりと考えても差し支え無いだろう。

所謂、斯衛のトップ集団だ。

俺の入室と共に俺に鋭い視線を向ける奴も居るが、そんな奴等にはそれなりの敵意を向け返す。もしも何かしようものなら殺す、瞳だけがそう語っていた。

「剣崎よ、そう敵意ばかり剥き出しにするものではない」

「紅蓮中将」

そんな俺の事は御見通しだとばかりに、前方から大男が此方へ近付いて来た。

この人は紅蓮醒三郎中将。

殿下の側近を務めているオッサンだ。

何だか良く分からん格闘技やら暑苦しい性格のお蔭で俺としては関わると面倒臭い人の部類に入っている。とは言っても、悪い人では無いのは確かなのだが。

「二日酔いに殿下の前でのその無礼か。相変わらず、礼儀を知らぬ小童よな」

「そう言う人間ですよ、俺は。母に似ているでしょう?」

「……まあ、アレも確かに、階級も何も関係無く暴れまわる女だったからな……」

母の名を出された途端に表情を暗くする紅蓮中将。

昔は紅蓮中将と俺の母は盟友と言える程に仲が良かったと聞いているが、まあ如何せん偉ぶる奴を嫌う母の事だ。紅蓮中将の誰に対しても平等に接する姿勢を好いたと言う事だろう。帝国の中でも、紅蓮中将の名前を出してしまえば大抵の面倒事を回避出来ると言う小さくも大きなオマケが付いて来る。

……母の事だ、メインはきつとオマケだろうな。

「此処に俺が呼ばれたのは世間話をする為ですか？それともまた斯衛として殿下の為に働けと言う命令ですか？どちらにしろ、俺はあまりこの場は好きじゃ無い」

「貴様あつ！！口を慎め、殿下の御前であるぞ！！」

「黙れえいつ！！！貴様の出る幕では無い！！」

「し、しかし……っ！！」

「この男はそれを殿下に許された男だ！儂等の関与すべき所では無い！！」

殿下に忠実な奴等だからこそ、殿下の名前を出すと急に黙りやがる。忠実なのは結構だが、そんなガチガチの首輪を付けられても自由に對して何の羨望も抱かないのだろうか？きつと生まれた時からこの運命を叩き込まれた様な奴は、自由と言う言葉よりも誰かに縛られる生き方を選ぶのだろう。

おお怖い。

羽を雀り取られたトンボは蟻の餌になるだけだと言うのに。

「月詠の者達とは会ったのか？」

「いえ、まだ。ですが彼女等も多忙でしょうに」

「わっはっは！例えそうだったとしても、御主に会う為の時間程度幾らでも割いてくれるだろうに。要らぬ気を使うな、剣崎よ」

笑いながら豪快なスウィングと共に俺の背中を叩く紅蓮中将。

正直、滅茶苦茶痛い。

背中への衝撃が内臓を伝わり、腹から抜けて行く感じだ。

つまり痛みが身体を貫通していると言う事だ、痛くない訳が無い。

叩かれる度に一瞬だが息が止まっている事に気付いていないのか、このオッサンは。

「ふう……さて、積もる話もあるだろうが今は奥へ進めい。

この続きは後で僕の屋敷でやる事としよう。わっはっは、今宵は宴だな」

「お気遣い痛み入ります、紅蓮中将（二日連続で宴会か……）」

まあそんな俺の悲しい結末を見据えながら、

謁見の間の奥に据えてある小さな扉を潜る。此処から先にも少しばかり長い廊下が伸びており、その先には殿下の 煌武院悠陽の私室が控えている訳だ。

藤代

「あれ？少佐、今日見かけませんね」

セレナが首を傾げながら私の隣に座る。

今は昼時のP X、既に席に付いていたクリスカは関心を示しはしなかったが、イーニアは寂しそうに食事に手を付けていた。

クリスカだけでは物足りないとは、随分と贅沢なお子様だ。

まあ子供だからこそ、彼に甘えたいのかもしれないな。そう考えると可愛いものだ。

「ええ、彼は殿下に会いに行ったから」

「殿下？殿下って言うとは……ええっと……」

「ソ連で言うと大統領、かしらね」

「うわっ……やっぱり少佐って凄い人ですね」

感心した様に焼き魚の骨を取り除くセレナ。

何と無く不振に思ったのだが、何故こうも彼女は着使いが上手いのだろうか？

クリスカとイーニアは悪戦苦闘して居たので、あまりスプーンやフォークでも食べられる様な料理を頼んでいると言うのに、セレナは苦も無く箸を使ってヒョイヒョイと骨を取り除いていく。日本人被れ、と言う奴なのだろうか？

そんな事を考えていると「僕って手先器用ですから」なんて私の心を読んだ様にニコリと笑いながら焼き魚の白身を口に入れる。ん〜等と唸りながら、美味しそうに焼き魚を食べ進めていった。

「凄いつて言うか……少佐と殿下は昔からの知り合いだから」

「うわ、意味深な発言ですね。もしかして生き別れの兄弟、なんて？」

「まさか。私もあまり詳しくは知らないけど、何でも幼い頃の殿下の遊び相手をしていたそうよ。幼い頃から英才教育ばかりだった殿下が屋敷を抜け出した時に偶然ハンガーへ行っちゃったらしくて、端っこの箱の中に隠れていた殿下を見つけたのが少佐らしいの。それから、殿下が抜け出す度に隠れて遊び相手をしているのが少佐だったらしいわ」

へえ〜、と感心した様にセレナは頷いていた。

がしかし、如何にもイーニアは不機嫌な様だ。先ほどから頬を膨らませ、殿下と言う単語が出て来る度に徐々にだが頬の膨らみも大きくなって行く。

詰まる所、少佐を取られてしまったと勘違いしてしまったのだろう。思わず苦笑を漏らしながらも、私はイーニアに静かに語りかけた。

「少佐なら大丈夫よ。直ぐに帰って来るわ」

「……ほんと？」

「絶対、と言えない事が残念だけど。でも良く言っているわよ？」イーニアは俺の宝物だ』って。そんな彼がイーニアを放って置く訳が無いじゃない？きつと直ぐに帰って来てくれるわ」

「いつしよに、あそんでくれる？」

「ううーん、仕事さえ終われば」

「じゃあ、待つね」

天使の様な微笑を浮かべるイーニア。

その笑顔を見て、僅かな罪悪感が募る。

……少佐は、今日中に帰って来るだろうか？いや、明日の朝には居るだろうが今晚は向こうでの付き合いを尊重して帰って来られないかも知れない。

いやはや、随分と難儀な男だ。

『そこは危ないよ』

『え……？』

『それに、此処はハンガーだ。君みたいな子が入って来ちゃダメな訳だが……』

『わ、わたし……』

『……兎に角、箱から出て貰えるかな？』

『は、はい、すみません！』

『……子供なのに畏まった子だなあ。もうちょっと楽にして良いのに……あ、そうだ。』

名前は何て言うの？俺の名前は龍一、剣崎龍二。君は？』

『わ、わたしは……わたしは、煌武院……悠陽、です』

小さな頃から、龍二は変わらなかった。

何年経過しようとして、どれだけ辛い思いを味わったとしても、彼は決して挫けなかった。

私はそんな彼を兄と呼び、慕っていた。

小さい頃の龍二は、子供達の間では憧れの様な存在だった。

誰よりも喧嘩が強く、だが暴力を振るう事を誰よりも嫌う。

誰かが泣いていればその涙を止める為に死力を尽くし、

誰かが喧嘩をしていればその場を和ませようと必死に冗談を言い続け、

そして”どんな生まれの子供達”にも差別だけはしなかった。

「失礼します、殿下」

まず目に飛び込むのは真っ白な包帯。

アラスカへと任務へ向った際、BETAと戦闘し怪我を負ったと聞いていたのでその怪我が大事に至っていない事に僅かながらの安堵を感じる。

女性から見れば大柄な体躯がキツチリとした姿勢で礼の姿勢を保ち、

顔を見せる事も無く静かに私へと頭を垂れていた。

「此度の召集、そなたには無理をさせます」

「いえ。私は殿下に忠誠を誓った身です、お気になさらずに」

「此処には盗み聞きをするような輩も、貴方を咎める者も居ません。昔の様に話しては下さいますか、”龍二お兄様”」

「……悠陽は相変わらず強引だ。尻に敷かれる事になる男も困るだろっ」

「まあ。愛する殿方に対しては誠心誠意尽くすつもりですわ」

お互いに笑い声を上げ、龍二は下げていた顔を私へと向けた。包帯に隠れては居るが、あの力強くも凜々しき瞳は今でも爛々と輝いている。

寧ろ、傷付いたからこそ更に一層と強く光っている様にも感じられた。

「アラスカでの戦闘、過酷であったと聞き及んでおります。

大変な任を全うした事、誇りに思います。貴方の友として、そして国の長として」

「感謝の極みです、我が主」

「ですが……国連の横浜基地へと移転すると聞き及んでいます。龍二お兄様と出会える機会も、コレが最後となってしまうかも知れないと思うと少し寂しいです」

「悠陽、良く俺が言っているだろう？ 出会いたいと思えば出会えるのでは無い。」

「出会いたいのであれば」

「その要因を己の手で作る、ですね」

「その通り」

ニヤリと笑い、龍二は姿勢を崩す。

どうやら漸く緊張を解いてくれたらしい、コレで積もる話も出来ると言つもの。

日本から外へなど飛び出した事の無い私にとっての未知なる話だ。

きつと、色々な脚色を付けながらも面白おかしく彼は語ってくれる事だろう。

昔から変わらない、彼の膝の上は私の特等席。

最初こそ着物ばかりで動き辛かったが、ぎこちない動きをする私にそつと手を差し伸べ、ゆっくりと自身の膝の上へと誘導する。

「さて、と。」

どんな話をすれば良いかな……そうだ、アラスカで出来た新しい友人の話でもしよう」

「友人？ 龍二お兄様は国外にもお友達を作られたのですか？」

「ああ、良い奴等ばかりだったからね。 ああ〜1人ばかり、気に入らない奴も居たが」

「まあ」

「それじゃ、そうだな……まずは」

楽しそうに語り始める龍二、
そしてその話に聞き惚れる征夷大將軍である煌武院悠陽。
端から見れば、この2人は何処か仲の良い兄弟の様に見えなくも無いのかも知れない。

劍崎

紅蓮中將の武家屋敷。

何度も立ち入った事があるとはいえ、やはりその大きさは圧巻の一言。

何もかもが大きいのだ。

扉も、障子も、部屋も、襖も、至る所が大きい。

侍女の方に案内されるがまま廊下を歩いていると「皆様がお待ちです」と言つて、1つの部屋を指した。何故かは知らないが、紅蓮中將は襖から中を覗いている。

……そして、此処まで香る酒の匂い。

何かが吹き飛ばされる轟音。

先程までは和やかな空気だが、これから先には一切そんな物は無い。

そう告げている様な気がした。

取り敢えず、紅蓮中將の背中越しから中を覗き見。

そこにあつた物は地獄絵図の様な光景と、倒れ伏す数々の猛者達、そしてその猛者達の死体で出来上がった山の上に聳え立つ、2人の

人影。

「紅蓮中将、コレは……彼女達、飲みましたか？」

「うむ。盛大に」

「……何故そこまで」

「その方が”面白そうだった”からな」

茶目つ気たつぷりに呟くのは我等が紅蓮醒三郎、名称はオッサン。地獄絵図を俺と共に今からその身に体感するであろう哀れな男の名。

「では、俺はどちらを？」

「貴様は真那を。儂が真耶を」

「アイサー」

2日連続の乱闘騒ぎとは、俺はとことん運が悪い。

アラスカでも体感したが生粋のトラブルメーカーである事に変わりはない様だ。

襖を蹴り飛ばし、中で男共の上にて楽しそうに酒を飲み漁る悪鬼2人。

月詠真那。

月詠真耶。

今の2人からは、元々持ち合わせているだろう理知的な輝きは感じられない。

あるのは暴力的な殺意の波動と、酒の凶悪性のみ。

酒吞童子、と言う名前が頭に浮かぶ。

日本三大妖怪の1匹であり、最強の鬼でもある。

今の2人はその名が似合いそうな気がする。

いや……寧ろ、酒乱童子か？

結局は詰まる所

「んあ？だあれえだあ〜？」

「よう、真那ちゃん。まだまだ二日酔いだから優しくしてくれよ？」

分かり易く言っちゃえば、

この2人を制圧（性的な意味じゃねえぞ）しない限り、俺に後光は
差さないって事が。

おお怖い。

サッサと終わらせるかね。

42 9月3日 龍の子と酒吞童子(後書き)

……ゴホンッ

ギャグじゃないですよ、シリアスですよ(棒読み

43 9月4日 I'll be back (前書き)

イーニアアアアアアアツ!!

イーニアアアアアアアアアアアツ!!

イーニアアアアアアアアアアアアアアアツ!!

……ふう

篁

昼食を食べ終わった私は叔父様の執務室へと向っていた理由は国連軍横浜基地への転属希望。自分勝手な事だとは分かっている。だが、この機会を逃す訳にはいかないのだ。

いつもならば、此処までのプレッシャーも感じずに入る事が出来る扉。

コレを開ける事に自分は何処か恐怖し、そして怯えている。だが、此処まで来てしまえばもう退けない事も事実。

剣崎少佐と共に国連軍横浜基地へと転属する。

自分の口から、ハッキリと告げなければならぬのだ。

とは言っても藤代中尉が事情の説明をする者として同行してくれたのは正直に有り難い話である。私1人ならば、言葉に詰まっていた事だろう。

「準備は良い？」

「……はい」

「それじゃ、少し質問を変えるわね。」

” 覚悟はある？”

彼と共に戦い、彼の背中を守り、任務の為に全てを捧げ、任務の為に命を棄てる覚悟」

「 当然です」

その問いの答えに、藤代中尉は満足そうに笑った。

過酷な戦いの中を生き抜く少佐を傍で見守って来た彼女だからこそ、彼の背を追うと言う修羅の道へと進む覚悟があるのか。それを確認したかったのかも知れない。

ふと、中尉が何かを呟いた気がした。

貴方なら、もしかすれば

小さな独白から紡がれた言葉はそれだけだったが、その言葉には色々な物が含まれている様に感じる。言葉では表せない程の、色々が

「 巖谷中佐に今回のX F J計画の成果と、貴方の件。話しましょうか」

「 はい。あの、今回は有難う御座います」

「 気にしないで。私達も優秀な部下は大歓迎だから」

それじゃ行きましょう、と藤代中尉は先に扉を潜る。

軽やかな仕草の中にすら美を感じさせる彼女は生きた芸術なのでは無いだろうか？

そんな無関係な事を思いながら、私は藤代中尉の後を追う。

「 失礼します」

重厚な扉が開く。

中では既に待機していた藤代中尉が此方を見据えている。そしてその奥。

待っていた、と言わんばかりの笑顔で巖谷中佐が椅子へ腰掛けていた。

「よう、随分と面白い話が聞けそうだな？楽しみに待たせて貰ったぜ」

「まあ彼女の話を知りたいと言う事は分かりますが、まずはXFJ計画と不知火改修計画の詳細の方は書類でお渡ししたいと思います。式型ロールアウトの事は既に？」

「ああ、随分と波乱万丈な計画だったと聞いている」

「アレ程までに非常識な軍人と出資者が居るとは大きな誤算でした。その後始末で改修計画の方にも少なからずの遅れが生じましたが、まあ十分に許容範囲内でしたので」

纏め上げた何枚かの書類を巖谷中佐へと私、藤代中尉は身を退いた。どうやら私の知らない間に藤代中尉はXFJ計画の経過や問題点など、事細かく纏め上げて書類に整理していた様だ。まさか機体の整備や開発に関わりながら、事務作業も当然の様にこなしてしまうとは正直、驚愕だ。

流石は技術廠1の天才と言われるだけの事はある。管制、情報整理、事務、整備、そして開発計画と肉体面・頭脳面の両方が優れている等と並大抵の人間から見れば化物の様なスペックだろう。

「F?型……そうか、遂に此处まで……奴の身体は良いのか？」

「バイタル、メンタル共に正常。何の問題もありません」

「そうか……龍二には、あともう一踏ん張りして貰わなきゃならんな」

「本人は了承しています。『それが衛士の務めならば』と」

「……お前さんにも、龍二にも苦勞を掛けるな」

「少佐の副官となる時から、覚悟はしていましたから」

あまり知られていない少佐と中尉の過去。

英雄と天才がタッグを組んだ過去の偉業を、私は未だに聞いた事が無い。

何れは話してくれるだろう。

その日までは楽しみに待つ事になるだろうが、それもそれで楽しみの1つだ。

「次は、いよいよ本番だな」

「ええ、前哨戦は此処までの様です」

思考を止めて、2人を見る。

まるで今から起こるのであるう出来事を心の底から楽しむ様に浮かべられた愉悦の表情。サポートすると言った筈の藤代中尉までも、この次に起こるであろう出来事に対して辛抱溜まらんと言った具合に頬を緩ませていた。

「あ、あの……藤代中尉……?」

「気にしなくて良いわ。話を進めて頂戴」

ニコリ、と能面の様に貼り付けられた表情を此方に向けられた事で改めて理解する。

彼女は私を助ける為に此処へ来たのでは無い。

あくまでも、楽しむ為に此処へ来たのだ。

漸く理解した。

藤代千枝は、私の敵だったのだ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

剣崎

世界が自分を中心に回っていると勘違いしている馬鹿が居る。

いや、そう言うタイプの人間の性質は馬鹿と言うよりも単純な思考回路をしていると言って良いのだろう。まああまり専門的な事には詳しくは無いが、自己中心的な性格をしている人物などは此処に当たるのでは無いだろうか？

例え？

そうだな、例えば酒で酔っ払った暴君などどうだろうか？

彼等に理性など存在しない。
あるのは、気に入らない相手を叩き潰すという野生的な本能だけなのだ。

「ふべえぶつ!？」

「おらおらあつ、酒が足りねえぞお〜」

叩き付けられた一升瓶。

まるで会社の上司に自分を売る様にへこへこと頭を下げながら、俺は真那に一所懸命に酒を注いでいた。いつもならば逆の立場だろうに、今回は何の冗談なのか悪夢なのか俺が晩酌する立場となつてしまつた様だ。

何故、こうなつてしまつたのか。

それは時を数刻遡る事になる。

暴走した真那を止める為に足を踏み入れた瞬間、フニツと柔らかな感触が顔を埋め尽くした。いやアレは今思い出しても素晴らしい感触だ。

惜しむのはこの腕で触れなかつた事だろうな!

うむ、間違つ筈が無い。

アレは正真正銘の真那の胸の感触だつたのだ。

ん?その後はどうなつたつて?

アレだ。

「りゅ・う・じ〜」

なんて飛びついて来た真那に困惑した俺は一瞬で投げ飛ばされた。まあ強烈な投げ技だつたな。

お蔭で今の今まで気を失つて居た訳だ。

紅蓮中将?

知らねえよ、そこ等辺の死体でも漁れば出て来るだろ。

「ん……」

お膝の上でお眠りになられる真耶様。

此方は先程まで紅蓮中将と壮絶な死闘を繰り広げていたのだろう。衣服が、何処に目をやって良いのか迷う程にボロボロだった。

ほっそりと伸びる美しい太股から、スラリとした脇腹、そしておっと、コレ以上は流石に不味いな。

ただ”綺麗な形をしていても良かった”とだけ伝えておこう。

「おしゃけ!」

「はいはい、付き合いますよ」

「つげえい!」

「はいはい」

「のめ!」

「よっ……うめ、頭痛え」

「ねろ!」

「……お言葉に甘えて」

「おきろおっ!ひとりはずびしいの!」

「はいはい、ゴメンね。1人は寂しいよね」

「そつだぞ、ばか！ひとりは、さびしい！」

口調すら幼児退化し始めた真那の相手は疲れる。
真耶はサツサと眠ってしまったので楽だったが、こりゃ今晚は無事に帰れそうも無いな。……すまない、イーニア。だがコレだけは君に伝えておかなければならない。

「りゅっじー！」

「あ？」

「ぬげ！！」

「だが断る」

イーニア、俺は心から君を愛しているぜ。

こんな酒乱童子と共に居るからこそ、イーニアの天使の様な微笑の有り難さが分かる。

アレは俺にとつての唯一無二の和み。

この世界で最も安らぐ 究極の1《アルティメットワン》

「うるしゃい、いいからぬげ！！」

「だが断る。」

この剣崎龍二が最も好きなことのひとつは自分で強いと思っているヤツに「NO」と言ってる事だ……」

だからこそ、俺の純情は誰にもあげない。渡さない。

イーニアを抱き締める為、

イーニアを笑顔にする為、

俺は此処で負ける訳にはいかない。

イーニア、イーニア、イーニア、イーニア……ッ！！！！

「だったら しね」

まあこんな信念を持っていようが、負ける時はアツサリ負けるのだがね？

既に視認する事すら困難な勢いで迫る真那の振り上げる一升瓶が、俺の眼前へと迫っていた。フェードアウトする視界、シャットダウンする思考。

つまり俺は気絶しようとしている訳か。

人は過ちを繰り返す。

幾度と無く、過ちを繰り返し学習していく。

それは俺自身にも言える事である。

過ちを犯したからこそ学習し、そして二度と同じ過ちを繰り返さぬ様に心へ刻む。

そう、二度と”同じ”過ちだけは犯さぬ様に。

「ッ……」

頭からでも被ったのだろう、顔に巻かれた包帯からは酒の香りがした。

それに頭痛が酷い、オマケに吐き気まだしやる。

昨日、何が起こったのかは全く覚えていなかったがそれでも此処が

地獄と同等の場所だったであろう事は理解しているつもりだ。
何故、だと？

周りに居る酔い潰れた男共の死体は一切片付けられていない。
隣から聞こえる寝息。

一升瓶を枕代わりに、真那は夢の世界へと旅立っていた。
何故だろうか、この顔を見ると頭が痛い。

「……起きよう」

ムクリと上半身を起こし、膝の上で未だに眠る真耶を起こさない様に退かす。

その場から立つただけでギリリと鳴ってしまう床を、真那・真耶の2人がたった一夜で完成させたのだと考えると少しばかり胸が熱くなった。

未だに美しい外観を残す紅蓮中将の武家屋敷の一室を、此処まで見事に破壊するとは誰が考えるだろうか？否、誰も考えなど付く筈が無い。

未だに日は浅いと言うのに、侍女の人々は忙しなく働いている。
昨日の片付けをするのかも知れない。

申し訳ない気持ち一杯になるが、俺は帰らなければならないのだ。
廊下で擦れ違ふ何人かの侍女の人々に頭を下げながら、俺はただ外を指す。

大きな武家屋敷の外。
広がる雑木林をただひたすらに歩く。

帰らなければならぬ。

俺は帰る、帰りたい、帰らせて下さい。

一緒に居ると言ったのだ。一緒に居ると約束したのだ。俺は誓ったのだ。

俺はイーニアと約束した。
だから帰らなければならぬ。

俺は……

「りゅうじ？」

林の中に、小さな光を見つけた。

それは地獄から出て来た俺にとっては眩い程の輝きを秘めた宝石の様に美しく、純粹で、光に満ち溢れている。

俺が欲していた物。

俺が求めていた物。

「イー、ニア……？」

「おはよう、りゅうじ」

涙が溢れていた。

何故彼女が此処に居るのか、とかそんな些細な事は如何でも良く思える。

ただ此処に彼女が居て、俺に笑い掛けてくれるだけでも嬉しくなるのだ。

「イーニア……イーニア、か……ああそうだな……おはよう」

「ひとりだった。よるも、あさも」

「……ごめんな」

「だから、むかえにきたの」

「迎えに？」

「かえろ、りゅうじ。」

きのうはいつしよじゃなかったから、きょうはいつしよ

純粹な笑顔を向け、彼女は俺に手を差し伸べる。

そんな彼女の笑顔に心が温かくなった。

彼女から向けられる純粹な好意。

それが嬉しくて、切なくて、また涙が溢れ出る。

「りゅうじ、さびしいの？」

「違うよ。嬉しいの」

俺の涙に触れたイーニアを抱かかえ、長い帰路に付く事にしよう。

帰るまでは少しばかり時間が掛かるが、何ほんの2時間程だ。

昨日は一緒に居られなかったイーニアの為に、こんなボロボロの身体に鞭を打つのも悪い気分じゃない。

「ありがとう、イーニア」

「うん！」

無事に帰れた時は……そうだな。まずは熱い味噌汁でも飲む事にしよう。

「ところでイーニア、此処までどうやって……？」

「？ あるいてきたよ」

帰りは俺が負ぶって行くよ。

是非そうさせてくれ、是非とも俺に負ぶらせてくれ。

頼むからコレ以上、俺の胸に罪悪感を打ち込まないでくれ。

43 9月4日 I'll be back (後書き)

50じゃありませんでした
全50話でしたorz

50話

いつの間にかこんな数に届いていました
自分1人では、きつと途中で投げ出していたかも知れませ
人の支えって本当に力になるんだな
そう感じる50

44 9月5日 料理する軍人(Army cook) (前書き)

龍二、爆発(主にキャラ的な意味で

今回のお話で出て来る龍二は正常です

決して何処もおかしくはありません

ですから、安心してお読み下さい

藤代

誰にでも因縁深い人間と言うヤツは存在する。

剣崎龍二ならば彼の父親だろう。

詳細は、私を知るべき内容では無い。

彼の家庭内の事情であろうならば、他者である私が首を突っ込むべき内容では無いのだ。彼自身が決着を付けるべき物事だと私は思う。篁唯依、

クリスカ・ビャーチエノワ、

イーニア・シエスチナ、

セレナ・エニックス、

それぞれにも因縁深い相手は居る事だろう。

好敵手と呼べる存在、忌々しい怨敵、それは様々な”因縁”を持った相手達。

少なからずとも、私にだって存在している。

ただそれは因縁なんて格好の良い言葉で飾るには少々不甲斐無い相手だ。

実力では無く、親の後光で申し上がった様な人間。

それを自分の実力だと思いきや、偉そうに人を見下す態度は反吐が出る。

私は”そいつ”が嫌いだ。

本当に嫌いだ。

心の底から嫌悪する。

ハッキリ言っても良いのならば、いつそ死ねば良いと思っている。だが死なない。

そいつは後衛で、私と同じ様に開発計画に携わっている屑野郎だから。

だが、今日私はそいつに会った。

篁中尉の転属希望を聞き終え、私と篁中尉は気分良く廊下を歩いていた。

巖谷中佐からの返答は即答での「YES」。

彼女は安堵したのだろう、此処へ来るまでと比べると幾分も表情が和らいでいた。

少佐も喜ぶ事だろう。

彼は篁唯依を気に入っている。

本人は自覚していないだろうが、周りから見れば直ぐに分かる程だ。まあそれを突いて遊ぶ程、私も鬼畜と言う訳でも無い。

今は黙ってこの2人の行く末を見る事にしよう、と考えていた訳である。

そんな事をしているから、私はそいつの接近に気付かなかった。

「あら？藤代さんじゃございませんこと」

「……」

「こんにちは、湯森大尉」

「ご機嫌麗しゅう、篁中尉。アラスカの次は彼女のお守り？大変ね、貴方も」

思わず、顔が歪む。

その声を聞いただけで私の中身が氷点下以下にまで低下する。気付かぬ内に舌打ちをしていたのかも知れない、「私不機嫌です」と言っただけなのに湯森は此方を見詰めていた。正直に言おう、反吐が出る。

「……こんにちは」

「挨拶をするのに随分と時間を要するのね、貴方。ふんっ、底が知れますわ」

「……また新しい開発衛士ですか」

「ええ、前回の子は使い物にならなくてサツサと転属させましたわ」

湯森は胸を張りながら、偉ぶって答える。

彼女の性格は兎も角、選ばれた開発衛士達は優秀だった筈だ。

もしかすれば戦事情を変化させかねない新たな機体の開発に携わる者なのだから当然と言えば当然の事なのだが、それを”使い物にならない”とは良く言う。

私は相棒に恵まれている、と言う事なのだろ。

剣崎龍二と言う人間は認められた相手以外には決して容赦はしない。

己の誇りを傷付けられようものならば、それが例え上官であれ、政治家であれ、その鋭き闘志は容赦する事無く牙を剥く。

そんな男に、私は認められているのだ。

誇っても良い、寧ろそれが私のアイデンティティーと言っても過言では無い。

「ですが今回の子は優秀ですわよ。」貴方の所の時代遅れ」と違ってね」

「……時代遅れ？」

「だってそうでしょう？貴方の所の開発衛士の偉業は今や昔の物。今となつては、ただの時代遅れの粗悪品ですわ。時代の波には逆らえません事よ」

私の相棒を、
私の希望を、
私の理想を、
私の全てを、この女はこの場で全て否定した。

さも当然の様に、この女は私の絶対領域にまで土足で侵入して来たのだ。
赦せない。赦したくも無い。

「なら証明して下さい」

「はい？」

「貴方の言う優秀な開発衛士と少佐。どちらが優れているのか、証明して」

この女、必ず泣かす。

私が久しぶりに”プツン”した瞬間だった。

劍崎

「ただいま」

実を言うと、クリス力達は今の所は千枝の家で世話になっている。

国連に転属すると言うのにわざわざ部屋を用意させるのも面倒だろうと思い、千枝から俺の家へとクリス力、イーニア、そしてセレナを宿泊させる事になったのだが

劍崎家は、侍女が煩いだろう。

俺が女を連れ込む事などまず、無いからこそ何を言い出すか分からないのだ。

そんな面倒事をスルー出来るスキルなど俺は持ち合わせていない。と言う事で、妥当な千枝の家へとクリス力達を預ける事になったのだ。

両親が死んでから千枝は1人暮らしだったらしく、余った部屋があるのでそこで良ければ構わないと言う事だったので、有り難く使わせて貰っているのだ。

ついでに言うと、俺も千枝の家に居る。

家には帰りたくないのだ。

もしもクソ親父に会ったとしたら、俺は殺意を抑えられる気がしないからだ。

紅蓮中将の巨大な屋敷と比べれば小さいが、それでも10人程は住まう事が出来るのである。う大きな屋敷の扉を開け、聞こえると思われる程度の音量で帰宅を告げる。

しかし返答する者は居らず、ただ静かに時が過ぎるだけであった。

「みんな、どこかな？」

「……取り敢えず、冷蔵庫でも漁って朝飯作るか。イーニア、手伝ってくれ」

「うん！」

イーニアを台所へ移動させ、俺は一時的に自室となった部屋から自分サイズのエプロンを持って来てソレを装備する。何故エプロンがあるか、だと？……察しろ。

台所ではイーニアが言われた通りに俺が来るまで待機していた。

その頭を撫でてやると、嬉しそうに顔を綻ばせる。相変わらず可愛いな、チクシヨウ。

取り敢えず、料理をする為に冷蔵庫に入っていた材料を取り出していく。

味噌に葱、今では珍しい天然物の鰯。それに生姜。

やはり女の子と言う事だろう、調理器具もそれなりに充実している。その中から目的のフードプロセッサーを取り出し、下準備を済ませた鰯と生姜を入れる。

一瞬ですり潰された鰯の身は取り敢えず放置し、テキパキと次の作業へと移る。

葱を小さく刻み、大さじ1/2程の味噌を先ほどの鰯の身へと入れて混ぜてやる。

あとは先ほど刻んだ葱の半分を一口大程の大きさに切り、だし汁へ

と入れて沸騰させてやれば良い。あとは簡単だ、鰯の身をスプーンですくってだし汁の中に入れてやり、火を止める直前に大さじ1程の味噌を溶かしてやれば完成だ。

1品目は“鰯のつみれ汁”。

イーニアの口に合ってくれば良いのだが、少しだが不安が残る。

さて、では次は……そうだな、残っている鰯を使ってもう一品作る事にしよう。

手順は先ほどと同じ様に鰯をフードプロセッサーに入れ、今度はそれに生姜と青葱、しいたけを追加してすり潰す。

すり潰した鰯の身を小判型に整えてやる。

「イーニア、大丈夫か？」

「うん、へいきだよ」

「こうやって真ん中を軽く押して、少しだけ窪みを作ってくれ」

「うん。りゅうじは、りょうりじょうずだね」

「まあ家庭的な料理だったら、何とか作れるかな」

「クリスカにもおしえてあげて」

「それは良いけど……どうして？」

「クリスカ、りょうりできないから」

「ああ……」

あの冷酷完璧魔人にもやはりと言うか、出来ない事はあったと言う事か。

その方が可愛らしいとは思うが、それを本人の前で言えば何をされるか……

おお恐ろしい。きっと想像も出来ない様な罵声が飛んで来る事だろう。

おっと、脱線したか。

小判型に整えた鰯の身を熱したフライパンで軽く焦げ目が付く程度に焼く。

その間の僅かな時間で青ジソを千切りに、プチトマトを4等分する。本当ならば大根おろしがあると良いのだが、残念ながら大根が無かったので今回はキャベツを軽く洗い、更に緑の彩りを加えて置く。最後に焼き終えた鰯の身を皿へ盛り、青ジソとプチトマトで飾り付ければ完成だ。

2品目は”鰯ハンバーグ”。

主食になる飯は既に炊いてあったので、少しばかり豪華な朝飯となってしまうがまあ良いだろう。両方とも冷たくなるうが、また温めれば良いだけの事だ。

イーニアと共に作った料理をテーブルへと運んでいると、何やら居間が騒がしい。

千枝が帰って来たのか？

「ん、良い匂いがする」

「……朝からガチャガチャと、喧しい奴だな」

君たち、今の今まで寝ていたのかね？

セレナは本能的に料理の匂いを嗅ぎ付け、飯に有り付く為に起きてきたのだろう。

セレナ・エニックス、恐ろしい子である。

それに対してクリスカは俺達の調理する音で起きた、と言う事だろうか？

しかし”喧しい”とは……いつまで立っても棘だらけの奴だ。

「千枝はどうした？」

「藤代中尉ですか？藤代中尉なら朝早くから篁中尉と基地に向かいましたけど……」

それよりも少佐、それ朝ごはんですか！？僕お腹ぺこぺこです、是非とも僕にも！」

「台所にお前達の間もあるから、それを食べ。落とすなよ？」

「やった！」

「クリスカ、おいしいからたべよ？」

「でも、私は……」

「だめ？」

「……あんまり沢山は食べられないけど、少しだけなら」

嬉しそうに飛び跳ねて台所へ向うセレナ。

その後を追う様に、イーニアに手を引かれながらクリスカも台所へ

と入っていった。

しかし、1つだけ言いたい事があるのだがね。
君たちの寝巻き。

その……Yシャツに下着だけと言うのは、些か問題があると思うのだが？

「うっわ、豪勢ですね〜！朝からハンバーグですか？」

「それ、鰯ハンバーグだぞ」

「鰯？でも、ハンバーグってお肉で……あ、すり身か！凄いなあ〜
！！」

「全て、貴様が作ったのか？」

「イーニアも」

「いっしょにつくったよ」

「……そうか」

「おい、セレナ！お前は青ジソも盛れ！」

「ええ〜……葉っぱは遠慮します」

「ゴチャゴチャ言わない！食べないと大きくなれないよ！！」

「それは僕に対しての挑戦状ですか！？身長ですか！胸ですか！そうですか！」

「知るか、バカ。お前の成長過程など如何でも良いわ!!」

「ムキッー!! 食べますよ、食べてやりますとも! 少佐の分もね!」

「え、ちょ、そんなに食べちゃらめえ……!!」

「食い意地が張っているぞ、エニックス」

「うるさい、クリスカ! 少しって言いながらも確り食べる君に言われたくない!」

「こ、これはイーニアも作ったと聞いたからであって」

拝啓。

神様、私は貴方の存在を信じずに今まで生きて来ました。

どれだけ祈ろうと、貴方は決して私に慈悲を与えて下さりませんでした。

だから、私は貴方を呪っていました。

殺せるのならば、殺してやりたいと思っていました。ですが今の私は違います。

今は彼女達が居ます。

俺の大切な家族となった、彼女達が居ます。

コレが貴方からの贈り物だと言うのなら、私は彼女達を命に代えても守ります。

だから少しでも貴方に感謝しています。

しかし、もしも貴方が彼女達の命を奪うつもりならば……

その時はあの世に行っても彼女達を連れ戻し、貴方を血祭りに上げる所存です。

末文ながら、ご自愛のほどお祈り申し上げます。

敬具

「大人しく着席！飯を食う時くらい、静かにしろ」

「あつ、今日の朝刊取って来ます」

「ああセレナ、朝刊だったら俺が取って来るから挨拶しろ！」

「おいしそうだね」

「うん。イーニアも頑張ったね」

「はい！それじゃ、”いただきます”！！」

「」「」いただきます」「」

さて、精々生き残る為に全力で足掻くのでしょうか。

彼女等の舌が肥えてしまえば、俺の料理でしか満足出来なくなるだろう。

満足するまで、料理を作つてやるとするか。

しかして、平穩とは長く続かない物である。

今が戦時中であるのならば尚更の事だ。噛み締めなければならない、この一瞬を。

刻み込まなければならない、この記憶を。

忘れない様に、忘れない様に。

藤代

「藤代中尉、そんなに無理をされては」

「……貴方は帰りなさい。コレはあくまで、私の我侭から起こった失態よ。」

貴方が出る幕じゃないわ、早く帰って横浜基地へ行く為の準備をしておきなさい」

「ですが……」

「良いのよ、別に。もうアイツとの因縁は年単位に及ぶし……」

湯森大尉。

何の恨みがあるのかは知らないが、何かある度に私に突っ掛かってくる厄介な女。

相棒と言える開発衛士を取り替えながら、躍起になる様に私と少佐に絡んでくるのは事は数える事がバカらしくなる程の回数に達していた。

もしかすれば、3桁に到達しているのかもしれない。

大抵は適当に受け流して終わるのだが、ある一件の時に少佐が本気で”プツン”した事があった。あの時は本当に、危なかった。もしかすれば彼女を殺していたかも知れない。

内容は至って単純。

劍崎久留巳、そして劍崎千代美を貶したのだ。彼の目の前で。きつと、湯森は調子に乗っていたのだろう。

どれだけ煽つても反論すらして来ない事に気を良くして、爆弾を放ったのだ。

その時の事は今でも忘れない。

当時、湯森の相棒を務めていた開発衛士を少佐は彼女の目の前で半殺しにした。

コレでもかと言うほど顔面を壁に叩き付け、血溜まりが出来るまで殴り続けた。

許して、許して、と耳に聞こえる言葉すら無視して。

あと一步、私が命懸けで止めなければ彼は確実にその衛士を殺して居ただろう。

そして、湯森の前を去る際に少佐が言い放った一言。

「次はお前だ」

独白の様に呟かれたそれを聞いた後、湯森は私達に突っ掛かる事は無くなった。

当然だろう。

味方である衛士から”お前も殺してやる”等と言われれば、近付きたくも無くなると言う物だ。無論、私もそうなり掛けたのだが……良く考えてみれば何ら不思議な事では無い。

彼にとつて最も信頼し、尊敬し、そして愛した家族を虚仮にされたのだ。

今は亡き家族を、目の前で虚仮にされたのだから怒らない理由など無い。

何だ、簡単では無いか。

彼は当たり前前の事をしただけだ。

そう考え付いた時は、私は既に彼に一生付いて行く事を決めていた。

しかし、時が経てば人間など簡単に恐怖を忘れる。
だからこそ湯森は私に喧嘩を売ったのだろう。
だからこそ 少佐の為にも、負けたくないのだ。
剣崎久留巳と剣崎千代美を貶したこの女に、決して背中を見せたく
など無いのだ。

「……藤代中尉」

「何？」

「私は、少佐と中尉の関係を何も知りません」

「……」

「ですが、湯森大尉が少佐を貶した時……私の中では”何かの”感情が燃え滾りました。

本来ならば上官に抱いてはいけない感情なのでしょうね、それは”怒り”です。

命を賭して旅団規模のBETA共と戦い抜いた龍二さんを時代遅れなどと ツ！

私は、あの女が許せません!!」

激昂しながらも、彼女は理性を保っていた。

静かな憤怒。

だが決して退く事は無いであろう”覚悟”。

何も、彼に対する思いをこんな場所で爆発させずとも良いだろうに
……

やれやれ、と呟きながらもコレで湯森と戦う準備は十分に整った。
機体と衛士。

本来ならば少佐が出向けば口出しすら出来ない程の圧勝で終わる筈

なのだが、流石にあの怪我でシミュレーターに乗れと言つのも酷だろう。

だが、篁唯依は己が乗ると言つ。

本来であればセレナに任せる事が妥当かも知れないが、此処まで燃え滾った闘志を見せられてはそれも気が退ける。

湯森との対決は今から2日後。

9月7日と言つ事になる。

セレナですら1週間掛かったF型の調整だが、彼女はそれを2日で十分だと豪語した。

その覚悟、期待させて貰うとしよう。

私に出来る事は彼女用にF型のデータを全て書き換える事と、奴等が負けた際にどの様に泣いて喚き散らすのか想像しておく程度だろうか？

どちらにしる 向って来るゴミを叩き潰す。

それだけの事だ。

44 9月5日 料理する軍人〜Army cook〜(後書き)

龍二、料理テクニック

唯依、地獄の訓練

の2本でお送り致します

次回も是非見て下さいね〜 ウフフ

サ〇エさん風の次回予告でした

45 9月5日(2) 戦いの才能〜Talent war〜(前書き)

唯依姫潜在能力覚醒

オリジナル要素です

剣崎龍一、立場危うし

篁

早速F型の機動に慣れる為に連れられたのは訓練用の対G装置が設置された特別な訓練施設だった。何でも、F型開発の際に急遽作らせた特別製の一室らしい。防音加工は完璧だとか。

そして、訓練。

最初に感じる、一瞬だけの浮遊感。

その後には身体を包み込むGの暴力。痛いなんて生易しい物じゃない。身体の内側を叩き潰さんと押し掛かって来る様な痛みは、何の訓練も無しに耐えられる物では無いだろう。

少佐は兎も角としても、エニックス少尉は今やこんな圧力に耐えながらもF型を自由に乗りこなしていると言っのか!?

思わず絶句してしまった。と言っても喋る事が出来る程の余裕は無いが。

『……次は、最高速度』

そんな私を画面越しに見詰め、藤代中尉は驚きを隠せないで居た。先程とは一線を化すGが身体を包み込み、やがては意識を刈り取るうとするが何とかそれを踏み止まる。少しずつ、身体がこの衝撃を

認知し始めている。

まだ耐えられる。

まだ、私は先に行く事が出来る。

しかし、こんな失態を曝している私の何処に驚く事があると言うのだろうか？

休憩と言う事で一時的に止められた対Gショック装置から降りた私は肩で息をしながらも何とか藤代中尉の元まで歩いて行く。

そんな私を見て、彼女は最早言葉にすらならないと言った具合だ。何に対してそれ程までに驚くのだろうか？

こんなズタボロの私を見て、何か楽しいのだろうか……？

「……嘘、でしょう？」

静かに紡がれた言葉。

早足で此方に歩み寄り、覚束無い足取りで歩く私に肩を貸しながら長椅子へと私を寝かせる。だんだんと、意識がハッキリとして来る。先程までは意識が朦朧として居たが、今ならばハッキリと自分の意思で言葉を紡ぐ事が出来るだろう。しかし 最高速度に到達した時は、実に気分が良かった。

その時の私は、まだ何も知らなかった。

この身体が他の衛士達と比べ、どれだけ特殊な物なのかと言う事にすら。

いや、特殊なんて生温い物では無い。

もはやコレは天が私に与えた天然の芸術品だったのかも知れない。

「生まれた時から既に、貴方の身体はGに対して凄まじい耐性があるみたい。

つまり、貴方は訓練さえすればあらゆる機体を乗りこなす才能を持っている……
言ってみれば、少佐が”直感”で優れているのならば、貴方は”才能”で優れている。
生まれ持った才能……そうね、名前を付けるとすれば先天的対G適合者って所ね」

藤代中尉は私のメンタルデータを確認しながら、そう言葉を発した。最早、今の私にコレ以上混乱する種を入れ込まないで欲しい。

生まれ持った才能？

先天的対G適合者？

そんな物、私にある筈が無いだろう。

だって、私は少佐にすら追い付く事が出来ない未熟者なのだから。

「確かに才能だけあっても、磨く事が出来なかったら何の意味も無いでしょうね。

それと、少佐と比べるのは得策じゃないわ。彼は戦闘適合者、所謂”戦いの神に愛された人類の英雄候補”だから」

今度は戦闘適合者。

ダメだ……頭が痛む。今は、少し休ませて欲しい。

2日で身体に叩き込むとは言ったが、流石に1度目で覚える訳では無いのだ。

あと少し、身体を慣らせばきつと

少佐と共に、あの大空を飛べる筈だ。

だから今は 眠らせて欲しい。

朝から色々詰め込みすぎて、眠くなってしまった。

起きたら時はまた訓練を頑張ろう。

少佐の誇りを守る為に、私が頑張らなければならないのだ。

最後に見た光景は、瞼を閉じようとする私の頬を静かに撫でる藤代中尉の姿だった。

「貴方も夢を追い掛けるの？」

何かを懐かしむ様に、悲しそうな瞳で静かに私の頬を撫でる姿は何処か、儚かった。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

825

セレナ

クリスカとイーニアは日本の文字の勉強中。

クリスカは流石、と言うしか無い速度で読み書きを習得したらしい。だからこそ、こうして今もイーニアに丁寧に1文字ずつ教えているのだろう。

こうして見ると実に可愛らしいのだが、何故いつもはアレ程までに棘ばかり剥き出しにしているのだろうか？まあその鉄壁の鎧を剥がしてしまうのが少佐なのだろうか。

何せ、彼女が”選んだ”男らしい。
詳しい意味は分からないが、やはり”何か”はあるだろう。
男女関係ですよ？当然じゃないですか。

「転属？ああそっちの状況が整い次第……え？何時でも良いって大雑把だな。」

「そうだな、もう少しだけアイツ等も休ませてやりたい、9日辺りにそっちに向う。」

「あ？余計な荷物は連れて来るな？何だよ、余計な荷物って。」

「ああハイハイ、面倒事を担ぎ込むのが得意ですからねえ、俺は。精々用心しやがれ、チクシヨウ。で、例の件だが」

「しかし、今の少佐はお取り込み中。」

「どうやら相手は僕達が転属する先の偉い人らしいのですが、如何考えても上官に向けて使う言葉遣いじゃなかった。親しい友人に使う様な、気軽な物。」

「もしかすれば転属先の基地の中には少佐の知り合いが居るのだろうか？」

「だとすれば、彼の交友関係は通常では考えられない程に豪勢だ。」

「日本のトップであろう殿下、」

「そしてその部下であろう方々、」

「更には国連の基地を1つ任される様なエリート。」

「最早不自然と思っても仕方の無い程の豪華さだった。」

「する事の無かった僕は休日を満喫して居たのだが、先程少佐が昼食のデザートにすると行って作っているカスタードプリン作りを手伝わされている。」

「18分程、蒸し器でプリンを蒸すらしいのだが加減が良く分からない。」

「どのタイミングで火を止めて良い物か、僕にはサッパリだった。」

「少佐、どれくらい経ったら火を止めれば？」

「カップを揺らして、中身がユルユルしなければ止めても構わない。どうだ？」

「ユルユルしませんよ」

「だったら火を止めて冷まして置いてくれ。後は俺が……あ？プリン作りだよ。」

「うるせえな、用件はそれだけだ！切るからな！」

プリン作りと言った時、笑われでもしたのだろうか？

少佐は不機嫌そうに受話器を切ると、此方に向って来た。

……やはり、エプロンだ。国連軍の制服の上に着用した真っ白なエプロン。

いつもと比べると違和感が凄い。

「ああ、相変わらず嫌な”女”」

「女？」

「クリスカ、どうしたの？かおがこわいよ？」

「あ、ううん、何でも無いよ」

ふむ。これは追求すべき内容と認識した。

後で篁中尉にでも流し込めば、それは楽しく面白い修羅場が見られる事だろう。

オマケに彼女も少佐を諦めてくれると気が楽ではある。

少佐は

僕のだ。

「少佐、”女”って何方ですか？」

「女って……いや、その……横浜基地の副司令だ」

「へえ、それにしても随分と親しい感じでしたね」

「そりゃ昔からの」

そこで一度、少佐が言葉に詰まる。

何やら渋い顔で考え込み、此方に「忘れる」とだけ告げてサッサと台所へと籠ってしまった。ああなってしまえば鉄壁の要塞だ、簡単に崩せる物では無い。

だが、誰が正攻法で攻めると言ったのだ？

わざわざ真正面から戦おうなど愚の骨頂、戦いは賢くなければならぬのだ。

「クリスカ、電話のログをチェック」

「了解した。イーニア、少しだけ時間を頂戴」

「う、うん」

「さて、一体何が出て来るか……基地なら良いけど、個人なら……フフッ」

この時、イーニア・シエスチナは彼女達に龍二の電話の相手の事を伝えるか如何か真剣に悩んでいた。龍二の言った”女”とは彼の友人であり、自分達を理解してくれる人物であると言う事を。告げれ

ば、きっと彼女達も納得してくれるだろう。
だが自然とイーニアはその内容を告げる気にはならなかった。
龍二が自分を放って置くと言う事態すら我慢出来なかったのだから。
彼女がこの感情を”嫉妬”と気付くまでは、少しばかりの時間を要する事になる。

剣崎

正直な話をすれば、探求された時に素直に話しても良かった。
だが、俺の理性がそれを拒否したのだ。
奴との関係を吐露してしまえば、お前にはきっと面倒な事が降り掛かるだろう、と。

結果としては吐露しない方が危険だと言う事には気付かなかつたがね？

だから今はそれよりもプリンに集中する事にしたのだ。
蒸したプリンのケースを軽く揺らし、中身が確りと固まっている事を確認するとトレイへと移し変えて冷蔵庫で冷やす。
昼食までは大よそでも3時間程の余裕があるだろう。
少し中途半端になるかも知れないが、無事に完成するとは思つ。
まあこのまま行けば帰って来ないとは思つが、千枝と唯依の分も作つてある。
さて、では今の内に洗濯を済ませてしまおう。

放って置けば溜まっていくだけであろう洗濯物はサツサと洗淨しなければ後々で困る事になるだろう。此処は俺が一肌脱いでやるべきだろう。

相変わらず、自分の良妻ぶりには惚れ惚れしてしまう。

「あれ？少佐、プリンの次は何ですか？」

「洗濯だ。お前等の洗濯物を洗濯しなきゃ、どんどん溜まっちゃうだろう」

「ああゝ洗濯」

納得した様に頷いたセレナは抱き枕代わりに抱いていた座布団に顔を埋めながら、またゴロゴロと畳を転げまわる。この女、何と言うダメ女なのだろうか。一人で生活出来るのか？それとも俺が色々世話焼いているからコレ程までにダメなのか？まあどちらにせよ、今は洗濯物だ。

「クリスマスかゝ、洗濯するってさ……」

「?? お前が洗濯をするのか？」

「まあさあかあゝ……少佐だよお」

「……それは、不味くないか？」

「え？」

「その……私達は女で、奴はおと」

「少佐あああああつ！！！！私の下着に手を掛けるなああああ
つ！！！！！！！！」

「え、ちょ、おまつ、やめ……ッ！？」

高速のフットワークから放たれる七色に輝く右の拳。

階段の半ば程から放たれたそれは俺の急所を見事に決り込み、声にならない絶叫となり家中に響く。まるで牛や羊を絞め殺す時の様な声だ、耳に残る。

階段から転げ落ちる俺を軽く飛び越え、宙を待っていた洗濯物を華麗にキャッチするとセレナは釘を刺す様に俺に指を突き刺して言い放つ。

幾分か、顔が赤い様に思えたがコレは血では無いだろうか？俺自身の。

「洗濯物は僕が担当しますから、少佐は料理担当！良いですか！？」

「……出来るの？」

「出来ます！！」

怒りながらドスドスと階段を上っていくセレナの後姿を眺めて急所を押さえながら、俺は取り敢えず居間に戻る事になった。一通りのやる事を済ませてしまったので、手が開いてしまったのだ。まるで主婦の様だが、やる事も無いのだから当然と言えば当然だろう。

暇潰しがてら、今日の朝刊にでも目を通すでしょう。

「クリスカ、朝刊取ってくれ」

「ッ……あ、ああ」

何だか知らんが、妙に顔が赤い。
風邪か？

勘弁してくれ。あと数日で横浜基地へ転属すると言うのに、この夕
イミングで風邪などひかれてしまえば夕呼に何を言われるか分かっ
た物じゃない。

「どうした、クリスカ。顔が赤いが体調でも悪いのか？」

「何でも無い、寄るな！！」

「あのなあ、お前達を預かる身としてはお前の体調の管理を」

……此処で1つ、注意しておくでしょう。

誰にでも間違いの1つや2つ犯してしまう事はあるだろう。

それが意図的だと言うのであれば、それは断罪されるべき内容であ
るのは必然。

だが、故意だったとしたのならば？

それならば、まだ許されても良い物では無いだろうか。

“運命”と言う物の悪戯だとすれば、そうなってしまうのは必然だ
つたのだ。

だからこそ、許される内容だろう？

いや、何が言いたいかって言うと

「うおっ！？」

何で転がっているかも知らない茶葉を入れる缶を踏ん付け、前のめ
り 即ちクリスカの入る方向へ倒れ込む俺の図。クリスカへと覆
い被さる様に倒れ込んでしまった俺の左手は自然と安全圏と言われ

る物を探ろうとする。

何処かを基点として立たなければ、いつまでもクリスカの上に覆い被さる訳にも……

【ふにゆ】

What?

【ふにゆ、ふにゆ】

What is this?

「んっ………!」

それを軽く揉むと聞こえる耳に残る様な甘い吐息。

Oh… I understand what this is!!

「………」

「………」

「……す、すみませんでした」

「………貴様は」

黒く立ち上るオーラ。

ああ見える、俺にもお花畑が見えるよ。

こんな花畑を駆け抜けられたら、どれだけ気分が良い物だろうか？
ふふっ、安心しろ。

“直ぐに逝けるさ”

「思いつ切り頼む」

半ば、何かに絶望したかの様に俺はクリスカに微笑んだ。

もう慈悲など要らぬ。

愛など要らぬ。

この手に彼女の温もりを感じて死ぬるのならば、俺は本望だろう。
では死出の旅路を楽しむとしよう。

何、まだまだ時間は腐る程あるのだ。地獄の名所を巡るのも悪くは無い。

「どうしようもない程の、屑だな　　ッ！！！！！」

赤面したクリスカから放たれた拳は、吸い込まれる様に俺の鳩尾を
抉った。

顔を殴らなかつたのは、僅かな彼女なりの気遣いだったのかも知れない。

そう、思いたいぜ。

薄れ逝く意識。

黒く染まる視界。

閉じるのは意識と言うカーテンか、瞼か。

どちらにせよ、コレは中々起きられないだろうなんて冷静に自分を
分析しながら、俺の意識は完全な闇の中へと落ちていった。

ああ今日は厄日だ。

45 9月5日(2) 戦いの才能〜Talent war〜(後書き)

今日の龍二

胸を揉み、クリスカに殴られる龍二

明日の夜には更新が出来る予定です

遅くなつてしまい、すみませんでした

もう少しばかり日常編(?)をお送りします

進めども 先すら見えぬ修羅の道

たとえ茨と知っていていようと 立ち塞がるなら押し潰す

それが男の生き様と 背中で語るが漢の常

刻みし傷が数多あると 敗走など有り得ぬと知れ

血反吐吐き 泣き喚こうと退けぬ道

人殺め 背に罪背負い咎人よ

その人生 己が全力で突き進むべし

いつの間にか記憶へと刻まれた良く分からない教訓。

だが、この教訓があつたからこそ今もこうして戦場で立っていられるのかも知れん。

俺が俺で居る為に、剣崎龍二が剣崎龍二として確立する為に。

このたつた数行の教訓が必要とされて居るのかも知れない。

今の俺には分からないが、きっと時が経てば分かってくるのだろう。今までだってそうだった。

きっとそんな生き方は、これからだって変わる事は無いと思う。

そんな風に行き当たりばつたりの様に生き続け、

泥塗れになりながらも戦場で這いずり回り、

必死になって敵へと弾丸を撃ち出すのだ。

計画など無い。

それに、先の事を考えていられる程の余裕が今の人類にあるのだろうか？

馬鹿な奴等は人類が勝利した後の事を考えていると言うが、奴等は本当にBETAとの戦争に勝利するつもりで居るのだろうか？
いっその事、好きにやらせてみるのも手か？

いや、そんな事をさせてしまえば取り返しの付かない事態になるだろう。

大陸は消え、大気は汚染され、人々は未知の領域である宇宙へと飛び立って行く。

新たな地を捜す為に、住み慣れた母星を捨て去るのだ。

人間だからこそ許される傲慢。人間だからこそ出来る決断。

救いようの無い世界、意思、そして人類。

終われ、終わってしまったえ、終わってしまったえは良い。

救え、救ってくれ、頼むから救って欲しい。

たった一つのスイッチが、たった一つの星を滅ぼす。

そして、何万と言う人々を殺す事が出来る虐殺スイッチ。

そんな物に何かの興奮を覚えると言うのであれば、そいつはきつと屑だ。

どうしようも無い屑だ。

救う価値の無い、終わってしまったえは言い様な屑だ。

終われ、終わってしまったえ、終わってしまったえは良い。

救え、救ってくれ、頼むから救って欲しい。

たった一人の優しさが、何百人もの命を救うのだ。そして、救った命達が更に別の命を助け、この世界が優しさで回っていると証明し

てくれる。

そんな不器用な生き方しか出来ないのであれば、そいつは異端者だ。どうしようも無異端者だ。

救ってやらなければならぬ、放っておけない異端者だ。

手を押し折れ

手を差し出せ

赦しを請え

慈悲を与えろ

さあ、謳おう。己の為に、この世界の終わりの歌を。

さあ、謳おう。人の為に、この世界の始まりの歌を。

人の世は常に、”君”の記憶と共に動いているのだから

頭の中に鳴り響く不快な音波の様な音。

直接頭に訴えかける様な、それで居て耳元で囁いているような不思議な声。

このままでは、俺の思考が狂ってしまう。

どうにかしてこの声を止めたいのだが、止め方を知らない。

止まれ、と念じて止まる筈も無い。

どうすれば良いのだろうか？

夢なのか、それとも現実なのか、それとも別の”何か”なのか、それすらも分からない不可思議なこの声に、覆しようの無い不安を覚えてしまう。

怖いのは無い。

この声が止んでしまえば、俺はきつと

夢を見ていた。

楽しかった頃の、悲しかった頃の、それでいて儚かった頃の夢。俺は夕呼と共に殺伐とした廃墟を見下ろしていた。

過去、此処には何千と言う人々がそれぞれの生活をしてきた筈だろう。

だが今はどうだ？

生物の気配など一つも無く、蠢く影は敵か幻のどちらか。

逃げた人々も運良く難民キャンプまで逃れられれば良いが、もしもその途中でB E T Aと遭遇すれば奴等の餌となる事は確定して居る事だろう。

それでも、人は諦めようとはしなかった。

戦い、殺し、殺され、まるで消耗品の様に減少していく部下や上官。守ろうと決めていた筈の民には負担を強いる事となり、結局は日本も他国と同じ様に泥沼へと片足を突っ込んでいるのだ。抜け出す術などありはしない。

あとはただ、延々と足掻き続けて自ら沼の底へと落ちて行くだけだ。人類は勝てないだろう。

どれだけ策を投じ、どれだけ費用を掛け、どれだけ効率が良い殺戮兵器を作ろうが、時間は結局人類には味方してはくれなかった。

それでも人は諦める事は無い。
各地に存在する”英雄”と呼ばれる人々を頼りにその数少ない戦力を投じ、多大な犠牲を出しながらも勝利する事でまだ人類は戦える
と思いきんで居るのだ。

なら問おう。

頼られ、そして無理な任務にすら飛ばされる事で命を落とす英雄達。
英雄は人と何ら変わる事は無いのだ。

ただ彼等は5分間だけ人よりも勇敢になる事が出来るだけなのに、
最前線へと放り投げられ死んで逝く。

彼等に自由はあるのか？

与えられた首輪。逃げる事すら出来ない様に雁字搦めに貼り付けに
され、僅かな自由が与えられるのは生きるか死ぬかの瀬戸際だと言
う戦場でのみ。

英雄とは、何だ？人か？それとも道具か？

「……夕呼」

「何？」

「神宮寺を……まりもを頼む」

俺もその1人だ。

英雄と呼ばれ、祭り上げられ、望みもしないのに称えられる事にな
る。

俺の出した戦果がどれだけの仲間を見捨てた先にある戦果かと言う
事も知らず、奴等はただ俺を英雄だと言って祭り上げる。

そして言うのだ、「君が居れば勝てる」と。

「珍しいわね、アンタがそんな弱気になるなんて。昨日は飲み過ぎ

た？」

「結局、英雄はもとを糺せばただの人だと言う事だ」

過ぎるだけの時間。

廃墟を駆け抜けた一陣の風が、やがては俺達の横を通り過ぎていく。バサリと、夕呼の白衣が風に揺れた。

「アンタはこっちに残るの？」

「……実践から少しばかり遠ざかるのは心惜しいが、折角の技術廠からの誘いだ。今はその誘いを喜んで受け入れようと思って居る」

「……そう」

寂しげ、と言うのは俺の勝手な妄想だろうか。

だが、その時の香月夕呼の表情は俺の見て来た表情の中のどれとも違ったのだ。

弱気を前面に押し出す様な表情、決して彼女は見せたがらない。

俺にこんな表情を見せると言う事は少なからずとも、俺は認められていると認識しても良いのだろうか？まあ認識されたという事はこれから激務が続くと言う事だろう。

ふと、砂利を踏み締める音が背後から聞こえる。

漸く主役の登場のようだ。振り向いた先には堅苦しい敬礼を引つ提げた神宮寺まりもが、相変わらずの生真面目そうな表情で立っていた。

「いちいちそんな堅苦しい事しなくても良いわよ。誰も見てないから」

「だからってサボるのも良くないでしょ？これからは特にね」

「訓練学校の教導官か……確かに、お前には天職かも知れんな」

「茶化さないで、龍二くん。私だって一生懸命なのに……」

「いや、茶化すつもりは無いさ。ただ教え子の卒業に号泣するお前の姿は様になっていると思うてね？そうだろう、夕呼」

「有り得るかもねえ。 మరిも、教導官らしくしなきゃダメよ？」

「あ、あのねえっ!!」

激昂する神宮寺とそれに反してケラケラと笑いを浮かべる俺と夕呼。夕呼は横浜基地の副司令、そしてオルタネイティブ？の最高責任者として。

まりもは横浜基地の国連太平洋方面第十一軍・衛士訓練学校の教導官として。

俺は技術廠・第壹開発局専属総合開発衛士、ジャツカル隊の隊員として。

「神宮寺教導官殿……精々、俺以上に優秀な衛士を戦場に送り出してくれ。このままではストレスで俺の寿命が消し飛んでしまいそうだ」

「あははっ！良いわねえ、”英雄を越える英雄”を育てるなんて大任じゃない？」

「プレッシャーばかり掛けないでよ……でも、そうね。やるから

には龍二くんを越えるつもりでやらなきゃ、意味が無いかも知れない」

3人はただ笑った。

進むべき道は違おうとも、この場から3人の全てが始まるのだ。進む道は地獄だと知っていようと、もう止まる事は出来ない。拳を握り締め、強く願う。

我等に祝福あれ、と。

剣崎

「ッ……」

天井から降り注ぐ明かりに思わず目を顰め、咄嗟に目を片手で覆う。あまりの眩しさに呻き声すら上げてしまう始末。年は取りたくない、そう思う瞬間だった。

「す、すまない。まさか気絶するとは思って居なかった……」

そんな明かりと俺の間に、クリスカの影が割ってはいる。俺が眩しいと気付いたのだらう、俺の目が明かりを見る事が無い様にクリスカは影を作って気を利かせてくれていた。

「……いや、すまん……不可抗力とは言え、揉んじまった……」

「ッ……私も……少しばかり大人気なかった」

クリスカの一撃を喰らってから、どれだけの時間が経ったのだろう。居間にはクリスカしか居らず、昼食はテーブルの上にラップを掛けて丁寧に置いてあった。

と言う事は、まだ夜にはなっていないのだろう。

かなりの時間眠っていたのは確かだが、まあ休憩として考えれば都合が良い。

「イーニアとセレナはどうした？」

「ああ、エニックスはイーニアの遊び相手をしてきている。外で遊んでいる筈だ」

セレナにも”年上”として概念が存在して居たか。

年下であるイーニアの遊び相手をするなど、やはり他者への気遣いが出て来ると言う事は時として種族の垣根を越えて感動を呼び寄せるのか……

では折角の機会だ。

クリスカとの友好的な関係を築くのも、悪くは無いただろう。

「料理、出来ないらしいな？」

「………必要が無いだけだ」

「まあ良いや。取り敢えず、台所に来いよ。何か教えてやるから」

「必要ない」

「来い」

「断る」

「来いっつうの」

「断ると言っている」

……何故こつも断固拒否の姿勢を保つのか。

それにコイツ、俺の言った事に対して徹底的に反抗してないか？

“来い”と言つと”嫌だ”、”下がれ”と言つと”貴様が下がれ”なんて具合だ。

もうこんな事をされてしまったら、強引に行くべきだろう。

「な、何をする！？」

そつばを向いていたクリスカの両足を掬い上げ、そのまま背中を持ち上げる。

俗に言うお姫様抱つこの格好のまま、俺はクリスカを台所へ運ぶ。運んでいる間も何かしらの言葉が飛んで来た様な気がしたが、気になどしない。

「この先も一緒にやっていく仲間の為、俺が一肌脱いでやろう」

「頼んだ覚えは無い！降ろせ！」

「まずは包丁の握り方からだな？ははは、任せろ。今日1日でタツブリレクチャーしてやろう。何なら、晩飯はお前が作るか？ハッハッハッハッハ」

嫌な夢を振り払う様に、俺はただ今日の前にある光溢れた出来事に

身を投じて行く。

もしかすればこの先、俺に待っているのは地獄の様な苦痛なのかも知れない。

だが、それでも今は彼女達との時間を楽しむ事にしよう。

このまま戦い続ければ、何れは俺は俺では無い”何か”になっ
てしまふから。

篋

藤代中尉は機体を私専用に着陸させる為に、基地へもう少しだけ残るらしい。

申し訳ない気持ちもあったが、疲れが溜まっていた私は先に訓練を切り上げて自室へと戻ろうかと思っただけ……

藤代中尉の家までは、此処から車を飛ばせば10分程だろう。

……

……

……龍二さんが彼女達に何もしていないか、キッチンとチェクしてからでも別に遅くは無い筈だ。周りが羊だらけの中に獰猛な野獣を放つてしまえば、羊達は食べられてしまっただろう。そんな悪い野獣は、狩ってしまった方が良い。

と言う事でやって来たのは藤代中尉の自宅。

既にご両親は他界されているとの事だったが、清掃は庭の隅々にまで行き届いているし、とても1人でやったとは思えない。

もしかすれば、少佐達が今日の間には清掃してしまっただろうか？

だとすれば、安心して良いのかも知れない。
少なくとも少佐は彼女達に手を出さず、真面目に1日を過ごして
いると言う事になるだろう。何だ、やはり私が心配をし過ぎて居たの
か。

此処まで来たのだから挨拶をした方が賢明だろうと思ひ、何度か扉
を叩く。

中ではドタバタと走り回る様な音が聞こえるが、一向に此方へ向つ
て来る気配は無い。

音が小さ過ぎて、聞こえなかったのだろうか？

扉は すんなりと開いた。

鍵を閉めていなかったのだろう、無用心では無いだろうか？

いや、まあ軍人が4人も居る家に泥棒が1人入ろうと返り討ちにさ
れるオチだろう。

「何方か、いらっしやいませんか？」

ドアを僅かに開け、そこから声を発する。

廊下の奥 恐らく、居間には電気が灯っている。

人は居る筈なのだが声が届いていなかったのだろうか……？

「唯依ちゃんか！？セレナにイーニア、お前達は少し静かにしろ！
！」

そんな事を考えていると、居間から此方へ少佐の音が響く。

どうやらエニックス少尉とシエスチナ少尉が騒いでいたので、私の
声が聞こえなかったらしい。上がれ、と言われたのでお言葉に甘ん
じて私は明かりの方へと歩を進めた。

「「「こんばんは」」」

「じ、こんばんは……」

先程まで騒いでいたと思われるエニックス少尉とシエスチナ少尉は現在、居間の端で正座して居た。少佐の指示なのだろう、2人の胸元に下げられた札には「餌をあげないで下さい」と大きな文字が書いてある。

「悪いが唯依、台所に来てくれ！そこのお馬鹿ちゃん2人、お前達も手伝え！」

「ええ〜正座したばかりですよ……」

「りゅうじ、おこつちゃだよ……」

「ああ悪かったって、だから手伝ってくれ。こっちはこっちで手一杯だ！」

何が手一杯なのかは分からないが、取り敢えず台所へ向う。するとそこには、ビヤーチエノワ少尉の隣で必死に何かを刻む少佐の姿があった。

「クリスカ、ネギは切り終わったのか!？」

「い、いや、まだだ……」

「だーっ！違う、良いか？こつやっつて」

後ろから抱きつく様にビヤーチエノワ少尉に身体を密着させ、彼女の手ごと包丁を握って優しくネギを刻む。

ビヤーチエノワ少尉も、顔は赤かったが満更では無さそうだ。
ふと、そんな彼女と視線が交差する。

一瞬だったのでその視線に込められた感情を知る事は出来なかったが、僅かながらに口の端がつり上がっていた様な……いや、どちらにせよ

「龍二さん」

「おう、どうかしたのか！」

「お手伝いします」

勘違いしないで欲しい、クリスカ・ビヤーチエノワ少尉。

例え誰が少佐に好意を寄せようが、私は一向に構わない。

私は正々堂々、真正面から切り崩していく。それは何の変哲も無い
正攻法。

不器用な私なりの、恋の必勝法である。

龍二が料理しかしていない

近頃はマブラヴには有るまじきほのぼのぶりですね
もっところ、血湧き肉踊る戦いを ツ!!

47 9月5日(4) おとぎばなしの役者達(前書き)

お待たせしました、凄いヤツー(ぬぐべくOP風

刻まれる時

役者達の顔合わせ

新たなオルタネイティヴの幕開けとなる話

そんなカツコイイこのお話の訳になります

剣崎

「コレを、私が作ったのか……?」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、流石に……張り切り過ぎたか……ッ!」

「はあ、はあ、はあ、気合の……入れ所を間違えました……ッ!」

「すごい!何これ、夢みたい!」

「りょうり、たくさんだね」

気合の入れ所を間違えた。

確かに、間違えていた。

テーブルの上にはコレでもかと言う程に並べられた色々な種類の料理。

炒飯に始まり、肉じゃが、野菜炒め等々。

断言しても良い、此処に居る5人で食べきれぬ量では無い。

クリスカ初の料理と言う事で少しばかり気合を入れていたのだが、唯依の参戦で更に熱が入ってしまった。

何と言うか、豪勢だ。

取り敢えずコレを如何にかして処理しなければならない。
もう行儀良くなんて言っている暇は無いだろう。

例え倒れ伏そうが、無理矢理にでも口の中に詰め込んでいくしか無い。

そんな量だ、コレは。

「と、兎に角、食うぞ。自重はするな、全力で食え！」

「……はい」

「あ、ああ」

「「いただきます」」

この量の洗い物、きっと俺の元へと雪崩れ込んでくる事になるだろうな。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

藤代

篋中尉用にF型の設定を変更し、漸く作業が一段落ついた。あとは実際にシミュレーターに乗せて、微調整をこなして行く程度の段階だろう。

まだ湯気が立つコーヒーを口に含み、背を伸ばす。午前中からずっとデスクワークだ。肩も凝るし、お尻も痛い。

「さて、と」

席から立ち上がり、帰り支度を整える。

後の作業は明日以降。

最終調整ならば尚の事、慎重にならなければならない。此处でミスをしては目も当てられない事態になってしまうからだ。

機材の電源を落とし、部屋の電気を消す。

真っ暗な部屋の中、廊下から漏れる僅かな明かりだけを頼りにして廊下へと出る。

855

この部屋に何十時間籠っていたのだろうか？

どうにも、足取りが覚束無い。

フラフラと壁に手を付きながら、自分の足が確りと地に付いている事を確認しながら一歩一歩確りと歩を進めて行く。

「大丈夫ですか？」

ふと気が付くと、私を見上げる様に小さな少女が立っていた。

ウサ耳カチューシャと雪の様な素肌。

それはまるで、イーニアの様に触ってしまえば砕けてしまう印象を受ける雪の化身。

心が読めない瞳が、私にピッタリと照準を合わせていた。

「え、ええ……ごめんなさいね。迷惑だったかしら？」

「いえ」

少女は辺りをキョロキョロと見渡すと、無表情で僅かに首を傾げる。ほんの些細な表情の変化ではあったが少女の表情には困惑、を含んでいた気がした。

人の顔色やら何やらを気にする仕事柄である私だからこそ分かったのかも知れないが、普通の人ならば何も気にする事無くスルーしていたかも知れない。
いや、待て。

それよりも何故此処にこんな年齢の少女が居るのだろうか？

誰かが連れて来た子供だろうか？帝国の基地に我が子を連れ込むとは、随分と公私混同が過ぎるのでは無いだろうか？お咎め無しでは済まないだろうに。

「何か困りごと？」

「……」

「私と一緒にいらっしやい。警備員に捕まっても面倒でしょう？」

暫しの間、何かを探る様に此方を覗き込む2つの瞳。

真っ直ぐに、ジツと此方の瞳を覗き込む。それに臆する事無く、此方も堂々とその瞳を見返した。何も下心など無いのだ、何を臆する必要があるのでだろうか？

「どうする？」

「……お願いします」

少女はそれだけ告げ、ペコリと小さな頭を下げた。その際、僅かにウサ耳のカチューシャが揺れている。随分と精巧な物だ。

「私は藤代、藤代千枝よ。貴方は？」

「……社霞です」

霞、と名乗った少女は無口ではあったが何処か放っておけない雰囲気醸し出している。

私にも母性本能という物があると言う事だろうか？

その小さな手を握り、誰か知り合いが居ないか基地内を少し探し回って見る事にしよう。家に帰るのは遅れてしまうかも知れないが、こんな小さな女の子を見捨てていくよりは何倍もマシだと言うものだ。

香月

唐突だが、あたしは帝国の基地に居る。

理由は単純にして明快だ。今龍二の下に居るのであろう紅の姉妹とうちの”社”を接触させ、少しでも友好的な関係を作りやすくして置こうと思ったのだが

社が、居なくなっていた。

まああの子も馬鹿では無い筈だ。それにESP能力者の特性上、【

悪い大人」に付いて行く事は無いだろう。と言う事で、今は社よりも先に技術廠の巖谷中佐に少しばかり挨拶でもして行くこうかと思っ
ている所だ。

龍二の上司だと言うのなら、少しばかり話をしても無駄にはならないだろう。

アイツの天上天下唯我独尊を地で行く様な性格をコントロール出来る人物など、この帝国には数える程しか居ないだろう。

居たとしても、そいつはお人好しか色物好みのどちらにせよ不名誉な汚名を着せられる可哀想な奴等だ。そして、そんな龍二をコントロールする可哀想な者達の中に巖谷中佐の名前もあると言う事で、今後の事も考えた結果として私直々に会いに来る事になっているのだ。

「伊隅、まりも。アンタ達は取り敢えず廊下で待機していなさい」

「了解」

お供として連れて来ている伊隅とまりもに待機命令を出し、あたしは巖谷中佐の待つ執務室へと足を踏み入れる。帝国には随分と嫌われている私だ、さてどんな歓迎をされる事やら。

正直、危ない橋は渡りたく無いのだがコレばかりは仕方が無い。

あたしが危険を犯してでも彼とのパイプラインは持つておきたいのだから。

「失礼しますわ、巖谷中佐」

「長い事、この様な職業に着いていましたが、成る程。確かに貴方からは只ならぬ気迫と言う物を感じますな。それが”剣崎龍二”と言う男が掛かっているからなのか、それとも貴方の素なのかは置いておくとしても……気は抜けませんな」

「冗談が過ぎますわ、中佐。所詮、一介の科学者に過ぎませんもの」
この挨拶にしろ、既に腹探り合いは始まっていると言う事だ。
お互いにカードは切らず、手の内を読む事から始まっている。この男、とんだ策士だ。
飄々としている外見とは違い、中身は抜け目の無い腹黒さを携えている。
成る程、確かに龍二が従っていると言う事にも納得が出来る。

「それで？本日は一体どの様な用件ですか？」

「あら、簡単な事ですわ。剣崎少佐用に整備スタッフを数人引き抜く事と、其方側の”あるデータ”を此方へ提供していただきたいのです」

「ふむ。此方側のメリットは？」

「99式の件での借り、コレで無しにしても良いのではなくて？」

「それだけでは釣り合わんさ。あくまで君が我々に与えたのは情報であり、それを製作したのは帝国軍だ。そこにどんな過程があったとしても、結果として99式を製作したのは帝国軍と言う事になっている」

「あら。帝国の大好きな”誇り”は無いかしら？」

「奴等に勝つ為なら、どんな泥水も啜ってやる覚悟だ」

この男、崩し辛い。

少し叩けばボロを出す様な帝国のお堅い馬鹿共とは違い、あくまでもBETAとの戦争に勝つ事に拘った帝国の中でも珍しい類の連中の様だ。

アツサリと決着は付くと思っていたが、まさかこんな形で話し合いが長引くとは思ってすら居なかった。どうやら、もう少しばかり話し合いに熱を入れる必要がありそうだ。

「何を狙っていたのかは知らんが、そうそう簡単に渡してやる訳にもいかな。何せ、君は必要な物以外は欲しがらないだろう？何に使うかは分からんが、それが帝国軍にとって悪影響を及ぼさないと限らん」

「確かに、懸命な判断ですわ」

ガードが固い。

的確に急所を抉り取るうにも、その為に攻めるべき急所が堅牢な防壁によって守られていては此方からは手が出せない状態だ。もう少し何等かの切り崩し方があれば良いのだが、流石に今の持っているカードでは切り崩しは期待出来ないだろう。

もう少しばかり、手札を揃える必要があると言う事か……

「分かりました。今回は手を引かせて頂きますわ」

「今回」と言う事は、完全に諦めた訳では無いようだな」

「当然ですわ」

龍二が此方の手に入る事は確定事項だ。

ならば、後は確実に実績を重ねていけば良いだけの話になる。誰にも文句が言えない程の、完璧な実績を重ねてしまえば良い。

そうすれば何の問題も無く目当ての品は手に入る。

「ああそうだ。剣崎なら今は藤代中尉の家に居る筈だ。藤代中尉ならもう暫く此処へ止まれば繰ると思つが、待つてみては如何だろうか？」

「……そうですね。お言葉に甘えさせて頂きましょう」

元々、此方には一泊するつもりでは居た。

龍二の状態確認と紅の姉妹との接触は当初からの最低目的ではあったのだ、それを果たしていない内に帰る訳にはいかないので寧ろこの誘いは願つたり叶つたりである。

今は面倒事を避け、迅速に事を終わらせるべきであると思われる。

何せ、あたしを敵視する馬鹿共この帝国には腐る程居るのだ。

アイツの口癖を借りる事になるが、あたしだって面倒事はゴメン被る。

それでは、待たせてもらつとしよう。

日本に轟く剣崎龍二の副官であり、機体開発に携わる天才である藤代千枝の到着。

彼女の話、少しばかり興味をそそられる部分もある。

同じ天才の素質を持つ者として、彼女の持つ価値観と言う物には純粹に興味湧くのだ。コレを科学者としての性として片付けてしまふには、実に勿体無いと思う。

社霞から感じる違和感。それは、本当に些細な物なのだからこそ気になってしまう。良く目を配ってやれば、彼女の肩にはエンブレムが張ってある。

オルタネイティブ計画

見知らぬ計画名と、何故この少女がそんな計画に関与しているのか疑問に思える。

まさか飾り、と言う訳では無いだろう。

こんなにも堂々とエンブレムを張っているのだ、それはつまり彼女はそれだけ重要なポストに存在していると言う事を示唆している。

つまり、私の知らない計画があると言う事か？

まあ秘密主義と言われてしまえば終わりだが、話して貰えるのなら聞いておきたい。

とは言っても、初対面の私に彼女が私に意気揚々とその内容を話してくれるとは限らないので独自のルートで調べさせて貰う事にしよう。

「社か」

「……伊隅大尉」

仕事の関係上として上司に挨拶をせずに仕事場を後にする訳にもいかず、挨拶をして行こうと巖谷中佐の執務室へ向っていると廊下で此方側へ気付いた2人の女性が社に視線を向けた。どうやら、彼女の知り合いはこの2人で決まりらしい。

社本人も片方の女性の名を呼んだ事から察するに、それなりにお互いを知る関係と言う事だろうか？

「貴方が社を此処まで？」

「ええ。あの、失礼ですがお名前は？」

「私は横浜基地所属の神宮寺まりも軍曹です。あちらの方は同じく横浜基地所属の伊隅みちる大尉です」

「私は第壹技術廠所属の藤代千枝中尉です」

「藤代と言うと……そうか、剣崎少佐の副官はお前か」

「名を覚えていて貰えるとは光栄です、伊隅大尉」

「此方側にもお前の名は轟いている。」天才開発者”とな」

「あくまで風評です。実際に見聞きしない事には、事の本質は理解出来ません」

「ふむ……その意見には同意させて頂くとしよう」

この2人、少佐と知り合いなのかも知れない。

伊隅大尉は少佐の名前を出した途端に何かを懐かしむ様に顔を綻ばせ、

神宮寺軍曹は何処か表情に影が差している様な印象を受けた。

どちらにせよ、彼女達は私達が横浜基地へ行った際には世話になる事は間違いないのだろう。今の内に名前を覚えて貰えるのならば有り難い。

「では失礼させて頂きます。私も、中佐に挨拶をしなければ帰る事

が出来ないので」

「配慮が足りませんでした、申し訳ありません」

神宮寺軍曹が律儀に頭を下げ、私はそれに苦笑で答えながら扉を開く。

いつものこの時間ならば椅子に座り、デスクワークに没頭しているであろう巖谷中佐が珍しく席を立ち、窓から夜空を眺めていた。そして、来客用のソファに座る1人の女性。

「来たわね」

此方が其方に気付くよりも早く、彼女はそう呟いた。

何やら更に面倒な事に首を突っ込む予感がするのだが、今はグツと堪えて華麗にスルーして行く以外に方法は無いだろう。

剣崎

「セレナ、まだ食えるだろう!? 頼むから食ってくれ!」

「も、もう限界……これ以上は……破裂します……」

その言葉を残し、床に倒れ伏すセレナ。

そして目の前に広がる豪勢な食事達の山は依然として健在している状況である。

特攻隊長として敵へ単身突撃したセレナではあったが、遂にその胃袋にも限界が来てしまったのだ。全料理の内、1/6程を1人で完食したとは言え、未だに越えるべき壁は大きかった。因みに、既にイーニアは一通りの食事を終えて風呂へと向っている。今此処に残って居るのは俺、唯依、そしてクリスカの3人のみだ。

「さて。では、残り7人前程は在りそうな料理達を如何処理すべきだろうか？」

「腹を括り、制圧あるのみ」

唯依はあくまでもその闘争本能を衰えさせる事は無い。

ただ、そう言う台詞を言うのであればその青白い顔は止めて欲しい。食材を無駄にしたいくないと言う精神には経緯を称するが、無理をして腹に入れても結局は何の意味も無いだろう。ただ無駄な精神と肉体への苦痛だ。

「……タッパーに入れて、保存するしか無いだろう」

至って単純な答えを導き出すクリスカ。

3人前程度までならば入るのだが、それ以降は冷蔵庫が受け付けてくれないのだ。

扉を閉めようにも料理が引っ掛かる事で扉が閉まらない、もう如何考えてもスペースが無い等の改善など出来る筈も無い問題点がいくつも浮上する。

では、どうすべきだろうか？

その答えはたった一言で要約する事が出来るだろう。

『そうだ、『現実』は非情である』。

生きるか死ぬかの瀬戸際に立ち、俺達は料理へと立ち向かっていく

しか無い。

つまり俺達は既に逃げられないと言う事なのだ。

「……少佐、電話です」

「……ああ」

「……私が出るか？」

「いや……少しばかり気分転換でもして来る。お前達も今の内に休んでおけ」

鳴り響く電話の音が耳に鳴り響く。

これから地獄へと旅立つ事になる俺が最後に遺言を残す事になるチャンスであろう。

「もしもし、藤代ですが……」

『ああ少佐。お客様を其方へ連れて行く事になるのですが、構いませんか？』

「お客様？」

『横浜基地の香月副司令、伊隅大尉、神宮寺軍曹、社霞の4名です』

「……千枝」

『はい？』

「是非とも、連れて来てくれ。絶対に飯は食わせるな、此方で用意

する」

『え、ええ。了解しました』

しかして、逆境は時として僅かな変化で幸運へと変わる。

神は俺達を愛してくれていたのだ。

今まで、コレ程までに運命と言う物に対して感謝の気持ちを示した事があつたか？

正直分らないが、今は如何でも良い。

5人分の料理を彼女等に出し、残った2人分程度はタッパーに入れて冷蔵庫へ。

……勝った。

遂に、悪夢の様な壁に打ち勝った。

僅かな達成感と共に、俺は意気揚々と居間へと引き返して行った。

神宮寺

「剣崎龍二に会いに行く」、夕呼から告げられた内容に私と伊隅大尉は開いた口が塞がらなかつた。突如として帝国へ訪れる所か、今度は英雄として称えられる龍二くんの下へ行くと言うのだ。

確かに彼と私は同期生であり、色々とお世話をしたり・されたりする仲でもある。

だが、それを考慮したとしても彼にとっては迷惑では無いだろうか？
そう藤代中尉に進言したのだが、本人は寧ろ喜んでいたそうだ。

私達の為に料理を用意して待っていると云ってくれていたらしい。

心遣いは嬉しいのだが、些か気が退ける内容でもある。

そんな事をジープに揺られながら考えている内に、目的地である藤代中尉の自宅が目と鼻の先に見えていた。通常の家よりも一回り程大きな家は彼女の両親がどれだけ優秀な人材であったかを物語っていた。

「どうぞ、中でお待ち下さい」

藤代中尉は私室に荷物を置きに行くと言達に伝え、2階へと上がって行った。

通された部屋は居間、だろう。

そこには2名の少女が座っていた。

1人は日本人だろう。長い黒髪、そして凜とした表情。帝国軍らしい典型的な日本人の女性だ。

それに対してもう1人の少女は銀の髪を持つ異国の者。

此方に対して警戒心を隠そうともしない事から考えるに、難しい性格なのだろう。

「そこ等辺で待っている、今直ぐに行く」

居間の奥。

台所から聞こえて来るのは昔聞き慣れた懐かしい声。

言われた通りに既に待ち構えていた2人とは対面になる場所へ腰掛けると、相変わらず雪を被った様な真っ白な頭が姿を現した。

着用しているエプロンも真っ白なので、潔癖症か何かなのかと勘違いしてしまいそうだ。

「何よ、アンタのその格好」

「実益を兼ねた趣味だ。良いだろう、別に」

「……案外、人間は見た目では分からないと言う事か」

「伊隅じゃねえか！？久しぶりだな、明星以来か……」

「ああ久しぶりだな。お前に借りを返しに来た」

「折角だ、多少の色が付いても結構だぜ？」

最後に彼と会話をしたのは何年前になってしまっただろうか？
しかし、その飄々とした態度。

どれだけの年月が経とうと、決して変わる事は無かった。

「……ぐすん」

「……ん？」「」

夕呼、伊隅、そして龍二くんが何かに気が付いた様に此方へ視線を向ける。

今の私はどんな表情をして居るのだろうか。

上手く笑えているだろうか？

上手く喋る事が出来て居るのだろうか？

分からない。

分からない、けど。

「りゅうじくうんっ！……！」

「ちよっ、鼻水が！ああもう、ティッシュあるから使え。ホレ、

チーンっと」

「チーンッ！………久しぶりだね、龍二くん」

「おう、久しぶり」

彼との久々の出会いなのだ。

今くらい、少しくらい羽目を外してもバチは当たらないと言う物だろっ。

今だに涙と鼻水で濡れた顔をティッシュで拭いながら、龍二くんは呆れ半分と言った具合に昔と変わらない、無邪気な笑顔を私に向けた。

47 9月5日(4) おとぎばなしの役者達(後書き)

神宮寺まりも堂々の参戦

件のパツクンチヨ事件が再来するか如何かですか？

PCの前の皆さんが心の底から「まりもちゃん死なないで！」と願えば死にません

……ふふっ

48 9月5日(5) 僅かな希望(前書き)

今回は短い……

うむ……内容を追記する可能性大ですな、こりゃ

剣崎

「良い子はもう寝る時間だ、イーニア」

「でも、りゅうじは？」

「俺は悪い子ちゃんだから、もう少しだけ起きている。

ああ、何かあったら直ぐに下に来ると良い。唯依にクリスカ、セレナに千枝の4人がキツチリカツチリ助けてくれるさ」

「りゅうじはたすけてくれないの？」

「助けには行けないかもしれない。だけど、今は一緒だ。イーニアが眠るまで、俺は此処ですっと見守っていてあげるから」

風呂上りと言う事で僅かに火照った頬を撫で、布団を掛ける。

嬉しそうに頬を緩ませてくれる彼女の頭を静かに撫でながら、俺はただ呆然とクリスカを含む2人のコレからを考えていた。

もしかすれば、俺が守ることが出来ない事があるかも知れない。

俺が介入すら出来ない様な出来事があるかも知れない。

その時、俺は如何するのだろうか？

周りの仲間達に迷惑を掛けても、俺はこの子達を救う事を選択するのだろうか？

護ると誓った。

だが、その為に何かを犠牲にする覚悟はあるのか？

そんな事にばかり気を取られ、いつの間にか知らぬ内にイーニアは既に目を閉じていた。安らかな寝息と、僅かに上下する胸。

その寝顔を見やり、せめて夢の中では幸せであって欲しいと切に願う。

単純ゆえに、叶う事の無い願い。

愛しき姫君の額に口付けをし、俺は黙って部屋を後にする。

今は、何も考えるべきでは無い。

ただ目の前で繰り広げられる問題ごとを解決し、その様にならない事を祈るしか無い。

結局俺の力は戦術機による物であり、俺自身の力などに等しい。

だからこそ、俺は階級を上げなければならないのだ。

純粹な力。

圧倒的な発言力。

誰にも邪魔される事の無い権力。

俺が今、最も手に入れなければならない物は彼女達を守る為の権力なのだ。

ただ、その為に必死に戦うとなると、如何にも虚しくなっちまうな

……

イーニアを寝かしつけ、居間に戻ると神宮寺のタックルが俺を襲う。タックルと言うのは語弊かも知れないが、威力は正真正銘のタック

ルなのだ。

腰ごと身体を持っていかれ、あまりの苦痛に呻く。

それから止まる事を知らない愚痴を聞かされる事となった。

俺と彼女が道を違えてからの、その後の話。俺すら知らない彼女の戦い。

「それでねえっ、私ね！ずっと、ずうっと夕呼の下で頑張ってね！？」

「おいおい。いい加減に愚痴を零すのも止めておかねえと後が怖いぜ？」

真っ白なエプロンを着用していた俺の膝の上。

神宮寺は子供の様に腰に抱き付き、終わる事の無い愚痴を延々と零し続けていた。

子を宥める親の気分とはきつと今の俺の様に混乱と好意の中間地点辺りを彷徨って居るのだろう、神宮寺の髪を撫でられながらそんな事を思っていた。

しかして、問題なのは神宮寺が”夕呼”に対する愚痴まで零し始めていると言う事だ。

無意識の内だったとは言え、後悔しても仕切れない。

流石にそれに対しては俺も冷や汗が止まらなかつたらなかつた。

いつ爆発するのかと怯えながら、後方に控える夕呼に何度も視線を向けている。

がしかし、夕呼は楽しそうに愚痴を聞いているだけで決して行動に移す事は無い。

どうやらだが、俺の目の前で刑が執行されると言う事は無いのだろう。

ならばまだ良いのではないだろうか？

目の前でトラウマの様な出来事が起きた事によって俺の深層心理がボロボロにされるよりは、ヒソソリと地獄の責め苦を行って貰った方が何倍もマシだ。

「……………」

「……………」

だが何故だろう。何故、先ほどから背中にも2つの視線が突き刺さる。殺気と言えば良いのだろうか？

こう、ピツタリと首筋に刃を付き立てられていると言っのか……
こう、銃口を頭にピツタリと突きつけられていると言っのか……
ヒンヤリとした刃の感触。

ゴリツと押し付けられる銃口。
まるで本物の様な

「……………」

「……………」

「あら。大人気ねえ、アンタ」

本物の様な、では無くそれは真正銘の本物。

後ろを振り向いてしまえば、きっと俺はこの世に生まれた事を後悔するだろう。

それ程の恐怖。

それ程の殺気。

問おう、問わせて欲しい。

俺が何をしたというのだろうか？俺が君達に何をしてしまったと言

うのだ？
分からない。俺には想像すら付かない。

「唯依、クリスカ。別に、神宮寺に対して邪な気持ちを抱いていた訳じゃ無い。

彼女は俺の昔からの友人で、久しぶりの再会でお互いに少しばかり羽目を外し

言葉を紡いだのは、結局そこまでだった。

声を発する為の喉ごと首が空を舞い、空を舞う首にズンズンと何かが飛来する。

コレ程までに呆気無く、剣崎龍二の人生は終わりを迎える。

そんな“幻覚”まで見てしまう程に濃厚な殺気。

つまり俺は、此处で綺麗サツパリ身も心も、ついでに首も綺麗になる訳だな？

それはもう冗談としては笑えない部類に入るだろうな。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

「つまりは何か？俺の健康状態を確認しに来た、と」

「まっ、そう言う事ね。一応他にも目的があったけど、そっちは無問題だし」

既に社と紅の姉妹の片割れは接触した。

拒否する様子も無いし、険悪なムードも無い。寧ろ、同じ”存在”に出会えた事を胸の内喜んでいてのではないだろうか？

まああたしはアイツ等じゃないから、結局は分からず仕舞いだが。

「見ての通りのイイ男だろうが。何を今更確認する事があるのやら……」

「あのねえ、アンタのくだらない価値観に付き合う気は無いのよ。サッサと傷見せる」

強引に顔の包帯を剥がし、顔の傷を確認する。

まだ癒え切っては居ないのだろう、顔の中心に僅かながらの傷跡が残っている。

もしかすれば、一生消える事の無い傷跡となってしまうのかも知れない。

まあどうせ、本人からすればナンパの際に良い話が出来たと喜ぶだろうが。

「パツと見じゃ分からない事もあるわよね。自分で分かる身体異常はある？」

「いや、無問題だ」

「アンタはポーカーフェイスの達人だし、それを鵜呑みにする訳にもいかないわね。」

えっと、何だったかしら…… 篁中尉、だったわよね？」

本人からの証言を裏付ける為に、第三者の証言を聞く事は有効な手段であろう。

今回だって、龍二の健康状態が正常である事を裏付ける為に第三者である彼女に話を聞くのだ。ピツタリと彼の隣に座っていた彼女は一度彼の顔を見やると、思い返す様に記憶を辿って行く。

「いえ、思い当たる節もありません」

「そつ」

どうやら、本当に何の問題も無い様だ。

コレならばオルタネイティヴ？が誇る最良の人材は完璧な状態で私の下に入る。

A-01の更なる技能向上、

新たな人材の加入、

戦術機の新たな概念の開拓、

たった1人の男が齎す利点としては破格であると言って差支えが無いだろう。

やはり英雄は格が違う、と言う事だろう。

「それじゃ、あたしの用件は終わりね。サッサと料理でも何でも出さないよ、食事するなって言ったのはアンタでしょ？」

「お、おう。そうだったな……フツ、任せろ。この世の終わりを見せてやるつ」

人有り気な顔で呟くと、龍二はまた台所へと入っていった。戻って来るまで時間は少しばかり余るだろう。その間に少しばかり、此処に居るこの子等と親睦を深めるのも良いかも知れない。まあ、分かり合えるとは限らないけど。

篋

香月夕呼。

国連軍横浜基地の副司令を務め、帝国内でも彼女を嫌う者は多い。本人もそれを理解しているのか滅多な事では帝国に接触すらしたがない筈なのに、たった1人の軍人を配下へと招き入れる為に平然と危険を冒すなど良く分からない人物。

伊隅みちる大尉。

香月夕呼の部下と言う時点で並大抵の実力者では無い。それに、あの”明星作戦”を龍二さんと共に生き残ったと聞いている。国連や香月夕呼の部下だと言う事を差し置いても、彼女がどれだけ優秀なのかは理解出来る。正真正銘のエリートと言い切っても問題は無いだろう。

神宮寺まりも。

香月夕呼と共に龍二さんの旧友。

今でこそ訓練兵に対する教官と言う役職に就いているが、実際の戦闘能力は高い。

過去の戦歴、戦闘回数、そして修羅場を潜り抜けてきた数。まさに歴戦の猛者。

そして 新たな私の障害となるのであろう人物。

「副司令、本当に彼を”A-01”へ？」

「当然でしょ。元々、アイツはA-01の隊長を務める筈だった男なのよ。」

それと、まりも。アンタにも今の教え子が卒業すれば前線に復帰して貰うわ」

「前線復帰、ね……何だか懐かしいニュアンスね」

「奴等と鉢合せすれば、そんな”懐かしさ”も消し飛ぶわ」

「……」 奴等」

私とビヤーチエノワを前にして、彼女等の視線は私達には無かった。既に”龍二さん”と共に居る未来を考えていると言う事が今の私にとっては何処か腹立たしい事実でもある。

しかし、冷静に考えてみれば彼女達は人類を勝利に導く為に己の身体を削り、日夜戦っているのだ。BETAを殲滅する為に。

それは胸を張って誇れる事。

私だって、BETA殲滅を胸に秘めて戦う龍二さんを誇りに思っ

居るのだから。

「篁中尉にビヤーチエノワ少尉、だったな」

そんな事を考えている私に、伊隅大尉は視線を向けた。

その瞳は真剣その物で、まるで此方の価値を見出す様に鋭い眼光が光る。

私だけでは無く、ビヤーチエノワ少尉の身体も僅かに強張るのを感じた。

「何の用でしょうか、伊隅大尉」

「いや、なに。貴様達は少佐を慕って此処へ集まったのか？」

「何のご冗談ですか！？わ、私は別に　ッ！」

「私は決して奴を慕ってなど居ない！此処に居るのも、全て命令で　ッ！！」

「ふっ……そう躍起になるな。余計に怪しく思えるぞ」

クツクツと喉で笑いながら、伊隅大尉は静かに出されていたお茶に口を付けた。

どうやら、横浜基地の人員は皆が少しばかり性格に難があるようだ。

これからも、退屈せずに済みそうだ。

それぞれが、それぞれの心に描いた敵へと刃を向ける。
決して勝てるとは限らない。

だが、そこで諦めてしまえば勝つ事も出来ないだろう。
可能性を潰す、と言う事がどれだけ愚かな事なのか貴方には分かって欲しい。

僅かな希望が、時に世界すら動かすのだから。

48 9月5日(5) 僅かな希望(後書き)

スランプってヤツなのだろうか？

内容を上手く練る事ができない……

いや、すみません

更新止って事態は避けますが更新ペースが遅くなるかも知れませんが

まあ私なりの全力で挑むつもりですが

49 9月6日 皆、仲良く(前書き)

気がつけば

ソファアで寝ていて

寝過ぎした

まさか、この時間に投稿する事になるとは……

英雄、と呼ばれるには何かしらの偉業を成し遂げる必要がある。

分かり易い例を挙げれば、人の命を救う。

人々に賞賛され、称え上げられ、そして望みもしない結末を迎える。

愛した人を殺される。

助けた者に殺される。

手に入れた僅かな幸運でさえ、あっと言う間に潰される。

そんな悲しい性を背負うのが英雄として生きる者達の末路なのだ。

では、”彼”は如何だろうか？

“彼”の末路はどれだけ壮絶なのだろうか？それとも、幸せなのか？

それは誰にも分からない。

分かる筈が無い。

私達は神では無いし、人の運命を握っている程の力を秘めては居ない。

所詮はただの人。

精々、暗い夜道をおっかなびっくり歩く事しか出来ないのだ。

力の無い者なんて、結局はそれしかないのだから。

居間では現在、戻って来た千枝が楽しそうに夕呼と話しているのではないだろうか？

まあその内容が万人に受け入れられる物ならば良いが、あの2人の狂った学者の熱弁など聞いているだけで頭が狂ってしまいそうになる。

取り敢えず、落ち着ける場所と言う事で俺は外に出ていた。

現在の時刻は既に0時を過ぎ、日付が9月5日から9月6日へと時を進める。

日付が変わろうと一切変わろうともせず空に爛々と光り輝く星空を眺めながら、俺は口元の寂しさを拭う為にポケットに手を突っ込む。

手を入れれば直ぐに俺の手へと触れる感触。

数々の戦場で俺を慰め、そして共に成長してきた親友。煙草とライターである。

ああ、いや、共にと言うのは語弊かも知れん。

空になった煙草の箱を持ち歩く様な良く分からん趣味は持ち合わせていないのだ。

そう言う風に考えると俺は煙草を取り替えながら生きていると言う訳だ。

何だ、俺が随分と女たらしの様に思われる表現だな。

まあ適確ではあると思うがね。

シユボツと使い古したライターに火が灯る。

この暗い闇の中、こんな小さな明かりが俺を照らす唯一の光だと思つと少し可笑しく思えてしまった。

少し先に行けば、帝都が輝かしく光っているだろう。

24時間年中無休。”休む”なんて単純な言葉すら知らない阿呆共の溜まり場。

「……ふう」

吐き出した煙。

未だ9月だとは言え、外は少し肌寒く感じてしまふ。

それは先入観ゆえの仕方の無い事なのか、それとも本当に寒いだけなのか。

どちらにせよ、外は静かなので多少の寒さは我慢するつもりだが。

「あつるえ〜？少佐、居間に皆が居るのに外で1人なんて寂しいです
すね」

「……あのなあ、わざわざ1人になる為に外に出たの。分かるか？」

「1人になりたくて外に出るなんて珍しい。僕には分からないなあ
」

……そんな俺の気分など何処吹く風と言う様に、セレナは俺の傍に
寄り添う。

先程まで顔を見ないと思っていたが、どうやらイーニアの後に直ぐ
風呂へ入ったのだらう。風呂上りと言う事で甘い香りが鼻腔を擦る
が、気が滅入っていた俺にとっては鬱陶しいだけの匂いでしかなか
った。

本人に悪意が無いと言う事がコレ程までの面倒を招くとは何とも面
倒臭い。

俺には最早、安息の地すら無いと暗示しているのだろうか。

「お前も珍しいな。1人で外に出るタイプじゃないだらう」

「玄関から外へ出て行く少佐が見えたものでしたので。追って来ま

した」

「追うなよ」

「追いますとも。何せ、私の信頼する上司殿ですから」

「敬われている筈だが、此処まで敬う気持ちの籠っていない言葉は始めてだ」

「はっはっは！」

「褒めちゃいねえぞ」

此方の皮肉を気にもせず、笑って流すこの豪傑。

昔からこんな事ばかりでは彼女の周りに居た者達も苦勞ばかりして来ただろう。

ダイナモ隊の今は亡き隊員達よ。良くぞこの女と共に戦場で戦った。俺は君達を誇りに思うよ。

「湯冷めするぞ。サッサと中に戻れ」

「ええ〜……そう言う時は『俺が暖めてやるぜ』って言って欲しいです」

「……あのなあ」

「ダメですか？」

「……」

「ダメですか？」

同じ言葉を二度繰り返す事に何の意味があるのだろうか？

より深く、相手の脳にでも言葉を刻み付ける為か？それでは、呪いではないか。

このまま俺が答えなければ、呪詛の様に延々と言葉が紡がれる事だろう。

ハッキリ言ってやろう。

それは苦痛だ。俺の精神を蝕む究極の毒だ。世界最強の”兵器”だ。

「……勝手にしろ。ただ、煙草臭くなるのが俺は知らんぞ」

「よし！」

ピタリと俺の腕に身体を密着させるセレナ。

動き辛くて敵わないが、こうしてやらなければ決して彼女が納得する事は無いだろう。

そう言う性格をしているのだ、コイツは。

何故かは知らんが、如何して彼女は俺にだけ我侷なのだろうか？

他の者達に対しては違う彼女の”素”だとも言うのか？

今まで分け隔てする事無く、全員に対して平等に接して来たつもりだったが俺は何処かで何かを間違えてしまったのだろうか。

どうか、1つだけ言わせて欲しい。

セレナよ……

「温ぬくいなあ……」と言う単語は、女性として如何かと思われる。

セレナと共に家の中に入るが、彼女はもう俺に眠気を訴えてきた。別に止めるつもりは最初から無かったのだが、寝ても良いのか本当に迷っていた様だ。

上官達が起きて居ると言うのに、自分だけ寝てしまっても良いのだろうか？

根が真面目なセレナだからこそ思い浮かぶ、抵抗力だったのかも知れない。

それに対して、俺はただ彼女の頭を撫でてやった。

気にするな、と。

俺は眠気を訴えていたセレナに寝室へ行く事を指示。

上官からの命令ならば何の抵抗も無いだろうと思いついて、セレナを寝室へと向わせた。

まったく。

根は生真面目過ぎるのだ、あの子は。

もう少し壊れても何のバチも当たらないと思いつのだが、ダメなのか？

そんな曖昧な俺の心を拭う様に、中は幾分も温かだった。

広い世界で孤立していた孤独感から解放され、周りに人が居ると言う安心感から来る安堵が身体を温めているのかも知れない。

少しばかりロマンチックな考え方だが、たまには良いだろう。

本当に、外に比べれば暖かいのだから。

さて、それでは問題の『居間』だが『今』はどうなっているのだろうか？

料理は置いて来たとは言え、奴等の事だ。

料理の減りよりも酒の減りの方が早いと先を見据えている。

それよりも神宮寺には飲ませていないだろうな、夕呼の奴は。流石に俺でも狂犬・神宮寺を止めるには些か骨が折れるのだ。

頼むから、女の子同士の平和な食事会であって欲しい。

「へえ、機体各部にスラスタを追加した推力増加ね。徹底的な速度追求ね」

「限界までチューンしなければ少佐は納得してくれませんから。それに、1000?ノ時の壁を突破した時の感嘆は今でも私の心に残っています」

「戦術機開発じゃアンタには敵わないわね。完敗だわ、こりゃ」

「いえ、そう言う香月副司令こそ学会に沢山の論文を提出なされているでは無いですか。幾つか拝見させて貰いましたが、内容は興味深い物ばかりでした」

「分かってくれる?」

「ええ。私の知識では七割程度しか理解出来ませんでした」

「……アンタ、最高ね」

「いえいえ」

うむ。

俺には分からない楽しさが夕呼と千枝の間では展開されているようだ。

自分の理解者と出会えた事がそれ程までに嬉しいのだろうか？

やはり、あれか。狂人は狂人と惹かれ合うとか……そんな事なのだろう。

理解出来ない、と言うか理解したくも無い。

楽しそうに話し合いながらも料理に手を付けていてくれるのは料理が美味いからなのか、それともただ単に小腹が空いているから適当に物を突いているだけなのか。

どちらにせよ、味を噛み締められる事も無く胃袋へと収められる食材達からの無念の呻き声が聞こえて来そうだ。

「……あの」

「な、何だ？」

「……いえ……」

それに対してクリスカと社の2人は会話をしようとして、挫折する。また会話を試みようとして、空気に耐え切れずに口を閉ざす一点張りだった。

此方は夕呼と千枝の会話よりは見ていて幾分も微笑ましい。

恥じらいを持ちながらも、それを一所懸命払拭しようとする姿は好ましいと思えるだろう。それが俺にすら心を閉ざしていたクリスカならば、尚更の事では無いだろうか？

うむ、実に素晴らしいと思える。

「それでね、私ってば龍二くんに言われたのよ。」「次も頼む」って。今まで誰も見たことが無い様な可愛い笑顔で笑いかけてくれてね……懐かしいわ」

「私はアラスカニ居る間に龍二さんに対等な相棒として認められました。「これからも宜しく頼む」と、それはもう懇願する子犬の様に」

しかし、また視線の行く先を変えれば混沌とした場へと向う事になる。

放って置けば、今にも相手に掴み掛からんとする迫力を醸し出す神宮寺と唯依の2人。

いつもならば何が起きても冷静沈着だろうこの2人が取り乱すとは随分と面倒な出来事でも起きたのだろうか？

と言うか、何故俺の名前が会話文の中に含まれている。

「可愛い笑顔」？

「懇願する子犬」？

記憶に刻んでおこう。

後でこの2人を”それ”と同じ状態になるまで扱いて、扱いて、扱き尽くしてやる。

神宮寺が戯言で俺を惑わせようとするのなら、徹底的に苛め抜こう。

唯依が懇願する様に俺に縋り付こうとも、その身体に鞭打ってでも扱きを続けよう。

言葉とは、時として人の力すら及ばない不思議な物を秘めていると言う事を身体で直接体験させてやる。是非とも、そうさせて貰う事にしよう。

さて。

夕呼、千枝、神宮寺、唯依、クリスカ、社は既に個々の世界へと飛び立った。

では此処に残っている人物は誰だと言う事になるのか、分かるだろうか？

彼女等と共に此処へ到着し、そして俺が料理を振舞った唯一と言える常識人。

伊隅みちるである。

「何だ、一人で寂しそうに飯を食うとは。周りに無視されたのか？」

「いや。話す”必要性”を感じていないだけの事だ」

「クール路線を地で行くね……昔から変わらない女だな、伊隅」

黙々と料理を食べ続けていた伊隅に対し、俺はその様な評価を下した。

馬鹿にしていた訳では無い。

俺としては、彼女が素晴らしいと思ったのだ。

昔から変わる事無く、一貫して己の有り方を変えぬまま生きて来た事。

それはとても素晴らしく、そして難しい事でもあると思う。

だが、伊隅はそれを行っているのだ。

当たり前の様だが、当たり前よりも難しいこと。

そんな事が平然と出来ている伊隅みちるは正直、凄いと思う。

「明星から……結局、私は何も学ばなかったと言う事だろう」

「あれは奪うだけの戦いだった。学ぶとすれば、それは人の死に様だけだ」

「……確かに、断末魔の呻きは嫌と言う程に耳にへばり付いている」

「それだけは忘れないでやってくれ。彼等がこの世界に残せた、最後の言葉だ。例え、それが呻き声でしかなかったとしても、俺達は

それを背負って生きていくしか無い」

「お前は……」

「ん？」

「……いや、何でも無い」

伊隅はそれ以降、言葉を紡ぐ事は無かった。

何を言いたかったのか、何を伝えたかったのか、今の俺には分からない。

ただ言える事がある。

明星作戦は、細かい事を学習する為の場では無い。

アレは人間の本質である”生存本能”を学習する為の場であった様に思う。

つまり、あの場を生き残っている時点で伊隅みちるは確実に成長しているのだ。

人として、軍人として、指揮官として、幾分も頼り甲斐のある衛士として。

それを謙遜だけはしないで欲しい。

だって、勿体無いだろう？折角の有り余った才を何に活かす事も無く、ただ死んで逝くなんて金を溝に棄てる事と何ら変わりはない。

彼女には、自分を過小評価しないで欲しいものだ。

結局、夕呼達は藤代家に今晚は宿泊する事になった。

まあ最初からそのつもりだったのだらうから、何ら驚く事は無い。

1つだけ文句があるとすれば、冗談でも「一緒に風呂に入る？」なんて言わないで欲しい。唯依とクリスカから向けられる怖い視線を全身で感じつつ、それに断りを入れる事がどれだけ恐ろしいと思っ
ているのだろうか？

……いや、夕呼ならば寧ろそれを見て楽しんでる事だろう。
性根が捻じ曲がっている嫌な女の典型例だ。

まあそんな訳で、俺は彼女等よりも先に風呂に入っている。
女の長風呂を待っていられる程、俺は気長では無いのだ。サツサと
入って、サツサと寝たい。それが今の俺の心境だった。

「……………あぁ……………」

湯船、と言う物は素晴らしい。

入るだけで身体も心も綺麗サツパリ洗われると言うもの。
思わず溜息なんて漏らしながら、普通よりも幾分か熱くしたお湯に
俺は感動している。

いや、湯船と言う物は素晴らしい。

浴槽を開発した者には心からの賞賛を送ろう。

ありがとう、こんな素晴らしい物を世に残してくれて。

「よっこらしよ」

浴槽から上がり、棚に綺麗に陳列されたシャンプーを手取る。

俺が使っている軍から支給された物とは違う、市販の物。

いやはや、女性と言うのはシャンプーの1つ1つにすら気を使うの
だろうか？

正直な話をすれば、頭さえ洗えれば何でも言いと思うのだが……
それは俺がだらしなないだけなのか？

適量を手に出し、既に濡れていた頭を洗浄する為に泡立てを開始する。

髪の色が元々白だった事もあってか、真っ白な泡と色が被さって如何にも頭に巨大なボール　アフロ　をつけている感覚に陥った。うむ、無様だ。

泡をシャワーで洗い流し、リンスを満遍なく浸透させてやる。

髪に対して何か感情を抱いているかと聞かれれば、多少はあると答えるだろう。

この真っ白な白髪頭。

誰が好き好んでこんな頭をしていると言っただろうか。

髪質も弱く、直ぐにダメージを負ってしまう。

だからこそかも知れないが、リンスは先ほどのシャンプーよりも丁寧に、そして柔らかく浸透させていく。

「いい湯だな　あははん　いい湯だな」

歌を口ずさみながら、身体を洗う為にタオルを手取る。

うむ、実に気分が良い。

最高にハイってヤツだあつ！

風呂とは1日の中でも貴重な1人きりになれる、有用な時間でもある。

身体の洗浄をしながら1日の反省をするのもよし、明日へと思いを馳せるのもよし。

人それぞれの1日の締め括りが風呂なのだ。

“何も起こらなければ”、俺もきつといつもと変わらなく1日を締め括っただろう。

だが、今日に限ってそれは起きた。

「いい湯　「龍二さん」へ？」

1人きりの空間に、何故か声が聞こえる。
僅かに背中が薄ら寒く、その原因がドアが開いた事による物だと気付くのに僅かばかりの時間を浪費していた。
では、何故ドアが開いたのか。
それは実に簡単だろう。
ドアは1人で開くものではない。人が入って来たからこそ、開いたのだ。

「え？えつ？ええつ！はあっ！？」

俺を襲う驚愕。

硝子から後ろを確認するに、どうやら入って来たのは唯依。

その格好は 生まれたままの姿にバスタオル1枚という簡素な物。
うむ。

神様、ありがとう。眼福だな、眼福。

出る所は出ており、引つ込む所はキッチンと引つ込んでいる。

素晴らしいベストボディ。

世の女性達が羨む完璧なボディ。

「お、お背中……お流しします……」

「え？えつと、あ、う、うん」

恥じらいながら背中を流すと切り出した唯依ちゃんに、俺はもう何も言う事が出来なかった。ハッキリ言ってる、コレは反則だろう。もしも俺が変態だったらどうするつもりだったのだろうか？襲われても文句は言えない格好だと言う事は理解しているのか？

いや、そもそも何故このタイミングで風呂に来た？

もつそこからして謎だらけなのだが　ま、いつか。
今はこの背中から伝わる温もりをジックリ堪能する事にしよう。

49 9月6日 皆、仲良く（後書き）

てれれれってってって

唯依のレベルが上がった

・積極性が2上がった

・懐き具合が10上がった

・好感度が0上がった（既に限界値

ほのぼのとした日常編がだんだんと、激闘へと変わる
そんな感じで待って下さい、次回

50 9月6日(2) それぞれの笑顔(前書き)

50……今度こそ、本当に50だろうか？

幻じゃないのか？

本当に、本当の50か……？

— 先ず、此処まで来られた事に歓喜している私

篋

《その程度で僕を捉えたつもりですか!?!》

何とか捉えたと安堵していた次の瞬間にはロックオンサイトを振り切り、青に塗装された不知火は唯依の死角へと機体を滑り込ませていた。

彼女は自分よりも早く、そして上手い。

たった数週間、数日の違い。

それでも、セレナ・エニックスと言う少女の学習能力は異常と言える。

少佐の変則機動にまでは及ばない物の、丁寧にロックオンサイトから機体を振り切る様などは感嘆すら抱く程の物だった。

相対した今ならばハッキリと分かる。

彼女は私よりも強い、と。

《ま、だまだあつ!!!》

振り向いては間に合わない。
ならば、振り向かず後方を突撃砲で薙ぎ払う様に撃ち抜いてやれば良い。

死角に入ったエニックス少尉の不知火には遅れる形になったが、そ

の軌跡を追う様に此方も弾幕を展開する。
射撃の発射体勢に入っていたのならば、確実に一撃は入れられる筈だ。

《 それでも温い！！ 》

通常の不知火であれば一矢報いる事が出来る行動であっても、機動力に突出したF型にとってその行為ですら無駄な物でしかなかった。 たったワントンポ。

此方へ向かって来る銃口を確認し、機体を上空へと飛翔するまでのワントンポ。

それだけで彼女の決死の思いで放った起死回生の一手はいとも容易く捌かれる。

だが、それで良い。

寧ろ、”それが良い”。

此方の真上を取った形になるF型の下を潜り抜ける様に、逆噴射で後方へ飛ぶ。

身体を覆うGが今までとは比べ物にならない程に大きくなったが、それすら厭わずに銃口を確りと敵機の背中へと向ける。

《 コレでえっ！！ 》

発射される弾丸。

装甲を食い破る音が周辺に響き、爆音が耳へと木霊する。

その光景。誰もがエニックス少尉の敗北と認識するだろう、私もあるの1人だ。

油断

戦場で最初に投棄しなければならぬ最低限の条件。

龍二さんはどんな劣勢だろうが油断も慢心もせず、己の全力で向って行った。

だからこそ、俺は勝てたのだといつも語っている。その度に私には慢心や油断を抱くなと強く警告して居た。戦場がどれだけ優勢だろうと、油断の1つで直ぐに覆される事を彼は知っているからなのだろう。

だが、此度の戦闘。

私はそれを拭いきれなかった。敵が目の前に居ると言うのに、”油断”したのだ。その結果として

《右腕一本の借り……返して貰うよ!》

右肩から先が消し飛んだエニックス少尉のF型が、爆煙の中からその姿を現す。

既に手には突撃砲が握られており、此方の動きでは間に合わない事が理解出来る。

それでも必死にナイフシークエンスへと手を当て、ゆったりと射出されるナイフを手取るうとした瞬間、機体全体を衝撃が襲う。

アラート、機体各部に深刻な障害を確認。

つまりは今回のシミュレーションでの模擬戦、私は皆が見ている前で恥を掻いたと言う事を示唆していた。モニター室で此方を見ているのであるう藤代中尉、そして龍二さんからの説教に内心冷や冷やとしながらも、私はその場を後にする事しか出来ない。

慢心した私の、完璧なる完敗だったのだ。

その失態、どれだけ悔いても拭い去れる物では無い。

剣崎

「随分と面白い結果になりましたね。まさかとは思って戦わせて見れば、驚きです」

藤代は意外そうに言葉を紡ぎ、部屋に入って来た2名へと視線を向けた。

満足そうに胸を張るセレナと今回の失態で顔を俯かせる唯依の2人だ。

上官である筈なのに下士官に負けてしまったと言う事実があまりにも唯依としては恥ずべき内容だったのかも知れない。

確かに、模擬戦の内容もあまり褒められるべき物では無かった。

拭い切れなかった油断が彼女を敗北に導いたと言っても過言では無いだろう。

だからこそ、俺としては彼女が成長してくれる事に賭けているのだが

（ 落ち込み方が凄まじいな ）

辺り一面まで黒きオーラで包み込もうとするその様子。

一言で表せば、『どよーん』。

此方には目も合わせようとはせず、顔を見せないなので表情は分からなかったが悔しがって居るのである。事を予測出来るのは容易かった。

「凄じじゃない、セレナ。まさか貴女があそこまでF型を乗りこなしているとは予想外だったわ。認識を改める必要があるわね」

「へへんっ！当然ですよ、何せ少佐の部下ですからね！」

本人達には悪気こそ無いのだろうが、千枝とセレナの言葉も何気無くとは言え唯依の心を的確に傷付けているのは明白な事だ。とは言っても、黙らせる訳にはいかないだろう。

何せセレナが此処まで成長して居たと言うのは喜ばしい事実であり、俺自身も驚きが隠せないで居るのだ。本来ならば褒めてやっても良いのだが、此処で唯依の傍を離れる事は彼女にとっても辛い事になるだろう。

だからセレナには悪いが、今は少しばかり唯依のフォローに回らせて貰う。

「お疲れ様、だな」

「……少佐……申し訳ありません、あの様な失態は二度と　　ッ！」

「ああ、いや、別にそれは気にしちゃ居ねえが……そうだな、あんな無様な真似は二度と曝すな。特に俺の前以外では、な」

「え……？」

「いつもはお堅い唯依の一風変わった仕草で男が寄って来ると面倒

「だろ？後片付け」

「なっ！そ、その様な不埒な事を考えないで下さい！！」

「言っただろっ？」俺の傍を離れるな”って。

他の男の所について行って見る、嫉妬爆発で七代先まで呪い殺しちまうぜ？」

「……ずるいです」

「奇襲、強襲、暗殺は俺の得意分野だからな」

そう言葉を紡いでやると、唯依は静かに笑った。

先程までの空気は一変し、今ではいつも通りの爽やかな空気を醸し出している。

時に言葉は強い力を持つというが、確かに偽りは無いだろう。

言葉一つでアレ程まで落ち込んでいた彼女を元氣付ける事が出来たのだ。

そこに疑う余地は無い。

「でも……ありがとうございます」

「何がさ」

突如、彼女から告げられた感謝の言葉に俺は条件反射で言葉を返していた。

このタイミングで告げられた感謝の言葉の真意が、俺には諮りかねていたのだ。

どうして感謝されるのだろうか？

俺がした事は、ただ彼女を元氣付ける為の他愛の無いお喋りだろう

に。

「いえ、エニックス少尉を優先されずにわざわざ私に……お手数をお掛けしました」

「……長い付き合いになるだろう？今までも、これからも」

「ええ……そうですね」

唯依はまた笑った。

昔に比べ、やはり彼女は良く笑う様になったと思う。

それは彼女の周りを取り囲むこの退屈する事の無い集団だからこそ引き起こせた奇跡なのか、それとも彼女自身の心境に何かしらの変化が訪れたのか。

どちらにせよ、俺にとっては喜ばしい事態である事は明白だ。

美しく、そして人々の上へと咲き乱れる桜の花の様に淑やかで穏やかな笑顔。

その笑顔はいつでも俺の心に勇気をくれる、力を与えてくれる。

だから、俺はアラスカの地でも逆境に立ち向かう事が出来たのだ。

「あつ、少佐！ちゃんと僕も褒めて下さいよおっ」

「ああ、そうだな。それじゃ……褒美をやるう。」

俺が復帰したら嫌になる程まで1対1で訓練してやるう。覚悟しておけよ

「うげえっ、そう言うご褒美は入りません！」

「遠慮するなよ、楽しいぜ？」

「一方的な虐殺ショーじゃないですか！ たった数回の訓練で、僕は何回叩き落されたか……ッ！」

「虐殺ショーか…… そうとも言うな」

「あらあら、2人で楽しそうに。模擬戦は明日よ？ 訓練続行、準備しなさい」

「了解です、中尉」

「了解しました。では少佐、次こそはご期待に副える様に奮戦します」

「頑張れよ、唯依」

唯依だけじゃ無い。

仲間達からも沢山の勇気を貰っていた。

千枝、唯依、セレナ、クリスカ、イーニア……

時間は掛かるかも知れないが、いつか、この大き過ぎる恩を返せると良いな。

クリスカ

今朝早く、昨日の晩に私達の下を訪れた4人組は帰って行った。

龍二は奴等と親しげに会話をしていた事から察するに、如何やら只ならぬ仲なのだろうと言ふ事を理解するにはそれ程までに時間を要する事は無い。

寧ろ、私達に向ける物とはまた違った感情を見せる。

絶対的な信頼と、忠義

そして硬く結ばれた強固な絆

出会って幾分もの時が経っていないとは言え、龍二は私とイーニアにすら優しかった。

決して誰に対しても分け隔てなく接し、そして悩みを抱えて居るのならばそれを解決する為に尽力してくれる様な奴だ。

だが、何故だ。

龍二が私にすら見せた事の無い表情を見せると、何故こつも胸が痛む。

何故こつも苦しまねばならない？

この感情は何だ。

胸の中を渦巻く混沌とした感情の波が、胸の中に秘められた不安を煽って行く。

怖い。

怖いのだ。

イーニアが傍に居る、だがそれだけでは物足りない、胸が苦しい。

どうして？

「クリスカ、どうかしたの？」

「え？……うつん、何でもないよ」

「でも、くるしそうだったよ」

敏感なイーニアだからこそ分かってしまう、私の胸の内。
イーニアに聞いてしまえば、楽になれるのだろうか？ 答えを聞ける
のだろうか？

この胸の内を渦巻く波の正体とは一体何なのだろう、と。

「お2人さん、ただいまマンモス！」

口を開く瞬間、私達の前に件の男が現れた。

いつも通り、何ら変わる事の無い真っ白な髪。そして張り付いた様な笑顔。

アラスカで龍二を始めて見た頃と比べ、僅かばかり伸びた髪。そして顔の傷を癒す為に巻かれた包帯。

痛々しくもあつたが、彼はそれを己の勲章として喜んで受け入れていた。

「りゅうじ、おかえり！」

「イーニア、ただいま。良い子だったかな？」

「うん。りゅうじにいわれたこと、まもったよ！」

「偉い、偉いぞ。流石はイーニアだ！」

「えへへ」

イーニアを抱き上げ、その頭を撫でる。

撫でられる度に嬉しそうに笑顔を浮かべ、龍二の首へと両手を回すイーニアの姿は年の離れた兄妹、いや親子の様にも感じられた。

“羨ましい”

心の何処か、普段は潜んでいる奥の方で、何故かそんな言葉が浮か

ぶ。

どうして”羨ましい”など感じてしまう必要があるのか。分からない。

だからこそ、今のこんな感情が怖いのだ。

「どうした、クリスカ？」

「え？」

「思い詰めていました、なんて顔だったぞ？何かあったのか？」

「……今日は、帰りが早いな」

「ああ、俺は唯依とセレナの模擬戦の風景を見学する事が目的だったから。それが見終わっちゃまったらする事もねえし、サツサと戻って来た訳だ」

ああ疲れた、とボヤキながら龍二は台所へと入って行く。

これから私達の分の食事を作るのだろっ。

気が付けば、時刻は昼時を回ろっとしていた事にすら今の私は気付いていなかった。

「……龍二」

「どうかしたか？」

「……私も手伝おう」

台所に入り、既に手を洗い始めていた龍二は私の言葉に心底意外そうに呆けていた。

あまりの間抜け面ぶりに思わず殺意すら湧き掛けたが、その後に見せた嬉しそうな笑顔に今度は胸が痒くなる。

「こりゃ意外だな……まさか自分から積極的に手伝ってくれとはさ」

「う、うるさい！私だってそう言う気分になる時もある……」

「ククツ……ありがとう、クリスカ。じゃあ、きゅうりを切って貰えるか？」

「了解した」

龍二は笑いを堪えながらも、私に笑い掛けながら料理を始めた。そんな時、ふと思う。

彼がこんな笑顔を向けるのは私以外に居るのだろうか？

龍二は皆に笑顔を見せる。

だが、それは人によって僅かな差異が見られる程の物だ。

ではこの笑顔は、今私だけの為に向けられている私だけが見る事の出来る表情？

そう思うと、何故か胸が軽くなる。

「……龍二」

「どうかしたのか？」

「い、いや、その………」

「ありがとう」

小声でそれだけ伝えると、奴は堪え切れないと云う程の大声で笑い声を上げた。

……この笑顔を独占したいと思ってしまった私は、我侷なのだろうか？

50 9月6日(2) それぞれの笑顔(後書き)

咲き誇れ、恋の花

なるべく日にちが開く事が無い様に投稿したい
うん、頑張ろう

こんな文ではありますが、
感想などがありましたら書いて貰えると私が「ヒヤッハー！」します

51 9月6日(3) 色恋沙汰は血を招く(前書き)

もしかすると、少し……えっちな話……？

時刻は既に夜の7時を過ぎていた。辺りが暗闇に染まり、家族達が続々と帰館する中でも彼は決して動じない。

彼とは即ち、剣崎龍二の事である。

この家の持ち主である千枝を始め、セレナ、イーニア、クリスカ、そして何故か夕飯を食べに来る唯依の為に毎日献立を替え、和洋を織り交ぜた料理から中華に至るまで。

様々な料理を作つて来た。

断言しても良いだろう、彼は料理の鉄人である。

しかし、そんな彼にも疲労と言う物は存在する。

今日は特に疲労が溜まっていたのだろう、珍しく一番風呂に入らせてくれと彼が自分の口から皆に申し出た。無論、それに対する全員の返答は「YES」である。

そんな優しさに触れ、龍二は意気揚々と風呂場へ向って行った。

さて。

今回の物語は此処からスタートする事となる。

大きな文字で書かれた議題「誰が少佐と共に風呂に入るか」である。しかし此処に来て、1人だけ発言権を剥奪された者が居た。

篁唯依である。

彼女は単身、誰に告げる事も無く龍二の背中を流した事があった。

その程度の情報、既に全員の耳には及んでいる事。

だからこそ今もこんな議題が掲げられているのであって、抜け駆け

をした唯依は部屋の隅で体育座りをして反省でもしていなさい、と言ふ事になったのである。

「いやあゝ 此処は僕じゃないかな？今日は疲れたし、眠いし、頑張ったし」

セレナが口火を切った。

確かに、今日の彼女は訓練に熱を入れていた。それは唯依と千枝が保障する。

彼女は確かに、頑張っていた。

疲れると言うのも当然の事だろうし、自然な流れで彼女へと波が傾こうとしていた。

がしかし、誰かがそれを許さない。

決して、抜け駆けを許そうとはしなかった。

「今日の夕飯……私は龍二の手伝いをした」

クリス力である。

いつもならば我関せずとばかりに無視を決め込む彼女が、今回は参戦したのだ。

それに思わず、セレナが息を呑む。

圧倒的優位に立っていたと思われていたが、行き成りその隣に強大な壁が現れたのだ。

いつもとのギャップ差。

“ギャップ萌え”。

何処の誰かも分からぬ人の頭の中に、その文字が浮かぶ。

「私にも、権利はあるだろう？」

スツとセレナを見返すクリスカ。
その目に留められた闘志。既に、居間は戦場と化していた。どちらかが行動を起こせば、その行動に対して一方も何かしらのアクションを起こすであろう。

拳で来るのであれば此方も蹴り。

武装するのであれば此方も武装する。

言葉で陰湿に責めるのであれば此方も言葉で。

彼女　セレナとクリスカの間には、そんな空間が出来上がっていた。

さて、勝手に盛り上がる2人を他所にイーニアと他愛の無い話をしていた千枝は思い付いた様に頬を綻ばせる。意地の悪い笑顔を浮かべると、静かにイーニアの耳元で静かに言葉を紡いでいた。それを聞き、一瞬の内に華が開花した様に満面の笑顔を浮かべるイーニア。

それを見ていた唯依は思う。

ああ、この2人の決死の戦いも藤代中尉の一言で無駄になったのか……と。

呟いた内容は簡潔な物だ。

「今の内に、少佐と一緒にお風呂に入って来なさい」と言う物。まさに漁夫の利。

現世に現れた孔明と呼ばれる程の知を誇る知将・藤代千枝の戦略だった。

もしも龍二と共に笑顔で彼女等の前にイーニアが現れたとしたら。

……想像もしたくない。

唯依は考える事を止めた。

剣崎

普通の家庭より大きいだろう浴槽。

そこに肩まで浸かっていた俺は思わずと言った具合に「ああ〜」なんて呻き声を上げてしまう。1日の終わりに熱い風呂に入る、それは何て幸せなのだろうか。

ゴキリと、嫌な音が首で鳴る。

鳴るのは首だけでは無い。

肩、腰、腕の関節から指の関節、その気になれば足の関節も鳴ってしまうだろう。

全身楽器。

今の俺を現す言葉がそんな端的な物だと言う事に、少しばかりショックを受ける。

仕方が無いだろう。

アラスカの一件以来、本当に疲れているのだから。

死力を尽くした戦闘と言う物程、後々に影響を残す物は無い。特に前回の”アレ”は体力や身体の不調だけで無く、俺に巨大な精神的ダメージを与えて行った。

今でも尚、手に残る殺しの感覚。

戦術機越しに弾丸が貫通し、一瞬であの子達をミンチにした瞬間などは一瞬だけでも思い返しただけで吐き気を催す。本当に正しかっ

たのか、本当にアレで良かったのか。
あそこで俺が死ぬべきでは無かったのだろうか？
そんな後悔だけは、幾らでも溢れ出てくる。

「……あと4人」

だが、そんな後悔も残すは4回だけ。
あと4回だけこの苦痛に耐えさえすれば、俺を縛る鎖は全て吹き飛ばされる。

長かった“因縁”ともコレで決別が出来るだろう。
そうだ。

殺せば良い。

俺と同じ様な化物は皆死ねば良い。

死んで、消えて、無くなつて、それで漸く許される。

俺達みたいな嫌われ者の化物は、共食いの果てフリックスに何処かの戦場で静かにアツサリ果てて消える運命なのだろうさ。

「りゅっじ」

「……………」

「りゅっじー！」

「え、あ、わっ、はいっ!？」

鬱になっていた気分を晴らすかの様に、胸元に何かが飛び込んできた。
た。

長く、柔らかな髪が鼻を撫でる。

何も纏わず、全裸のまま飛び込んできたイーニアを何とか受け止めるのだが、その時の俺は正直何が何だか分からない状況だった。

目の前に何故イーニアが飛び込んできたのか、そして何故此処まで嬉しそうなのか。

何が何だか分からず、ただイーニアにされるがまま抱き付かれている。

筋肉の付いた胸板に当たる彼女の小さな胸の感触にすら意識が行かず、俺はただ呆然と彼女の言葉を待つしか無かったのだ。

「りゅーじ、ずっといっしょだよ」

「あ、ああ……うん、そうだな」

「ずっと、いっしょだから……ないちゃだめだよ」

「俺は泣かないよ」

「でも、りゅーじのこころはいつもさびしい。いつもひとりぼっち」

「……そんな事はないさ」

「それは、うそ」

「……だったら、俺と一緒に居てくれ。ずっと」

「うん！」

嬉しそうに抱き付く力を強めるイーニアの頭を撫でながら、ふと思っ

……今の状況、非常に”イケナイ”のでは無いだろっか？

年は離れているとは言え、男と女が裸で抱き合っているなど

”

ビキビキ”

「ひいつ!?!」

背後から、何かを砕く様な音が聞こえる。

それは動く事など無い。

俺の死角で、静かに此方を見据えている。分かる、分かっってしまうのだ。

後ろを振り向いてはいけない。

頭が警告を鳴らす。

それは最終通達とも言える警告であり、俺の人生を左右する直感。

だが、振り向かねばならない。

振り向かねば、いつかは殺られる。それは確実なのだ。

振り向けば死。

振り向かずとも死。

ああ

「クリスカ、セレナ。おかおこわいよ……?」

俺の肩越しに入り口に立って居るのである。2人に話しかけるイー

ニア、

もう俺は空気で居よう。

空気になる。02とか何かそんな感じの気体になる。

そうすればきつと助かる。

きつと、きつと、きつと、きつと !

「龍二」「少佐」

2人の声が、ほぼ同時に聞こえる。

それも、耳元で囁かれる様に。

何故だ？熱いお湯に浸かっている筈なのに、何故か背中が冷たく感じってしまう。

心の底から凝固して行く様に感じてしまう錯覚。

怖い。心底怖い。

助けて。誰か助けて。

「お前が、きだ」「きです」

肩から聞こえる通常ならば聞こえる筈も無い程の、歪な音。

激痛なんて概念すら通り越したそれを両肩に浴びせられて、俺の意識は完全にこの世から離脱された。

藤代

「うーん……うーん……っ」

風呂場から上がったとは言え、未だに起きる気配すら無く気絶を続けている少佐。

何とか風呂場からセレナとクリス力で運んで来たとは言え、情けない姿である。

「少佐、起きないとキスとかしちやいますよ」

「ふ、ふざけるな！エニックス少尉、私の目が黒い内はその様な不埒な真似は」

「お盛んね、貴方達。男の裸の何が楽しいのやら」

「発情期に突入したこの女達と一緒にするな」

上から順にセレナ、篁中尉、私、クリスカ。

1人ポーカーフェイスを気取っているクリスカではあるが、何だかんだ少佐を一番心配しているのもクリスカだったりする。あ、同一で唯依もね。

「で？誰が彼の服を着せるのかしら。このままじゃ風邪ひくわよ」

そんな中、唯一冷静な私は彼女達に大きな難題を投げ掛ける事にした。

それは腰に1枚タオルを巻いただけの少佐に、誰が服を着せてあげるのかと言う至極単純明快な、そしてある意味ではもっとも絶大なアドバンテージを得るチャンス。

彼女達は私の予想した以上の反応を示し、その場に居た皆の瞳に闘志が宿る。

周り全てを薙ぎ払ってでも、このチャンスを生かす。

その意思を瞳がコレでもかと言う程に語っていた。

「中尉、今度は」

「ええどうぞ。好き勝手暴れて来なさい」

それぞれの得物を手に、ゆっくりと玄関から外へ向う3名。

その後姿を見送りながら、私はタオル1枚で横になる少佐の頭を軽く引っ叩いた。

「痛っ！」と情けない声が聞こえ、その後ムクリと身体が起き上が

る。

「……気付かれていましたか。ははは」

「当然ですよ」

あはは、と笑いながらも少佐はサッサと居間に用意してある自分の寝巻きに袖を通して行く。コレでまた、彼女等の壮絶な死闘は無駄になると言つ訳である。

「明日の模擬戦ですが」

「……負ける筈も無いだろうに、何か気になる事でもあるのか？」

「彼女ならば……今までに見せた事すら無い最高の機動を見せてくれる様な気がして」

「だったら明日まで楽しみは取っておく。明日は、頑張ってくれ」

「ええ」

他愛の無い会話。

彼を思う彼女達に比べれば、私と少佐の会話程に味気無い会話は無いだろう。

いつでも軍務や仕事、業務を優先させる私と彼の会話は私生活の事に及ぶ事なんて滅多に無い。それでも、私は満足している。

唯一私を認め、

唯一私を信頼してくれる彼の為、明日の模擬戦は 余裕を見せた上で、勝つ。

私は心に強く、そう決心した。

追記となるが、その後の展開を記しておく。

各自ボロボロになりながらも、何とか「3人がそれぞれ仲良く服を着させる」と言う結論に至って居間へ戻って来た。

がしかし、既にその頃には少佐は完全に起きており、居間で1人寛いでいたのだ。

千枝はお風呂に行きました。

それを見て、激怒する3人。

訳も分からぬ内にまたもや龍二が気絶する事になるのはご愛嬌である。

51 9月6日(3) 色恋沙汰は血を招く(後書き)

小さくとも胸を押し付けられるとは、龍一め……
うらやまゲブンゲフンッ！けしからんヤツだ！！

次回は模擬戦開始

借りた分は10倍にして返す予定です

52 9月7日 ああ、呆気無く(前書き)

PVが45万突破……

書き始めた当初はこんな事すら想像出来なかったが、
今では現実となって私の目に映っています

このような文を読んでいただけで、私は嬉しい限りです

剣崎

「良いのか？」

朝。

コーヒーを啜りながらポーッと新聞を眺めていた俺に、クリスカは問うた。

その問いの意味は理解している。

今日は唯依と何処の誰かも存じ上げない凡骨が戦おうとしているのだ。

彼女からすれば、此処で平然とコーヒーを啜りながら休日を謳歌している俺と言う存在が不自然でしか無いのかも知れない。

コトリ、と新聞を読む為に掛けていた眼鏡を外す。

目頭を何度か揉み扱き、少しぼやけていた視界を正常に戻すと俺はただいつもと同じ様に先程の朝食で発生した皿を洗う為に台所へ向う。

「……まさか、見に行かないつもりなのか？」

非難めいた口調で、クリスカは俺の後を追って台所へと足を踏み入れる。

最初こそ足を踏み入れる事さえ躊躇っていたこんな場所にまで平然と入る事の出来る様になった彼女は随分と成長したな、なんて関係の無い事を考えてしまった。今の問題点であるのは今回の下らない模擬戦。非難するつもりも、否定するつもりも無い。そして、篁唯依と言う少女に対しての贖罪を無くしたとしても彼女が負ける確立は万に一つも無いだろう。寧ろ、此处で負ける程度の人材を俺が求める筈が無い。

“最後まで俺と共に戦える者”

その最低限であり、絶対の条件を満たせぬ者をスカウトするつもりは無いのだ。

だが、唯依は俺が認めた。彼女ならば最後まで戦い抜く事が出来る
と確信した。

それ故に彼女は此処に居る。

それ故に ジャツカルのナンバー02は彼女以外に居ないのだ。

「結果が分かる試合なんて、見る価値も無い」

「……それは、篁中尉が勝つと言う事か？」

「それ以外に何かあるか？悪いが、俺は博打が大嫌いな性質タチでね」

「信用”しているのか、篁中尉を」

「信用”さ、クリスカ」

流れ出る流水と共に更に更に付着した汚れを洗い流しながら、台所の中にある1つきりの椅子に座るクリスカとの緩やかな時間を過ごす。

この模擬戦が終われば、サッサと横浜基地へと移動する事になる。それまでの短い時間の間に今までにあまりお互いの”身内”について話す事が出来ないで居た事を思い出し、俺は何気無しに口を開いていた。

剣崎家のこと。

強く、そして誰よりも優しくかった愛しい母である剣崎千代美。母が死に、頼りない兄にしか頼れずとも必死に生き抜こうとしていた剣崎久留巳。

訓練兵時代のこと。

唯一無二の親友であり、訓練兵時代に俺が心を開いた悪友である香月夕呼。

お互いに競い、時に協力し合った好敵手でもある神宮寺まりも。

新兵当初のこと。

死の8分なんて言葉に惑わされない為に、単機で前線に突撃をした。CPには正気を疑われ、周りの奴等は俺を見捨てたが、俺は戦場で生き残ってやった。

英雄なんて呼ばれる様になった頃のこと。

ほぼ壊滅状態だった味方部隊の殿を務め、後ろから迫って来るBE TAを皆殺しにしてやった事もあった。その時は流石に自分も母さん達の場所に逝くのかも知れないと覚悟したが、俺は何故か生き残り、そして今も此処で生きていること。

偶然だった。

俺の周りで起きた偶然が重なり、その結果として俺は英雄と呼ばれる様になった。

そんな事になってしまった今だからこそ、言える事がある。

英雄だつて所詮は人間なのだ。

英雄とは人よりも勇敢で、そして勇氣を持っていると言つ訳では無い。

現に俺は多分だが、人一倍死ぬ事が嫌だ。

例え上官に命令されようが、俺は戦つて痛みも無く一瞬で消えてしまいたい。

神風なんて論外だ。

俺は死にたく無いから戦っている。

では、英雄となる条件は何なのか。

それは非常に簡単な事だと思つ。

英雄と呼ばれる者達は人一倍臆病だが、人よりも僅かに勇敢で居られる時間が長いのだ。

もしかすれば、たった5分だけかも知れない。

そんな、たった数分の中で英雄達は度肝を撃ち抜く様な神業を魅せる。

つまりは、その勇敢になつた瞬間を見た者が勝手に英雄と祭り上げるのだ。

此方として良い迷惑である。

死にたく無い、戦いたくない、そう思いながら戦つていふと言つのに人々は決して自分を逃がそうとはしない。

寧ろ、もっと戦場に出て戦えと催促するのだ。

本当に…… 嫌になる人生である。

マブラヴ コンディションレット・オブ・ヒューマン

藤代

篁中尉が強化装備に着替えに行く中、私は待合室で来るべき時に向けてただ静かに目を瞑っていた。何だか、今の自分が普段の少佐の仕草を真似ている様に感じてしまう。

決して間違いでは無いのだろうが、だからと言って全てが同じと思われるのも癪だ。

足を組み替えながら、今回の模擬戦の舞台となる市街地を頭の中でイメージする。

敵が如何動くかをシミュレートし、それに対して此方はどの様な指示を出して、的確に出鼻を挫くべきなのか。

ダミーからの割出しで本体位置を的確に見付ける為に、マップで動き回る敵の軌道は全てマーカーでチェックを入れるべきだろう。

相手との距離に応じて、此方も武装の変更を衛士に申請する必要もある。

少々……いや、かなり面倒な仕事であろう。

偉ぶったクズを相手にするだけだと言うのに、いつの間にか面倒事

を背負った物である。

「……武御雷、か」

相手側の機体　噂と言うか、堂々と公言していたが武御雷に何かしらの改良を加えた物らしい。そも、武御雷はアレで1つの完成形として確立されていると言うのに何を更に改良する必要があるのだろうか？

あの馬鹿の事だ。

内部に使われている備品やジェネレーター、それにラジエーターなどを高級品に替える程度の事しか出来ないし、やってすら居ないだろうに。

つまりは　”改悪”されてしまった武御雷とも言って差し支え無いただろう。

不運なのは私では無く、そんな物の相手をさせられる中尉なのかも知れない。

もう1人居るとすれば、不幸な女の下に来てしまった開発衛士くんだろうか？

「　お待たせしました、藤代中尉」

「案外と早い到着ね。もう少しゆっくりしていても良いわよ？」

「いえ、時間を無駄にするつもりはありませんので」

「ハッキリ言うわね。まあでも、貴方のそう言う所には好感が持てるわ」

篁唯依を現す色と言っても良いであろう山吹の強化装備を身に纏った彼女は、緊張どころかこの勝負の事すら眼中に無い様であった。

つまりは、彼女にとってのこの模擬戦は単なる通過点に過ぎないと
言う事だ。

もっと上を目指さなければならない。

もっと高みへと上り詰めなければならない。

つまりは、サツサと少佐に追い付きたいと言う乙女らしい心情と
言う訳である。

「サツサと終わらせて帰って寝ましようか」

「ご安心を。最速のタイムを叩き出すつもりです」

美女、2人。

意気揚々と控え室を後に、目指す場所は雌雄を決する決戦場。

誇りを穢され、

夢を貶され、

覚悟を踏み躪られた借りは、10倍にして返すつもりだ。

泣き喚いても 許してやるものか。

剣崎

「りゅづじ、はじまっちゃっしょ？」

「いやいや、大丈夫、絶対余裕がある、そうだって、たぶん」

「多分……相変わらず、無計画性の際立つ発言だな」

何だかんだ言っつて、やっぱり気になってしまっるのは人間の性だろう。やはり模擬戦を念の為に見に行く事にした。

見世物では無いので観客は居ないと思うが、一応は先にあちらへと向っている筈であろうセレナに席の用意を命じ、俺達は車道をゆったりと走って居るのである。

嘘です。” ゆったり” の部分は否定します。

「ひやははっ！！最高だな、最高だぜ！身体中を駆け巡るこの、かい・か・ん！

あああああ、戦術機から離れた瞬間から恋しくなった愛しの圧力！身体を包むこの痛み、ときめき、まさにラブ！LOVE！！

ふはは、ふふふっ、クククッ、ふひひひっ、ありがとございまあっす！！」

時速100？。

温い、がこの鈍り切った身体には良い刺激である。

急カーブの際、アクセルを踏み込む事を止めずにカーブへと突っ込み、急ブレーキと巧みなハンドル捌きによってタイヤの跡をくつきり残す華麗なドリフトを決める。

そう言えば、イーニアとクリスカも居たな。

頭の片隅から僅かに漂う曖昧な記憶。だが、今は興味も関係も無い。今の、この、一瞬だけの、絶対的な快樂は 逃してしまえば味わえない。

「はーはっはっはっはっ！！楽しいなあっ、楽しいねえっ！！！！」

「あつあつ、りゅーじ、はやい……」

「っ！自重という言葉を知れ、どうしようも無いクズが！！」

結局、本来ならば5分程度で到着する筈であろう帝都へと辿り着くのに、その3倍である15分掛けてしまった。イーニアは目をクルクルと回しているし、クリスカはそんなイーニアを支えながら何とか此方にヨタヨタと歩いている。
ふむ……

「何だ、生理か？」

「っ！！こ、この……このド低脳があああ
ッ！！！！！！！！

何気無く使ってしまった言葉が、どうやらクリスカの心を抉ったようである。

顔を真っ赤にしながら振り抜かれた右ストレートを視認し、俺の意識はまたもや暗闇の向こう側へと吹き飛ばされていった、

篁

『あら、誰かと思えば篁中尉じゃありませんこと。貴方達の代表である剣崎少佐は何処にいらっしやるのかしら？まさか、逃げたなん

て事じゃございませんでしよう?』

『格下は相手にしないですよ、彼は』

『格下……格下、ですか。まあ良いですわ。どうせ、泣き喚くのは其方ですから』

模擬戦が始まる前の僅かな時間。

私を無視し、湯森大尉は藤代中尉にのみ敵意を向ける。

まるで私など 眼中に無いとでも言いた気だ。まあ元々、此方も其方など眼中にすら無かった二流以下の開発者なのだろうが。

《 藤代中尉》

『ああ、そうね。それじゃサッサと始めましょう?お互いに時間の無駄でしょ』

『まったくです』

下らない一方的な口撃は終わりを告げ、ウィンドウが消える。それと同時に辺りに展開される今は廃墟となった市外の映像。立体的で、何処か儂さすら感じられる景色に一瞬胸が詰まる。

『何か心配な事でも?』

《いえ、気の迷いです》

その感情すらバツサリと斬り捨て、今は目の前の敵 武御雷に集中する。

製作者の頭が捻じ曲がっているとは言え、乗り手と機体は一流品で

ある。

少しでも油断をすれば、手痛い反撃を貰う可能性も十分に考えられる。

丁寧に、そして的確に倒しに行くべき相手なのかも知れない。

『では……状況開始。敵12時方向に1機、武御雷を確認』

先程までの開発者としての顔を引つ込め、今度はCPとしての藤代千枝中尉の顔がウィンドウに投影される。先程までの軽口や余裕すら感じさせた態度は影を潜め、今は的確に此方が求めるべき情報を口に出すよりも速く此方へ的確に伝えてくれる。凄まじい才能である。

『敵機、インファイトを主軸に展開する模様』

《了解》

敵の意図を此方が先読みするだけで無く、接近戦を挑む相手がばら撒いたダミーから逆算して敵の位置を直ぐ様に割出す様などは感動してしまうなんて生易しいレベルでは無い。

既に彼女の存在自体が、人間芸術なのだ。

接近する武御雷の機動に合わせ、此方は詰められた距離の1.5倍程の距離を開ける。

機動力だけで見れば此方が圧倒的に優勢なのだ。このまま、距離さえ詰めさせなければ逆に相手の緊張を煽る事も出来る。

だが 1つだけ気になる事があった。

何故だろう。

何故、私の相手をするこの武御雷は何故こつも鈍足なのだろうか。

本来であるならば世界有数のパラメーターを持ちえる筈の武御雷が容易にF型に引き離されているのだ。コレでは、考えられる事は1

つでは無いか。

そう、重量過多である。

そんな中途半端な性能で纏め上げられている武御雷には親しみすら湧かない。

そこにあるのは、虚しさと怒りだけである。

《温過ぎる……》

まるでスローモーションの様な温い動き方をする腕部。

此方を穿つ為に向けられた銃口から機体を容易く逃がし、堅牢な装甲 だが鈍足である為にただの的と成り下がった を持つ武御雷へと突撃砲が放たれて行く。

カンカンツと虚しい音が辺りに響き、次の瞬間には武御雷が豪快に体勢を崩していた。

脆く、遅く、弱い。

これが本当に開発者の作るべき機体だと言えるのだろうか？

こんな機体で戦場に出ると言う事は、結局は無駄に積まれた金を全て溝水に流していく事と何ら変わりないだろうに。

つまり

《消える、出来損ない》

存在する価値すら許されて居ない、粗悪品だと言う事である。

「……俺は、今回の模擬戦について何と無くだが重要な物だと認識していた」

「それは、私も一緒だ」

「だが、なあ……こりゃ……ある意味では一方的な暴力と一緒にじゃねえか」

「……そうだな」

「なあクリスカよ」

「何だ」

「唯依は怖えな」

「……お前が絡んでしまうからだろう。いい加減気付け」

「え？何それ、どう言う事なの？」

モニタールームで模擬戦と言う名を冠した一方的な暴力が展開されている中、俺とクリスカはその光景を呆然と眺めていた。

イーニアと言えば、先程からクマとウサギのぬいぐるみで遊んでいる。

実に幸せそうであった。

ふむ、眼福である。

「こりゃ……確かに今までに見た事も無い”最高の機動”だな、千枝」

今は此方では無く唯依の管制に付いているのであろう千枝に向かい、俺はただ力無く昨日のジョークに言葉を返す事しか出来なかった。

何ともまあ、俺の血を色濃く受け継いでいらっしやる。

俺の子供じゃねえがね。

52 9月7日 ああ、呆気無く(後書き)

投稿間隔が開いてしまいました

なるべく迅速に仕上げて行く様に此方も精一杯頑張ります

53 9月9日 合流と再会(前書き)

何だろっ

このまま話を進めると龍二が、ロリコンと認識されそうです

……イーニア、可愛いですねイーニア

剣崎

「話がとんとん拍子に進み過ぎだと思えます」

「例えば、先日の模擬戦もそうでした。あっさりと唯依ちゃんが勝っちゃって、あれだけ『重要な戦いだぞ』とか匂わせて置きながらあの圧勝ぶり」

「正直ね、そう言うのは如何かと思うの。相手側の開発者も泣きながら逃げ帰っただけじゃない？結局は何がしたかったの、君達」

「と言うか、いくら何でも 横浜基地からスタートって如何なの？」

そこで息を吸い、俺は空を仰ぐ。

ああ青い。どうして此処まで青いのだろうか。何故か知らないが無性に腹が立つ。

コッチは地表を這い蹲って、必死で生きていると言うのに。

雲さんは見ているだけですか。ああそうですか。

いっそ、何もかも綺麗に吹き飛ばして真正銘の快晴にしてやろうか？

丘の上にて廃墟となった街を見下ろす形となる国連軍横浜基地。

そこには多種多様の悪魔が住まう。

性悪女とか、

酒乱女とか、

自分勝手女とか、

たまに見せる上目遣いが異様に可愛い女とか。

まあほぼ2人に限定されていると言うのは割合させて貰った方が良いでしょう。

何が言いたいかと言うと、だ。

帝国の制服を着た2人と外国人3人の組み合わせなど、普通では有り得ない。

それが現在、横浜基地の廊下を闊歩しているのだから当然と言えば当然だろう。

見るな、頼むから。檻の中に居る動物じゃあるまいし。

因みに唯依ちゃんの後日からの参戦となる。

向こうの荷物整理とか、転属届けなどの書類作成が面倒なのだろう。

「……鬱陶しい」

「クリスカ、そうイラついちゃダメだよ？此処はこれから僕達の家になる訳だし」

「たまには良いフォローも出来るじゃねえか、セレナ」

「たまには、って言うのは入りませんよ」

苛立たしげに顔を歪ませたクリスカに対し、セレナはあくまでも冷静に意見を述べる。

此処で面倒事を起こし、基地内で孤立する事は避けたい。

いや、多分起こさないとはい思うが……念の為に言うヤツである。

「それよりも。僕達って如何いう待遇に？」

「あくまでも俺の部下……まあ特殊部隊の一員って所だな」

「それなりの権限は認められていますし、パスコードも新たな物に一新されます。

各自の部隊に与えられる個室も完備されていると、至れり尽くせりですね」

「この世は Give & Take が基本だ。千枝、油断だけはするなよ。」

「あら。それは少佐のお友達に向けての言葉ですか？」

「そりゃそうだろ。魔女を今風に形成すればあの形になる、絶対に」
確信出来る。

アレの前世は十中八九の確立で魔女だ。間違いない、間違いの筈が無い。

あんなに性根が捻じ曲がっているのだ、普通の人間の筈が無い。

もしかすれば内臓の作りも違っていて

夕呼のヤツ、根本から人間じゃ無いのかも知れない。

……悪ふざけが過ぎたか。

これ以上は止めておこう、社に報告されたら面倒な事になる。

暫く歩いていると、俺達に割り振られた個室が見えて来た。

他の部隊に割り振られた場所からも遠くに位置しており、機密性の高さなどを仄めかしている。だが逆に、この様に明確な壁を作ってしまう方が人にとっては興味が向いてしまうのでは無いだろうか？
少なくとも、俺だったら気になるだろう。

「取り敢えず、お前達は個室待機だ。俺は指揮官に挨拶してくらあ
「りゅうじ、はやくかえってきてね」

「……すまん。凄く罪悪感が募るが、夕呼が関わると約束が出来ん
与えられた個室を出る際、イーニアが上着の袖を掴む。

いつもなら笑顔で頭を撫でてやる場面なのだが、香月夕呼が関わっ
てしまうと如何にも確約と言う物が出来なくなってしまうのだ。

瞳に涙を溜め、訴えて来るイーニア。

約束をするまでは、是が非でも離すまいとして居るのが何と無くだ
が伝わって来る。

慕われている事は素直に嬉しい。

だが……

イーニアの視線に合う様に膝を折り、両頬に触れる。

少しばかり体温の低いイーニアの両頬を抑え、確りと俺は彼女の瞳
を見詰めた。

うるうる。

瞳が涙ぐむ彼女のおでこに軽く口付けをしてやる。

「良い子に出来るな？」

「……うん」

「大丈夫。直ぐに帰って来られるさ、心配は要らないよ」

「ほんと？」

「俺は嘘があまり好きじゃない」

「それじゃ、まつね」

ふわふわとした笑顔を向け、イーニアに見送られながら個室を後にする。

「良いなあ、イーニア！」

「……………はあ」

出掛かりの際、セレナとクリスカが何やら言っていた気がするが気のせいと言う事にしておこうか。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

伊隅

副司令より、価値は一国の軍隊に匹敵するとまで言われた男。それが剣崎龍二である。

戦術機の操縦技能だけでなく、ハッキング・偵察・暗殺などの戦闘

に必要な重要部分全てに通用する技術を持ち合わせた究極の1。

個である事は不利であると言う概念など吹き飛ばし、寧ろ個である事が有利なのだと言わんばかりの活躍を見せて来た男でもあるのだ。

「貴様等、粗相の無い様にしろ。相手は帝国の英雄だ」

「日本が誇る最高戦力の1人……是非ともお目に掛かりたいものです
すね」

「やめておけ、宗像。遊びに付き合ってくれる御仁では無いぞ」

「おや。それは残念です」

「私も、是非会ってみたいです。日本が誇る最高の逸材に」

純粹な風間に比べ、宗像は飄々としている。

本当に残念なのか如何か疑ってしまう程に呆気無い退き際に、思わず溜息を吐いた。

彼はあまり人種や、階級を気にするタイプの人間では無い。

とは言え、こんな半人前共の他愛の無い悪ふざけに付き合ってくれ
る様な寛大な精神を持ち合わせているのだろうか？

途轍もなく不安である。

「……剣崎少佐、か」

そんな中、いつもならば真っ先に”男”や”英雄”と言う単語に反応するのであるう者からの反応が無かった。伊隅ヴァルキリーズ突撃前衛長を務める、速瀬だ。

何かを思い出そうとする様に唸りながら、ただジーっと着席しているままだった。

その姿を見て、部隊の皆が思う。

“珍しい”、と。

「シミュレーターでの戦歴は全戦全勝無敗の王者」

「銃を取らせれば無敵のガンマン」

「刀を取らせれば最強の侍かゝ。凄いねえ」

「す、凄いよね。生きた英雄なんて初めてだよ……！」

「そりゃ英雄なんて普通は会えないし……それに、剣崎少佐って言ったら超が付く程の有名人で、各地で引つ張りダコだろうからね」

興奮気味に語る新人達。

上から順に高原、麻倉、柏木、築地、涼宮。

各々がこれからこの場に現れるであろう雲の上の存在に思いを馳せていた。

「ああ、確かに引つ張りダコだったぜ？もしかすれば、日本の最北端から最南端まで戦術機で制覇しちまったかも知れねえなア」

部屋の中から、聞こえ覚えのある声がする。

だが、誰一人として彼の侵入に気付く事は無かった。

誰にも気付かれず、彼 剣崎龍二は此処へ侵入したと言うのだから。

もはや、その技術を疑う術など無い。何から何まで一流の天才。

その当事者である剣崎少佐はただ、楽しそうな微笑を私達へと向けていた。

速瀬

『この世界から誰かが居なくなろうとも、君がそれを忘れぬ限り繋がりは永遠に続く。

無くしてしまったモノの存在が大きいのなら、心に刻め。

だが、それにしがみ付こうともするな。前を見て、しっかりと歩んで行け』

大切な者の死に直面し、あの時の私は地に足が付いていなかった。

風が吹けば飛んで行ってしまふ様な、そんな不安定な存在。

それがあの時 明星作戦が終わった当時の情けない私の姿。

そんな情けない姿を晒し、いつその事何もかも無くしてしまおうかと心の隅で考えていた私の耳に、ただその言葉だけが確りと、重く、届く。

“生きる”意志すら掻き消え、ただ憎しみで戦い続けようとしていた私に”待った”の声を掛けた人が居た。夕陽を背に立っていた私には、その人の顔だけは確認する事が出来ない。

だがそれでも、声だけはいつまでも耳に残っている。
確りと聞こえる程の強い思いの籠った声の筈なのに、
何故か耳を塞ぐだけで簡単に拒絶出来てしまいそんな不安定な声。

その声には嘲りも、慰めも、悲しみも、何の感情も含まれて居ない
様だった。

そのクセ、何故か懇願する様な弱い部分と導こうとする強い部分を
含んでいる。

何とも不可思議で　そして、暖かな声。

『間違えるなよ、選択を。』

俺の様な屑には……君の様な優しい子がなっちゃいけない』

自分を屑と呼び、声の主は出会ってたった数分　もしくは数秒か
も知れない私を”優しい子”と呼んでいた。何故、私の事を何も知
らない筈のクセに。
如何して”優しい”と言い切れるの？

『人の死を悼み、その人の為に涙を流せる君は十分に優しいと思っ
がね』

声の主はそれだけ告げると、私に背を向けて歩き始めた。

その先には　何十と言う帝国軍の兵士が列を成し、寸分狂わず一
斉に彼に対して敬礼を行う。それを見た彼は鬱陶しそうに右手を上
げると、何かを思い出したかの様に此方へとまた顔を向けた。

『次に会った時までには、そうだな……戦う理由を是非とも見つけて欲しい』

ただそれだけ。

それだけを告げ、結局声の主は多数の兵士達と共に私の前から姿を消してしまった。

名前も、顔も分からない。

ただ覚えて居るのは、未だに記憶回路に巢食う声　そして”約束”。

次に出会った時に、私は胸を張って彼に言っただけだ。

「答えは見付かりました」と。

「あ！」

「ん？……ああ、君はあの時の子か」

素つ頓狂な声に反応する様に、少佐は此方へと視線を移し　そして思い出したかの様に何度も頷き始めた。感心する様に、そして噛み締める様に。

「ああいや、アレですよ、少佐……あのですねえ？」

思わずと言った事態に上手く言葉に纏められず、視線が宙を泳ぐ。そんな私に助け舟を出す様に　少佐はただ静かに、昔の問いを投

げ掛けた。

「教えてくれ、戦う理由は見付かったのか？」

今までの笑みとは違う、まるで包み込む様な穏やかな微笑。

嘲りも、人を見下した態度も無い。ただそこに居るのは 英雄と呼ばれる男のみ。

組んでいた足を組み替え、彼は答えを聞く事を楽しむ様に瞳を閉じていた。

「はい。見付かりました」

「綿雲の様な不安定さは無いな……良い顔付きだぞ、中尉」

私の答えに満足したのか、少佐はただ挑発的な笑みを向ける。

“この程度で満足するなよ？”

瞳だけが、そう告げている様に感じられた。

英雄と呼ばれる男、剣崎龍二。

伊隅ヴァルキリーズに新たに、強大で、強力で、凶悪な戦力が
此処に、着任した。

53 9月9日 合流と再会（後書き）

速瀬は出来る子

だからきつと龍二を奪われると思った唯依ちゃんに挑戦を挑まれても押し負けない筈であるう

だって、ヴァルキリーズだもんね！（オイ

54 9月9日(2) 戦乙女の底力(前書き)

バトルです

久しぶりに書くバトルに、私自身ビクビクしています

”茜”

自己紹介なんて口でもしても意味はねえ。派手にやろうぜ？

この言葉が、ある意味では全ての引き金となったと言っても過言では無いだろう。

取り敢えずだが少佐は頭で理解するタイプの人間では無く、身体に刻み込むタイプの人間だと言う事は理解出来る。

とんどん拍子に事が進んだ事は良かったのだが、伊隅大尉は呆れ顔。それとは正反対に速瀬中尉の顔には不適な笑顔が携わっている。大方の事だが、英雄とまで言われた相手と戦うと言う事で興奮でもしているのだろう、恐ろしい程の戦闘^{バトル}狂である。

「大尉いゝ！私が少佐とやりますよ、是非ともやりますって！」

「落ち着け、速瀬。相手は剣崎少佐だぞ。此処は確実な手で攻めるべきだ」

「速瀬中尉は随分とこの模擬戦で興奮しておられる様ですね。ああ、そうでした。戦闘で敵を薙ぎ倒す事に快感を覚える捻じ曲がった性癖を」

「むうなあかたあつ！」

「冗談ですよ」

宗像中尉の合いの手に速瀬中尉は怒りを露にし、いつも通り宗像中尉はそれを軽くあしらう。ある意味で、速瀬中尉の手綱捌きが一番上手いのは宗像中尉なのかも知れない。

「涼宮、お前の姉を呼んで来い。今頃は副司令の隣で雑務をこなしている筈だ」

「あ、はいっ、了解しました！」

突如として命令された事に驚いてしまったが、何とか平静を装って敬礼を返す。

お姉ちゃん　涼宮中尉を織り交ぜての作戦会議、だろうか。

伊隅大尉、過去に類を見ない程に本気でこの1戦に望むつもりなのかも知れない。

剣崎

「ただいま。土産話を持って来た」

「おかえり、りゅうじー！」

ドアを潜ると同タイミングで此方へとイーニアが駆け寄ってくる。トコトコと向かって来るその仕草は見ていて全くと言って良い程に飽きない。

寧ろ、半永久的に見ていたい欲求に駆られる程である。

駆け寄って来たイーニアを抱き上げ、愛おしい頬へ触る。

いつ触ってもヒンヤリとしていて、それで居て柔らかくて気持ちが良い。

誰に嫁に出しても恥かしく無い娘である。

……いやいやいや！ふざけるな、娘は誰にもやらんぞ！？

「少佐、土産話って何ですか？どっちかって言うと悪い予感しかないけど……」

「はっはっは」

「いや、笑ってないで」

「はっはっはっは」

「……ああ、面倒事なのね」

セレナは何処か諦めた様に溜息を吐き、俺はそんな彼女を見ながら笑っていた。

決して面倒事では無いと思うのだが、まあそれは人それぞれが決める事だ。

今の俺達がしなければいけない事は目の前に立つ壁を叩き壊す事。

「模擬戦、ね……ブランクとハンディを背負ったままでやるつもりですか？」

「そのブランクを埋め合わせる為に濃厚な内容にしたつもりだぜ」

「濃厚過ぎると思いますが……分かりました。善処はします」

「助かる、千枝」

「貴方の相棒として、全力でサポートをする事は当然ですよ」

呆れた、と言わんばかりに笑いながらも千枝は模擬戦を承諾した。既に長い間、俺と共にあった彼女は分かかって居るのかも知れない。こつも滾り始めた俺の本能が易々と燃え尽きちゃくれない事を、それを沈める為には盛大に暴れなきゃ済まないと言う事も。昔から彼女には迷惑を掛けっ放しである。

「クリスカ、祭り事の始まりだ」

「……まだお前との決着も付けていないと言うのに、共闘か」

「だからこそ尚更、この”模擬戦”でアプローチをしてくれ。俺がお前を押し倒したくなっちまう程、情熱的で熱烈なラブコールを期待するぜ？」

「……お前も」

「ん？」

「……何でも無い」

「クリスカ、りゅうじにいいたいことがあるの？」

「っ！？良いのよ、イーニア。大丈夫……たいした事じゃないから」
「「????」」

イーニアと共に、頭に”？”マークを浮かべてしまう俺を他所にセ
レナとクリスカは強化装備に着替えるからと、俺を強引に外に追い
出した。

……さて、楽しい模擬戦は目と鼻の先である。
俺自身も多少のブランクと僅かばかりのハンディを背負っては居る
が、他4名の仲間達が優秀過ぎるので何の問題も無いだろう、多分
まあ問題があるとするれば 俺とクリスカ、そしてイーニアは仲間
を思いやる心なんて持ち合わせちゃ居ないって事だろうか？

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

《A 01 伊隅ヴァルキリーズ》

ヴァルキリーズ01 伊隅みちる

ポジション：迎撃後衛 使用機体：不知火

ヴァルキリーズ02 速瀬水月

ポジション：突撃前衛 使用機体：不知火

ヴァルキリーズ03 宗像美冴
ポジション：迎撃後衛 使用機体：不知火
ヴァルキリーズ04 風間栲子
ポジション：砲撃支援 使用機体：不知火
CP 涼宮遙

《ジャッカル隊》

ジャッカル01 剣崎龍二
ポジション：突撃前衛 使用機体：不知火F?型
ジャッカル02 セレナ・エニックス
ポジション：強襲掃討 使用機体：不知火F型
ジャッカル03 クリスカ・ビャーチエノワ、イーニア・シエスチ
ナ
ポジション：強襲掃討 使用機体：チエルミナートル
CP 藤代千枝

- 1．模擬戦は実機で行う
- 2．規定された作戦領域内からの離脱は撃墜となる
- 3．各チーム共にリーダー機（01）となる機体を撃墜された場合は敗北となる
- 4．敵オペレーターの回線以外は全てオープンとなる

パツと提示されたお互いを縛る規律。
細かく無いとは言え、規律を作らなければ万が一の事態も考えられるだろう。

それを回避する為の規律とは言え
些か、此方側の条件は厳しいとも言える。

数的な不利は勿論の事ながら、リーダー機撃墜が敗北と言うのも中々に厳しい。攻めるにせよ、守にせよ、どちらを選ぼうが此方は数が1機少ない状態だ。

それを補う為に用意された仲間内での通信なのだが、それすら敵に聞かれる可能性を秘めていると言うのが更に都合が悪い。

唯一頼る事の出来る物は、千枝の管制だけとは……厳しい条件である。

これを考え付いた奴　　恐らく、香月だろうが　　は性根が腐り切っているだろう。

《各機前進。敵との距離に留意し、適性距離で待機》

千枝の号令と共に、統一感の無い3機の機体が一斉に足を踏み出す。国も、思想も、何もかもバラバラな4人が織り成す　　統一感のある最高の戦い。

披露してやろうじゃないの。

《”作戦”通り頼むぞ。流石に、俺1人じゃあの数は捌き切れん》

《了解。作戦通り行きます！》

《03、任せたぞ。今回の主役はお前達だ》

《了解した》《うん。がんばるね、りゅうじ》

リーダー機である俺が突出し、その両サイドを固める様に02と03の機体が続く。

“作戦”と言える程に立派な物では無いとは言え、この模擬戦に望

む際にチーム内で軽い打ち合わせをする時間を貰っていた。その間に考え付いた簡素な作戦ではあったが、こう言ったガチガチに思考を回している相手には良い転換となるかも知れない。

“Simple is best” 単純である事が一番なのだ。

《速瀬、向こうも貴様との真つ向勝負を望んでいる様だぞ》

《上等おっく！！英雄だろうが何だろうが返り討ちにしてやりませよお！！》

《王将自ら出陣とは、呆れたな》

《それだけ自信があると言う事でしょうね……》

対する伊隅ヴァルキリーズの隊列も前衛である速瀬を前面に。その後方両サイドを宗像、風間がフォロ。最後尾に伊隅が全距離援護の存在としてズッシリと構えている。成る程、確かに速瀬も安心して攻める事が出来る訳だ。

《千枝、大将は一番奥だ。覚えておけ？》

《確認しています。参考程度に頭に留めておきしょう》

参考程度、と言いながらも既に伊隅の位置をマップ内にマーキングしている辺りは流石と言えるだろう。作戦が見事に成功すればそれはもう爽快な図が出来上がる筈だ。

何とか完成形まで持っていければ良いのだが……

《このままリーダー食っちゃえば、私達の勝ちよね！！》

《速瀬、不用意に出過ぎるな！相手を考えろ！！》

少しばかり浮かれている速瀬を嗜め、向こう側も定位置で待機している。

隊列は崩さず、正攻法である数を武器とした攻めで此方を落として来るのだろうか？

どんな手段を講じられるにせよ、此方はもう個々の腕前で補って行くしか無い。

《状況開始を開始します！

敵、不知火を4機確認。後方リーダー機と認定、其方のマップに情報を随時転送します》

《燃えて来たぜ》

千枝の声と共に敵が動き、その動きに対する様に此方も距離を保つ。お互いに隙を探り合う様な軽い挨拶。

それが何とも鬱陶しくて、久しぶりの高揚感と共にフットペダルを強く踏み込んだ。

元々、俺が前に出る事は作戦で最も重要な事なのだ。

後は精々、呆気無く落とされない様に注意しながら暴れまわれば良いだけのこと。

俺は俺の成すべき仕事をこなす。此処まで来れば、それだけの事である。

” 遙 ”

『敵リーダー機、接近中。まさか、単機で……？』

黒い不知火の改修機が前に出る。

追加装甲で前方からの射撃に備え、開いた右腕には突撃砲を装備していた。

接近する敵機に対して、大尉達の取った行動は”迎撃”。

射撃範囲まで敵を引き付け、一気に撃ち抜くと考えていたのだろう。ただ 相手も馬鹿では無かった。

《消えた……！？》

《違う、宗像！右側から来るぞ、構えろ！！》

トリガーを振り絞ろうと言うタイミングで、敵機がロックオンカーソルから掻き消える。

カーソルの処理が追いつかない程の速度でロックオンを振り切ったのだ。

本来ならば、中に居る衛士もただでは済まない筈なのに。当たり前のように、軽やかに急速ダッシュを行う。

『敵、射撃圏内に侵入！各機迎撃用意を！！』

《言うだけなら簡単だけどねえっ、速過ぎて……ッ！！》

水月が苦虫を噛み締めた様に表情を歪める。

ロックオンをしようとする度に、そのカーソルを振り切りながら4人を徹底的に攪乱しているのだ。大尉ですら、その出鱈目な機動に表情は暗い。

『ヴァルキリー04、敵リーダー機が其方に向っています!』

《ッ……まるで、雲を掴む様な気分ですね》

風間少尉は眼前を通り過ぎる敵リーダー機に対して射撃を行うも、当たり前の様にそれは回避される。否、回避と言うよりも敵機を捉える事すら出来ていない射撃など避ける必要すら無いだろう。運良く当たれば、それは儲け物だが。

《涼宮、他2機の様子は如何した!》

《残りの敵2機は周囲を旋回中!憶測ですが、リーダー機による攪乱の後に奇襲を仕掛けて来るものかと思われませう》

《見え透いた策だが……聞いたな、お前達!警戒しておけ!》

《《了解!》》

そうだ。

リーダー機である剣崎少佐の機体以外にも、敵は残っている。

今は何のアクションも取ってこそ居ないが何のアクションもしないまま突っ立っていると言う事はまず有り得ない。必ず、攻めに来る時が来る筈だ。

《ちょこまかとおっ!!》

痺れを切らした水月が、薙ぎ払う様に突撃砲を乱射する。

敵の通った後を撃ち抜いているだけの弾は敵を穿つ事など無く、無駄に弾を浪費しているだけに過ぎなかった。それでも、この高機動

を相手にするには仕方の無い事なのかも知れない。こんな速度で移動を繰り返す機体など、世界中のデータベースを探しても見付かりはしないだろう。

ある意味では、対策方法すら浮かばない厄介な敵と当たったと言っ事になる。

《速瀬、無駄撃ちは控えろ!!》

《ですが、大尉……流石にこれでは此方の集中力が持ちません》

《我慢比べにしても、あちらも一向に疲れた気配すら感じさせませんし……》

《……仕方あるまい。敵の策に乗る》

《では、後列の2機は?》

《貴様等が担当しろ。私と速瀬はこのまま、敵リーダー機との戦闘を続行する》

《《了解》》

《涼宮、移動の合図を頼む》

『了解しました』

2対1と2対2の図。

だが 剣崎少佐との力関係が2人で当たる事で購えるとは思えなかった。

4人の時点でも攪乱されていたと言っのに、その半分となった2人

で何処まで抵抗する事が出来るのか。それとも、宗像中尉と風間少尉が敵を撃墜する事に賭けているのか。

『03、04!』

《良い結果を残せると良いのですが……》

《樗子、行くぞ》

改修機の横を通り抜け、2機が後列の元へと向う。

途中、敵もその存在に気付いていた様だが既にターゲットを絞った様だった。

『敵リーダー機、来ます。接触まで……3秒きります!』

《速瀬、死ぬ気で耐えろ!良いな!?!》

《了解!大尉こそ、私の背中を頼みますよぉ!!!》

前方からの一本道。

片腕に追加装甲を携えた改修機が、圧倒的なまでの速度を持って水月達に牙を剥いた。

追加装甲と長刀が盛大な火花を散らしながら交わる。

その衝撃を押し殺す為に後方へと少しバックステップし、敵の連続攻撃を誘う為にその場から動かずに待機する。攻めに来るのであれば、真正面から叩き潰す。
だが

《速瀬、追うな！》

《どうしてですか！？またさっきみたいにピヨピヨ飛び回られるよりは……ッ！》

《誘っているつもりだろうが、簡単には行くものか》

やはり伊隅は良く分かっている。

此方との力量差を理解した上でも、何とか勝ちに行く為の筋道を必死に頭の中で計画しているのだろう。その為には速瀬の力は必要不可欠、此処で危険な橋を渡る訳にはいかないと言う事か。

《追い掛けて来ないのか？遊ぼうぜ》

《安い挑発だ。速瀬、距離を取って応戦するぞ》

《ちえっ……りよお〜かい》

此方側の思惑通りの状況は作り出せた。まあ、向こうが乗ってくれただけの事だが。とは言え、まだまだ俺に掛かる負担は大きい。ブランクの所為で機体を上手い具合に動かす事が出来ず、アラスカで負った怪我も視界を僅かに歪めさせている。長時間の戦闘には、耐えられそうも無かった。

こんな状態で喧嘩を売った俺の自業自得ではあるのだが……負ける

と言うのだけは納得出来る物では無い。

《やるか》

多目的装甲を前面に、敵の射撃を全て弾き飛ばす為に展開する。

ルートは直線とは言え、敵は2機。弾幕を張られてしまえば回避する間も無く叩き落される可能性も棄て切れない。ならば 盾が破壊される前に此方が敵の懐に乗り込む。

ほぼ硬直無しで加速するF?型の行動先に合わせる様に、伊隅からの突撃砲が盾の対窮地を削る。ペイントの色で、盾の表面は鮮やかに華を咲かせている事だろう。

《動くなよ》

突撃砲の射撃時に僅かに出来るタイムラグ。

その際に此方も盾の陰から伊隅に向けて射撃を行って釘を刺す。

《くっ……!?!》

あちらも盾を構え、此方の射撃を凌ぐと廃墟へとその身を隠す。

強襲か、それとも今は大人しくしている速瀬の援護の為の下準備か。どちらにせよ今は伊隅よりも速瀬だ。どちらかと言うと、切り結んでくる彼女の方が俺にとっては厄介な相手である。射撃は銃口の向いている場所を確認した後には回避すれば良いが、接近戦だとそうはいかない。気付いた時には遅かった、などと言う事は意外と起こり得る事態なのだ。

《……千枝、敵の位置は?》

『伊隅大尉は先程の隠れた廃墟から移動していません。速瀬中尉は

……大きく旋回中。予測ですが、此方の背中を取るつもりでしょう』
此方の背後を取る際に伊隅が注意を引き付け、僅かばかりにでも出来た隙を無理矢理速瀬が挟じ開けると言う事か？どんな策を使われるにせよ、芽は早目に潰すに限る。

幾ら何でも彼女達の相手を1人でするのは辛い。

俺が今までに相手にした事の無い相手 個人の強さでは無く、誰かと組む事で本当の実力を発揮するタイプは厄介であり、そして面倒でもある。

《速瀬を潰すつもりか！？》

ほら見た事か。

速瀬を潰そうと動こうとした途端、廃墟の陰から伊隅機が此方を狙い撃とうとする。

此方の動きに合わせ、相方が出鼻を挫く。

迂闊に背を向ける事も許されず、釘付けにされるしか無いのだ。

此処は3人に賭けるしか無いか。

ああ、もう……本当に面倒な事だ。こんな事なら喧嘩なんて売らなきゃ良かった。

後悔するにも時は過ぎ去った後である。

残り時間は精々、落とされない様にピョンピョンと飛び回るしか無いだろう。

さて

持て囃された手前、簡単に落とされる訳にはいかないな。

命懸けで足掻くでしょうか。

セレナ

《僕は右側の人をやるから、君達は左側の人をお願いするね！》

《勝手に決めるな、と言いたい所だが……口論をしている暇は無いか》

此方へと向かってくる2機のTYPE-97に対し、僕達の取った行動は至って単純だった。

2機で組んでいる相手方を孤立させ、各個撃墜。

たったそれだけの事である。此方へと全速力で向かって来る片方の不知火だけにクリス力達は弾幕を集中させ、その援護をしようと構えた不知火の顔面に蹴りを一撃。
うむ。

やはり今日も僕とF型は完璧だ。

半ば倒壊したビルに背中から突っ込み、土埃を上げる不知火から距離を取って僕も地上に降り立つ。クリスカとイーニアも、向こうで派手にやらかす事だろう。

だが、彼女等の心配をする必要は無い。

あの2人も 少佐が認めた背中を預けるに値する人物なのだから。この程度の戦闘で落とされる様な柔な技術では無いだろう。

それに、今の僕が成さねばならない事は目の前に立ち塞がる障害を叩き潰す事だ。

サッサと少佐の下に向わなければ、少佐が危ない。

《年上の相手に使う言葉としては失礼ですけど、貴方は僕よりも弱い》

《……随分と生意気な口を利くじゃないか。たった一撃入れた程度で》

《だって、分かるから》

土煙の中から姿を現した不知火は、その腕に長刀を握っていた。

確かに、この距離では銃器類は僕には通用しない。

それが理解出来ているからこそ白兵戦を挑むと言う事が。成る程、確かに馬鹿では無い。

《だけど、それだけで勝てる相手だとは思わないで欲しい》

両腕にマウントされていた突撃砲を投げ捨て、ナイフシークエンスから射出されたナイフを両腕に装備する。

突然だが、僕が最も得意とする物は遠距離戦だ。

銃撃戦であれば僕は少佐にすら負けない自信がある。

……いや、まあ、少佐って射撃が部隊で一番下手糞だけどね？

そんな僕に少佐が叩き込んだのは、白兵技能 特にな이프による戦闘だった。

咄嗟に敵へ接近された時、距離を置く事だけを考えてしまわない様にナイフで戦闘を続行すると言う新たな選択肢を増やす為の行為である。

少佐との地獄の様な訓練の結果として、平々凡々だった白兵技能も何とか部隊平均程度にまでは底上げする事が出来たのだ。

刀を左腕に、追加装甲を右腕に構える不知火。

両腕にナイフを装備し、敵の行動に備えるF型。

僅かばかりの時間が過ぎる。

しかし、当事者達にとっては長く辛い待ちの時間であったのは確かであった。

此方へ踏み出した不知火が放つ剣閃。

それを噴射跳躍で飛び越え、頭を穿つ為にナイフを投合するが咄嗟に頭を庇う様に出された追加装甲によってナイフは機体に届く前に装甲によって阻まれてしまう。

致命傷にすらならない。

咄嗟の事とは言え、敵も反応は良い。此方が背中を取ろうと相手の背部へ着地しようとするのと直ぐ様に機体を反転させて隙だけは曝すまいと躍起になっている。

流星はエリート、と言った所だろう。

《良い反応ですね》

《……貴様も口だけでは無い様だな》

お互い、冷笑を浮かべている事が何と無く分かる。

この人 僕と根本的な所が似て居るのかもしれない。だからこそ、気に入らない。

認めたくすら無い。

否定する、存在その物を否定したくなる。

《だあああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!》

《はあああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!

ほぼ同時に跳躍ユニットに火が入り、機体が動く。
高機動に特化されている分、此方の方が動きは速い。

がしかし、敵機には厄介な盾が装備されている。アレを如何にかしない限りは此方の勝ち目は薄いだろう。

では如何すれば良いのか。

実に簡単だ、最初から盾を壊す事など求められては居ない。

”本体”だけを叩き潰してしまえば良い、結局はたったそれだけなのだ。

振り抜かれる追加装甲。

今度は剣では無く、装甲で押し潰そうと言う魂胆だと言う事なのだろう。

ああ 凄く都合が良い。

《貰った ツー!!》

通信越しに聞こえる、僅かながらも勝利を確信した声。

普通の機体を相手にするならば有効だと成り得ただろう一撃でも、少佐の度肝を抜く様な機動に耐え抜いたF型の間接は柔では無いのだ。

この程度ならば

《舐め、るな ツー!!》

回避出来る。

振り抜かれた盾を回避する為に下がる？

冗談じゃない、振り抜かれた盾を利用する為に上へと飛ぶのだ。

右足が盾を強く踏み締め、左足も乗ったと同時に強く圧力を掛ける

事でバランスを崩す両者の機体。だが、予測していた者と予測していなかった者では此処で大きな差が生まれる。空中にて体勢をリカバーする為に動いた僕と、咄嗟の事に反応が遅れる敵機。

この隙が、勝敗を分かつ。

大きく隙の出来た頭部目掛け、渾身の拳が吸い込まれる様に向って行く。

敵機はそこで漸く、自分に到来したアクセシブのリカバーを試みるが無駄だ。

遅過ぎる、何もかも。

《しま っ》

言葉を最後まで紡がせてやると思ったか？

拳は空中からの落下速度の威力も合わさった事で、不知火の頭部を地面へと埋める。

《……ふふっ。相変わらず僕とF型は最高のパートナーだね！》

笑みを携え、勝利の喜びを噛み締めた瞬間。

ポスン、と乾いた音が耳に届く。

『エニックス機、管制ユニットに被弾。致命的損傷、大破』

《え？え？え？》

『……隙を曝しすぎよ、お馬鹿さん』

呆れた様に呟くと、藤代中尉は通信を切った。

54 9月9日(2) 戦乙女の底力(後書き)

次回

- ・クリスカ&イーニア vs 風間栲子
- ・剣崎龍二 vs 伊隅みちる&速瀬水月

次回も、サービスサービス(ミサトさん風)

55 9月9日(3) 戦士の意地(前書き)

暑かったですね、今日も

明日は涼しくなるらしいですが、本当かな？

剣崎

突撃砲が、宙を舞う。

《セレナの馬鹿が、油断大敵つつうのはこの事だな……》

マーカーが敵を含め2つ、マップ上から消えた事に俺の口からは愚痴しか漏れなかった。

相討ちなど、考えすらしなかった喜劇であろう。

高く、そして盛大に空へと向って行った突撃砲に目を奪われた速瀬の見た物は此方へと真っ直ぐ突っ込んでくる一陣の黒き烈風。敵の攻撃を阻む為の盾を前面に展開し、思わず息を呑む程の速度で愚直に此方へ直進して来る。

《ッ、舐めるなあっ!!》

その盾諸共、速瀬は問答無用で長刀を降り降ろした。

正面から衝突する力と力。

下から攻め上げる盾と、それを上から叩き斬ろうとする刀の正面衝突だった。

ただし、敵は1人では無い。

《大尉 ツ！！》

《任せろ！！》

此方の様子を伺っていた伊隅の不知火が物陰から姿を現し、俺の機体へと銃口を向ける。真っ直ぐ、そして正確に。

少しでも銃口が逸れてしまえば、それだけで速瀬にすら当たる可能性があるからこそ伊隅は慎重になり、その僅かなタイムラグがやはり戦場では”致命的”となる。

《ふんっ》

《えっ！？》

右腕だけで押し上げるのでは無く、身体全体を使った投げ。

速瀬の不知火を身体ごと下から押し上げ、今の状態では回避出来ない伊隅の不知火の方向へ向けてその機体を蹴り飛ばした。

地面に頭から突っ込む不知火と、その援護に回ろうとするもう1機。

何もかもがシナリオ通りには進まなかったものの、体勢を崩した速瀬ならば殺れる。

あとは至って単純だ。

伊隅を徹底的に追い込み、くだらないミスはしないであろうクリスカ、イーニア組と共に刈り取ってやれば何もかも無事に終わってハッピーエンドと言う寸断である。

その為には何をすれば良いのか。

倒れ伏した速瀬機に接近し、完全なる止めを刺さなければならぬのだがそれでは些か危険が多い。もう既に、盾自体の耐久力も多く

は無いだ。

だが、既に布石は打つてある。
何の為に突撃砲を投げた？

何の為にあんな事をして気を引いたとされている？

前へと差し出した何も握られていない右手に、まるで吸い寄せられる様に空から突撃砲が舞い降りる。まるで天が与えてくれた贈り物の様な、不可思議な感覚。

だが、自然と高揚感が高まる。

心音が跳ね上がるのが、耳にまで聞こえて来そうな程だ。

《Welcome back》

《速瀬、動け！速瀬えっ！！！》

《ッ、無理です……機体のリカバリーが……！！》

《クソッ！》

速瀬の援護の為に前へと機体を押し出した伊隅に、内心感心しながらもばら撒かれる弾丸は一発一発を丁寧に回避していく。

残念。全てが無駄弾になったな、伊隅。

何とか立ち上がるうとする速瀬の機体に止めのペイントボールを撃ち込み、俺はサッサとその場を後にした。

『敵機体、管制ユニットに被弾。大破』

告げられる千枝からの淡々としたメッセージ。

それに耳を傾けながらも、俺は伊隅から離れる事を頭に置いて行動を開始していた。

あまり伊隅に長丁場を仕掛ける事は得策では無い。

折角、敵を1人にしてやったのだ。

後は 合流をさせず、退路すら塞ぎ、慎重に刈り取ってやれば良い。

……中々に、嫌らしい戦い方だな。

まっ、勝てば良いさ。

マブラヴ コンディションレット・オブ・ヒューマン

風間

隙を見せた不知火の改修機を撃ち抜いた瞬間、仲間であろう筈のもう1機はただそれを傍観して居た。阻止しようとする事もせず、何の感情も無くその一部始終に対して無言で立ち尽くしていたのだ。

《……何故、止めないのですか？》

《止める必要があるのか》

《“仲間”でしょう？》

《 私の認めた仲間は、” 剣崎龍二” だけだ》

冷淡に、そう切り返す。

認めたとか、認めないとか、そんな薄っぺらな感情で彼女は人の生死を簡単に天秤に掛けたと言っただろうか？

ならばそれは、許容する事すら出来ない歪みである。人の、闇であろう。

《 こないのかな、クリスカ？ 》

《 きつと来るわ。 だから、もう少しだけ待っていて》

S u - 3 7 が、此方へ銃口を向ける。

だが発砲するつもりは無い。それはあくまでも、会戦を合図する為の行為に過ぎない。

模擬戦は、彼女達にとってはゲームと同じ物。

人の生死は、彼女達にとっては価値の無い物。

彼女達の全ては剣崎龍二と言ったった1人の男に依存するのだ。

全てが、何もかもが、彼女達は彼を基準として考える。

それは自分の命すら例外では無いのでは無いだろうか？彼と自分の命、どちらかを選べと言われたのであれば彼女達は迷わず

《 ちがうよ》

《 え……？ 》

《 りゆうじは、そんなことをゆるさない。やさしいけど、きびしいから、そんなことをしたらりゆうじはきつとおこっちゃん》

まだ舌足らずな少女の言葉に、私の心が僅かに揺れ動く。

まるで心を読まれた様な、的確な指摘。

そして　こんな少女にすら愛される剣崎龍二と言う男のカリスマ。酷く恐ろしい物の様に思えてしまうのだ。洗脳でも、絶対的な忠誠を誓った訳でも無い筈なのに人は彼に魅せられ、そして彼の背を追い掛ける。

神から与えられた様な、人の上に立つ者と定義付けられた絶対的な権利。

そんな男が私達と共に戦う事となる。

それは嬉しくも有り、頼もしくも有り、同時に酷く恐ろしくもある。もしも　彼が反乱を企てたとすれば。

横浜基地は如何なる？

日本は如何なる？

世界は如何なる？

人類の明日は、勝利を勝ち取る権利は、人々の夢は、たった1人の男の反乱よって崩壊させられてしまうのだ。それを恐ろしいと言わず、何と言つ。

《あなたにはわからない》

《……分かる筈が無い》

《りゆうじはわたしをたすけてくれた。わたしをあいしてくれた。

だから、わたしはりゆうじがすきな。"だいすき"なの》

《貴様には分かる筈が無い。奴の苦悩も、奴の痛みも、奴の決意も、何も……

分かる筈が無いだろう貴様が、気安く龍二の事を考えるな　ッ！

！》

静かなる独白は、やがて巨大な怒りに変わる。
注がれる殺意。吹き出る闘志。剥き出しの敵意。全てがあまりにも直情的であり、そしてあまりにも純粹だった。
肌を焼くジリジリとした殺意。
此方の戦意すら削ぎ落とす闘志。
戦おうとする意思を生み出そうとする心すら折りかねない敵意。

《 》 さようなら《 》

冷徹であり、そして突き放す様な声が耳に届く。
あまりの自分の不甲斐無さに唇を噛み締めながらも、何とかその”攻撃”に対して反応する事が出来た。

《手痛い一撃ですね……ッ！》

先程まで自分の居た場所に放たれる大量のペイント弾。
致命傷は避けたとは言え 失態を曝した報いは中々に手痛いものだった。

“ 右脚部損傷による移動速度低下”。

《今の攻撃に反応するとは……流星は”エリート部隊”だ》

《クリスカ、はやく》

《うん、そうだね。早く龍二の所に行こう》

だが、コレは幸いと呼べる事態なのか。
敵は確実に此方よりも上手 それもかなりの実力者である事は予測出来る。

1人で何処まで購えるのか……

《……違いますね。此処は少しでも、大尉の為に時間を稼がなくては》

ネガティブに働いた思考に喝を入れ、何とか前向きな思考に入れ替える。

このままでは確実に負ける。

だが、勝てないと思っていたままでは絶対に勝てる訳が無いのだ。

僅かな勝利にしがみ付き、それを掴み取って来た者達がヴァルキリーズなのだ。

此処で諦める訳にはいかない。

此処で、負けを認めてやる訳にはいかない。

《 行きます!! 》

《 いこう……クリスカ 》

《 そうだね。終わらせよう 》

手負いの戦乙女と神話の獣の 歴史的一戦が静かに幕を開けた。

” 遥 ”

「 凄い…… 」

A-01は世界トップレベルの部隊とすら言われる特殊部隊である。その部隊に入ると言う事すら名誉な事であり、歴史の表舞台に名こそ刻まないかも知れないが実力を認められた精鋭達がそこに揃っている筈だった。

“英雄”と呼ばれる男が此処に現れるまでは、だが。

《抵抗は無意味だ。終わりを受け入れろ》

大尉の回避先や移動先、その全てに回り込む敵の機体。

体力だけでなく、精神すらすり減らしかねない淡々とした口調に直接対峙している訳でも無い私ですら胸が鷲掴みにされる様な凄みを感じた。

「当然でしょ。アイツはあたしの用意出来る最強で、最高で、最良の駒よ」

私の後ろからモニターを眺めていた香月副司令は得意気に胸を張ると、鼻を鳴らしながらそう呟いていた。副司令が人を褒めるなんて私は初めて聞いたかも知れない。

つまりはそれだけ、彼には期待していると言う事なのだろうが。

仲間の1人であるセレナ・エニックス少尉を失ったとは言え、水月が落とされた事によって数的有利は無くなってしまった。そして、風間少尉も残念だが落とされてしまうのは時間の問題である。既にカメラはその機能を果たして居らず、半ば直感に頼りながら何とか戦っているだけの状態なのだ。

風間少尉が落とされてしまえば、数は2vs1。

つまり 完全な逆転劇を披露されてしまおうと言う事に繋がってい

るのだ。

《クソツ……!》

《良くやったな。クリスカ、イーニア……》

そして今まさに、風間少尉が落とされた。

既にもう1機は移動を開始しており、大尉の勝率はほぼ絶望的と言って差し支えは無いだろう。ヴァルキリーズの隊員2人を粉砕した者達を1人で相手にするなど、手負いでは尚更に荷が重過ぎるのだ。

《りゅうじ、はやくおわらせよう?》

鈴の音の様に柔らかで、耳に残る少女の声。

戦場に似つかわしくない声ではあるが、それが風間少尉を落とした衛士の1人であると言うのであれば実力は一級品である事は疑い様が無い。

《……いつまで戯れているつもりだ》

それに対して、刃物の様に身体中に浸透する声を持った女性の声。

淡々としていて、それで居て何処か呆れを含ませたそれは先程まで風間少尉に向けられていた物とは明らかに違う、別の勘定を含んだもの。

《いや、これがまた手強い。流石はヴァルキリーズだ》

そんな対照的な2人の声を受けながらも、少佐は至って冷静に返答を返した。

口調こそ碎けては居たが、その実 2人を本当に信頼していると

言う事がヒシヒシと伝わって来る。

《……りゅうじは、そっち》

そんな彼を2人も信頼しているからこそ、安心して背中を預ける事が出来る。

淡々とした計略ではあったが、少女は少佐に僅かに指示を出す。

何処に、如何行けば良いのか。

それすら告げずにただ場所だけを告げ、サッサと移動を開始してしまふ。

《了解、イーニア。これで終わりにしようか》

だが、それでも彼は動じる事無く彼女達とは反対の方向へと歩を進めた。

軽やかな歩幅。

そして その先に控える大尉の下へ。

2機は勝利に向って、確実な一步を踏み締めていた。

《A・01》

伊隅みちる 敵2機による挟撃により大破

風間栲子 脚部破損後、管制ユニットに攻撃が被弾した事により撃墜。

「で？どうだ、俺の部下は」

「良いじゃない。アンタの下で働かせるには惜しいわ」

「その言い方は気に食わないが……当たり前だろ。俺の認めた奴等だぜ？」

「……じゃあ、”例の件”も正式にお願いしようかしら？」

「俺に？……ああ、いや、嫌とは言わないが……本当に俺で良いのか？」

「アンタ以外に適任が居る？」

「うっ……分かった。分かったよ、頑張るさ……それなりに」

「全力で望みなさいよ、常に」

「……時が来れば嫌でも全力で望む事になるさ。今はまだその時じゃない」

「出たわね、それってアンタの口癖よ」

「……そうか？」

「そうよ。昔からずっとそればかり」

「そりゃまた……気を付けるわ」

55 9月9日(3) 戦士の意地(後書き)

A-01VSジャッカル決着

アッサリし過ぎていた……？

いや、うむ、ううむ……バトルは難しい

修行します

56 9月10日 時代を築く戦士達(前書き)

如何でも良いネタを1つ

イーニアは俺の(r y

ロリコンだって良いじゃない!

生きていたって良いじゃない!

ク○ラのバカ!

もう知らない!

茜

「まあ、何だ。アレだな……取り敢えず、お前達の教官代わりとして技術指導を担当する事になった剣崎龍二だ。気に入らなきゃ副司令に文句を言ってくれ、以上」

銜え煙草と着崩した国連軍の制服。

ダルそうな瞳からは生氣すら伺えず、面倒臭そうに何度も溜息を吐いている。

第一印象で人の印象を決定付けるとすれば、最悪の出会いと言えるだろう。

ただ、それが役作りなのか如何なのかは未だに分からない。

確かに、この人は先日A-01の隊長陣を破ったのだ。

1人で2人を相手取り、決定的な勝利を手にして居たのは記憶にも新しい。

ならば優秀なのではないだろうか？

「ふあ……」

そう考えようとしても、この弛んでしまった様子からは想像すら出ない。

此方の視線など一切気にする事も無く、気だるそうに欠伸をするそ

の仕草を見せられては此方側も本当に大丈夫なのだろうかと心配になってしまうのだ。

「あ、あの……少佐、私達はまず何をすれば……」

「まあそうだな……じゃあ、ハイヴ攻略でもやるか？」

その言葉に、この場に居た全員が固まってしまったのが分かった。ハイヴ 人類の宿敵であるBETAの巣窟。

そんな場所をたった5人で攻略しろと言うのだろうか。それはつまり、少佐がスパルタだと言う事を指し示していると言う事……

「お、おい。真剣に考え込まないでくれ……冗談だよ」

軽く笑いながら誤魔化し、少佐も暫く考え込んでしまう。

一定数以上の数値を出している私達に対する訓練など、そう易々と決められる事では無いのかも知れない。意味の無い事やっても時間の無駄だし、難易度の高過ぎる物を選んでも結局は成長に繋がらない。

適度な難易度と、成長を促す様な刺激。

その2つが合さった都合の良い物など存在する訳が

「病み上がりには丁度良いか……よしっ、決めた！」

突如として顔を上げた少佐は嬉々として喜びながら、途轍も無い難題を私達に投げ付けた。

彼からしたら何と言う事も無い難易度の内容だと思っただのかも知れないが、それがどれだけ途方も無い物か分かっていない。

訓練内容は、”剣崎龍二少佐vs私達5人”での模擬戦。

此方が全滅するまでに、剣崎少佐を落とせば勝ちと言うシンプルな

物だった。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

剣崎

《私を踏み台に……ッ!?》

《きゃ〜っ!》

『築地機管制ユニットに致命的な損傷。大破』

茜機を踏み台に、その後ろに構えていた築地の機体を撃ち抜く。

踏み台にされた反動で膝を付いた茜の不知火に対して止めの一撃を放とうと銃口を向けるのだが

《やらせないよ ッ!》

間を置かず、柏木からの的確な射撃がその行動をカットする。

チームプレイと言う事だけで見れば、伊隅達よりも上に行くかも知れない。

成実力は基本能力地よりも高い程度で纏まっているが、このチームブレイは強力な武器となるだろう。コイツ等は俺の様に1人で1つの武器になるのでは無く、仲間と組む事によって1つの武器。それも、状況によって形状を変える様な便利な物に変わると言う訳だ。成る程、確かに強い。

だが

《麻倉、高原！！》

《え？》

《あ……っ》

回避先にて此方を出し抜こうと考えていたのだろう麻倉、高原の2名のロックから機体を振り切り、視界から完全に姿を消す。その事に対して、俺を探す為に周辺を見渡す2名だが

《2人共、上！！》

太陽を背にした俺の不知火から、後光と共に弾丸が降り注ぐ。光で機体が反射した事で目を晦ませた2人には回避など出来る筈も無く、容赦なく120mmの弾丸が装甲板へと食い込んでいった。

『麻倉、高原機各部装甲に深刻なダメージ。行動不能』

着地と同時に機体を廃墟に滑り込ませ、残り2名の攻撃に備える。1人は射撃能力の高い柏木。もう1人はリーダー格でもあり、かなりの技術を持ち合わせた”茜”。

何とか柏木を落としてやりたいのだが茜よりも後方に居る事、尚且

つ援護に徹している事からそれがどれだけ面倒な事かと言う事は理解出来る。

《少しばかり……派手に行くか》

廃墟の影から機体を出し、敵の位置を頭に叩き込む。

機体が表に出た事で間髪入れず狙撃されるが、その程度の事は予測済みである。

機体を横にスライドさせて敵の狙撃を回避すると、被弾位置と射撃位置から大よその敵の位置を割り出す。

場所が割れたのであれば、後は押し潰すのみ。

前方から接近する茜の機体。その脇を 全速力で通り抜ける。

《なっ!?!》

《やばっ……!!》

後方で待ち構える柏木の不知火。

そして、今の敵の状態はリロード中の筈だ。

背部担架から武装を取り出そうとすれば此方に撃ち抜かれる。

白兵戦など論外だ。

《 チェックだ、柏木》

《うわっ!?!》

突撃砲から放たれる弾丸。

吸い寄せられる様に向って行き、装甲の中で息衝く内部機器に損傷を与える。

『柏木機、内部機器に異常発生。修復不可能、大破判定』

膝を付き、完全に動く事が無くなった不知火とその撃破を告げる通信。

残ったのはたったの1機。

動かない柏木機を背に立つ俺の前に、茜の不知火が躍り出る。

その手には長刀。射撃線では万に一つも勝機は無いと見たのか、白兵戦に全てを賭けるつもりらしい。

ああ、何だか懐かしい光景を思い出す。

アラスカで、タリサを叩き斬った時のデジャヴだろうか……？

《はあああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!》

気合の咆哮と共に振り下ろされる刃は機体を少し横に移動させる事で回避し、

《あれっ!?!》

素っ頓狂な声を上げ、隙を曝した茜の不知火の腹を、

《終われ》

《っ……!?!》

銀の閃光が薙ぎ払った。

遥

「助かったよ、中尉」

茜達が更衣室に向っている間、私は少佐と少しばかり話をする時間が出来た。

大尉と水月は面識がある様だったけれど、良く考えてみれば相手は英雄なのだ。

普通ならば顔を会わせて話をする事すら不可能だろう。

そう言う意味では、私は恵まれて居るのだろう。

「いえ、私も少佐の機動は大変勉強になりました。此方こそお礼を言わせて下さい」

「ははっ。だったら千枝とでも話をしてみれば良い勉強になるかも知れないな」

「そ、そんな！藤代中尉とお話なんて……ッ」

全戦で戦う者達ならば知っている英雄が剣崎少佐ならば、管制や機体の整備に関わる者達が知っている天才が藤代中尉なのだ。

設計から整備、果ては管制まで。まさに天から一挙に才を与えられたかの様な天才児。

英雄の相棒が天才……実に利に適っている組み合わせである。

「俺からすれば君だって優秀だと思うぜ？望んだ情報を的確に提示して、情報での援護射撃で俺達みたいな衛士を助けてくれる。簡単には出来ないよ、そう言うの」

「私は……それしか出来ませんから」

「それしか出来ないから、それを極めた訳だろ？ だったら堂々として良いと思うぜ。」

誰にも負けない様に努力した奴はそれに見合った価値を持っている。俺の恩人の言葉だ」

「恩人……？」

恩人。

その言葉を呟いた少佐の顔に、僅かな驕りが見えた。

先程までの飄々とした雰囲気から一変し、哀愁と悲しみを携えた悲哀の戦士。

私の脳裏に、涙を流しながらも敵を殺し続ける少佐の姿が浮かんで消えて行く。

「……今の話、忘れてくれ」

それに気付いたのか、少佐はバツが悪そうに頬を掻く。

先程までの悲しみに満ちた顔は既に消え、今は恥かしそうに頬を朱に染めていた。

出来れば、と。

更に言葉を紡ぐ。「今の俺のこの表情も、記憶から消してくれると嬉しい」と。

そんな少佐の仕草に思わず笑ってしまうと、少佐は困った様に顔を顰めていた。

もしかすれば今の状況を楽しんでいる様に思われて居るのかも知れない。

別に、そう言う訳では無いのだけど……

でも何か懐かしい。

こんな風に笑って、こんな風に喋って、こんな風に何かを懐かしむなんて

「少佐、是非また私を誘って下さいね」

「お、おう。何だか話を有耶無耶にされた気もするが……次も宜しく頼むよ」

少年の様な真つ直ぐな笑顔で、少佐は私に手を差し伸べた。

今なら 何と無くだけど水月がこの人に惹かれる理由が分かる気がする。

人を魅了する様な魅力でも無く、

巧みな話術で心を掌握するのでも無く、

ただ、その不器用な人なりの温かさや優しさが心に染み渡るのだ。

大切な人を亡くす痛みを知っている彼だからこそ。

私達は、心を許すのだろう。

茜

強化装備から制服に着替えた私達を待っていたのは、お姉ちゃんと強化装備姿のままの少佐だった。ただ、やっぱり制服じゃ無くても煙草は吸っている。

「取り敢えず、お疲れ様」

労いの言葉の後に、少佐は各々の顔を見渡す。

疲労を表情に浮かべる者。

少佐の強さに感嘆する者。

年中頭の中がお花畑の者。

それぞれが、それぞれの表情を浮かべていた。

「今回の模擬戦でそれぞれが鍛えるべきところが見えて来た。得る物は大きかったみたいだな、やっぱり」

うんうん、と何度も頷きながら少佐は半ば程まで吸い終わった煙草を吸殻へと棄てる。

「まずは築地」

「は、はひっ!？」

「取り敢えず、落ち着け。戦闘中でもプライベートでも落ち着いた行動を心掛ける。」

分かるか? 落ち着いて、冷静に、物事を対処しろ」

「は、はひっ! お、おおお、落ち着いて……」

「ダメだ、こりゃ……次は高原と麻倉だな」

「「はい」」

「基本的にどれかに偏る事無く、満遍無く能力を伸ばせ。お前達は

何だかんだ言って2人で1組みたいな組み合わせが多いからな、それが良いだろう」

「了解しました」

「ありがとうございます、頑張ります！」

「で、次は柏木だが……」

「はい」

「……特にねえ。射撃の腕でも磨いておけ」

「そ、そんなあゝ」

「冗談だ。仲間と視線軸が重ならない様に配慮しながら射撃位置を考へろ。空間把握能力、とでも言えば良いのか？ 兎に角、お前は地形を網羅しろ。良いな？」

「アドバイス、ありがとうございます！」

「最後に茜だが……お前は訓練よりも俺との模擬戦地獄だな。まずは反応速度を徹底的に鍛えるぞ。コイツ等のリーダーを務めるには、まだまだ技術が温い」

「はい！」

「お前の技術がコイツ等の生死を左右する……良いな？ 全力で望め」

「はい、了解しましたー！！」

「Perfectだ、茜」

嬉しそうに手を叩く少佐の姿を見て、何と無く私も嬉しくなってしまう。

それに、折角此処までアドバイスしてくれたのだ。生かさねば失礼だと言う物だろう。

「そう言えば少佐、どうして茜ちゃんだけ名前で？」

「あ？そりやお前、姉ちゃんの遙と区別するのが少尉だとか中尉じや堅苦しいだろ。茜と遙で良いじゃねえか、楽だし」

「だったら私も名前で呼んで下さい。」多恵”って

「あ！だったら私も晴子って呼んで貰おうかな？」

「ちょっと、2人共止めなさい！少佐、気にしなくて良いですから……」

「別に名前で呼ぶのは構いやしねえが……まあ訓練に一所懸命に取り組めば、な」

「はい！」

湧き上がる笑い。

戦争中とは思えない程の暖かな時間が、静かに過ぎ去っていく。悪くない。

私は、今のこの状況をそんな風に思った。

56 9月10日 時代を築く戦士達(後書き)

関係の無い話

魔法使いの夜が発売延期になった(今更かよっ！

正直に言いましょ

悔しいですッ!!

いえね、この頃はお脳の調子がおかしいです

多分、変な物でも拾い食いしたのでしょ

……少しばかり身体を休めようかしら

57 9月11日 夢の世界の兎と狼(前書き)

フュージョン、ハッ!!

新たなタイトルを付けてパワーアップ

57 9月11日 夢の世界の兎と狼

夢を見た。

遠い、遠い昔。

でもそれは近しい未来を指し示している様な錯覚を受ける程に明白な夢。^{リアル}

重ねられた死体。

流れ出る血潮。

彼は ただ、それを見詰めていた。

無機質な瞳。

何も写さず、何も考えず、ただ死体の山をその目で捉えるだけ。

彼は泣いていた。

心の中で、死んで逝った家族の事を思い泣いていた。

彼は憎んでいた。

心の中で、死んで逝った家族を殺した者達を憎んだ。

彼は 何処までも透明だった。

心の中は空っぽで、

心の中は伽藍としていて、

心の中は誰よりも純粹で、

心の中には 何も無い。ただ透明で無色な白。

何処までも、何処までも塗り固められた気が遠くなる様な白一色の世界。

それが、彼の心だった。

作られた笑顔の仮面。

悲鳴を挙げながらも軽口を叩く。
彼の心は限界で、彼の肉体はそんな自分の限界を理解しようとはしない。
本能が戦え、戦えと永遠に命じ続けるのだ。
哀しい人。
今ならば、そう思える。

貴方は、それで幸せですか？

夢の中の世界の彼は、私の姿に驚いた様に見開いた。
まるで何か途轍もない物を見た様に驚愕を露にしていたが、やがてその顔からも表情が薄らいでいく。完全な無表情がそこに作られた時、彼はゆっくりと口を開いた。

「君には如何見える？」

尋ねるのでも、伺うのでも無い。
答えなど出ている筈なのに、彼は私にその問いの答えを尋ねた。
つまる所、単なる意地悪だ。

私には、貴女が無理をしている様にしか見えません。

「それは君の偏見じゃないのか？
俺は無理をしていない。いつ俺が弱音を吐いた？俺はまだまだ戦えるぞ」

でも、貴方の心は悲鳴を挙げています

「……心ね」

世界が黒く染まっていく。白の世界を侵食する様に、ジワジワと咀嚼する様に。

「君との話は有意義だが、流石に人の心に直接入り込むのは許容外だ」

……

「返事は無いのか？」

………分かりました

「理解が早くて助かるよ」

彼は、満足した様に黒の世界へと足を踏み入れていった。去り際に此方へと振り返ると、顔に貼り付けられていた無表情が皮肉気に歪む。

「逃げろ、兎。後ろを振り返れば狼が襲い掛かるぞ」

意識が薄らいでゆく中、彼の皮肉気な笑顔だけが 思考に残る。優しさや気遣いなどそこには一切感じられぬ、見詰めるだけの哀しき笑顔だけが……

剣崎

「本日から宜しくお願いします!!」

入室と同時に、唯依は相変わらずキツチリと着こなした制服　今は国連軍の物だが　で俺へ敬礼をする。その堅苦しさを久しぶりに感じながらも、俺は呆れ半分と言った具合に苦笑を漏らした。

「夕呼への紹介もまだだったな。それは奴等が揃ってからやれば良いとして……そうだな。まずは久しぶりの再会を称してハグでもしようか？」

「!!!」

「冗談だよ」

喉の奥でクツクツと笑いながらも、素直に言えば彼女の到着ほど心強い物は無かった。

漸く、本当の意味で　俺の部隊は出来上がった事になる。

BETAに対抗する為の牙となり得る、人類に残された最大の反抗勢力として君臨する。

そうすれば、クソ面倒臭え馬鹿な連中も黙る事だろう。

今の所は大きな作戦も無い事だろうし、黙って仲間達のスキルアップに勤しむ事にしよう。

と言うか、そうする事が俺に命じられた任務だったりする。

「しかしまあ……良くもこんな国連の基地に武御雷を引っ提げて来たな」

「少佐のお力になる為には、武御雷のスペックが必要だと判断したからです」

「巖谷中佐を説得するのは大変だっただろう？」

「いえ。叔父様も賛成して下さいました」

案外と武御雷の機体情報は機密度が低いのだろうか？

専用スタッフを連れて来ているとは言え、帝国軍が誇る最強の戦術機を易々と此方へ引っ提げて来るとは考えられない。

それとも、それだけ俺達が期待されて居ると言う事なのか。

……これは実を言うと、唯依ちゃんが巖谷中佐とある”ゲーム”をした結果らしい。

もしも唯依ちゃんが勝てば武御雷の搬入。

巖谷中佐が勝てばそのまま直行。

巖谷中佐が勝負を仕掛けると言う事は余程自信があったのだろうか、それを返り討ちにするとは唯依も恐ろしい女性である。

まあ、当初の俺はこんな事を知らなかったが。

「取り敢えず ”おかえり”、唯依」

それはそれで。

機体や帝国内のゴタゴタを差し置いても、俺は彼女の復帰が嬉しいのだ。

自然な笑顔を、彼女に向ける。

いつもの様な飄々とした仕草も無く、温厚を前面に出した様な面構え。

ただ告げる。

心からの”おかえり”。

「はい。ただいま戻りました、龍二さん」

そんな俺の言葉に、唯依は笑みを返してくれる。

些細な事の筈なのに嬉しくて、俺の心はいつの間にか安心を手に入れていた。

“おかえり”

“ただいま”

そんな簡単な言葉のキャッチボール。

それが、今の俺にとっては掛け替えの無い存在なのだ。

社

何処までも晴れ渡った青空。

それが、剣崎龍二と言う人の”普段”の心の状態。

包み込む様な暖かさ、全てを護ろうとする強き決意を滲ませる心の色。

先すら見渡せぬ暗黒。

それが、剣崎龍二と言う人の”戦闘中”の心の状態。

飽くなき力への執着と、全てを切り裂く刃の様な鋭さを滲ませる色。

そして、ほんの一瞬だけ見せる無色透明な色。

何にも染まらず、何にも染められず、

そこに居て、そこには居ない。

そんな心に私はいつの間にか吸い込まれ、そして記憶に刻み込まれるのだ、

悲しみの記憶。

痛み of 記憶。

戦いの記憶。

望まなくても、望んですら居ない筈なのに、私はそれを刻み込んでしまう。

けど、剣崎龍二と言う人を嫌いになる事は出来ない。

彼は誰よりも私達を理解する事が出来る存在だから。

香月博士よりも、ずっと、ずっと。

それこそ 本当の奥深くまで。

「どうかしたの、社」

「……何でもありません」

「なら龍二を呼んで来てちょうだい。今頃なら伊隅達の所に居るかも知れないわねえ」

「……分かりました」

何よりも彼を嫌いになれない理由に、彼の部下である2人の存在がある。

私と同じ、2人。

彼女達は心の底から剣崎龍二に対して暖かな感情を向けている。それが何なのか、今の私にはまだ分からない。でも、きつといつかは理解出来る気がする。あの暖かくて、優しい光の意味を。

伊隅

「イーニア・シエスチナです。よろしくおねがいします」

「クリスカ・ビャーチェノワだ。宜しく頼む」

「セレナ・エニックスです。今後とも宜しくお願いします」

「藤代千枝です。どちらかと言えば、貴方達と直接関わる事は少ないかしら？」

「篁唯依です。少佐共々、宜しくお願い致します」

少佐が連れて来た少女達が仰々しい敬礼をする。

それを見た龍二は、どうした物かと困った様に笑っていた。

そんな彼の様子からは「堅苦しいだろ？」と訴えている様に感じてしまう。

成る程。

確かに、彼の様なタイプが苦手とする性格が集まった様なな。

「伊隅みちるだ。此方こそ宜しく頼む」

敬礼に対しては敬礼を返す。

此方も劣らぬ様に敬礼に気を使いながら、紹介された5人に礼を返した。

「堅苦しい連中だろ？」

「少佐とは違い、礼節を重んじる性格なのでしょうね」

「手厳しい言葉だな。思わず涙が流れちまいそうだ」

飄々とした態度を一切崩す事無く、少佐は私達の前でおどけて見せた。

それが彼特有の良い所なのか、それともただ空気を読まないだけなのか。

どちらにせよ、ユーモアすら漂わせるこの余裕は部隊の長として真似てみたい物である。

しかし、そんな彼を目だけで咎める者が居た。

篁とビャーチエノワの2人である。

まるで恥を搔かせるなど言わんばかりにドスを利かせた睨みは非常に強力だ。

「少佐。お戯れも程々に」

そんな彼女達の視線を感じ取ってか、藤代中尉が直ぐ様にフオーロ―を入れる。

ふむ。いつもこの様な感じでこの部隊は回って居ると言う事か。

先程からエニックス少尉とシェスチナ少尉は蚊帳の外と言った具合

に話に付いて来ては居なかった。そんな2人の様子に、僅かばかりの罪悪感が募ってしまう。

「本題、なんて仰々しい内容じゃねえが……」

俺の部下を暫くの間だけ、お前が面倒を見てくれないか？俺にも仕事が終わって来てね。

そいつの処理で今は手一杯だ。悪いが、頼む」

「それは副司令絡みなのか？」

「アイツ以外に俺に何か頼み事をする奴が居ると思うか？」

「……考えられんな」

「兎に角、そう言う事だ。夕呼にも話は通してあるから、細かい事は気にしなくて良い。

ただ訓練の際に仲間に入れてやってくれればそれで俺は満足だ。って事だ」

「……分かった。確かに、新たな戦闘スタイルを持つ者との戦闘は部隊の者にとっても良い刺激となるだろう」

満足した様に少佐は笑い、後ろを振り返り様に告げた。

「頼むから迷惑だけは掛けないでくれよ？」と。

それ程までに厄介な連中なのだろうか。

だとすれば、私も少し認識を変えなければならない。

少なくともではあるが、

“クリスカ・ビャーチェノワ”、“イーニア・シエスチナ”、“セリナ・エニツクス”の3名はヴァルキリーズ個々の隊員と同程度の技量を秘めている。

それだけのポテンシャルを含めていれば、必然的に性格の方にもクセが出てしまうと云う事か。

「 剣崎さん」

そんな私達の場に、似つかわしくない透き通る声が響く。

振り返った先、入り口には社霞が此方を見詰めて立っていた。

少佐の名を呼んだ事から、彼に何かしら副司令からの伝令があると云う事なのだろう。

帰還早々任務とは、難儀な男だ。

「時間だな。それじゃ、後は任せるぜ」

「ああ、任された」

手を振りながら社の後ろに付いて行く少佐を見送ってやると、私はもう一度預けられた衛士達の顔を確認する事にした。

向けられる視線、思惑、疑問、そして敵意。

「 まずは、盛大にぶつかり合う事にするか」

昨日の今日で悪いが、またヴァルキリーズの面々には大暴れして貰う事にしよう。

口で伝えるよりも、肉体に刻み込んだ方が速いのだ。

手は口ほどに物を言う。

ならば、多少也とも強引だろうがそれは効率的な会話手段となりえるのだ。

では始めるとしよう。

楽しくて嬉しい、模擬戦の時間だ。

剣崎

ピヨコピヨコと、ウサ耳が跳ねる。

それを後ろから眺めながら、俺は社の後をただ付いて行った。

誰が俺を呼んで居るのかは直ぐに理解出来るが、少しばかりのサブライズを期待してもバチは当たらないだろう。

人生は刺激的だから楽しいのだ。

まあ、この言葉その物が千枝の受け売りなのだが。

あまりにも暇だった為に煙草を取り出そうとして、止める。

目の前に子供が居ると言うのに、わざわざ煙たい思いをさせる必要は無いだろう。

純真無垢な肺に黒い影を作りたくは無い。

つか今更だが、俺って戦場じゃなくてガンで死ぬんじゃねえか？
そんな如何でも良い事を考えている時、社は急に歩を止めた。

如何したものか、と顔を覗き込もうとする前にその瞳が確りと俺を捉える。

真っ直ぐに此方を見詰め、

俺もその瞳を真っ直ぐに見詰め返す。

続くのは沈黙。

「……………」

「……」

はっきり言っただけ。

滅茶苦茶、怖いぞ。この沈黙の中で何か話題を切り出すと言う事がどれだけ地雷的な行為か分からないと言うのなら、そいつは底抜けの馬鹿だ。

「……貴方は、」

そんな事を考えていた時、沈黙を破ったのは社だった。

感情の伺えない表情。

だが、その中に、僅かばかりの動揺がある様に感じられてしまうのは何故だ。

俺自身に、何か怯える事でもあるのだろうか？

「どうして……」剣崎”として、生きていこうとするんですか？

ついで、此方が絶句する番。

何故、”剣崎”として生きているのか。

何故、”実の息子”でも無い俺が剣崎の名を語っているのか。

愛した母が居た。

愛した妹が居た。

それだけなのだろうか？本当に？

心の何処かで、この名前すら利用しようと考えて居るのでは無いだろうか。

ハッキリとその議題を突き付けられると、確かに動揺してしまう。だが、コレだけは言える。

寧ろ、コレだけしか俺には無いのかも知れないが。

「借りは10倍にして返す。それが、俺の心情だからだ」

俺を息子として受け入れてくれた母さんに。

俺を家族として認めてくれた妹に。

俺は死ぬ程の感謝をしているし、同時に彼女達を心の底から愛して居た。

ありがとう。

まだ2人が生きていた時、恥かしくて口からは出せなかったそんな言葉。

だが、今なら言える。

今ならハッキリと分かる。

彼女達に返しきれぬ程の恩義を感じたのならば、

俺はせめても彼女達が叶え様として居た平和な世界を命懸けで作って行こうと思う。

その為に、簡単には死ねないのだ。

簡単に、この命をくれてやる訳にはいかないのだ。

「…………優しいです」

「違う」

「…………？」

「俺は、逃げているだけだ」

社から掛けられた優しい言葉ですら、今の俺には届かない。

如何にも 母さん達の話が出ると周りの言葉が耳に残らない。

何と言うか、アホと言うか、間抜けと言うか……

呆れ帰る程の家族愛だな、本当に。

香月

「遅い」

あまりにも遅い到着をした龍二に向かい、そう端的に述べる。時間とは無限では無いのだ。

下らない事でタラタラと時間を浪費されるのは正直に言っていてイラつく。

コイツの”所有権利”は既にあたし専用であり、他の誰にも譲ってやるつもりは無い。

コレ程までに優秀で、凶悪で、強力な手駒を手放す筈が無いだろう。

「お前は相変わらず、自分勝手過ぎる」

「自分勝手じゃなきゃこんな地位まで上り詰められないわよ」

「……はあ。神宮寺が哀れだな」

やれやれと溜息を吐きながらも龍二は部屋に設けられた簡易キッチンへと赴き、そこで徐に作業を始めた。漂って来る香りから推測するに、紅茶でも淹れるつもりなのだろう。

寝ずの作業の為にコーヒーばかり飲んでいたあたしにとっては、良い気分転換として機能するかも知れない。

「……社は？」

「お前が俺に文句を言った際に、そそくさと奥に入って行ったよ。
”あそこ”だろ」

「そつ。しかしアンタ、帝国だけじゃなくて海外からも衛士引き抜いて来るとはねえ、やるじゃない？しかも全部女つて所もアンタらしいと言うか何と言うか……」

「男でも居たさ、引き抜きたかった奴が」

「へえ。ホントかしらね」

「何とでも言え。それよりも本題は如何した？時間の無駄だろう」

簡易キッチンから湯気立つティーカップを2つ手に持ち、龍二は客人用のソファ―に腰を下ろした。優雅に紅茶に口を付け、その風味を確りと噛み締めている。

何ともまあ、キザつたらしいがサマになっている姿である。

たまに見せるこんな姿が狙っているのでは無く、自然と出る辺りはやはり他の男共とは違った魅力を秘めていると言う事なのだろう。

「そうね。なら、本題に入らせて貰おうかしら」

淹れて貰った紅茶に口を付け、その香りと味を堪能する。

これから毎日と言う程にコイツのお茶が飲めると思うと成る程、胸も躍ると言う物だ。

しかし 本人にこう言ってしまうえば十中八九こう返されるだろう。
「俺は小間使いじゃない」と。

「まりもが担当する部隊のメンバー、アンタは見たことある?」

「神宮寺の担当と言うと、訓練兵だろう。そこまで気を配っている程の余裕が俺にあると思うか? オルタネイティブ計画にA-01の訓練、更には部下の世話だぞ」

「そうだったとしても、この件はアンタにも知っておいて欲しいのよ」

「……面倒事か?」

「直接的な面倒事じゃないわね」

そこで龍二の顔を見ると、何とも言えない微妙な表情を浮かべていた。

困惑でも無く、疑いと言う訳でも無い。

色々な感情が混ざり合った様な、微妙な表情。

そんな面をする龍二の前に、207部隊のメンバーの事を詳細に書かれた書類を提示する。

それを徐に手に取り、何枚かに目を通して行く内に龍二の表情が変わる。

今度は明確な 驚愕。

「榊総理、珠瀬事務次官、鎧衣さん、彩峰中将の子供達じゃねえか

……ッ!?

こりやお前……何と言うつか、驚きの一言だな」

「それだけじゃないわ。アンタ、殿下の側近なら最後の1人の意味。分かるでしょ?」

「……覚悟はしていた事だ……今更、彼女も驚くまいよ」

哀しげに呟くと、龍二は書類をテーブルに置いた。

目を揉み扱くと何かを考える様にソファーに背を預け、自分だけの世界へと入り込んでしまう。こうなってしまうえば並大抵の事が起きようともコイツは決して戻っては来ない。

こう言った所は学者気質なのだが、如何にも本人はデスクワークと言う物を毛嫌いしているらしくサラサラ、そんな物になる気はないらしいが。

「つまり、俺は彼女達に対して何等かのアクションを取れば良いのか？」

「アクションを取る必要は無い。ただ、知っておいて欲しかっただけ」

「知って欲しかっただけ？……ああ、いや、深くは聞かん。彼女達の事は思考の片隅にでも置いておく事にしよう、いつでも取り出せる程度の位置で、ね」

「……アンタに対する用事もコレで終わり。」

それより、今日はアンタ達の歓迎会らしいわよ？早く部下の所に戻ってやりなさいよ」

「お前は如何する？」

「パスよ、パス。ガキだらけの所じゃ、酒も飲めないわ」

「何ともまあ、率直な意見だな」

重い腰をソファーから上げ、飲み干したティーカップをキッチンへと片付ける。

何処かの執事をやっているも何も不思議では無いと思わせる程に、その仕草はサマになっている。いっその事、衛士を副業に執事でもやってみては如何だろうか？

「言うておくが、小間使いじゃないぞ。俺は」

まあ、どうせ言われるとは思ってたけど。

実際に思った通りにその言葉を言われてみると、笑いつて止まらないものね。

速瀬

「それじゃ、新しい仲間にくー！」

カンパ〜イツー！！

A-01に割り当てられた部屋。

現在そこでは、少佐達の歓迎会が行われていた。さっきまではド突き合っていた私と篁中尉達だったが、お互いの実力さえ認め合えば何等問題の無い仲間同士としてやっていけると言う訳だ。

まあ歓迎会なんて建前で結局は皆が皆、お酒が飲みたいって訳だけど。

「喧しい奴等だな、まったく」

私の隣に　何故か知らないが座る事になっていた　少佐が楽しそうに呟く。

呆れを含んでいたとは言え、その顔は何処か嬉しそうに笑っていた。

「そりゃ少佐の歓迎会ですからね。盛大にやりますよ」

「建前だろ、それ。どいつもこいつも酒が飲みたいだけのクセに」

「ギクツ」

「ハハハッ！正直なのは結構。お前も俺に構わず、好きにやってくれ」

そう告げ、少佐はビールを新しく1本追加する。

コップに注がれたそれを一気に飲み干すと、満足した様にまた笑う。

何と言うか　無邪気だ。

こう言う時は子供の様に笑うクセに、

いざ真面目な場面になると人を包み込む様な笑顔を見せる。

そう言うギャップは卑怯だと思う。

本来なら女の武器だろうに、それを男が使うなんて尚の事に卑怯だ。

「少佐、あの　「龍二さん」」

声を掛けよう。

そう思った時、私の声を遮って1人の少女が少佐に声を掛けた。

篁中尉だ。

今日の昼間、コレでもかと言う程に私と剣で切り結んだので印象に深く残っている。

「唯依か。こんな奴等が腐る程居る国連だが、楽しいか？」

「大変勉強になりました。昼間の模擬戦も、スキルアップの1つと考えると大変有意義な物となったと思います。でも、あの、その…」

語尾が急にしどろもどろとなり、僅かながらも顔が赤らんでいく。そんな彼女を前に何事か、と首を傾げる少佐に篁は思い切って声を振り絞っていた。

「こ、今度は、少佐と共に訓練出来る事を楽しみにしています……っ！」

「暇が見付かりや、幾らでも付き合っさ。唯依は大事な『相棒』だからな」

そう言つて少佐が笑いかけると、篁も嬉しそうに顔を綻ばせる。

……何だろう。

この疎外感。

それに、このチクツとする感じ。

モヤモヤとして気持ちの悪い感触。

特に、少佐が篁を『相棒』と呼んだ時に一番モヤモヤとした。

鬱陶しいな、コレ。

ホント……私、どうなっちゃったのかな。

「暗いぜ、速瀬」

そんな感情が顔に出ていたのか、少佐は心配した様子で此方の顔を覗き込んだ。

必然的に顔が近くなり、私は驚き後ろへ飛び退く。

「へっ！？あ、あはは！そんな訳ないじゃないですかあ〜！」

「そうか？深刻な面だったぞ、お前」

心配した様に此方へ問い掛ける少佐だったが、そんな彼の言葉を遮る様に新手が現れた。

「ふむ。やはり速瀬中尉は生粋の」

宗像である。

相変わらず、人を馬鹿にした態度が癪に障る。

「言わせないわよおっ、宗像あつ！」

「おや、進歩しましたね」

「貴様等あつ、少しは自重と言う言葉を胸に刻み」

「まあまあ大尉。水月も、あんまりはしやぎ回っちゃダメだよ？」

歓迎会はヒートアップし、各々が酔い潰れるまで長い夜は続く。それでも、モヤモヤとした気持ちは取れなかった。

取れないけど、今はまだ　まだ、このままでも良い気がする。

57 9月11日 夢の世界の兎と狼（後書き）

本文内にちよつとだけ追記

次回の『Muv-Luv Condition-Red of human』は

- 1・龍二、お使いに行く
 - 2・唯依、咆哮
 - 3・クリスカ、照れる
- の3本でお送りする予定です

58 9月12日 底知れぬ後悔(前書き)

あんなに暖かかったのに
今となつては急に涼しくなつて
季節の変わり目を感じますね〜

……秋ですね〜

剣崎

『ハイヴ中層まで距離2500です。急いで下さい!』

片腕を吹き飛ばされ、既に装甲の至る所に傷を作っている中破寸前の茜機。

装甲板に薄く残った擦り傷以外に目立つた外相すら見受けられない龍二機。

その2機が、ハイヴ内を疾走していた。

訓練を始めてから既に2時間程は経過している。

築地や柏木、高原に麻倉は先程ダウンしてしまったが、茜は何やら凄まじい剣幕で訓練の続行を望んだのでこうして2人きりのランデブーを楽しんでいるのだ。

頭の上からバラバラと降って来る小型種に取り付かれない様に細心の注意を払いながら、坑道や主道をただ突っ走る。

カーブと同時に機体が壁ギリギリを駆け抜け、その衝撃で壁に張り付いていたBETAを吹き飛ばしていく。だが キリが無い。

毎回思う事だが、こいつ等は何匹居るのだろうか？

後ろから迫って来る肉の壁に牽制程度ではあるが両腕の突撃砲を放つ。

機体を空中で回転させ、アクロバティックな姿勢ではあるが頭が下

に向いたまま撃つ、撃つ、ただ撃ち続ける。

《しょ、少佐！前からBETAが……ッ！》

《……坑道に入れ。少しばかり遠回りになるが、最大速度で抜くぞ》

《は、はいっ！！》

前から接近して来る大質量を誇る肉の壁をスルーする為、俺と茜の不知火が坑道へと機体を滑り込ませる。現段階、既に後ろを振り返って何て事をする余裕は無い。

突き進まなければ、食いつかれる。
しかし

《坑道は奴等の巣窟だな……ッ！！》

主道よりも狭いからなのか、入り組んだ坑道には大量の戦車級や要撃級が蠢いている。

上も下も右も左も上下左右全てが敵、敵、敵。

奴等の面を見続けていたら、気でも狂ってしまいそうだ。

《捌き切れないか……茜、上に気を付け》

《きゃあっ！？》

後方を疾走していた筈の茜機が、突如として消える。

上から落ちて来た奴等に捕まったのだらう。

今頃は機体ごと地面に叩き付けられ、美味しいご馳走として齧られている頃だ。

やはり、彼女に残った課題は多いらしい。

『涼宮機、撃墜。状況を終了します』

茜撃墜と同時に、遙の顔がウィンドウにアップで表示された。妹の撃墜を端的に告げる辺り、やはり任務に私情は持ち込まないと言ふ事なのか。

見かけとは相反して、立派な精神の持ち主である。リスペクトすべきなのかも知れない、俺も。

《……悪いな、遙。わざわざ出向かせちまって》

『いえ。少佐の考えるミッションプランは参考になりますから』

《実際にも上手く行く保障は無い。ただの理想論だぞ、アレ》

『それでも私にとっては良い勉強になりました』

精神だけで無く、勉強熱心であると言ふ事も実に素晴らしい。
2代目の藤代千枝 何と無く、頭の中でそんな言葉が浮かぶが一瞬で抹消する。

アレは外面こそ良いが、内面は蛇だ
隙を見せれば一瞬の内に何もかも食い殺してしまう様な化物である。

《……まあ、兎に角終わりにするか。流石に茜も疲れただろ》

『そうですね。それでは、外でお待ちしています』

遙が俺に笑い掛け、ウィンドウが消えた。

静かなシミュレーター内に1人ポツンと放置されると言うのも中々に”利く”。

やはりと言うか、群れる事を覚えると人は贅沢になる。
人が居てくれないと不安だなんて、何て贅沢なのだろうか。

《変わっちまったな……俺も……》

一人で歩き続けて来た過去の自分をふと思い返し、
俺はただ自嘲的な笑みを浮かべる事しか出来なかった。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

茜

更衣室から出て、先ほどのシミュレーター室に戻ると少佐がお姉ちゃん
と談笑をしていた。その様子を入り口から見守って居るのは、
私よりも先に上がっていた他のメンバー達である。

「いい感じだね、少佐と涼宮中尉」

「うん。何だか、ほんわかするね」

「かなり年上の筈なのに、少佐ってそう言つところ感じさせないか

らかな」

「……意外と中身も若い」

各々が勝手な意見を口に出し、尚且つ少佐の耳に届いていないからこそこうして陰口を叩く事が出来るのだろう。何ともまあ、意気地の無い。

「ちよつと、早く中に入りなさいって！」

そんなメンバーの様子を見兼ねて、思わず声を荒げてしまう。その様子に皆は驚いていたが、一番に我に返った多恵が思い出した様に口を開いた。

「あつ、茜ちゃん。お疲れ様〜！」

「茜、お疲れ。少佐との2人きりのランデブー、どうだった？」

それに次いで晴子もチャチを入れて来る。

アレは私が頼み込んだ結果として設けて貰った特別訓練だ。

そこに疚しい気持ちなど、一片も無い。

「なっ！べ、別にアレはただの訓練でしょ！？」

「案外と嬉しそつだったけどな〜？」

「晴子！」

先程よりも声の音量が上がり、「あはは」と笑っていた晴子の後ろからヒョッコリと男性が顔を出していた。何とも不愉快そうな、そ

れで居て呆れている様な。

それに気付いき、晴子の笑顔が引き攣る。私だって、それに他の皆だつてそうだ。

上官が待っていると言つのに、部屋の前で下らない口喧嘩なんて怒られても仕方が無い。

「お前等、早く入れ」

怒りは爆発しなかったが、呆れを多分に含んだ声音が私達に反省の念を押し付ける。

用件をサツサと伝えた少佐は首を引つ込め、シミュレーター室へと戻って行った。

流石にもう軽口を叩いている程の余裕も無く、私達もそそくさと部屋に入室する。

シミュレーター室に設置された大きな画面では私達と仮想敵機を務めた少佐との戦闘や、先程の私と少佐のハイヴ内の戦闘まで多数の画像が流されている。

どれを見ても30分以上全滅せずに保てた物が存在せず、そのあまりの呆気無さに自分自身情けなさすら覚えてしまふ始末であった。

「今回の訓練、概ねの結果には満足している」

重い空気の中ではあったが、少佐はそれを気にする事無く口を開いた。

戦闘中の良点や改善点など様々な課題を挙げ、そしてそれを聞いた私達1人1人がその新しい戦闘の概念に驚いてしまう。

例えば、ハイヴ内では無限と湧いて来るBETAを相手取る事無くサツサと反抗炉を潰しに行くと言つ今までに無かった戦闘内容の概

念。

光線級殲滅後、射線軸が重なって味方の援護が出来ないなどと言う事が無い様に積極的に空中で敵を攻撃する事の重要性。

背部担架から長刀を装備する際、弾き出される長刀でさえ咄嗟の武器となる事。

新しい概念が口を開く度に出て来て、その度に私達は驚かされる。画期的な内容であり、それを全て実戦で実行している剣崎少佐の戦績がその内容がどれだけ実用的であるかと言う事を物語っていた。

「飛んで撃つ、飛んで撃つ、飛んで撃つ、と」

晴子に至っては少佐の空中攻撃の重要性の話の辺りから、自分の新しい機動を考え出そうといつもならば崩す事の無い態度を崩してまで考え込んでいる。

多恵でさえ、少佐の話に真面目に聞き入っているのだ。

凄まじい頭脳の持ち主だ。

技だけでは無く、最後まで生き残るには頭脳も必要だと言う事が語らずとも分かる。

「つまり、今までのガチガチに固められた先入観から開放された新しい概念でお前達には戦って欲しいと言う訳だが 聞いているのか、茜」

「え、あつ、はい！申し訳ありませんでした！！」

「特にお前は聞いておけ。後々で仲間の行動に付いて行けなくならない様に、な」

「了解！」

「では、質問を受け付ける」

此処で本来ならば、プライベートな質問をするのが私達なのだが「下らないプライベートの質問をした者はグラウンド20周」と言う暗黙のルールと言う物が存在し（現に多恵はつい聞いてしまった為に実体験済み）聞くに聞けない状況なのである。

「……質問は無いな？宜しい。では、今回の訓練を終了とする」

しきりに時計をチエックしている辺り、もしかしたらスケジュールが押して居るのかも知れない。そう考えると、そんな時にも私達の為に時間を割いてくれる少佐がどれだけ優しいのか、心の底から理解出来るのだ。

「確りと身体を休めてくれ。次回の訓練の際には此方から通達する」

「……「ありがとうございました！！」「……」

私達5人の敬礼に苦笑を漏らしはしたが、少佐は表面だけは崩さずにお姉ちゃんへと視線を向ける。お姉ちゃんも、私達に敬礼を返し少佐と共にシミュレーター室を後にした。後に残ったのは私達5人なのだが

「茜、少佐のこと気になるの？」

「そ、そんなことないわよ！」

「ムキになつて反論すると、余計に怪しいよ?」

「……不振だね」

「ムキじゃない!」

「茜ちゃん、茜ちゃん!いつでも私の胸で泣いて」

「泣かないから、別に!」

何とも言えない甘酸っぱい雰囲気、少佐の居なくなったこの部屋から漂っていた。

遙

少佐は何度も腕時計を確認して居たが、やがてその必要も無くなったのか私に向つてただ「昼食でも食べようか」と笑顔を向けた。

先程とは場所が代わり、PX。

少佐は京塚曹長からの歓迎（背中を強打される事）を無事に乗り越え、急いだ様子も無く席を探す。

時刻は昼時を少し過ぎてしまった辺りだったので、PXにはあまり大多数の人は居なかった。だが、全く居ないと言う訳でも無い。疎らではあるが座っている人々を避け、少佐と私はあまり人が居ない

端の方へと着席する事になった。

「いただきます」

2人の声が重なり、お互いにその事に笑みが零れる。

少佐は楽しそうに食事を楽しんでた。

その様子は、見ている此方ですら思わず嬉しくなってしまうような微笑ましいもの。

味を楽しむ様に食事を噛み締め、人と居ると言うだけで楽しそうな雰囲気。

何と無くだが、そんな風を感じられる。

「少佐、この後のご予定が立て込んで居るのでは……？」

「ん？予定？いや、特に何も無いけど……そう見えたのかな、俺」

「あ、えっと……何度も時計を確認されていたので」

「ああ。ゴメン、無駄な事で悪い使わせちゃったか？」

照れ臭そうに笑った少佐は半ば程まで食べ終えた丼を置き、此方に視線を向ける。

訓練中の厳しさはなりを潜め、人懐っこい笑みを携えた少年の様な心を持つ少佐が楽しそうに口を開く。

「遙とは滅多に話も出来ないだろう？伊隅や速瀬、それに他のA-01のメンバーは直接的に任務内で関わる事は多いけどさ。管制の遙と関わる事になるのは訓練の時や、こうやって開いた時間に偶然顔を会わせて飯を食べるくらいじゃないか？」

確かに、そうかも知れない。

前線では無く、後衛で情報収集と伝達を行う私が少佐と関わる事はまず無いだろう。

彼には優秀な管制であり、副官でもある藤代千枝中尉が付いている筈だ。

余程の事が起きない限り、私と少佐が話をする事は必然的に少なくなってしまう。

だから、と。

少佐は言った。

折角出会えたのに微妙な関係のままじゃ詰まらない。

“ 遙のこと、教えてくれ ”

普通ならば易々と聞ける筈でも無い内容。

そんな事の筈なのに、彼は何の躊躇いも無くそれを切り崩した。

私自身もそれに対する憤りも感じず、この人になれば話しても良いと思ってしまう。

訓練兵の頃、事故にあった事で衛士としての道を断たれてしまった。

それでも皆と共に戦いたいと言う理由で管制官として勉強をしたこと。

明星作戦の時に大切な人を亡くしてしまったこと。

A - 01 に任官し、姉妹揃って頑張って居ること。

今の自分が伝えられる精一杯を、静かに語る。

言葉が口から紡がれる度に少佐はただ静かに私の独白を聞き入れ、何度も何度も頷きながら時に哀しそうに、時に何かを懐かしむ様に。

「 明星の事だが、すまなかった」

話も終えて、お互いの間に沈黙が下りた時、少佐は口を開いた。その口調に感じられるのは途方も無い程の後悔。

そして、あまりの重さに今にも押し潰されてしまいそうな程の懺悔。

「俺はあの場に居た。俺はあそこに居ながら、君の大切な人を護る事が出来なかった。

助けられた筈なのに、助け出せた力を持っていたのに。

俺はまた、誰も助けられなかった ツー！」

独白にはやがて熱が籠り、握り締めた拳には血が滲む。

自身の唇を噛み締め、自身を戒め、そして律しても尚治まらぬ後悔。

1人。

されど、1人。

だが 所詮は1人。

1人の命を背負う事など慣れているだろうに、少佐は今にも押し潰されてしまいそうな程に不安そうな顔をする。己の身体を抱き締め、不安定な心象風景を落ち着かせる様に、何度も何度も深呼吸を繰り返す。

「……重苦しい話をしちまったな」

気分が落ち着いたのか、先程よりも大分落ち着いた様子で少佐は言葉を紡いだ。

先程と比べると明らかに顔色が悪い。

だが、私にはそれを促す程の気力など残されていなかった。

圧されていたのだ、『命に対する価値観』と言う物に。

「悪い」

既に冷めてしまった井の中身を一気に掻き込み、少佐はそれだけを呟いて席を立った。

そんな背中を見て、思ってしまった。

此処でこのまま見送ってしまったら、きっと私は後悔すると。

「少佐!!」

その悲しみに暮れた背中。

声を掛けると、沈んだ顔の少佐が此方を振り返る。

「私には、こんな事しか出来ませんが……少佐の苦しい事や、辛い事。私で良ければ……いつでも聞きます。いえ、聞かせて下さい。

私だって 少佐の事が知りたいです」

別れ際に放たれたその一言で、

「ありがとう」

少しだけではあるが、少佐の笑顔に元気が戻った気がした。

クリスカ

「？」

それぞれの部隊に割り当てられた個室。

そこに顔を出すと、窓際に影が1つだけ見えた。

腕を組みながら、何かを考え込む様に　その影は静かに眠っている。

「……………何故こんな場所で寝る」

率直な意見が、口から漏れる。

本来ならば自分に割り当てられた自室で寝れば済む話だろうに、この男は相変わらず唯我独尊を地で行くと言つか、自由気侷と言つか

……………

部下である藤代中尉の苦勞が目に見えてしまう程である。

「起きろ、龍二」

その身体を2、3揺すって見たものの何の反応も返って来ない。

ただ夕陽に照らされた2人だけの空間には、彼の寢息だけが静かに響き渡っていた。

「起きろ。私を煩わせるな」

もう一度。

今度は先程よりも強く身体を揺するが、その目は一向に開く気配すら無い。

器用に椅子に座りながら、今も彼は夢の世界の住人だった。

「いい加減に　ッ！ー！」

痺れを切らし、その穏やかな寝顔を曝す顔面に拳すらねじ込もうと
考えた瞬間。

私は拳を止めていた。

流れる一筋の涙。

それが、ポツリと龍二の頬から伝い落ちたのだ。

いつも笑顔を崩さぬ事だけが取り得のこの男が、
夢の中とは言え、今は泣いているのだ。決して誰にも見せる事の無
いであろう涙を流しているのだ、此処で。

頬に触れる。

人の温もり、龍二の温もりを感じる。

顔を近付ける。

今にも唇が触れてしまいそうな、距離。お互いの吐息がくすぐった
い。

「……………どうして、お前は……………泣いている……………？」

未だに涙を流す龍二に問うが、答えなど返って来る筈も無い。
ただ長く、そして無駄に過ぎる時間。

だが不思議と嬉しく思える。

剣崎龍二の傍に居ると言う事が、何だか途轍も無く愛おしく思える
のだ。

「龍 「何をしている、ビャーチエノワ少尉」 なっ！ た、篁中尉
！？」

私が”何か”をしようとしていた時、扉を叩き壊さんと言う勢いで
篁中尉が部屋へと殴り込んで来た。その額に浮かぶ青筋の本数は数
え切れず、今の状況がどの様な誤解を招いてしまったのかは想像に

難しくない。

「少佐アあああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「中尉、やめ」

私の制止の声すら虚しく、中尉の怒りは既に臨界点を突破して居たらしい。

襟首を掴み、コレでもかと言う程に少佐の頭を揺すっていた。

剣崎

遙と話をした後、俺は確か部隊に与えられた個室で昼寝をしていた。していた筈なのだが……何故、床で寝て居るのだろうか。寝相が悪かった、と言う事なのだろうか？

「いつてえ……」

何やら首も痛い。

如何やら、寝違えてしまったようだった。

本当に運が無い。

そんな事を思いながらも 運があるか如何かを試される場所に足を運ぶのだから俺も馬鹿である。いや本当に、正真正銘の馬鹿だ。

場所は香月夕呼の執務室。

何て事は無い。

呼び出しだ、いつもと変わらぬ。

「失礼させて貰うぞ」

未だに痛む首を気にしながらも、俺は執務室のドアを潜る。

その先では俺の到着を待っていたとばかりに構えていた夕呼と

「鎧衣課長？」

アラスカで出会ったばかりだと言うのに、短い期間でまた出会う事になるとは。

実に珍しい。

神出鬼没の鎧衣課長に何度もお目に掛かれるとは。

「やあ、久しぶりだね」

「あまり見たくは無い面ですがね」

「ははは。私も嫌われたものだ」

「で？何で鎧衣課長が此処に？何か厄介事か？」

「まさか」と夕呼が前置きをし、ある書類を俺に渡す。

そこにはハッキリとした文字で”定期報告会”と言う良く分からない言葉が書いてある。

つまり……如何言う事だ？

「つまりは、アンタも出席するってこと。私のボディガードね」
「……で、ですよー」

で、結局鎧衣課長は何故此処に居るのかと聞くと「ただの連絡員」
との事だった。

鎧衣左近を連絡員として使える事態、夕呼の度胸には恐れ入る。

しかし、定期報告会か。

一体何を如何報告するのか……

実の所は、少し楽しみでもあったりするのが俺のクオリティーである。

58 9月12日 底知れぬ後悔（後書き）

このままだと、武ちゃん登場にまで少しばかり時間が掛かる

ふむ……

やっぱり、サッサと時間を「キングクリムゾンッ！」すべきだ
きつとそうだと思われる

と言う事で、また下書きを思案中です

59 9月13日 波乱万丈(前書き)

Another Century's Episode: R
を友人に貸して貰い、チヨクチヨクとプレイ中です
グラフィックが綺麗ですね

素直に、ゲームも此処まで進化したのか
と感動しました

剣崎

「定期報告つうから、”例の件”関連かとも思ったが……」

「そんな訳ないでしょ。アンタをコッチに引き込む際に向こうが提示した条件の1つよ。随時顔を出すことですよ」

「……その条件には私利私欲が強く関わっている気がする」

「別に構いやしないわ。あたしも、ただで帰るつもりは無いから」

軍用ジープの運転をしながら、助手席に座った夕呼と言葉を交わす。時刻は早朝。

別にこんな早くから出なくとも良いのだろうが、夕呼は朝から出る言い張って聞かなかったのだ。取り付く島も無いと言っヤツである。

結局、俺も折れてこんな朝早くから出る事になったのだが

「しっかし……何でお前達まで居るのかねえ」

横浜基地を出発する際、何処から聞き付けたのかは知らないが軍用ジープに雪崩れ込んで来た一団があった。

何やら良く分からない論を唱え、やれ連れて行けだの、やれたまに

は付き合えだの、勝手な持論を展開されて今に至る訳である。しかし、朝早くと言う事で未だに眠気があったのだろう。後部座席にて唯依、クリスカ、イーニア、セレナの4人は寝息を立てていた。

幸せそうに眠るのは良いが、お前達絶対に叫び疲れたただけだろうか？ ああ……… 実に先が思いやられる連中だ。

「で？わざわざ出向いた先にある、お前の目的は何か気になるが」

そんな4人は他所に、俺も俺で夕呼に1つの質問をする。

何と無くだが、面倒事に巻き込まれる気がしたのだ。

答えるか如何かは分からんが、それでも聞かないで放置すると言う事よりは何倍も良い。

聞いて玉碎。

これ、俺のポリシーだから。

「別に。アンタには関係無いわよ」

「部下を預かる手前、それじゃ簡単には引き下がれない」

此処でアツサリ退かない事も重要である。

過去の俺からすれば考えられない事ではあるが、夕呼から何かを聞き出すならば多少粘った方が案外アツサリと折れてくれたりするのだ。

「……… ったく。佐渡島のデータよ」

この通り。

長年付き合っていれば、お互いのウィークポイント程度心得ている。それは向こうも同じだろうが、それはお互い様であろう。

「佐渡島？……ああ、”悪巧み”には最適だな」

”何の”とは聞かないのね」

「あんな化物の巣窟でやる事と言ったら、1つだけだろ」

ハイヴが聳え立つあんな場所でやる事など、何も無い。

精々の所は間引きや、警戒などが関の山と言う所であろう。

そんな場所の情報を聞き出そうとすると言う事は、つまりは”そこ”でしか出来ない”事をしようとしていると言う事だろうか？

「馬鹿じゃないようね」

「当たり前だ」

馬鹿にした様な夕呼の声に、此方もムスツとした返事を返す。

如何にも「不機嫌です」と声音が現している様だ。

実に素晴らしい演技である、いつそ軍人から劇団員にでも転職するか？

そんな事を考えている内に、既に目的の場所は目と鼻の先まで迫っていた。

相変わらずバカバカしいと思えるまでの大きさを誇る場所 帝都。

殿下を護衛する為に基地周辺を警護する戦術機の数は軽く見ても十数機、唯一の入り口には見張りの兵士が腐る程溢れ返っている。

実にアホらしい、人材を無駄にした素晴らしい警沢振りだ。

悠陽自身も納得こそ出来ないだろうが、無理矢理納得するしか無いのだろう。

あの子も、随分と難儀な人生を歩む事になったな。

「起きろ、荷物共」

後部座席で眠っていた4人に声を掛け、検問をしていた兵士の前で止まる。

夕呼が書類やら手紙やらの確認をされている間に、俺も俺で近くに居た兵士を呼び止めて軽い雑談を交わす事にした。

「悪いけど、巖谷中佐に「剣崎が来た」って伝えて貰えるか？早急に」

「け、剣崎少佐！？りよ、了解しました！！」

何の為の定期報告会だか知らないが、俺自身も帝都に来たのだ。

巖谷中佐に 少しばかり無茶なお願いを聞いて貰うことにしよう。まあ別に構える程の大事じゃない。

預けていた”物”を返して貰うだけの事なのだから。

……使うつもりはサラサラ無いが。

「お通り下さい」

「検問ご苦労さん」

夕呼の方もチェックが終了したのだろう。

開口される門を潜り、隣に横浜の魔女を乗せたままジープは帝都に踏み込んだ。

さて 顔合わせは波乱に満ちる事だろうな。

「顔合わせはお初になりますわね。横浜基地副指令官、香月夕呼ですわ」

目の前に控えるのは 紅蓮中将、月詠姉妹に巖谷中佐、俺の見知った顔が殆どだ。

どれもコレも見れば見る程、本当にコレが報告会なのか如何か疑いたくなる。

同窓会の間違いじゃないのか、コレは？

「ふむ、貴君がああ……剣崎よ。貴様が認めた主だ、俺は苦言など無いぞ」

「中将に代弁されちゃったな。まあ、俺も同じ気持ちだぞ、龍二」

夕呼の会釈に対して、紅蓮中将と巖谷中佐はあろう事か俺に振って来やがった。

行き成りの事で焦ってしまふ。

うっかり、変な事を言ってしまったら後が怖い。

かと言って、落ち着いて考えている暇など有る筈も無いのだから困ったものである。

「あ、あはは。いやあくお目に掛かってくれて光栄です」

意思とは無関係に口から飛び出した言葉は、そんな簡潔な物だった。あまりにも捻りが無さ過ぎるだろう、幾ら何でも。

コレは　やはり、もう少しばかり頭を捻るべきだったのだろうか？ いやいやいや、落ち着いて考えてもみる。

周りに控えるのは将官クラスから尉官クラスまでだ。悪ふざけをしたら殺される。

確実に、首が飛ぶ。

軽口を叩く程の余裕も無いとは、俺の存在意義の七割を消している。

「しかし、こつも早く報告に来るとは。其方も随分とヤル気らしいの」

紅蓮中将は唸りながら、後ろで控えていた者達に何か合図を送る。

その次の瞬間には俺と夕呼の前には飲み物が出されており、この何とも言えない堅苦しい客人としての雰囲気は俺自身が圧倒されそうになっていた。

かと言って、それを顔に出す程に阿呆でも無い。

傍らに立って此方へとお茶を出した侍女に軽く微笑み、礼を言って置く。

こんな単純な事でさえ、相手にとっては此方を見定める重要な材料となるのだ。

まあ、どちらかと言うと見定めたいのは俺では無く夕呼だと思うがね？

「面倒事を後回しにすれば、後々に支障を来たしますから」

「こ、この女あつー！」

地雷踏みやがった！！

国連、嫌いです。みたいな連中の前で良くもまあサラツと言えるな！！

馬鹿なのか？！

い、いや、馬鹿の筈が無いのだが……

乱心したか、夕呼！見損なつたぞ！もう知らない！！

紅蓮中將は苦笑を漏らしているが、脇に控えていた月詠姉妹は今にも夕呼を射殺さんばかりに睨み付けている。やはり、勘に触つたのだらう。

思わず巖谷さんを見やるが、あちらもこのとんでもない発言に呆れたのかその顔には呆れを多分に含ませた笑顔があつた。

しっかし 真那・真耶には申し訳無い事をしちまつたな。

顔すら見たくないのであるう夕呼の面を拝むだけで無く、こんな戯言まで口にされては腸が煮え滾らんとする勢いだらうに。後で謝らう。

そうしよう、うん。

「肝心のこの報告会を企画した”彼女”は堂々の遅刻？偉いものね、征夷大將軍ってヤツも」

だが、この女はあろう事か更に地雷原を突つ走る。

此処まで来ると何かあつたのでは無いか、そう考えてしまつ程の事だ。

幾ら小声とは言え、この国のトップ達の前で征夷大將軍の影口など許される筈が

「動くな ツー！！」

思わず、懐から銃を取り出し、その銃口を目的の人物に向けた。濃密な殺意が辺りに充満し、それを向けられている人物　夕呼を俺の後ろに控えさせる。

「確かに此方の失言は申し訳無く思う。だからと言って、此方も黙って殺されてやる義理は無いぞ!？」

殺気を向ける相手、俺の銃口は確りと真耶へと向けられていた。

「退いて下さい、少佐。その女だけは　我慢なりません」

「それは出来ない相談だな、真耶。この女を此処で殺される訳にはいかない」

姿勢を低くする真耶に対し、此方も動きに対応出来る様に銃を確りと構える。

一触即発の空気。

誰かが動けば、それだけでこの場に居る2人は爆発するだろう雰囲気だ。

だからこそ　動く訳にはいかない。

「チツ……夕呼、後で覚えている」

「悪いわね。物覚えは悪い方だから」

優雅にお茶などを口に含みながら、夕呼はソファに腰掛けている。何とも優雅なものだ。

此方は一触即発の危険な雰囲気だと言うのに、唯我独尊を地で行く女だな。

だが、俺自身もそこに惚れちまったからこそ此処まで付いて来て居

るのかも知れない。

自分に呆れちまうが、此処でコイツを殺させる訳にはいかないのだ。

「真耶、此処での争いは不毛だ。今直ぐ殺気を収めて欲しい」

「断る!!」

彼女の腕の中で、何かが光る。

暗器か何かだろうか？どちらにせよ、俺達がかかなり危ない状況だと
言う事は理解出来る。

「やるしかないか……ッ！」

彼女に対する射撃が有効では無い事は理解しているつもりだ。

ならば、肉体言語で語り合うしかあるまい。

右腕を軽く前に突き出し、左腕は腰の辺りに留めて置く。

右腕で攻撃を捌き、左腕で一撃を入れる俺なりのファイトスタイル
だが さて、真耶相手に何処まで食い下がれるかが実に不安であ
る。

「魔女が ツー!!」

「夕呼、下がれ!!」

憎々しげに発言する真耶に対し、俺は夕呼の前に立ち塞がり彼女を
迎え撃つ。

せめて時間を稼がなければ……ッ!

と言うか、中将と巖谷さんは何故観戦の雰囲気曝け出しているの
だろうか？

アンタ等は止める側の人間だろうか!!!

「真耶！！」

流石の真耶の暴走に、真那も焦りを感じ俺達の間にも身を滑り込ませようとする。

がしかし、時は既に遅い。

真耶は既にトップスピードまで加速しており、此方はそれを迎え入れる形となったのだ。

この状況を止められるとすればそれは

「お止めなさい、真耶さん」

彼女が絶対の忠誠を誓う、悠陽くらいのものだろうか。

悠陽

「大変見苦しい場面をお見せしてしまい、申し訳有りませんでした。此方側の不手際で、わざわざ殿下にお見えになって頂くとは」

龍二お兄様は仰々しく頭を下げた。

その後ろにて、呆気にとられた様に香月博士が口を開けている。

何か可笑しな所でもあったのだろうか？

そう考えていると、その疑問に答える様に口から言葉が紡がれる。

「ア、アンタ……そんな態度、出来るの？」

「こんのおつ、アホンダラアツ！！さっきまでの面倒事を学習しろ、ド阿呆が！！！」

スパンツ、と頭を引っ叩いた龍二お兄様を恨めしげに睨み付けて居たが、やがては香月博士は此方へと視線を向けて頭を下げた。

「横浜基地副指令を務めております、香月夕呼ですわ。以後お見知りおきを」

米国とのパイプや、此度の無理な剣崎龍二引抜。

前者だけでさえ敵が多いと言うのに、後者で更に多くの敵を作ってしまった御仁。

だが、その実力は確かなるものだとは証明されている。

理由など簡単ではないだろうか。

龍二お兄様が彼女に付き従っている。

それだけで、理由としては十分だと思うのだ。

「ま、まあ此処はお互いに気を取り直しまして……龍二、始めてくれ」

「始めてくれって、俺は何も聞いていませんぜ？巖谷さん」

「はあ！？何だよ、お前達側が色々企画して………つうか俺の呼ばれた理由って何だ？」

「そりゃ後々。と言っか、俺も昨日の夜に聞かされたばかりですよ？」

巖谷中佐と龍二お兄様が何やら困惑顔。

そう言えば定期的に報告に来て欲しいとは告げていたが、その内容を告げる事は無かった。

コレは如何考えても、此方側の不手際と言う事になるのでしょうかね。

「……折角のお客人です。紅蓮、出来うる限りの持て成しを」

「御意に」

積もる話　と言っ程、再会してから時は経っていませんが。

折角の機会ですから、皆で楽しく食事をするのも一興なのかも知れませんが。

それに、龍二お兄様の”お友達”も気になりますから。

「……強引な」

「何か言った？」

「いや。相変わらずの強引な仕草に兄貴は頭を抱えたくまりましたよ」と

龍二お兄様は一度此方を見やると、呆れたと言わんばかりに溜息を

吐く。

それに対して香月博士は困惑顔だったが、その言葉の真意が分かる私だからこそ龍二お兄様のそんな言葉に思わず笑ってしまった。

やはり、龍二お兄様は何処へ行こうとも歩むべき道は変わらない。

篋

外での待機命令が出されていた私達の前に、漸く龍二さんがその姿を現す。

その表情には疲労が色濃く残っており、中でどれ程の修羅場が繰り広げられていたのか創造するには難く無い。

「少佐、顔色悪いですよ……？」

流石に心配になったのか、セレナが少佐に駆け寄り額に浮かぶ汗をハンカチで拭う。

問題ない、とだけ呟くが如何考えても問題だらけだ。

それ程までに中では恐ろしい場面が繰り広げられていたと言う事なのだろうか？

「情け無いわねえ、もっとシャキっとしなさいよ」

「誰の所為だ、誰の……！」

そんな龍二さんの後から現れた香月副指令は案外ケロツとしていたのを見て、この場にて龍二さんの帰還を迎えた私達は理解してしま
う。

“ ああ、日本に来ようともこの人のトラブルメーカー体質は変わら
ないのか”

あまりのアホらしさに、クリスカに至っては溜息すら吐く始末であ
る。

「ああ〜……取り敢えず、お前達に朗報だ」

そんな中、龍二さんはあまり乗り気では無さそうに口を開く。
如何考えても朗報などでは無い。

「日本の一番偉い人は誰かな〜？はい、クリスカ」

「？征夷大將軍だろう。その程度は学習済みだ」

「うん、偉い」

乾いた笑いを響かせ、龍二さんはそこで言葉を止める。

顔が俯き、先程よりも更にドンヨリとした言葉が私達へと襲い掛か
った。

「 そんな征夷大將軍から食事のお誘いだ。全員、含めて」

「「「へ？」「」」

そのあまりにもスケールの大きな朗報 否、凶報が私達全員へと
伝わる。

唯一意味を理解していなかったイーニアではあったが、龍二さんが分かり易く「ご飯を食べる事だよ」と説明すると嬉しそうに、

「みんなで、ごはんだね」

と笑顔で言んでいる。

非常に微笑ましいのだが 此方は非常に困惑しているのだ。よりもよって、私達の様な輩が殿下の前で食事など……無理だ、緊張して物が喉を通る気がしない。

「さあ……逝こうぜ？」

ニタリと笑った龍二さんの笑顔。

それは まるで私達を地獄へ迎え入れる悪魔の様にドス黒かった。

59 9月13日 波乱万丈（後書き）

何故か地雷を踏みまくる夕呼
その真意は！？

龍一以下その仲間達は地獄の様な戦場（食事）へと赴く
生きて帰ってこられるのか！

そんな感じで
待ってね、次回！！

60 9月13日(2) 恩人、恩師、そして親友(前書き)

風邪をひきました

いやゝ、鼻が垂れる垂れる

あっはっはっはっは！

60 9月13日(2) 恩人、恩師、そして親友

唯依

長大なテーブルに並べられた数々の料理。
分かり易い物で言えば刺身や天麩羅など、このご時勢ではあまり考えられない様な高級な料理がその場を埋め尽くしていた。
あまりの壮大な雰囲気圧倒される私達。

だが、それを物ともせず龍二さんと香月副指令は着席していた。
両者共に姿勢を正し、背筋を伸ばして殿下の着席を待つ。
先程までの仕草や態度など表にする事も無く、ただ黙々と瞑想を続けていた。

「何を呆けているのか知らないが、いつまでも立っているままは失礼だぞ」

そんな中、この大広間に凜とした声が響く。
片目だけを開けた少佐が、此方へと視線を向けていた。
咎めると言うよりは親が子に語りかける様な口調だったので、それが私達に対する注意だと言う事すら一瞬判断に迷ってしまう。

「おいで」

ニコリと微笑み、龍二はイーニアに手招きをする。その言葉にいち早く反応した彼女は、少佐の膝元へと腰を降ろしていた。

嬉しそうにニコニコと笑うイーニア。

そして笑みを浮かべる彼女の頭を撫でる少佐。

親子の様な、姉妹の様な、不思議な絵だ。

「早く席を決めないと、殿下が到着しちまうぞ？」

あまりの事に狼狽していた私に向かい、少佐は苦笑を漏らしながらもそう告げる。

確かに、いつまでもこの様な失態を曝す訳にはいかない。

いかないのだが、こんな事は初めてなのだから仕方が無いだろう。

だって、相手はこの国で最も尊い存在で

私達は、そのお方を護る為に存在している

でも、今の私はそんなお方に食事に誘われていただいでいて

正直な話、頭の中がグチャグチャになりそうだ。

「緊張するのは分かるが、緊張のし過ぎも身体に毒だ。おいで、唯依」

そう言いながら、少佐は自身の隣の座布団をトントンと叩く。

つまり、隣に座れと言う事なのだろうか。

寧ろ、私にとっては其方の方がより一層恥ずかしいと言うか、

それを望んでこそ居たが、こんな人数の前でそんな事をする勇氣は無いと言うか、

よくよく考えてみれば此処で如何にかしてアピールさえ出来れば？

「？ ユイ、どうかしたの？」

「恥かしがり屋の唯依には困ったな」

クツクツと笑いを零しながらも、少佐はドンドン私達の席の割り振りを決めて行く。

自身の右隣に香月副指令を。

膝の上には何故かイーニアを。

自身の左隣には私を。

そして、向かい側の席にクリスカとセレナを置く。

仲間ハズレの様にして済まないと何度も謝罪をしていたが、クリスカとセレナは特に気にした様子も無くアツサリと向かい側の席に座る事を承諾して居た。

ただし 何やら、色々と含む事柄があった気もするが。

「夕呼、一杯やるか？帝国の酒は銘酒揃いだぞ」

「たまには良いかもね。ただし、中途半端な銘柄は出さないでよ」

「贅沢な奴だな……」

よいしょ、と声を出しながら少佐が席を立つ。

厨房にでも向ったのだろうか？

ただ、今から飲むのであろうお酒を取りに行ったのだという事は理解出来る。

少佐が傍から見ても上機嫌そうに見えるのは、お酒絡みの時と自分の認めるべき”敵”が現れた時のみだから。

剣崎

「まつ、取り敢えずはお疲れ様」

掲げたグラスに、他の5人のグラスがカチンと当たる。

結構高そうな酒瓶が既に俺と夕呼の後ろにはスタンバイされており、何杯飲むつもりなのか正直周りに不安を与えていそうな気もしなくては無い。

でも良いじゃない。

折角のお酒ですもの。

「真つ昼間から酒、酒、酒……次に料理と来りゃ、至れり尽くせりだな」

破格とも言える待遇に内心では感謝しながらも、グラス限界まで注いだ日本酒を一気に煽る。喉を通り抜けて行く刺激的な感覚が、実に心地良い。

それは夕呼も同じ様で、満更と言う表情を浮かべていたのを見逃さなかった。

「お前も、お疲れ」

「ん。お疲れ」

全員での乾杯の後、何と無くもう一度だけ夕呼にもグラスを傾ける。その意図を理解しているからこそ、躊躇う事も無く夕呼は俺のグラスへと自身のグラスを当てていた。カラン、と乾いた音が鳴る。その次の瞬間には2人揃ってグラスの中身を飲み干していたが。

「仲が良いですね、お2人共」

そんな俺と夕呼の行動を見ていたセレナが、何とも不思議そうに言葉紡ぐ。

コイツとは仲が良いとか、そんな簡単に説明出来る関係では無いのだが……

成る程、確かに良く考えてみればそう思われてしまうのも仕方が無いのかも知れん。

だが勘違いだけはしないで欲しい。

俺達は恋仲では無い。

これは確定された事実である。

「……昔からの腐れ縁よ」

そんな俺の気持ちを代弁するが如く、夕呼は呟いていた。

何かを懐かしむ様に、そして過去を惜しむかの様に。彼女にしては珍しい 感傷に浸っている様子が見て取れる。

「人に話す程の事でもねえよ。酒のツマミとしちゃ、一流だろ」

「でもっ！」

ドンツ。と珍しくセレナが自身の意見を前に押し出す様に強く食い下がる。

珍しいな……この子がコレ程までに食い下がるとは。

俺の過去話にでも興味があるのだろうか？

いや、別に何て事は無い。

クソツタレな上官と、それに従って来た忠実な犬だった頃の俺の話
そして

ある1人の”親友”との、別れの話。

「エニツクス少尉、弁えろ！」

唯依の叱責が飛んで来たので、漸くセレナは落ち着きを取り戻したのかバツが悪そうに腰を下ろす。それ程までに聞きたかったのか、と何と無く苦笑を浮かべてしまった。

さて。

では、二流のツマミ話でも語ってやるとしよう。

色々と省きながら、時々呼に合いの手を入れて貰いながら。

アイツの面、忘れない様に。

まだまだ俺も、夕呼も、そして神宮寺も精神的に幼かった頃の話。

夕呼は既に天才的な頭脳を發揮し、色々な者達からも一目置かれる存在となっていた。

数々の研究室から彼女に声が掛かっていたが、まだその頃の彼女はどの研究室へと赴くのか決めていなかったと言う。

何故、そう問い掛けても今ですら答えてくれないのはご愛嬌だ。

対して、神宮寺も類稀なる操縦技術を持ってして着実な出世コースへと足を伸ばそうとしていたのは今でも良く覚えている。

何度も「私はコレでいいのか」と夜な夜な相談されていたのだから当然かも知れんが。

その度に俺は翌日に寝不足になり、大変だったのは苦い思い出である。

そして俺は

「……大丈夫か？」

「わ、悪い……迷惑掛けちまうな、剣崎」

「気にするな」

理不尽な扱きを受け、心身共に限界になっていた仲間を担ぎ上げながら訓練に耐え忍ぶ生活を送っていた。浴びせられる罵声を気にも留めず、俺はただ只管に倒れ伏した仲間を担ぎ上げ、共にゴールへと向って行く。

何度、教官に殴られた事か。

何度、教官に歯向かおうとして仲間止められた事か。

此処まで言えば気が付くだろう。

当時の俺は所謂、問題児だったのである。

「やっぱり、どんな英雄にも下積み時代がありますねえ」

「最初から才を発揮する奴なんてほんの一握りだ。俺も含めて、な」

アイツと出会ったのは、教官に殴られて自室へ帰る時の事だった。怒りすら抱く事無く、俺はただ仏頂面を決め込みながら自室への通路を歩いて行く。

途中、尉官の者と肩がぶつかったが、俺の顔を見るなりサッサと行ってしまった。

それ程までに俺の面が不気味だったのか。

それとも俺の目には殺意が宿っていたのか。

その両者共に違つ　親父の権力の所為なのか。

いっそ、殴り掛かって来てくれた方がどれだけ楽だっただろうか。

拳を握り締め、フツフツと込み上げて来た憤りを無理矢理抑え付ける。

此処で暴れる訳にはいかない。

此処で、今までの苦勞を全て水の泡に返す訳にはいかない。

俺はその一心で、何とかこの怒りを静める事が出来た。

ただ、抑え付けたと言っても怒り事態が何処かへ消えていった訳では無い。

まだ胸の内に残る余韻を感じながら、俺はそれを忘れ去る為にある

場所に向う事にした。

この時間ならば、煩い輩は1人も居ない筈だろう。

そう思い、俺が足を向けた場所は 戦術機の格納庫だった。

「その頃のコイツは、まだ戦術機にすら乗れない訓練兵だった。だからこそ、コイツが戦術機に乗るまでは誰もがコイツの事を”問題児”としてしか扱わなかったわ。

あたしも含めて、皆がコイツをただの負債としてしか認識していなかった」

「まあ、確かに俺自身だって戦術機に乗るまでは人よりも少しばかり身体が丈夫程度の取り得しか無かったからな。その程度の長所じや、チームワークを乱して良い理由にはなりやしない。お蔭様で、俺は物の見事に部隊長からも目の仇にされた訳だな」

その頃の俺からすれば、唯一BEATと戦う事の出来る戦術機は憧れの様な物だった。

奴等を一匹でも多く倒す為にも、強い力が必要だったのだ。

母が戦場に赴き、父 その頃はそれ程までに恨んでこそ居なかったが は国を纏め上げる事に尽力して居たのに、俺には何も無かった。

だからこそ焦っていたのは若さ故の何とやら、なのかも知れなかったが。

搬入されて来ていた撃震を見やりながら、ただボンヤリとそんな事を考えていた。

だからこそ、俺は人の接近にさえ気が付かなかったのだろう。いつもならばその異質な存在に気が付いた筈だったのに。

「何や？自分、何処の所属や？」

不思議そうに首を傾げながら、そいつは俺の前に現れた。

乱雑に纏められた黒髪、此処では珍しい関西訛りの喋り方、全てが異質。

だが　その胸に輝くワッペンがその男が衛士である事を証明して居た。

つまりは、上官なのだ。

「ッ、失礼しました！」

「ん〜？ああつ、訓練兵？何や、後輩さんかいな」

ケタケタと笑い、男は胸元から煙草を取り出す。

吸うか？と目で語り掛けてきては居たが、上官と言う存在を信用し切れて居なかつた俺にはそれを受け取る様な気はサラサラ無かつた。男はそれを見て、「つまらん〜」と不貞腐れた様に呟くと煙草に火をつける。

「自分、戦術機好きなん？」

「……私は、ただ……」

「ああ無理せんでええよ。戦う理由は人それぞれ、無理に聞かんわ」

今までに出会った事の無いタイプの性格。

何処かドライな感じがするその性格を真に受けて、俺は確かに思った。

こんな人も居るのか、と。

「アイツは……海藤は、本当に良く喋る奴だった。ひょうきんな性格、とでも言えば良いのかも知れない。アイツの性格は俺からすれば珍しかったのもあるのかも知れん。

何せ、周りに居たのは真面目ちゃんと捻くれたサディストだけだったからな」

「お前は……その男が気に入ったのか？初対面で？」

「まさか。クリスカだって、初対面で俺が気に入ったか？違っただろ」

「それは……当然だな」

当然、俺は最初こそ海藤を頭がお花畑の男としてしか見ていなかった。た。

周りが敵だらけだと言っこのご時勢、こんな飄々とした性格をした男が居ると言う事実すら当初の俺からすれば異質な事だったのさ。

だから俺は 海藤が嫌いだった。

だが、戦術機の格納庫へ足を運ぶ度に俺は海藤と顔を合わせる。

いつしか俺は海藤と階級など気にする事は無い、腹の内を話し合える様な仲になっていた。可笑しいだろう？最初は嫌いだった筈なの

に、いつしか友人関係だ。
だけど、その頃の俺はそれに不快感を覚えなかった。

これも良いのかも知れない。
何となくだけど、そんな風に考えていた。

「おお龍二。今日も訓練お疲れやなあ」

「……別に、何て事は無い」

いつもと同じ様に、海藤は俺が現れると笑みを深くする。
本当に、嬉しそうに笑っていた。見ている此方も思わず笑ってしま
う程の。

「相変わらずのクール路線やなあ。自分、それで平気か？」

「何が」

「じつじつ〜疲れんの？」

何を言ってるのか、その時の俺には全く分からなかった。
既に身に付いてしまった無表情に対して、自分が疑問を抱く事など
無かったからだ。

無表情に慣れた俺に、疲労なんて無かったから。

「……うるさい」

「何や？もしかして自分、照れとる？」

「関係が無いだろう。俺がどんな面をしようが、お前には」

「何やとく？親友に随分な言い方やなあ」

そう言い、海藤は俺に飛びついて来る。

コイツらしい、身体全体を使ったオーバーなりアクションだ。付き合い始めてから大分経った俺にとって、それは既に意味を成さない。

その程度のこと、既に見切っているのだから。

軽く頭を抑え付け、此方へと抱き付こうとする海藤を制する。

バカバカしい、そんな風に思いながらも　俺は今の状況に満足していた。

夕呼、神宮寺　そして海藤。

今まで1人だった俺は、そいつ等と出会う事で群れる事の楽しさを知らうとしていた。

「コラアツ！！海藤少尉、出撃だ！！」

「あつ！忘れとった……龍二と居ると、時間が分からんわ」

「……忙しいな。衛士は」

「自分もいつかはそうなるで。行って来るで、龍二！」

「ああ。気を付けて」

上官からの怒鳴り声で我に返ったのか、海藤は焦り始めた様にアタフタと動き始めた。

別段、持つ物など何も無いだろうに……

半ば程は呆れながらも、俺は戦術機の下へ向おうとする海藤に手を振った。

「なあ！」

「……ん？」

去り際。

海藤が此方を振り向き、大きな声で叫ぶ。

「龍二が衛士になったら、俺の背中には任せるで〜！」

その言葉を聞いた時、俺は海藤がどうしようも無い程のお人好しなのだと知った。

こんな時にすら、俺や未来の事を考えているとは恐れ入る。

正真正銘、筋金入りのお人好しヤローだ。

「ああ……任せる」

「で？で？その続きは！？海藤さんと龍二さんは無事にタッグ結成ですか！？」

セレナが興奮した様に捲くし立てる。

何をそれ程までに興奮するところがあるのかは分からなかったが、唯依すらも聞き耳を經ているのが良く分かった。

「……いせ」

そこで一息吐く。

懐かしい、海藤の人懐っこい顔。

今の俺の人格その物を形成する下地となった、俺にとって唯一の親友。

そして 恩師であり、恩人の1人。

「 海藤は、死んだ」

「「「え?」」」

セレナが、唯依が、クリス力が。

信じられないと言った様な視線を俺へと投げ掛けた。

何故そんな視線を向けて来るのかは分らんが、当時の俺はただのクソガキだったのだ。

誰かを護る力も、誰かに頼る権力も無かったのだから仕方が無いだろう。

それに 俺は結局、海藤の最後を知らないままだ。

「詳しい話は、結局聞けなかったが……奴等お得意の物量での押し返しの前に、海藤たちは殿を担当。その結果として、アイツは死んだ。じまったって訳だ」

俺の背中には頼む。

そう言ったアイツは、俺が任官するよりも先にあの世へと旅立った。

早過ぎる死だった。

そして、俺自身には重過ぎる事実だった。

だから俺は 性格を変えた。
海藤を忘れない為に。

無表情を消して、アイツの様な飄々とした態度を取る事を心掛けた。
結局、ただの自己満足でしか無いのかも知れない。

それでも俺は良いと思う。

そうしなければ、きっと俺は

「ああ〜やめだ！やめ！辛気臭い話は此処で終わり、はい宴会！！」

手をパンパンと叩き、ジメジメとした雰囲気を取り払う。

自分から作ってしまったのだが、こう言う雰囲気は正直嫌いなのだ。
折角の酒が不味くなってしまふ。

「良く言うわよ……自分で作ったクセして」

夕呼からの強烈なカウンター。

見事に急所を射抜いて来たが、何とかそれを表情に出さない様に心掛ける。

なあ、海藤。

「そうですね……うん、そうです！辛気臭い雰囲気止め、僕にもお酒下さい！」

見ているか？

「……折角の宴の席です。粗相が無い程度に、楽しみましょう」

俺は

「……お前の過去がどの様な物だったとしても、今は今だ。龍二」

強くなっただろ？

「りゅうじはつよいね」

「ああ。お前達が居てくれるからさ」

まだ、お前のは追えない。

だから済まないが、そっちで酒の席でも用意していてくれ。

時期が来れば 盛大な花火を打ち上げて、綺麗にそっちに向ってやるぞ。

「ん？何だ、もう始めておったのか？」

「遅いぜ、紅蓮さん。こっちはもう出来上がり掛けだよ」

「無礼な奴等だが、大目に見よう。さあ飲めや騒げ！下らぬ戯言な

「と言わぬ、盛大に騒ぎ尽くすが良い!!」

「おお〜い。唯依ちゃん」

「叔父様!？」

「何時ぞやの借り、返して貰いに来たぜ? ホレ、頼むよ」

「あ、あ、あああ、ああの、しよ、少佐の前では……ッ!」

殿下登場前だと言うのに。

既に俺達のヴォルテージは限界にまで高まっていた。

存外、こんな俺達の姿を見た悠陽は……笑っだらうな、多分だけど。

60 9月13日(2) 恩人、恩師、そして親友(後書き)

次回になってしまった本格的会食……と言つ名の宴会

今回は今の龍二が龍二となった原因となる『海藤』を描きました
本編に大きく関わる事はありません

ありませんが、龍二にとっては大きな存在です

そう言う感覚で、記憶の隅っこの方に入れて置いてやって下さい

61 9月13日(3) 絆の鎖(前書き)

お久しぶりで御座います

体調を崩しておりましたが、何とか完治したので速攻で書き上げて
投稿致します

此度の話は悠陽メイン……なのか？

「殿下、此方にて会食が行われております」

「皆様のご様子は如何でしたか？迷惑なされていませんでしたか？」

「いえ、皆様楽しそうに殿下のご登場をお待ちしておられましたよ」

「そ、そうですか……急がねばなりませんね」

廊下を、悠陽がセツセと走る。

その後ろに付き従う侍女は然し 彼女にある事を隠していた。

宴の場では、既に彼女の登場を待たずして皆が無礼にも出来上がって居る事を。

言える筈も無いだろう。

純粹無垢なこの少女に、その残虐なる事実を。

「ところで」

「は、はい」

歩を進めていた筈の殿下が、ふと足を止めて此方を見据える。

その瞳は何処までも純粹であり、そして何処までも真っ直ぐであった。

ああ、日ノ本を支える征夷大將軍は立派なお方だ、等と関係の無い事を思ってみる。

「何か、”隠して”いませんか？」

そして鋭き投球。

言葉に詰まりながらも、「滅相も御座いません」と返すが殿下は怪しむばかり。

何もかも、あの男の所為だ。

劍崎とか言う、元は帝国にて力を振るっていた男の所為だ。

劍崎

「それです、叔父様」

「ぎゃあああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

「嘘だろ……!?!」

「九連宝燈……う、美し過ぎる……ッ!!」

場所は変わり、我等が宴会場。

そこでは先程までの陰険な雰囲気を取り払われ、ある種の遊びに興じていた。

いや、コレを遊びと言って良いのかは疑問に思う。

麻雀 大人の遊び。

だが、本来ならば勝つて然るべきであろう大人達は、たった1人の少女に封殺されていた。

「ああ、ダメだ。九連宝燈？戦場出たら死にますね、俺。死亡確定ですわ」

もう半ば程は死に体になりながら、勝負を投げ掛けていた龍二が涙を流しながら己の完全なる敗北を嘆く。

と言うか、最早目の前で起きた出来事はそんなチャチなレベルでは無い。

天文学的な数字とか、色々と吹き飛ばした先の新たな世界の境地へと旅立っているのだ。

少女は、

篁唯依は、

疑う余地すらない、“天才”だった。

九連宝燈

ある1種類の数牌で

『1・1・1・1・2・3・4・5・6・7・8・9・9・9』

と残りどれか一枚であがりになる非常に美しい、美しすぎる役。

確率上ではもはやありえないほどの役で、上げれば、死ぬとも言われている。

一生に一度上がれるか上がれないかとも言われている。

「はっはっは、はーはっはっはー！」

巖谷さんも笑ってこそ居るが、それは精神が持たなかったからだろう。

この人の魂は、既に少女の手によって粉々に粉碎されている。まるで飛び回る八工を捻り潰すかの様に、プチリと。

「あ、ありえん……！」

あの紅蓮中将ですら、目の前で起きた大惨事に驚愕している。それはそうだろう。

この数局の間に、唯依には驚かされている。

まさか九連宝燈の前にも、天和飛んで来るとは思いもしなかった。

“勝て”と言われたのなら、正直に言えばBETAよりも難しい。

と言うか、BETAの巣窟であるハイヴへと突撃した方が確率的には成功率が高そうな気すらして来るのは彼女の有り得ない程の強運からなのだろうか。

「アツハツハ！良いわねえ、アンタ。そのまま龍二ボコボコにしちやいなさい」

「す、すみません、龍二さん……ッ！」

ビール片手に、上機嫌な夕呼。

そしてその隣にて、我等が麻雀女王は恐縮そうに肩身の狭そうな思いをしていた。

「テ、テメエ……唯依ちゃん、もう一局だ！さあ起きろ、死人共！負けっ放しは好きじゃねえのさ、男の子的にいつ！？」

「いや、もう勝てる気がしねえ」

「うむ。時には諦めも肝心だぞ」

「うるせえ！！部下に負けて「勘弁して下さい」なんて言えるかボケエツ！！」

牌を混ぜ、新たな山を作る為の作業を黙々と始める大人3人と少女1人。

こう見ると大人が子供を騙して、なんて図を想像してしまっただ。

だが勘違いしてはならない。

カモは大人達であり、

少女は 猛虎なのだから。

「随分と楽しそうですね、龍二お兄様」

「……悠陽か……フ、フフッ……この無様な姿を見ても、それを言うか……？」

悠陽が宴会場へと足を運んだ時、

既に彼等の目には闘志など存在すらしていなかったと言う。

篁

「はいはい、お疲れ様。取り敢えずは酒とおつまみ」

「はっはっは！母君ソックリだな、お前のその様な振る舞いは！」

「俺が母さんから教わった事は酒の飲み方と、この悪い言葉遣い程度ですからね」と

爆笑する紅蓮中将を軽やかにスルーすると、龍二さんは膝の上にてニコニコと笑っているシエスチナ少尉に小皿に盛った料理を手渡していた。

色鮮やかに盛り付けられたそれは、最早簡易的な芸術と言っても差し支え無いレベルで纏められていたのだが

「龍二お兄様、私にも是非」

「あたしもお願いしようかしらねえ」

「それじゃ〜僕も」

「……べ、別にお前によそって欲しい訳じゃ無いぞ！」

その様子を見ていた他の方々も揃って、龍二さんに盛り付けを頼もうとする。

それに対して若干引き気味になりながらも、彼は引き攣った笑顔で各自の小皿へと料理を盛り付けて行く。凄まじい根性だ。

「唯依、お前も何か食べるのか？」

「え！？あ、いえ、私は自分で……」

「今更、畏まる事も無いだろ？ほら、小皿」

「あうう……そ、それでは……お願いします……」

テキパキと皿へと料理を盛り付け、慣れた手付きで私の前へと皿を置くと当人も満足した様に着席する。

それを区切りとし、巖谷叔父様が打ち合わせた様に音頭を取る。

「まあ私が言うのも何ですが、こう言った物はスタートダッシュが重要でしてね。

ですから、えー……」

「巖谷さん、取り敢えず乾杯だけは終わらせましょうよ。周りからの視線が痛いです」

「あ、ああ悪いな。それじゃ 乾杯！！」

「……………乾杯！！」「……………」

話が長くなりそうになった叔父様の話の腰を折り、龍二さんは乾杯

の声と共にグラス一杯に注がれていたビールを一気に仰いだ。幸せそうな笑顔を浮かべ、膝の上にて料理を食べるシェスチナ少尉の頭を撫でている。

それを少しばかり離れた席にて、殿下が恨めしそうに眺めていた。

殿下だけでは無い。

エニツクス少尉も、ビャーチエノワ少尉ですらシェスチナ少尉の事を羨ましそうに眺めていた。あまりの眼光の鋭さに、この場が重くなるのを感じる。

「ところで、」

と、そこで啖呵を切ったのは事の発端とも言える龍二さんだった。何かを言いたいのはあるが、この場では言い辛い内容なのだろうか？

暫くは考え込む様に首を捻っていたが、やがては決心した様に口を開いた。

「巖谷さん……俺の武御雷は」

「安心しろ。最善の状態で管理してある」

”武御雷”

その言葉、そして機体が指す意味。

つまりは彼が最も嫌う首輪を付けられ、飼い慣らされた狗への道。そんな物を背負う事となる機体に、今の彼は何の用があるのだろうか？

本人が最も忌み嫌う物の筈だろうに、何故それを必要とするのか。

その時の私には……いや、私達には全く分からなかった。

「既に殿下からもお前が使用する許可は降りている。

……と言つか、武御雷の技量を100%引き出せている衛士は今の帝国には居ないだろう。

そう言う意味では、良いデータが取れるから俺としても大助かりだ」

如何やら、武御雷のデータを送ると言う条件付きで龍二さんの武御雷使用は許可されているらしい。彼の嫌いな束縛の筈なのに、今の彼はそれを甘んじて受け入れている。

それに、何かしらの違和感を覚えてしまう。

「龍二よ。貴様は殿下の恩人でもあり、儂の大事な部下の1人だ。

だがな、その身体は1つだ。貴様も所詮は個なのだ。如何か、無理だけはするなよ」

「……無理はしませんよ」

強い視線が龍二さんを射抜き、それを彼自身も真つ向から受け止める。

ただ　　今までの様に見返す様な力強さは無く、紅蓮中将の力強い視線に耐えている様な節さえ感じられてしまう。

「ですがね、紅蓮さん。

無理せん訳にはいかんでしょう？護ってやりたい奴等が多すぎますから、俺には」

「……ク、ククッ……」

「ははっ」

いつもならば、軽口を叩き合う昔からの仲間も居ただろうに。此度はその仲間すら疲れ果て、眠ってしまっている。

まあそうだったとしても、彼は変わる事無く煙草へと手を伸ばすのだが。

「眠れないのですか？」

「……いや。瞼さえ閉じちまえば一瞬で昇天出来る自信はある」

同じく月明かりに照らされる1人の少女。

この国を支え、導き、そしてあらゆる障害に立ち向かう事を義務付けられた者。

「昔から、龍二お兄様は夜になると誰か別の人になって居る様に感じます」

「気のせいだ」

「そうでしょうか？」

「……そうですね」

私を納得させる様に、お兄様は笑う。

その笑顔に嘘偽りは含まれて居ない筈なのに、何故か私にはその笑顔ですら嘘偽りに塗り固められた物に感じてしまった。

笑顔。

昔から、変わる事すら無かった無邪気で、子供の様な人懐っこい笑顔。

それが剣崎龍二の代名詞。

「近頃は目立つたBETAの動きも無い。コレが敵の消耗を表しているのか、それとも病魔と同じ様にただ潜伏しているだけなのか…
…どちらにせよ、未来は変わらん」

「未来」……」

まだ少女と言える年齢である悠陽にとっては、重い言葉であろう。

国を背負い、民を背負い、信頼を背負った拳句に未来の事まで考えなければならぬとなれば彼女の身体一つで足りる筈も無い。

「ああ、いや、すまん。別に悠陽を不安がらせようと思った訳じゃ無い……ごめんな」

「いえ……全ては私の未熟さ故に」

それだけ言葉を紡ぐと、2人の間には長い沈黙が下りる。
どちらから言葉を紡ぐ事もせず、ただ真つ直ぐに窓の外に悠然と佇む月へと視線を投げ掛けていた。

「綺麗ですね」

「……悠陽の前じゃ、あの月でも霞むさ」

「お上手ですこと」

「世辞は下手な部類だぜ？俺は」

どちらからでも無く笑いを漏らし、また静かに月を眺める。

結局、何の話も出る事無く幕を閉じてしまった会食ではあったが少女にとっては有意義な物であったと言って差し支えは無いだろう。

「さて、もう寝ろ。夜更かしは美容の天敵だろう?」

「折角ですから、もっとお話をしませんか? 龍一お兄様のお話を聞きたいです」

「そう急ぐなよ、悠陽。別にいつでも会えるだろう?」

「ですが……」

「何なら、僣んで来ようか? 昔みたいにお互い、コソコソ隠れながら」

「……ふふっ」

「笑う事は無いだろ? 真剣だぞ、俺は」

髪をクシャクシャと乱暴に撫で、お兄様が無邪気に笑う。

それに私も釣られ、思わず笑ってしまった。

その様子に気を良くしたのか、お兄様が更にクシャクシャと頭を撫で続ける。

「んじゃ、次の機会に保留だな」

「はい。お待ちしております」

月夜の下にて、邪気無き笑顔を浮かべる2人の約束。それは一生切れる事無い硬き絆と、契りの導。

「りゅっじー!!」

「イ、イーニア!? 起きちゃった……?」

「だめ! ねるの!」

「え? あ、いや、でも、だって……」

「だめ!」

「ラ、ラジャー」

とは言え、彼にも大切な家族が居るのだ。

家族達も彼を心から愛し、決して手放そうとはしないだろう。これはまた 別の長く険しい戦いが始まりそうである。

61 9月13日(3) 絆の鎖(後書き)

次回は……少しばかり時間を飛ばそうかと思っている次第です

具体的には10月20日前後程度まで

62 10月22日 終わりの始まり(前書き)

オルタ編突入と言う事で、短めに……
と言うか、凄まじく短いですが……

前回の話からの空白の時間は、短編などで埋めて行きたいと思います

62 10月22日 終わりの始まり

剣崎

何かあったのか。
何かあるのか。

どちらにせよ、今日 10月22日 は俺にとっては何か大切な事が起きる気がする。
いや、俺だけじゃ無い。
この日本、この世界、この星に関わる大きな”何か”。
それが俺達の直ぐ近くで今まさに起きようとしている様な、気がするのだ。

「……なあ、千枝」

「はい？」

「今日、何かあったか？」

「いえ。いつも通り涼宮少尉達と訓練を行うだけです」

「……そうだよなあ」

「??？」

かと言って、それが何なのか”覚えて”居ない。
今日起きる事がどんな事なのか、今日起きる事がどんな結果を運んでくるのか。

俺には全く想像出来ない。

ワクワクするかと聞かれれば、全くしない。

ドキドキするかと聞かれれば、繰り返し事になるが、全くしない。

ただボンヤリと突き刺さる針の様な、チクリとする痛み。

それが非常に不愉快である。

刺さるなら深く鋭く突き刺さり、出るならドバドバと血を流せ。

ハッキリとしろ、胸糞悪い。

此方も暇人じゃ無いと言うのに ツ！

「ああ……クソツ」

あまりの不快感に髪を乱暴に掻き毟り、煙草を銜えてサツサと火を着ける。

本当に、久しぶりに此処まで苛々させて貰って居るのだ。

胸糞悪いったらありやしない。

煙草でも吸っていなきゃ、ヤル気すら起きやしないのだから仕方が無いだろう。

「だあ〜ツ！苛々する、凄く苛々する!!」

モヤモヤとした感覚を取り払おうにも、その原因となる物は起きるまでは誰にも分からない。そしてそれが起きるまでは胸の内に広がり渡った俺のモヤは消えないと言うのなら ああ、何て胸糞悪い出来事なのだろうか。

「少佐、何処か悪いのでしたら医務室で休まれた方が……」

「ああ？いや、別にそう言う訳じゃねえが……」

「無理をなさつては後々にも響きます。涼宮少尉達には私から伝えておきますから、此処は大人しく休まれては如何でしょう？」

「……そうだな。悪い、茜達に謝っておいてくれ」

隣に並んでいた千枝に軽く手を振り、俺は医務室　とは反対の方
向へと歩き出す。

目指す場所は横浜基地の出口である。

何せ、基地内では基本的には禁煙だ。

落ち着いて煙草を吹かしながら、このモヤモヤを解消するには外に
出て、門番達と軽やかな世間話でもしながら思い出すのを待つに限
るだろう。

そう言う訳で、足取り軽やかに俺は出口へと向かっていた。

10月22日。

この日が、俺にとって忘れられない一日となる事すら知らずに。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

「おう、元気かね。伍長、s」

「おはようございます、少佐。また休憩ですか」

「ははっ。あの帝国のお嬢ちゃんに怒られますよ？」

「煙草の1本くらいゆっくり吸わせる」

ゲート前に待機する伍長達に軽く挨拶を交わし、ゲートに背を預けて煙草を吸う。

流石にタイミング良く唯依は来ないとは思うが……やっぱり怖いねえ。

見付かれば何を言われるか、考えるだけでも恐ろしい。

まあだからと言って吸う事を止めるなんて事は無いがね、堂々と吸わせて貰う。

「……しかし、俺も此処に来てから1月かあ」

「もう此処の生活には慣れましたか？」

「それなりに、かな」

煙が空へと昇り、それを呆然と眺めながら時が過ぎる事を待つ。

……いや、本当に待って居るのは時か？

それとも、別の何かだったのだろうか？

思い出せない。

？

どうして、思い出そうとしているのだろう。
何も知らない筈だろう。何も分からない筈だろう。
なのに、俺は、今から起きるのかも知れない何かを知っているのだ
ろうか。

「……………ん？」

桜咲き誇る坂から、誰かが此方へと上って来る。

堂々と坂道を上る姿を見やり、その姿に何故か、親愛すら抱いてしま
うのは何故だ。

断じて、俺は”ソツチ”じゃない。

筈なのに、何故か初めて出会う筈の少年に親愛を感じてしまった。

「誰だ、アイツ」

「さあ？こんな何も無い場所で散歩なんて、変わり者って事だろ」

変わり者？

ああ、度が過ぎた変わり者だろうさ。

何せ此方への歩みが完全に敵に対するソレだ。

あの野郎は、俺達を自分の道を阻む敵として認識して居やがる。

銃を持った男3人を相手に、丸腰の小僧が勇猛果敢に挑むと言う訳
か？

蛮勇だ。

ただの、下らない、アホらしい、馬鹿なクソガキの浅知恵だ。

「止まれ」

「……………貴方は……………？」

「俺が何者とか、俺がどんな存在だとか、そんな意味の無い問答は如何でも良い。俺はお前に興味がある。今重要な事はそれだけだと思うが？」

俺の言葉に警戒を強めたガキを気にも留めず、先程までは確りと閉まっていたゲートのロックを解除する。流石にそれには伍長達も焦っていたがそんな事は知った事では無い。

今の俺にとっての重要事項は、コイツを知る事だ。だが、言い分は分かる。

仕方が無い……警備兵にでも連行させるとするか。

「おい」

ロックが解除されたゲートから、中へと歩を進めようとしていたガキに声を掛ける。

向こうはさして驚きもせず、此方へと振り返った。

「はい」

「お前、名前は？」

暫しの間を置き、ガキは堂々と俺にその名を告げた。

物語の始まりとなる 全ての鍵となる存在の名。

「 白銀武です」

「 良い名前だ」

堂々としたガキの顔に笑みを浮かべ、小さくなって行く背中を俺はただ見送る。

これから何かが起こる事は明白だ。

それは確定している事実。

ならば、何が起ころうとしているのか。

一体、アイツは何者なのか。

さて……… 退屈せずに済みそうだな。

62 10月22日 終わりの始まり（後書き）

更新の速度が安定しませんね。

最初の頃に比べると、次話を上げるのにも感覚が開く様になってしまいました。

嗚呼、昔の私よ。

君はどうして、そんなに早く文章を書けたんだい？

63 10月22日(2) 予兆(前書き)

そう言えば……オルタってどんな感じだったかな？

そんな事を思い、休日をマブラヴに費やした結果がコレだよ！

フフツ……良い休日でした

白銀

ゲートの前で、オレをアツサリと通した白髪の男。
胸に輝くワッペンには 少佐の証がその人の気迫と共に光っていた。

門番の2人とは、別格の存在感。
隙なんて有りはしない。

例え、此方が銃器の類を所持してしようとあの人には何の意味も成さないだろう。

あの人は気付いていた。
オレが通行証を持っていない事も、無理矢理にでもあの場を通ろうとしていた事も。

多分だけど 全て見透かされていた気がした。

「此方からエレベーターで下へ降りますと、香月副司令の執務室となります」

オレの隣にて、此処までの道中を案内してくれた1人の女性中尉。

体格だけを見れば、筋力は男には到底及ばないだろう。

“力” という観点だけで見れば、オレが勝っていると断言出来る。

だが、彼女も先ほどの少佐と同じだ。

全くと言って良い程に、隙が無い。

此方に敵対する素振りも、警戒心も、ましてや オレに向ける感情が、無い。

まるで道端に転がる石として見られている様な、そんな感覚。

これが、一流の軍人なのだろうか……？

「粗相の無い対応を希望します。私達もその方が 後始末が無くて済みますから」

「ッ！！」

初めて向けられた感情の一端。

それは敵意なんて生温い物でも無く、憎悪などでは到底及ばない。純粋で、それで居て何処までも鋭く光り輝く一振りの殺意。

“余計な事をすれば殺す”

携える笑顔の裏に潜む声に、オレは息を呑む。

エレベーターが上って来るまでの僅かな時間が、とても重く長く感じられてしまう。

目を逸らせば、一瞬で全てが終わってしまう様な そんな、恐怖。

「千枝」

その殺意が蔓延る空間に、良く澄んだ声が響き渡る。

“千枝”、と呼ばれた中尉の後ろからコツコツと軍靴の音が此方へと近付いて来る。

それも1つでは無い。

2つ……いや、3つだろうか？

「よつつ、少年」

此方へと近付いて来た音の正体は、白髪 of 少佐。

人懐っこい笑みを浮かべ、オレへと軽やかに手を振っていた。

「……早いご到着ですね」

「まあな。サツサと用事を終わらせたいだけだ」

瞬間的に中尉からの殺意が薄らぐ。

上官の前、と言う事で自重したのだろうか？

それとも 彼が来たのならば、もう必要ないと言う事なのだろうか。

「此処からの案内役は俺達の仕事だ。誰にも手は出させないし、緊張する事も無いぜ」

そんなオレの考えなど御構い無し、とばかりに到着したエレベーターに乗り込む少佐。

その後、2人の少女がそれぞれ同じくエレベーターへと乗り込んで行く。

銀色の髪をした、不思議な2人の少女。

その子達は ああ、何故だろうか。オレに霞を思い出させる。

「下に参りますよ」と

緊迫した場を解すかの様に、気の抜ける様な声音で少佐がエレベーターの扉を閉める。

扉とその向かい側。

閉じようとする扉の隙間からも、中尉は　オレを静かに見詰めていた。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

香月

不審者　として連れて来られたガキは、あたしを見て何かを言い出そうとするが、龍二やその隣にて待機する紅の姉妹の存在を気にしてか言葉を発そうとはしない。

あくまで1対1を望む、と言う事か。

ガキのクセに生意気なヤツ。

「コイツ等は全員、あたしの関係者よ。それに　アンタみたいな素性の知れないヤツとあたしが1人でノコノコと対話すると思う?」

「いえ……でも、やっぱり……」

「何を恐れているのかは知らんが、少なくとも俺は”第五計画”を認めては居ない」

中々踏み切る事の出来ないガキの後押しをする様に、龍二が呟く。案外と人の心を心得ているヤツだ。

このタイミングで、キチンと相手が何故愚図るのか理解しているからこそ　それを的確に崩す絶好の言葉を持って来る。

「……」

「信じられないか？それとも、信じられない確たる証拠があるのか？」

不思議そうに呟く龍二だったが、先程と比べると不機嫌そうではある。

まあコイツの場合は自身が第五計画に携わっているのではと思われた事よりも、何も知らないヤツが自分の部下を怪しむと言う事が気に入らなかつたのかも知れない。

「……分かりました。話します、俺のこと」

「Good」

ガキの答えに満足したのか、龍二は笑顔を浮かべて執務室の奥にある簡易キッチンへ向う。話を弾ませる為に、ツマミでも作るつもりなのだろう。

何ともお人好しが過ぎる。

侵入者、と言う可能性が棄て切れないこのタイミングで相手を思いやるとは……

ああハイハイ。あたしは持ち得ない器の大きさよね、まったく。

「オレの名前は白銀武です。その……オレはこの世界の人間じゃありません」

「……続けなさい」

行き成りの、ぶっ飛んだ内容。

本来ならこの時点で龍二に処理を命じる所だったのだが、コイツが少なくとも何かの情報を握っている可能性は棄て切れない。それを聞き出してから処理をしても、何の問題も無い筈だ。

「オレは元々、BETAが居ない世界で学生として過ごしていました」

「……」

「でも10月22日。”こちらの世界”でオレは目が醒めました。訳も分からず、何も知らず、回りに居る元の世界の友達とか、知り合いとか……皆と必死に生き抜こうって頑張って、頑張って……でも……っ!」

「発令されたのか、オルタネイティブ?が」

龍二は静かに呟き、悔しさに唇を噛み締める白銀、あたしと紅の姉妹達にもコーヒーを配り、自身も白銀の隣に腰を降ろす。

「……はい」

「だそうだぞ、夕呼。そっちの世界のお前は腑抜けだな」

「っさいわねえっ!!……それで?」

チヤチを入れる龍二を一喝し、取り敢えず黙らせる。

おお怖い、などとボヤキながらコーヒーを啜る姿からは全く反省の色が見えない。

のだが、まあ……コイツはこう言うヤツだ。

今更何を言っても無駄だろう。

「オレの持っている情報は夕呼先生が居なければ意味はありません。だから」

「だからこの基地に置け、って事でしょう?」

「はい」

死の体験をし、またもや元居た場所へ戻って来た。

世界間すら移動し、時間すら遡り、そしてコイツは此処に居る。掻い摘んで説明してしまえばそう言う事になる。

そして、

「イーニア、どうだ」

「……へいき」

「そっか」

そして、嘘発見器はコイツの嘘を見つけなかった。
成る程。まさに神が齎した一筋の光って事になるのかしらね。

「……アンタの207訓練部隊への編入にセキュリティパス発行。
直ぐにやってあげる」

「本当ですか!？」

「ただし、あたしは完全にアンタを信用した訳じゃ無い。良いわね
?」

「は、はいっ!だったら、信用される様に頑張るだけですから!」

「そつ。だったら頑張りなさい」

「なら、俺も自己紹介をして置く事にするかな? 剣崎龍二だ。宜し
く頼む、少年」

「は、はいっ!」

何度も頭を下げ、嬉しそうに笑いながら白銀は執務室を後にする。
さて。

問題は此処からだ。

国連のデータベースを改竄して、アイツの籍を作ってやらねばなら
ない。

それに

「アンタにも任務が回って来るわよ。事情を知ったからには、死ぬ
気で働きなさい」

「言われるまでもねえ」

上着を肩に掛け、龍二は部屋を後にする。

その表情はこれから巻き起こるのであろう戦いの連鎖に期待し、胸躍ると言わんばかりに輝いていた。

「まるで子供ね」

龍二の後に続き、此方へと敬礼をして部屋を出る紅の姉妹。

全員を見送った後、先程の龍二の顔を思い起こし 率直な感想を口にした。

剣崎

「何をあの男に期待している？」

珍しく、クリスカが非常に不機嫌そうに声を掛けて来る。

あの男 白銀武の事だろう。確かに、先程の執務室でも彼女は少年に対しては厳しい視線を向けていた。信用出来ない、そう言う事だろうな。

まあご尤もな意見だ。

行き成り、別の世界から来たなどと言う戯言を信頼出来る程の関係を築いては居ない。

だと言うのに、俺や夕呼はアツサリと彼を信用してしまった。

「嫉妬か？」

「ッ！馬鹿を言うな！！」

俺の軽口に声を荒げて反論し、不愉快ですと言わんばかりに顔を背けてしまう。

流石に弄り過ぎたか。

別に、怒らせたかった訳じゃ無かったが……仕方が無いか。

今回は出来事が出来事だ。

彼女も混乱しているのかも知れない。

「これからは忙しくなる。期待するぞ、クリスカ」

「……やるべき事はやる」

「イーニア、クリスカのサポートを頼む。これから先は俺も余裕が無くなるかも知れん」

「うん、わかった」

いやはや、とは言え俺自身だつて結構大混乱なのにねえ。

勝手に盛り込まれた様な記憶に、少年の登場。

モヤモヤは少しばかり晴れたが、まだ何かが分かったと言う訳でも無い。

”俺”に何かが起こっている。

自分の身体の事なのに、まるで何も分からないと言うのはこつも歯痒い物なのか。

……しかし、案外と俺も今回ばかりは危ういか。
そろそろ、俺の役割の終わりも近いのかも知れないな。

「白銀武、か……」

先ほどの少年。

嘘は吐いていなかった。

まだ全てを話し切っては居ないのだろうが、重要な情報も握っているだろう。

夕呼に絞り尽くされない様に、少しは頭を使ってくれろと此方も楽で良いのだが……
どうなるのか。

「まあ考えても仕方がねえ。取り敢えず、飯にするか」

「……そうだな」

「うん！」

無駄に策略を張り巡らせる事は、俺の本来の戦い方じゃないか。

此処は待ちの姿勢でドッシリと構えて、いざ何かが起きた時に迅速に対処するしか無いだろう。これから先に起こる出来事には全て、細心の注意を払うべきだな……

つたく。

心労だけが溜まりやがる。

世界から選ばれし英雄

未だ世界の真理を知らず、未だ世界の絶望を知らぬ
地獄から這い上がった悪鬼

その身に宿すは『無』のみ、何も無いからこそ何かを求める

英雄は吼える

悪鬼は嗟う

英雄は立ち向かう

悪鬼は打ち砕く

互いに、救いたい者達が居る

互いに、護りたい物がある

故に戦い、傷付き、恐れ、そして……強く、大きく育つ

世界よ

世界

今に見ているが良い

この絶望に飲まれた星の息吹、見事七色に輝かせてやろう

63 10月22日(2) 予兆(後書き)

手が疲れたな……

そう思い、久方ぶりに私はそれに手を伸ばしました

ヤツの名は おっぱいマウスパッド

……いやいや、クリスカの谷間に手を置けっ
て？
出来るかアツ！……！！

私にもねえっ、羞恥心があるんですよ！
恥かしいでしょ、流石に！！

……っ、柔らかい

64 10月23日 伝説の『アレ』(前書き)

うおっ!!!!

終わらせる、終わらせてやるぜ!!!!

神宮寺

朝。

人が込み合う前に食事を済ませようとPXに向う途中の通路、後ろから肩を叩かれる。

何事かと思い後ろを振り返れば、そこには懐かしい顔があった。

「よう」

「りゅ……ッ、おはようございます、少佐!!」

喉元まで出掛かった”龍二くん”と言う呼び方を押し返し、上官と部下の関係として形式的な敬礼を返す。彼は副司令と同じく、こう言う物は好かないと知っている。

知っては居るが、訓練兵に物を教える教官として規律を乱す訳にはいかないのだ。

「……まあ教官として規律は乱せねえか」

それを理解してくれているからこそ、表には出さずに向こうも思いを噛み砕く。

朝から元気だな、と微笑みながら私と歩幅を合わせる。

如何やら、少佐もPXに行くらしい。

「お前は朝が早いなあ。訓練兵時代から真面目だったが、それは今も健在だな」

「訓練兵に物を教える立場としては、当然の事です」

「良い心構えだ。っと、そうだった。訓練兵で思い出した訳だが」

そこで取り出すのは1枚の書類。

何故？

そう思う間も無く、少佐は書類を取り出して1人の少年の名を口に出した。

“白銀 武”。

何でも、夕呼と少佐が無理矢理にでも207分隊にブチ込むつもりらしい。

その為、彼が入隊した暁には是非とも手厚く歓迎して欲しいとの事だった。

「多少荒々しくても構わないぜ？」狂犬”さん」

「なっ！あ、あれは、と言うか、わ、私は別に　ッ！！」

「顔が真っ赤だぜ？相変わらず可愛いヤツだな」

少佐が私の顎を持ち、唇が触れてしまいそうな距離まで顔が近付く。ただでさえ此方は羞恥で心臓が破裂しそうだと言うのに、”龍二くん”はいつも通りで

「よっ」と

「あだっ!?!」

突如としてパチンツ!と言う軽快な音と共に、私のおでこに痛みが走った。

その痛みに思わずおでこを押さえ、その原因を作ったのであるう犯人 龍二くん抗議の視線を送る。

「い、痛いってば!昔から龍二くんのデコピンは痛いから止めてって……ッ!」

「規律、忘れちゃダメだろ?」

「……あ」

悪戯が成功した事を喜ぶ様に、龍二くんはケラケラと笑っていた。

ああ、でも本当に懐かしい。じゃれ合っていたあの頃。

「ゴ、ゴホンツ!……悪ふざけも程々にして下さい、少佐」

「ん?軍曹が可愛いのが悪い」

「しよ、少佐!?!」

「冗談だよ。じよ・う・だ・ん」

少佐は、お腹を抱えて大笑いしながらもサツサと進んでしまう。

その後姿を見て、「いつか絶対に一矢報いる」と心に誓ったのは

「ほらっ、サツサと朝飯食おうぜ?まりも」

「分かっています!」

私だけの、秘密だ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

篋

「近頃は手合わせもしていなかったし……いっちょ、今日は丸々1日使うか?」

悪戯っぽく笑い、少佐と共に向ったシミュレータールーム。
元々は私達とは別に訓練があつたのであろう、涼宮少尉達が強化装備にて待機して居た。

「おはようございます、少佐!」

「「「「おはようございます!」」」」

「おう、苦しゅうない。お前等も訓練か？」

「はい！今日は伊隅大尉達との共同訓練です！」

「そつか。だったら、アイツ等に泡吹かせる良い機会だな。頑張れよ？」

第三者の視線から見て、彼は非常に広い交友関係を持つ。

横浜基地の副司令だけで無く、訓練兵から帝国軍の将官クラスまで本当に沢山の人と知り合い、共に戦い、そして別れて行ったのだろう。

「頑張れよ！」

「少佐と中尉も頑張ってください！」

少尉達とは別の筐体に乗り込もうとする少佐は、突如としてその動きを止めて此方へと身を一步乗り出した。何かを不思議がる様に、ズイツと顔を近付ける。

「あ、あの……何か……？」

「ん？何だ、唯依。何か随分と余所余所しくないか？」

「え？そ、そんな事は無いと」

「嘘だ」

一瞬だが狼狽した此方の意志をバツサリと切り捨て、少佐は真摯な目で私の瞳を覗き込む。ほんの些細な虚言すら見逃すつもりは無い、

そう言い放つ様に。

いつもは飄々として、掴み所すら無い筈の彼が

「答えるよ、唯依」

真剣な表情で、静かに、私だけを見詰めている。

「答えられない訳じゃ無いだろ？」

ああ、それとも……まさかそれは上官からの命令じゃなきゃ答えられない内容か？」

長身の少佐が、私を逃がすまいとして覆い被さる。

壁を背にした私には最早逃げ道すら無く、ただ此方を見つめ続ける少佐に成されるがままとなっていた。

「……わ、私は……」

「聞こえ無い」

「私は、ただ……ッ！」

喉まで声が出掛かり、そこで言葉に詰まってしまふ。

私はただ……ただ、少佐と一緒に居たいだけ。

最近は何多に訓練も行つ事が無く、貴方を傍に感じていなかったから。

だから 寂しかった。

そんな事は口が裂けても言えない。

言える筈が無い。

今の私に、それを口にして良い資格などありはしないのだから。

剣崎

ピーガガッ。

CQ、CQ。スキンシップを取ろうとして決行した「おでこにチュッ」作戦は失敗。

現在は精神的なダメージと肉体的なダメージで立つ事が困難。繰り返す、立つ事が困難。至急応援を頼む。

「……俺が何をした」

血涙を流しながら、大の男が床で泣いている様を想像したまえ。如何だ、不気味だろう？

「あゝ、少佐？」

「ん？遙か……見ての通り、今の俺はもう色々ダメな人だ。今更俺に何の用だ」

「い、いえ……篁中尉が走り去って行ったので……」

「……そっか」

「追わなくても？」

「いや、追いたいののは山々だが立てない」

「え？」

「良いラリアットだった。それだけは言っておこう」

先ほどから、結構真面目に腕に力を入れようとしているのだが力が入らない。

素晴らしい程に、今の俺は何の役にも立たないダメ人間である。うんしょ、うんしょ、と可愛らしく俺を引っ張ろうとする遙に「すまん」とか「申し訳ない」とか何だか老人の様な台詞を吐きながら何とか立ち上がる。

「ふう……ヒドイ目にあった。だが、同時に良い体験も出来た」

「は、はあ」

「恥かしがり屋さんにはあまり踏み込むべきでは無いな、ハッハッハ」

困った様に、乾いた笑みを漏らす遙を他所に俺は笑い声を上げる事しか出来なかった。

結構、海外だと普通なのに……キスって。

(……少佐って、天然なのかな?)

遙よ、それは君が言って良い台詞なのかね？

白銀

「ケージの装備を担いで10キロ行軍！モタモタするな、急げ！！」
「まりもちゃんの号令に、先程までランニングしていた207分隊の
皆は息も絶え絶えになりながらも必死にケージの荷物を背負って行
く。」

「こうやって訓練する事も、何だか懐かしく思える。
そんなに年は取っていない筈だけどもなあ……」

「ん……完全装備じゃないのか……」

やはり、オレが居るから遠慮でもしたのだろうか。
ケージ内に置かれていた装備は完全装備では無かった。
やっぱり何処に行こうがまりもちゃんだ。案外と優しいところある
な……

「白銀」

「はい？」

「それだけでは不服な様だな。そうか、貴様は徴兵免除を受けてい
たと聞いている……」
「ふむ、ではこうしよう。その貴様の有り余った体力を有効的に活用

する為に、完全装備で行軍10キロ！ついでに分隊支援火器のダミ
ーも担いで行け！！」

「げっ！？」

「む？何だ、これだけではまだ不満が」

「りよ、了解しましたあっ！！」

鬼軍曹から逃げる様に　　と言うか、実際は逃げていたが　立ち
去り、オレよりも先にグラウンドを走っていた委員長を一気に追い
抜かず。

「お先」

「うそ……私達よりも重装備なのに……っ？」

やっぱりそうだ。

完全装備で走ろうが、今のオレなら何の問題も無い。

昔に比べて身体能力が格段に上がっている。1回目の体験の時より
も確実に、今のオレなら207分隊に迷惑を掛けずにやっていける
……ッ！

（よっしゃあっ……これなら総戦技演習も……いけるっ！！）

「……白銀えっ！！」

「は、はいっ！？」

「やはり元気が有り余っているようだな！貴様は特別に追加5キロ

だ！！」

「げえええっ！！！！！！！」

これなら多少の余裕を持って、総戦技演習までに隊を徹底的に叩き上げられる。

今はオレに出来る事を1つでも多くやって、最高の形で総戦技演習に望みたい。

「白銀武、か。龍二くんの気に掛ける理由……何と無く、分かるかも」

剣崎

「うおい！唯依は何処だ！？」

続きましては、先ほどまでの雰囲気をつち壊す情けない男の登場です。

身体中に走る激痛に何とか耐え抜き、今漸く此処 PX まで辿り着いたのですが、そこに唯依の姿はありませんでした、チャンチャン。

「終われるかぁッー！！！」

などと大声で叫び声を上げ、俺は早足（今の最大速度）でPXを後にする。

「何だい、龍二ちゃん！？どうかしたのかい？」

「俺の部下は何処だ！何処ですか、京塚さん！！」

「こ、コッチには来てないけど……部下って言うと、どの子だい？」

「唯依！篁唯依！」

「ああ、あの帝国の……分かったよ。見かけたら直ぐに知らせるか
らね」

「ありがとう、おばちゃん！」

取り敢えず、PXには居ないと言う事が分かった。

私室か、と一瞬考えたがそれは最後に回しても構いやしない。
だったら次は何処だ？

更衣室？……アホか、俺は。

トイレ？……二度も言わせるなよ。

風呂場？……呆れて物が言えん。

落ち着け、落ち着け、落ち着け、冷静になれ。冷静に物事を考える。
主観では無く客観的に。

自分がこの場に居るのでは無く、あくまで観客の1人としてこの映
像を見る様に……

「……あ？」

そう考えてみると、足は自然とある場所へと向う。

何故かは知らない。

別に、その場所に思い入れがあると言う訳でも無いだろう。

別に、その場所で俺は唯依と何かしたと言う訳でも無いだろう。
だのに

「結局、来ちまったか」

俺は戦術機の格納庫へと足を伸ばしていた。

此処に転属してからは、あまり世話になっていない実機達の羽を休める場所。

一体全体、こんなむさ苦しい場所の何処にあの子が居るのだろうか？
普通ならば有り得ない、と一蹴するだけなのだが……探して見る価値はあるだろう。

何だ、良く分からんが此処に居そうな気がしたのだ。

何と無くだけでも。

さて、と。

この巨大な格納庫にて、久しぶりにかくれんぼでもやるとしますか。

64 10月23日 伝説の『アレ』(後書き)

スーキスキスー
バチコーンツ

土日はどっぶりマブラヴ漬け
楽しいですなーw

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第一話（前書き）

ヨシヒロ氏との合同作品です

私の心境やら、このお話の細かい設定は後書きにてお話致します

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第一話

身体が鈍る。

実戦にも出ず、シミュレーターもやらず、ただ遠目から頑張れ〜と言いつける虚しい生活。流石の俺も、それには些かの危機感を覚えた。

(コレって、NEETってヤツじゃねえのか?)

本来ならば指揮を執る様な立場になるのである。佐官である自分だが、指揮には自信が無いので前線で戦う事を主としている。だが、アラスカで怪我をしてからは前線に出る機会がめっきり減ってしまった。

まああまりにも部下が優秀過ぎるので彼女達が出撃してしまうと、敵をアツサリと一掃してしまうと言つのが大部分を占めてしまう原因なのだが。

此処に来て、優秀過ぎると言つ事が仇になるとは思いもしなかった。だからこそ俺は珍しく夕呼に頼んだのだ。シミュレーターの質を上げて欲しい、と。それがまさか

「何、この魔改造物体」

こんなTHE・暗黒になるとは思いもしなかった。

巨大、と言つか……醜悪、と言つか……

俺なりに要約すると、この世全ての負の感情を全て結集させた感じ？

まあ兎に角とてもしゃないが使うつもりになれない。

「G元素盛り沢山の高級回路付きシミュレーターよ。良い感じですよ？」

「眼科行け」

何だろう、コレに乗ってしまえばあらゆる物を失う気がする。別に俺じゃなくても良い気がして来たぞ。

そうだ、白銀が居るじゃないか。アイツにでも乗らせれば良い、その後安全を確認してから俺が乗れば万事解決じゃないか。なら白銀を探そう、ああ白銀何処に

「何処行くのよ」

「現実を逃避しに」

「こつち見なさい。ハイ、現実」

「デスヨネー」

非情だ。

何もかもが、俺に対して非情だ。

いや、無情なのかも知れない。

まあ何にせよ、この世界は俺の様なNEET候補には大変宜しく無い世界であってあの世ヨロシクみたいな感じで俺に地獄体験をしろと物語っているのでしょうか。

素晴らしい。

素晴らしい程にクソツタレな世界だ。

「登録してあるのはF型だけよ。今の愛機のF?型は解析すら済んで無いもの。」

ああそうそう、藤代に言っておいてくれる?アレのプロテクト、硬すぎ」

「無事に帰って来られたら、な」

「……サツサと逃げ」

蹴り飛ばされる様に、俺はシミュレーターの中に放り込まれた。

設定は夕呼がしてくれるのだろうか?

そりゃ都合が良い。

俺が死んだ時は直ぐにでもアイツを呪ってやる。呪ってやるぞ!

『場所は横浜ハイブ。良かったじゃない、アンタの因縁深い場所よ?』

《……嫌な女》

『勝手にどうぞ。それじゃ、始めるわよ』

僅かな怒りを心頭させる俺を前に、夕呼は用意が整った事を告げる。

それは俺に対するGOサイン。

攻撃、突撃、殲滅、抹殺、破壊。

因縁深い、本当に因縁深い、俺が味わった唯一の敗北。そして屈辱。痛感した力不足。

困惑した自分の技量。

そして、俺は上り詰めた。

強者として、強者なりに、強者らしく、今の俺は此処へ再び訪れた。

今までの屈辱、10倍にして返してやる。

ハイブ内。1機の不知火が、常識の範囲外の速度で駆け抜ける。時速は既に950km/時に達する寸前であり、その中で男は俺は、笑っていた。

風を感じない、こんな檻の中ですら楽しいのは

《 遅え 》

過去に感じたことの無い、確かな手応えを手に感じるからだろう。身体に馴染むと言うか、無駄に精巧と言うか、流石は夕呼の作だと納得出来た。

確かに、コイツは良い。

天井にへばり付く戦車級の落下よりも早く、肉の道を疾走する。発生する衝撃は、辺り一面を綺麗な赤で埋め尽くしていた。

眼下を埋め尽くすBETA、肉、敵、無視。

前方 要塞級、確認。スルー？

いや……叩いて、潰す。

要塞級の緩やかな動きが、先程までF型の居た空間に溶解液を掛ける。

敵が此方の動きに付いて来ていない、俺は昔よりも……速い！

しかしながら、敵も自分の大きさを理解しているようだ。点での攻撃では無く、面での攻撃にシフトして来た。避け辛い、流石は”要塞”だ。溶解液を回避する為の急な加速で生じる身体に掛かるGを無視しながら、俺は要塞級の背中へ回り込む。

《破壊力だけじゃ何にもならない。遅過ぎるぜ、お前》

そのまま、両腕にマウントされているガトリング砲とバルカン砲を全弾発射。回転する銃身と、直に衝撃の伝わるバルカン。心地良いまでのトリガーハッピーな気分を味わいながらも、敵の反撃を警戒する。

シュルルル、キンッ

しかしながら、敵の反撃よりも先に此方の弾切れが起きた。まあ反抗炉は目の前だ。このウスノ口を潰した後でも、十分に間に合うだろうさ。既に穴だらけの背中にナイフを突き刺し、ゆっくりと だがF型の持てる全ての力を動因して、強く、激しく、深く、抉る。何だ、意外とアッサリ落ちるな。

大きな音を立てながら、巨大な”物体”が下を這う虫へと吸い込まれていった。

それは 要塞級の巨大な首。数匹の仲間を潰した後、時が動き出すかの様に巨体が下へと落ちて行った。

《アディオス！》

最高の笑顔と共に、最愛の敵へ別れの言葉を口にする。

F型の速度で駆け抜ければ、反抗炉までは4秒も掛からないだろう。遂に 勝った。

ゆっくりと姿を現す反抗炉を眼中に、俺は静かな優越感に浸る。

このハイブ攻略……負け続けたが、遂に俺は此処まで来た。

漸く、胸糞悪い悪夢が終わる。

余裕を含む動作で、S 11をセットする作業へと移行する。

コレを起爆すれば、俺の完全なる勝利で幕を閉じることになるだろう。

夕呼も上機嫌、俺も借りを返せて最高にハッピーで大団円って訳だ。

《良い夢を ツー！！》

満面の笑顔と共に押されたスイッチ。

爆発と共に、俺の目の前には整備員の驚愕した顔が移り込み、それはやがて勝利を喜ぶ感動の笑顔へと形を変え ……アレ？

《ん？》

もう一度。

《お、おい！？》

もう一度。

《はあっ?!な、何で爆発が……!》

シューウウウウウツ

ジーザス！

どうやら、シミュレーターが停止したようだ。

高揚した気分冷や水を掛けられた様な気がして、俺のテンションは一気に冷める。

まさか、折角の大勝利を目前にしてシミュレーターの停止！？
勘弁してくれ……1度出来るのなら2度出来るなんて一体いつ、誰が決めた。

俺にはもう、今回しか無いのだ。

こんなに高揚して、

こんなに集中して、

それなのに、それなのに　　ッ！！

《嘘だろ！？》

あまりの悔しさに、思わず計器を引っ叩く。

いつもならば有り得ない事なのだが、何か八つ当たりでもしなければ正気を保てない。

唯依ちゃんに言ったら、信じてくれるだろうか？

あの子は優しいから、きつと「可哀想な人を見る目」で俺を見詰めるのだろうか……

そんな無様な真似、到底我慢出来ん。

ピピピピピ……ブンッ！

《さ、再起動?!》

嬉しさのあまり、涙目になりながらもモニターを見詰める。
しかし、そこは先ほどのハイブ内とは程遠い場所。

カラカラに乾き切り、

草木の一本すら生えておらず、

何処までも続いている様な 荒野。

そして

《……戦術機、か?》

1機の戦術機。

視認すると同時に、モニターに写り込む【Mission 敵ター
ゲットを撃破せよ】の文字。

……つまりは、何か?

夕呼の悪戯だと言う事か。

人の気分を最高潮まで上げて置きながら、生殺しのままコイツと戦
わせる、と。

何だ、今まで必死にやって来た事は全てが記録にも残らない無駄な
こと?

《……テメエ》

静かな独白。

ただ、分かる。

俺には分かる。

他ならぬ俺だから分かる。

俺は、今、非常に、怒っている。

《……何の為の悪戯か知らねえが》

弾数のチエック 全てフル。

機体の状況 全てオールグリーン。

俺の、精神状況 見敵必殺《サーチ&デストロイ》。

《死に足りねえなら、掛かって来やがれ!!!》

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第一話（後書き）

現在の私の心境ですが、

いえ何と言いますか……未熟な者が、このような事を考えても良かったのかな、と少しばかり悩んでいたりもします

ですが、ヨシヒロ氏との創作が非常に面白かったと言つのも事実です
他の方の内面を僅かばかりでも見ることが出来たのは正直、私にとつてはとても貴重で良い体験になったと思います

やって良かったと思える作品を作ったつもりです

続いて作品の設定ですが、

まあ何と言いますか……ifストーリーとして割り切って読んで頂けると幸いです

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第二話（前書き）

ヨシヒロ氏とのコラボ作品第2話

向こうの作品はガンダムクロスの作品でして……

グラムとかヤザ○とか○リス大尉大好きな私としては、ガンダム
クロスは大好物です

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第二話

此方の動きよりも早く、敵が動く。

反応を見ると言う意味で此方はワントempo遅く動き始めたが、その最初の行動に思わず驚嘆の声を上げてしまった。

「なっ………！」

頭部分からの弾幕。

威力は微々たる物だろうが、あの概念を俺は今までに知らない。

流星は香月夕呼と言う事が。

発想その物が侮れない。

肩部辺りの装甲に数発貫つたが、アレは”覚えた”。

「遅い、温い、弱い」

必死に弾幕を張るのは良いが、既にその手は有効では無い。

相手を一撃で葬れば良かった物の、此方とて修羅場は潜っている。

そう簡単にやられてやるほど甘くは無いのだ。

F?型なら、速攻で決められたかも知れない勝負。

だからこそ歯痒い。

良い物に乗ってしまった今だからこそ、ワンランク下がってしまったF型の機動性に思わず苛々が加速してしまう。

「面倒臭い野郎だな」

弾幕が止み、敵は長刀を手取る。
あのままバカの1つ覚えの様に弾幕を張り続ければ一瞬で終わらせ
てやった物を、わざわざ刀など持つ必要は無いだろう。
溜息混じりに、此方も長刀を引き抜く。
付き合ってやるか……
呆れ半分に、機体を捻らせる。

ただ、この時の俺は1つだけミスを犯していた。

相手は香月夕呼が設計したであろう機体なのだ。
とんでも無い発想があっても、何ら不思議では無い。
だと言うのに、俺は何の疑いも無く敵の”得意距離”での戦闘に付
き合った。

それが敗因。

「…………ツ!?!」

長刀が煌く。

此方の、では無い。

相手の長刀が文字通り光り輝いたのだ。

一般的な長刀でもかなりの強度を誇る筈のだが、その刃は容易く
長刀を押し折るとその勢いを殺さずに此方の右肩と頭を持って行く。
光り輝く刃……恐らく、光線級の光線と同じくレーザーやビームと
言った類の物だろう。

押し折れたと思っていた長刀も、どうやら熱で溶かされていたらし
い。

やれやれ、どうやら面倒なカードを引いてしまったらしい。

「な、めんな ツ!?!」

既にカメラ機能を失ってはいるが、敵の場所は記憶している。

ならば後は、叩き込んでやれば良い。

私たちの最後っ屁だ、この野郎。

敵機の此方へ向ける砲身に光が灯る。

アレも光学兵器だと言っのたろうか？ だったら、夕呼の科学力は一体人類の何世紀先へと

進んでいるのだろうか？

アイツに、後で問い質してやるとしよう。

だが今は

「プレゼントだ、坊や」

ナイフシークエンスから飛び出すナイフを手には持たず、腕ごと力の限り振り切る。

シークエンスから飛び出したナイフはクルクルと回転しながら俺の腕から離れていった。

直撃したのか、それとも外れたのか。

今の俺には分からない。

がしかし、どちらにせよ俺は勝負に負けたという事だけは明白だ。

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第三話（前書き）

ヨシヒロ氏とのコラボ小説第3話

しかし……これを投稿するまで、2人でメッセージボックスフル活用で打ち合わせなどをした訳ですが、この量の話を作る為にどれだけの日にちが……

恐ろしい っ！

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第三話

第2ラウンド、レディ

その言葉はつまり何だろうか？

俺に対する完全なリミッターブレイクを誘発させる魔法の言葉と受け取っても宜しいと。

ならばOK。

目の前に悠然と佇む出鱈目機体を細切れに刻めと言うのならは刻みましょう。

AIの心に”格の違い”を見せ付けると言うのならは見せ付けましょう。

一度見た、

一度感じた、

一度負けた、

ならば 二度目の敗走など俺には無い。

そこにあるのは確約された勝利。天に、神に、何よりも自身に約束された勝利。

掴み取ってやるうでは無いか。

圧倒的な力の違いを見せた上で、先程の敗北すら霞む勝利を見せ付けて。

“魅せる”戦いこそ、俺の本分だと忘れて貰っちゃ困る。

2ラウンド開始

敵の反応速度が、明らかに温い。
本当に相手はAIなのだろうか？

流石に第2ラウンドの想像はしていなかった俺自身も驚いては居たが、この程度の事で一々動揺している様じゃ戦場では生き残れはしない。

と言っか、そもそも相手はAIで機械の筈だ。

機械に動揺なんて生温い感情は無いと思うのだが……まあ良いか。

「 機体の性能に助けられてばかりじゃ、何れ機体がお前を殺すぞ。 ” 坊や ” 」

先程とは打って変わり、今度は此方側の徹底的な攻めの姿勢。

爆発する投擲武器が機体を掠めるも、その程度で捉えられる程の陳腐な機動を見せ付けては居ない。

夏に入る水風呂の様な刺激も無く、熱湯の様な滾りも無い。

ただボンヤリとした、どうしようも無い微温湯の様な反応は戦っている此方の闘争本能と言う物を削ぐには十分だった。

「 ……こんな物かよ 」

光学兵器も攻撃する際には此方に銃口を向けるしか無い。

ならば、最初から銃口の先になど立たなければ良いと尽く向けられるロックを振り切り、その度に敵の装甲の薄い間接部に刃を突き立てる。

一撃、また一撃。

反応速度が目に見えて温くなる敵機。

それでも油断や慢心を見せる事無く、丁寧であり確実な一撃を突き

つけて行く。

外見だけ頑丈で、中身はまだまだ未熟な”坊や”か。

何と無くだが、そんな事を思いながらも俺は短刀が敵の首元を抉る。不安定に支えられた首でありながらも、何とか此方に一矢報い様と銃口を向けているのだが、カメラが安定しないからなのか銃弾はあらぬ方向へと飛翔する。

やはり、AIでは無い。

コイツは、有人機動だ。

それも中身は未熟で、成熟途中の者だと勝手ではあるが予測する。ガチガチに固められた過去の概念を打ち崩すには、大人ではある筈が無い。

ならば、未だに概念すら確りと固定されていない子供を選び抜き、新たな概念を植え付けたのでは無いだろうか？

そう考えれば 納得出来ない事も無い。

「だったら”坊や”、教育だ」

盾から突如放たれた小型ミサイルを全て36?で叩き落し、小太刀による斬撃を全て、当然の様に長刀で弾き返してやる。怒りに身を任せた我武者羅な攻撃。

それではダメだ。

それでは、この身には永久に届きはしない。

その程度では 獅子を地に伏せようと考える事すら愚かである。

両腕に装備された小太刀を腕ごと吹き飛ばし、腹を蹴り込み転倒させる。

機体のリカバーまでに掛かる僅かな時間の間には、既に俺のF型は長刀を振り上げており、敵機はそれを呆然と見詰めていた。

成す術無し。

それは今の様な状況に使われる言葉だ。まさに、今の状況がそれを的確に表現している。見事な程に、無様だ。

「年長者は敬え、良いな？」

無慈悲な一撃。

振り下ろされた長刀は容赦など含んでいる筈も無く、頭部から敵機を両断していた。

第三ラウンド……………

ERROR! ERROR! ERROR! ERROR!

「……………もう何が来ようが驚かんぞ」

システムに重大な破損を確認。
対戦中止。

種目変更…合同ハイヴ攻略演習

「”合同”？」

ステージ変更…甲21号佐渡島ハイヴ

「……………あの坊やとの共同戦線か。先が思いやられるな」

S
t
a
r
t
!
!

R
e
a
d
y
?

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第四話（前書き）

ヨシヒロ氏との合同作品最終話

これが終われば、いつも通り本編を書き連ねる作業に戻ります

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第四話

広い空間。

此処が、主広間。

ただっ広い此処はつまり、反抗炉が設置されている俺達の目指した
ゴール地点。

後ろから来る坊やよりも一足先に、此方はサツサと反抗炉にS - 1
1をセツトする。

《……坊や、敵が来る》

《え？》

しかして 事は上手く運ばないと言う事か。

リーダー内で此方に接近する敵の反応。数こそ少なく、小型種や中
型種が主立っているが、この状況で奴等に掴まれると誤爆しかねな
い。

それだけは勘弁して欲しいのだ。

《此方は設置中。まだ動けん！お前が対処しろ、坊や！》

《ッ、了解！！》

壁をよじ登り、此方へと接近していた戦車級の一团に坊やの機体か
ら弾丸が放たれる。

実弾と光弾の入り混じったそれは、戦車級を軽々と薙ぎ払って行く。此処に来て 光学兵器と言う物の恐ろしさを肌身で感じてしまう。こんな物が、もしもオルタ？推進派にでも渡ってしまったら……この世界は確実に終わってしまうだろう。考えるまでも無く、世界は絶望の淵に立たされる事となる。

やはり、夕呼は護るべき対象だ。

彼女1人の頭脳が、この先の地球の命運すら左右しているのだから。

《……チツ。たかが設置作業に手間取るとは思いもしなかったな》

とは言え、今現在はシミュレーターの最中だ。

雑念は振り払い、目の前に迫る関門をクリアしなければ無事に終わる事すら出来ない。

《これでラス なぁッ!?!》

何故こうも、事は上手く運ばないのだろうか。

坊やが光学兵器を使おうと引き金を引いた瞬間暴発したのか、それとも機能不全でも起こしたのか、どの様な過程があったかは知らないが坊やの機体の腕が突如として地面へと落ちた。

《大丈夫か!?!》

《だ、大丈夫です……それよりも上 ツ!?!》

坊やの指摘通り、上からは巨大なボールの様な形をした戦車級の群が此方へと落下して来る。

最早、それは1つの固体と言って差し支え無いだろう。

と言うか 1個の生命体なのではないだろうか？

まあどちらにせよ、

《やれるさ》

既にS-11の設置作業は終了しているのだ。

今更、焦る必要も無い。

迫り来る肉団子に突撃砲を放り投げ、宙を舞うそれを狙い撃つ。

まだ装填してあった弾丸ごと撃つた為に、空中にて突撃砲は爆発を起こし、それが肉団子の前にて綺麗に弾ける。

一発目の、綺麗な花火。

《そら行くぞ!!!》

肉団子に隙間が生まれ、その隙間目掛けF型が全力で疾走する。

僅かな助走距離ではあったが、コイツにとっては十二分な距離だ。

スタートダッシュさえ上手く行けば、あの程度の質量相手に押し負ける事は確実に無い。

腰を捻る様な、強烈な横一闪。

背部担架から抜いた長刀が肉と共に戦車級の骨を断ち切り、団子状態だった奴等の身体に更に大きな割れ目を作る。

二発目の、迸る銀閃。

《ラストオツ!!!》

力の緩んだ団子の後ろへと機体を移動させ、その団子へと蹴りを打ち込む。

ただの蹴りなどでは無い。

そう。

ヒーローが悪い敵に必殺技をブチ込む様な、あんな感覚の強烈な蹴り。

それが団子を地面へと激突させ、気持ちの悪い音と共に戦車級を肉塊へと変えて行く。

三発目の、舞い落ちる流星。

《遠路遙々ご苦労さん。あの世で閻魔にでも裁いて貰え》

その場に残ったのは、

血のシャワーを浴びながら悦に浸る俺と

《無茶苦茶だ……もう、何もかも無茶苦茶だ！》

呆気無く危機を回避した俺に対して、文句を垂れ流す坊やの2人だけだった。

《なあ》

《はい？》

《……お別れだな》

《え？》

《……いや、まあ良いさ。お互いにやる事は腐る程あるだろう？》

《そう、ですね……》

《”宗一”》

《え?!あつ、今、名前で》

後ろで爆発するS-11と、その爆発にて粉々に消し飛ばす反抗炉。それを見やり、俺は宗一に別れを告げた。

もう会う事も無いだろう。

元々、出会うべき道では無かったのだから。

これは所謂、運命ってヤツの悪戯。

有り得る筈の無い、役者2人の競演。

一夜限りの舞踏会。

掻き消えようとする意識の中、俺は久方振りの笑顔を浮かべていた。

ああ、懐かしい感覚だ。

こんな気分も悪くない。

《負けるなよ、宗一》

さようなら、なんて辛気臭い台詞を言うつもりは無い。

またね、なんて有り得る筈も無い事を言うつもりも無い。

ならば俺はただ、人生の年長者として彼にアドバイスでもくれてやるのが妥当だろう。

まあ、アドバイスと言うよりも俺の言葉は根性論だがね？

「……俺、は……」

「無事に気が付いたみたいですね」

「千枝、か……？」

「それ以外の誰に見えるのか、是非とも聞いてみたいですね」

目を覚まし、辺りを見渡す。

先程までの毒々しく、憎たらしいハイヴの壁では無い、真つ当な世界。

全てが元通りになった世界。

「……俺はどれだけの間、シミュレーターに籠っていた？」

「彼は既に10時間弱。少佐の部下は大騒ぎですよ。特に、イーニアが泣いて喚いての大暴れで、誰にも手が付けられませんでしたから」

「あはは。そりゃ埋め合わせをしねえと」

筐体から身体を乗り出し、10時間ぶりの外の空気を存分に肺へと送り込む。

随分とリアルな体験をさせて貰ったものだ。

あんな体験ならば、あともう1度程度ならば歓迎しても良いだろうに。

まあ、有り得ないと分かっているから少し寂しくもあるのだが。

「りゅうじ　　ッ!！」

「おっと」

哀愁を漂わせ、先程までの別れに思いを馳せていた俺の胸へと何か
が飛び込んで来る。

いや、もう既にその何かは何なのかは理解出来ている。

俺の胸に飛び込んで来るのは、この世界を探しても彼女だけでは無
いだろうか？

「心配掛けたね、イーニア」

「だいじょうぶ？いたくない？かなしくない？」

「痛くも無いし、哀しくも無いよ。ただ、イーニアと会えなかった
のは寂しかったかな」

そう笑い掛け、彼女の柔らかな髪を撫でる。

気持ち良さそうに俺の指に身を委ね、イーニアは胸へと顔を埋めて
いた。

10時間程度の事だった筈だが、彼女にとってはそれでも心細いの
かも知れん。

これは気を付けなければならぬだろう。

「さて……お待たせ、レディ達。俺は見ての通り元気一杯の夢一杯
だぜ？」

所で、シミュレーター室の部屋にて此方を見詰める彼女達は一体如

何したと言っのだろうか。

別に、普段と同じ様に接すれば良いだろうに……
何故故にそんな場所で此方を見詰めるのだろうか？

「ああ、いやあ……近付こうとすると、イーニアがニャー！と睨む訳ですよ」

セレナは呆れ半分と言った具合に頬を掻きながら、此方へ手を伸ばそうとして叩き落される。

胸元にてイーニアが、セレナに対して頬を膨らませて威嚇している。思わず、猫かよと突っ込みたくなってしまふ。

「イーニアが……イーニアが反抗期に……！」

クリスカはクリスカで論点の違う、良く分からん事を言っている。と言うか、反抗期ってレベルじゃないだろう。ただの威嚇だぞ？

反抗期って、もっと危ないだろ。椅子投げたりとかするだろ、多分。

「ご無事で、何よりです……」

残った1人。

唯依は心底嬉しそうに、頬を緩めていた。

今でこそ朱が差している頬ではあったが、先程までは涙を流していたのである。

泣き腫らした目と、涙の後が嫌に目立ってしまう。

申し訳ない気持ちが一杯になる。

今直ぐにでも抱き締めて、俺の無事を感じさせてやりたい。やりたいのだが……

「……ふーっ！」

イーニアが本格的に猫になりそうなので、「後で」と言う事にして
おこつ。

「少佐、ご無事ですか!？」

「私よりも先に死ぬなんて許しませんからねえ〜!!！」

「水月、不躑だよ……」

おっと。

今度はヴァルキリーズの子猫ちゃん達か。

随分と俺も心配される様になったな……

単なる同士つて安っぽい関係じゃ無いみたいだ。

一先ず、俺自身も安心だな。

「龍二くん！人工呼吸は!?!心臓マッサージは!?!おかゆとか食べるなら、息吹きかけて……」

「まりも、うっさいわよ。調子は如何よ、”シミュレーター”の」

今度は神宮寺に夕呼か。

昔からの腐れ縁とは言え、たかがシミュレーターに閉じ込められた
程度で駆けつけるなよ。

まあ、嬉しくはあるけどさ。

「龍二さん!」

ん?

65 10月23日(2) 決意、告白、ときどき怪力(前書き)

ある意味では唯依が主役の話……と言えるのだろうか

剣崎

悠陽と遊んでいた頃から、俺はかくれんぼと言う遊びは得意中の得意だ。

隠れるにしろ、捕まえる側になるにしろ、俺は小さな頃から人の内面と言うか

兎に角、その人物がどういった行動パターンをするのか、全てお見通しだから。

故に、悠陽は決して俺をかくれんぼに誘おうとはしなかった。

別に他の遊びでも楽しめるのだから、彼女達はそれで十分良かったのかも知れない。

俺自身も、別にかくれんぼをしなければ死んでしまつとかそんな事も無い。

だから今の状況、実は楽しんでいたりする。

(…… ああやっぱり俺は母さんの子供だなあ)

母さんならば、戦時中だろうが今の状況を笑いながら楽しむだろう。今の俺がそうなのだ、あの人もやりかねない。

あの人の性格は120%、俺に受け継がれていた。

「出て来るのなら話は終わり。出て来ないのなら、俺が見付ける」

未だ人が居る格納庫内にて、凜とした声が響き渡る。

これは俺と彼女にしか分からない宣戦布告の合図。

返って来る言葉は無い、それは戦闘の継続を告げる無言の圧力。

宜しい。

では、かくれんぼだ。

徹底的なまでに隠れ場所を探し抜き、暴き、君を見付けて見せよう。

「5分だ」

誰にでも無く告げ、身体から力を抜く。

まずは深呼吸。

心を落ち着かせ、身体に酸素を送り込む。

血液と共に隅々まで酸素が送り込まれ、身体が僅かばかり軽くなった様に感じた。

動ける。

これで、心置きなく動ける。

重心を前に、足を前に、力強く、踏み込む。

走るでも無く、歩くでも無い。自分の場所を大きく誇示する様な、力強い歩み。

無言の威圧。

俺がお前を見付けると言う意思表示。

さて 地獄のかくれんぼは今此処に、開幕を告げた。

もしも世界が壊れたら、お前は如何する？

昔……私が訓練兵だった時に聞かれた、少佐からの何気無い質問。それはこんな時勢故に現実味を帯びていて、私に重く強く押し掛かった。

“もしこの戦いに負けた時”
考えたくなかった事を突きつけられた様な気分だった。

だから答えた。

その時にならなければ分からない、と。

考える事すら拒否した。拒絶した。そんな私だから 前には進めないのだと思う。

彼の答えは、あまりにも簡単だった。

壊れたのなら、また作り直せば良い。

子供が考える様な単純で、それで居てこの場では何故か納得してし

まう答え。

そうだ。

そうだった。

私は、あの時に初めて彼の顔を真正面から見詰めた。

年相応とは言えない、真っ白な髪。

澄み切った純粹な瞳。

携えた笑みは子供の様に天真爛漫。

きつと、多分だが、それが原因なのだ。彼のその言葉が私が彼に執着する理由。

私が剣崎龍二に心の底から染まった瞬間だったのだろう。

コツン、コツン。

足音が響く。此方へと向っている。

淡い恋だった。

初めは高嶺の華として諦めていた。否、諦める事が出来ていた。だが、今は違う。

彼は私と共に戦場に赴くし、食事だって一緒に食べる。訓練だって一緒に出来る。

近付いた。

近付いてしまった。

コツン、コツン、コツン。

足音が響く。それは何かを確信したかの様に力強かった。

ビヤーチエノワ少尉。

シエスチナ少尉。

エニツクス少尉。

藤代中尉だって、きつとそう。

皆が彼を心の底から、愛している。

彼がそれに気付いていなくとも、いつかは振り向かせると思っている。

だから、私はダメなのだ。

“振り向かせよう”と思わず、”振り向いて欲しい”と願っている

からダメなのだ。

コッソ。

足音が響く。

私の隠れた場所の前にて……足音が、止まった。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

白銀

身体的な面で皆から遅れを取っている事は無かった。

前の世界 1度目のループの身体が、そのまま引き継がれたって事なのか？

何にしたって、これで総戦技演習でも足を引っ張る事は無い。

寧ろ、引っ張る側に周って行ける。

だが不安要素が無い訳では無い。

これから歴史を変えて行く際に、どれだけオレの記憶と差異が出て来るか分からない。

何にしたって、1番の疑問は

(あの剣崎少佐って何者だ?)

白髪の衛士の存在。

夕呼先生はあの人を信頼している。それも、絶対的と言っても良い信頼関係。

正直に言えば、オレと純夏の関係に近い物を感じる。

昔からの大切に居て掛け替えの無い、存在。

そんな感じだ。

(味方だよなあ……でも、案外と淡泊って言うか……)

オレがこの世界の人間じゃない。

それを予想していたよりもアツサリと、予想内DEATHとでも言う様に受け入れた。

懐が深いなんて理屈じゃない。

アレは、そんな事には興味すら無かったのかも知れない。

別の世界なんて、如何でも良い。

あの人はずう言いたかったのだろうか。

それとも

「白銀えっ!!」

「ヤベッ……ハイッ!？」

突如として怒号が俺の耳を叩き付ける。

声の主はまりもちゃ……神宮寺軍曹だった。額に青筋が浮かんでい

座学 例題作戦に対する説明中だったのか。

真面目に少佐の事考えていたら、聞き逃しちまった……

「貴様、座学がそれ程までに退屈か？」

「あ、いえ、そ、そんな事はありません！Sir!!」

「Sirは女には使わん!!」

「うえっ!?!」

「許可が出るまでランニング！私が終了を告げるまで帰って来るな、馬鹿者!!」

二度目の怒号と共に教室を飛び出し、オレはグラウンドに向った。
ちくしょう!!

何だよ、1日にグラウンドを何周も何周も……足が痛え!!

御剣

今、グラウンドを走る1人の男。

白銀武、と言ったか。

身体能力や座学の知識、何よりも胆の据わり方が並大抵では無い。

「御剣」

「む？榊か。如何したのだ」

「貴方、彼の事を如何思う？」

「……今の我々には心強い戦力となるう。機転が利く事は確かの様だ」

「そうね」

座学が終了し、窓から外を眺めていた私の下へ榊がやって来る。

如何やら、白銀の事を聞きに来た様だが私にも未だに分からぬ事が多い。ただ

「信用は出来得る存在だと、私は思う」

「……まっ、それには同意するわ」

お互いに微笑みを残し、眼下にてグラウンドを走り回る白銀の背を眺める。

肩で息をしながらも必死にグラウンドを駆け回るその姿。何処か間抜けなその姿が、非常に心強く思える。

総戦技演習は 間近に迫っていた。

目の前に木箱がある。

人1人が隠れるには十分なサイズの木箱だ。

周りの木箱が移動された形跡は無く、必然的に手前にある木箱のどれかに俺の探し人が居ると思われる。

ならば、何故風漬しに探さずにこの木箱を選んだのか。理由など無い。

……嘘です、あります。

耳を澄ませば、この木箱からは呼吸をする音が聞こえる。

鼻を利かせれば、この木箱からは柔らかな香りが漂う。

そして何よりも、この木箱以外は封がしてあるのだ。

中身は大事な戦術機のパーツや銃弾などが入っているのだろう。だからこそ嚴重に管理している筈の木箱の内、一つだけに封がしていない。

……此処だよな。

声に出す事も無く、目の前にある木箱を軽く蹴る。

ゴツン、と言う音の後に中からガンッ！と言う大きな音が鳴る。

驚いて頭でもぶつけたのだろう、間抜けなヤツだな。

……しかして、一つだけ問題がある。

良く考えてみると、作戦を決行したのは自分だと言うのにアレは恥かしい。

でこ、チュー（笑）

馬鹿が！笑える訳がねえだろうが、何が（笑）だ！！

だが、これを開けなければ事は進展しない。

流石にいつまでも此処に閉じ込めさせている訳にもいかない。

いつ出撃があるかも分からないこの状況下にて、兵を遊ばせておく
余裕は無いのだ。

原因が俺にあるうが……余裕は無いのだ。

「唯依、さっきはその……俺が　ぶばあっ！！」

木箱の蓋に手を掛け、それを少しばかりずらすと力を入れた瞬間
の事。

蓋が力一杯宙を舞った。

次いで、俺の顎が跳ね上がる。

いや……俺の顎が跳ね上がるよりも蓋が宙を舞うよりも速かったか？
まあ些細な事だ。気にする事も無い。

その後、首の後ろを引っ張られて木箱の中に引き込まれる。

この時点で俺の意識はブラックアウトしていたと追記しておく。

だから一言だけ言わせて貰う。

俺は此処から先、唯依から何をされたのか分からない。

だって考えても見る？

首の後ろを引っ張られた瞬間に、無理矢理木箱の中に捻じ込まれる
のは良いが

俺の身体が、まるで鯖折りでもされたのでは無いだろうかと言う程
に曲がっていた。

耳障りな骨が押し折れる音。

ゴギヤリ、なんて音と共に俺は思う。そして、願う。

ああ唯依。

お前の顔は可愛いのに、どうして　俺を毎度毎度困らせるのだろ
うか？

少しだけで良いから、加減をしってくれ。

もう！

龍二困っちゃう。

篁

抱き寄せる。

あの人に先を越されてしまうと、何も言えなくなりそうだから。私から、自分の力を持って、自分の意思で抱き寄せる。

「龍二さん……私、私言います……貴方に知っていて欲しいから……ッ！」

グツと両腕に力が入る。

震えてしまう。

身体が、否応無しに震えてしまう。

恐怖？それとも 抑圧されていた気持ちからの解放？

「貴方が……好き」

顔が熱い。

心臓の鼓動が早い。

煩い、煩い、煩い、煩い、煩い、煩い！黙れ、静まれ、動くな、止まれ

ッ！

でも知っていて欲しい。

こんな一言を言うのに、私は此処まで怯えているのだと言う事を。私だって、1人の女のだと言う事を。

貴方にだけは、知っていて欲しい。

「……………」

しかして、その後の返事は彼から返っては来なかった。

抱き寄せていた身体を離すと、力無く木箱の中へと崩れ落ちる。

元々、1人入る事がやっつと言う場所に2人分捻じ込んでしまえば窮屈になるのは当然の事だ。彼の身体が崩れ落ち、私の胸へと顔を埋める。

「りゅ、りゅりゅりゅりゅ、龍二さん　ッ!？」

いくら何でもこんな…………ッ！

その言葉を紡ごうとして、動きが止まる。

…………?

…………

…………!?

彼の腰が、奇妙な形に折れ曲がっていた。

「先生、俺決めました」

「……………何を？」

先生の執務室。

オレは、オレの決めた1つの決心を告げる為に此処を訪れていた。

「オルタネイティヴ？成功の為に、オレは……………1日でも早く衛士になります」

前の世界 1度目の世界では衛士にはなれたが、なる時期が遅過ぎた。

ならばそれよりも少しでも早く、1月でも、1週間でも、1日でも早く衛士になる。

そうすれば直接オルタネイティヴ？を援護する為の作戦に就けるかも知れない。

だったら行動に移すだけだ。

目の前に迫っている総戦技演習をサツサと終わらせて、衛士になる。それで先生の手伝いをして、オルタネイティヴ？が発動しない様に尽力すれば良い。

「先生に認めて貰おうにも、計画をサポートしようにも訓練兵じゃ話しにすらならない。だから、オレは階級を上げなきゃいけない。訓練兵よりも高い……………例えば、基地指令とか」

「へえ、基地指令とは大きく出たわね。でも偉くなるって言うのは良いわねえ、是非とも早く出世して楽させてちょうだい」

ニヤリ、と笑った先生を尻目にオレは執務室を後にする。

さて　そうと決まれば景気付けにランニングでもするか！！

その頃、剣崎は……

「うう……」

「龍二さん、確りして下さい！龍二さん！」

「あちやう。ありやダメだ、腰骨がバツキリだな」

「愛されて居るのは良いけど、凄まじく一方的な愛と言っか……」

「愛が攻撃力に変換されると考えれば、彼女の愛はまさしく一級品だろっ」

格納庫内に人溜まりが出来ていた。

その中心には真っ青な顔を曝し、唯依の膝の上にて唸り続ける龍二。そしてそんな彼を今の状況にまで陥れた元凶　唯依は龍二を揺さぶり続けたそうなの。

65 10月23日(2) 決意、告白、ときどき怪力(後書き)

ギャグ補正(?)が無ければ、龍二は死んでいただろう
恐るべし、愛の怪力

次回、武は冥夜とのイベント
龍二は珍しくシリアスに突入、か？

66 10月23日(3) "・讀りたいもの"・(前書き

シリアス(苦笑)、だと……!?

その後の龍二と唯依

『さあ、次はご奉仕だ』

『ッ……ッ』

『恥らつて居るのかね？フッフ、その熟れた果実の様な頬はとても
素敵だよ』

『あ……ダメッ……』

『どうしてダメなのかね？私は君をこんなに愛しているのに』

「……ゲフッ」

現在、剣崎龍二ダメ人間ロードを直進中。

心配そうに此方を覗き込む唯依の事などアウト・オブ・眼中と言わ
んばかりに垣間見る夢 とてもエッチな夢 に心震わせていた。

「少佐……」

「グフツ、グフツ……ウヘヘツ……」

《ピー》を《ピー》しながら此方を上目遣いで見上げる美女。顔は良く見えないが、実に素晴らしい。

これが夢でなければどれだけ素敵だっただろうか。

まあ夢じゃなくとも素敵だ。もう、最高だね。

「ウヘヘツ……フヒツ、フヒツ……」

「んっ……！」

しかして、周りの人々がその行動を見逃さない。

唯依の膝の上にて惰眠を貪るだけでなく、彼の手は彼女の太股を弄っていた。

自分の行いで彼が今も苦しんでいる、そんな自責の念に包まれていた唯依はそんな行いをされ様とも唇をキュツと閉じて耐えている。

Q・貴方達は、彼の行いを許せますか？

自身に逆らわない部下に対するセクハラ行為。

膝枕だけでは済まず、セクハラまで発展するこの馬鹿佐官。

A・NO！！

「いい加減にしろ、エロ少佐！！」

「上官だからって遠慮は要らねえっ、ぶちのめせ！！」

「羨ましい……もとい、破廉恥な！！死んで詫びろ、馬鹿！！」

龍二の元に殺到する数々の整備兵。

その中には女性の姿もあつたが、まあその何だ。同性愛は否定しない方向で。

「うおおっ！？何だ、此処は何処！？貴方は誰！？私は何処！？」

「しよ、少佐！」

殺到する整備兵達の足音にて、眠りから目覚めた龍二が辺りを見回す。

満面の笑顔にてその起床を迎え入れる唯依の顔に一瞬だけ和みそうになるが、次いで感じるまた別の気配に辺りに視線を配る。

右、敵。

左、敵。

後ろ、敵。

前、敵。

……辺り一面が敵、敵、敵。

人間だと言うのに何故か俺に敵意を向ける馬鹿共。

愚直に、一直線に、そりゃもう殺意を携えて元気に全速前進。

「何だか知らんが、怪我人相手に何のつもりじゃ！？止めて、止め

……」

「「「「「問答無用じゃあああああああ……！！！！！！！！」

「「「「」

「ああダメ！激しい、激し過ぎる……ボク逝っちゃう……！」

どうやら、傷付いたのは腰だけでは無いらしい。

頭の方をより一層重点的に精密検査に出す事をオススメしておこう。

剣崎

「酷い目にあつた」

服に付いた埃を払い除け、夕呼が待つのであろう執務室へと向う。

白髪に付いた汚れと言つのは非常に目立つ。

あの野朗共、俺の髪に汚れが付いて居やがったら必ずブチ殺してやるぜ……へへッ。

「すみません、私が止めていればこの様な事には」

「気にしても仕方がない。サッサと用件を終わらせるぞ」

「はい……」

しかし、どうにも唯依は元気が無い。

アラスカでもこんな事があつた様な気がするがね、結局この子は勝手に人の分まで負債を背負い込んでしまうダメな所がある。

それを如何にかしてやる事が俺の役目なのだろうが、今の段階では何も思い浮かばん。

心の奥深くにまで根付いた彼女の強情な”性格”。

それを叩き壊し、別の”何か”を埋め込むとなるとどれだけの時間を要するのか……

考えたくも無い事だ。

「唯依」

「はい、何でしょう……?」

「まあ、その何だ。元気出せよ?俺は気にしちゃいねえ」

「……すみません」

「うへえっ?!」

「ご心配まで掛けて頂くとは……副隊長失格です、私は……ッ!」

何と言うネガティブ。

マイナス思考とか、自嘲癖とか、何かそんな感じのレベルじゃない。これは 鬱じゃないのか?

「あ、いや、ホントに気負うなよ?これから先もお前の力は必要だし」

「……私の代わりなど幾らでも居ます」

ムッ。

流石にこの言い草にはカチンと来る物がある。

“代わり”など幾らでも居る、だと？

俺が選び抜き、俺の隣で戦い、生き残った者が幾らでも居ると言うのか。

だったら俺の性格も此処まで捻じ曲がる訳が無いだろう。

名前すら覚えずに死んで逝った者達。

杯を交わし、互いに称え合った者達も死んだ。

家族ですら、今の俺にはもう居ない。

俺の傍には誰も居なかった。

任務の始まりと終わり、周りに居る者達は結局誰も居なかった。

いつも1人。

だが だけど、

「代わりなんて居ない。お前は俺の認めた”相棒”だ……二度と、馬鹿な事を言つな」

「ですが……私は……ッ!!」

「 なら、一生ウジウジ喚き続ける」

お前は這い上がってくると信じている。

お前は絶対に死なないと確信出来る。

それ程の力を持ち、それだけの覚悟があり、それだけの素質がある。

俺なんて目じゃない ”英雄”としての素質がある筈だ。

だから、唯依。

突き放す様な事を言って悪いが、今回はかりは俺は手を貸さない。
自分で考える。

悩み、結果として俺の下を去ったとしても俺は止めない。

お前の道だ。

お前が決める、篁唯依。

「今日は部屋に戻れ。夕呼の執務室には俺1人で行く」

「……」

その場に立ち尽くす彼女を背に、俺は1人執務室へと向かう。

例え、今恨まれたとしても……彼女が成長してくれるのならばそれで良い。

白銀

外は暗い。

陽が沈み、月明かりだけがオレと 冥夜だけを照らしていた。

……本当は『冥夜』なんて名前で呼んじやいけないだろっけどさ。
やっぱりオレの中じゃ冥夜を『御剣』なんて呼び方で呼ぶ気がしない。
い。

でも、今は我慢するしか無いよな。

「御剣は今までランニングか？」

「うむ。日課だからな」

冷水で額の汗を流していた冥夜は持つて来ていたのだろうタオルで顔を拭う。

何だろう。

こんな風に他愛の無い会話をするだけなのに、凄く懐かしく感じちまう。

「凄えな」

「よせ。この身は依然として未熟……護りたい物すら護れぬ身だ」

そう呟き、冥夜は月を見上げた。

今日の空に浮かんでいる月は、雲の間から此方を覗き込む様な三日月。

真ん丸じゃなかったのはちょっと残念だな。

「……聞いて良いか？」

「ん？」

「御剣の護りたい物、ってヤツ」

「……この日本と言う国と、そこに住まう人達だ」

真っ直ぐに、一切の迷い無く紡がれる言葉。

今は薄れた記憶の中にも 『前の世界』 の記憶の中にも、そんな

言葉が残っている。

冥夜に教えられたのか……” 国” っていう言葉の意味。

「そなたには無いのか？ 白銀」

「ん？」

『俺がお前を護る。 白銀、お前はこの世界の” 希望” だ』

「……………」

脳裏を掠めるノイズ。

雑音？ 違う、これは……忘れちゃいけない事の筈なのに。

どうして、思い出せない。 思い出しちゃいけない？ 有り得ない、考えられない。

今の 何だ？

「白銀？」

「え？ あ、いや、悪いな……そう言えば、オレの護りたい物だっけ？」

「うむ」

「 ” 地球” と、 ” 全人類” だ」

風がオレと冥夜の間を駆け抜ける。

2人で夜空を見上げ、その先に浮かぶ月を見詰めた。

あそこにすら、BETAが居ると思うと何とも言えない気分になるが……

今は地球の事を考えよう。

オレにしか出来ない事。オレに出来る事を1つずつ確実に遂行すればきつと……

世界だって、救える筈だから。

香月

「来たわね」

ドアを開けると同時に、龍二は不機嫌な面を引っ提げてソファーに腰を下ろした。

何とも珍しい光景だ。いつもならば、逆の立場だったろうに。

「不機嫌ね」

「サッサと話せ」

此方のチャチすら軽く一刀両断し、不機嫌そうな顔を俯かせて此方の話へと耳を傾けている。何があったのかは今のあたしには到底分からないが、取り敢えず伝えなければならぬだろう。

「？推進派の連中、如何やらコッチに何かしらのアクションを取るらしいわね」

「アクション？」

「ご丁寧に隠匿までして、戦術機を仕入れていたわ。それも”ラプター”」

「対人用戦術機……クズ共が。目先の光に目を奪われたな」

吐き捨てる様に言葉を紡ぎ、龍二は俯かせていた顔を上げ、その代わりに腕を組む。

その様子が話を続けさせる事を自然に促していた。

「このままドッシリ待ち構えても、こっちは後手に回るだけ。かと言って先に仕掛ける事は出来ない。アンタならどうする？」

「……重鎮を殺す」

「場所の特定は如何するつもり？」

「衛星でもハッキングすれば良い」

「ログは？」

「消去はお前に任せる」

「却下」

やはり、何も考えていなかったか。
だが、このままでは半永久的に後手に回る事になるのは確かな事実だ。
それを如何にかしたいが、如何すべきなのかも分からない。
ならば

「次に奴等が何等かのアクションを取って来た時、”仕掛け人”を捕らえる」

「大胆なミッションプランだな……」

「それ以外に名案があるなら聞いわよ」

「……特には」

「なら決まりね」

やはり、折角コイツを帝国から連れ込んで来たのだ。
面倒な防衛戦は次で完全に終わり。
？からの圧力に屈するのでは無く、寧ろ此方が？に圧力を掛けてやる。

攻守逆転、してやろうじゃないの。

「？の連中の妨害工作を逆に利用すると言う事が……まあ悪くは無
いさ」

喉の奥でクツクツと笑い、龍二が懐から煙草を取り出す。
此処で吸うつもりなのだろう。

別に責める気は無いが、1つだけ言わせる。

「換気扇、回しなさいよ」

「ん？ああ、悪いな」

66 10月23日(3)

"・護りたいもの"・(後書き

シリアス(苦笑)

寧ろ、(失笑)?

……シリアスな本を読もう

少し勉強しよう

67 10月24日 告げる鐘（前書き）

本編のこの日について、こんな感じで良いのだろうか……

67 10月24日 告げる鐘

白銀

「すごいねー、武さん！」

「あんまり褒めるなよ。増長しちゃうぞ、オレ」

タマの朗らかな笑顔に苦笑で返しながら、オレは京塚のオバちゃんから受け取った飯を持って席に着く。

「マグレ」

「言ったな、彩峰。当分の間は負けないからな」

簡潔に言葉を選び、紡ぐ彩峰。

相変わらずヤキソバばかり食いやがって、栄養が偏っても知らんぞ。

「そうはいかないわ。次は私たちだってそう簡単には勝たせないわ
「よ」

「……アンタじゃムリ」

「何ですって!?!」

「今の彩峰、彩峰だぞ!?!」

相変わらず彩峰と仲が悪いな、委員長。

まあそこら辺は後々時間と仲間意識ってヤツが解決してくれるだろう。

このままじゃ、部隊の奴等にも迷惑が掛かる。
委員長なら、分からない筈が無いけどなあ……

でも、コレはコレで良いのかも知れない。

オレ1人が突出し過ぎるのも何かと思っていたけど、こうして強い刺激を与えてやる事で部隊の皆にもキチンとその分の刺激が与えられる。

良い感じに上方修正されているって感じがする。

あとは美琴の復帰で部隊は完成形に持って行けるって訳だ。

「よっしゃ! 頑張ろうぜ、委員長!」

「あ、あのねえっ! いい加減その呼び方やめ」

「午後の訓練も気合入れていくぞ! タマ、冥夜!」

「そうだね。頑張ろう!」

「うむ。午後は簡単には勝たせぬぞ、タケル」

「……ヤキソバ、おかわり」

頼むぜ。

話に入って来てくれよ、彩峰……

でも皆との距離感の良い感じに纏まっている。

美琴さえ戻ってくれば、あとは総戦技訓練を控えるだけになるからな。

今の内にやれるだけの事は全部やらないといけない。

そっだ……

だったら、もう1つだけ大事な事を終わらせなきゃいけない。

霞に、会わなきゃ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

剣崎

「喰らええっ、スリーカードじゃあっ！ー！ー」

「ストレートだよ」

「フルハウス」

「……フォーカードです」

剣崎龍二、撃沈。

総合敗北数はお空に浮かぶ星の数と同意でしょう。

ババ抜きで負け、スピードで負け、大富豪で負け、そしてポーカーですら敗北。

イーニアは朗らかな笑顔で肝が冷える様な一手を投じ、

クリスカは表情が伺えない事からどんな手を隠し持っているのか分からず、

社に至っては最早何を考えているか到底理解し得ないと言う現状。

結論。

俺はこの子達に遊びで勝てない。

「何故……何故……？」

「りゅうじ、かわいそう」

「弱者に生まれた事を悔やめ」

「……弱いです」

「グハアッ！」

社の何気無い一言が、胸に深く鋭く突き刺さる。

こっちは真剣だと言うのに、まるで埃を払う様に一蹴されてしまう俺。

可哀想とか、そういう事を超越した弱者ぶりに涙すら誘う。

何が英雄さ。

何が黒獅子さ。

今はただの美味しい鴨じゃないか！

鴨ネギってレベルじゃねえぞ！？鴨がネギに鍋と箸とダシまで持って来た気分だ！

「イ、イカサマ………？」

「それしか考えられんのか、どうしようもないクズだな」

クリスカが鼻を鳴らし、配られていたカードを集めてシャッフルを開始する。

既に俺の敗北は確定的に明らか。

だと言うのに、ゲームを続けるとは流石クリスカさんだ。

俺に出来ない事を平然とやってのける！そこにシビレるうっ、憧れるうっ！

「………ブタ」

「ぐっ！社、流石に連続でそんな札になる事は無いだろうさ………多分だがね」

ボソツと恐ろしい事を呟きやがる、社のヤツ………

何て精神的な揺さぶりが得意なのでしょう！

俺の心のウィークポイントを的確に攻撃しやがって、ブレイクするぞ！？

「………」

「……」

「……」

手札を各々が覗き、表情がコロコロと変わる。
驚嘆、喜び。若干1名は無表情ではあるが。

「……なあ」

「なに？」

「何だ」

「……どうかしましたか？」

「フォルドってあり？」

「……ダメ」「」

こうしてポツコポコにタコ殴りされました、チャンチャン。
今は心の傷を癒す為に夕呼の執務室に戻って一服しており、まだ奥の部屋では彼女達は楽しくカードゲームに勤しんでいる事だろう。

「……あつ、どうも」

「ん？白銀か。夕呼なら留守だぞ」

夕呼に会いに来たのだと思い、先に彼女の不在を告げる。
今アイツが何をしているのかは知らん。社やイーニア達の世話を俺1人に押し付け、自分は何処に行つて居るのか……まあ遊びでは無

いだろうが。

「いえ、今日は霞に会いに来て……」

「社に？」

しかし、武の答えは意外な物だった。

まさか社に会いに来るとは思っても居なかったな……

「……………幼女趣味？」

「違いますよ!!!」

「社なら奥の部屋だが……今はクリスマスカ達も居る。暫くは遊ばせてやれ」

取り敢えず、静かにコーヒーを口に含む。

やはり 前の世界の埋め合わせをしに来たか。コイツ自身、相当焦って居やがる。

自分自身では、落ち着いていると思っているだろうが事情を知っている周りから見れば、今のコイツは明らかに詰め込み過ぎだ。

……まあ、それを忠告して聞くタマじゃないだろうがね。

「そつだ。何かこれから先に起こる大きな出来事は無いのか？」

「へ？」

「未然に被害を防げるのは此方としても有り難い事だ。お前の情報はある意味、被害を最低限に抑える事が出来る最終兵器の様な物だからな」

「……ううん」

「あまり無理に搾り出す事も無いさ。寛ぎながら考えてくれ」

何かを考え込む白銀を他所に、俺はソファに背を預けてリラックスの体勢を取る。

しかし 何故、夕呼の部屋にあるソファは気持ちが良いのだろうか。

コレ、奪い取ろうかな。

アイツはどうせ使わないだろうしさ、宝の持ち腐れだろう。

俺ならば有効に活用出来る。每晚このソファの上で睡眠出来る自信があるぜ。

「あつー!!」

「ん？」

何かを思い出したかの様に飛び上がる白銀を他所に、俺はカップに口を付けて落ち着き払ってコーヒーを飲む。

温度差が激しいが、所詮はこんな物だろう。

俺自身、コイツに絶対の信頼を寄せている訳でも無い。

所謂、利用出来る情報源程度の認識だ。夕呼も同じ様な考え方をして居る事だろう。

何と不幸な、白銀武。

「ありましたよ……大きな出来事」

「どんな」

「佐渡島のBETAが侵攻して来ます」

「……ちよつと待て。BETAが侵攻？」

「佐渡島から本土に上陸したBETAが帝国の軍と交戦。第一防衛戦を突破され、敵を一度ロスト。その後に敵の目標地点が割り出されました」

「……横浜基地だな？」

「はい。その後は何とか帝国軍がBETAを撃破したので、危機は避けられました」

まさか、こんなとんでも無い内容が飛んで来るとは思いもしなかったな。

コイツはもう少し、俺に対して警戒心を抱いても良いのでは無いか？
夕呼の側近ポジションと言うのは確かだが、警戒してもバチは当たらん。

と言うか、そもそも何だ。BETAが侵攻だと？
流石に佐官クラスの一存では如何にもならないだろう、それ。

これは……夕呼に助力を請うしか無いだろう。まあこの話が確かであると言う証拠すら無い現状では、アイツが易々と軍隊を出すとは思えない。

そこは白銀の腕の見せ所と言う訳だな。

「……予想の斜め上だな、その意見は」

「あの、何か、すみません」

「いや良い。寧ろ、良く思い出してくれた。夕呼が帰って来たらその事をもう少し詳しく話して欲しい。出来れば、俺と夕呼の前で」

「分かりました！」

さて

これは冗談抜きで面倒事に巻き込まれる可能性が増えた。

「それで？それはいつの事だ」

「11月11日です」

……聞かせて欲しいのだが。

その日付に突っ込み所があるとすれば、奴等が侵攻して来る日が何故ゾロ目？

意味があるのか、これ。

ただの偶然なのか。

凄まじく如何でも良い事の筈なのに、気になる。

うっ、身体がムズムズする……ッ！

その後の事は何も知らない。

白銀は社と会話をする為に残り、俺は遊び終わったのであろうイーニアとクリスカを連れて執務室を後にした。

クリスカは武に敵意を向けていたが、それを何とか宥めながら今に至る。

「今日は楽しかったか、イーニア」

「うん！」

太陽の様に朗らかな笑顔を浮かべ、俺の服の裾を引っ張りながら歩くイーニアに微笑み掛ける。満足して貰えたのならば、俺は嬉しい。やはり子供とは、こうあるべきなのだ。

「クリスカ」

「……」

「何も心配は要らない。アレが敵ならば、一切の躊躇い無く殺す」

「……私が案じて居るのはそこでは無い」

「うえっ？ そうなの!？」

「はぁ……馬鹿が」

呆れた、と口に出すまでも無く溜息だけで彼女の思考は理解出来る。何と言う女帝ぶりだ……

流星はクリスカ・ビャーチェノワ。

俺が唯一無二、扱う事の出来ない部下だけはある。

想像の産物ではあるが、白銀と社の接触は初心な物だろう。

どうせ何だか壊れ物を扱うかの如く、「はじめまして」「とか」「君の名前は？」なんて紳士ぶりやがったに違いない。

「オッス！オラ白銀！強えヤツと戦うとワクワクすっぞ！！」

とか言ってみやがれ、バツキャロー！

しかし予想に反して社は白銀を拒絶しなかった様だ。

懐かれたのは非常に良い。

アイツも後々、社の力を必要とする時が来るのだからそれを考えれば非常に好ましい。

それはアイツの人徳が為せる技と言う事なのか。

白銀と夕呼の対話でもそうだ。

何の根拠も無い自身の論を、必死の懇願で押し通しやがった。

「大勢の人が死ぬのが分かっていて見逃す事は出来ない」らしい。全く……聖人にでもなるつもりなのか、アイツ。

意思が強いのは良いが、此処まで来ると死期を早めているだけにしか思えない。

まあ良いさ。

例え、アイツが何処かで壁にブチ当たろうが俺が何とかしてやるうじゃねえか。

尻拭いはキツチリ俺がやってやる。

だから白銀。

お前は思う存分前に進めば良い。

お前が通るべき道に立ち塞がる奴等は、俺が皆壊してやるよ。

各々が、胸に意思を秘めて戦う。

それぞれが、それぞれの戦いを前に控えながら

だが英雄達はまだ知らない。

己に迫る絶望の一端、希望の光すら届かぬ闇の底。

既に、未来の崩落が始まろうとしていた事すら、誰も知らない。

時は経過し、日付は 11月11日へと移る。

67 10月24日 告げる鐘（後書き）

次回は時間が吹き飛び、11月11日

ボスの仕業だな！？

次回の予定は、

- ・ 武、南の島へ
 - ・ 龍二、覚醒（本能的に
 - ・ 唯依、精進
- の3本を予定しています

68 11月11日 予期された侵攻（前書き）

残業とか、残業とか、残業とか、残業とか……
私の寿命がストレスでマツハ

この残業って上司の所為だろ
さすが上司、上司汚い

なんだかんだ、私は生きています

剣崎

見渡す先は、静かに揺れる海と終わりを感ぜさせない地平線だけ。とても美しい。

自然が作り出した、天然の芸術品。

人の手に触れられず、自然が、地球が、自身の力のみで作り返した天然の芸術作品。

題名は いや、違う。

人間がコレに名前を付けて良い筈が無い。

記憶に、心に、意識に、刻み込むだけで良い。

それ以外に俺達が行って良い行動など、何1つ無い。

人が触れて良い物では無いだろう、こう言った物は。

「今夜は冷える。確りと防寒具を着込んでおけ」

「ううう………了解」

隣にて寒さに震える少女、セレナ・エニックスにホットミルクを差し出して俺も俺で着込んでいるジャンパーをもう一度確りと着直す。やはり、夜は冷える。

それもこんな山の頂となれば余計だ。

目の前に広がる星空は美しいが、まだ若いセレナにとっては為にす

らないだろう。

こう言った物は、年老いた者達が楽しむ物だ。

……いや、俺は別に年を食っている訳じゃ無いがね。

「でも、本当に奴らは来るのかなあ……」

「知らん」

「知らんって……そんな無茶苦茶な……」

「アイツ等の考える事は人間には分からん。いや、理解したくも無い」

吐き捨てる様に呟き、胸元に忍ばせておいた煙草に火をつける。

吐き出す息も白く、煙草の煙も白い為になんか妙に不思議な気分になって来る。

確かに寒いけど、我慢出来ない程でも無い。

とは言え、吐き出す息　煙草の煙かも知れんが　　が白いと勝手に自身の身体が冷えていると思ひ込んでしまう。
何とも、迷惑だ。

「伊隅達に連絡をして来る……セレナ、お前は周辺の警戒だ」

「了解しました。ううゝ寒い、僕も早く休憩したいなあ」

後ろで嘆くセレナを他所に、俺は簡易テントへと歩を進める。

垂幕を潜り、その中で待機しているヴァルキリーズの面々と顔を合わせる。

急造とは言え、やはりテントの中は外の冷気をそれなりに遮断して居た。

外との気温の違いに、先程までは寒さに震えていた指先へと一気に血が駆け巡り、如何にも痒くて堪らない。

「伊隅、早くセレナの馬鹿を中に入れてやってくれ」

「了解しました。ですが、少佐は如何なさるおつもりですか？」

黙々と瞑想でもしていたのだろう、伊隅は俺の言葉にアッサリと了承の意を出す。

だが、それでも俺がこの後如何するのかが気になったらしい。

「警戒を続行する」

「しかし、それでは」

「良い。気にするな」

伊隅の反論すら聞かず、俺はサツサとテントへ背を向ける。別段、俺自身だって無理をしている訳では無い。

あくまでも他の連中に負担を掛ける分を減らしたく、この場にて警戒を承ったに過ぎない。俺の役目は所詮、他の連中の体力温存程度。

いつもならば戦闘に出て来られたと言うだけで気分も高揚して来るのだが、今回は　今回は如何にも乗って来ない。

興が削がれてしまえば戦えない、と言う程では無い。

だが俺の中では”テンション”は重要なステータスの一部分だ。

目の前の事柄を見続ける集中力、1つの事を何度でも繰り返せる持続力、鋭敏になった視覚、それに付いて来る反射神経。

1つの身体を織り成す為のあらゆるパーツ、そしてそれを纏め上げ

る事で1つの武が生まれる事になるのだ。

剣崎龍二、と言つ1つの武が。

「少佐、外は冷えますよお。はい、コーヒー」

「……速瀬か」

今にも雪が降り出しそうな、そんな寒さの中。

俺の後でも追つて来たのだろうか、後ろから突然声を掛けられる。

この寒い中でも滅入る事の無い、猪突猛进が大得意の猪女 速瀬からの誘いだ。

差し出されたコーヒーは未だに温かく、それに少し口を付けて深く息を吐く。

口の中は暖かいと言つのに、少し息を吸い込むと凄く冷たい。

この温度差は、身体に伝わる。早く終わらせたい物だ、こんな任務は。

「悪いな。気を使わせた」

「気にしていませんよ、誰も。寧ろ気を使わせっ放しだったのはコッチですから」

苦笑を漏らし、速瀬も持つて来たコーヒーに口を付ける。

その後、この場に舞い降りる静寂。

お互いに言葉を発する事無く、ただ周辺の警戒をする為に雑木林の中を歩く。

未だに葉を残す木々の間を潜り抜け、なるべく足音だけは出さない

様に気を配りながら周辺へと視線を配る。が、やはり何も感じられない。

11月11日のBETA襲来は　アイツの勘違いだったと言う事か？

どちらにせよ、此処まで来てしまった以上は最低限の仕事はこなさなければ。

そうで無ければ、何の為に高い金を出して此処まで赴いたと言うのだ。

しかし、この任務の結末が1人の少年の未来を左右する事になるとは……

今回の結末がどちらに転ぶにせよ、未だに安心だけは出来ない。

国連軍の上に居る連中を黙殺し、尚且つ帝国にまで気を配らなければならぬとは流石の夕呼もタジタジと言った具合だろう。

そう言う意味では、日頃から夕呼によって馬車馬の様に働いていた俺にとっては良い光景としか言えなかったのだが。

「お前も気を付ける」

「へ？」

「俺達の周りには想像以上に敵が多い。BETAであれ、人であれ」

このまま放って置けば、帝国が国連軍のどちらかがアクションを仕掛ける。

それを警戒しての言葉だったのだが、どうやら理解していない様子。何とも歯切れの悪い言葉をそれだけ残し、俺は1人先行して雑木林の中を歩いて行く。

その後を追い掛ける為に、速瀬も通常よりも歩幅を大きくしていた。

「ふんっ……漸く俺の出番か」

10日から11日へと日付を変える為、時計の針が進んでいた。現在は11時48分。あと12分すれば、日付が11月11日となる。

白銀武の予言した通りの、11月11日。

小刻みに秒を刻む時計と、隣にてコーヒーの入ったコップを持ちながら周辺を見渡す速瀬を交互に見やる。

この様子ならば、そこまで緊張している訳でも無いのだろう。

ならば俺も、安心して前衛として参加する事が出来ると言う訳だな。

俺達の運命を左右する、運命の時が目前へと迫っていた。

この戦い、一体誰が何を手にするのか。まだ誰にも分からなかった。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

佐渡島からのBETA侵攻。

それに伴い、第56機動艦隊は海の藻屑として海底へとその姿を没する。

海底を横浜基地へと向って移動するBETAの侵攻阻止役として駆り出されたのは帝国の第12師団。奴らも、現在はBETAと交戦中だろう。

現時点での俺の役割はあくまでも、横浜基地へのBETA侵攻阻止。その為にこんな信憑性の薄い情報に噛り付いているのだ。結果は出て欲しい。

ああ、因みに“それ以外”に関与するつもりは今の所は全く無い。例えば呼が何を考えていようが、俺は敵を”殺す”事しか考慮していないのだから。

《とは言え、まさか後衛にされるとは思いもしなかった……》

戦術機の中にて、1人愚痴る。

白銀の証言通りに出現したBETAに対し、此方も全機で攻撃を仕掛けるのかと思っていた。居たのだが、物事は如何やらそうはいかないらしい。

伊隅から提案されたミッションプランは、簡潔に表してしまえば

【ヴァルキリーズ及びセレナ・エニックスを前衛に、少佐は後衛にて遊撃を】

と言つ非常に分かり易い物だった。

つまりは危なくなったら助けて欲しいが、それまでは手を出すなど言う事か。

部隊の隊長として隊のレベルアップを図る事は結構だ。

だが、それを俺が居る際に持ち出すかね？何故俺が居るタイミングなのだろう。

『残念でしたね。前に出られなくて』

映像が表示され、その向かい側にて此方を見詰める千枝の顔が悪戯っぽく笑う。

どうせ、俺が前衛に出ない事が可笑しくて仕方が無いのだろう。俺の専属副官のクセに、何と心の無いヤツであるうか。

《非常に、な。俺は此処まで遠足に來た訳じゃ無い》

『私達なんて狭苦しい車の中……息が詰まりそうですよ。ねえ、涼宮中尉？』

『あ、え！わ、私ですか！？』

『侵攻は本格的じゃない。少しくらい、羽目を外してもバチは当たらないわ』

『ですが……宜しいのですか、劍崎少佐』

《俺に構わなくて良い。肩の力を抜いてくれ》

オズオズと言った具合に此方へと進言する遙を安心させる為に軽く微笑み、此方も張り詰めていた空気を伝えない様に肩の力を抜く。あと何時間か……いや、もしかすれば何分かすればヴァルキリーズはBETAと接触する事になる。それまでの僅かな時間とは言え、彼女にはあまり力まれても困る。

千枝が居るとは言え、彼女達と組むのは今回の任務が初めての経験である千枝よりも長い間、戦場を共に駆け抜けていた遙の方が指示も的確に出し易い筈だ。

100%の力を出し切って貰う為には、あまり緊張され過ぎても困

る。

何事も適度に、が一番重要なのだ。

《遙、隣に千枝が居るとは言っても緊張はするな。ただの漬物石とでも思え》

『酷いですね、私は漬物石ですか』

『つ、漬物石なんて、そんな！有り得ないです、無理ですよ、少佐あ………』

涙目になりながら訴える彼女の仕草に思わずと言った具合に苦笑を漏らしてしまう。

何とも意気地の無い発言だろうか。

こんな少女が、まさか今までヴァルキリーズを護ってきたと誰が想像出来る？

見かけとは相反して肝は据わっているのかも知れないな、涼宮遙と
言う人物は。

《……来る》

そんな柔らかな談笑の時間も突如として終わりを告げ、世界が変わる。

全てが反転するのが、身体で理解出来る。

風が運ぶ血の臭い。

地が教えてくれる地鳴りの音。

地球が、世界が、運命が、俺に戦いを強要する。

来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る、来る

ッ！！！！！

敵が、来る。

『ヴァルキリーズが交戦を開始しました。では少佐、私達はコレにて』

『失礼します、少佐』

《お前達はお前達の仕事をしてくれれば良い。頑張れよ？》

お前達の仕事　BETAの捕獲　を全てヴァルキリーズに任せ、戦場が見渡す事の出来る山上にて眼下に広がる戦場に思いを馳せる。

如何も近頃は平和過ぎた。

ニコニコと笑いながらイーニアと、クリスカと、唯依と、セレナと、千枝と。

彼女達と戯れる事は楽しいし、何より俺だって癒される。

だが、違う。

やはり、違う。

俺達は軍人であり、人々を守る為に、憎しみを晴らす為に、合理的に殺す為に、軍にその身を置いているのだ。

戦ってこそその軍人だろう、やはり。

《……頑張れよ》

誰に対しての激励なのか。

山上にて、黒きメタリックフレームが静かに戦場を眺めていた。その真紅の瞳に、力強く燃え盛る炎と共に。

エニックス

《少佐の部下と言う事だ。期待するぞ》

《期待に添える様に頑張ります》

要撃級の頭を踏み砕き、更に一步大きく跳躍する。

勿論、その度に光線級から狙われはするが F型を捉え切れる訳が無い。

照射された光線が装甲に掠る事も無く、当然の様に次の踏み台を踏み砕いていく。

本来ならば有り得ない、空中からの援護。

人間がBETA達に対してアドバンテージを取れない理由として最も大きいのは空が奴等の物となってしまうからだろう。

だが、今回の戦闘は違う。

1人だけ。

1人だけ、その常識すら跳ね飛ばす凄まじいまでに常識を外れた衛士が居た。

セレナ・エニックス。

F型を乗りこなす、獅子の背中を任された少女。

『セレナ、聞こえるかしら?』

《聞こえますよ、藤代中尉》

『宜しい。では敵の予測侵攻図をマップに送るわ、有効に活用して』

《ぼ、僕に!?!》

『貴方以外に誰か居て?』

呆れたと言わんばかりに眩き、それから1拍程後に送られて来たマップには丁寧な敵の侵攻ルートやそれに対して此方側が取るべきであろう行動が書き込まれていた。それこそ、僕程度でも分かる様に簡略な物だ。

『今回我々が副司令から受けた任務内容はあくまでもヴァルキリーズの護衛。それ以降は無理をする事は無いわ、死なない程度に戦って』

釘を刺す、と言うよりも警告に近い言葉。

つまりはこの様な場所で死ぬなど馬鹿らしい、だから生きて帰って来いと言う事だろう。やっぱりと言うか、何と言うか。

藤代中尉は言葉に棘があったりするクセに、その言葉に込められている本当の思いは誰よりも暖かくて、優しい。

こんな彼女だからこそ、少佐は今までずっと背中を預けて来たのだろう。

《セレナ・エニックス少尉、任務了解しました!!!》

両腕に装備されていた突撃砲が僕達へと群がろうとしていた戦車級を薙ぎ払い、その足元に居た小型種の肉片が宙を舞う。

飛び跳ねた返り血がスカイブルーの装甲を赤く染めるが、それが固形となるよりも早く機体が跳躍噴射にて空中へと飛ぶ。

《死ぬつもりか、エニックス少尉　　ッ！！》

宗像中尉が叫ぶ。

眼前へと迫っていたのである。う突撃級を捌き、彼女の駆る不知火が此方を狙い撃とうとする光線級の下へ必死に向おうとしていた。

《空へ上がるなんて……無茶です！！》

同じく、風間少尉も。

宗像中尉の道を作る為に、突撃砲と支援砲が敵の肉を食い千切って行く。

だが、だがダメだ。
間に合わない。

《エニックス、　　！！》

避ける。

その言葉よりも先に飛来する光線。

先程とは訳が違う。先程の空中回避はあくまでも、低空での回避。だが今回は上空。狙っている目の数が、先程とは違い過ぎる。

避け切れる筈が無いのだ。
スカイブルーの装甲が溶解し、空中にて爆発・炎上するエニックス機。

それが、彼女達の頭の中に浮かんだシナリオ。

《見える……僕にも……見える……ッ！！》

飛来した光線の帯達を、大きく旋回する事で回避する訳でも無い。張り巡らされた蜘蛛の糸を掻い潜る羽虫の様に、繊細で居て、美しい曲芸がその場に居た敵味方問わずに披露される。しかも、曲芸はそれだけでは終わらない。

空中の回避行動の合間に彼女の放った弾丸が、確実に光線級の数を減らしていった。

1匹、また1匹。

重光線級を撃ち抜けば、その肉が回りの数匹を巻き込んでくれる。

《……あの馬鹿》

彼女と戦った自分だからこそ、彼女の生存に心から安堵していた。アレを倒すのは私だ。宗像美冴だ。

速瀬中尉と違って戦闘狂と言う訳では無いのだが、始めて私は人を敵視した。

そして、心から認めたのだ。

年下の生意気な小娘から、空を舞う自由奔放な燕へと。

《私達も負けては居られませんね、美冴さん》

《フッ……そうだな》

2機の不知火が、空を飛び回る燕の下を綺麗に掃除して行く。

1匹の燕と2人の戦乙女が通った後に残ったのは、積まれた数々の死体のみ。

この戦場にて、新たな英雄の卵達が目覚めようとしていた。

剣崎

戦線は悪くは無い。

奔放に宙を飛び回り、敵を撃つセレナ。

時として豪快に、そして軽快に地の掃除をする宗像と風間。

堅実に、だが確実に死体の山を築き上げて行く伊隅。

何よりも俺の目を引くのは、怒涛の勢いにて敵を切り裂く速瀬の技術だ。

俺に似ている。

だが、何処か違う。

彼女も俺も、どちらも技術は他の面子と比べれば荒削りの筈だ。

だが違うのだ。

何かが違う、絶対的に違いが有り過ぎる。

故にアレではダメだ。

アレでは、この波の様に押し寄せる肉の壁に阻まれて死ぬ。

《悪いな、伊隅。援護させて貰う》

山頂にて待機するだけで終わりそうだった任務だが、どうやら終わらせては貰えないらしい。それが嬉しい訳では無いが、此処まで来れば出ない方が良かったのかも知れん。

どちらにせよ、彼女は此処で失うには惜しい人材の1人。

此処で無駄死にさせる訳にはいかないだろう。

セレナが大方の光線級を片付け終わっていたので、此方も宙へと機体を躍らせる。

巨体と圧倒的な重量にて、怒涛の進撃を見せていた要塞級の背中を両腕にマウントされた突撃砲の一斉射にて剃り落とし、その背中を起点としてもう一度高く飛翔する。

バランスが崩れ、地へと伏せる巨体は取り敢えず放置。

今は、いつの間にか伊隅との距離が離れ、単機となった速瀬の周りに群がる要撃級や突撃級に向けて一切の躊躇い無くトリガーを引き絞る。

《しょ、少佐!?!》

《前に出過ぎだ、伊隅達と歩幅を合わせろ》

自分の周りに居たBETAが突然撃ち抜かれたのだ、驚きもあっただろう。

だが今はそれに「そうですね」などと相槌をしている暇は無いのだ。辺り一面に群がっている敵を殲滅する為に、両腕を広げた姿勢のままトリガーを引く。

360度隙間無く穿たれた弾丸は、容易く肉の装甲を抉り落としている。

《参戦は遅過ぎたか……敵の数も減り始めたな。お前は伊隅達の下に》

《断ります!》

《あ?》

《……折角、少佐の腕を間近で見られる訳ですし。お供しますよ、何処までも》

……戦闘狂はコレだから困る。

呆れ、困惑、そして扱い辛い部下を持つてしまった伊隅に対する同情。

色々な感情が膨れ上がるが、それ等は一度置いておくとする。

《残った要塞級を狩る。足だけは引つ張るな》

《よっしゃ！了解、任せて下さいよー！！》

突撃砲を構え直す速瀬の不知火を横目に、F?型が武器を突撃砲から刀へと変更する。

もう此処まで空を自由に動き回れるのならば、わざわざ遠距離戦を展開しながら戦う必要性も無い。白兵戦にて、速攻で終わらせる。

2機の機体が一気に空へと駆け上り、目下の要塞級へとその刃を向ける。

F?型が擦れ違い様に敵の足を2本ばかり切り落とし、バランスの崩れた要塞級の頭部を速瀬の突撃砲が吹き飛ばす。

それでは絶命しない要塞級の反撃は、戦術機の装甲すら容易に溶かす溶解液。

だが、遅過ぎる。

半ばまで振り上げられた触手を刀が切り裂き、止めと言わんばかりに速瀬機が握る突撃砲の一斉射が要塞級の頭を完全に粉碎して居た。

《残りは、》

《1体!!》

余裕すら見せる速瀬に思わずと言った具合に苦笑を漏らしながら、最後の1匹となった要塞級へと2機の戦術機が急行する。

それからあまり時間を置かず、その場に残っていたBETAの数は激減していた。

後は全て、俺の管轄外である。

此処で何が起ころうとも、流石の俺も手出しは出来ない。

まあ伊隅に限って、此処で何か起こす事は無いとは思っているが。

《セレナ、帰るぞ》

《ふう………了解しました。それじゃ、仲良く帰還しましょう!》

微笑みを浮かべるセレナに釣られて、思わず俺も微笑んでしまう。この笑顔は、人を笑顔にする呪いでも掛かっているのか？ まったく………良い妹分だよ、お前。

《剣崎龍二、任務終了。帰還する》

《セレナ・エニックス、任務終了。帰還します》

千枝はまだ遙のバックアップが残っているのだろうか、帰還は無理か。

あの2人なら上手く彼女達を支えてくれるだろう。

今の俺に出来る事は全て終わらせた。

後は、帰って寝て、未来が良い方向に変わった事を祈るだけ。

それが、俺に出来る最善と言っヤツだろうさ。

68 11月11日 予期された侵攻（後書き）

次回の更新は12月の……8日頃になるでしょうか
あくまで予定ですが、その前までには投稿出来る様に頑張ります

69 11月11日(2) 貴方だけ 私だけ 1人だけ(前書き)

予定よりも早く投稿出来ました

年末に向けて暇が少し無くなるかも知れませんが、なるべく書き続けようと思っています

完結はさせたいですから、やっぱり

剣崎

既に後部座席では夢を見ているのであろうセレナを座らせ、俺はただ呆然と先程までの戦場を空の上から客観的に見直していた。

未だ、銃撃音が止んでいない場はある。

流れ出た敵の血と、それに混ざったオイルの強烈な臭い。

弾が偶然でもそれを掠めれば、思いもよらない場所で起きる巨大な爆発。

その中で、その中ですら、俺は生き残っている。

それが素晴らしいことであり、それが凄まじいことであるのは分かっている。

流石に俺も馬鹿では無い。

戦えば、戦う程に。力の持つ価値や意味も理解出来てくるのだ。

「あと数分もあれば、奴等も全滅ですね」

「……そうだな」

輸送機を操縦するパイロットの軽い調子に何処か虚脱感を覚えながら、戦場で行われているのであろうBETAの捕獲作業に思いを馳

せる。

伊隅ならば問題は無い筈だ。

サポーターとして参加している千枝の存在が、それを更に磐石な物としている。

考えるのは止めよう……

どれだけ何を考えようが、何の意味すら有りはしない。

後はセレナを横浜基地へ送り届け、俺は とある場所へと向えば済む話だ。

「しかし……本気ですか？」

「あの子達、海が嫌いだからな。急いでくれ」

「了解、キャップ」

風を切りながら進む翼の音と稼動するエンジンの音に全てを委ね、静かに眠るセレナの隣へと腰を下ろす。

先程の戦闘で疲れているのだろう。

安らかに眠るその小さな身体にタオルケットを掛けてやり、美しい髪を指で梳かす。

「ゆっくり休めよ、セレナ」

可愛らしい笑顔を携えながら眠るセレナを尻目に、俺も目を瞑る。

願わくは あの頃の楽しい夢を見られる様に、と。

美しい大海原の上を、1機の輸送機がある場所へ向って進んでいた。本来ならば基地へと帰還すべきだろう。

だが、彼にとつては途方も無く気になる事があったのだ。

世界の命運すら握るであろう、ある1人の少年の今後を決める総戦技演習。

不合格、と言うオチは無いだろう。

だが、彼の実力を知るには丁度良い機会でもある。

任務をこなし、未だに疲労が溜まっている身体に鞭を打つのも致し方の無い事だ。

向こうに着けば休暇として扱ってやると夕呼にも言われているのだから。

今は、少しでも体力を回復させる為に眠ろう。

向こうではクリスカが、イーニアが、唯依が、俺に与えられた強制的な休暇を消化している筈である。

俺が登場すれば、ビツクリするだろうか？

イーニアなら、喜んでくれるだろう。

クリスカは、不貞腐れるかも知れない。

唯依は、……如何だろうか？

ああ、でも　それはやっぱり、とっても楽しみだ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

青空を突っ切る様に、無骨な輸送機があたしの頭上を通過する。とは言え、アレは元々此方が頼んだ”荷物”の1つだ。休暇中であるとは言え、まあ此方が頼んだ荷物の運搬なのだから我慢すべきだろう。

輸送機から、パラシュートで誰かが此方へと降下する。

「夕呼、アレは……」

傍にて控えていたまりもが、降下して来る誰かに警戒心を抱く。あたしは別に構えも取っていないので害ある存在では無いと言う事は分かって居るのだろう、だからこそ懐に仕舞っている拳銃には手が伸びていなかった。

「まりも。荷物を持って来て」

「荷物？」

「今降下して来た荷物よ。サツサとしなさい」

不服がアリアリと見えるまりもの了解の敬礼を受け、あたしは傍に置いてあったグラスに口を付ける。が、中は既に空であった。

「面倒くさいわねえ……」

そう言いながらもクーラーボックスの中に冷やしてあるワインを空

「私、聞いてないわよ!？」

「言っていないから、聞いてないのは当然でしょ」

「そんなあゝ……」

膝から崩れる落ちるまりもの隣を抜け、強化装備姿の龍二が巨大なトランクと纏め上げたのであろうパラシュートを持ってあたしの前に立つ。

任務終了直後であると言うのに、その瞳は疲れを全く訴えていなかった。

「俺のお姫様たちは？」

「反対側の海岸よ」

「遊んでいてくれるなら結構。唯依も居るから、何も起こらないだろうな」

苦笑も漏らしながらも、龍二は嬉しそうに海へと視線を向ける。

折角の休日だと言うのに、この男は部下が愛しくて溜まらないのだから。

そう言う意味では、コイツの部下になった者達は世界有数の幸せ者と言える筈だ。

世界屈指の英雄が愛しくて溜まらない部下達。

そして部下達も英雄が愛しくて溜まらないなんて、どれ程に幸せな絵図だろうか。

ホント……羨ましいじゃない。

「さて。俺も休みを堪能させて貰おうかな？」

「あら？てつきり、207の連中が気になるのかと思ったわ」

「止せよ。彼女等は全て神宮寺の担当だ。俺は口を出さないぞ？」

龍二はクーラーボックスの中で冷えていたビールを片手に取り、揺らめく木々が作る木陰にてその身を休ませていた。

疲れを見せては居なかつたとは言え、疲労が無い訳では無いのだから。

ゆったりと流れていく時間。

耳に届く波の音色。

暫くした後、ビールに口を付ける事も無く龍二は静かに眠りに落ちていった。

「まりも」

「何？」

「寝たわよ」

「だ、だから何よ」

「襲うなら今しか無いわよ？」

「夕呼！！」

顔を赤らめながら怒鳴る親友を宥めながら、せめてアイツが幸せな夢を見る事を祈る。

本当に色々と背負い過ぎる馬鹿な男なのだ、龍二は。夢の中だけでも　出来れば、幸せで居て欲しい。

滅多に見る事の無い龍二が浮かべる心からの笑顔。

いつの日か、何の迷いも無く浮かべる事が出来る様に

親友として、あたしはたったそれだけを望む。

神宮寺

寝ていた、彼は静かに。

木の根に背中を預け、何とも気持ち良さそうに眠って居る。

その姿は一つの絵画の様でとても美しい。

今まで見て来た戦場での彼の姿とはまた別の、神々しいとまで感じる美貌。

女性ならば、その美しさに嫉妬したかも知れない。

まだ乾き切っていない綺麗な白髪。

鋭き目付きも、今は閉じられて安らぎすら感じさせている。

お腹の上で祈る様に合わせられた両手。

何かに祈る様な、何かに縋る様な、そんな姿だった。

「……夕呼」

「ん〜？」

「私ね。昔、龍二さんに褒められた事があったのよ」

思い起こすのは過去の記憶。

まだお互いに若かった頃の、淡い記憶。

「龍二くんにとっては何度目かになるか分からない緩やかな実戦。私にとっては、まだ何度もこなしていない厳しい実戦」

BETA 侵攻に対する防衛ラインの守護。

龍二くんは当然の様に最前線。それも、部隊の中核を成す突撃前衛長だ。

まだ若い筈の彼がそこまで上り詰めたのは正直異常だと思う。だが、それだけの実績と実力を持っていたのは誰もが認めていた。

富士教導隊ですら欲しかった、日本の新時代を築き上げるエース。それが、その頃の私達が持っていた認識。

「ブリーフィングが終わって、皆が持ち場に戻って行く。その中に私は彼を見つけたの。無言で無表情。風に吹かれれば飛んで行ってしまいそうなの、そんな様子だった」

無表情　　今から死地に赴くものだから、何かしらの感情は抱く筈なのだ。

ある者は自身を鼓舞する為に気丈に振る舞い、ある者は死にたくは無いと躍起になっている。

そんな中でも彼は何処までも無表情であり、誰よりも無気力だった。

「異質だと思った。異常だとも思った。だって、有り得ないと思わない？もしかしたら今から死ぬかも知れないのに、そんな自分の死にすら関心が無いなんて」

まるで、自分を物の様に扱う彼。

仲間を失ったばかりの私にとっては、それは耐え難い光景だったのは覚えてる。

ただ　彼を殺してはいけない。そう思ったのは、その功績故だったのか、それとも彼の持つカリスマに触れてしまったからなのかは分からなかったが。

「『怖くは無いの？』　自分の持ち場に戻ろうとする彼に、私は聞いたわ」

怖くは無いの？

突撃前衛長と言う大役。

そして、最前線に出る自身に対する死の恐怖。

その大き過ぎるプレッシャー。だが、決して押し潰される事すら許されない。

彼が潰れてしまえば、残って居るのは数々の死。たった1人で、背負うしか無い。

その”強靱過ぎる精神”を、私は恐ろしく思った。

「彼、何て言ったと思う？」

「昔のアイツなら……」別に『なんてところかしら」

「ふふっ、正解」

怖くは無いのか？

その問いに、彼は平然と応じた。「別に」と。
死ぬ事は怖くない。

押し潰される事も怖くない。

平然と、当たり前前の様に、呆れた様に、彼の言葉には色々な感情が含まれていた。

その中には、一切の恐怖など無い。

あるのは……否、感じるのは瞳の奥で燃え滾る熱烈な闘争本能。
若いながらにして、戦う事に憑かれた様な男。

「『余裕だな』って、その後に軽く流されちゃったけどね」

「アイツらしいわねえ。それで？」

「うん。でもね、私が忘れられないのはその後の言葉」

用が無いならば帰ると、背を向けて持ち場へと戻ろうとする彼を見送っている時のこと。

彼は突然、此方を振り返って 笑ったのだ。

先程までの無表情とは違い、感情を灯した優しい微笑み。

お前、凄いな

凄いつて……貴方の方が、私よりもずっと……

ありがと。お前のお蔭で、元気出たよ

彼の放った言葉の意味、私には良く分からなかった。

その後の防衛戦でも彼は当たり前の様に最前線にて多大な功績を上げ、その地位をより盤石な物として行く。
私がした事の意味も、何故元気が出たのかも分からない。

だから、また問うた。

何故元気が出たのか、と。

彼は言う。

英雄などこの世界に居はしない。

世間で英雄と呼ばれる者達は誰かよりも勇敢である必要は無く、誰かよりも優れていなければならぬと言ふ訳では無いのだ。

彼等に必要な物は勇気と、それを少しでも長く保つ為の覚悟。

だから、と彼は続ける。

お前の言葉は俺に勇気をくれた。お前は、俺の恩人だ。

あの時の笑顔を浮かべ、彼は嬉しそうに私の手を握る。

その手は、微かに震えていた。

「ねえ夕呼」

今はただ、静かに眠る龍二くんの頬に触れる。

「何よ」

いつの間に隣に来ていたのか、夕呼も何か思い入れがあるのかも知れない。

彼の寝顔を静かに見詰めていた。

「……譲らないわよ」

「……奪い取るから、好きにきなさい」

断固たる、宣戦布告。

それに対する、余裕の挑発。

お互いにその問答に笑い合い、私達は彼の部下達の到着を待つ事にした。

劍崎

「りゅーじー!!」

「イーニアか。お姉様方に迷惑は掛けていないか？」

胸元に嬉しそうに飛び込んでくる、小さな俺のお姫様。

その後続く、2人の大事なお嬢様。

本当に嬉しそうに俺に抱き付くイーニアを抱き上げながら、此方へと駆け寄ってくる2人のお嬢様に軽く手を振る。

「お前……任務の筈では……!!」

「俺も特別休暇。本当はセレナも連れて来てやりたかったが、疲労でダウンだ」

驚くクリスカに対し、してやった！と舌を出して悪戯っぽく笑う。
子供っぽい仕草にクリスカは呆れるが、やがてその顔にも微笑みが
浮かぶ。

……いつの間にか、コイツも自然に笑える様になりやがって。嬉し
いじゃねえか。」

「お前の分の寝袋は無いぞ？」

「じゃあ、クリスカと一緒に寝ようかな？」

「ふ、ふざけるな！！」

「クリスカ、うれしい？」

「イ、イーニア！？」

顔を真っ赤にして否定するクリスカと、それを見て面白そうに笑う
イーニアの姿。

本来ならば 血の繋がりすら無い赤の他人。

だが、人は時としてそんな事すら感じさせる事無く絆を育む事が出
来る。

凄いと思う。

その強靭な仲間意識と言うか、愛と言えば良いのか、純粹に凄いと
思える。

家族とか、友人とか、恋人とか、色々な形の絆。

俺には何がある？

俺の持っている絆って、何だ？

「なあ……お前、俺に言ったよな？」代わりなんて幾らでも居る”

って」

じゃれ合うクリスマスカーニバル。

その横を通り過ぎようとする唯依に、俺は声を掛けていた。

本当なら、1人にしてやった方が良いのかも知れん。

だが、俺も言っておきたい事があるのだ。

「だったら、お前にとっての俺って……何かの代用品なのか？」

無言だった彼女が、此方を振り向く。

場の雰囲気、変わった気がした。

篋

「誰かがそいつの代用をするなんて出来る訳が無い。俺はそう思うけどさ」

「……」

「お前は如何だ。まだ、自分は誰にも必要とされていないと思っ
っているのか？」

「……私は……」

「迷う事は悪い事じゃ無い。正直、今の俺にも分からない事は腐る程ある」

だから、と。

一拍の間を置いて彼は続けた。満面で、無邪気な笑みを浮かべながら。

「俺と一緒にさ、理由探そうぜ？」

その後の事が良く分からない。

涙で目の前がグチャグチャになって、飛びついた先には彼が居た。仄かに香るお酒の臭い。

身体に染み付いている煙草の臭い。

それら全てが、剣崎龍二を形作る大切なピース。

そんな彼は今、幼子を慰める様に私を抱き締め、頭を優しく撫でてくれる。

この感情が、他の誰かで代用出来る筈が無い。

貴方は私にとって、たった1人だけの存在で、大切に、愛しくて。

「落ち着いた？」

「はい」

良かった、と彼はまた笑う。

先程までの無邪気な笑顔では無く、今度は少しばかり困った様な笑顔。

それに何故と疑問を抱き、そして気付く。

「……いつまでそうしているつもりだ、篁中尉」

「りゅうじに、ギョってしちゃダメ！」

「はあゝ 近頃のガキは大胆ねえ」

「ちゆ、中尉……流石にこの場でその態度は如何かと……」

周りの目を気にせず、抱き付いて居たとは気が付かなかった。
と言うか、気が付く訳も無い。

お、教えてくれても良いじゃないですか……！？
彼に抗議の視線を送っても、軽く流されてしまうのは最早ご愛嬌と
なってしまった。

“ ありがとうございます、龍二さん ”

だから、この言葉は胸に仕舞っておこう。

いつの日か、お互いに笑い合ってそう言い合える日が訪れるまでは。

69 11月11日(2) 貴方だけ 私だけ 1人だけ(後書き)

龍二がフラグを建設した事によって、

・ 神宮寺

・ 香月

・ 唯依

・ クリスカ

・ イーニア

に派生できる様になりました

今回は「武ちゃんの出番でござる」之巻

70 11月11日(3) 疾走 疾風が如く(前書き)

はしるー

はしるー

オレたちー、流れる汗もそのままにー

』 Runner 『おじ

剣崎

陽が沈み掛け、辺りには闇が訪れようとしている。
現在食事を作る唯依達を他所に、俺と夕呼は寝所とは別に用意されたテントにて新潟で戦っていた伊隅達からの報告を聞いていた。

『ヴァルキリーズの損害は皆無。機体の損傷も極僅かに止まっています』

「そう。ご苦労様」

「パーフェクトだ、伊隅」

『感謝の極みです、剣崎少佐』

ヴァルキリーズの連中が無事に任務を終わらせたと言う事だ。

尚且つ、損害も皆無と言うのは実に素晴らしい終わり方をしているとは驚きである。

思わず拍手まで送ってしまう始末だ。

伊隅も肩に背負っていた荷が降りたのだろう、その顔に浮かぶ表情は何処か安らか。

夕呼は……特に変化が無い。

無事に終わる、と言う事すら当たり前の出来事として捉えて居るの
だろう。

何ともまあ、コイツを納得させるのは実に骨が折れる作業だ。

その後は他愛の無い話を伊隅と2、3交わして通信を切った。

向こうも事後処理で忙しい事だろうし、あまり長引かせても悪いと
思ったのだ。

夕呼は特に興味を引く訳でも無く、俺と伊隅の話に耳を傾けていた
程度だった。

その後、外に出る時に隣に夕呼が立っていない事に気付く。

そう言えばアイツは未だに水着姿……この薄ら寒い中を闊歩するの
は些か辛い。

この寒い中でも水着に身を包む夕呼に呆れて、持参して来たコート
を彼女に被せた。

煙草臭い、と文句を言われたが風邪をひかれるよりはマシとその意
見を黙殺して、彼女に 少し大きめだが コートを着せる。

「くっさいわねえ」

「加齢臭とか言わねえだろうな……俺はそんな歳じゃねえぞ」

「煙草臭いのよ、コレ。ったく、人に着せるなら少しは気を使いな
さいよ」

文句を垂れ流す夕呼に如何にも頭が痛い、俺は静まり返った水面
を見詰めながら夕呼と共に歩いていた。月が浮かび上がる海は美麗
であり、それに頬が綻ぶのを感じる。

隣を見れば、珍しく夕呼のヤツも魅入っている様だ。

口をポケーっと開きながら、アホ面を曝していた。

「綺麗だな」

「っ……そう、ね」

俺が声を掛けると現実に戻された様にハツとなり、いつもの鉄仮面を取り繕おうとする為になのだろう、コートの襟元を口元へと手繰り寄せている。

何ともまあ。

いつものコイツからは考えられもしない仕草であろう。

「まあ、だが」

そんな彼女に、俺は不思議と”ある言葉”を言って見なくなつた。

日頃の恨みから来る一種の可愛い悪戯だったのか。

それとも、それとは別の何かだったのか。

俺には判別が付かない。

だが、言わなければならぬ様な気がしたのだ。

まるで運命がそれを急かすかの様に、強く、更に強く、強靱な程に。

「……月よりも、その写し身を映す海よりも。お前の方が綺麗だと思つがね」

ポリポリと頬を搔きながら、なのはご愛嬌。

何故か言っておかなければならぬと思つた故にとつた手段とは言え、2人きりの状況でこんなアホらしい事を抜かす事になるとは思いもしなかつた。

俺の頭の中にある螺子は既に崩壊していると言つ事か。

行くぞ、俺。言い訳の貯蔵は十分か？

「ああ、いや、別に他意は無いが……お前が案外と綺麗だったと言
うか……」

「……アンタねえ、普通プロポーズ以外にそんな言葉使う？」

「つ、使わないが……だから、お前が存外綺麗だったと言って居る
！」

「だから何よ。あたしが綺麗なのは普通でしょ」

「こ、この女……ッ！」

何と言う自己陶醉、何と言う自己美化だろうか。

やはりと言うか、香月夕呼の脳は決定的に破綻していると見て良い。
コイツとの友好関係、友人が包み込んでくれるタイプじゃなきゃ破
砕するだろう。
恐ろしい女である。

「おい、夕呼。おま 「それとも」 「」

言葉を紡ごうとした俺の唇へと夕呼が行き成り指を当て、次の句を
遮る。

何事かと浮かべたクエスチオンマークに反応する事も無く、アイツ
は無表情で静かに呟いた。俺にとって、そしてコイツにとっても意
外な言葉を呟いたのだ。

「あたしと結婚する？」

「結婚？ああ、それは俺に身を固めると言う意味で………？」

上目遣いの彼女から放たれた爆弾の前に、俺は呆然と佇む事しか出来なかった。
予想外の事態が起きると、人間はやはり 弱いようだ。

1275

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

神宮寺

夕食の準備を終わらせて暫くした後、少佐と副司令が2人揃って帰還した。

その際に副司令が少佐のコートを着ていた事が癩に障ったが、此処は大人の対応と言う事で特に言及する事無く流す事にする。

「おかえり、りゅうじ」

「ああ、ただいま」

ポワポワとした笑顔を携えるシエスチナ少尉が駆け寄ると、少佐は難なく彼女を抱き上げて優しい笑みを向ける。愛しき宝を愛でる様に彼女の頬を摩りながらも、彼は何か別の物に注意を払っている様に感じられた。

まるで、何処か遠くへと耳を傾ける様な あの子達の事を案ずる様な。

「演習で使用する筈だった砲台の使用を却下する」

突然の事に私は驚いてしまう。

何故、トーチカの使用を中止するのだろうか。

確かに危険ではあるが、アレは私だけで無く、夕呼も使用には賛成していた。

何よりも彼自身が、突然のアクシデントへの対応を見る事が出来ると肯定的な意見を示していた筈なのに。当然如何して？

「何故ですか、少佐。砲台の使用には少佐も賛成されていたのでは……?」

「時間が無駄になる。サツサと終わらせて、次のカリキュラムに進みたいからな」

次のカリキュラム……即ち、戦術機の操作。

しかし、それだけの理由で砲台の使用を止める様に進言したと言うのだろうか？

「……その提案、呑むわ」

「副司令!？」

そして突然副司令までもがその手を裏返す

別段不思議がる事も無く、「アンタが言うのならそれの良い」と言わんばかりに砲台の使用中止を呑んでいた。

夕呼がいとも容易くこの条件を呑むと言う事は、何かしらの理由があるのだろうか。

“私だけ”が分からない、理由が。

「丁度良いわね。レドーム破壊のついでに、アイツ等の様子でも見て来たら?」

「元々そのつもりだ。夕飯を味わってから、俺は演習該当地に向かう」

遠隔操作で如何にでもなるレドームの停止を、わざわざ自分から赴いて破壊する意味。

分からない。

知らなくても良い筈の事であるのに、彼が関わると知りたいたいと思ってしまう。

それは贅沢なのだろうか？

それとも、当たり前前の事なのだろうか？

「如何かしたのか、神宮寺」

「え？」

「いや、急に潮らしくなっちゃったから……不服があるなら遠慮せず言ってくれ」

「そ、そんな！不服など有りません！」

「本当に？」

「本当の事です！」

そっか、と彼はちょっと悲しそうな顔をしながら私に背を向ける。

大きくて、小さな背中。

数々の戦地を渡り歩き、数々の敵を薙ぎ倒して来た勇猛果敢な英雄の背中。

何処か繊細で、硝子玉の様に割れ易い壊れ物の様な脆くて儂い背中。昔から何も変わらない、龍二くんの背中。

「……龍二くん」

「ん？」

そんな背中を見せられて、思わず声を掛けてしまっ。

本来ならば上官に対して使うべきでは無い言葉遣いだと言っのに、気付けない。

気付く事が出来なかった。

「昔から……何も変わらないね」

「若さの秘訣は毎日の運動と適度な睡眠だぜ、” మరి ”」

私を名前で呼ぶって事は、今をプライベートな時間として
いるってこと。

先程までのレドーム云々の時とは違う、気さくな笑顔がそこにはあ
った。

「そう言う事じゃ無いけど……うん、そう言う所も変わってないよ」

「何かちよつと心外。いつまでもガキって事が、それ？」

不服そうに此方に拗ねた視線を送る彼に、反射的に笑ってしまう。
笑ってしまえば、益々彼は拗ねてしまおうと言うのに。

「そうですよお。どうせ俺はガキですよ〜っ」と

「違つてば、そう言う事じゃなくてね。昔から何一つ変わらない
から、龍二くんはいつまでも龍二くんらしいって言うか……うん、
龍二君は今も龍二くんなの」

「意味が分からん……病院行け」

「ひ、酷い！」

ケラケラと笑いながら、お返したと言わんばかりに毒舌を振るう彼。
彼の名前は剣崎龍二、同年齢の男の子。

周りからは部類の天才として扱われ、英雄として称えられる生きた伝説。
私の

「まりもおく、そろそろ夕飯作つてよ」

「夕呼……分かったわよ、今行く！」

夕呼に夕飯の用意を急かされ、涙目になりながらも彼女の下へと向う私の後を追いながら、龍二くんも何処か懐かしそうに私を見詰めていた。

「変わらないのはお前等の友情じゃないのか？なあまりも、夕呼」

一人で何事か呟くと、嬉々として夕食を食べるが為に食事の用意された場へと向う。

今日の彼は非番。

1日を接待する側では無く、接待される側として使う事を選んだのだろう。

「期待するぜ、まりも！」

朗らかな笑顔を携えて、彼は楽しそうに笑っていた。

その後、食事が終わったと同時に彼の姿を見た者は誰一人として居ない。

シエスチナ少尉は少佐が居なくなった事で瞳に大粒の涙を溜めていたが、ビャーチェノワ少尉と篁中尉による決死の慰めによって涙を引っ込める。

とは言え、いつまでそのダムが涙を止めていてくれるかは分からない。

何とかダムが決壊するまでに少佐が帰って来なければ、彼は今晚シエスチナ少尉と共に2人きりで眠る事になるだろう。

……それだけは、阻止したい。

奇しくも、私の胸の内にて咳かれた声はこの場に居るシエスチナ少尉以外の女性達による心の声の代弁だとは 分かる筈も無い。

白銀

一方、無人島にて命懸けの演習に身を投じていた白銀・鎧衣組。拠点を爆破し、現在は皆と合流する為に合流地点へと急いでいる状況だった。

のだが

（誰かに追われている？）

美琴は未だに気付いていないが、後ろから誰かに追われている感覚が確かにした。

それも凄まじい速度だ。

人間では考えられない様な、有り得ない加速力。

コレは、まさか……木を伝って此方に接近しているのだろうか？

そんな俺達の頭上を、影が通り過ぎる。

「タケル？」

何かを不審に思ったのか、美琴が此方を振り向いて訝しげな視線を向ける。

もしかすれば気付いているのか？

いや、美琴の性格だったならそれを俺に伝えてくれる筈だ。

ならばコレは……直感、と言った具合だろうか。

「いや、何でも無い」

そんな視線を寧ろ払い除ける様に、オレは笑いながら先を急ぐ為に腰ほどまである草を掻き分けながら先へと進む。

他の奴等も、今頃は拠点を破壊している筈だ。

俺達だって余裕がある訳では無いのだから、合流地点に急がなければならぬ。

それを分かっているからこそ、美琴も言及せずにオレの後ろから付いて来てくれる。

「よっ。調子は如何だ？」

「うわあああっ?!?!?!?!?!?!?!?!」

そんな健気な美琴の耳元に、本来ならば聞こえる筈の無い第三者の声が響く。

その声はオレにも届いており、オレ達が声の主に見線を送るのはほぼ同時だった。

「しよ、少佐……！」

木の枝にぶら下がり、さも当然の様に腕を組みながら此方を見下ろすのは剣崎少佐。

その身に纏うのは戦術機に搭乗する際に使用する強化装備、そして肩に掛けるのは狙撃用のライフルであるドラグノフ狙撃銃。

耐久度的にも安心出来るそれは、所々が少佐用にカスタマイズされているみたいだ。

しかし、本来ならば訓練兵だけで行われる実習である筈なのに……何故、佐官クラスの間人がこの無人島で動いているのだろうか。

もしかして、俺の知らない何かがあるのか？

一瞬そんな事を思ってしまったが、俺の内心を見透かした様に少佐は言葉を紡ぐ。

「この先にあるトラップだが、俺が直接破壊する事になっちまってね……そのオマケで、お前達の様子も見に来たと言う訳だ」

トラップ 多分、砲台の事を言って居るのだろう。

美琴も居る事があってか、少佐はその部分を不鮮明にしているのは正直助かった。

「……破壊の指示は夕呼先生が？」

「いや、俺だ。お前達の実力からして、アレは意味を成さない。早く実機訓練に移りたいだろう？お前も」

軽やかにウイंकを返す少佐だが、オレにとっては感謝しても仕切れない事だ。

僅かな時間短縮とは言え、実機訓練に移行する為に手間を省いてくれるとは思いつきもなかった。この少佐の口ぶりから考えるに、シミュレーター訓練等も優先的にさせて貰える可能性だって有る。

「ありがとうございます、少佐……マジで感謝しても仕切れないです」

「気にするな、お前達の有用性は俺が保証してやる」

さも当然だ、と言わんばかりの態度。

夕呼先生が絶対的な信頼を寄せる稀有な存在であると言う事が証明しては居たが、この人はオレじゃ計り知れない程に優秀だ。

無人島内を縦横無尽に駆け巡る体力、

単独で任務を遂行する事が可能な技術力、

部下達から向けられる絶対的な信頼、

そして部隊を統率する為に必要不可欠なカリスマは圧倒的。

今更だが、この人が味方で居てくれる事が心強いと思える。

何よりも”男”であると言うのが、オレにとっては気が楽になる要因なのかも知れない。

周りが女だらけの中、気を許せる男が居てくれると言うのは非常に心強い。

「あ、あのお〜」

そんなオレの思いを打ち消す様に、恐る恐ると言った具合に美琴が手を上げた。

何やら、その視線は少佐へと向けられている。

「おつと失敬。左近さんの娘さんを忘れちゃったな」

「美琴、この人は」

オレのフォローよりも先に、ズガツと前に一步踏み出す美琴。

その目は何か珍しい物を見たかの様に、キラキラと輝いていた。

「剣崎龍二少佐、ですよね……？」

「美琴、知り合いか？」

「日本国民なら皆が知っている大英雄だよ！

麒麟児、雷光、日ノ本の武者、龍剣、黒獅子、たくさんの肩書きと
凄まじい功績。

斯衛や富士教導隊ですら喉から手が出る程に欲しい逸材なのに、本人は何故か全部それを一蹴しているらしくて、誰もその真意を知らない。

まさに日本が誇る、世界有数の伝説クラスの英雄……」

一気に捲くし立てる美琴の剣幕に驚きながらも、少佐がそれ程までに凄まじい戦歴を残して来ていたと言う事に思わず耳を疑ってしま
う。

温厚、温和、無頓着、無気力を絵に描いた様な彼が伝説級の英雄。

やはり、ピンとは来なかった。

「あそこの規律は堅苦しいからな。俺には、やっぱり国連が似合う」

ケラケラと笑う少佐とは別に、美琴はまるで人気のアイドル歌手にでも会ったファンの様に身体全体でその嬉しさを表現していた。2本の触覚が、激しく揺れている。

まるで反発する磁石……

引っ付く事の無い、+極と+極の様に。

ビヨーン、ビヨーンと盛大に揺れているのだ。正直、何か危ない気がする。

「はじめまして！あの、尊敬しています！！」

「ありがと、左近さんの娘さん。えっと……美琴ちゃん、だっけ」

「はい！」

いつもとは違う、人の話を聞く美琴。

何だか珍しい物を見る事が出来たと感慨深く思っべきなのか、それとも今は少佐の事にただ呆然とし続ければ良いのか。

オレは何をする事も出来ず、ただ静かに2人の成り行きを見守るしか無かった。

「こんな面倒な訓練はササッと終わらせて、実機訓練に移行してくれよ？実機での教導官は神宮寺軍曹から俺にチェンジになったからさ」

「ぼ、ぼく達が剣崎少佐に操縦を教えて貰えるなんて……ッ！」

「お前達なら、2日も掛からずに総戦技演習を終わらせるだろうな。頑張ってくれ」

「ありがとっございます！！」

「あ、ありがとっございます。その……本当に、何から何まで色々……」

「お互い様だ。お前も頑張れよ？」色々」と

舌を出し、悪戯っぽく笑った少佐は出て来た時とは逆に木の枝から身を翻し、また木々を渡ってレドームの破壊へ向って行ってしまった。

動き回る嵐の様な人である。

「……なあ、美琴」

「何、タケル？」

「オレさ……あの人みたいに、なりてえな」

今は去った嵐の余韻に浸りながら、オレは今までに体験した出来事から少佐の事を少しばかり考えてみる。

夕呼先生の親友であり、
自身も有名な英雄であり、
霞とも仲が良くて、
結構デンジャラスで、アグレッシブな大先輩。

「やっぱ……無理かなあ」

「そんなこと無いよ！一緒に頑張ろう、タケル！」

何処までもポジティブな美琴の言葉に思わず苦笑を漏らしながら、ただ草を掻き分ける。

取り敢えず 冥夜達と合流しなきゃ始まらないか。

「こりゃ、他の連中とも顔合わせしておくか」

木々の間を飛び回りながら、剣崎龍二は独り言を呟く。

先程は左近さんの娘さん。

残っているのは珠瀬事務次官の娘、榊首相の娘、彩峰中将の娘。
そして

「……太陽と月、か」

あの優しい少女の、大切な妹君。俺にとっての、大切な宝。

だからこそバカバカしいと思える。

日の光から彼女を遠ざける事が。

たった1人の家族から、その身を遠ざける事が。

「……くだらねえ」

吐き捨てる様に呟きながらも、獅子の足は止まる事だけは無かった。

闇夜を、1匹の獅子が駆け抜けている。

目指す先には、光か闇か。

70 11月11日(3) 疾走 疾風が如く(後書き)

年末……

それはある意味では『魔法の言葉』であり『死の呪文』でもある

私にとっては十中八九ザキです

まあ年さえ跨いでしまえば、こっちのものですがね！

番外 〽幸せクリスマス〽 (前書き)

これはオルタでは無く、エクストラなマブラヴ世界

人々が賑わう街

手を握るカップル達

そんな中で仕事に明け暮れる俺。

キヤツキヤウフフ……爆発してしまえば良い

剣崎龍二より

番外 く幸せクリスマスく

世間ではクリスマスであろう12月25日。

周りではカップルがキャツキャウフフと夜の街を闊歩しながら、食べ歩きでもしやがるのだらう、見せ付けやがって。爆発すれば良いのに。

そして12月ともなれば、3年の連中が大学や就職を決める忙しい時期。

受け持った3年のガキ共の願書や書類を纏める為に、俺は必死にパソコンと向き合いながらデータを入力していた。

右側には既に空になったコーヒーマシンのカップと昼飯代わりに食べたカツプラーメン。

左側には終わりがけの書類の束。

あと数分もパソコンと向かい合えば、無事に仕事も終了。

俺も夜の街を闊歩出来る訳だが……

「相手が居ないのに、意味がねえ」

カチツ。

エンターのキーを押す音だけが、虚しく職員室に響く。

夕呼も、まりもも、千枝も、今年は女だけのクリスマスパーティーだか何とか。

お蔭で俺は弾き者で、今も1人寂しく仕事をしているのだから。生徒と一緒に楽しいクリスマスなんて送る気にもなりやしない。

家に帰れば母さんが居るが、あの人と共に何か行事を過ごして楽しかった試しが無い。

やはり、何処かの店で1人寂しく飲むべきなのだ。

何とも寂しい、1人だけのクリスマスである。

幸せクリスマス

空は少しだけ赤みを増して、俺の上にて悠々自適に浮かび続ける。
今の俺の心象風景はこの夕空に等しい物だろう。虚しさとか、哀しさとか、そういった物を無理矢理に一纏めにした感じなどは感嘆すら覚えるレベルである。

煙草を銜えながら、夕空に染められた町並みを見て歩く。
歩き煙草は犯罪？

硬い事言っなよ、1人寂しくクリスマスを過ごす俺にも愛の手を寄せ。
越せ。

「ケーキ如何ですか？」

店先にて赤い爺サンタクロースの格好をしているお嬢さん。

スラッと伸びた足に視線が釘付けになりそうだが、そんな事をすれば痴漢容疑で捕まり掛けないのでパス。一瞬見て一瞬で目を離す。
よしっ、脳に刻み込んだぞ。

そんなこんなで、現在俺はショッピングモールにて買い物の中である。

誰かに送る訳でも無く、ただ自分へのご褒美を選ぶ為の買い物。このクリスマスと言う時期にそれは、凄く寂しく感じる。

いつもならば背中で語る良い兄ちゃんとか言われるのに、今日の俺の背中では哀愁を感じさせる廃れた背中だろうな、畜生。

「良いなあ、この包丁。まな板ごと切れるなんて画期的だね。何かを炒める時はまな板ごと炒めて木の風味をプラスしろ！つつう事か？ハハッ」

「おつ。この圧力釜はパチンコ球を入れても平気、と？こりゃ子供の悪戯に対抗出来て素晴らしいですな。しかし今時、そんな悪戯する子供が居るのかよ」

「ん？このフライパン……パンはパンでも食べられない。そりや当たり前だ！」

1人寂しく、自分にノリ・ツッコミ。

周りにお客さんが居なかつた事が幸いしたが、下手をすればその場のノリと勢いで警察へと通報されかねないので実に良かった。

クリスマスに教師が逮捕なんて、笑い話にもなりやしないだろう。

特に俺の場合は、夕呼からの徹底した虐めが待っているから。

調理器具のコーナーを抜け、次に入るのはスポーツ用品店。

特に入用の物は無いのだが、こつも暇だと立ち寄ってみたくもなる。

徐に、俺は丁寧に並べられた商品棚へと足を向けていた。

そんな龍二を見詰める2つの影。

銀色の髪を輝かせる少女達

クリスカ・ビヤーチエノワとイーニア・シエスチナの2名である。

クリスマス仕様、と言う事なのか。

白木の制服では無く、私服に身を包んでいる時点で周囲からの視線を釘付けにする。

とは言え、龍二も魅力と言う点では彼女達に負けては居なかった。白髪と黒いスーツ姿でショッピングモールを歩く、その姿。

顔は整って居るので女性達からの受けは良く、男性からもそのスラッとしていて尚且つスーツすら着こなしている姿に感嘆を覚えた者は多い。

とは言え、歩き煙草をしていたので誰も釘付けとまではいかなかったが。

「クリスカ」

そんな中、イーニアが静かに口を開く。

身体がウズウズと動いており、今か今かとその瞬間を待っている様にも見えた。

「な、何？イーニア」

対するクリスカは何処か自信が無さ気。

いつもの彼女から考えれば有り得ないと一蹴するのだが、如何にも彼女は”ある人物”が絡む事柄だと少しばかり臆病になる気がある。その人物が誰であるか、までは言及しないで置くが。

「どうして、りゅうじのところに行かないの？」

「そ、それは……」

イーニアから直球で尋ねられた質問に、クリスカは言葉に詰まる。確かに、本来ならばイーニアは彼の胸に飛び込み、優しく頭を撫でて貰うのが定石の筈だった。だが、今回はそれに”待て”の命令が入っている。

その命令を出したのが、他ならぬクリスカ本人だ。

「……りゅうじといっしょにいたいよ」

切なげに、クリスカの服の袖を掴むイーニアの手を握り返し、彼女が持ちえる最大限の笑顔イーニアへと向けた。本来ならばこうなってしまう前に彼が 龍二がイーニアの手を握り返して笑うのに何処か、この状況ですら寂しさを感じてしまう。彼が傍に居ない、と言うだけなのに。

「……あと少し。少しだけだからね、イーニア」

外国人、と言うだけで何処か敬遠されてしまった彼女等2人。

そんな彼女達に教師として教鞭を振るうだけで無く、友人作りの切欠まで作ったのは他ならぬ剣崎龍二と言う教師だった。

それから、少しずつ増えてきている友人。

同じクラスだけで無く、別のクラスにも友人と呼べる人たちが増え始めている現状。

全て、彼が居るからこそある現在。

だからこそ 最大現の礼を返さなければならぬ。
大丈夫。協力者は居る、私の”友人”達が居る。
だから大丈夫。

今は、これから起こるであろう事に思考を向けてしまおう。
あと少し。

あと少しの辛抱で、私はきつと 報われる。

「いらつしゃいませ」

店員から浴びせられる気の無い挨拶。

人の顔すら見ないで告げられる挨拶は相手に対する威嚇行動なのか、それとも早く帰れと急かす警告の一種なのか。まあ、今の俺にとつては如何でも良い事だったが。

部活動に勤しむ学生ならば御用達の巨大なスポーツ用品店。

品揃えも馬鹿みたいに多く、その商品一つ一つが客に対して威嚇と言つ名の販売促進効果を叩き付けている様にも感じられてしまう。

とは言え元々買物に来た訳でも無く、スポーツなんて物から既に身が遠ざかっている俺にとっては魅力的な物など何一つも無い。

強いて挙げるとすれば運動靴程度だが、俺がコレを買って果たして履くのか如何か……

「履かないな、絶対」

自分の考えを鼻で一蹴し、店の出口へと向う。

「ありがとうございましたー」

入る時よりも威勢の良い、今時の若者からの挨拶。

既に視線など此方には無く、店員の態度の移り変わりに時代の変化を感じてしまった。

こんな所で時代の変化を感じるな、と笑うかも知れない。

だが、店先で婆ちゃんが「また来てね」と笑顔で手を振るう姿と、先程の様に人様の顔を見ない「ありがとうございました」では有り難味が違う。

その内、近所の駄菓子屋にでも顔を出そう。

そう決心する一幕でありました。はい、おしまい。

……終われるかよ。

まだ1日は終わっちゃいねえのに、此処で終わらせるつもりか？
まだだ、まだ終わらんよ。

「しかし、やる事が無いのも事実……さて……如何すべきか」

考えるまでも無く、同僚達とでも飲みに行けば良いのだが妻子持ちの奴も居る。

それ以外の奴等で召集を掛けるとなると、何とも虚しい場が出来上がる。

人生溢れ組、みたいな感じだ。

それでは虚しいだけだし、何よりも俺が耐えられないのでパス。
だったら如何するか。

決まっているだろう、ならば

「帰って寝る」

風呂にでも入って、この1日を何も無い日としてスルーしちまえば

こっちの物だ。

明日余韻を残す馬鹿共にも制裁の一撃を加えてやるのか？
いや、それともそんな奴等など相手にせず1人寂しくしてやるのか？

どちらにせよ、もう帰るしかあるまい。

家に帰れば母さんが居る訳だし、この歳になっても親子揃って寂しくケーキでも突き合つとするか……

ともなれば、ケーキを買って帰るべきだな。

電話でも掛けて何が食いたいのか確認を

【メール1通：母さん より】

……

噂をすれば、なのだが。

如何にも嫌な予感しかしない。

こう言うタイミングで来るメールなど、如何見ても俺への追い討ちに他ならない。

つまり、このメールは読むべきでは無い？

いや、待て。

もしかすれば違つかも知れない。もっと真つ当かも知れないじゃないか。

落ち着け、剣崎龍二。

素数を数えて落ち着け……あれ？1つて素数だっけ？

「ええいつ！ままよッ！！」

決定ボタンをクリック。

開かれるメール。

その文章は

『龍二へ。巖谷さん達と飲み会に行つて来ます』

「ちくしよおおおおおおおおおおおおおつ！！！！！！」

世界にすら拒絶された様な感覚。

実は君、世界からも弾かれ者でした。ハイ、残念　みたいな感覚。つまり何か？

1人寂しくクリスマスを送りやがれ！コノヤローと言う意味か？
つうかそうだ、可笑い！変だ！

俺達は仏教徒だろう！？

キリシタンでも無いのにクリスマスにお祝いつて可かしい！

仏崇めるよ、コノヤロー！カップル？爆発しやがれ、ド畜生が！

「……………帰ろう」

1人寂しく帰路を辿る可哀想な中年男性の背中。

しかして、彼は母より送られたメールの最後の文に目を通していなかった。

『それから、家には唯依ちゃんが居ます。手え出すなよ？』

神は、案外と彼に優しいのかも知れない。

玄関を開けると香る、良い匂い。

香ばしい肉の香り。スパイシーなスパイスの香り。甘ったるいチョコ

この香り。

だが、有り得無い。

有り得る筈が無い。

何故誰も居ない筈の部屋からそんな香りが漂い、

何故誰も居ない筈の部屋から光が漏れているのか。

有り得ない。

有り得ないが、此処でウジウジとしていても仕方が無い。

と言う訳で、取り敢えずは

「ただいまー」

元気な挨拶をブチ込んでみる。

特別に慌てた様子も無く、居間からトテトテと此方へと誰かが歩いて来る足音だけが聞こえる。

「おかえりなさい、龍二さん」

そこに居まわすは天女。

エプロンを身に付けた天女はこれまた、見た事の無い笑顔で此方に微笑み掛ける。

「……で、天女が降臨なされた！ああ神よ、貴方は俺を見捨てては居なかった！」

次いで、俺の発狂。

1人寂しく送る筈だったクリスマスに差し伸べられたのはまさしく愛の手。

玄関先にて呆然と固まる唯依すら放って置き、俺はただ只管に彼女へ頭を下げ続けた。敬わなければ、称えなければ、歓迎しなければ、

感謝しなければ。頭の中に浮かんだ言葉を全て詰め込んだ「ありがたや」コール。
それが終わるまで、数分の時間を浪費する事となる。

「しかし、まさか唯依が来るとは……男は居ないのか？男」

「い、居ません！」

「うへえ〜。今時男の1人も連れて歩かないとは、古風だねえ」

居間のテーブルの上に所狭し、と並べられた料理に舌鼓を打ちながら唯依と軽い世間話。

もう直ぐ3年も終わると言うのに、男の1人も作らない彼女に憧れすら抱く。

こっちは出会いに飢えていると言うのに、自ら出会いを切り捨てるとは素晴らしい。

もうね、感動とか通り過ぎて尊敬だ。

今度からは唯依お嬢様とか呼ぼうかな？

俺がスーツにサングラスでも付けて傍に居れば、周りも必然的にこの子を極道の娘っぽく見るのだろうか？どちらにせよ、冗談ではあるが。

「しかしまあ……何と言うか、凄い量だな。この量は食べ切れんぞ」

「心配しないで下さい。友人を呼んで有りますから」

「友人？タリサとか？」

「いえ、どうしてもお礼がしたいと言う子が居まして……あっ、そろそろです」

持っていた携帯にて時刻を確認した唯依はトテトテと玄関先に移動する。

その後ろ姿を見て、生徒であろう彼女に『嫁に欲しいなあ』なんて思っちまったのは此処だけの秘密である。

ピンポン

玄関から聞こえるチャイム音。

誰かが到着した事を知らせるそれは、俺にとってはちょっとしたサプライズだ。

一体誰が俺に礼を言いに来るのか、非常に気になる。

……いや、でも、俺って何かした？

「今開け　ツ、貴方は！？」

玄関が開くと同時に、何やら凄まじい轟音。

扉を”開く”と言うよりも”壊す”と形容した方が良い音が耳に届き、俺の不幸がやはり終焉を迎えていなかった事を知る。

神よ、聞かせてくれ。

俺が何かしたのだろうか？

「いけない……ッ！龍二さん、伏せて！！」

玄関から響く、唯依の悲鳴の様な怒鳴り声。

しかして急に人間、動く事など出来る筈も無い。

居間に飛び込んで来た”何か”は俺の頭を強く、強く、踏み砕く。ゴキヤリ、と嫌な音が辺りに響く。

「……………死んだか？」

首の上に立つ少女。

セレナ・エニックスはまるでゴミを見下すかの様に、俺へと視線を向けていた。

「……………いや、死んでねえ」

「ふつ。やはり聖夜の魔力は強かと思た！全身全霊で貴方の記憶を打ち砕かねばならないようです、せんせー！大丈夫、良く頭とかに衝撃与えると記憶って飛ぶでしょ？

あの原理で行きますから！」

「天文学的数値な気がするよ、俺が都合良く記憶を忘れる事は。それまでに頭の中身が外に出ない確証はあるのだろうか？」

「キエエエエ！クリスマスにイチャイチャする奴は、皆死ねえ

「！！」

奇声と共に振り上げられた足。

この現状では諦めるしかあるまいと瞳を閉じ、己の運命を受け入れる。

スタンプがヒットするまでは1秒も掛からない。

コンマとか、そんな世界だ。

だから人にはそれを止められない。

特に被害者になるのであるう俺には、絶対に無理。

それを止められるとすれば

「ンゴッ!？」

例えば、飛来する物体とか。
そんな類だけだと思っ。

手から離れた”それ”は真っ直ぐに馬鹿の頭を射抜き、馬鹿を床へと這い蹲らせる。

その隙に唯依が躊躇い無く馬鹿を縛り上げ、床に転がる龍二を抱き起こした。

「龍二さん、龍二さん!？」

「心配無用。少しばかり首を痛めただけ。セレナの悪戯だよ、悪戯」

「セレナ!今直ぐ龍二さんに謝れ、今直ぐに!!」

「いや!」

「ッ……お前と言う奴は、大体」

長くなるのであろう説教を開始する唯依と、唇を尖らせてそれを右から左へと受け流すセレナの図。学校でも良く見る風景だからこそ、呆れもせずに私は彼の前へと歩を進める事が出来た。

「クリスカ……イーニアも一緒か」

「メリークリスマス、りゅうじ」

「ああ、メリークリスマス」

先程の光景を目にして居たからこそ、飛び付くとまでは行かずとも腰に両手を回して抱き付くイーニアと、そんな彼女の頭を優しく撫でる龍二。

恒例となった、2人の図式である。

「……………メリー、クリスマス」

「メリークリスマス、クリスカ」

そして私の挨拶にも笑みを携えて答える龍二。
私の気持ちの変化になど気付く事も無く、当たり前前の挨拶の一環として受け流す。

ただ今日は、今日だけはそれではダメなのだ。

先程セレナの暴動を止める為に投げてしまった物は、私の

「りゅうじ」

「ん？どうしたよ」

「はい」

「箱？箱が、如何かしたのか？」

「クリスカの、だいじなもの」

そんな私の思いを汲み取って、イーニアは静かに呟く。
箱を取って、と。

並々ならぬ彼女の言葉に秘められた気持ちに気づき、龍二は静かに
少しばかり変形してしまった箱を手を取った。

セレナの頭部に直撃して、少しばかり歪ではあるが。
それでも、包装は小奇麗だった。

「ほら」

「ッ……」

歪となった箱を渡され、身体がピクリと反応する。

「どうした？」

「その箱は……お前に、開けて欲しい……」

特別、彼は私の事を怪しがる様な事はしなかった。

ただいつも通り、言われた通りに少し潰れた箱の包装を丁寧に、
1
つずつ取って行く。

まるで壊れ物を扱う様に。

まるで大切な物を扱う様に。

「イヤリング？」

「……そ、その……礼、がしたいと……思っただけで……」

周りを見れば、イーニアが微笑んでいる。

セレナは少し意地悪な笑みを携えていて、

唯依は拗ねた様に唇を尖らせていた。

龍二は 箱の中に入っていたカードを見て、静かに笑う。

「俺も、同じ気持ちだ」

そして少年の様な笑みを浮かべると、私の頬に触れた。
温かい。

人の温もりを、直接感じるこの瞬間。

報われた。

私は、確かに報われていた。

ポストカードには、短く一文

とだけ。

番外 〱 幸せクリスマス〱 (後書き)

今年最後の更新となるかも知れないものが外伝とは……

本編はもう少しお待ち下さい

現在、チヨクチヨクと書き足しております故に

71 11月11日(4) 突き詰める魂(前書き)

あけましておめでとございます

去年の6月頃(?)から始まりましたMuv-Luv Condition of human
こんな駄文ですが、

読んで頂ける方が居るとい事が私にとっては嬉しい事です

剣崎

木々の間から見えるレドームの一部を狙撃する為に、木の上に陣取る。

風の流れを感じて、今ならば問題無く狙撃出来ると判断すると、背負っていたドラグノフに弾丸を装填する。多少威力が減衰しようが関係無くレドームをブチ抜ける距離だ、此処ならば問題無く行動出来ると確信出来る。
ならば、後は行動すれば何の問題も無い。

「ふう」

引き金を握る指に、力が籠る。

俺の周りを取り囲む空気を阻害し、今感じるのは狙撃対象との距離感のみ。

スコープから見える対象物は小さく、
それでも 俺ならば問題無く撃ち抜ける距離ではある。

「……任務完了だ。夕呼、他の連中にも顔見せをするが、問題無いな？」

インカムに砲台の無力化を伝えると、ノイズ混じりに夕呼の声が返

つて来る。

向こうは今頃、就寝の準備でもしているのだろうか？

それとも酒でも飲んで、団欒タイムにでも突っ込んでいるのか。どちらにせよ、今の俺にはあまり関係の無い事ではある。

『問題は無いけど、アンタは良いの？』“気難しい子”が居るわよ』

「何れは当たる問題だ、気にもならない。それに」

そこで言葉を区切り、少しばかり懐かしい面を思い返す。

民を愛し、裏切り者と罵られた1人の英雄の背。

彼は俺よりも余りある程に英雄だった。

ただ、愛した民が彼を裏切り、彼は不名誉な栄冠を拝する事になっただけ。

例え、それで誰かが傷付いてしまったとしても。

俺は彼の行いを肯定する。

俺には出来ない事を行った1人の英雄を、全力で肯定させて貰う。

だからこそ死ねない。

俺は死ねない。

この命が背負った罪と願い、全てを果たすまでは死んでやる訳にはいかない。

「あの人の娘なら分かってくれる筈だ。いや、理解しなければなら
ない」

彩峰萩閣。

銃殺刑となった、哀れな英雄。

死に際に此方を見詰めた瞳に、俺は今でも揺るがされる。

銃口を見詰めるでも無く、
罵倒する周りの連中も見詰めるでも無く、
彼はただ、俺に視線を向けていた。”若虎”だった、未熟だった俺
の瞳を見て。
笑ったのだ。

“信念だけは、曲げなかった”と。

“ 剣崎くん ”

“ 何ですか、中将 ”

喫煙室だったか。

それとも、演習場だったか。

若造と歴戦の勇士が2人だけとなったのは、何処だったのだろうか。
煙草を啜えた2人の、他愛の無い話。
それは人の死について。

“ 人は、いつ死ぬのかな ”

“ ……己の意思を曲げ、信念すら裏切った時にこそ。人は、死ぬと
思います ”

“ 人は強くは無い。君は信念を曲げず、生きて行く事が出来るのか
？ ”

“ 生きます。自分は 剣崎の長男坊ですから ”

盛大に笑う中將と、思わず苦笑すら漏らしてしまう俺。

“私も……君の様に生きたいな”

最後に残した、中將の言葉。

アレは今でも俺の胸に深く、強く、刻み込まれている。

俺みたいな生き方は誰にでも出来る事では無い。

だからこそ、俺は絶対に自分の信念だけは裏切らない。

真っ直ぐに生き抜いて、戦って、全てを終わらせて

「……俺は、彼女にだけは恥じて欲しく無い。父親の偉大な背中を」

心すら閉ざした、哀れな少女に笑顔を与える。

それが俺の背負った願いの1つ。

それは途轍も無く、重く、切ない願い。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

珠瀬

雑木林を抜けた先、そこに本来ならば有る筈の無い人影があった。
気に寄り掛かり、待ち人を待つかの様に煙草を嗜むその姿。

基地内で幾度か顔を合わせた事がある　　とは言え、喋った事などある筈も無いが
英雄と呼ばれる衛士、剣崎龍一。

「案外と遅かったな。何処かで手間取ったのか？」

向こうは此方に気づくと、啜っていた煙草を揉み消して笑顔を向ける。

この場では浮いている強化装備と背中に背負ったドラグノフ狙撃銃。何かの任務を終わらせた後の様な、そんな姿。

とは言え、私が気軽に話し掛ける事の出来る相手じゃ無い。言葉を口に出そうとしても、

「はわ、はわわ!？」

としか出て来なかった。

「落ち着け。別に、取って食いやしねえさ」

ケラケラと笑った少佐が次いで視線を向けるのは、私の後ろ。

私の次に雑木林から足を踏み出した、慧ちゃんの方だった。まるで懐かしい人を見る様に、頬を綻ばせている。

対しての慧ちゃんはまだで信じられないと言う様に目を見開いて、そして少佐の名前を確認する様に呟いていた。

憎悪すら、感じさせる勢いで。

「背、伸びたか？」

「剣崎……龍一……ッ!」

弾かれた様に、慧ちゃんがサバイバルナイフを抜き放つ。
真っ直ぐに首へと刃が迫り、少佐は驚く事も無くそれを素手で掴み取り、血が滴る事も気にせず至近距離で慧ちゃんを見詰める。

「躊躇いが無いな。良い踏み込みだぜ？」

「五月蠅い……ッ」

ナイフを抜き、もう一度斬り掛かろうとしていたのだろう。
掴まれたナイフを振り解こうと身を擦るが、少佐は決してナイフを離さない。

刃が肉まで食い込み、筋肉すら断裂しかねないと言うのに。
それに動じる事も無く、ナイフをガツシリと掴んでいた。

「聞け、慧。お前は親父さんの事を理解しなきゃならない」

「五月蠅い、人殺し……誰がお前の話なんて聞くか……ッ!!」

「確かに俺は人殺しだ！だが、あの時の俺には曲げられない信念があった！お前の親父さんも、俺に殺される事を望んでいた……だから　ッ!!」

ナイフを、自ら首へと寄せる。

あと数cm。

刃を強く押せば、頸動脈を切り裂いて少佐の命を容易く奪う事が出来るだろう。

でも、慧ちゃんは動けない。

“動けなかった”。

「全てが終わった後、お前は俺を殺して良い。俺はお前にそれだけ

の事をしたし、お前が誰よりも俺を憎むのは仕方の無い事だ。けど、今は殺されてやる訳にはいかない。俺は　　まだあの人の願いを適えちゃ居ない！」

強く、叫ぶ。

激情を吐露した少佐は始めて、感情らしい感情を慧ちゃんへと向けていた。

それに対して慧ちゃんの瞳が揺らぐ。

まるで、今まで抱いて来た物が崩れてしまう様に。

だが、それでも許せなかつたのなら……？

慧ちゃんの中にある”何か”が、少佐を到底許す事が出来なかつたのなら、慧ちゃんは少佐を殺してしまうの？

分からない。

話の根本も分からないし、何の事を言ってるのかも分からない。でも、これだけは分かる。

人は簡単に”死ぬ”なんて言っちゃいけないって。

「慧ちゃん……ッ！」

搾り出す様な、か細い声。

それにハツとしたかの様に、慧ちゃんは此方を振り返った。

その瞳に浮かぶ戸惑い。

次いで、後悔の念。

まるで何もかもから目を逸らす様に、慧ちゃんは先に進んでしまった。

「……珠瀬事務次官の娘さんだな？」

「は、はい」

そんな慧ちゃんを尻目に、少佐は後悔の色を見せながら此方へと視線を向ける。

「あの子を頼む。俺の声は……届かない」

握り締めた拳から血が滴り落ち、それが今の少佐が抱く悔しさなのだと言う事が是が非でも理解させられる。少佐は傷から来る痛みすら気にする事無く、巨木の幹を全力で殴り飛ばしていた。

「助けてやってくれ、あの子を地獄の底から」

それだけ告げて、少佐は瞬きする間も無くその場から姿を消していた。

まるで風と共に何処かへ吹かれてしまったかの様に、静かに

しかして、シリアスな珠瀬とは裏腹にその場から颯爽と消えた龍二は案外と焦っていた。

本来ならば総理の娘さんと彼女の妹にも会って置きたかったのだが、先程はしゃぎ過ぎた所為で腕から滴り落ちる血が止まらなくて困る。

クツ、若さ故の過ちと言う事か……！

少しばかりシリアスを壊させて頂く。

手が痛いです。

滅茶苦茶痛いです。

泣いても良いですか？答えは聞いてない。

「痛ええええつ……！」

止め処無く溢れる血を軽く払い飛ばし、今回の顔見せは此処までが限度だと理解する。

コレ以上は流石に面倒だ。

血の臭いを嗅いで、獣も集まって来る事だろう。

そんな状態で彼女等の下に行っても無駄な被害を増やすだけだし、大人しくテントに帰還するしか無いだろう。

帰還すれば帰還したで、手からダラダラ血を流している俺を見たら彼女等が何と言って来る事か……笑って「はい、寝ましょう」「じゃ済まないだろうな。帰りたくねえ。しかし帰らねば後が怖い。

イーニアは泣くだろう。

そうするとクリスカが怒る。

それに便乗して唯依も苦言を言ってくる。

神宮寺もチビチビ責めて来る。

夕呼に至ってはゲラゲラ笑いながら俺の硝子の心を破壊する事だろうし。

……案外と俺の人生って縛られて居るのね。

だが、帰る場所があると言う事は嬉しい事だ。

帰れば暖かく出迎えてくれる親友や『部下 / 家族』達。

怪我をしていれば心配するし、

寂しかったら抱き付いて来るし、

怒りたかったら怒る。

そんな当たり前の感情の露出が、今の俺にはとても愛おしく、儂く

思える。

だが、俺には出来た。
俺ですら出来たのだ。

きつと彼女も出来る筈だ。

その鉄の様な心を曝け出し、仲間と共に前へと進める日が来る筈だ。
だから今は祈ろう。彼女の幸せを。

唯依

行き成り姿を消したと思った少佐だったが、ふとした時には既に帰
つて来ていた。

神出鬼没も良い所だ。

シエスチナ少尉は泣きながら彼に抱き付き、彼もそんな彼女を苦も
無く抱き上げると優しく抱き締めていた。

ただ その抱き締め方がいつもとは似ても似つかない。
まるで何かを噛み締める様に。

「りゅうじ……?」

「ん?」

「どうか、したの?」

「何でも無いよ。クリスカ、こつちにおいで」

いぶかしむ私達の事など構う物か、とでも言う様に、今度はビヤーチエノワ少尉にも声を掛ける。何事かと思ひ近付く彼女を、彼は優しく抱き締めていた。

「なっ！？お、お前、何を……ッ！」

顔を赤らめ、今にも彼の手を振り解こうとするビヤーチエノワ少尉だったが、龍二さんの浮かべる表情にその手に込めていた力を抜いてしまう。

まるで、今にも泣き出してしまいそうな　その瞳の端に浮かぶ涙　壊れ物の様な、いつもの彼からは想像すら出来ない表情。

「ユイも、いつしよに」

「シエ、シエスチナ少尉……だ、だが私は……」

「私達だけでは足りない。今の龍二には、お前の温もりも必要だ」

此方も見据える二人の表情は儚く、本来ならば甘える側の立場ですらあるシエスチナ少尉ですら今は龍二さんの頭に手を置いて撫で続けて居た。

「龍二さん……」

彼の肩に触れる。

勇猛果敢で、笑顔を忘れる事の無い彼の肩が、今は震えていた。温もりを欲しがっている。

誰かに触れていないと、誰かが自分の傍に居ると言う確信が無いと、

彼はダメだ。

今の彼はその確信が無ければ簡単に”壊れてしまう”。

「大丈夫、私達が居ます……私が、いつまでも貴方の傍に居ます」

人の温もりに飢えていた獣は、今宵 涙を流した。

たった1人の少女すら救えない、非力な自身に。

たった1人の願いすら適えられない、役にすら立たない肩書きに。
英雄などでは無い、と彼が口にする。

俺はそんな大層な物では無い、と。

その度に私が、シエスチナ少尉が、ビヤーチエノワ少尉が、違つと
否定する。

英雄なのだ。

他の誰かが彼を貶そうと、穢そうと、私達には関係など無い。
命を救われた。

人としての生きる術を教わった。

人の温もりを与えてくれた。

運命すら、変えてくれた彼は 私達にとっては疑う事すら無い英
雄だった。

71 11月11日(4) 突き詰める魂(後書き)

あけましておめでとございます(2回目)

去年から投稿を開始したこの話ですが、ユニークが10万を突破
PVも同じく94万と、作者として嬉しい限りです
今年もゆっくりではありますが、投稿を続けるつもりです

どうか作者共々、この作品と剣崎龍二の行く末を見守って下さい

ユニーク10万突破記念に何か書こうかな、と思っているのですが
希望するカップリングはありますか？

ご意見がある方は感想の方へよろしくお願いします

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（前書き）

感想にカップリングの意見が来る

1・まりも 2・クリスカ 3・唯依 4・悠陽

ふむ……全員書こう。

作者は馬鹿です

『ああ、もしもし？』

「アンタ今日暇？暇よね？まさか暇でしょうね？」

開口一番の「暇だろ？」コール。

長年連れ添った夫婦でもしなさそうな事を、あたしとコイツは平然と出来る。

それが少しばかり誇らしいが、良く考えてみればアホらしい事だと気付いた。

この馬鹿、如何してくれようか……あたしに今まで恥かせやがって。

『ご期待に副えず申し訳ないが、暇じゃねえ』

「そこは暇って言いなさいよ、馬鹿」

『理不尽な罵倒ありがとうございます。切っていいか？』

電話越しから聞こえた声は幾分か不機嫌で、流石に何かあったのか心配になる。

とは言え、極道も真つ青な啖呵と家族構成のコイツが今更他者とのイザコザと如何にかなる程に柔な奴では無い事は分かっている。

一体何があったのか。

そう問い質すと、声にこそハリが無かったが、それでも何とか言葉

を紡いでいた。

『あのバカガネだ、バカガネ。アレの取り巻きの女共とのイザコザに俺まで巻き込まれて、俺の体力と気力は底を尽きた。後でアイツの人生、×る』

物騒なバギツ！！と言っ何かを握り潰した様な不気味な音が響き渡り、顔を顰める。
相当不機嫌な様だ。

コレでは 今日は無理があるか。

「だったら今日はダメそうね」

『そう言やゝそうだ。今日は何の用だ？』

「まりもからの御指名よ。1日、あの子に付き合ってやりなさい」

『……………』

電話越しの相手は沈黙を返す。

余程、意外だったのだろう。休日はいつも生徒達やあたしと時間を潰すコイツにとっては「神宮寺まりも」と言っ超一般的女性からの誘いなんて。

『じ、神宮寺さんが？俺に？』

「そうよ」

一拍置いた後、電話越しから聞こえる絶叫。

イヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオウツ！！！！！！

とか
ヤッタアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!
とか

声帯全てを使った様な、搾り出す様な絶叫が鼓膜を震わせる。
正直五月蠅い。

この場にコイツが受け持つビャーチェノワとか筆が居るなら今直ぐ
向わせたい。

それでコイツの喉を叩き潰してやりたい。
人の幸せ程、見ていて目障りな物は無いのだ。

『な、なあ……何着ていけば良いかな?』

「知るか!!!」

とは言え、浮かれたコイツの様子を見せ付けられるあたしは如何な
のよ。

全く報われないじゃ無いの。

つたく……敵に塩を送る、ってこの事よね。

『夕呼』

「……何よ」

『今度はお前も一緒にさ。皆で飲みに行こうぜ?』

苦笑を漏らした後、電話は切れた。

人の気持ちに敏感な奴。僅かな差異も感じ取って、フォローだけは
忘れない。

何だか自分が惨めになって来るじゃない……

「アホらし」

ユニーク10万突破記念

特別短編その？ まりもちゃん編

180？オーバーの身長。

色が抜け落ちてしまったかの様な白髪。

寒空の下で黒の革ジャンとジーンズを履き、啜えた煙草が何ともダ
ンデイ。

ガードレールに腰を掛け、目の前に浮かんでは消える電光掲示板を
眺める姿など切り取った芸術作品の様に美しい。

横を通り過ぎる女性が、顔を赤らめる。

1人だけでは無い。

彼の傍を通り過ぎる女性、実に数十人が同じ反応を示すのだ。

かと言って、本人はその視線を気にする事など無い。常日頃から”
奇異”な視線を向けられて

しまえば、いつの間にかそんな日常が当たり前となって受け入れら
れてしまう。

剣崎龍二は変わっている。

学生時代の彼は変人と言われていたし、彼を妬んだ者からは白髪と馬鹿にされていた。
まあ、そんな人には一切合財の躊躇無く、全力で振り抜かれた拳がのめり込むのだが。

「お、お待ちせ。龍二くん」

「おう。おはよう」

此方が声を掛けると、ニコリと笑って腰を上げる。

その際に「んしょっ」などと可愛らしい声が漏れたお蔭で、危うく私の意識が飛び掛けた。

一々の動作がカッコ良かったり、可愛かったり、女のツボを良く心得ている。

母性本能を擦られたと思えば、
男らしい一面を見せられ、「俺に付いて来い」と言わんばかりにリードされる。

何よりも彼が好かれるのは万人に好かれるのであろう穏やかな性格故に。

その穏やか過ぎるとも言える性格だからこそ、誰であろうと平等に接する。

同僚、生徒、上司、後輩、誰であろうが関係など無い。

全ての人に対して平等に接するからこそ、彼はクラスの垣根すら越えて人気を呼ぶ。

うちのクラスの白銀くんなんて、よく相談をしに隣のクラスに乗り込む程だ。

生徒からも、同僚からも好かれる理想の教師像。

それが私から見た龍二くんに対する評価。

実は、ちょっと過激な一面を持っていたりするけど。

「何処に連れて行ってくれるのかな、レディ？」

「きよ、今日は……えっと、取り敢えず……よいしょ」

バッグから出したのは本日新聞に挟まれていた『大売出し』のチラシ。

それに呆気に取られたのか、龍二くんは暫し呆然とした後に大笑いを始めた。

「え？え？ど、どうかしたの……？」

「いやあ、そうだったな。教師って給料、少ないからな」

目に涙すら溜めて大笑いする彼を見て、何が可笑しいのか暫く考えて

「あつ！？」

手元を持っている『大売出し』のチラシが原因である事を知る。

思わずそれを背中に隠すと、気にするなと言っばかりに龍二くんは笑顔になる。

「お前がまだ嫁に貰われないって事が信じられねえな」

ケラケラと笑いながら、龍二くんは私と手を組んで歩み始めた。

気分は恋人、と耳元で囁かれて顔が真っ赤になるのが嫌でも分かる。そんな私の反応すら楽しんでいいのか、今日の龍二くんはいつもより上機嫌だった。

「な、何で龍二くんってそんなにお金余るのおっく!?」

「徹底的な儉約術だ。お前等の儉約と俺の儉約が同レベルでは無いと知れ」

銀行の残高に余る圧倒的な金額の違い。

神宮寺の残高は決して低く無い。寧ろ、教師と言う仕事をしている人間からすれば十分貯蓄している方だろう。

だが、塵も積もれば山となる。

ガキの頃から無趣味を貫き通してきた俺の儉約と言うか、貯金は凄まじい数字を保っている。具体的に言うと云百万単位。あと1年頑張れば云千万単位。

常人ならば想像すら出来ない様な、過酷な生活を強いられた時期もあったのだ。

その結果として金が貯まっても何ら不思議では無い。

寧ろ、たまに行く飲み会程度でしか金を使わない俺が無趣味過ぎるのか……

一応バイクが好きと言う趣味はあるが、アレは雑誌程度で概ね満足している。

月に趣味で出費する金額など　下手をすれば千円にすら満たない。

「私利私欲が死んだ結果か……男としては哀しいかな」

「無趣味って凄いな……わ、私も頑張ろうかな……」

「止めておけ。何でストレスを解消しているか知らんが、お前の個性を潰すなよ」

折角持っている趣味を棄てるなんて、それこそ勿体無い。

持ち得る物は全て墓まで持って行く覚悟を持ってこそその人生だろう、と俺は思うのだ。

だからこそ、此処で何かを棄てて行くのは早急過ぎると思う。それに

「女は金を使い過ぎるくらいで丁度良いの」

「え？何で？」

「何で、って……男が稼いで、女が使う。昔からこの世の中を回す理屈って大体はこんな感じだろ？違っつけ？」

「それ、偏見じゃないのかな……？」

そうか？と思わず呟いてしまう。

何だかんだ言って、世界を回して居るのは財布を握る女性だと思う。夫は稼ぐだけ稼いで、妻から渡された小遣いで遊ぶ。

妻は夫の稼いだ金で遣り繰りして、金を使う。

案外と夫の気付かない内に妻が勝手にバッグを買っていました。なんて展開は珍しくも無いと思う。俺自身、それに反論するつもりは無いし。

まあ子供が出来れば、自然と妻の方も確りとして来ると言うし。

放って置いても女性は「奥様」から「女房」へと変化するだろう。

ある意味では進化しない男の方がダメなのかも知れない。

「取り敢えず、この『きゅりり袋詰め』は絶対に制覇する。次点くらいに『おー お茶1ケース 円 お1人様1ケース限り』と『卵安売り お1人様1パック限り』だ」

「う、うん！」

「残りのチラシの品は案外、他の店を回った方が安いかも知れないからな。今回狙うターゲットは以上の3つもあれば十分だろう。OK？」

「分かった。じゃ、行こう！」

「気合十分。パーティー会場まで直進だ」

何やら気合を入れた神宮寺に釣られ、俺も勝手に気合がチャージされる。

別段、俺にとってはあっても無くても良い様な物だったりするが節約教師である神宮寺にとっては少しでも金を節約したいのだから。

……ホント、何でコイツ結婚出来ないのかねえ？

突然だが、神宮寺まりもは美人である。

波打つブロンドのロングヘアー。

出る場所も確り出たグラビア顔負けのスレンダーボディ。

ちよつとオドオドとした仕草は男達のイケナイ妄想を加速させる。

そんな隣に付き添う剣崎龍二。

ブロンドの髪とは対照的なショートな白髪。

他の男性と比べても少しばかり大きい身長と、確りと付いた筋肉。ただ歩くと言つ行為ですら気品を感じさせる彼は女性の胸を熱くする。

そんな異色　と言つか、別格　な2人が腕を組んでショッピングモールを歩く。

その姿を見れば浮かぶ答えなど1つだろう。

“美人妻とイケメン夫”だ。

道行く人々が振り返り、その度に神宮寺は恥かしそうに顔を俯かせる。

それとは対照的な龍二は、視線など気にも留めずに堂々と歩いていた。

「顔を俯かせるなよ。お客様に俺達”夫婦”の愛の絆を見せ付けてやるうぜ？」

「ふ、夫婦……ッ!？」

弾かれた様に周りを見ると、気を利かせてなのかは知らないが視線を逸らせる他の客。

全員の動きが見事にシンクロした事よりも、一緒に歩いていると言っただけで夫婦と勘違いされるなんて困る。そりゃ、嬉しくはあるが、それでも他の人達にからかわれる材料を作られては困るのだ。

ただでさえ、弄られ易い体質と言つか、性格だと言っのに……

「何だよ、嫌なのか? మరి も」

耳元で囁かれ、少々強引に腰に手を回される。

まるで社交ダンスを踊るかの様な姿になり、そんな私と龍二くんを見た若い子達が「キヤー！キヤー！」と黄色い声で騒いでいた。

「俺はこんなにお前を求めているのに……儘ならないな、人生は」

「そ、そんな……ッ！でも、でもっ、私達は教師だし……職場恋愛はご法度で」

「愛は場所を選ばないぜ？」

あと数cm。

唇すら触れてしまいそうな距離まで顔が近付いた事で、咄嗟に目を閉じてしまう。

吐息が頬を撫でる。

女としての本能が　雄を求めていた。

「まあ俺は変態じゃないから、こんな所ではイチャイチャしないけどねー」

とは言え、相手はある意味では空気すら簡単に破壊する自由人の剣崎龍二である。

何事も無かったかの様に私の拘束を解くと、ゾロゾロと人が群がる目の前の『きゆうり袋詰め』コーナーへと向って行ってしまった。

「……」

「あ、あの、大丈夫ですか？」

流石に心配になったのか、若い女性店員が私に声を掛けてくれる。だが、だが今だけは止めて欲しい。自分が惨めに思えて来る。

「……ごめんなさい。すみません」

条件反射の様に声を返して、フラフラとした足取りで龍二くんの後を追う。

その頬は、言われずとも膨れていた。まるで、巨大な風船の様である。

チラツと此方を振り返った龍二くんが、私の顔を見て嬉しそうに笑っていた。

小さな買い物袋を私が。

大きな買い物袋を龍二くんが。

2人並んで、帰路を辿る。

どちらから喋り掛ける事も無く、どちらかが会話を拒絶する訳でも無い。

両者共に、その場では無言で居る事が当たり前のように感じてしまっていた。

わざわざ口を開かずとも、和やかな時間を共に過ごせた事は嬉しかった。

いつもならば夕呼に先を越されてしまっけど。

「龍二くん」

「ん？」

「今日は、ありがとう」

今まで浮かべた笑顔の中で、一番自然に出来た笑顔。

三十路近くのオバサンが浮かべる笑顔なんて、見ても嬉しくも何とも無いかも知れないけど。それでも私は彼に笑みを向ける。

「……俺もお礼言わないと」

ゴホンツ、と軽く咳払いをした後に彼も笑顔を浮かべる。

買い物の最中に浮かべていた様な、軽やかな笑顔では無く 胸の中にある気持ちを出した様な、ちよつとだけ照れ臭そうな笑み。

「ありがとう、まりも。今日お前と一緒に居られてすっげえ楽」

言葉は、そこで途切れた。

銀色に光る刃が、彼の脇腹から生えていた。

生えている？寧ろ、生やしている？それは逆、なのだろうか？言葉が出ない。

崩れ落ちそうになりながらも、何とか膝に鞭を入れて彼は誰かに掴

み掛かる。

また、刺された。

胸元と脇腹からの出血は夥しく、彼の命が

「逃げろ、まりもおっ!!」

此方に迫って来る男。

それをさせまいと、龍二くんが必死に抵抗する。

また刃が煌く。

3度目のナイフの斬撃は、龍二くんの左腕に突き刺さる。

だが、その場所では致命傷には至らない。

何よりも、利き腕は生きていた。それが、犯人最大のミスとも言える行為。

「あ、があ　　ッ!」

振り絞られた弓から放たれた矢の様に、加速された拳が男の顔面に減り込む。

そのまま身体を半回転させながら、アスファルトの壁に叩き付けられて意識を手放す。

ビクンビクン、と魚の様に跳ねる身体は見ている此方からしても不快だった。

「龍二、くん……?」

「……あ……まり、……も……?」

傷口に当てた手が生暖かい。

真つ白なシートに浮かぶ汗の後。
それは私の所為なのか、それとも……

「ううっ、朝っぱらから……何てダイナミックな起床方法だろうか
……」

「起きて下さい、”先生”？」

「お前が言つと皮肉としか聞こえません。朝飯作るから、服を着ろ」

「良いよ、今朝は私が作るから」

「……んあ？珍しいな」

「そう言つ気分だから、かな」

「そっか」

それ以上”彼”は何も詮索する事無く、私の唇に唇を重ねる。
未だに新婚気分な2人な事が結婚5周年を迎える私の密かな自慢でも
もある。

「朝からタバコ臭い」

「情熱的なキッスの味こそ、相手の日々口にする物に依存する訳で
すぜ」

ケラケラと笑つて、”彼”は大きく伸びをする。

まるで、悪い夢を吹き飛ばしてくれる様な煌びやかな笑顔を携えて。

「おはよう、おはよう」

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（後書き）

ifストーリー

まりもちゃんの可能性

無事に結婚したまりもちゃんのお相手は……？

次は、悠陽の予定で御座います

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（前書き）

一日中PCに向い続けた結果

恋心の甘酸っぱい感じが……出せない

日頃の感謝を込めて

特別短編その？

「しっかし、近頃は国内も安定して来ましたね〜」

「崖の上に建てた家の様な物だ。何か衝撃があれば、一瞬で崩れる
さ」

「うっわ……相変わらず客観的な意見ですねえ、中尉……じゃなくて、大尉」

「そう言えば昇進だったな。遅くなっただが、オメデトサン」

「ども。まあそれは良いとして 札は配り終えましたか？」

「ちょっと待て。今イカサマ中」

「ははっ。射抜き殺しますよ、巖谷さん」

「冗談だよ！ホラ、じゃあゲームスタートだ！」

技術廠の連中が集まり、喫煙室にてポーカーが行われていた。
今の所は整備兵Aくんが順調に勝ち越しており、他の者達はそれを
追い掛ける形となっている。パツと見た所、巖谷さんの札はあまり
宜しくないらしい。

ヤクザの様な顔が更に恐ろしく歪んでいる。

「コール」

「うえっ、少佐のコールウツ!？」

「珍しいですね……良い札でも引き当てましたか？」

「さてね。巖谷さん、どうしますか？降りるか、勝負するか」

「言うまでもねえ。俺は 降りるぜ」

やはり札が悪いのだろう、此处で無駄な足掻きをするよりは多少の掛け金を失っても勝負を降りる事を選択していた。流石は巖谷さん、退き際は心得ている。

「じゃっ、俺も降ります」

「何だよ。勝負しねえのか？」

「少佐の勝負運は一流ですから、引く札を引いて来たと見ましたぜ」整備兵Bが勝負を降りる。

残ったのは勝ち越ししている整備兵Aだが、不適な笑みを携えて此方を見ていた。

どうやら、札に相当の自信があるらしい。

「乗りますよ、その勝負」

コール宣言。

その場にて、勝負する2人以外の視線が鋭くなるのを感じた。波に乗っている整備兵A。そして、尚且つ彼は自分の札に絶対の自

信を持っている。

分が悪い。

誰もがそう思うだろう。

だが、彼は違う。

だが、剣崎龍二は普通の物差しで計り切れる男では無い。

「オープン」

札がオープンされ、お互いのカードがテーブルに開かれた。

その瞬間、この場での緊張感がマックスに到達する　ッ！

頬を伝う汗さえ、スローモーションに感じる様な圧倒的な興奮。

物事には存在する絶対的な、”雌雄を決する瞬間”。

その勝者は

「快進撃を止めちゃうのは忍びないが、”ロイヤルストレートフラ
ツシュ”だ。悪いな」

満足そうに。

そして不敵に、笑っていた。

ユニーク10万突破記念
特別短編その？ 悠陽編

財布の中身はパンパン。
心は余裕でポツカポカ。
俺の顔には自然と笑顔が浮かび、公衆にアホ面を曝していた。

そんな彼　　剣崎龍二は若くして大尉の座に上り詰めた有能な男でもある。

富士教導隊にすら実力を認められ、何度も入隊を勧められたが尽くそれを断った帝国でも随一の変人でもあるが。

「たまには博打も良いかも知れねえな」

購買で何を買おうか。

金に余裕もある事だし、タバコと酒でも買ってしまおうかな。
久しぶりの大盤振る舞いだ。多少の贅沢をしたって誰にも咎められる事は無いだろう。

戦場でも十分活躍している事だし、日頃のご褒美と言う奴である。

「いらつしゃいませ」

営業スマイルを浮かべるオバちゃんにタバコといつもより値段の高い酒を頼み、上機嫌で自室へと戻る。無意識だろう、足取りは軽やか……と言つかスキップだった。

本来ならば皆が大尉である彼に敬礼をしなければならぬのだが、あまりにも嬉しそうに笑顔を浮かべる彼を見て、それに水を差すのは如何かと言う理由で彼の隣を通り過ぎた者達は敬礼こそせずとも、優しい視線で彼を迎えていた。

博打で勝ち、

良質な酒を手に入れ、

気分は最高潮。まさに人生の絶頂期である。

これから自室にて料理に舌鼓を打ちながら酒を飲めるなんて

「幸福だー！」

今の気持ち全てを体現する様に、彼は両手を空へと掲げた。

日々BETAと戦い、命の削り合いの中ですら仲間の為に尽力する若き英雄。

そんな彼の癒しは食事と睡眠のみ、と少々味気ないが。

「剣崎大尉、剣崎大尉……！！」

「ん？どうかしたのか？」

そんな彼の元に1人の兵士が伝令を伝えにやって来る。

まさか、それが彼にとっての凶報になるとも知らず 彼は足を止めた。

足を止めてしまえば、後は嵌るのみ。

「殿下がお呼びです。今直ぐ謁見の間に来る様に、と」

思考がフリーズし、それを溶解する為に脳内にて物事の整理が行われる。

- 1・博打に勝った。
- 2・酒を買った。
- 3・上機嫌で自室に帰ろうとしていた。
- 4・世間は優しくなかった。 今ここ

「……………なん、だと……………！？」

劍崎龍一。

またの名を、『歩くトラブルメーカー』『不幸と踊っちまった男』
今日も、今日とて。

神様は彼に優しくなど無かった。

泣きながら酒と伝令兵を見比べる大の男。

今の彼を見て、誰が将来は国すら背負う事になる大英雄とまで言われる様になると思うのだろうか。

思っていた、等と言う奴は絶対に嘘だ。

有り得ないだろう、こんな情けない男が将来は国を背負うなんて。

こんなヘタレが 女には困らない人生を送る事になるなんて。

謁見の間に赴くと、殿下が奥の私室にて待っていると云う。

周りからの視線の圧力はやはり強く、重い。俺の事が気に入らない輩はこの中に幾らでも居るだろうな。何せ、たかが尉官如きが殿下に個人的な理由で呼び出されるのだ。

更には私室に入る許可さえ貰っている。

面白くないのは当然だろう。

まあ、そんな事は俺に関係など無いが。

「龍二お兄様！」

相変わらずサツパリとした悠陽の私室。

そこで礼儀正しく正座で待っていたのだろう彼女は、俺が襖を開けた瞬間には喜色満面の笑顔を浮かべて此方に駆け寄って来る。

対する俺の顔なのだが、仏頂面と言うか、不機嫌と言うか。

少なくとも、今の面は国のトップである征夷大將軍に向ける表情では無かった。

「許さんぞ、悠陽……末代まで祟る」

不吉な事を呟き、不思議な踊りを踊り出す龍二。

それを見て、頭上に”？”を浮かべてしまつのは天然然りの悠陽だからこそだろう。

流石に突っ掛かり所が無い相手だと、皮肉屋の龍二も減速してしまふ。

諦めた様に溜息を吐き、一体何事だと悠陽を問い質す。

「お散歩に行きたいのです」

「……………what
?」

思わず、口から飛び出した英単語。

いや、だって、行き成り……有り得ないだろう。

呼び出しがあると云う事は、それなりに重要な内容だったからでは無いのか？

今までの呼び出しは大抵「何処の何とかでBETAを撃退して欲しい」とか「何処の誰とかの内部情勢を探って欲しい」なんて云う軍事関連の物ばかり。

なにゆえ
何故!?

思わず、しかし叫ばずには居られなかった。

軍事関連の頼み事の次に控えていたのは、至って少女らしい願い事。

……ああ、なるほど。

不機嫌そうに此方を睨んでいた連中は、俺が気に入らなかった訳では無く

(呆れるな、コレは……)

頭を抱えていたのだろう。

まさか、国のトップを外に出す訳にも行かない。

かと言って、自分達が彼女に付いて行く訳にもいかない。ならば如何すれば良い？

如何する事が一番良い？

腕利きの衛士に護衛させ、散歩に行かせるしかあるまい。

その役に抜擢されたのが俺だと言う事か。ハハッ、貧乏くじを引かされた。

「……自分勝手も度が過ぎると暴君にしかならないぞ」

「『我俣に生きる』。そう、私は龍一お兄様から教わりました」

「それで周りの連中に迷惑を掛けちゃ世話ねえさ……お前の可愛い我俣なら俺が全て承る。だから、国が大騒ぎになりそうなら我俣は勘弁してくれ」

苦笑しながらも、彼女の頭を乱暴に撫でる。

本来ならば”殿下”と敬うべき相手の筈が、敬うべき相手からの”普段通りで居て欲しい”と言う願いにより、俺は彼女を妹の様に可愛がっている。

周りから見れば無礼以外の何物でも無いだろう。

事実、不敬と言われて何度叩き斬られそうになったか数え切れ無い程だ。

「それでは外で用意を整えて参ります、我が愛しき主」

「どうぞ、良しなに」

膝を付き、彼女の手を握る。

それに楽しそうな笑顔を浮かべた悠陽は、ペコリと頭を下げた。

さて まさか俺1人と言う事もあるまい。

どれだけの人員が動員されるのか、逆に見物でもある。

想像以上だった。

寧ろ、この人員の数は予想外だった。

俺の前にズラリと並ぶ、歩兵の数は凡そ200ちよつと。

更に、その両脇に控えるのは かの有名な武御雷。数は4機。

「此度の護衛は我等が無事遂行致します。大尉は殿下のお傍にお控え下さい」

武御雷の衛士、月詠真那。

その後ろで此方に敬礼を向ける3人は彼女の部下である神代、巴、戒だ。

開いた口が塞がらないとはこの事だろう。

まさか、斯衛でも優秀な月詠を引っ張って来るとは思いもしなかった。

度肝を抜かれた、とかそんなチャチなレベルでは断じて無い。

もっと恐ろしい物の片鱗を味わった気分である。

「あ、ああ。しかし、まさか月詠が引つ張られるとは驚いた」

「私としても予想外です。まさか、貴方がこの様な任を承るとは……」

「あの子の我侭は出来るだけ適えてやりたい。兄貴としての譲れない意地さ」

いつ死ぬかも分からぬ戦場に立つ身。

死にたく無い、死ぬ訳には行かないと奮起して居ようと人も人は何れ死ぬ。

俺は確実に、彼女よりも先に死ぬだろう。

それまでの短い間だけでも良い。

悠陽が笑顔を浮かべてくれるのなら、俺はどんな小さな事でも率先して取り組んで行くつもりだ。まあ、今回の様な大事は勘弁して欲しいが。

「お優しいんですね」

「べ、別にそう言う訳じゃねえよ！」

悪戯っぽく笑った真那に反論しながら、悠陽の登場を待つ。

流石は征夷大將軍。

人前に立つ為の身支度ですら、コレ程までに時間が掛かるとは驚きだ。

まあ女の身支度が長いのは当然の事故に、待つこと自体は苦痛では無かったが。

「劍崎大尉、お茶が入りました」

「おっ、サンキュー」

「新潟での防衛戦は、あのっ、見ている此方も興奮する程素晴らしかったです！」

「カッコよかったですの〜」

「俺はお零れを蹴散らしただけ。俺よりも遠征して居た部隊の方が凄かったさ」

美少女3人と談笑出来るとは思いもしなかったサプライズですな！
これなら幾らでも待てますぜ。

心なしか マナマナの視線が痛いけども。

「皆様、お待たせしました」

そんな状況を切り開くべく、期待の主役殿が漸く登場した。
この場に居た全ての視線が彼女に注がれ、そして

ん？

寸分変わらず、全員が首を傾げた。

この俺ですら今の彼女の格好には疑問を抱き、口が開きっ放しである。

隣の真那も、神代と巴と戎も同じ様に目を見開いていた。

「あ、あの……何か変でしょうか……？」

恥じらい、皆の視線を遮る様に身を振る悠陽の姿は、

「何故だ……何故、”ブルマ“？」

疑う事も出来ぬ、体操服姿。

否、ブルマだった。

いや、いやアレだな。年頃の少女は随分と発育が良い物で、2つの果実と美しい脚線美がコレまた何とも言えませんね。

アレだよ。

何が言いたいかって、アレだって。

「責任者出て来いやゴルアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「空気が美味しいですね、龍二お兄様」

「あんな狭苦しい場所に比べれば開放的で空気も美味しいだろうさ」

開放的な野原。

咲き乱れた花々が美しく、BETAに侵攻された今ですらこんな美しい場所があるのかと逆に感心させられてしまった。

良い場所がある、と言っていた真那さんの言葉に偽りは無かったと言っ事なのでしょう。

幻想的なこの場所にて、私を見守ってくれる龍二お兄様。

思えば、いつも彼は傍に居てくれた。

それが当たり前なのだと思えてしまう様になった今の私は、少々贅沢なのでしよう。

美しい華では無く、

何処までも続いていそうな地平線でも無く、

彼は私だけを見ていてくれる。

帝国内部でも人気があると言うのに、良く女性に声を掛けられたりしているのに。

今は、”私だけの兄”で居てくれる。

それが、何だかとても嬉しかった。

「うおっ!？」

感情の昂ぶりが行動に大胆さを与える。

急に飛び付いた私に驚き、戸惑いながらも龍二お兄様は私を抱かかえていた。

優しい手が、髪の毛を梳かしていく。

その手の感触が侍女達の丁寧な髪を梳いてくれる時よりも気持ち良くて、心地良くて、一生味わっていたいとさえ思える。

「どうかしたのか？」

此方を覗き込む表情は笑顔。

こんな心ですら包み込む様な、昔から何一つ変わらない お兄様の笑顔。

「お兄様は、私の傍に居てくれますか?……永久に」

「永久、か……永久はちょっと難しいかな」

困った様に頬を掻き、それでも私の願いを適えたいのだろう。
お兄様は一生懸命に悩んでいた。悩んでくれていた、私の為に。

無理難題を押し付けて、貴方を体良く利用して居た私の願いを、
一生懸命。

哀しかった。

嬉しかった。

切なくて、今にも崩れてしまいそう。

「あ、でも……永久は無理でもさ」

いつまでも変わらない、その儂い笑顔が、私の心を締め付ける。

1357

「俺は死ぬまで、悠陽の味方だ」

彼の唇が私のおでこに口付けをする。

どうしておでこなのか、そう聞くと笑いながら言った。

「5年早い」と。俺の相手をするならばもう少し色気を付けてくれ、
と。

ならば 5年待てば、貴方は私を見てくれるのでしょうか？

妹では無く、

1人の女として ”愛してくれるのですか”？

誰にも聞こえない、小さな独白。

風が吹き荒れ、花弁と共に彼女の独白は天へと吸い込まれていった。

5年先の未来。

その世界で、未だに彼が生きている保障など無いと言つのに。
それでも少女は、恋焦がれた。

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（後書き）

若い内は年上に憧れてしまうもの
悠陽 でした

この恋が成就するのか否か、それは各々の心の内に

次回はクリスカ編

……ダメだ、下ネタしか浮かばない……

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（前書き）

エロくない！

エロはない！

残念でしたね、エロなんてありませんよ！

ただちょっと、おっ○いのが書かれているだけで

エロはありませんよ！！

日頃の感謝を込めて

特別短編その？

「暇だな」

「ああ」

「……それにしても、暇になっちまったな」

「……そうだな」

何故か我が家のリビングにて繰り広げられる2名の脱力した会話。
この家の持ち主である剣崎龍二、珍しく彼の下に遊びに来たクリスカ・ビャーチェノワの2名は特にやる事も無いのか各々雑誌を読みながら時間を潰していた。

常日頃の態度は生真面目で言動が所々苛烈なこの2名。
しかし休日の2人は案外と

「何もねえな」

「何も無いな」

大人しかつたりする。

ソファに横になるのは龍二。そんな彼が読む雑誌は今週の情報掲載された一般的な週刊誌。人気アイドルのパパラッチに「おお〜」等と驚きながらも笑顔を携えてページを捲って行く。ある意味では、

いつも通りの彼の行動である。

袋とじは既にチェック済み。

綺麗に切り取ってある辺り、エロスを体現した様な男だ。

対するクリスカだが、ソファに背を預けながらファッション誌を熟読中。

ヒラヒラのワンピースやら、ロリロリなゴシックドレスなど纏って見たいと思ってしまうのは彼女が少女であるならば仕方ない事。寧ろ、その様な欲求を押し殺してしまつては将来が非常に面白味に欠ける。

……と言つのは、龍二本人の談なのだが。

かと言つて、彼女は公にそんな事を公言するタイプでは無い。

彼女にとってコレは単なる”アプローチ”であつて、決して自分の口からは事実を語るうとはしない。恥かしいだろう、いつも仏頂面の女が行き成り『一緒に出掛けたい』などと言い出すのは流石に。

しかし、人生とは儘ならぬ物。

龍二はそんなクリスカのアプローチにすら気付く事無く、週刊誌に集中して居た。

着目しているのは占いコーナー。

順位は何位だろうか、と真剣に雑誌と睨めっこをしていた。

この男の頭の中は、一体どれ程までに子供なのだろうか

ふとした疑問がクリスカの頭に浮かび、溜息と共に外へと排出される。

所詮どれだけ考えても無駄な事だ。

“存在その物が子供の様な大人”に『子供っぽい』等と言っても意味は無い。

それは寧ろ、褒めている事と同じ意味として捉われてしまう様にす

ら感じてしまう。
生き方それ自体がポジティブの様な男が、多少の棘ある言葉で日々感情を左右させるだろうか？断言しても良いが、それだけは絶対に有り得ない。

「ハア……………」

「どうした？恋の悩み以外なら受け付けてやるぞ。ああ、でも金の話もパス。俺、今月は如何にも家計がピンチだから」

「こ、恋！？」

恋？

恋とは、アレだろう。

人間が他者に対して情緒的で親密になりたいと言う感情を抱く事であり、それに伴って行動や態度が一連の恋幕に満ちて来ると言う

「恋は良いぞ、胸が熱くなる。で？相手は何方？お前も白銀？アイツつたらモテモテだねえ。後でブン殴りてえ、畜生！」

「あ……………う、あ……………」

龍二が此方に近寄る。

その表情は怪訝そうに歪められていたが、此方を心配していると言うのが良く分かる。まず頬に触れ、私の視線を自身の物と重ねさせた。

交差する視線。そこで初めて、彼は私の目を見ながら問うのだ、「どうかしたのか」と。

「わ……………私に……………私に触れるな　　ツツツツツツツツ！！！！！！！！

「！！！！」

しかし、今の私にそんな事をされれば、条件反射で拳が唸る。奇声を発しながらソファに突っ込む龍二を見て、如何にも自分が情けなくなった。

穴があれば入りたいとはまさにこの事。顔を覆って、彼が此方の表情を窺い知れない様に完全な蓋をする。

暫くは、考えさせて欲しい。

だからそれまでに必要な時間の間は、そこで眠っている。

ユニーク10万突破記念

特別短編その？ クリスカ編

クリスカに殴られた。

別に、それに対してショックや怒りを覚える事は無い。

そんな事は日常茶飯事だし、今更ビ―ビ―喚き散らす程に心が狭い訳でも無いからだ。

だが

彼女は悩んでいた。

“何に” 対してなのかは分からないが、彼女は今必死に何かを考えている。

(此処に居るのは邪魔かな……)

横転したソファを直し、何処かトイレにでも引き籠もろうかと考えていた。

考え事をする時は1人の方が良い事もあるだろう。もしも、誰かに意見を求めるので有れば、その時は彼女がきつと俺や友人を頼ってくれる。

だからこそ、今俺と言う存在は必要無い筈だ。

俺の中では、だが。

無言で立ち上がり、リビングのドアへと手を掛ける。

しかし、アレだ。

トイレに1時間も籠っていると流石に閉所恐怖症にでもなっちまいそうなので、此処は外に煙草でも買いに行くとしよう。

別に彼女ならば1人にした所で、何かやらかす事も無いだろうし。つうか盗まれる様な物が何も無い家だぞ、此処は。

「ちいつと買い物行って来るわ」

「!?!ま、待て!」

決死とも思える、クリスカの制止の声。

だが彼女の声が掛かる頃には俺は既にドアノブへと手を掛けており、彼女の制止は耳に入って来ては居なかった。

「うおっ!?!」

ドアを開けようとした瞬間、身体が後ろに引っ張られる。

あまりの事に受身を取る事も出来ずに後頭部を床へと強かに叩き付

け、想像を超えた激痛に喉から声が出ない。呼吸すると言う当たり前の行為でさえ、苦しい。そして何よりも呼吸をする事が苦しくなる原因は

「あ………」

胸の上に座り、俺を地面に抑え付けるクリスカの存在だった。

「……おい」

無理に振り払う事はせず、俺は自身の胸の上に座るクリスカに視線を向ける。

下から見上げる、と言う体験は初めての事だった。

いつもは俺の視線が上のクセに、今回は　ああ、コイツが押し倒したから下なのか。

その事を容易く理解すると、今の状況が傍目から見れば俺とコイツが”イケナイ”事をしようとしている様に見えるしまうかも知れない訳であって……

「っ………！」

「ちよっ、おまつ！？………何で俺よりも先にお前が落ちるかねえ」

ほぼ俺と同じタイミングでその答えに至ったのであるうクリスカは俺の胸の上で気を失った。崩れる彼女を支え、呆れ半分の溜息が止まらない。

彼女を抱かかえたままソファまで運ぶと、彼女を寝かせてその隣に腰掛ける。

「……煙草、買いに行けなかったな」

銀色に輝く髪を撫でると、安心したかの様にクリス力が寝息を漏らす。

いつもの鉄仮面は何処に行ったのか、寝ている時は年相応の少女らしい笑顔がそこにはあった。もしも俺が教師では無かったのなら、もしも、俺がコイツ等と同じ学生だったのなら

「惚れない道理はねえ、な」

性格は刺々しいが、それは結局人との関わりが怖い事から来る恐怖心の表れであり、それを押し隠そうとして無駄に尽力する姿など男からすれば好意すら抱く。

まあやはり性格の所為か男は作れて居ない様だが、こんな麗しい少女を何処の馬の骨とも分からないボンクラ共に渡すよりは100倍マシである。

「やらねえよ、誰にも。コイツは俺だけの”女”だ」

ケラケラと笑いながら、俺は胸元にある煙草を啜えた。

『やらねえよ、誰にも。コイツは俺だけの”女”だ』

ソファにあつたクッションに顔を埋めて、先ほどの言葉を反復する。

俺だけの”女”

俺だけの”女”

俺だけの”女”

その言葉が持つ魔性とも言える言葉の響き。
クラスの女子達の言う『俺の嫁発言』、だろうか？

「ッー!!」

「うおおおおおおおおおおおおっ!?!」

行き成り飛び起きた私に心底驚いたのか、煙草に火を付け様としていた龍二が珍しい程にオーバーなリアクションを取る。
それすらスルーして、私は彼の顔を見詰め……睨み付ける。

「あ、あの、クリスカ……さん？」

「……」

「え、えっと、ですね。どの様なご用件でしょーか……?」

「……ける」

「へ?」

「出掛ける」

「い、いや、えっと、どちらに……?」

「……外に出てから考える」

「ちょ、おまつー!?!」

強引に首根っこを掴み上げ、無理矢理外に引つ張り出す。
ジタバタと動き回り抵抗を試みる龍二に睨みを利かせて黙らせると、
私はサツサと龍二を連れて街へと駆り出す事にした。

「あ、ちよ、待って！鍵閉めてない！」

「……盗まれる物など無いだろう」

「そう言う問題じゃなくて……あ、いや、やめ……らめええええええ
えっ！！！」

三十路近くのオッサ……お兄さんと女子高生のカップル。
世間的に見ると危なくないだろうか？
エンコーとかと勘違いされないだろうな。
この歳で新聞には載りたくねえぞ。職失うとかマジ勘弁。
暮らせないって、冗談抜きで。

「あの、クリスカ……距離、近くない？」

「う、うるさい！」

「すみません、だから機嫌を治して下さいませ」

とは言え、当の本人であるクリスカは先程から如何にも機嫌斜め
と言いますか。

俺の腕に腕を絡める行為事態は別に何と言つ事も無いのだが、周りの視線があまりにも怖い。もしも通報などされよう物ならば

『キヤハハッ！アンタねえ、昼間から通報つて間抜けねえ』

『夕呼！あの、龍二くん……次は気を付ければ大丈夫だから。ね？』

悪意に満ちた言葉と生易しい慰めの言葉で俺の心が粉碎されかねない。

それだけは阻止したい。

と言つか、愉悦に満ちた夕呼の顔など見たくねえのである。

かと言つて離れると言つ事も出来ず、ピッタリとくっ付いて貰つて居るのですが……

(コイツ、アレだな。やつぱデカイ)

二の腕に当たる柔らかな感触。

2つの巨大な核兵器を押し付けられ、是が非でもその感触を味わうしか無い俺はいつの間にか、そんなオヤジ臭い事を考えていた。

流星はエロスの化身。

息子が反応しないのは彼女が生徒だからだろう、多分。

チラツと脇目で確認するが、冗談抜きでプロポーションは素晴らしい物がある。

ボン・キュツ・ボンを素で行く女などあまり居ないだろう。

性格が刺々しいと言われるが、それにさえ慣れちまえば可愛い物である。

似通っている動物が居るとすれば 野良猫、と言つた具合か。

慣れるまでに時間が掛かるが、慣れてしまえば勝手に寄つて来る可愛い子だ。

「ああ〜ダメだ、やめろ、考えるな、俺は教師だぞー、教師だぞー」
「??？」

頭上に”？”を浮かべるクリスカを置き去りに、俺はただ呪文の様に言葉を紡ぐ。

考えるな、考えてはいけない。

俺は教師である時点で彼女に特別な感情を抱く事は無い訳だし、別に意識している訳では無いが、いやでも、結構我が家に頻繁に顔を出してくれる彼女に対しては他の生徒とは違う感情を抱いているのは事実であるからして、待て！違う！そっちに持って行くな、止めろ！素数……ダメだ、素数を数えるのは誤爆な気がする。此処は深呼吸だ、深呼吸をしよう、ヒッヒッフー、ヒッヒッフー、俺は子供を産める身体じゃねえっ！！！！

ゼーゼー、と肩で息をする俺が流石に不審に思ったのか、クリスカが俺の頬を掴んで無理矢理視線を合わせる。ヤバイ、マジでヤバイ。冗談抜きで

「龍二？」

「あ、いや、何でも無いです、ハイッ！」

此方の顔を抑えていたクリスカの手を振り解いて、少しばかり距離を置く。

コレ以上アイツの近くに居ると、冗談抜きで 襲い掛からない自信が無い。

流石に生徒には欲情しないだろうと踏んでいたが、俺の考えが甘か

った。

近頃の女子高生は恐ろしい……ッ！！

何だ、今の此方を心配する時の表情は！？

ふざけるな、心臓が鳴り響くって、俺は今更青春のど真ん中か！！
勘弁してくれよ……ッ！

「ど、どうかしたのか？体調が悪いのなら今直ぐ」

「大丈夫だ。問題ない」

クリスカの心配そうな声に条件反射で返し、唇を噛み締める。

ああ俺、なんて馬鹿な子なの。

体調は最悪。ストッパーなんて、今直ぐにでも崩壊寸前だって言うのに。

そんな時に「大丈夫だ。問題ない」だと？阿呆か！今直ぐに死んでしまえ。

（想像以上に溜まって……いや、有り得ないだろ）

考え付いた結論をアツサリと否定し、俺はクリスカを置いて先に歩く。

その後ろ、俺の後を追う様にクリスカが駆け寄って来た。

頬は真っ赤のクセに、俺の腕に腕を絡める事だけは止めようとはしない。

何とも、迷惑な行為である。

しかし何故だろう。

彼女が腕に胸を押し付ける瞬間　昔、嗅いだ事のある匂いがした気がした。

ウェディングドレスとは女性達が夢見る最強装備 リーサル・ウェポン であり、誰もが愛すべき男性の隣でそれを着る事を願っている。

その例に漏れる事も無く、彼女 クリスカ・ビャーチエノワはガラス越しに見る事の出来るウェディングドレスに目を奪われていた。さして気にする事も無く通り過ぎようとしたのだが、彼女が初めて興味を示したと言っても過言では無い物なのだから流石に通り過ぎてしまうのは酷だろう。

別に購入する訳でも無いし、寄って行くだけなら問題もあるまい。

「……見て行くか？」

「え？い、いや、こんな所ではお前が……」

「一々男の事なんて気にするな。我俣に欲を貫け」

彼女の手を引いて、店のドアを潜る。

何やら女性店員が営業スマイルで此方に近寄って来るが、「用があれば呼ぶから」と取り敢えず言っ中を一通り巡って見る事にした。赤、青、黄、紫やら何やら。

色鮮やかなドレスに俺は目を奪われている間でも、クリスカはそのどれにも興味を示さない。その視線の先には これぞウェディングドレス、とも言える純白の1着。

「綺麗だな」

「っ！？わ、私は別に……」

「着て見せてくれよ、折角だし」

「出来る、のか……？」

「ん〜。分からん、ちよつと頼んでみる」

先程の営業スマイル店員に声を掛け、試着が出来るか如何か頼んでみる。

暫し考えた後、時間が掛かっても良いのならば、とOKの返事が返って来たので即決断。

クリスカを試着室へと押し込み、俺は先程嗅いだ匂いの元凶へと電話を掛ける事にした。あの匂いは、学生時代に嗅いだ嫌な思いのある品だ。

「もしもし、俺だ。夕呼、テメエ ツー！」

『ああハイハイ。そろそろ電話来ると思ったけど、あの子のこと襲った？』

まるで全てお見通しだと言わんばかりに平然と言葉を返し、ある事か俺が犯罪者になったのかどうかの確認までして来やがった。流石に、それにはカチンと来る物があったので即否定。

「襲つか！！テメエ、クリスカにあの意味の分からねえ香水渡しやがったな！？」

『ご名答。アンタとまりもの為に作って見た”興奮剤”よ、ただの』

“興奮剤”と言っているが、アレは簡単に言つと……その、何だ。イッパツやりたくなる劇物と言つか、どんな行為ですら自身を誘惑している様に感じられてしまつと言つか……兎に角、特Aクラスの危険物質なのだ。

「その所為で俺は苦勞と苦難の連続だよ、チクショーツ！」

『でっ。』

「あ?!」

『あの子、アンタにちゃんと言えた?』

一拍置いた後、夕呼は珍しく声のトーンを落としていた。どれだけ切羽詰ってクリスカが彼女に相談したのかは知らないが、相談された側の夕呼にとってはそれだけ溜め込んでいる様に見えると言つ事が。

「……さあな。それよりテメエ、ブツは即消去しろ。跡形も残すな」

『ええ。如何しようかしらねえ』

「テメエエエツ……あ、あとで泣かす！」

『優しくしてあげなさいよ。襲うにしろ、襲わないにしろ』

クスクスと笑われて、夕呼への電話は切れる。

“襲う”か”襲わないか”だと？そんな物、決まっているだろう。襲う訳が無い。

タネさえ分かっちゃえば、後は気合で如何にかしてやる。それに

「生徒を……襲えるかよ」

自分は教師。彼女は生徒。

その枠を越える事は、決して俺の小さなプライドが許さない。

今の彼女は護るべき対象であり、そんな彼女を俺が傷物にするなど有り得ない。

もしもそんな事になれば、誰よりも俺が自分を許せなくなってしまう。

試着室から彼女が出て来る最後の一瞬まで、俺はただ祈る様に手を合わせていた。

「お似合いですよ、お客様」

愛想笑い。

いつもならば、それだけで顔が顰め面へと変わる筈なのに。今は悪い気がしない。

「そ、そうか……」

「お客様はお肌が白いですから、白のドレスが良く似合いますね。」

うん」

これもセールスのポイント。
それは分かっている。

でも、彼が見てくれたらどんな反応を示してくれるのか。
それだけは気になった。いや、寧ろ　それだけ”が”気になった。

「お待たせしました、”旦那様”」

「あ、いや、俺は旦那じゃなくて……………まあ良いや」

待合室に待機していた龍二が、呆れた様に溜息を吐きながら此方へと近付く。

1 歩目。歩み出されるだけで心臓が破裂しそうだった。

2 歩目。今にも顔を覆ってしまいたい衝動に駆られる。

3 歩目。それでも、見て欲しい。

4 歩目。それでも、見詰めて欲しい。そして言うて欲しいのだ。

女ならば誰もが求めるたった一言を、この場で。

「……………」

視線だけが、物語っていた。

無言であるうと龍二は此方を見詰めていると言う事が。
そして

「このドレス、買う」

「へ？」

「買うと言った。支払いはカード、ドレスは着て帰る」

「え？あ、あの、お客さ」

「サツサと会計を済ませろ」

一気に此方へ駆け寄ると、行き成りドレス姿の私を抱かかえる。

今の私に抵抗など出来る筈も無く、成すがまま持ち上げられてしまつた。

辺りから「あ」と小さな声が漏れる。

「すまんね。だが、良い買い物を見せて貰ったよ」

それだけ告げて店を出ると、外は既に少し薄暗かった。

それでも人通りはそれなりに有り、その全ての視線が”ウエディングドレス”姿の私とそれを抱かかえる龍二へと注がれる。

「堂々と顔を上げてくれ」

羞恥に龍二の懷に顔を埋めていた私に、彼は優しく囁く。

視線を上げた先には、今までの笑顔とは違う 真剣な眼差しが此方を射抜いていた。

何故、と問う事も出来ない。

何故ドレスを買ったのか。

それを聞くよりも先に、彼は静かに呟いた。

「その姿、綺麗だからさ」

人混みが私達を避けて、道を作る。

温かく祝福しているかの様に。

まるで、私達がそこを通る事が当たり前だと言わんばかりに。

道は一直線に続いていた。

「ああ、言い忘れたけど」

「……何だ」

「スタート地点は嫁？それとも、恋人？」

悪戯っぽく微笑む少年の様な男、剣崎龍二。

真面目な一面を見せたと思っただ矢先、急にコレだ。

思わず此方まで笑ってしまうのでは無いか。それとも、それすら彼の策略なのだろうか？

いや、でも今は関係なんて無い。

「？」

その問いに、龍二は苦笑した。

今更何を、と言いた気に、彼はそれ以上言葉を紡がせない為に此方の唇を唇で塞ぐ。

周りからドツと歓声が巻き起こり、それすらBGMと変えて彼は笑いながら言った。

「」

その笑顔は、

今までに見た事の無い程、穏やかな笑顔だった。

「あ、言い忘れたけど」

「ん？」

帰り道。

流石に街のど真ん中であんな派手な事をすれば流石の剣崎龍二だろうが羞恥はあったのだろう。帰りの彼は実にコソコソと動いていた。まあ ウェディングドレス姿の私を抱かかえている時点で、十分目立っているが。

「夕呼に相談するのはマジで止めておけ。碌な事にならない」

「何故だ？今日のコレも、彼女のお蔭だろう？」

「……強ち間違っちゃいねえけど、気に入らねえだけだ」

溜息混じりに呟いた彼と共に、結局その後何も話さずに帰宅する事になった。

因みに

家に帰宅した後、イーニアに”色々”と聞かれたのはまた別の話。

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（後書き）

ifネタのクリスカ は作者の妄想爆発

この後、ウエディングドレスを着たままベッドで（ry

次は唯依

明日の更新は……少しばかり辛いかも知れませんが頑張ります

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（前書き）

本編最終話の後日談if

「もしも桜花作戦で」と言っ話

日頃の感謝を込めて

特別短編その？

救われた世界の物語。

これは有り得たかも知れない、有り得なかったかも知れない。
世界を救った英雄が戻るべき場所へ戻った後の

「少将は何処に行った!？」

「またサボりか! たく、階級が上がるうと中身は変わらないって
言うか……」

「オリジナルハイブ落としの英雄だって言うのに、自覚が無いのか
!？」

救われなかった男と、何も出来なかった少女の物語。

右腕の切断。

左目の切除。

身体に至る場所に付けられた傷は各々が致死に値する深い傷。
衛士としては、二度と役には立たないであろう肉体。

それでも、それだけの傷を負いながらも彼は生き残った。
奇跡とでも言えるのかも知れない。

“少女達”の死を持って、彼は 剣崎龍二は生き残ってしまった。その罪悪感が彼を苛める。何故あの場で俺が死ななかったのか、と。未来ある少女達を殺してまで、自分には生きる価値など無かったのに。

冥夜の死……それ以来、悠陽 殿下とは顔を合わせていない。合わせられなかった。

どんな面をして会えば良いと言うのだ？
護ると言って置きながら、助けると誓っておきながら、俺は何も出来なかった。

そんな俺が今更、彼女にどんな面をして会えば良い。
いつその事、彼女が俺に恨み言を言ってくれれば良かった。
彼女が、俺を罵倒してくれれば良かった。

だが、帰還した当初の俺に掛けられたのは 労いと、慰めの言葉。
泣きたい筈なのに、今直ぐにでも崩れ落ちてしまいそうなのに、それに耐え抜いて彼女は将軍としての威厳を保っていた。そんな姿を見せられて、無力な自分を情けないと思わない男は居ないだろう。

それ以来、俺は彼女との接触を絶った。
死ぬまで 俺は彼女の前には現れない。
それが、現在の俺が出来る最低限の義務だから。
“敗者”としての人生を歩むと決めた、俺の小さな誇りの問題だから。

それでも、それでもこんな身体になった今でも俺は思い出す。
敗者では無く、勝者として空を飛び回った時の事を。
アラスカで、日本で、世界中のあらゆる場所。

国境など関係無いとばかりに、盛大に、奔放に飛び回っていた自由な時の俺。

クーデターで、トライアルで、横浜基地内部でさえ。

戦場など選ばない。戦う理由など関係無い。

今までの俺は、”護る為”に戦っていた訳では無いのだ。

きつと、俺の中身は……もつと捻じ曲がっていて、歪んでいて、醜悪で、『英雄』なんて称えられるべき物とは似ても似つかない哀れな獣の末路。

「やあ剣崎少将」

そんな時に限り、誰よりも早く俺の居場所を嗅ぎ付ける男が居る。鎧衣左近。

昔からの馴染みであり、俺が死なせた鎧衣美琴の父親。

この人も 俺を責める事はしない。

なるべくして成った結果だと、娘の死すら容易く受け入れていた。

「俺の傍に寄るな」

「そう言う訳にはいかない。いつまで、そうして居るつもりだね？」

鎧衣さんの言葉に、初めて棘が含まれていた。

そんな事にすら今の俺には気付けない。いや、気付こうとすらしなかった。

だからこそ拳を、振り被る。

「この軟弱な拳で私を殴れると思って居るのかね？本気で」

「もつ……止めてくれ」

温い拳。

アツサリと鎧衣さんはそれを受け止め、尋常ならざる力で握り返して来る。

本当ならば殴り返してやりたいだろう。

殴って、殴って、こんな腑抜けは今直ぐにでも殺してやりたいだろう。

だが出来ない。

今の俺は英雄なのだ、世界にすら影響を及ぼしてしまったオリジナルハイブ落としての。

そんな英雄に手を出す訳にはいかない。

殺すなど、それこそ有り得てはいけない事だろう。

だからこそ、この人は必死に堪えている。

だが、それでも今の俺には関係など無かった。半ば抜け殻と化した俺にとって、今生きていると言つ実感すら無いのだ。誰に殺されようが、誰に恨まれようが、関係など無い。

寧ろ、殺して欲しかった。

一瞬でも早く、この悪夢が醒めてくれるのならば、と。

溜息混じりに、その場から居なくなる鎧衣さん。

そんな彼の姿を見送る事も無く、俺は屋上から見える夕陽をただ呆然と見ていた。

ユニーク10万突破記念

特別短編その？ 唯依編

橙色の武御雷。

篁唯依専用の武御雷の隣、それに寄り添う様に鎮座しているのは武御雷と似通ったフォルムを持った別の”何か”。

要塞級の溶解液を直に浴び、触手によって腕や足は吹き飛ばされてしまっていた。

それでも、その威風堂々とした様子は見ているだけでも伝わってくる。

1人の戦士と共に駆け抜けた、命を預けるに値する最高の相棒。

黒のメタリックフレームは血で錆び付き、その瞳には光は宿っていない。

それに、コレに乗る事の出来る唯一と言っても良い衛士は既に戦線復帰が絶望的とまで言われる怪我を負ってしまった。

聞いた話では、この機体が廃棄処分される事が決定したとの事だ。

「……………ありがとう」

血で錆び付いたフレームはゴツゴツとしていて、何処を触ろうが傷だらけ。

僅か数週間だけ光輝いた機体。

だからこそ、この傷の数は彼が駆け抜けた戦場の苛烈さを言葉にせずとも語っている。そして、その戦場を駆け抜ける事が出来たのはこの機体が彼を護り抜いてくれたからこそ。

だからこそ、私は感謝の言葉を述べる。

最後の最期まで　この無骨な戦士は、彼を護る事に命すら捧げて

くれた事に。

「貴方が彼を護ってくれたから、彼は今もこうして生きている」
ポタリ、と頬を何かが濡らす。

それは機体から垂れて来た、一滴のオイル。
瞳から零れ落ちるそれはまるで ” 涙 ” 。

「大丈夫」

流石に瞳までは届かないが、その涙を掬い取る様に手を包む。
この無骨な戦士は悲しんでいるのだ。

自分の相棒が、命を捧げた男が、未だに自身を責め続けている事に。
前に進んで欲しかった。

いつまでも、あの子供の様な笑顔で笑っていて欲しかった。
だが、彼は笑わない。

前にも進もうとはしない。

剣崎龍二の時は桜花作戦の時から、1分1秒たりとも進んでは居な
かった。

彼の身体はただ老い続け、
彼の精神はただ病み続け、
身体が死に、いつかは心が腐る。

「世界が彼を憎もうと、構わない。私が……彼を愛し続けるから」

それでも篋唯依にとって、それは些細な事でしか無い。
彼を愛し、愛され続けた日々。

その思いと願いは、今でさえ枯れ果てる事は無い。

例え 同じ戦場を歩んで来た仲間達が既に死して居ようと、私1

人で彼を支えてみせる。
それが私に出来る贖罪。

無力な私が出来る、彼女達への小さな贖罪なのだ。

溢れ出ていたオイルの涙は、いつの間にか止んでいた。

鎧衣さんが場を過ぎ去ってから、俺はその場を動く事は無かった。
辺りを月明かりが照らし、昼間よりも気温が下がっている。
流石にコート1枚では肌寒い。

右腕、が無いので左腕でコートを手繰り寄せて、コートを毛布代わりに星を眺める。

空に爛々と輝く星を眺めても、胸に空いた隙間が塞がる筈も無い。
ただ、僅かな時でも自分の事を忘れられればそれで良かったのだ。

大切な、大切だった昔からの相棒の”死”。
運命に立ち向かう事を選んだ紅き姉妹の最期。
誰よりも空を愛した勇敢な少女の魂の雄叫び。

今でも耳に残っている。

全員が、全員が揃って 最期の瞬間まで笑っていた。

『貴方と居る事が出来て楽しかった』と。

誰も恨み言など漏らさずに、寧ろこの最期こそ自身が望む最上だったと言わんばかりに。

「ちくしょっ……」

唇の端から、血の雫が落ちる。

歯が唇を噛み千切っていていようが、そんな些細な痛みすら如何でも良い。

どうやって彼女達に謝れば良いのだ。

どうやって彼女達に償えば良いのだ。

戦う事も出来ない身体である俺が、今更何を出来る？

戦うしか能の無い俺が今更階級を引っ提げて戻った所で、何の意味がある。

俺の存在に理由など存在しない。

生きている事が此処まで辛いのであれば、死んでしまえば良いのに。

死ぬ事だけは、決して許されない。

死ぬなと言われたから。

死んで欲しく無いと、生き残れと　イーニアが、クリス力が俺に

叫んだから。

俺は自ら命を絶つ訳にはいかない。

例え何が有ろうと、自分の命を自分で終わらせる事だけは出来なかった。

この時点で、俺の歪みが良く分かる。

死にたいと言いながら、結局俺は自分で死ぬ事など出来やしないのだ。

それをクリス力達の言葉の所為と言って、逃げて、見ない振りをして。

「誰か……俺を、殺してくれ……」

こんな悪循環、誰が望む物か。

心からの叫び。

剣崎龍二と言う存在を、跡形も無く消してくれる存在の登場を望む。
歪んだ願いだったとしても、俺はこの世界から消えたかった。

月明かりに照らされて、1人の男が屋上にある給水タンクの上に腰を下ろしていた。

彼を誰も見付けられないのは、隠れる事が上手いから。

そんな子供っぽい所はどれだけ時間が経とうと変わる事は無い。

「少将、身体が冷えます」

そんな彼をこうして容易く見付ける事が出来るのは、単に彼との付き合いが長くなった事による賜物なのだろうか？コートに包まった少将は私の言葉に反応する事無く、静かに夜空へと視線を向けていた。

「……綺麗ですね」

答えが返って来ない事など分かり切っている。

彼は、人との関わりをあの日から完全に断ってしまった。

決して誰とも関わろうともせず、決して誰とも絆を育もうとはしない。

それは当然、なのかも知れない。

愛した人々に先立たれ、自分だけ生き残って、帰還して来た。

それでも誰も彼を責める事も無く、寧ろ良くやったと労いの言葉を投げ掛けるばかり。

責めて欲しかったのかも知れない。

辛く当たって欲しかったのかも知れない。

何故、助けてくれなかったのか。

何故、護り抜いてくれなかったのか。

そう罵倒され、罵られた方が彼にとってはどれだけ気が楽になったか

英雄の抱える苦悩は、私には分からない。

「此処に広がる空は、少将が護った空です」

左手に、そつと触れる。

此方に視線を合わせる事も無く、彼はただボンヤリと空を眺めているだけだった。

今の私にすら 彼は興味が無いのかも知れない。

いや、この世界に”生きている”人々では彼の心は救う事が出来ない。

彼が本当に許して欲しいのは、自分が無力な為に死んで逝った仲間達。

そして

「少将、お部屋に戻りましょう。夜は冷え込みます」

誰よりも、自分に自分を許して欲しいのだ。

この辛い道から逃れる為に、彼はこうして毎日星を眺める。

人は死ぬと星になると言うから、もしかすればこうして死んで逝った者達にひたすら謝り続けて居るのかも知れない。

その姿は、哀れにすら思えた。

「龍二さん」

オリジナルハイブを落とした功績によつて、昇進した彼の地位。

それも将官クラスだ。

英雄としての知名度も、地位も、全てを手に入れた彼を私はいつしか”遠過ぎる”存在と認識して、昔の様に名前で呼ぶ事は無くなっていた。

下手な事をして規律違反などしてしまえば、彼を面倒事に巻き込んでしまう。

だからこそ呼ぶ事を躊躇っていたその名を、私は久しぶりに口に出す。

「龍二さん」

二度目。

彼は、反応を返してはくれなかった。

私に分かる様な、反応は返してくれなかった。

「龍二さん!」

三度目。

先程よりも強く、大きく、彼の肩に手をやって。

彼の目が初めて動揺する。まるで何かに迷っているかの様に、右往左往して居た。

「ッ、龍二　! ! !」

四度目の咆哮。

彼の目に、久しぶりの灯が宿る。

ハツとなった様に此方を振り返り、帰還して初めて
視線が重な
った。

「…………俺は…………俺は、何をすれば良い？」

「それは私では無く、貴方が考える事です。死んで逝った者達の為に何が出来るのか、生きている者達の為に何をしてやれるのか。貴方なら きっと分かる」

何かに縋る様な左手を握り返し、震える身体を包み込む。

声を押し殺して、泣きじゃくる姿は黒獅子と呼ばれた彼本来の姿とは程遠い。

まるで、欲を殺した子供時代を繰り返す様に。

私の胸の中で、少佐は泣いた。

泣いて、泣いて、泣いて、泣いて

「…………俺は、まだ戦える」

涙を拭う。

獅子がその両足を確り地へと踏み締め、また百獣の王として世に君臨する為に。

「でも、今の俺は1人じゃ何も出来ない。いや、昔からそうだった…………だから、頼む」

意思が籠った瞳が私を見返し、包み込んでいた両手を逆に握り返す。確りと、強く、だが優しく。

「こんな俺に力を貸してくれ。都合が良いと笑うかも知れないが、俺には……俺にはお前が必要だ。誰よりも、お前が……篁唯依が必要だから！」

声に出来ない叫び。

一緒に付いて来て欲しい、と言いたかったのだろう。

だが声に出す事が出来ない。もしも私が死んでしまえば 自分の周りには誰も居なくなる。そうなれば、本当に彼は孤独になってしまう。

だが、案ずる事は無いのだ。

剣崎龍二と共に戦い抜いた私が、彼に生きろと命令されて死ぬ訳が無い。

否、死ぬ事なんて有り得ない。

「大丈夫」

だから気丈に笑い返し、言っただけでやるのだ。

昔とは違う。

昔の私とは一味違う、今日は積極的な篁唯依の誕生日となった。

「貴方が生きている限り、私は死なない。貴方を独りには絶対にしない」

“龍二”が、また泣き始めた。

両目に光る涙の粒を拭い取り、頭を優しく撫でる。

嗚咽を漏らしながらも、彼も私へと気丈に笑い返そうとしてくれた。今はそれだけでも十分に嬉しい。

昔の私ならば、それで満足していたかも知れない。

「ただし、条件があります」

「……?」

「少将は女性に手が早い一面があるので、今後一切夜の外出を禁止します」

「はっ!?!」

「それと、今夜から私が少将のお部屋にお邪魔するので悪しからず」

「ちょ、おま、待て!?!どう言う事なの!?!ボク分からない!?!」

錯乱する少将の頭を軽く小突くと、顔を引き攣らせながらも彼は此方に向き直った。

うむ、宜しい。

これでキチンと宣言出来ると言う物だ。

「夜伽の相手は、その、私1人で十分でしょう?」

呆気にとられていた龍二が暫し私の顔を見詰め、納得出来たと言っ様に頷き始める。

なるほど、とか。

そうか、とか。

1人で勝手に自己完結されるのは少し気に入らない。

「あの、何が「やっぱり」なんでしょう?」

「……………本性」

私に聞き取れない程ボソッと呟いた龍二が、小さく微笑んだ。

10年後

小さな木作りの家。

決して裕福とは言えそうも無い家には、2人の母娘が住んでいた。

母は昔、国の為に戦う戦士だった。

娘はそんな母に憧れ、そして 父の気高き魂を誇っていた。

「お母さん!」

「どうしたの?」

「お父さんの話、聞かせて!」

「また?」

「うん!また!」

「仕方ないわね……いらっしやい」

「やった!」

無邪気に笑う娘の頭を撫で、私は物語を語る。

それは、自分の道に意味を見出した1人の男の悲しい話。いつまでも無邪気で子供だった、白髪の英雄の物語。

「お母さんは結局最後まで、一度もお父さんに勝てなかったの」

「うん、お父さんって強いね!」

「正真正銘の英雄……世界で一番強いお父さんよ?」

過酷なりハビリ。

生体義肢を使用する事で無くした右腕を代用。

更にはそれを戦闘可能なレベルに上げる為に、日頃から反吐を吐くまでシミュレーターに籠って訓練を続けていた。

それでも、生体義肢では限界がある。

反応速度が生身とは違い過ぎるのだ。

誰もが彼の戦線復帰を無理だと言う中でも、”彼女”だけはそれを許しはしなかった。

毎日毎朝毎晩。彼と共に有り、彼を励まし、彼を支える。

いつしか、彼女は「英雄殿の若妻」と周囲から認識され始める様になっていった。

そして

彼は、ある意味では到達出来ない境地へと辿り着いた。

勿論彼1人では成し得なかった事である。

故に、彼は声を大にして言う。

「俺の妻は、世界中で一番の良妻だ」と周囲に見せびらかす様に。

それから数日後、周囲に祝福されながら2人は小さな結婚式を挙げる。

数カ月後には彼女の妊娠が発覚。

致し方無く戦線を離脱する妻の姿を見て、肩を竦めながらも夫は言った。

“生きて帰ってくる”、とだけ。

「でも、お父様は遠い所に行ってしまったの」

しかし、彼は帰って来なかった。

撤退する部隊の殿を務めた際、置き去りにされた味方の1人を発見。その味方の撤退を援護する為に敵群の中央へ特攻を仕掛け、行方知れずとなった。

「でも、でもっ、お父さんは私達のこと見ていてくれるよね？」

「ええ。いつまでも、いつまでも」

膝の上で興奮する娘の頭を優しく撫で、彼女 ” 剣崎唯依 ” はこ

の世で1人だけ、夫の生還を信じて疑っては居なかった。

『生きて帰ってくる』と言ったのだ、彼は決して約束を破る男では無い。

だから信じている。

彼がこの家のドアを叩いてくれる事を。

風が吹き、唯依の髪を優しく撫でる。

その感触は彼の手に似ていて、思わず懐かしさが込み上げてくる。何年経っても、自分は変わらないと自身の性格に苦笑をしながら

「何か面白い事でもあったか？唯依」

風が辺りを吹き抜ける。

新たな運命を運んで、新たな命を運んで。

少女は、見た事の無い男を見て首を傾げる。

見た事が無いのに、知っている様な気がした事が変だと子供ながらに感じていた。

そして何よりも、見上げた母の頬に 涙が浮かんでいるのだ。

時を経て 2人は”また”巡り合う。

そして少女は、自身の父の顔を知る。

小さな表札が風で揺れていた。

今は薄くなってしまうた文字だが、何とか辛うじて読む事が出来る。

『剣崎龍二』

唯依

『愛華』

表札が、揺れている。

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（後書き）

唯依編終了

やめて、怒らないで、叩かないで……

唯依の話は他の人たちの話よりも悲しい物を書きたかったんです
悲しい……のだろうか？

本編で、この様な結末になるかは置いておいて……

これでまりもちゃん・悠陽・クリスカ・唯依の短編は終了した訳で
すが、

速瀬と香月博士の短編が読みたい方は「ワッフルワッフル」と（ry

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（前書き）

本編はあと少しばかり色を付けければ良いだけのこと
ならば、私が出る事を1つずつ成し遂げるのみ

感想に「わっふるわっふる」と書き込んでいただいた方々
正直……辛かったです（主に眠気的な意味で

日頃の感謝を込めて

特別短編その？

「それで？」

エプロンを折り畳み、リビングにて余り物で俺が作った炒飯を黙々とかつ込む女に疑惑の視線を向ける。当の本人はそんな視線を意に介す事も無く、俺特製の炒飯に舌鼓を打っている訳だが。その姿は正直、ムカつく。

「何よ」

「いや、ただ飯食いに来たって訳じゃ無いだろ？」

「アンタのご飯食べたくなっただけよ、事実」

夕呼の対面の椅子に座ろうとして、盛大に転ぶ。

と言っか夕呼。俺よりも何よりもテーブルと炒飯の心配するのは止めてくれ。

「テ、テメエ、唯我独尊もそこまで行くと害にしかならんぞ！！」

「元々害でしょうが。今更何よ、水臭い」

「水臭いって……ああ勝手にしろ、このバカ！それ食ったらサッサと出て行け！」

俺は頭をガシガシと掻き篦り、リビングで不貞寝しながらテレビを見る事にした。

コイツとマトモに会話するのはハッキリ言ってやるが、今の俺のス

キルでは無理だ。

いや、会話と言える物が成立するのは精々神宮寺程度か？

兎に角、俺ではコイツを捌き切る事が出来ないと言う事が分かって頂ければそれで良い。

点けたテレビのチャンネルでやっていたのは、別に何て事は無いバラエティー。

サングラスの司会者様がゲストさんと話しをしたり、何やらゲームをしたりと随分忙しい番組である。とは言え、司会者は超一流なのだから忙しくもなるのか？

まあ、俺はプロデューサーじゃないから分からんが。

「ホントはもう一つだけ、用事あるわよ」

「あ？」

サングラスのお方が「一旦CMです」と告げて画面はCMへと移り変わる。

丁度そんなタイミングで声を掛けられたので、一応振り返って夕呼の顔を見る事にした。

特に切羽詰っていると言う様子も無く、逆に余裕すら伺えるその表情。

マジで何の用だ？コイツに俺、何か貸してもあつたか？

いやいやいやいや、地で女帝に行く女が俺に何かを頼む事なんて有る訳が無い。

そうだ。学生時代の頃を思い出せ。

コイツがこんな顔をする時は決まって

「私と勝負しない？」

勝負事だらけなのだ。

俺の予想は大当たりで、テーブルに肘を付いて不敵に笑う夕呼が此方を見詰めている。

何の勝負をするのかは知らんが、実は学生時代の夕呼との勝負には1つ隠された真実があるのだ。多分、コイツはそれを払拭したいのだろう。

中身は　ガキだな。

呆れたぜ、と呟きながらも何処か俺も乗り気だった。

当たり前だろう。

男の子だし、

勝負事だし、

何よりもコイツとの勝負は、燃える。

周りの事など考えず、この世界には香月夕呼と剣崎龍一しか存在しないとも言わんばかりに周りに多大な迷惑を掛けるこの2人の勝負だ。

気兼ね無く、俺も力を振るえると言つ物である。

「良いぜ？乗ってやるよ、お嬢さん」

「二言は無いわね。その顔、泣き面にしてやるわ」

「出来るならやって見せる。泣き喚いて許して下さい、つっても許さねえからな。覚悟しろ、痴女。俺の腹の上でヒーヒー喘がせてやるよ」

「なら、あたしが勝ったらアンタは一生あたしの奴隷よ。モルモツトの代わりにタップリ可愛がってやるうじゃない、毎日鞭で喘がせてやるわ」

「……」

「ケラケラケラケラ」

「うふふふふふふ」

お互いの宣戦布告の後、夕呼は勝負の内容を口にした。実に単純で、実にアツサリとした物。

ただし 運が悪いと冗談抜きで命に関わる問題だ。抵抗は無かったが、流石に此処まで大事になるとは最初思っても居なかった。

勝負方法は

警察と犯罪者の真似事。それ故に命さえ危険に曝す勝負。追跡者と逃走者に別れる、公道で行われるルール無用の一本勝負。

勝負名 “カーチエイズ”

ユニーク10万突破記念
特別短編その？ 夕呼編

全身黒のライダースーツに身を包んだ龍二の駆るバイク。
黒のメタリックフレームに、流星の様な赤い線が入られた特別製のVmax。

今でも尚、根強い人気を持つ和製アメリカンと言われるバイク。
コレの製作の際、日本のエンジンニアがアメリカに「作るにあたってどの程度の出力を目安にすれば良いか？」と言う質問に「出るだけ」と即答したと言う逸話は結構有名な話である。知名度があり、性能も良好な日本が誇れるバイクの1台だ。

それに跨ったコイツは、兎に角ヤバイ。
何がヤバイって　まずカーブですらブレーキをあまり掛けない。
ドリフトの様な、見ている此方にはガードレールに突っ込むのでは無いかと言うハラハラ感を与えて、カーブを突っ切って行く。

あるバイク乗りは言った。

「狂っている。ありや、人間の出来る事じゃ無い」
ある峠の覇者は言う。

「真の峠の覇者はあの人だ。俺なんて、まだまだ」

付けられた仇名は「黒い流星」やら「漆黒天使　ダークエンジェル」
、「Vmaxの悪魔」などなど。逸話も腐る程存在し、お前本当に教師なのか？と言わんばかりの勢いである。

エンジンを思い切り吹き、轟音を辺りに響かせる。
此処は住宅街だと言うのに遠慮をしないヤツだ。そんな事を言いながら、あたしも愛機のエンジンを掛ける。

「ストラトスカ……何だ、サファリパークにでも突っ込むつもりか？」

「アンタこそ、そのVmaxに二ト口積み込みたいなんて頭大丈夫かしらね」

「一定の成果を出した物は更にその上を目指したくなる。良いだろ、別に」

下手な車すら凌ぐ加速力を持つ『加速の化物』

Vs .

ただ勝つと言う事を目的に作られた『モンスターマシン』
その戦いの火蓋が、切って落とされた。

ルール

先にスタートするのは香月夕呼。

その後、龍二スタート。

龍二が夕呼のストラトスを抜いた時点で勝負は終了、龍二の勝ちとなる。

ゴール地点まで夕呼に追い付けなかった場合、夕呼の勝利。
賭けた物はお互いに、自分の『身体』。

ゴール地点には叩き起こされた神宮寺及び篁が待機。
不正が無い様に待機すると、緊急時の処理を担当する。

「アンタは一生懸命、女の尻を追い掛けなさい」

「ならお前は一生懸命、俺に尻をブチ抜かれない様に注意しろ」

先にアクセルを踏み込んで龍二家の前をスタートする。

このまま峠へ雪崩込み、交通ルールすら無視した地獄の戦いを演じる。

役者に成るのはあたしの主義じゃ無いが、コイツとの勝負に無駄な

小細工は不要だろう。真っ向から向かい、真っ向から叩きのめし、
今までの屈辱全てを払拭する。

「…………潰す」

覚悟に満ちた声が、自然と口から零れ落ちていた。

何を必死になっているのやら…………

煙草を吹かしながら、ストラトスの尻を見送る。

何がしたいのかわらんが、別にアイツにとっては大事でも無いのだ
ろうに何故かアイツは必死になっている。まあ珍しく必死な夕呼の
顔を見られたと言うのは良い収穫ではあるが、かと言って無理をさ
れては敵わない。

何が言いたいのかと言うと、結局俺は何がしたいのかも分からずに
この勝負にブチ込まれたと言う事だ。

「…………行くか」

十分エンジンも温まった。

それに、コレ以上ハンデを付けると俺でも追い付けなくなる。

それはプライド的に傷付くので、遠慮願おうでは無いか。

スタートダッシュから400m弱まで移動するのに凡そ10秒。

ああコレは

「ブレーキは要らねえな…………ッ！！！！」

踏み込むペダル。

同時に、噴出す煙。

俺を前へと押し出すバイクが、今の俺の足であり全てである。

住宅街の中を大型バイクが疾走する姿は客観的に見てギャグにしか思えないが、コレが真剣勝負なのだから笑えない。

今は取り敢えず、死ぬ気で夕呼の尻を追い掛けるでしょう。

バックミラーに、黒い流星が写っていた。

カーブをブレーキを掛ける事で曲がるのではなく、機体と身体を曲げる事で無理矢理滑り込んで行く様は見ている此方に鳥肌を立たせる。

フレームが地面に辺り、赤い火花を奔らせても

無言。

無言でありながら、凄まじいまでの圧力。

追われていると言う精神状況があたしの冷静な判断を鈍らせる。

距離はまだ200m程は開いている。

開いているのだ、ミスさえしなければ十分ゴールまで間に合う。間に合う筈なのに、人は此处でミスをする。

焦っていたのだ、私は。

だから　アクセルを踏み込んだ。あのVmaxを此处で突き放さなければ、何よりもあたしの精神が保てない……ッ！！

成る程、などと何処か冷めた部分のあった自分が理解する。

剣崎龍二が『Vmaxの悪魔』などと言われていた理由だが、分かった気がする。

アレは確かに悪魔だ。

ブレーキすら掛けず、もしかすれば自分が死ぬかも知れないと言う危機感すら吹き飛ばして、アレはただ目標を抜き去る為だけに命すら賭けているのだ。

勝手に感じてしまう殺意。

追い付かれればコロサレル様な錯覚。

追って来る人間が、今では化物にすら見えて来る。

Vmaxのエンジン音が、変わる。

Vブーストシステム。

エンジンが6000回転になった辺りから、インテークマニホールドの前後を繋ぐバタフライバルブが開き始めて8500回転へと変貌する。

もうそれは、別のバイクだ。

Vmaxの出せる最大速度が、今、この場で開放された。

アクセルを踏み込んでいると言うのに、ピツタリと後ろに付いたバイクは決して離れない。寧ろ、その距離を確実に詰めて来ている。

此方のエンジンの轟音が、たった1台のバイクの轟音に掻き消されて行く様。

僅かばかりの勝利の希望が、一瞬で敗北の絶望へと塗り替えられていく様。

バックミラー。

Vmaxの悪魔の姿が、先程の様に後ろには見えない。

当たり前だろう。

悪魔は　　あたしの横を走っているのだから。

だが、此処で負けてやる程あたしだつて落魄れちゃ居ない。元々、ストラトスはラリー用の中低速を設定されている。そう言う意味では、速度はそう易々とは落ちたりはしないのだ。ならば抜かれない様に確りと前をキープし、ゴール前の狭い通路まで逃げ込む。

「　　ッ!」

理論は出来ている。

出来ていると言うのに、コイツはその理論すら重圧でグチャグチャに変えて来る。隣を走っていたバイクの速度が少し落ち、あたしの尻を追う形になる。

だが、寧ろそれが辛い。額に滲む汗。

手汗は、もっと酷い事になっているだろう。

次のカーブ。

アクセルを踏み込み、少しでも差を広げなければならない。ブレーキを踏んで保身を考えていては、決して勝てる相手では無いのだ。

「　　ッ、あ　　!？」

だが、考えて欲しい。

今まで自然と保身をしていた人間が、行き成り命を棄てる事など出来る筈も無い。

アクセルを踏み込む瞬間、咄嗟に浮かんだ死のイメージ。思わずブレーキを踏み込み、回転する車体。

グルグルと周る視界が、あたしの見た最後の光景だった。

「こ、うこ！」

誰かがあたしを呼ぶ。

耳元で怒鳴るな、五月蠅い。

「夕呼！？大丈夫か、夕呼！！」

「……つるさい……此処……何処よ……」

「お前が起こした事故の現場だよ、このアホ」

コツン、と頭を軽く小突いて龍二は安心した様に息を吐いた。

事故？と疑問を浮かべていると、そう言えばと先程の出来事を思い出す。

あちゃー、と頭を抱えてしまった。

このあたしが事故……笑い話にもならない。

「まったく。何がしたかったのかは知らないが、無茶のし過ぎだ」

「そうなる様に駆り立てたのはアンタでしょうが」

「……そ、そりやお前、俺だって勝ちたかった訳だし」

急に声が萎みやがって、怒鳴ろうにも怒鳴れないじゃ無い。

まったく、何であたしもこんなヤツとの勝負に意固地になるのかしら

ね……

「今回は引き分けだな」

「……そうね」

龍二に引つ張られながら何とか車外に出る。

頭でも打つたのだろうか？やけに身体がフラフラする。

そんな状態でもガードレールに突っ込んだストラトスを見やり、自分の失態が情けなくなつて「はぁ」等と溜息を吐いてしまう。

これじゃ、校長に文句の1つや2つは言われるでしょうね……

「引き分け、な訳だが……今回の賭けは如何する？」

「嫌な事思い出すわね、アンタ」

隣でケラケラと笑う龍二を見やり、溜息を1つ。

別に何を言われようが文句は無い。と言うか、文句すら言えない。

一応助けて貰った側の人間だし……あたしにもそう言う常識はあるのだ。

「お前と俺で1つずつ。相手をお願い出来る、コレ如何だ？」

「……何それ」

「フフン。俺が考え付いた1つの結論だぜ、ベイベー」

してやった、と言わんばかりに笑う龍二は正直見えていてイラつく。

コイツって毎日あたしにこんな感情を抱いている訳だ。

仕方が無い、今度からは少し自重してやるっじゃ無い……

そう思いながら龍二の願いとやらを聞いてやる事にした。

「俺の願い？まあ、別に前を腹の上でヒーヒー喘がせても楽しいけどお？」

また飯でも食いに来いよ。今度はちゃんとアポ入れて、な」

「……………アンタ、バカでしょ」

「っざけんじゃねえぞゴルアツ！！」

やっていられるか、と言わんばかりの勢いで回転した龍二はそのまま動かなくなつた。

不貞寝でもしているのだろう。

相変わらず、頭の中は子供の様なヤツである。

「まあ……………でも」

そんなコイツに学生時代とは言え、何もかもを曝したあたしもあたしだろつな。

それ以来、如何にもコイツ。あたしの物ってイメージが拭えない。新しい恋を求めているコイツが、あたしの事を今でも想っている筈も無いのだ。

だけど、今の言葉は結構嬉しかったりする。

「……………ありがとね」

「当たり前前の事だろ、バカ」

お互いに顔を見せ合う事も無く、恥かしそうに微笑みながら。

小さな戦いの幕は閉じた。

「お前、もしかしてアレか？学生時代のコンプレックスを破りたいから俺に挑んで来たわけ？あの「勝負事じゃ1回も俺に勝てない」ってヤツ」

「まあ多少はそれもあったけど、ただ走りたかっただけよ」

「……ただ走りたかっただけ、ねえ」

「何よ」

「別に？」

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（後書き）

次回の速瀬編で短編も本当の終わり

アンケートの受付は終了致しましたので、

何かご要望がある方は取り敢えず感想へお書き込み下さい
その分は次回の時に回します

しかし、アレですよ

今は兎に角休みたい

ネタをグルグルと考えているのは良いが、それを文章にする作業が
辛い

死んできまゝす

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（前書き）

短編ラストの速瀬編

本編でも早く……絡ませたい……

日頃の感謝を込めて

特別短編その？

《……勝った？》

《ええ。文句無しの勝利です、速瀬中尉》

《驚きました……まさか、少佐に勝てる様な日が訪れるなんて……》

3機の不知火の前で膝を付く1機の機体。

この横浜基地に於いて、その存在を知らない者は居ないとまで言わしめた戦術機最速を誇る機体とそれを操る衛士。

不知火F？型と、剣崎龍二である。

《……我が子の成長を噛み締める親の気分だな、こりゃ》

網膜投影に浮かぶ少佐の参ったと言わんばかりの顔にガッツポーズを浮かべる速瀬。それとは対照的な宗像は、勝利を静かに噛み締めていると言った具合だ。

風間は何だか、いまひとつ状況を飲み込めていないご様子である。

《少佐、賭けのこと忘れちゃ居ませんよねぇ？》

《忘れたいが……忘れさせて貰えないみたいだ。熱烈な出迎えはご遠慮したい》

賭け

この3対1の変則マッチを行う際、少佐が速瀬に言い放った一言。

『コレに勝てば、お前の言う事を1つだけ聞いてやる』
分かり易い負けフラグ。

またの名を、死亡フラグ。

寧ろ彼にとつてはそれ等全てがご褒美に変わる事もあるのだが
それは置いておく。

現在は彼が負けたと言う事実が大事であり、
その途中にどの様な事があったのか等関係は無いのだ。

《覚悟は良いですか、しよ・う・さ》

《好きにしる。男に二言はねえよ》

不敵に笑う速瀬と、仕方なしと全てを諦めた少佐の図はとても珍しい図ではあった。

本来ならばコレが逆の筈なのに、何故か今回は少佐の敗北によってこの奇妙奇天烈珍妙な図式が出来上がったのである。

既に宗像と風間は着替えの為に退出し、シミュレータールームに残るのは3人組代表格である速瀬水月と今回罰ゲームを受ける事になった剣崎龍二。

そして、オペレーターを務める涼宮遙だけである。

「……少佐、あの」

小声で龍二に話し掛ける遙。

彼女はこの勝負に仕込まれていたもう1つのハンディを知っているからこそ、今回の龍二の敗北は致し方の無い事だと知っていた。

寧ろ、何故そのハンディを背負っていないながらもこんな馬鹿な賭けをしたのかは流石の彼女にも理解出来なかった。

副司令に頼まれたとは言え、旧型OSで新型OSに勝てる訳が無い

のだ。

剣崎龍二は確かに子供っぽい所があるが、自分の実力を過信する男では無い。

相手との力量差を確りと分析して発言する、実は理知的な男でもあるのだ。

そんな彼が 何故？

「どうかしたのか、逢」

「……どうして少佐はこんな事を？ 本当なら、理由を説明して水月に」

「止めて置けよ。アイツの顔、見てみる」

言われ、水月の顔を見る。

少佐の罰ゲームを考えている姿は、確かに何処か楽しそうだった。

孝之くんを失って、悲しみに暮れていた私達に訪れた小さな光。

今の水月が確りと立っていられるのは、少佐が『あの時』声を掛けてくれたから。

私に対してもそうだ。

他の人よりも明らかに気を使い、明らかに構ってくれる。

その為に部下の人達から袋叩きされる事もあるのに、それすら厭わずに毎日一声。

それだけは欠かさなかった。

ちよっとした優越感と、ちよっとした罪悪感。

私と水月は過去から吹っ切れた。彼のお蔭で、漸く前へと進み出すうとしていく。

だが彼は未だに過去を見ている。私達に声を掛ける度に、罪悪感に

苛まれる。

「嬉しそうだよな、アイツ」

「だからって幾ら何でも……」

「良いさ。俺1人が対象だって言うなら、飽きるまで付き合ってるから」

少佐が英雄と言われているのは、きっと戦場での強さだけでは無い。こつと言った優しさや、悲しみを背負う覚悟があるからこそ英雄と称えられるのだ。

女好き、と周りの人々は語る。

だが良く見てみれば、彼女達は何かしら過去に重しを背負っていた。少佐がやっている事は所謂、カウンセリングなのだ。

話を聞いて、優しく接して、意識を自分に向けさせる。

求められたのならば、彼は喜んで身体すら捧げるだろう。

哀れんでいる訳でも、目立ちたい訳でも無い。

過去に囚われる事の辛さをしてしている彼だからこそ、彼女達の罪すら背負って彼は贖罪の道突き進もうとしている。

この人は、悲し過ぎる。

周りを幸せにする為に、1を犠牲にする。

だが彼は その1を自分にする事で、最大限の効果を出そうとしているのだ。

人間の出来る最大の尊い行為、自己犠牲。

「あ、でも、心配してくれてありがとう。本当なら俺が気を張ってなきゃいけないのに、余計な気を使わせちまって悪い」

舌を出して悪戯つばく笑い、少佐は微笑みすら浮かべて水月を眺めていた。

例え、何と頼まれ様と彼は嬉々としてそれを受け入れるだろう。

(……羨ましい、かな)

残念な気持ち。

自分の足がこうでなければ、私も水月の隣で一緒になって少佐の罰ゲームの事を考えていられたかも知れない。

こんな事を少佐に言っつてしえば彼は私にまで何かしらの気を使っつてしまっつたらうが。

そこまですて、彼の気を引きたい訳じゃ無い。

ただ、訓練の際に当たり前の様に私を指名してくれただけで良いのだ。

今は十分、それで幸福だと思っつ。

「よしっ、決めた!!」

「水月、どんなお願いにするの?」

「それはねえ」

やれやれ、と呆れた様に首を振る少佐は彼女の言葉を心待ちにしてる様だつた。

実は楽しんでるのだらう、彼も。

D.Sの様に見えて、Mでもあるのかも知れない。

「1日、わたしの『執事』をやっつて貰っつわ!!」

ただ、その一言を聞いて
少佐の顔に浮かんでいた微笑が消え、氷点下以下の絶対零度の無表情が現れた。

ユニーク10万突破記念
特別短編その？ 水月編

執事

それは仕える者

執事

それはかしく者

執事

それは主の生活すべてをサポートするフォーマルな守護者

「あ、司令。お疲れ様です」

「うむ……私がナレーションをしなければならん様な気があ、したのだあ」

ラダビノット司令の良く分からない執事の定義を聞き、俺は頭を抱えた。

まさか、そんな、有り得ない。

執事だと？

執事ってお前、アレだろ？

黒服とか着てさ、「お嬢様。お茶の準備が整いました」とか言う奴だろ？

それってさ、つまり小間使いの延長線の様な物だろう？

夕呼にやっている事を彼女にもしろ、と言う事か。

「……はあ」

「申し訳有りません！申し訳有りません！うちのバカが少佐にまさかこの様な無礼な真似を働いた等と……本当に申し訳ないと思っ
ている所存です……ッ！」

「いや、別に気にしちゃ居ないが……」

必死に頭を下げる伊隅を制し、国連の制服では無い”ソレ”に袖を通す。

案外と着心地は良い。

伊達眼鏡を着用し、この場では浮くのであるうその姿になった自分を鏡で見やる。

鏡の中に写る執事服と一般的に呼ばれる物を着用した俺は、何とも言えない表情を浮かべていた。決してこの状況を楽しんでいる訳では無く、寧ろ苦痛の一環として受け入れてしまっている。

基本的に、どの様な事も楽しむ剣崎龍二と言う人間ではあるが彼は兎に角、自分が小間使いだと思われる事を嫌う。

確かに強力な主夫スキルを携帯しては居るが、それはあくまで大勢の人々を喜ばせる為に鍛え抜かれた物。

それを誰か1人の為に振るうと言うのは、彼自身納得が出来なかった。だからこそ彼は小間使いだの何だの言われる事を嫌い、親しくなった者以外の人前では決して料理をしない様になっているのだ。している、のだが……

「伊隅様」

「い、伊隅様!？」

「お嬢様”の上司ともなれば、敬うのは当然の事。申し訳有りませんが私は所要で少しばかり席を外します。後程必ずお時間を作りますので、暫し失礼致します」

この男、実は隠れ完璧主義者である。

やるからには完璧に、パーフェクトを目指す。

適当だの、ヤル気が出ないだの言っているが、その実中身は中途半端を許さない融通が利かない男でもあるのだ。

そんな彼が、”お嬢様”に出す料理を自ら作らないと思うか？

PXの京塚曹長。

彼女は確かに優秀だし、年季も彼とは桁違いだ。

だが、味は違う。

少し濃い目の合成食の食事ともなれば、万人受けする訳では無い。だからこそ

「巖谷様でしょうか？」

『あ?!お、お前、剣崎か!?!つつか何だ、その喋り方!』

「説明は後程。今直ぐ食材を用意して頂きたいのですが」

『しょ、食材？合成じゃダメなのか……？』

「お嬢様の口には合いません。申し訳有りませんが、直ぐに天然物の用意を」

『お、おう。何だか分からんが直ぐに、だな？』

帝国から、天然物の食材を調達。

「申し訳有りません、京塚様。キッチンを少しばかりお借りしたいのですが……」

「龍二ちゃんかい！？アンタ、その格好は……」

「説明は後程」

調理場所の確保。

3時間程待つと、天然物の食材がキッチンへと雪崩れ込んできた。何人前あるのだろうか？と思わず疑問を覚えずには居られない食材を前にして、京塚曹長以下食堂を切り盛りする者達は開いた口が塞がらなかった。

「……様、お嬢様」

ドアをノックする音がする。

時刻は……7時。

ちよつと朝食の時間だ、起きなければならぬ。

「ん……誰よお」

寝ぼけ眼を擦りながら開けたドアの先。

執事服を着込んだ少佐が恭しく此方に頭を下げ、立っていた。

思わず口を開けて、その場に呆然と立ち尽くす。

いつもならば無造作に整えられた白髪を全てオールバックに纏め上げ、

着込んでいる服は見まがう事無い執事服。

そして自分を「水月」や「猪」と呼ぶ事無く、お嬢様などと呼んでいるのだ。

確かに、昨日は執事をしると言った。

ただ彼女からすればそれは自分に構って欲しいと言う様な意味合いであり、決して執事服を着込んで自分の身の回りの世話をしると言う事を言いたかった訳では無いのだ。

「あ、えつと、その……」

「お食事のご用意は既に出来ております。外で待機しておりますので、お着替えが終わりましたらお呼び下さい」

またもや恭しい一礼。

静かに締められたドアを前にして、わたしは何とも言えない表情を浮かべていたと思う。

く着替え中

「お、お待ちせ」

「いえ、待つと言つ程では……では朝食を」

一礼。

決してわたしよりも前に出ようとはしないその姿は、確かに執事だ。執事ではあるが、いつもの彼とは程遠い”従者”の姿。その姿に違和感を覚えるのは当然の事だろう。何せいつもの彼ならばノックと同時に「サツサと起きろ、朝飯全部食つちまうぞ〜？」なんて事を平然と言つてのけ、確りと身支度を整えられていないわたしを見ては「うわっ、山籠りでもしたのか？」と楽しそうにケラケラ笑うのだから。

それが今では

「お嬢様」とわたしを呼んで敬っている。

何とも背中が痒い。思わず痒いと叫んでしまいたくなる程、痒い。

無言のままPXに進み、PXに足を踏み入れた瞬間　言葉を失った。

いや、言葉を思い出せなかった。

真ん中の机。

明らかに他のどの席の食事よりも豪華な”ソレ”を見せられ、思わず後ろを振り返る。

無表情の少佐が「あちらです」と席を指していた。

指差している席の先には豪華な食事。

ああ成る程、羞恥に耐えながら食べると言つ事か。

「お口に合えば宜しいのですが……」

「お口に合えばって……あれ、手作り？」

「当然で御座います。お嬢様のお口に入る物を私が作らずして、誰が作ると言うのでしょうか。全てはお嬢様が為で御座います」

あ、顔が引き攣り始めた。

誰が見ようと、この顔は無理をしている顔である。

やはり　自分が自分の違和感と言うヤツを一番良く理解しているのだろう。

引き攣った笑顔を携えたまま、少佐は席の椅子を引き、「此方へ」等と執事の真似事していた。何ともまあ、頑張る人であろう。

「ありがとう」

ならば、それに付き合ってやるのも礼儀の1つか。

引かれた席に座り、後ろに控えていた少佐の顔を見ると何とも言えない様な草臥れた表情を浮かべ、此方を向いていた。

早く食べる、視線だけがそう訴えている。

目の前に広がるのは朝、と言う事もあり魚などの海鮮料理が殆ど。

とは言え、それ等は如何考えても1人で食べられる量では無いのだ。食材を無駄にする事を嫌う彼が何故？と考えて思い付く。

つまりは

「悪いけど、遙達呼んで来てもらえる？」

「畏まりました」

待っていました、と言わんばかりの一礼。

軽やかな足取りを携えて、少佐は嬉々としてPXを後にした。

「多恵、それ私の!」

「あ、茜ちゃん、ごめん!でも、でもっ、これ美味しいから……!」

「あはは!仕方無いよねえ、これは」

「美味しい!少佐って料理も出来るのか……」

「凄いね」

「大尉、些か食べ過ぎでは?」

「うっ!??そ、そう言っお前こそいつもよりも食べているじゃ無いか。え?宗像よ」

「本当に美味しいです。このお魚、鯖かしら?」

「良かったね、水月。少佐が頑張ってくれたから食べられるご馳走だよ?」

「ふんっ!当然よ、わたしの執事だからね!」

「お嬢様、口元にご飯粒が」

「いつ!??」

朝のPXで巻き起こった笑いを思い出す。

1日限りとは言え、こうして少佐を独り占め出来ると言つのはラッキーだった。

こうして美味しい朝食にも巡り合えるし、

周りの連中には少佐がわたしの執事であると言つ事がアピール出来るし、

もう一石二鳥どころか一石三鳥、もしくは四鳥だ。

「疲れるよな、お互い」

昼時を過ぎたPXには人が居らず、わたしと少佐だけが静かに席で雑談を交わしていた。

少佐はと言つと、黒のタキシードを脱ぎ、Yシャツの首下を緩めていつも通りの感じで此方に話し掛けて来ていた。

やはり、此方の方がシツクリと来る。

「けっこう楽しいですよ、わたしは」

「そりゃ今だからこそ、だろ？俺は苦痛以外の何物でもねえよ」

淹れられたお茶　ダーズリン・ティーと言われるらしい　を丁寧に呑みながら、少佐は溜息を吐いた。相当疲れているのだろう、呻きながら肩をトントンと叩いている。

「わたし、やりましょうか？」

「あ？やるって……何を」

「肩叩き」

「良いよ、爺さんじゃあるまいし……あ、いや、やっぱり頼む」

少佐の許可を貰い、肩を軽く叩く。

想像していたよりも、大分肩は硬かった。

相当凝っているのだろう、優しく揉み解す。

「立場が逆、だな」

「良いじゃ無いですか、別に。わたしにとっては、どっちでも良いですから」

「それは俺がいつも通りでも、執事でも良いって事か？」

「いや、少佐の執事はもう良いですよ。堅苦しくて、息苦しいですから」

その答えにケラケラと笑って、少佐は気持ち良さそうにわたしの手に身を委ねる。

何故か知らないが、PXにはわたし達2人しか居ないからだろうか。

少佐は無防備な姿を晒し、段々と眠気すら覚え始めたのだろう。

コックリ、コックリと首を動き始めた。

「眠いですか？」

「あ？いや、まあ……ちょっとは」

「良いですよ、寝ちゃっても。別に誰も文句は言いませんし」

そうか、と軽く呟いて少佐が目を瞑る。

完全に無防備な姿だ。コレで既成事実を作るのは容易くなった。
なった、のだが

「……改めて見ると、年上とは思えないわよね」

天使の様な寝顔、とまでは行かずとも静かに眠る少佐の顔は何とも幸福に満ちている。

見ている此方まで幸せになってしまいそうな、そんな表情だ。

隣で眠る少女を見やり、溜息を1つ。

自分まで寝ちまったら世話ねえだろうが　そう呟きながら、先程まで自分が着ていたタキシードを優しく掛けてやる。

気持ち良さそうにスヤスヤと眠る彼女は……気付いているだろうか？

今日は明星作戦が決行された日。

言わば、彼女の大切な者がこの世から去った日。

その悲しみが少しでも晴れるならば、とこうして道化に身を落としたり
た訳だが……

「必要無かったかな」

隣で眠る少女は幸せそうで、

自分がこんな事を企む必要性も無かったのかも知れない。

寧ろ、逆に気を使わせてしまったと申し訳ない気持ちになってくる
のだ。

「少佐、副司令がお呼び」

PXの入り口。

シート、と伝令を伝えに来たピアティフ中尉を制して水月の顔を見る。

大丈夫。まだ幸せそうに眠っている。

「悪いが、夕呼に遅れると伝えてくれ。もうっ少しだけこの子の様子を見る」

眠り姫の頭を優しく撫で、彼女が良い夢を見られている事を祈る。辛い事があった後には幸福が待っている。待っていないければならぬのだ。

だからこそ、今日と言つ日を境にして

「お休みなさいませ、お嬢様」

彼女に神の祝福が有らん事を。

眠り姫の頭を優しく撫でながら、俺も暫くだけ彼女の従者を演じるとしてしよう。

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（後書き）

ウォォーター・C・ドォネーズ

執事の中で私は彼が1番好きです

72 11月12日 夢見る若者（前書き）

1日3作もすみません

一気に投稿すればよかったです

短編を先に仕上げなければならなかった為に、今日中に本編が挙げられるか如何かわからなかった。この様な結果となりました

ご迷惑をお掛けします

白銀

へりが、オレ達を迎えに現れる。

操縦桿を握るのは龍二さん。

此方を見た時、真つ先にオレに向って笑い掛けてくれた。

その表情は「やったな」とか「おめでとう」なんて物じゃ無い。

見詰めている龍二さんの表情が語っていたのは、そんな優しい内容じゃ無い。

『 漸くスタート地点だぞ、少年』

そう言いた気に、口の端が吊り上っていたのは今でも良く覚えてい

る。
へりのプロペラが回転し、風が渦巻く最中まりもちゃんはこの方を
厭しい目で見詰めている。

その後ろ　へりの操縦を自動に切り替えたのか　昨日出会った
時とは違う、アロハシャツとジャージに身を包んだ龍二さんが微笑
んでいた。

“安心しろ”と言わんばかりに此方にウィンクすると、突如まりも
ちゃんに耳打ちをする。

顔を真つ赤にするまりもちゃんだったが、龍二さんの話の内容の方
がぶっ飛んでいたのだらう、急にその顔を蒼白に染める。

怯えた様な目付きで龍二さんを見るまりもちゃんと、堂々とそれを見下ろす龍二さん。

傍目から見れば、イジメの現場にも見えなくは無い。

とは言え、まだ短い付き合いだが龍二さんが悪い人では無いと薄々感じているオレだったので、今回のこの会話にも大して疑問は抱かなかったが。

「状況終了だ。現時刻を持って、総合戦闘技術評価演習を終了する」

龍二さんの良く響く声が耳に届き、

それを聞いた皆がそれぞれ脱力して行った。タマに至っては膝から崩れ落ちている。

だが、まだ合格になった訳では無い。

オレは未だに、龍二さんの顔を見詰めている。

「ふっ……結果を早く聞きたがっている急かし屋が居る様だな。別に聞く必要も無いだろう？当たり前”合格”だよ、合格」

特に興味も無さそうに呟いた龍二さんの声は、次いでオレの感動の叫びによって打ち消されていた。

神宮寺

『神宮寺軍曹、コイツ等は”合格”だ』

『え……！？』

『例えお前がどのような評価を下していようが、俺がその評価を握り潰す。何が起ころうとコイツ等には合格して貰わなきゃ困る』

『し、しかし……ッ！』

『軍曹。コレは個人の意思では無く、副司令の意思でもあると言う事を理解しろ』

先程耳元で呟かれた事は、私に疑惑を持たせるには十分な物だった。知るべき情報では無いとしても、彼女達は 207分隊は私の教え子なのだ。それが危険に曝されると言うのに、黙って見ていられる程に私は甘くは無い。

抗議の視線。

無言の圧力。

剣崎少佐はそれに屈する事無く、真正面から受け止めている。当たり前だろう。常日頃から将官クラスからの圧力に耐え抜き、寧ろそれを自身の発言や行動で黙らせて来た帝国お抱えの時限爆弾の様な人間なのだ。

いつ決起されるか、いつ自分に牙を剥くか。

それすら分からない巨大な爆弾 いや、核兵器の様な物か。

「さっきの、気に入らないか？」

「……命令ならば従うのみです」

「その言い草じゃ、納得は出来ちゃ居ないみたいだな」

後ろでグッスリと眠る教え子達にはこの会話が聞こえる事は無い。別に、聞かれた所で何も無いのだが　盗み聞きされている気配も無いので大丈夫だろう。

それが分かっているからこそ、少佐もこうして話しているのだ。

「別に隠す様な事じゃ無いが、連中の実力は他の訓練兵と比べても群を抜いている。それを遊ばせておくのは勿体無いだろう？ただでさえ1度落ちていているのに、2度も落ちれば再起のチャンスは皆無だ」

それに、と前置きをして、少佐は此方を見る事無く呟く。

小さな声だった。

だが、先程の理由よりも断然色濃く感情を感じる『剣崎龍二』と言う個の意思。

それが、伝わって来る。

「時間が無い。彼女も……俺も」

終わりの見えない空。

目下に広がる海の少し先、私達が寝泊りしていたテントが見えて来た。

あと数分もすればあの場に全員を降ろし、この子達にも少しばかりのバカンスを与える事が出来るだろう。

少佐の操縦桿を握る手が、先程よりも一層強くなった気がした。

剣崎

「眼福、だな」

目の前に広がる素晴らしい楽園の映像。

大きいおっぱい。

ちよっと小ぶりなおっぱい。

寧ろ、男か如何か疑いたくなるおっぱい。

うむうむ。などと1人頷きながらその映像を脳の海馬に刻み込む。

焼き付ける。

後で整備班の連中にも自慢してやろう。

南の島には『おっぱいの楽園』が広がっていたと。

「しかし少年、お前さんは泳がないのか？」

「水着忘れちまって……勿体無いですよね、折角のチャンスなのに」

そう言いながらも、少年は何処か満足そうに笑っていた。

白銀武 別の世界から来たと言う、謎の多い少年。現段階での俺の彼に対する評価だが、並より上と言う程度だろうか。今の少年には技術があっても、それを生かす為の覚悟が圧倒的に足りていない。それでは戦場で命を預けるに値はしないだろう。

これから成長するのであろうから、楽しみではあるが。

「また来れば良いさ。今度も全員揃って、な？」

今の彼は、少し波に乗せて置いた方が良さだろう。

コレで訓練に対しても全力で取り組んでくれれば、それだけ俺の仕事も減ってくれる。

今の俺がやらなければならぬ事は戦場へ自ら赴く事では無く、新人達への叱咤激励なのかも知れない。

……やれやれ、歳は取りたく無いね。

「そうですね……また、こうやって皆で馬鹿騒ぎしたいです」

乗った。

垂らした釣り針に大物がヒットした漁師の気持ちは、きっと今の俺の様な気分だろう。何ともまあ、こう言う策略家ポジションは俺の立ち位置では無いと言うのに。

新人くんの為ならば、自らの位置すら変えろと言う事なのかね？

何と神様も面倒な天命を下してくれる。

こんな役職は、俺にとっては酷以外の何者でも無い。

「あ。そう言えば、龍二さんってテストパイロットだって聞きましたけど……」

「ん？ああ、そうだな。一応コレでも開発衛士筆頭だ」

「すげえっ！だ、だったら、自分用の専用機体とか……」

「あるぜ、一応。ワンオフ機体」

「そう言うのって、やっぱり憧れますよね！オレも乗ってみてえな

」！

「少年は良いね、夢があつて。今の俺にはそんな誇りやら何やらはねえな……」

大人になると、そう言うハートは何処かに風と一緒に流れちまう訳だよ。残念だけど」

そう言つて、煙草を啜える。

開発衛士であると言う事に俺自身誇りがある訳でも無く、ただ戦場に送られる試作品が実用に耐えられるか如何かのテストをする為に、毎回誰よりも早く新しい兵器に触れると言う事が楽しいと思つ。

……前線で戦い続ける奴等からすれば、俺の思考は狂つていと思われるだろう。」

実用に耐えられるか如何か全く分からない兵器片手に、命の遣り取りに嬉々として飛び込んで行くなんて変態か、それに準じる者だけだろう。」

因みに、俺はそのどちらでも無い。

強いて言わせて貰えば、刺激を求めている者だ。」

「お前も開発衛士になりたいのか？」

「そりゃ、まあ……新型なんて言われると心が躍りますから」

「それは若輩者の考える事だぜ、少年」

「え？」

「戦場で有無を言う物は戦場に立った事のある奴にしか分からない。何だと思つ？」

「えっと……性能、ですか？」

「違う」

「じゃ、じゃあ、コストパフォーマンス？」

「No」

少年は首を捻り、考えている。

どうやら答えは出て来ないらしい。やはり、この程度の基礎的な質問に答えられない様では、まだまだ彼は若輩者と呼ばれても文句は言えないな。

「簡単だろ。信頼と実績さ」

「信頼と、実績？」

「その武器が実戦に耐えられると言う」信頼」と、その武器を使用した事によって敵の撃破数や味方の損害率にどの程度の影響を与えたのか如何かと言う”実績”。この2つが揃って、初めて前線の奴等は武器を握ってくれる」

贅沢な奴等だ、と呆れ半分に言葉を繋いで俺は話を切り上げた。

吐き出す紫煙を輪の形に整え、それを後から出した煙が有耶無耶へと変えて行く。

存在の上書き。

新しい武器が出てくれば、旧型の兵器は消えて行く。

それと同じ様な事だ。

「辛いぞ、開発衛士は。色んな奴等の文句を受け流す事が出来る気力と、シミュレーターに籠っていられる体力も必要だからな」

「龍二さんに気力は無さそうな気がしますけどね」

「失礼なヤツだな。俺はちょっと特別で、気に入らないヤツは徹底的に身体に覚えさせるって主義なだけだろ」

そう言うと、少年は耐え切れないとわんばかりに噴出した。

釣られて、俺も笑う。

男同士の小さな友情と言うヤツか。

歳は離れているが、まあ心が少年な俺にとっては良い話し相手になってくれるだろう。

「さて、と。俺もそろそろ戻らないと……」

「龍二さんの休暇はお終り、ですか？」

「ああ。次からは　　ビシバシと扱いてやるさ、” 白銀訓練兵”」

降参と言わんばかりに両手を挙げた少年に苦笑を漏らし、俺は少年の下を後にする。

向うべき場所は唯依達の所。

あの子達を放つて置くと、何故か怒りの矛先が俺に向う。

機嫌取りをして置かないと何よりも危ないのは　　俺の命だったりするのだ。

冗談抜きで。

クリスカ

龍二は露骨に訓練兵達に気を使っていた。

特に、あの部隊唯一の男である訓練兵 白銀武。

イーニア曰く、不思議な男。

藤代中尉曰く、信用なら無い男。

龍二曰く 将来が楽しみで、楽しみで、楽しみ過ぎる少年。

気に掛ける理由が分からなかった。

ヤツが居なくとも、私達が居れば何の問題も無い筈だろう。

戦闘能力で考えれば、ただの訓練兵に遅れを取るつもりなど毛頭無いのだ。

力こそが全てのこの世界で、一体ただの訓練兵に何の価値がある？

「何だよ、仏頂面してさ」

「……何でも無い。それよりも、お前こそ大丈夫なのか？」

「何だ？心配してくれるのか、俺のこと」

「ッーじよ、上官に面倒が有ると部下が困る。それだけのことだ」

「ふーん？ふーん？」

「うるさい！お前は夕食でも食べて寝ろ、永久に！！」

ケラケラと笑いながら、ビールの缶片手に陽気に笑うド阿呆。
その姿に呆れながらも 何処か安心しながらも 私は龍二の後
を追う。

こうして野外で夕食に口を付けるのは、グアドループ以来だった。

イーニアは楽しそうに笑い、

篁中尉は龍二の所業に呆れ、

神宮寺軍曹は部下達の様子を見守りながらも龍二に酒を注ぎ、

副司令はケラケラと笑う龍二と共に酒を飲み交わしている。

此処は自由だった。

BETAに攻められ、地獄の底の様な戦場が繰り広げられている今
でさえ。

昔の私ならば嫌悪を抱いただろう。

有り得ない、と否定すらしただろう。

だが今なら分かる。

人の温かみに触れた今だから、分かる事があるのだ。

こんな団欒も 悪くは無い。

龍二が私を呼んでいる。

どうやら、これだけの数の女に囲まれてもまだ満足出来ないらしい。

「……このバカ」

だが、今だけは良いかも知れない。

今だけは、

この瞬間だけは、

こんなバカの色に染まって自分もバカになっても

「剣崎龍二、ツラ外します!!」

「ギャハハハハッ!! アンタ、それ、ツラなのか!!」

「5番、篁唯依! 麻雀に負けた時の巖谷中佐の真似、やります!!」

「ゆい、かおまつかだよ? だいじょうぶ?」

「……平和ね」

神宮寺軍曹が呆れた様に呟いた。

呆れた様に呟いた、と言っても本人の目尻には涙すら浮かんでいるのだ。

彼女も十分、この状況を楽しんでいる1人であるのは間違いでは無いだろう。

「ああ」

だが、それを誰も責めやしない。

寧ろ、アイツは笑って言うて来るだろう。

もっともっと、周りが呆れる程にバカになってしまえと。

「アイツの周りは、いつも平和だ」

剣崎龍二。

職業は開発衛士と新人達の育成係。

性格、温厚で能天気。

龍二の心の中は 今日も、快晴。

南の島に笑い声が響いていた。

しかし夜になっても止む事の無い爆笑がやがて止まり、
そして

「久しぶりの横浜基地だな、オイ！」

「良い気分転換になったわ〜」

私達は、再び戦場に凱旋する。

72 11月12日 夢見る若者（後書き）

今回は横浜基地でのヴァルキリーズとの絡み

それが終われば……ある意味で一番書きたかった場面が書ける……
急ごう

73 11月13日 Return of the Strongest) 前

ヴァルキリーズと絡みます

絡むとは言っても、そんなにガッツリじゃない気が……

取り敢えず、 73です

剣崎

総戦技演習から帰った夜は風呂に入って即、爆睡。
何の躊躇いもなくベッドに入った俺は30秒程で夢の世界に旅立っていた。

だが、疲れは中々取れない物である。

その為に起床時には昨日の疲れが身体に出るかと思っただが、今朝の寝起きは中々どうして、悪く無い。寧ろ身体中にエネルギーが漲っている様な感じがする。

“感じ”がするだけで、実際そうでは無いだろうが。
まあ細かい事は気にしては先に進めない。

「おはよう、藤代くん!!」

「あら。おはようございます、少佐。今朝は随分とご機嫌ですね」

「何故か知らないが、身体に力が漲っているのだよ。フツ、心なしか肌年齢も若くなった気がする。ねえ今の俺って可愛い？綺麗？お肌ツルツル？」

「ツルツルなのは脳だけで十分です。幼児化なら仕事を終わらせた

後にして下さい」

PXで会った千枝はいつもより大分ご機嫌斜めな様でありまして、笑顔の裏に隠された黒い感情に思わず身体が条件反射で後退りしていた。自分は仕事に追われていたと言うのに、休暇を貰っていた俺が許せないのだろうか？

……いや、まあ、そしたら彼女にも休暇を上げれば良いだけの話さ。それより今は一刻も早く飯を食って、シミュレータールームの筐体を1つ独占しなければならぬのだ。この前の実戦ではそれ程機体を動かす事も出来なかつたので、今日は何とか筐体を占領して10時間以上は没頭したい気分なのである。

「京塚さん、野菜炒め定食。ご飯気持ち多めで」

「あいよ！龍二ちゃん、今日は元気だね〜！」

「ハツハツハ！何か分かりませんが、元気な訳ですよ〜！」

ご飯を盛る京塚さんの前で、いかにも元気有り余っていますと言わんばかりに「1、2、3、4」などとストレッチを始めてみたりする。そんな俺を見て、京塚さんは大きな口を更に大きく開けて笑っていた。

「はい、お待ち。今日も頑張りな！」

「あだっ！京塚さん、背中痛いからね!？」

野菜炒めを受け取ると同時に、背中を襲う衝撃に思わず声が出る。

京塚さんの「いつてらっしやい」代わりの平手打ちだ。

背中から抜けて行く衝撃に思わず顔を顰めながらも、平静を装って席へと歩く。

チクシヨウ……背中がヒリヒリ痛みやがる。

「あ、あの……」

「あん？」

おずおずと言う具合に話し掛けた声に対して、ちよつと不機嫌だった俺は一昔前の不良の様に語尾を少しばかり強めて返事を返してしまった。

明らかに狼狽する声の主。

席に着き、初めて後ろを振り返った時、俺はその声の主が少女である事を知った。

と言つか、知り合いだった。

「築地？お前、如何した。朝っぱらから俺に何か用か？」

「しよしよ、しよしよしよ、少佐あゝ！」

何故か知らんが築地は急に俺に泣き付いて来た。

座っていた為、顔面に乳が当たる訳ですよ。この核兵器2つが顔面に。

ウホツ、ボインボイン。

デカイとは思っていたが、まさかコレ程のレベルとは思ひもしなかった。

隠れ巨乳と言う事が。

築地くん、後でシミュレータールームに来たまえ。

2人だけの秘密のトレーニングをしてあげよう(キリッ

(なんつって)……まっ、流石にそりゃ無いか)

「泣いたままじゃ分からんぞ。如何した、言ってみる」

「うっ、うっ……あの」

俺の顔に抱き付いて泣いていた築地が漸く俺を離し、涙でグチャグチャになった顔を俺に向ける。女の涙を受け止めるのは男の役目だが、鼻水は専門外だ。

取り敢えず、懐から取り出したハンカチで鼻水を拭ってやると可愛らしく「ご、ごめんなさい」なんて言いやがった。

コイツ……”アリ”だな。

「私、このままじゃ隊の皆の足手まといになっちゃいそう……」

ほう。部隊の事が。

成る程、自分の才が平凡である事にコンプレックスでも抱いているのだろう。

いや……平凡か？

ヴァルキリーズに入っていると言う事はエリートと言う事で、つまりは一般人よりも技術的な面では上回っている筈だ。

確かに周りに居る連中があまりにも個性的で愉快ではあるとは思いますが、そこまで思いつめる様な事なのだろうか？

彼女は確かに平凡ではある。

だが、逆に考えれば全ての距離に対応する事が出来る万能タイプでもある。

誰かが突撃すれば、その援護へ回る為に後方へ。

味方が後衛向きであれば、味方の為に囷を買って出る事も出来るだろう。

俺が見た限り、築地多恵は性格に少々問題があるが、それを差し引いても十分余りあるスペックを持っている筈なのだ。それが何故？

「私……もつと強くなりたい……！少佐、お願いします！私を鍛え直して下さい！！」

真剣に此方を見詰める築地を突き放す「No」と言う言葉が一瞬頭に浮かぶ。

本来、俺は接近戦を主軸にするタイプである。

と言うか接近戦以外の事は殆ど直感的に行っているのだ。そんな俺が誰かに物を教えられると言うのだろうか？断言しても良い、無理だ。

「いや、しかしなあ……」

「あの、何でもしますから！お願いします！」

何でも……か。

そこまで必死に頼まれれば、如何にかしてやりたいとは思う。

思っのだが、俺から教えてやれる事は限り無く皆無に近いのだから仕方が無い。

あ、いや、待て。

別に俺じゃなくても良いのだろうか？

だったら、久しぶりにアイツ等と呼ばば良いじゃないか。

俺自身の相手にもなるし、彼女達の戦闘ログや機動を見れば勉強にもなるだろう。

「教えてやる事は出来ないが、見せてやる事は出来る」

「え？」

キョトン、と小首を傾げる築地。

コイツ可愛いよな、チクシヨウ。何故か頭を撫で回したい衝動に駆られる。

しかし待て、俺。

彼女は俺に真剣な相談をして居るのだ。

戯れも大概にして、真面目な答えを返してやるべきでは無いのだからか。

「お前の先輩、A-01のエース達と派手にやってみるか」

ニヤリ、と笑みを返して少し冷めてしまった野菜定食に箸を付ける。

冷めていようが、美味しい。

流石は京塚曹長。

アンタの飯は日本一だよ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

「悪いな、急に呼び出しちゃって」

「いえ、少佐からのお願いなんてあまり有りませんし。何よりも前回の戦闘、少佐が居なければ私達は全員無事に帰って来る事も出来ませんでしたから」

軍服から強化装備へと着替えた少佐と共に通路を歩く。

既に前回の戦闘での疲労は回復しているのだろう。彼は疲れを見せる事も無く、軽い足取りで私の隣を歩いていた。

しかし その隣、何故隠れる様に築地少尉が居るのだろうか？

私には彼女が少佐に関わる姿が想像出来ない。
人が良いとは言え、近寄り難い身分を持つ彼に近付いたとなるのならそれなりの理由があるのだろう。

“恋”とか？

「しかしなあ、まさか俺程度の召集に応じてくれるとは……ヴァルキリーズも心が広い。助かるよ、訓練の相方が沢山居てくれてさ」

……この人は何を言ってるのだろうか？

佐官クラスとは言え、副司令の腹心中の腹心。更に言えば、オルタネイティヴ計画の実質的最高戦力とも言える者からの要請となれば、断る事などまず有り得ない。

何よりも、彼との演習や訓練は伊隅大尉も大喜びする程の大幅なスキルアップが見込める。私達からすれば、願っても無いチャンスなのだ。

多忙な彼から訓練に誘って貰えるなど、これから先にも数える程し

が無いだろう。
その少ないチャンス、必ず物にしなければならない。

「燃えて来たあゝ、どんなシチュエーションにするかな！」

子供っぽくピヨピヨ飛び跳ねながら、見えない敵とシャドーを始める少佐。

隣で彼を見ている築地少尉に視線を向けると、驚いた様に目を見開いていた。

まだそれ程までに付き合いは長く無いのだろう。

私は既に慣れているから、この程度では驚きもしないけれど。

「……あれ？」

「おうっ、どうした逢あっ！俺の燃え滾っているソウルに感化されたか!？」

「い、いえ、そう言う訳では……」

ちえっ、と拗ねながらもシャドーを続ける彼を見て、思う。

今自分は何を思っていた？

築地少尉と自分を比べて、自分が彼との付き合いが長い事を……

「逢？」

「え!?!あ、は、はいっ!」

「何だよ、どうした?ポーっとしちまって、お前らしく……お前らしいか」

「あ……待って下さい、少佐〜！」

彼の笑顔は魔性の笑顔。

あんな純粹で、透き通っていて、綺麗な笑顔を見せられては誰であろうと見惚れるであろう事は必然なのだ。だからこそ私も彼の術中に嵌った1人。

彼の優しさに触れ、

笑顔を見せられ、彼のペースに乗った事で、彼を意識し始めてしまった1人。

剣崎

どんな訓練を築地に見せるか、迷っていた。
俺対伊隅達は前回、既に行った行事の1つ。あんな物はログでも何でも掘り下げれば幾らでも見られるだろう。

ならば普段ならばやらないであろう事をやって見れば良い。

彼女達と普段ならばやらない事は　そう考えて思い付いた物は1つだった。

普通の感性を持つ物ならば、この単語を聞いただけで顔を顰めるだろう。

その単語とは、「ハイヴ攻略戦」。

ヴァルキリーズ&剣崎龍二の、楽しくて激しいハイヴ攻略戦を提供しよう。

戦場の把握能力、
適性距離の判断、

押し寄せる大量の敵の捌き方、

築地のタイプに似たり寄ったりである伊隅の機動を見せられるのも素晴らしい。

基本を詰め込み、

所々で機転を利かせた戦い方が出来る者がハイヴを攻略出来る。

ならばある意味で、このハイヴ攻略戦と言うのは最も訓練に適しているのでは無いのだろうか、と俺は思っ居るのだ。

個人的な意見ではあるが、強ち間違いでも無いと思う。

《此方あゝ……ジャツカル01。所定位置に到着、開始を待つ》

《此方はヴァルキリーズ01。同じく、所定位置に到着》

《ヴァルキリーズ02も同じ。頼みますよお、少佐！》

《ヴァルキリーズ03所定位置に到着。速瀬中尉、猛進も程々に》

《ヴァルキリーズ04同じく所定位置に到着。少佐、今回も宜しく
お願いします》

5機の不知火が、それぞれ陣形を作る。

前衛は速瀬・剣崎のツートップ。

特攻・突撃・殲滅を絵に描いた様な、完全攻撃特化の2人組み。

その2人の手綱を持つ女房役とも言えるのは、宗像・風間の2人組みである。

宗像が速瀬の、風間が剣崎の後方にそれぞれ付く。

有事の際には直ぐ様、2人の援護に出られる様に引っ付いている。殿を務めるのは、ヴァルキリーズ隊長の伊隅。

辺りを見極める目を持つ彼女だからこそ、最後尾にドツシリと構えて貰う。

そして、戦況オペレーターに涼宮遙を。

状況の整理、戦況オペレーターのサポートをさせる為に

『私の皮肉が聞けなくて残念ですね、少佐。寂しいですか？』

《冗談も休み休み言え。戦場の真ん中なら皮肉よりも情報を寄越せ、情報を》

優秀だが、優秀ゆえに性格が捻じ曲がった帝国随一を誇った天才・藤代千枝を置く。

まさに磐石の構え。

これが今現在の俺達が出来る、最大にして最高の戦力とも言える。

『では 状況を開始します！』

遙の気張った声と共に、俺が先頭に。

その後方を追い掛ける形になるが、速瀬が続く。

先程とは違い、マップには顔が真っ白になる程の数を誇るBETAの数が記載されている。既に自分達のマーカーは赤一色に塗り潰されており、自分達が一体何処に居るのか到底分かった物では無い。

だからこそ、お互い肉眼で確認出来る距離に機体を置く必要がある。

《速攻で行くぞ、 ”水月” ！！》

《ツ！？……ふんっ！上等オツ、速攻で叩き落とす！》

本来ならば苗字で呼ぶだろうに、興奮して居たのだろう俺は思わず名前を叫んでいた。

だから何だと言う事なのだが、咄嗟の事なので気付いてすら居なかったのだ。

後で侘びでも入れて置こう、一応。

地面を覆い尽くす突撃・要撃・戦車・小型種の群れに長刀で切り込み、数匹単位で吹き飛ばして行く。突撃級の突進は上空回避後に左腕の支援砲で射撃、要撃級の拳は振るわれるよりも早く此方が敵を切り裂き、戦車級は取り付かれるよりも早く機体の圧力で押し殺して行く。たったそれだけの作業だと言うのに、機体は返り血で半分程は真紅に染まっていた。

《足場確保……ツ！早く来い、”椅子”！！》

《はいっ！》

後方から遅れてやって来る風間の為に、足場を作る。

その足場を踏んで大きく跳躍噴射をすると、俺は次の足場を作る為に風間の下を潜り抜ける様に進み、適当な場所をまた開拓して行く。

前衛2人の役目は後衛の為の足場作り。

速瀬・剣崎組の役目とは即ち、後方から来る仲間達の為の開拓作業なのだ。

その為に求められるのは速度と、機体を自在に操る操縦技術。

2つを併せ持った、ある意味ではトップクラスの力を持つ者が任せられる役職こそ今の速瀬水月が腰を置く突撃前衛だ。

それが、この程度の場所でミスを犯す筈も無い。
1つのミスが1人の死を生み、1人の死が部隊の壊滅を招く。
そんな場でミスなど、許される筈も無いのだ。

《確りケツに噛み付いている様だな……… 実に結構》

《この部隊じゃ少佐と肩を並べられるのはわたし位ですよ、多分》

だが、血塗れの不知火を駆る剣崎と速瀬の2人は、この状況すら楽しんでいた。

今まで自分と共に肩を並べて暴れ回る相手が居なかつた速瀬からすれば、目を見張る技術を持った龍二は背中を預けるに値する人物であり、

龍二にとっての速瀬は既に十分信頼に値する人物であると踏んでいる。

《背中がお留守だ、お嬢さん》

《後ろに居ますよ、少佐》

視線を合わせる事無く、一瞬でお互いの敵をスイッチ。

龍二は速瀬の後方から迫る要撃級の下へ一瞬で滑り込み、その身体を長刀で薙ぎ払う。

速瀬も同じく、龍二の後方から接近して居た突撃級へと弾丸を撃ち放っていた。

お互いに信頼しているからこそ出来る、この一連の動作。

誰が見ても分かる様な”神業”の1つ。

つまり、この2人は

《頭から齧り付かれない様に気を付けるよ》

《そっちこそ》

この2人、凄まじいまでに波長が合う。

最高の愛称を持つと言っても良い、歴代最強を誇る突撃前衛組なのだ。

長く、険しいハイヴ攻略戦の幕が漸く切って落とされた。既に教え子の事など忘れ去り、自分達の力を出し切る事しか考えていない彼女達だが、一体この結末は如何な物になるのか。

戦乙女と黒獅子の共同戦線が、堂々と始まりを告げていた。

久しぶりの戦闘描写

久しぶり過ぎて、上手く書けているのか如何かすら怪しいと云ふ……

次回、ハイヴ攻略戦後半

74 11月13日(2) 進化の可能性(前書き)

修正しました

ハイヴ攻略戦後編

これから少しずつ増えて来るバトルに向け、
文の事について少し勉強でもしてみよう……

遙

5機の不知火が入り乱れるハイヴの内部。

水月の不知火が暴れ回り、

水月の機体を落とさせない為に後方で確りと援護に回っている宗像

中尉と風間少尉。

伊隅大尉は殿を務め、部隊の統率を保ち続けていた。

A-01の偉大な先任達。

彼女達の開拓した技術は素晴らしく、世界有数の部隊と言われるのも今なら分かる。

だが、その中で1人だけ異質な輝きを放つ機体があった。

部隊とは歩幅を合わせず、1人突出して後方から来るメンバーの足場作りに精を出す1機の不知火。足場作りとは言っても、僅かな時間とは言え、自身の周り全てをBETAに囲まれるのだ。それを生き抜き、耐え抜き、更には足場まで作って見せる異質な輝き。彼はこれでも、遠慮して居る方だろう。

本来ならば突き進むべき場所でも後衛の事を考え、足場を作る。

必要の無い事にまで手を出す辺り、まだまだ子供っぽさは抜け切れていないと言う事か。

「不知火でこの戦果……機体に左右される、と言う訳では無いみた

「いすね」

「そんな人に従いませんよ、私」

隣にて呆れた様に声を出した藤代中尉ではあったが、その実は彼を信頼しているからこそその言葉だと私だつて分かっている。

基本的に天邪鬼と言うか、自分の正直な気持ちを前に出さないのだ。最初こそ年上の、しかも天才と謳われる大人の女性と緊張して居たが

話してみれば何と言う事は無い。

少しだけ意地悪な女の人。

ちよつと大人っぽくて、私達からすれば理想の女性像。

そんな彼女は私達と同じく悩み、苦悩して、それで漸く答えを導き出していた。

書類1つで頭を抱え、

夕飯のメニューで考え、

少佐の機体を更にチューンする為に寝る間すら惜しむ。

変人に従う彼女は、何処から如何見ても一般的な人だったと言っただけの事だ。

「それより管制。忘れていたのではなくて？」

「え？あ、す、すみません！！」

《遙あつ！！テメエ、俺を殺すつもりか！？》

「すみません！あの、本当にすみません！」

隣で上品に笑う藤代中尉に苦言を申したくなるが、彼女はきつとそれすら笑いに変えてしまುದろう。それでは此方が突っ掛かる意味が無い。

それよりも今は目の前の作業に集中すべきだ。

後ろには頼れるサポーターが居るのだから、今は

「前方から接近するBETAを確認。全機、坑道へと逸れて下さい」

《了解。それと、指示はドンドン飛ばしてくれ。期待させて貰うぜ》

「はい、任せてください！」

主道から坑道へと道を逸れ、5機の不知火が狭い道を疾走する。

その後を追い掛ける、夥しい数のBETA群。

捕まってしまうはその瞬間に彼等の死は確定するとしても、僅かばかりの怯えを見せる事無く、坑道内を突き進んでいた。

《さあ命懸けのドッグファイトだ。噛み付かれた奴は訓練兵からやり直しやがれ！》

それも全ては、彼のお蔭。

怯える事も、

竦む事も、

恐れる事も無く、ただ前に出て、ただ愚直なまでに突き進むその姿勢。

見ているだけの私ですら勇気を貰えるのは何故だろうか。

理由なんて、至って簡単だ。

笑っているのだ。

狂気に満ちた笑みでも、愉悦を滲ませた物でも無い。

気丈に振舞っていると言う事が分かる程、不器用な笑み。

やせ我慢の上に出来た、不安定な感情を表に出して、平然としていられる筈も無い。

だから彼は声を出すのだ。
だから彼は笑うのだ。

だから、私達は

《だそうよ、宗像あゝ。サツサと噛み付かれて来なさいよ》

《遠慮します。それよりも椅子、お前は如何だ？》

《私も遠慮しますわ。大尉は？》

《……アホらしい》

そんな気丈に振舞う少佐を見て、彼を支えなければ成らないと思うのだ。

支えられているだけは嫌だから。

支えられているだけは寂しいから。

手を取って、背中を支えて、前へと力を入れて。

踏み出す一步は僅かだとしても、それが絶対に哀しい未来を変えられると信じて。

《水月、俺とお前で主道に進行方向を変更。敵の本体を此方に引き込む。

それと伊隅、お前達はそのまま坑道を直進だ。迷わず標的を叩き潰せ》

《《了解！》》

坑道から主道へと別れる道。

そこで2機の不知火だけが主道へと向かい、残りの3機は迷う事無く直進する。

囧　　とは言え、結果など見えている捨て駒同然の物だ。

だが、そんな戦場だからこそ燃える。燃え滾る。

此処で生きて帰れば、鈍っていた彼の戦闘センスが完全に勘を取り戻した事になる。

本人もそれが知りたいからこそ、こんな道を選んだのでは無いだろうか？

《前方からBETA接近。数は……特定不能！》

《団体客だな。歓迎してやるぞ、水月》

《ふふんっ！ミンチより酷い有様にしてやりますよ！》

落ち着き払った少佐とは対照的に、テンションが最高潮の水月。

それを咎める事もせず、少佐は淡々と敵の中央へと切り込んで行った。

右腕には長刀。

左腕には支援突撃砲。

戦車級の頭を踏み砕き、跳躍。上を向いた要撃級の身体の下真ん中に長刀を突き刺し、近付いて来る敵を只管に撃つ・撃つ・撃つ。

突撃砲に比べると弾丸の大きさが小さ目だが、それでも的確に急所を突いて行けば確実にダメージを与える事は出来る。

自分達の役目が囧である、と言う事を理解しているからこそ割り切つて出来る行為。

《離れるな!》

《そう、言った、って……ッ!》

それでも尚、仲間に縋り付くその姿。

水月に取り付こうとしていた戦車級に銃弾を放ち、その際にも自分の周りに居た敵を長刀で薙ぎ払って行く。だが、如何考えてもあと数分程度しかこの戦線を保つ事は出来ないだろう。それは仕方が無い事。

寧ろ、数分程度でも保つ事が出来ると言う事が奇跡に近い行為なのだ。

《楽じゃ有りませんねっ、困役も……ッ!》

《1994年の名古屋撤退戦の援護を思い出す。アレは地獄だったな、補給物資も援軍もHQからの情報提供も無い無謀な作戦だった……》

《昔話は後にして下さいよ、お願いですから!》

《むっ、昔とは失礼な!俺はまだまだ若いぞ!?!》

だが、それでもこの2人は”今”を精一杯生き抜こうとしていた。諭す者と諭された者。

だからこそ分かる、分かっってしまう、命の重み。

その重みに耐え抜く為に、気丈に振舞って。

剣崎

やはり、ダメだ。

何がダメって、何もかもがダメだ。

既に機体が俺の反応速度に付いて来ておらず、それが更に苛々を募らせる。

一向に前へ進む事の出来ない戦路。

減る事の無い蠢く肉の塊。

減る一方の弾薬。

水月は先程から何度も落とされそうになり、その度に俺が敵の攻撃のカットを行う。

支援突撃砲の弾薬は底を尽き、最後のカートリッジに残る弾は2発。既に長刀も押し折れ、残ったもう1本で戦っては居るが、これも時間の問題。

とは言え、新しい課題も見付かった。

戦術機のOSの処理速度上昇。

耐久度を上げた長刀の開発。

弾薬が底を尽きた際にも、予備となる装備を実装する。

今の所はこの程度だろうか。

武装関連は千枝に、OSは夕呼に相談してみなければ何とも言いえない内容ではある。

課題が見付かったとしても、実現不可能では何の意味も無いのだ。

とは言え、今は大事な後輩が此方を見ているのだ。

課題の事は後々ジックリ考えるところとして、今は

《遙あつ！！！！！》

《は、はひっ！はいつ、あの、伊隅大尉はまだ混戦の最中で》

《不知火のリミッター全部外せ、今直ぐだ。本来なら廃棄直行だろうが、どうせコイツはデータの塊だしよお。派手に　ブチかます！》

最初こそ俺の考えに拒絶の意を示した遙ではあったが、千枝が何やら口添えでもしたのだろう。暫しの沈黙の後、「……了解」と拗ねた様な声音で遙が作業を開始していた。

リミッターを外せば、間違い無く機体は使い物にならなくなる。

ならば俺の役目は無事に水月を伊隅達の下へと送り届ける事では無いだろうか。

此処で、俺が果てようと。

カチリと何かが外れる様な音が聞こえた時には機体が地面から飛び上がった。

一気に上へと持ち上げられる内臓。

それによって、上って来る嘔吐感を根性で捻じ伏せる。

軽くフットペダルを踏むだけで先程まで居た筈の場所が後ろへと消えて行き、何もかもを置き去りにして更に加速しようとする。その度に軋む機体。

既にラジエーターは再三の警告を発しており、このままでは空中分解も時間の問題。

《消、えろ　ッ！》

群がったBETAを吹き飛ばす為に、フットペダルを思い切り踏み込んだ。

それに伴う急激な加速。

間接部が悲鳴を挙げながらも、何とか腕と足を繋ぎ止めて居る。

元々が美しい色をして居たのだから装甲板にも肉がへばり付き、その肉がおぞましい斑点模様を作つて機体をおぞましく仕上げていた。

フットペダルを踏み込んだ轟音の後、肉が辺りに飛び、機能性の無いスプリングラーの様に反吐を撒き散らす。

肉片も、骨も、臓物も、何もかも。

身体を形成する何もかもが、一壁に吹き飛ばされてシミとなる。

シミ　血の、シミ。

それだけでは無い。

加速した機体の回りに発生する衝撃がカマイタチとなり、直下に居た中型種含む多数のBETA共に深い切り傷を作っていた。

傷口から血すら流れ落ちない、美しい切り傷だ。

それは最早、ハイヴ内と言う狭い空間のみで行われる芸術の様な行為。

チエルミナートルやティーンなどに見られるカーボンブレードを自然の摂理で自ら再現した様な、そんな絵だ。

鮮血のロードが、俺の駆る不知火を祝福している様にすら感じられた。

《水月！！！！》

《りよ、了解！》

行け、と言わなくとも名前を呼ばれるだけで俺の意図を察してくれる。

流石の彼女も、引き攀った笑いを浮かべて作り上げた道を足場にして前へと跳躍した。

彼女の實力ならば、何とか……伊隅の下までは辿り着くだろう。死に体の体を曝す哀れな肉塊の山。

そこに君臨して、目下の哀れな者達を眺める。

先程、かなりの数を殺したと言うのに何と言う数か。

ゾロゾロと蟻の様に群がるBETA達を見て、思わず失笑すら出て来る始末だ。

《きつたねえな……》

赤土色の戦車級が機体に群がり、その強力な顎で装甲を噛み千切っていく。

頭が食い千切られ、

腕が引き千切られ、

足が噛み砕かれ、

本来の戦場ならば、発狂しても可笑しくは無いシチュエーション。

しかし、データだと分かつては居ても、これを怖がる衛士は多いだろう。

そんな恐怖の中でも、俺はまだ笑う事が出来た。

笑う余裕が、あった。

跳躍ユニットがスパークを起こし、ラジエーターの冷却機能すら超えた機体の過熱、何よりも搭載されているエンジンが 熱を帯び過ぎているのだ。弾け飛ぶまで、時間はそう掛かる物では無い。

《ザマーミロ》

耳を轟音が劈くタイミング。爆発に巻き込まれる数千近くのBETAに舌を出して、中指を立てながら。俺のハイヴ攻略戦は幕を閉じた。

その後、伊隅の下に到着した水月ではあったが数の前ではやはり無力。俺と同じく、彼女達も数の暴力の前に飲まれて行く。何とも 見られていると言うのに、醜態を曝した物である。

築地

「取り敢えず、今の俺が出来るのはこの程度だ。悪いな」

伊隅大尉達よりも先に筐体から降り、申し訳無さそうに頭を掻きな

がら少佐が此方へと歩いて来た。訓練兵に此処までして頂いただけで無く、頭まで下げられるなんて

「あ、あんの、オ、オラ、気にしてねえだよ!？」

「……方言、か？」

「あ!？」

「いや、気にするな。喋り易い様に話してくれ」

そう言つて、少佐は休憩用のベンチへと腰を降ろす。

その表情は元気がある様には見えず、何処か落ち込んでいる様から見えた。

何故だろうか？

アレ程の戦績を挙げながら、何故納得出来ないと言う様に首を傾げるのか。

今の私には、理解すら出来なかった。

「進化を止めれば、」

「？」

「進化を止めれば、人は先に進めなくなる。だからこそ俺は何処かで満足するなんて事は無い。俺に出来る事は、永久に進化し続ける事だけ……それが、使命」

独白の様に、少佐は言葉を静かに紡いだ。

それは私に聞かせている様な、同時に自分自身の意思を確認する様な。

そんな、弱々しい声音だった。

「お前は進化する。進化出来る。強くなれる。前に進める。だから、俺にとつて……お前みたいな若い衛士は羨ましい。足を止めずに進化出来る事がこの上なく」

天井の蛍光灯がチカチカと光り、それを見詰めていた少佐は静かに息を吐いた。

その瞬間、身体が強張るのが分かる。

人としての本能が、私を緊張させるのだ。

目の前に居る、美しい”何か”に。

「強くなりたいのなら、進化しろ。お前の持つ可能性は 誰よりも大きい」

此方を真っ直ぐ見詰める瞳に吸い込まれそうになる度、何度も何度も瞬きをして自分がまだ現実に居るか如何かを確かめる。

生きている、

息をしている、

身体もある、

だと言うのに不安だ。いや、違う。これは 安心なのだろうか？

見詰められていると言う安心。

傍に居てくれると言う安心。

私だけを見てくれると言う安心。

まるで麻薬の様に、神経を侵食して行く甘い言葉。

コレが 長き時を戦い抜いた、英雄のカリスマだったのだろう。

その時の私には、気付く事など出来なかったが。

「負けても良い。地面を這い蹲って、泥水を啜る事になったとしても、俺はお前を見捨てない。築地、進化しろ。進化して、進化して、進化して　運命すら超越して見せる」

乱暴に私の頭を撫でて、少佐は笑った。

進化　と言うのが如何言う事なのか、今の私には良く分からない。分からないけれど、私は進化してみようと思う。

もっと訓練して、もっと勉強して、もっと前を向いて。

いつまでも浮いたままの気持ちを落ち着かせて、進化の扉を開きたい。

「　超越者」

一人で「うむうむ」と頷いていた私の隣で、少佐は噛み締める様に何か言葉を呟いていた。でも、その言葉が私の耳に届く事は無い。もうそろそろ大尉達も戻って来ると言う事で、少佐は私に別れを告げた。

剣崎

ハイヴ攻略戦を終え、各々の反省点を挙げて行く最中。

水月、じゃなくて、速瀬は終始此方を不服そうに睨んでいた。

それが如何にも恐ろしく、身体が勝手に彼女の視線から逃れる為に風間の後ろへ隠れる。

捲くし立てる速瀬を流石に億劫に感じ、まあコイツの事だから大事じゃないだろうと腹を括って瞳を見返してやる。

先程まで踏ん返り返っていたと言うのに、瞳を見返しただけで怖気付くな。

何か、アレだよ。

苛めたくなつて来るから。

「な、何よ」

「見返しているだけ。サツサと話せ、ド阿呆」

「アンタさ！わたしを行かせる為に落とされちゃったじゃ無い！！何よ、あれ！

わたしはアンタに尻を守られなきゃ先に進めないと思われている訳！？」

「機体の跳躍ユニットの残り燃料、弾薬、装備、衛士の疲労状況。それ等を省みた結果だ。別にお前を信頼してない訳じゃ無い」

「ッ……次、次よ！次でわたしの力、証明してやるわ！」

何やら真つ赤な面で此方に指を向ける速瀬。

まったく。

何だと言うのだろうか。別に彼女を信頼していない訳では無いと言うのに、勝手に怒りやがって……それに「次」とか決めちゃって、困った奴である。

「失礼ですが、少佐。1つ宜しいでしょうか？」

「ん？如何した、宗像」

珍しく自分から進言する宗像。

いつもは傍観者的なポジションである彼女にしては、珍しい行為だ。それ故に、俺も何故か身体が強張ってしまう。

「ハイヴ攻略中、少佐は速瀬中尉を名前で呼んでおられました」

「お、おう……ありやその、何だ。ちよっと興奮して居て、な？」

「承知しています。ですが、反省会の場を設けたこの場では苗字で呼ばれています」

「え？そりゃ、お前、相手からすれば不愉快だろ？名前で呼ばれるって」

「速瀬中尉は不愉快では無いのでは？速瀬中尉は」

「ちよ、ちよっとストップ！宗像、アンタ良いから、もう良いから！」

「……そうですか」

アツサリと身を退いた宗像ではあったが、彼女の言わんとしていた事は分かる。

……何とも、近頃の若者は随分と友人関係を築く段階が早い物だ。俺達みたいな昔の奴等は、もうちよっと礼儀などを重んじていた。だが、確かに友人になるにはそんな重苦しい物は必要無いのかも知れない。

「……水月。コレでいいか？」

「コ、コレで良かったって何よ！別に普通に呼べば良いじゃ無い……
ったく」

拗ねた様にソツポを向く彼女に苦笑を漏らし、俺は踵を返す。

まだやる事は残っている。

サツサと夕呼の下へ行き、OSに付いて相談しなければならぬ。

その次は千枝だ。新しい武装の事で話し合って、案を出し合わなければ……

たった1度のハイヴ攻略戦だと言うのに。

色々と、形にならない収穫が得られた。

74 11月13日(2) 進化の可能性(後書き)

OSについては、武ちゃんのXMM3が解決してくれます。
がしかし、武装については如何なるか。

次回は武御雷搬入の話、になる予定です
夕呼せんせー……私、Bas(ry

75 11月24日 狂乱(前書き)

折角新年を迎えている訳ですし、
シーズンのにも古い物が新しくなる時期ですし

全話の大幅改訂でも行おうかと思っている今日この頃

剣崎

搬入された207分隊の吹雪。
まだビニールの被っているそれとは別に、もう1機別の機体が搬入されている。

いや、まあ裏を少しばかり掘り起こせばもう1機搬入されている。

とは言えアレは元来、スペア程度の保険でしか無い。
使わなければ使わないに越した事は無い物である。

つと、少しばかり話が逸れた。
吹雪とは別に搬入された機体とは何か。

それは実に簡単な事である。近場で作業をする整備員の顔が、見た事のある帝国の兵士であるのだから自ずと出て来る結論は実に単純で明快だ。

武御雷

それも、将軍にのみ許された特別製の紫だろう。
此方に”彼女”が居るのだから、悠陽の性格からして送らずには居られなかったのだろう。

それが面倒事に繋がると分からないのは……まあ、彼女が何処か世間すら知らないお嬢様だからと結論付けるしかあるまい。

「少佐」

「……千枝か。唯依達は如何した？」

「PXに待機しています。一緒に食事をしたいと言って聞かないものですか」

後ろから声を掛けて来た千枝の方を軽く振り向いて、また視線を武御雷に戻す。

果たして、彼女は易々とアレを手にするのだろうか？

彼女の厳格な性格から考えても、受け取るとは考え難いだろう。

何ともまあ、思いすら繋がらぬ哀しき姉妹愛だろう。

悠陽からすれば彼女を護る事が出来ぬ罪滅ぼしと言う事で送ったのだろうか？

それならば彼女よりも、こんな物を送る事を許可したのであろう周りのバカ共を罵倒するべきかも知れない。

彼女 冥夜にとっては、良い迷惑だろうに。

「……大物ですね」

「ああ、大物だ。それも”国”単位の」

千枝の目が、細められる。

大方だが武御雷（紫）を目の前で見せられ、敵意でも剥き出しにしているのだろう。

金の掛かる武御雷を嫌う彼女だ、こんな欲の塊の様なワンオフ機にだけは負けたくないだろうな。負けん気の強い女である。

「少佐用の武御雷も裏から搬入させて貰っています。如何しますか？一応、護衛を申し出てくれた月詠中尉に顔合わせをして置きますか？」

「ああ、もう会った」

「あら。思ったよりも手が早い。それで？」

「……さてね」

月詠 冥夜の為ならば命すら投げ出す事を厭わない彼女だ。だからこそ、彼女は俺に頼んだのだろう。

冥夜の事を頼む、と。

だが違うのだ。

俺ではダメだ、俺の力では冥夜を支える事は出来ない。

隊の仲間達が、そして本当の家族が、彼女の背を支えてやらなければならぬ。

見ず知らずの俺が手を貸して良い筈も無い。

ただ、見守る事はするつもりだ。

彼女の前に要らぬ邪魔が入るのならば、全て 消してやる。

それが俺の出来る事。

それが俺のやるべき事。

悠陽に忠誠を誓い、冥夜を護る事を義務とし、聖母の護り手として存在する俺の役目。

「……波乱だな」

「あの子達の道が、ですか？」

「良く分かったな」

「少佐は彼女達にご執心ですから。まあ隊の皆はストレスが溜まりつ放しですが」

「怖え事言つな、オイッ！」

クスクスと笑う千枝を見て、思わず溜息すら出てしまう。

昔から何一つ変わらない彼女。

見ていると、何だか懐かしくすら思えて来てしまうのではないか。

長く、険しく、辛い道。

俺の隣で俺を支えてくれた、最高の相棒。

きっと冥夜にも彼女の様な存在が出来る事になるだろう。

それが誰なのか、いつなのか、それは俺の知る処では無い。

「行くぞ、千枝。俺のクソツタレな相棒の様子を見に行つてやろう」

「巖谷中佐が聞いたら……フッフ。実に楽しみです」

だが願わくは 彼女を泣かせる様な野郎では無い事を祈るつではないか。

篁

PXにて、久しぶりの少佐との食事。

彼は藤代中尉と共に登場すると、此方を見つけるなり笑顔で軽く手を振った。

それに対して、私の隣に座っていたシエスチナ少尉が大きく手を振り返す。

ブンブンブン。一生懸命、手を振る。

久しぶりに彼に会えた事で、テンションが跳ね上がっているのだろうか。

必然的とも思われるが、彼は目を輝かせているシエスチナ少尉の隣に腰を下ろした。

その瞬間、待っていたと言わんばかりにシエスチナ少尉が彼に抱き付く。

少佐もそれが分かっていたからこそ、我が子を宥める様に優しく頭を撫でて居た。

「ごめんなさいね、遅くなって」

少佐の代わりに、藤代中尉が口を開く。

因みに彼女はビャーチェノワ少尉とエニックス少尉の間に腰を下ろしている。

「いえ……あの、それよりも……彼は……その……」

「危ない事に首は突っ込んで居ないし、極々平凡な任務だから」

「そう、ですか……」

「治らないわね、墓穴を掘るクセは」

分かっているつもりだ。

いつも余計な事を聞いてしまうから、私は自滅してしまう。だが、気になるのだから仕方が無い。私が関与出来ない場所で、もしも彼が死んでしまったら。そう思うと、身体の震えが如何しても止まらなくなるのだ。

「大丈夫よ」

「……え？」

「彼は私が護るからね」

決意に満ちた声が、良く耳に響いていた。

沈黙を突き通していたビャーチエノワ中尉も、その言葉に反応して顔を上げる。

いや　納得して居なかったのだろう。

「……奴は私が護る」

力を持っているからこそ、何よりも、人の愛を知ったからこそ。ビャーチエノワ少尉は剣崎龍二と言う存在に対して強引だ。

彼に最も近い実力を持った存在。

だからこそ、彼女は剣崎龍二に固執する。自分に似通っているからこそ。

「イーニアの為に、だ。勘違いはするな」

だが、それを表に出す事は無い。

ツイとあらぬ方向に目を向けて、静かに食事が続けていた。

「クリスカは不器用だねえ」

「エニックス、貴様……ッ！」

「ブーブー！僕だって少佐の右腕を勤める権利はあるでしょうが！」

それに対して、エニックス少尉はご機嫌斜め。

彼女の瞳は、自身も十分少佐を護る事が出来ると自信満々に語っていた。

私の周りの人たちは 皆、少佐を愛している。

彼の人を引き付ける魅力や、飾り気の無い性格を誰よりも愛している。

だからこそ、

「……安心して良い」

人は誰かに此処まで捧げる事が出来るのでは無いだろうか？

「少佐の護衛は、私が居れば事足りる」

PXの真ん中よりやや外れた席。

未だにイーニアと戯れる白髪頭のバカ野朗を放って、

そんな彼を愛して止まない3人とその相棒が　　凌ぎを削っていた。

だが此処で、

「タケル!？」

1人の少女の、悲鳴にも近い声で突如として終わりを迎えた。

白銀

1498

ガツン、と頭に響く衝撃。

それが二度、三度と続けば流石に頭にも響いて来る。

一発の威力が想像以下だったとしても、塵も積もれば何とやらと言
うヤツだ。

「おい、まだ分からねえのかよ!」

武御雷の搬入。

それに誰が乗っているのか答えなければ、拳を振るって吐かせよう
とする。

訓練兵相手にイキがって、まともにBETAとも戦わない。

くだらねえ。

くだらねえよ、こんな奴等。

前の世界のオレって、こんなくだらねえ事に巻き込まれていたのか？
階級掲げて偉ぶっている奴等に殴られて、それで

「もう良いでしょう。階級を盾にしてウサ晴らしなんて」

「つるせえっ！！」

貴重な時間まで無駄にして。

月詠さんにも迷惑を掛けちゃった。

だけど、オレが此処で手を出しちゃう訳には絶対にいかない。
此処で手を出し返しちまえば、それこそ問題を抱え込む事になる。
耐え続けるしか、無い。

「階級は関係ねえ。ワケ分かんねえこと言ってねえで」

「お？階級関係ねえの？」

嬉々とした、子供の様な声が、オレの耳に届いた。

目の前まで迫っていた拳を片腕で受け止め、嬉しそうに笑う無邪気な男。

「剣、崎……少佐……」

「よっ、少年。随分と派手にやったな！良いサンドバック振りだったぜ？」

ケラケラと笑いながら、少佐が少尉の腹に拳をブチ込む。

中身を抉る様な強烈なりバーを貰い、身体をくの字に曲げた少尉の肩を軽やかに叩きながら、少佐は言葉を紡いだ。

「ガキ相手にイキがっちゃダメでしょう、大人として」

コツコツと、ただ歩いているだけだと言うのに降り掛かる圧迫感。

注意、説教、警告。

否　ッ！！

これは既に、断罪だ。罪を犯した罪人を裁く、この場がまさに死刑執行場。

「それにさあ、此処は飯食べる場所だから」

しゃがみ込み、悶え苦しむ少尉の顔を下から覗き込む。

何と言うか、あの優しかった少佐の中身が此処まで恐ろしいとは思ってもしなかった。

あの人、怒らせるのだけは止めよう。

多分……オレなんて、一瞬で殺される。

「分かるか？」

「は、ひっ……は……はっ……」

「返事が無いって事は、分からないって事か」

答えられない少尉を見て、少佐は肩を竦めていた。

いや、でも、良く考えれば答えられる筈も無いのだ。内臓を抉られ、上手く呼吸すら出来ない人が質問に答えるなんて。

即ち、コレは　決定された結末を迎える為の、前準備なだけで。

「俺の気に入らない事が2つ程あってね。1つは弱い者苛め」

ゴキリ、と首の骨を鳴らす。

それだけでは無い。肩、手首、拳。殴る際に稼動する箇所の間接が、全てポキポキと鳴り始めているのだ。

誰だつて分かる。

今から、この人は、少尉を、全力で、殴る。

「もう1つは……俺の食事の邪魔をする事だ」

躍動する筋肉。

見えざるパワー。

拳に纏うオーラが、尋常じゃ無い。

同じ人間の筈なのに、同じ人類の筈なのに、その右腕だけがまるで

魔人。

「少し頭冷やせ、この×××野郎が

！！！！！！！！！！

！！！！！！

振り抜かれた拳が少尉の顔面を捉え、有り得ないインパクト音を響かせる。

成人男性の身体が一回転するだけで無く、壁に叩き付けられるまで机を吹き飛ばしながらバウンドして跳ねて行く。

そんな光景を生み出した少佐は、PXに居合わせた全ての人々の視線を集めていた。

胸ポケットから煙草を取り出し、堂々とそれを吸うその姿。

最早何の疑いすら浮かばない。

この人は、ヤバ過ぎる。

「おい、お前」

「は、はひ!？」

先程虚しく壁のシミとなつた少尉に付き添っていた女。

彼女に向けて、少佐は静かに、だが殺意すら込めた視線を向けた。

「次にくだらねえ事をしてみる。その首切り落としてクソ流し込むぞ」

脅しでも何でも無い。

ただ、淡々と事実を語つた恐ろしい一言。

へなへなとその場に座り込んだ女性少尉の下には、大きな水溜りが出来て居たと言う。

「少年、ナイスガッツだったぜ？」

「ハ、ハハ……ありがとうございます」

出された手を力無く握り返し、何とか一息吐く事が出来た。

盛大に机を壊した少佐は、その後に京塚曹長に呼び出されて怒鳴られている。

まあ、京塚曹長だって建前上怒っているだけで、実際は少佐が吹っ飛ばしてくれたお蔭で少しは気が晴れて居るのかも知れないけど。

問題は、それよりも此方にあつた。

「月詠……中尉」

「如何やら、あのお方が全て片付けてくれた様だな……」

廊下。

前方から近付いて来たのは、月詠中尉だった。

オレに死人疑惑を掛け、疑う彼女。

そして、少なくとも龍二さんとも知り合いみたいだ。

同じ帝国に居れば当然なのかも知れないが、剣崎龍二と言う英雄の存在を再認識するには十分な出来事だったとも思える。

「冥夜様への心遣い、感謝する」

軽く頭を下げる月詠中尉に対して、少し気恥ずかしく思うオレが居る。

まあ、そんな事を表に出しちまったら何をされるか分からないけど。

「だが、貴様に掛けられた嫌疑が晴れた訳では無い」

「嫌疑つて……最初から何もするつもりはありませんよ、別に」

「……」彼”が居るのだから、当然か」

「”彼”？」

「ッ。貴様と馴れ合うつもりは無い。冥夜様の気持ちだけは、裏切つてくれるな」

月詠中尉はそれだけ言葉を残し、颯爽と帰って行った。

アレを言う為だけに、此処に居たのだろうか？

だったら悪い事をしたかなあ……なんて思っちまう。

それに

「彼つて、少佐の事だよな？」

もしかして少佐と月詠中尉つて親密な関係なのか？
大人の関係、とか……

「いや、流石に有り得ねえか」

そんな考えを否定して、オレは自室へと歩を進める。
今日は大分疲れた。

ゆっくり休んで、明日の訓練に供えた方が吉だな。

75 11月24日 狂乱（後書き）

次回は新OSの話

書き溜めて見ようと思うので、

もしかすれば《武vs・龍》が有り得る……か？

もしかすれば、今月の投稿はコレで最後かも知れません

少し現実が忙しいので、執筆速度が落ちます

早く投稿出来る様に踏ん張ってみますので、少々お待ち下さい

み、見捨てないでくれ〜！

76 11月27日 感傷(前書き)

今月に投稿できた、だと……

案外、必死にやれば何でも出来るものだ
と自身の身を以って経験しました

いやはや、人間って素晴らしい

76 11月27日 感傷

劍崎

新型OSの作成。

流石の千枝も武装の強化や製作をしながら、そんな物にまで手が回る筈も無い。

致し方無いが、俺は不満タラタラで夕呼の執務室を訪ねる事にした。アイツに借りは作りたくねえが……背に腹は変えられねえ。

遂に、機体の処理速度が俺の操作速度に追い付かなくなりやがったのだ。

このままでは俺のストレスがボロクソに溜まる。

それに 動くだろうと動かして、追い付かないのであれば戦場で隙を曝す事にも繋がってしまうかも知れん。

そんな馬鹿な図体曝して喜ぶ程、俺の頭は壊れちゃ居ないのだ。

「で？新OSの開発を依頼したい、と」

「単純に処理速度を上げる事と、機体の受け身シーケンスを無くして欲しい。アレ、正直俺にとっては邪魔以外の何物でもねえ。ぶっ倒れながらも射撃出来た方がまだ得だし」

「整備兵泣かせねえ、アンタ」

「この程度で泣き言を言う様な軟弱者は居ねえよ、俺の管轄には」

何よりも優先しなければならぬのは単純に、OSの鋭敏化。

今のOSでは既に操作技術に付いて来られない可能性すら持ち合わせ、尚且つ下手な事をすれば操作すら受け付けない、驚くまでのポンコツ具合を誇る。

今まで良くもまあ、こんな危険物に命を預けていたなあと感心すらするレベルだ。

次に受け身シーケンスの削除。

今のOSでは倒れる際に強制的に受け身を取る様にプログラミングされているが、そのプログラミングを消して、任意で受け身・別行動をしようと言う選択肢を作りたい。

【転倒 受け身】と言う今までの一片だけの選択肢では無く、そこに【転倒 射撃 ブーストでの立て直し】や【転倒 ブーストでの離脱】等の選択肢を増やしたいのだ。

こんな事を簡単に言っただけは居るが、コレが少なからずとも面倒な作業だと言う事は十二分に理解しているつもりだ。だが、彼女で無ければ出来ないのもまた事実。

行き詰っている事は 分かっている。

だが、頼るしか無いのだ。

悪いとは思う。すまないとも思う。無理をさせて居るとも思う。

だが、コイツにしか出来ない事がある。

だが、コイツにしか理解出来ない事がある。

ならば、俺は関与しない。

無茶をさせて居ると分かっている、俺はコイツを頼り、絞り、吸い尽くす。

例え骨だけになろうが、俺はその骨まで噛み砕くだろう。

だからこそ 夕呼には俺の命を預けて居る。

この世界で唯一無二、俺に特攻命令を出せるのは彼女だけだし、この世界で唯一俺が頭を垂れる人間はコイツだけである。

ギブ&テイクにしては、少しばかり割に合わないだろうか？

いや、まあ十分か。

技術に対する提供が労働力。

それは極々平凡な、当たり前前の等価交換だと俺は思う。

「ふう〜ん？」

「何だよ」

「アンタと同じ、面白い発想をする奴が居たわよ」

俺と同じ？

一瞬だが僅かに眉根を寄せ、顔が顰められていたのが自分でも分かる。

そう易々と、俺と同じ存在が出て来る筈も無い。

現段階で、俺に似通っている者は約4名。

その全てが？推進派の下で虎視眈々と俺の首を狙っている筈だが……？

あ、いや、別に見た目まで似通っている必要性は無いのか。

もっとアホらしい事を考える、中身がガキの様な奴を思い浮かべれば自ずと答えは出て来る訳で、現段階の横浜基地に居るそんな野郎は1人しか居ない。

「白銀か」

「ご名答。あつちは受け身シーケンスの削除と、連続技の組み込み

を依頼して来たわよ」

「連続技、ねえ……【ロー・ジャブ・ストレート】とか？」

「それだけじゃなくて、【ロー・ジャブ・ストレート】の”ロー”をキャンセルする事で別の行動、例えば”アッパー”に切り替えるとか。そんな話よ」

「あの世間知らずの事だ。自分の動きをトレースさせて云々言っただらう？」

「良く分かったわねえ、その通りよ。そんな偏った動きしか出来ない戦術機なんて、何の価値も無い鉄屑なのにねえ？」

ニタア、と不気味に笑う夕呼を見て思わず背筋に悪寒が走る。

とは言え、俺は依頼をしに来ている人間なのだ。

此処でコイツの機嫌を損ねて、「やーらない！」なんて事になっては困り果てる。

とは言え、コイツの事だ。

並列処理機能が十分戦術レベルにまで達しているコンピューター程度ならば用意出来ている事だろう。つまり、白銀の案件は無事に可決された訳である。

ん？ ちょっと待てよ。

それって、俺の頼んだOSって意味が無い訳だろ。

何それ。まさかの二度手間？

わざわざ此処に来たのに、嫌々此処に足を運んだって言うのに、それ全部無駄なのか？

「……うっわ、悲惨」

思わず自分の無駄骨振りに頭を抱えてしまう。

隣でゲラゲラ笑う夕呼を責める事も出来ず、溜息だけ吐き出して俺は応接用のソファに腰を下ろした。

これから起こるのである。戦術機の改革。

新たな時代の荒波は何度も経験し、体験して来た。

今回も結局はその1つにしかないのだが、此処まで直接的に俺に関係する事は今までではなかった事なのだ。楽しみ……かも知れない。今までと比べれば、段違いに。

「で、アイツにテストパイロットを任せたと？」

「そう言うこと」

テストパイロット。

結果として、彼は自分の憧れていた役職に片足を突っ込めた訳だ。

しかも、今後の戦力比率を大幅に塗り替えるかも知れない可能性を秘めた新型OSの主格パイロットともなれば、重要度も段違い。

だが「白銀武は無事に夢を適えました、おしまい」って訳にはいかないだろう。

元来、最新の武装と言う物は下積みで時間を必要とする。

性能云々以外でも、局地ですら対応出来るのか、実戦では如何か。

例えば、拳銃ならば弾丸を撃った後に弾詰まり ジャム は発生しないのか如何か。

様々な問題点を潰していきながら、漸く完成する試作品を更に研ぎ澄ましていく。

そう言う物なのだが、今回の新OSは全てが急ピッチ作業過ぎる。

デバック作業に掛かる時間もバカに出来ないレベルなのだ、それを

易々と言っ て来る辺り、まだまだ少年の中身は”軽い”。

「……分かるわね？」

「経験を積ませたいのか。PCも人も」

差し出されたコーヒーを口に含み、少しばかり考える。

さて 漸く戦術機に乗る事になった少年との激突が企画されている訳だが、俺はこれを易々と受けても良いのだろうか。

まあ夕呼からの後押しもあるだろうから、拒否は出来ないだろう。

だが、本当にそれで良いのか。まだ出鼻を押し折るには早過ぎるのでは無いだろうか？

総戦技演習での合格、新OS開発にテストパイロット任命。

今、少年は波に乗って来て居るのだ。

それを俺が叩き落す、と言うのは如何なのだろうか。

「別に”叩き潰せ”と言っている訳じゃ無いわ」

「……ああ、何だ。八百長かよ」

「アンタも好きねえ、そう言う捻くれた言い方。良いでしょ、打ち合わせ通りとか少し薄めて言っても罰は当たらないわよ？」

「好きになれねえだけだよ。イカサマとか、八百長とか、裏でコソコソする奴等を見ると 何もかもブチ壊したくなる」

”昔を思い出すからな”。それだけ呟いてやると、夕呼は以降口を閉ざした。

彼女なりの気の使い方、なのだろう。

ああ確かに、今は静かにしてくれている事が俺にとっては最良だ。

如何にも昔の事を思い出すと、気分が憂鬱になるのだ。

何も出来ない、何もしない、何も求められなかった無力な自分を見詰め直す様で。

静かな時間が過ぎ去って行く。

夕呼は特に咎める事も無く、コーヒーに口を付け。

俺は過去の雑念を振り払う為に黙々と瞑想を続けていた。

「それじゃ、如何するつもりかしら？」

「適当に相手をして、適当に負けて来る。ああ、それと管制はお前が頼む。下手に千枝なんかを持って来ると負けた腹癒せに呪い殺されちまうかも知れん」

「元々そのつもりだから、安心なさい」

数分だったのか、数十分だったのか、数時間だったのか。

夕呼に声を掛けられ、自身の思いを取り敢えず呟く。

結局、俺は八百長に乗る事にした。此処で少年の出鼻を挫くのならば、適当に相手をしてステップアップの鍵となった方が得策だろう。

「それと」

「ん？」

「……悪かったわね。別に、昔の事を思い出させたかった訳じゃ無いのに」

恥じらい、それでも此方に謝罪の言葉を述べる夕呼を見て俺は思わず言葉を失った。

有り得ない。想像出来ない。考えられない。

香月夕呼だろう、香月夕呼の筈だろう？
だったら如何して俺に謝る、謝罪を述べる、恥らう姿を見せる？
意味が分らん。

「夕呼、お前……」

「な、何よ」

「風邪か？」

「……………ハア。死ねえ、朴念仁 ツ!!!!!!!!!!!!!!」

厚さ数百枚。重さ数kgは有るだろう、恐るべき書類の束。

それが俺の顔面へと飛来し、そして打ち抜いて行く。

そんな凶器を投げ付けた張本人は、痛みによって絶叫する俺の姿を見て、呆れた様にやれやれと首を振っていた。

まったく。この女の自由気侷振りには、流石の俺もやれやれだぜ。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

テストパイロット。
エース中のエースに与えられる、名誉ある称号。
新型の武装を製作する為に尽力し、それを骨格として新たな戦術機
の開発とか。

あるぜ、一応。ワンオフ機

龍二さんの言葉を思い出し、顔が思わず綻んでしまう。何たって自分だけの専用機だ。

V字型の角とか、赤いのか、変形とか、合体とか。

男の浪漫がそこに十二分に詰まっている事は言うまでも無いだろう。まりもちゃんが伝達事項を伝えていると言いつのに、オレの頭の中ではそんな事を一々考えている様な余裕は無かった。

「それと緊急ではあるが、最後にもう1つだけ伝達事項がある。明日、急ではあるが 珠瀬事務次官が横浜基地へ来訪する事となった」

「……………」

珠瀬事務次官が来訪ねえ。

いやいや、それよりもオレ用の機体が出来たらどんな……………ん？ 珠瀬、事務次官。

珠瀬事務次官が来るって事は、此処に……………ッ！！

「あ、明日……………珠瀬事務次官が、此処に……………？」

「ん？そうだ。何か問題があるのか、白銀」

「い、いえ……」

表面上では冷静を装おうとはしているが、そんな事が上手く出来ている筈も無い。

何せ、本来ならばHSS T落下はもつと後の出来事であり、今のタイミングで落ちて来る筈は絶対に無いのだ。

市街地演習が終わり、そしてやって来る筈の珠瀬事務次官。だが、今回は市街地演習よりも先にやって来ちまった。

これも、未来を変えちまった原因なのだとしたら……オレの記憶が……

「伝達事項は以上だ。全員、解散!!」

まりもちゃんの号令とほぼ同タイミングで、夕呼先生の下に全力でダッシュする。

この未来を、一刻も早く先生に伝えて対策を打たなきゃいけない。じゃなきゃまた、タマにこの基地の命運を握らせる事になっちまう。それだけは　タマを信頼していない訳じゃ無いが　避けたい。

「うおっ!?!」

「うわあっ!!」

ほぼ無心で駆け抜けていた時、曲がり角から誰かが此方へと歩いて来ていた。

でも、今のオレにそれを回避出来る程の時間的余裕は無い。両足に力を入れて、何とか踏み止まろうとするが、そんな事で易々と止まれる訳が無いのだ。

もう直ぐぶつかる　!

そんなタイミングで、膝が突然、カクンと力無く”落ちる”。

「落ち着いて行動しろ。嬉しいのは分かるけどさ」

「りゅ、龍二さん……！」

目の前に、先程衝突すると思われた人物とそれを庇う様に立ち塞がる龍二さんが居た。

ビックリした様に瞬きしながら此方を見詰める、銀髪の少女。

そして、そんな彼女をオレに見せまいとする様に少女とオレの間に入るもう1人の銀髪の女性。確か　龍二さんの部下だった筈だ。

「相手は女の子だぜ。ジロジロ見るのは失礼だろ？」

「あ、す、すみません！」

咎める様に呟いた龍二さんの言葉に思わず頭を下げたが、今がそんな事態では無いと言う事に気が付く。何せ　此処にHSS Tが落ちて来るのだ。

放って置けば一瞬で何もかも吹き飛ばす超巨大な質量とデリケート爆弾の塊。

そんな物が此処に落ちれば、地下も含めて何もかも消し飛ばしてしまっ。

「クリスカ、先にPXに。少しばかり少年と話があってね」

「……分かった」

そんなオレの心情を敏感に感じ取ったのか、龍二さんは銀髪の女性　クリスカ、と呼ばれた人に指示を出し、オレの首根っこを掴ん

で喫煙室へと連れ込んだ。

半ば投げ込まれる様に吹き飛ばされたオレとは対照的に、既に対面の席で龍二さんは暢気に煙草を吹かしている。此処に人が居ない事が、不幸中の幸いだった。

「また何か面倒事か？お前が思い出す事は大抵、俺や夕呼じゃなきゃ頭が痛くなりそうな話題ばかりだからな」

「あの、落ち着いて聞いて下さい」

「落ち着くのはお前だ。さっきから心音が荒いぞ、タコ」

龍二さんは焦った様子すら見せず、静かに煙草を吸っている。

この人が焦った姿なんて 想像すら出来ない。もしも、そんな姿を見るとするのなら縁起でも無いけど、人類の終わりを示しているのでは無いだろうか？

今なら、そうとすら思えて来る。

そんな龍二さんはその両目で此方に「話せ」と訴えており、オレは辺りに誰も居ない事を確認すると、静かに言葉を紡いだ。

「この横浜基地に、H S S Tが落下して来ます」

「ふうん」

「あ、あの、再突入と同時にフルブーストのH S S Tですよ!？」

「凄いな。こんなサイズの基地じゃ、碌な迎撃も出来ずに御陀仏だ」

やはり、焦らない。

寧ろその程度かと言わんばかりに、龍二さんは興味を失っていた。

何故と疑問にすら思う。

この人はオルタネイティヴ？を遂行する立場の人間だ。夕呼先生曰く、現在のオルタネイティヴ？に於いて任務達成率100%を誇る最終兵器。人間核弾頭、とも言われた計画の中核すら為す存在の筈なのに、龍二さんは横浜基地 強いては、オルタネイティヴ？の存亡すら賭けた大事件を前に焦りすら見せていない。

「珠瀬事務次官が明日に来るって言うのに……そうしたら、HSS Tの落下はもう目前に ツー！」

「あのなあ、変え過ぎるのも良くないだろ？」

呆れましたと言わんばかりに頭を描いた龍二さんが、此方に視線を向ける。

それには可哀想な子を見る様な、多分の哀れみすら含まれていた。この人、何処か夕呼先生に似ている節がある気がする。こう言った自分しか理解出来ない事を隠し持つ所とか、基本的にサディストな所もソツクリだ。

いや、今はそんな事は問題では無い。

変え過ぎるのは良くない、とは如何言う意味だと言うのだろうか。未来を変えて、少しでも早く衛士として任官し、オルタネイティヴ？を成功させる。

その為には一刻の猶予すら無いと言うのに……

「これ以上未来を変えちまえば、お前の持っている未来の知識が何の役にも立たなくなるだろう？ただでさえ曖昧な情報だつて言うのに、これ以上信憑性を失えばお前の存在価値なんて毛程も無くなるぞ、ハッキリ言うておくが」

「あ……」

「それに、前日もキチンと解決した訳だろう？ 訓練兵の珠瀬が」

「そ、それはそうですね……でもっ、今回も成功するなんて確証はありませんよ！あの1回はマグレ当たりって言う可能性だって

ッ……！」

その先の言葉を言おうとした瞬間、部屋の温度が数度下がった気がした。

龍二さんに真っ直ぐ見詰められているだけだと言つのに、口から言葉が出ない。

喉が異様に渴き、この人の視線から逃れたいとすら思う。

拳が震え、膝が笑い、奥歯が力チ力チと鳴り響いてすら居た。

向けられるのは 敵意か、それとも殺意か。

「隊の仲間すら信じられない野郎が、『世界を救う』？ 笑わせるじやねえか」

クツクツと喉を鳴らして、とても愉快そうに龍二さんは笑っていた。誰が見ても分かる様な、綺麗な笑顔だ。

だが、笑顔は時として敵対の意思すら示す凶悪な物と化す。

今の龍二さんが浮かべる笑顔は、どの様な見方をしても後者にしか見えなかった。

睨み付けるのではなく、観察する様に此方を見詰める瞳。

口から紡がれる言葉は呪いの様に頭に入り込み、思考回路を鈍らせる。

向けられる感情が何よりも鋭く、鋭敏な刃となって心を切り刻む。

英雄と言われた人から向けられる、敵意。

それは当てられるだけで意識すら掻き消えそうな、濃厚な重圧 プレッシヤー。

「お前つて、薄情だな」

「オ、オレは別に……ッ!!」

「頭では分かっちゃ居るが、表には出さないか。お前が綺麗なまま
で居たいのか如何かは知らないが、」

そこで言葉を止めて、短くなった煙草を灰皿へと棄てる。

ジリジリと燃えている吸殻の先の火が一瞬だけ、紅から蒼に変わった様な気がした。

紅は不完全な燃烧。

それに対する蒼は完全なる燃烧。

この次に紡がれる言葉は重く、深く、辛く、オレにとっては痛い所
を突く様な物かも知れない。だが、龍二さんは伝えようとしている。
オレに 覚悟を。

「血に濡れないで、誰か救える筈が無い」

突きつけられた現実はあまりにも冷たく、そして恐ろしかった。

つまり、龍二さんは誰かを救う為なら誰かを切り捨てる事すら止む
無し、と言ったのだ。

それを真正面から肯定出来る筈も無い。

そんな事すら分かっていると云わんばかりに、ただ静かに「悩めよ
とだけ呟いて龍二さんは喫煙室を後にする。

龍二さんの立ち去り際の表情は、何処か優しさすら浮かばせた、父
の様な笑顔だった。

クリスカ

PXに入るなり、龍二は悲しそうな表情すら浮かべていた。
イーニアはそんな彼の表情を見て、私の袖をギュツと握り締める。
まるで彼の気持ちの方が自分にまで伝わって来ていると言わんばかりに、
綺麗な唇の端が引き締まっていた。

またアイツだ。

アイツが居る所為で、龍二は私達にすら分からない何処かへと行く
うとする。

アイツが居るだけで、龍二は命すら危機に曝して戦場へと降り立
うとする。

“白銀武”。

突如として出現し、そして龍二の後ろ盾すら得た謎の男。

誰もが彼の存在を容認している訳では無いが、この基地に居る大多
数は彼の存在を半ば程は受け入れていた。
だからこそ 私は奴を信用など出来ない。

「悪い、少し話し込んでしまった」

悪びれも無く言葉を紡ぐ龍二ではあったが、その声質に覇気は無い。
何かを悲しむ様な、何かを哀れむ様な、そんな曖昧なクセにハッキ

りと悲しんでいると分かる中途半端な面持ちで、彼は面倒そうに頭をポリポリと掻いていた。

「……りゅづじ」

今の龍二を見て、誰よりも恐ろしくすら思ったのは他ならぬイーニアだろう。

今まで龍二からは見た事も無く、感じた事すら無い哀愁。それを出され、間違い無くイーニアはその感情にすら戸惑いを覚えていた。

自分にとって英雄である存在の、驚く程に脆い内面。

センチメンタルと馬鹿にする事も出来る。繊細過ぎると笑い飛ばす事も簡単だ。

だが、イーニアはそんな事を知らない。

いや、龍二に対してそんな感情すら抱く事は出来ないだろう。

幼くしても理解した、“愛”と言う感情。

私に抱く好意すら超越し、最早イーニアは剣崎龍二と言う存在に固執して居る歪な命だと言っても何ら問題すら無いだろう。

つまり この世界に龍二が居なければ、イーニアは迷わず死を選ぶ。そう言う事なのだ。

「だめ。ここにいて」

「イーニア？ そんな寂しそうに身体震わせてさ、何か怖い夢でも見たのか？」

「こわい……こわいよ……りゅづじが、こわい……」

「俺が怖い」？」

腕の中、静かに震えるイーニアの小さな身体を抱き止めていた龍二の手がピタリ、と止まる。自分が怖い　そう言われて困惑して居るのだろう。

小さな身体が自分の腕の中で震えている。

その事実だけが龍二にとっては重く、辛い物だった。

「イーニア、どうしたら泣き止んでくれる？」

「ずっといっしょだよな？　やくそくしたよね？　りゅうじ、いっしょだよな？」

「一緒だとも。今までも、この先も、ずっとね」

「でも　りゅうじはしんじやう」

涙に濡れた瞳が、静かに龍二の瞳を射抜いていた。

まるで全てを見透かしていると言わんばかりに透明なそれに見詰められ、龍二は驚く事もせず静かに、穏やかな表情すら浮かべてイーニアの言葉に耳を傾ける。

「りゅうじがりゅうじでいると、きつとりゅうじはしんじやう……わかるよ、わたしにもわかるから。りゅうじのやさしさが、わかるから」

今の彼女はただ、懇願して居るのだ。

無理はするな。無茶はするな。ただそれだけの、それ程までの願い。イーニア・シエスチナと言う存在すら揺るがしかねない、大きな願

い。

「人を導き、救う。それがお前の役目だとは分かっている。だが……少しは自分の身を省みる。お前のやって居る事は尊い行いだが、それでお前が死んでしまえば何の意味も価値も無い。世界は無償で、代え様の無い逸材を失う事になる」

耐え切れず、私も思いの丈をぶつけてやる。

そこで漸く この話題に耐え切れなくなったただけなのかも知れないが 龍二はお手上げだと言わんばかりに両手を挙げた。

「分かったよ、分かった。無理もしないし、自分の事も勘定に入れて考える様にするよ。だからイーニア、泣くな。折角の可愛い顔が台無しだぞ?」

「でも、だって、りゅうじが……」

「イーニアを残して死ねるかよ」

アホ抜かせ、と。

まるで空に爛々と輝く太陽の様な眩しい笑顔を携えて、龍二は笑った。

PXに入って来た時の哀愁すら漂わせた哀しき表情は形を潜め、今の彼の顔に浮かんでいるのは天真爛漫とも言える周りに元気すら与える魅惑の笑顔。

「さあ飯だ、飯!辛気臭え話は此処でキツパリ終わらせて、サツサと飯食おうぜ!」

「うん!ごはんだね!」

「誰の所為でこうなったと……まあ良い」

苦笑交じりに呟き、敢えて最後の言葉を口に出す事を止める。

折角の食事なのだ。

私達の為に失われた命に礼を尽くし、残す事の無い様に食べなければならぬ。

これも全て　この龍二に教わった事だったな。

「はい、いただきます!」

「いただきます」

悲しみに満ちた表情　本人曰く、辛気臭い面をまた拝む事無く、私とイーニアは龍二との食事に華を咲かせる事が出来た。

いつもならば唯依がベツタリと彼にくっ付いている所だが、今日は雑務で席を空けている。

セレナも訓練で遅くなる筈だ。

珍しい、彼と私達だけの食事。

「あ」

「ん?」

「りゅうじ。クリスカ、わらったよ!」

人で賑わうPX。その真ん中よりも少し外れた席でのひとコマ。イーニアの天使の様な微笑みが、その日常を美しく彩っていた。

76 11月27日 感傷(後書き)

- 1 ・投稿できたー！
- 2 ・他の話を見直す
- 3 ・wikiで色々調べ
- 4 ・話の日付……色々やバくないだろうか？
今此処

取り敢えず、タイトルの日付変更をします

内容自体はあまり変わらないので、ご安心下さい

次回はタマパパ登場

パパ登場により、龍二の両親の事が少し分かる……かも。

77 11月28日 『革新/革命』の扉（前書き）

クーデター編への布石

こんな大きい布石、私が操り切れるものか……

やるっきゃねえぜ！（棒

28日

珠瀬事務次官の横浜基地来訪。

それに伴って2007分隊が出迎えに上がり、神宮寺軍曹も教官としてその場に同席。

俺と唯依達も、夕呼からの命令でその出迎えに便乗している。

「お待ちしておりました。横浜基地へようこそ、事務次官！」

榊訓練兵の敬礼に合わせ、2007の連中も敬礼を掲げる。

それは此方も同じ事で、唯依を初めクリスカとイーニア、セレナと千枝もビシッと格好の良い敬礼を決め込んで居た。

相手が事務次官ともなれば、当然とも言えるか……

寧ろ、相手が事務次官だと言うのにペースを崩さない俺が可笑しいのだろうな。

「あ、あの龍……少佐」

「ん？」

「相手は事務次官ですし、敬礼をされた方が……」

「構いやしないよ。あの人はそう言う事で小言を漏らすタイプじゃ無いから」

唯依の咎める様な口振りにも軽く流し、珠瀬事務次官に視線を送る。彼はと言うと、俺達の事など気にする事もせず、楽しそうに娘さんである珠瀬訓練兵とじゃれ付いていた。相変わらず、何処までも自由奔放な人だ。

「まあまあ事務次官殿。あまり訓練兵を苛めないでやって下さい」

慧が珠瀬に私語を注意され、

何故か知らんがその場に居合わせてしまった霞はトイレ掃除を命じられ、

榊はと言うと父親譲りの頑固者と苦言を申され、

鎧衣に至っては（無い）胸を弄られる始末だ。

このままでは、その皺寄せが全て少年に回されそうだな。別に助きたい訳では無いが、此処は1つ昔話でもするとしようか。泣きじゃくる鎧衣の頭を撫でながら、俺は珠瀬さんへと視線を向けた。

「君と直接会うのも久しぶりだな……やはり、官僚相手は疲れるかね？」

「机上の論戦に意味はありませんから。俺には戦場が合いますよ」

そうか、と呟いて珠瀬さんは懐かしそうに何度も頷いていた。

此処で取り残されてしまったのは俺と珠瀬さんを覗く他の者達だっただろう。話に付いて行けずに目を白黒させて居た為に、俺は話の腰を折る事にした。

「ところで珠瀬さん、白銀訓練兵には何も？」

「うげえっ!？」

まるで地雷でも踏んだかのような呻き声を漏らす少年の声を聞いて、この質問が彼にとつては地雷である事を何と無く予想する。まあ珠瀬さんの事だから いや、この場合は珠瀬訓練兵の事になるのか 吹き飛んだ内容である事は疑い様が無い。

哀れ、白銀。

お前の死は無駄では無いぞ。

(龍二さん、何で……ッ!?)

(逝け、少年)

ニヤリ、と唇の端を吊り上げた俺の顔を見た時の少年の顔と言ったら思い出しただけでも腹を抱えて笑い出しそうな程である。絶望に打ちひしがれた子犬の様に両目を潤ませたその姿、嗜虐心が唆される。

「座学・兵科共に成績優秀。冷静沈着で頼り甲斐のある青年と聞いているよ」

「ほうほう。流石は白銀訓練兵、仲間内からの信頼も厚い様ですね」

「うむ。先程から見ていたが、中々の好青年だ」

「こんな時代です。彼のような青年は多くは居ませんよ、きっと」

見る見る内に目の端に涙を溜める少年を見て、俺は内心で笑いが止まらなかった。

大よそ、想像して居たよりも今回の騒動は話が飛躍しているのでは無いだろうか？

そう考えると今にも理性と言うダムが決壊を起こしそうだった。許されるのであれば、腹を抱えて笑いたい。

「わしもそろそろ孫の顔がみたいかな。ま・ご・の・か・お・が・な！！」

笑顔で少年の背中を叩く珠瀬さんと、終ぞ涙を流した少年の姿に俺の限界と言うダムが崩壊を始めた。口の端から僅かに漏れた笑いが、やがては大きくなって行く。

クスクスがケラケラ。ケラケラがゲラゲラ。

必死に口元を抑えているが、こんな事で長く保てるか分からない。御剣と榊、そして彩峰と共に何処かへと連れ去られて行く白銀。その目から大量の、夥しい程の涙が溢れ出ている。そんな彼に笑いを堪えながら、俺は少年に手を振った。

「ああところで剣崎くん」

珠瀬訓練兵を離れた珠瀬さんは、俺に向かって笑い掛ける。その笑顔には何かが含まれており、少し怪しく思いながらも彼へと向き直った。

「ププツ……は、はい？ 何でしょう？」

「レイコちゃん」がたまには遊びに来い、だそうだよ」

「レイコちゃんか！？ うわっ、仕事で忙しかったからなあ……今晩やりますか、一杯」

「当然だとも！わしはその為に来たのだからね！」

勝手に盛り上がった男2人を他所に、此処で俺自身が地雷を踏んでいた事とは知らなかった。後ろでフツフツと湧き上がる怒気2つ。それを前に、大慌てする気が1つ。

「君は昔からレイコちゃん一筋だなあつ！ 胸かね？やはり、狙いは」

「珠瀬さんだつてカナコちゃんばかりじゃないですか。あんな猫なで声出して〜」

「ガッハツハツハツハ！！」

勝手に盛り上がるオヤジ2人を前に、遂に防波堤は決壊した。まだ敵意が龍二のみに向けられていたからこそ良かったが、もしも珠瀬事務次官にも同じ意思が向けられたかと思うとゾツとしてしまふ。

「龍二さん」

「龍二」

通常よりも優しく、まるで柔らかなシルクの様に美しい声が俺の耳に届く。

だが 俺の本能は否応無く、自身の存在の危機を語っていた。額から落ちる一滴の汗。

背中を撫でる冷たき殺意に、思わず背筋が凍る。

「……引き千切る」

「……去勢してやる」

ほぼ同時に俺の耳元で呟かれた言葉を聞いて、俺の涙のダムも決壊した。

良く保ってくれた、我が息子。

あの場面で下半身が大洪水にならなかったのは、単に息子の頑丈さが原因だろう。

首根っこを掴み、唯依とクリスカが俺を地獄へと運ぶ。

あまりの怪力に既に反抗する気力すら失せ、俺は　ただ笑った。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

男子トイレ。

そこに、2人分の死体が放り投げられていた。

1人は皺寄せの結果として仲間内から制裁を貰い、1人は昔の戯れが原因の自業自得。

とは言え、両者共に顔面の形は脆くも崩れ去って居るのを見ると哀れみすら誘つ。

「……よう」

「…………どうも」

両者共に止め処無い涙を流しながらも、何とか立ち上がる。流石にトイレの床に寝続けると言うのも抵抗があるだろう。少なくとも、オレはある。

龍二さんも同じ気持ちだからこそ立ち上がって、服に付いた汚れを払って居るのだ。

別に何も変じゃ無い。

「悪かったな、地雷踏ませちまって…………」

「いえ…………それよりも、龍二さんは如何して此処に…………？」

「…………若さ故の過ち、ってヤツだ」

首を軽く回しながらも、ポケットの中に入っていたのだろう煙草を取り出した龍二さんは、それを俺に向ける。吸うか？と言う確認なのだろう。

首を振って遠慮すると、残念だと言わんばかりの溜息が聞こえた。指を使わずに箱から煙草を取り出し、ライター　それも高そうなで火をつける。

トイレではいつもフルに換気扇が回っているので特に気にする事も無く、龍二さんは煙草を吹かしていた。

「HSS Tの件だが、」

そんな龍二さんが、チラリと此方を見やる。

姿こそリラックスしているが、目だけは真剣そのものだ。

そして、今から話すのだろう内容もオレの緊張感をより一層煽る物である。

手に汗握るとは、まさにこの事では無いだろうか。

「夕呼には俺から話を付けて置いた。アレが落ちて来る事は無い」
だが、その緊張もやがては霧散して行く。

またもやトイレの床に腰を下ろしたオレを見て、龍二さんは悪戯の成功した子供の様に健やかな笑顔を浮かべた。

「前は悪かったな、お前の試す様な事言っちゃまって」

「いえ……やっぱり、可笑しな話ですよ。仲間を救いたい筈なのに、何処かでオレはアイツ等を信じきれて居ないなんて」

「仕方の無い事じゃ無いのか？ 真つ当な人間なら尚更さ」

フワツと煙草の煙が宙に舞い、龍二さんはゆっくりとオレの隣に腰を下ろす。

何処か安心したかの様な穏やかな表情だ。

PXの一件もあったので、過激な人だと思いついて居たけど、こんな顔も出来るのか。

「今は大事な時期だ。お前にとっても、夕呼にとっても」

「……はい」

「未来は確実に良い方向に変わっている筈だ。だから、今は焦るな」

ポンポンとオレの肩を叩いて、龍二さんはパンパンと両手を叩く。
湿っぽい話は終わり、そう言いたいのだろう。

先程までの真剣な表情が今度は形を潜め、悪戯っ子の様な笑顔を浮

かべていた。

この人がこんな顔を見ると、碌な事が無いのは先の件で実証済みだ。思わず、額に汗が滲み出る。

「ところで白銀よお。お前、仲間内の中で一番誰を」

ガラガラガラガラ

バケツを引き摺りながら、霞登場。

彼女の急な登場によって龍二さんの喉元まで出掛かっていた言葉が腹に引っ込み、眉根が痙攣する。出鼻を挫かれる、と言うのが彼にとっては此処まで衝撃を受ける物だったのか。

「……よ、よお、霞」

「……こんにちは」

「カ、カスミチャンジャマイカ」

「トイレ掃除、します」

まるで外人の様な独特のニュアンスを持つ日本語を喋る龍二さんなど構わんと言わんばかりに、霞はズイっとバケツをオレ達へと見せる。

タマに言われた事を実行しているのだろう。適当で良いと言ったのに、このままじゃ基地中のトイレを制覇しそうな勢いだ。

「オ、オーケイ。邪魔だな、俺は……退散させて貰うか」

そんな仕草を見せられ、龍二さんは頬を引き攣らせながらも両手を挙げる。
完全な降参ポーズ。

霞のような子供相手には何とも弱い顔を持つ、英雄の一面なのだった。

剣崎

霞登場のトイレから場所は移り変わり、横浜基地のVIPルームとも呼べる場所。

高級なソファ、冷蔵庫の中に収められた最高級の酒、最高峰のPC環境。

世界有数の物だけを集めた、滅多に使われる事の無い部屋だった。

そこに居るのは、2人の男。

1人は珠瀬事務次官。目の前に置かれた高級ワインの香りを、静かに楽しんでいる。

もう1人は言わずとも知れた剣崎龍二。

此方はワインに手を付ける事も無く、ただ会話が始まる事を待っていた。

「香月副司令は遅れて来るそうだね」

「申し訳ありません。何とも自由奔放な性格でして……」

「いや、気にしないでくれ。こうして君と話が出来回数もあと何度あるか……折角の機会だ、会話に華を咲かせるとしよう」

笑顔でワインを煽る珠瀬さんを見て、思わず笑みを浮かべる。

この人は昔から何も変わらない。

国の事を思っていると言うのは昔から変わらないクセに、中身はいつまでも若々しい。

見習いたい程だな、と独り思ってしまう。

「君の父上から、伝言を預かっている」

「アイツ、から……？」

無意識に、心が拒絶して居るのが嫌でも分かった。

剣崎剛 俺が最もこの世界で嫌い、憎み、恨み、殺したいと切に思ふ男の名前。

自然と拳にも力が入り、握り締められたそれからは血が滴り落ちた。許せない、許される筈が無い、許されて良い訳が無い。

世界を救う為に奴は躊躇う事無く人と言う性を棄て、悪魔に魂すら売り払った。

その犠牲として久留巳は死に、母さんは ツ！

「『愚か』だそうだよ」

「愚か、か…… テメエから何もかも引き千切った野郎が、良く言うぜ……」

聖母の護り手としての意地が、夕呼を護り続ける剣としての誇りが、

母さんと久留巳の死が無駄では無かったと証明する為の覚悟が、
剣崎剛と言う存在を完全に否定する。否定しなければ生きてはいけ
なかった。

家族の筈が、家族の筈なのに、決定的なまでの溝。

オルタネイティヴ？とオルタネイティヴ？。

両者共に人を護ろうとする意思こそ変わらないが、その為の過程や
結果、そして犠牲はあまりにも違い過ぎる。

一か八かの一発勝負か、多数を犠牲にした上での確実な生存か。

俺には どちらが正しいのかは分からない。

人類と言う種を後世に残そうとすると言う意思是結局、どちらも変
わらないのだ。

ならば何故こつも決定的なまでの違いが生まれるのか。

それは、人間だからとしか言えないのではないだろうか？

結局、BETAと戦っている中でさも、人と人は分かり合う事など
出来ないのだ。

俺と親父が相容れる事が無い様に……

「君は、自分の父を討てるのかね？」

珠瀬さんの確認する様な言葉。

その言葉に込められた強く、重い言葉の重圧が俺の上へと押し掛か
る。

だが、決めたのだ。

剣崎剛がオルタネイティヴ？を肯定したあの瞬間、俺は 俺の心
が決心した。

この男を殺す、と。

「俺の前に立ち塞がるのならば、躊躇い無く討ち果たします」

迷う事など無い。

母と久留巳の墓に誓った、復讐の二文字。それを違える事など有りはしない。

この手で、俺の意思で、自らの父の首を必ずや叩き落してみせる。

そこは、寂れた墓地だった。

ただ、そんな砂埃すら被り、手入れすらされていないのであろう多数の墓石の中で一際目立つ物がある。“剣崎家乃墓”と刻まれた墓石には、白百合の花束が載せられていた。

最近掃除でもされたのだろう。

その墓石だけは、真新しい物と比べても見劣りする事が無い程に美しかった。

「……また来たのか、馬鹿息子が」

白髪混じりの頭をした年配の男性が、呆れた様に呟く。

その手に持っているのは 墓石に添えられる華と同じ白百合の花束。

あの日、千代美が死んだあの瞬間　息子との間に出来た巨大な溝
今更それを埋め様とは思わない。
今更それを悔やむ事は無い。
悔やむ事無く、人生を進む。死んだ妻が、千代美が良く口にした言葉
を噛み締めた。

「許せとは、言わん」

白百合の花束を墓石に添え、男は　劍崎剛は顔を上げた。
地平線の彼方、既に沈もうとする夕陽を眺めてただ言葉を紡ぐ。
それは己に対してか、それとも出来ない馬鹿息子に対してなのか……

「左近、貴様も墓参りか。それとも、俺に介錯でも求めに来たのか？」

何か考え事をして居ようと、その神経が遮断される事は無い。
劍崎大將は自身の後ろに立つ男に躊躇い無く刃を向け、首筋に切っ
先を突きつけた。
それに対して、鎧衣左近は怯える事無く微笑む。

「はっはっは。相変わらず、笑えない冗談ですな」

「冗談か……冗談では無いかも知れんがね」

苦笑すら織り交ぜ、劍崎大將は刃を鞘に収める。
この男の事だ、既に仕事は終えたと言う事だろう。
あの”若造”に発破を掛け、背中を強く押し出してやる。そんな簡単な仕事だ。

「日本が動くぞ」

「ええ、劍崎大将」

「日本が動けば、奴等も動く」

「その通りですな」

「ならば 我等はそれを一網打尽にする。覚悟は良いか、左近」

「殿下の懐刀として働いて来ましたが、同時に私は貴方の友でもある。友人の頼みは……断れまいよ」

そう言つて、左近は寂しそうに笑う。

目の前の男との長い付き合いを思い出せば、時すら忘れて思い出に浸る事も出来る。

長い年月を共に戦い、歩み、見て来た今ならば言える。そして分かる。

劍崎剛の覚悟、そして信念が。

「行くのかね？」

「応。もう、止まれんのだ」

「その結果が自身の破滅だったとしても、君は止まらんのかね？」

「破滅？ ハツ……是非も無しッッ！！！」

彼の眼光が鋭く光り、その目の先に捉える一人の青年の事を思う。

英雄として名を馳せて、父の首を掻つ切る為に覇道を歩む龍すら屠る者 劍崎龍一。

避ける事の出来ない終わりが、目前まで迫っていた。
その時、二匹の龍は何を考え、何を求め、そして何の為に刃を交えるのか。

決着の舞台となる場は

「来やがれ、馬鹿息子！！」

「覚悟しろ、クソ親父！！」

間違い無く、跡形も無く吹き飛ばされる事になるだろう。

77 11月28日 『革新/革命』の扉(後書き)

龍二の父、剣崎剛の登場

階級は大将デス

物語的には『あ号』をラスボスと置くと、中ボス的な雰囲気
中ボスにしては色々と危ない人ですが……

この人の登場で、クーデター編がかなりヤバイ事になります

『帝国&オルタ?vs.決起軍vs.オルタ?』な感じの図式です
正直、混乱の極みです

武ちゃんと一発やった後は龍二の因縁の決着となる、クーデター編
彩峰との和解は成功するののか?

父親との決着は?

謎に包まれる”兄弟”との戦いの行方は?

そして イルマ・テスレフに対する龍二のリアクションが光る

龍二「おい、アレ見ろよ……金髪ポインポインだよ。ありややべえ

……」

唯依&クリスカ

「……」

近日公開(後悔)予定

78 11月29日 秘めた可能性(前書き)

前書きと言っか、この頃の私の事を話します

とりあえず、花粉怖い花粉怖い花粉怖い

折角ですから、私の花粉症を誰かに譲ります

ええええ、花粉症じゃ無い方は花粉症の苦しみを味わって下さい

目玉抉り出したくなりますよ、まったく……

こんな目玉要らないんじゃないッ!!

目……かゆい

香月

「うつつす」

格納庫に現れたのは、軍服姿の龍二だった。

とは言え、まだ幾分か眠気すら帯びたその様は今から戦いに赴く者の面構えとは思えない。やはり今のコイツにとって、八百長程に詰まらない物は無いと言う事なのだろう。

「あら、おはよう。随分と早いよねえ、アンタの登場は午後からよ？」

「気が早いっつつか……207のお嬢ちゃん達の腕前が知りたいっつつか……」

ポリポリと頭を掻き、近場の木箱に腰を下ろす。

すると見る見る内にその場はコイツにとっての食卓と化し、コーヒーやおにぎりやら何やらが溢れる様に出て来る。一体何処に仕舞っていたのか疑問に思うレベルだ。

大方ではあるが、PXでは食事を摂らずに早々に此方へ赴いたのだろうか。それ程までに207の彼女達が気になるのか？

いや、コイツにとって一番気になるのは……御剣が彩峰、そのどちらかだ。

御剣は、龍二を兄と慕う煌武院悠陽の妹に当たる。

このお人好しの事だ、見ず知らずの御剣だろうと妹の様に感じられてしまうのだろう。

随分と難儀な性格である。

次いで、彩峰だが……これは負い目、とも言える。

父親の処刑に関わり、彩峰にとっての精神的支柱すら叩き折ってしまった贖罪。

だが、今の彩峰では龍二を許す事など絶対に無い。

お人好しが背負った贖罪程、重く苦しい物は無いだろう。

勝手に気負い、勝手に背負い、勝手に戒め、勝手に己の死を選ぶ。

コイツに限って、自殺なんて柔な事はしないと思う。いや、絶対に出来ない。

誰よりも死を恐れ、誰よりも理不尽な死を憎む男なのだから、コイツは。

飄々としていて、掴み所がなくて、龍二に関わった奴は大抵がコイツの事を甘く見る。

この程度の男が英雄である筈が無いと思い、嘲り、そして須く驚嘆を露にするのだ。

当たり前だろう。

お人好しなのだから、その背中に背負った覚悟は他の誰よりも大きく、重い。

そんな物を背負い続けて尚戦場で生き抜いたコイツが、”その程度”で終わる筈も無い。

木箱の上でパクパクとおにぎりを口に入れ、欠伸を噛み締めながら朝食を進める様。

英雄と言わしめる男の様とは思えない。更には此処が格納庫なのだから、それが尚の事異質加減に拍車を掛けていく。普通ならば怒りすら覚えるだろう。

覚えるのだが、もうコイツだから許されてしまう。それ所か、龍二が持って来たおにぎりに何人もの整備兵が群がり、楽しそうにそれを食して居た。

流石のその光景には、あたしでさえ眩暈を覚えてしまう。

考えても見る、あと数時間後には戦術機の革命とも言えるOSのテストが控えている。

だが、此処に居る連中はそんな事すら関係無いと言わんばかりに朝食を楽しんでいるのだ。何だか、徹夜した自分がアホらしいと思えて来るではないか。

「……あたしにも寄越しなさい。あとコーヒーも1本」

「コーヒーは金取るぞ」

「……………ケチ臭いわねえ」

投げ渡されたおにぎりとコーヒーを手に、群がっていた奴等を退かしながら木箱の横を陣取る。未だに眠気が覚めないアホを隣に置いて、此処に集まった連中を相手にとって今日のスケジュールをもう一度確認する事にした。

まずは新型OSの性能テストを207部隊の連中だけで行う。

それは勿論、非公開で重要な機密に値する模擬戦だ。此処に居る整備兵も、機密を重視した面子を選び抜いた精鋭でもある。

次いで、OS搭載機で剣崎龍二との戦闘を決行。

新型OSの限界や、旧型で新型に何処まで食い付けるのかを確認して置きたいのだ。

ある意味では、旧型最後の大事な仕事とも成り得る。

「それじゃ、最後に確認だけど」

コーヒーを暢気に飲みながら、呆然と話しに耳を傾けていた隣のアホに視線を向ける。

此処に居る者達の、代弁とも言えるかも知れないその言葉。あたしは、ゆっくりとソレを紡いだ。

「もしも旧OSで新OSと戦ったら。アンタ、勝てる?」

「……」

返って来たのは、無言。暫し考え込む様に頭を掻いて、それから上を向いて何かブツブツを唱え始めた。シミュレーションしているのかも知れない、あの機動を相手にして自分が何処まで食い下がるのか。勝率はあるのか如何か。

「勝てる」

暫くの沈黙の後、龍二は静かにそう断言して見せた。その目に迷いは無く、偽りも無い。

あるのは勝利を確信した笑みと、自信に溢れた瞳だけである。

「と言うか、勝つ。あんな玩具使われた程度で負けられねえ」

挑発的に鼻を鳴らした龍二を見て、あたしは木箱の上で組んでいた足を組み替えた。

周りから押し寄せる笑いの渦と、それに釣られて笑みを浮かべるアホ。
朝から何事かと思ったが、コイツはコイツなりに気負っていたと言
う事か。

「まっ、今回のアンタは華麗に散る事が目的だけどね」

苦笑を漏らし、隣に視線をやると、あたしの言葉を受けた龍二は「
困りものだ」と言わんばかりに肩を竦めていた。さて、では此方も
仕事を終わらせよう。

折角アホが珍しくも気張っていると言うのに、あたし達が腑抜けて
居ちゃ意味が無い。

「さて、仕事に戻るわ」

「おう。頑張れ」

周りに群がっていた整備兵達が仕事に戻る姿を見習い、あたしも軽
く手を払い、木箱から立ち上がる。そんなあたしの後姿を見て、龍
二は軽く手を振った。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

御剣

未だに対戦の為の部隊の編成は通達されて居ないが、各々のポジションを省みればタケルが敵になる可能性が最も高い。

今の自分に、あの機動を見切れるのか如何か。

確かに、工夫すれば決して勝てない相手では無いだろう。だが、その為の工夫とは何だ？

何を如何すればあの機動を前に上手く立ち回れると言うのだ。

その不安が自分を焦らせたのか、足は自然と格納庫へと向いていた。

吹雪に改良を加える整備兵の間を潜り、何処か座る場所は無いかと探る。

今は落ち着いて、確りと心を集中出来る場所が欲しい。

静かだ有れ、と贅沢は言わない。ただ座る事さえ出来れば何の問題も無いのだ。

そして

「……………君は……………」

私は彼に出会った。

いや、その出会いが初めてと言う訳では無い。基地内でも見掛けるし、タケルは良く彼に世話になってしていると聞く。それに、PXで少尉達に武御雷の事で拳を振るわれた際も、彼が迅速に処理をしてくれたお蔭で、タケルに大事は無かった。

雪を連想させる様な真っ白な髪、顔の中心に奔る傷跡。

歴戦の猛者をすら黙らせた強靱な筋肉は形を潜め、絞られた肉体は外見では判別が付かない程に強靱で、良く撓る。弓の様な身体だ、

自然とそう結論付けて居た。

「おはようございます、少佐」

「はい。おはよう」

私の挨拶をすら軽く流し、ニコリと笑顔を向ける。まるで父親の様な錯覚すら覚える。

父性、と言う物が少佐の笑顔には満ちて居た。忌子として分家へと流された私に与えられる事の無かった父の愛。それに近い物を向けられ、思わず動揺を露にする。

「真面目な子だとは軍曹から聞き及んで居たが、こんな時間にご登場か……」

クスリと笑いを漏らし、少佐は静かに自身が座る木箱の隣を軽く叩いた。

此処に座れ、そう言う意思表示なのだろう。その申し出を拒否する気の無かった私は、抵抗も無くその木箱に腰を下ろす。

飲むかい？ そう言って差し出されたお茶を手にとって、軽く頭を下げる。

気にするなと言わんばかりの苦笑を漏らして、少佐は自分の分なのだろうコーヒーに口を付けた。お互い、終始無言でお茶とコーヒーを啜る。

特に話す事が無いのか、僅かに目配せして見た少佐は目を瞑り、コーヒーを舌全体で心地良く味わっていた。その顔は至極幸せに染まっております、そんな彼の邪魔をしては悪いからと自然に此方も言葉を口にすることはしない。穏やかな時間が、2人の間に流れて居た。

「今日の模擬戦、勝てそうか？」

そんな中、少佐はふいに口を開くと、此方の心をすら見透かした様な真に迫った事を平然と呟く。流石にその発言には肝を冷やしたが、彼にとつては世間話の一環なのだろう。

特に此方を気にする事も無く、手の中に納まるカップに口を近付けていた。

そう考えると、偶然とは言え、僅かにでも狼狽した自分が何とも恥かしく思える。

「い、いえ……正直、分かりませぬ……」

「分からない？ 分からないって言うのも、可笑しな話だな」

そう言いながらも此方の話に耳を傾けている少佐を見て、自分は何故か安心して居た。

誰かが自分の話をちゃんと聞いて居てくれる。それがコレ程までに心地良い物だとは思ってすら居なかったのだ。いや、知らなかったと言った方が良いのかも知れないが。

「今の私では……あの男の……タケルの機動が見切れるか……」

ポツポツと、情けない言葉が口から零れ出していた。そんな訓練兵の呟きを、真摯な態度で黙って聞き入れて居る剣崎少佐と言う存在は、余程特殊な部類に入る人物になる。

訓練兵如きの呟きを、真っ向から聞き入れる者など普通ならば居る筈も無い。

通常ならば鼻で笑うか、殴り飛ばすかの2択が精々。

運良く聞き入れたとしても、それだけで話は終わってしまう。

だが、彼は違った。まるで己の事の様に悩み、考え、分かち合おうとする。

「つまり、御剣は怖い訳だ」

「怖い、ですか……？」

「コツコツやって来た努力が壊されちまうとしたら、憤るか怖いかの2択だろ？」

怒っている様には見えないから、と続けて少佐が此方に笑い掛ける。冗談めかして言ったのだろうその言葉には、確かに私の心を安らげてくれる優しさがあつた。だが怖い、か。まさか私がタケルを恐れているとは思ひもしなかつた。

積み重ねて来た努力をすら打ち砕かれると言うのは、確かに恐ろしくも感じる。

だからこそ、今の自分は此処まで躍起になっているのか。

「悩むくらいだったら、肩の力抜いて当たってみるよ」

クシャクシャと私の頭を撫で、少佐は軽く手を振りながら木箱から立ち上がる。

何やら格納庫の奥が騒がしい。如何やら副司令が少佐を呼んで居る様だつた。

それに気が付くと、背を向けて立ち去ろうとする彼に感謝を込めた敬礼を捧げた。

「……姉ちゃんにそっくり」

「あの、何か……？」

「何でも無い。市街地戦、奮戦する事を祈らせて貰うぜ」

一瞬だけ哀しそうな表情で顔を伏せたが、それを振り払う様な笑顔を此方に向けて、少佐は副司令の下へと向って行った。” 剣崎龍二” 確かに、タケルが懐くのも納得出来る人物だ。あの人と話をしていると、心の穢れや驕りが綺麗に洗い流されていく様に感じる。何処までも透明で、何処までも不思議な人だ。

白銀

市街地戦が、始まるうとして居た。

夕呼先生に頼んだ通り、こっちのチーム 委員長・彩峰・オレの3機には新OSが搭載されている。それに対して相手は旧OSではあるが、決して油断は出来ない。

何せ、相手は接近戦最強の冥夜・極東1のスナイパーであるタマ・の変化球の様なスタイルの美琴の3人組。油断をすれば、新OSだろうが持つて行かれるだろう。

《いきなり新しいOSって言われても……》

『大丈夫よ、大丈夫。乗れば何とかなる作りだから』

《ホントに使える？》

《お前……製作者の前で良く言えるな、それ》

《……照れる》

《褒めてねえよ!》

緊張を露にする委員長と、何処までもマイペースを崩さない彩峰。2人の仲はあまり良好とは言えないが、それでも個々の力は十二分に強力な筈だ。

新OSも相俟って、冥夜達に遅れを取る事も易々とは無いだろう。それに、コレで新OSの必要性を確立させれば、戦術機サイドからオルタネイティブ?の援護が出来る。オレにだって、漸く出来る事が見え始めたのだ。頼むぜ、2人とも!

『あー、あー。テストス、此方は剣崎ですよー。聞こえるか、少年今まさに操縦桿を握る手に力を入れようとしたタイミングで、モニターにバストアップが映し出される。突然の事に驚きながらも、何とか無駄な操作をせずに済んだ。通信の相手は、気だるそうに頭をポリポリと掻く、良く見知った人物である。そう、少佐だ。彩峰達には聞こえない様に秘匿回線にして居る辺り、やはりこの人は良く周りを観察して、気を配っているなど感心すらしてしまう。』

『まあ精々頑張れ。あまり無様な姿だけは見せてくれるなよ?』

《は、はい!》

呟き、此方に送られるウィンク。

それだけ残して、少佐のモニターはオレの視界から掻き消えた。

そして、それが指し示すのは 戦闘開始の合図。

《行くわよ、2人とも!》

勢い良く前へと飛び出そうとした委員長の吹雪が、普通ならば有り得ない速度で地面を駆ける。制御系等に遊びが無くなり、色々な機動のバリエーションが増えた為のデメリット、とも言えるかも知れない部分。一挙一動が繊細になった分、僅かな操縦桿の振りにも反応して動き出すので、今までの操縦に慣れた奴等はかなり苦労するかも知れない。

委員長も、ビルの壁面にぶつかりそうになった瞬間には既に操縦桿を操作して、高く上空へと舞い上がって居た。見る分には楽しそうだけどなあ……

《な、何よ、これえっ!?!》

《操縦系の遊びが無い文、操作が繊細になっちまった! 兎に角、早く慣れてくれ!》

《……簡単に言うよ》

そう言った彩峰も委員長と同じく、吹雪の繊細な操作に苦戦している様だ。

だが操作が絶対に出来ないと言う訳じゃ無い。その吸収力と適応性の高さで、段々と繊細な操縦方法にすら慣れ始めている。やっぱり、皆は凄え……

《2時方向レーダーに反応アリ。委員長、彩峰、来るぞ!》

《01、了解!》

《04、……了解》

前進する彩峰のサポートをする為に後方に付き、更にその後方に委員長が付く。

前方から接近するのは2機の吹雪。当然だが、冥夜と美琴の機体だ。と言う事は、たまは後方で狙撃。こつちも、狙撃のポイントに入らない様に留意しながら戦わなきゃダメだな。

《敵が散開したな。彩峰！》

《こちら04……接敵》

2機の吹雪を前に、互角の戦いを展開する彩峰の吹雪。

機体に違いは何も無いし、腕にだって差異は無い。それでも彩峰が互角に渡り合えるのは、やっぱり新OSの力も大きいって事か。

《04、06は敵2機を大通りに！》

《06、了解だ！》

《……04、今その途中》

冥夜の吹雪と斬り合いをする彩峰をカットさせない為に、オレが美琴の吹雪を釘付けにする。怒涛の勢いで攻める彩峰の吹雪を相手に防戦に徹する冥夜機と、オレの牽制の所為でその援護に行けない美琴は徐々にではあるが大通りへと追い込まれて居た。

《よしっ……そのまま挟撃するわ！》

2機のバツクを取る形で大通りの反対側から躍り出た委員長の吹雪。そして、冥夜を攻める彩峰と美琴の吹雪を抑えるオレ。この瞬間、確かに

《ッ、狙撃が来る　　ッ！！》

オレ達を射抜く、狙撃の射線軸が整っていた。

耳を貫く様な重音。銃口から発射された弾丸が、オレ達の機体目掛けて一直線に撃ち出される。一瞬のミスが命取りになるこの瞬間、3人は、強く息を呑んだ。

78 11月29日 秘めた可能性（後書き）

演習が終わろうと、勝者には更なる試練が待ち受ける。
廃れたビルの屋上。

此方を見下ろすのは、真つ黒な不知火。
何故？ 誰もが困惑する中、不知火は遠慮無しと言わんばかりに手に持った刃を勝者へと振り下ろす。

次回、M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u
m a n 79【斬り捨て御免】

「国技が八百長しようが、オレは八百長しないよ!？」

b y 剣崎

マブラヴ MH 前

クロス マブラヴ×モンスターハンター

(前書き)

この話はCAPCOM発売『MHP3rd』とのクロス作品
作者の戯れが許せる方のみ、お進み下さい

「夫婦龍のモーション変わり過ぎじゃねえ!? 別物ってレベルじゃねえよ!」

「諦めるよ、先生。マンネリは面白味がねえだろ?」

「でも夫婦龍って皆勤賞かあ、思い入れあるよなあ」

「そうか? まあレウス装備には世話になったが……」

放課後の学園。

夕暮れの教室に居残る4つの影があった。

各々の手に握られているのは、現在大好評発売中のMHP3rd。人がモンスターを狩ることで己を強くする、ハンティングアクションなゲームである。

さて、此処で教室に残った面子を確認しよう。

まずはこの学園の教師である剣崎龍二。その手に握られるのは赤と黒の新作PSP。本人曰く、これを見た時には買わなきゃいけないという既成概念に犯されたとか何とか。

初代からMHをやり続けるMH愛好家ではあるが、腕は一般に数本毛が生えた程度。

特に、今回夫婦龍の大幅な攻撃エフェクト変更に戸惑っている1人である。

2人目は白銀武。龍二の弟分とも言える少年であり、その手に握られるPSPはシルバー。

MHはPSPに移植されてから始めたが、その腕前は流石ゲームの鉄人。

龍二からも「お前テスト勉強しろよ、ゲームじゃなくてよおっ！」と怒鳴られる程だ。

3人目はユウヤ・ブリッジス。手に持ったPSPの色はホワイト。この中でゲームの腕前は龍二と同レベルであり、何とかその枠組みから抜け出そうと必死になってハンティング修行中。友人のヴァレリオやヴィンセントも巻き込み、毎日毎晩狩り三昧の日々を送っている。友好度が高かったりする。たまに途轍も無いファインプレーを見せる辺り、初心者には侮れない。

4人目は この話では新顔となる、ウィルバート・コリンズ。手の中で輝くはブルーのPSP。ユウヤよりも前に留学して来た新顔であり、龍二が受け持つクラスの生徒である。MHの腕も大変優秀で、この4人の中では数少ないガンナーを受け持つ。

他の連中からの仇名は衛生兵とかメディックとか。理由は回復弾とか撃ってくれるから。

教え子と教師の垣根を越えた彼等の放課後ライフではあるが、今日は様子が違っていた。ついに迎えたのだ、このMH3rdのラスボスと思われるモンスターとの決戦。

クエスト名『煌黒龍アルバトリオン』

4人全員が、緊張して居た。

無理も無い。この数日間の間にこの龍と何度激闘を繰り返した事だろうか。

以下ハイライトでお伝えします

「え！？　こ、ここ火山なの！？」

「テ、テメエ、色ばかり変えやが……ぐおうっ！？」

「体力が、体力が無い！　メディック、メディイイイイイック！
！！！！！！」

「閃光投げたヤツ誰だよ、見え……死んだ、だと……！？」

「落ちて来る氷って避ける感覚はミニゲームに、うおおおおおお
っ！？」

「壁突き刺さってやがる！　ハハッ、今までの恨……調子のって」
めんなさい！」

各ハンター達のステータス

・龍二ノ桃（　）

防具：ティガU一式　武器：王牙大剣【黒雷】

・武ノタケル（　）

防具：シルバースル一式　武器：小太刀【砂嵐】

・ユウヤ/Nash()

防具：ナルガS一式 武器：夜刀【月影】

・ウィル/Macmillan

防具：ウカム装備一式 武器：大神ヶ島

ロード時間中だと言うのに、誰も一言も口を開こうとはしない。前回までの屈辱を今日こそは返してやる。誰もが、心に硬く誓っていた。同じドジは踏まない、踏んでなるものか。コイツを倒して、本当の終わりを見てやる。

煌黒龍アルバトリオン

クエスト名が表示された瞬間、誰かが息を呑んでいた。

ゴクリ、と生唾を飲み込む様な音が教室の4人の耳に届き、そしてマグマの上に君臨する黒龍の姿を見た時、确实の瞳は平和ボケした”それ”とは打って変わった、ハンターの物となる。

「このスネオがあっ……その頭叩き割ってやるぜ……ッ！」

「そうそう何度もやられるタマじゃねえぞ、オレは。なあ、スネオ！」

「スネオだよな、何回見ても……やっぱりスネオか……」

「天角欲しいから角2本は確定だな。取り敢えず、回復は任せてくれよ」

各々が腹に一物を抱えて、長く険しい戦いの幕が此処で切って落とされた。

マグマの上から飛び上がり、ハンター達の前へと飛び出るアルバトリオンの姿を見て、まず各々が一斉に同じ行動を取る。

【クーラードリンク】

巨大な龍を目の前にしていると言うのに、怖気づく事も無く飲み物を口にする4人の狩人達。その存在に気付いて居るのか、それとも気付いて居ないのか、悠然とアルバトリオン（以下：スネオ）は悠然と歩を進めていた。

名前の隣に刻まれる黄色の視線マークが、赤の発見マークへと変わる。

その瞬間、スネオから放たれる咆哮。その咆哮に耳を塞ぐユウヤとウィルだったが、タケルと龍二は猛然と敵へ向って走り寄っていた。

「高級耳栓は伊達じゃねえ！」

レックスUは最初から耳栓が、シルバーソルには豊富なスキル枠が、お互いにお守りの力を駆使する事によって、敵の咆哮を完全に無効にするスキル【高級耳栓】を発動させて居た。武がジャンプ斬りを、龍二が抜刀切りをブチ込んだが、勿論スネオが怯む事は無い。それは当然だ、所詮は微々たるダメージ、効果的な訳も無い。

その後、スネオの突進に巻き込まれない様にその場から離脱した武&龍二。

まずスネオの標的にされたのは、ガンナーであるウィルだった。

非怒り状態の突進とは言え、防御力の低いガンナーがそんな物を食らえば手痛いダメージとなる事は定石。武器を出していなかった事が幸いし、その突進を緊急回避で回避すると直ぐ様武器を取り出し

て射撃を開始した。
突進終了直後のスネオの尻尾にはユウヤが張り付き、執拗に尻尾を
狙って攻撃を繰り返す。
部位破壊とゲージの回収。更には、ガードの出来ない太刀だからこ
そ尻尾と言うある意味では安全地帯に張り付く事でダメージを少し
でも減らすと言う戦法に出ている。

出だしは非常に良い。

何度もスネオに苛められた甲斐があつたと言う物であろう。

狩人4人の戦いは、熱く激しく、教室と言う狭いステージの中で展
開されていた。

一方、此処は唯依お嬢様宅。

そこに集まった唯依とクリスカ、そしてイーニアとセレナは教室の
バカ4人組と同じ様にPSPに視線を向けていた。プレイしている
ゲームは無論、MHP3rd。

何故？ そう思う者も居るかも知れないが、理由など至って簡単。
近頃MHの事ばかりで龍二に構ってすら貰えない彼女達は、ある事
を思い付いたのだ。

そう、まずは”敵”を知る事から始めようと言う事である。

つまり 彼女達も狩人デビューしちまったのだ。

「しかし……一通りの事はやり終えてしまったな」

「ああ。イベクエも終わらせてしまったし、勲章も出し終わった」

「そろそろ頃合かなあ。先生のこと、誘ってみますかねえ？」

「りゅうじ、よろこんでくれるかな！」

そして何とも皮肉な事に、彼女達のゲームに対する適性は異様に高かった。

初日の時点で初遭遇ジンオウガすら蹴散らし、MH初心者とは思えない勢いでグングンと敵を狩って行く姿。ソロだろうとオンだろうと、彼女達の狩りスタイルに変わりは無かった。見敵必殺をただ愚直に貫き通し、飛んで逃げようとする龍が居れば移動先に罠を仕掛けて羽目殺し。潜ろうとする龍が居れば頭を殴ってスタンをさせる。それはもう、笑いすら失う程に決り取る様な見事なパーティープレイだった。

そんな彼女達のプレイを見た時、彼女達の恩師はどんな顔をするだろうか？

間違い無く、今まで自分のやって来たMHが子供のオママゴトと大差無い事を知って、涙を流すだろう。オイオイと泣き喚き、泣き疲れて眠るだろう。

だが、今の彼女達はそんな事など知らなかった。彼女達にとって重要な事は彼と共に時間を過ごすと言う事に有り、それ以外の事など既に思考の果て、銀河の彼方へと放り投げていたのだから。

「……取り敢えず、アルバでも狩りに行くか」

「そうだな。念の為に総ての称号を出して置くとしよう」

「うっへえ……あんな雑魚倒しても面白味無いですよっ」

「みんながいいなら、いいよ。みんななかよし」

実は思い人が、今そんな”雑魚”相手に悪戦苦闘して居るとは思いもしない女性ハンター4人組であった、まる。

「相変わらず何と言う馬鹿力！ 体力がゴツソリ持って行かれるううっ！」

「ウィル、回復頼む！」

「OK。ユウヤ、お前は如何する？」

「オレは良い。そいつ等の回復を先にやってくれ」

「タ、タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ」

「先生、それMHじゃない！ 朝の特撮番組だ！ 仮面ライダー！」

「はい変わったー」

「…………お前等なあ」

カオスな会話を繰り広げては居る物の、順調に進んでいた。

先程は空中へ飛行したスネオを閃光で叩き落とし、武とウィルの攻撃で片方の角の破壊に成功。チョコビチョコビと攻撃していた龍二も、気が付いたら翼を破壊して居た。

ユウヤも尻尾ばかりを攻撃して居た様なので、そろそろ切れる頃合かも知れない。

だが、MHの怖い所は此処から始まる。

そうだ。一度作ったペースと言う物は、壊されると 脆い。

Macmillanが力尽きました

「……………何、だと」

スネオの口から噴射された極大の火炎ブレス。

それが火柱を上げて、一瞬にしてウィルを飲み込んだ。人1人を飲み込めるなんて程に柔な大きさじゃ無い。それはまるで、炎のタワーだ。現代に君臨したバベルタワーである。

「ユウヤ、危ない！」

「え？ なっ！」

尻尾を攻撃していたユウヤだったが、突然のウィル1乙に揺さ振られて画面内の様子に目をやっていなかった。画面内では、スネオの振り被った爪攻撃によって吹き飛ばされる自分の分身の姿が映っている。しかも何と頭の良い事に、吹き飛んだ先は逃げ場の無いマグマの淵。そして敵のロツクは、未だに此方に向いていると言う罨である。

起き上がった先に重ねられる様に繰り出される突進に成す術も無く吹き飛ばされてしまうユウヤ。流星のそれには危機を感じたのか、まだクーラードリンクで対暑すら整えていないウィルがキャンプから飛び出して来た。だが、致命的に遅過ぎる。

ユウヤの頭の上では、星が回っていた。

「スタン、だと……！？」

驚愕に染まるユウヤの表情。

アナログスティックを必死に回し、何とか復帰を試みる。が無駄。敵の標的はまたしても、ユウヤ。これでは確実に攻撃を　しかもブレスを食らう。

今の体力でアレを貰えば、確定で死ぬだろう。

不味い。

非常に、不味い。

「ユウヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

教室に、絶叫が響き渡った。

マブラヴ MH 前 クロス マブラヴ×モンスターハンター

(後書き)

後編に続く

因みに、アルバの力が如何考えても増ちよ (ry

すみません

頭の中に思い浮かんだら止まらなくて、妄想とかアドレナリンとか
ムンムンで淒く、淒く……楽しいです……じゃなくてですね、兎に
角、神おま採取とか辛いですけど私は生きているということであり
まして、

後編に続くううっ!!!!!!

79 11月29日(2) 斬り捨て御免(前書き)

タイトル的に、長刀でチャンバラするのかと思ったのだが別にそんな事も無かったという罨

不覚……ッ

この上は、腹搔っ捌いて 痛いのは御免だッ！

白銀

たまが放つ、ジャストタイミングで放たれた弾丸。

《乱数回避 ツ!!》

オレの言葉と同時に彩峰と委員長の機体が動き、それぞれその合間を縫って行く様に弾丸だけが後方へと流れて行く。旧OSならば回避すら難しい狙撃だとしても、キチンと発射タイミングさえ分かれば十分回避が可能だ。これは大きな前進とも言える。

《珠瀬機補足》

《そつちにはオレが行く、01と04は敵2機を頼む!》

《今度こそ挟み込んでみせる……行くわよ、04!》

《……了解》

オレは彩峰から送られたマーカ―を確認し、射撃体勢から起き上がるうとするたまの吹雪向けて直進する。本来の吹雪よりも処理速度が早いお蔭で、たまに復帰の際を与える暇無く速攻で接近する事が

出来た。

前面に弾幕を押し出し、ガンスモークで視界を覆う。

視界が黒雲で覆われた事によって、右往左往とするたま機の上を跳躍噴射で飛び越え、空中で機体を反転させてアクロバット撃ちで背中を滅多撃ちする。

《反対側の弾幕に気を取られすぎたな、たま！》

『珠瀬機、動力部に被弾！ 戦闘続行不可能、大破！』

まりもちゃんからの通信を聞き入れ、委員長たちの援護へ向おうとしたのだが

向こうは向こうで、横槍する事すら躊躇われる高度な戦いを展開していた。

美琴の吹雪を錯乱させる為に2機で周囲を旋回し、隙を伺う。

委員長の射撃が直撃した際、委員長の後ろから間髪入れずに彩峰が跳躍噴射で委員長の上を飛び越え、機関部を撃ち抜き、直ぐ様美琴を叩き落した。

普通の兵士に比べても、順応が早い。

やっぱり207の皆は、オレの想像すら軽く超えている存在だった。

《彩峰、冥夜が来る ツ！》

だが、まだ終わっては居ない。

跳躍噴射の着地際、計ったかの様なタイミングで冥夜が長刀を構えて彩峰へと踊り掛かる。奇襲としてのタイミングはベストだっただろう。

本来ならば呆気無く叩き伏せられるタイミングではあるが、新OSならば ツ！

《彩峰、行けええつ！！！！》

《……狙い撃て！》

着地する際の際を小ジャンプを入れる事で強制的にキャンセルし、長刀を振り下ろした冥夜の吹雪の頭1つ上を、軽やかに飛び越えていた。

間を空けず、委員長の突撃砲が冥夜機の管制ユニットを撃ち抜いた事で模擬戦は無事に終了。まりもちゃんの冥夜撃墜の声を聞き、才したち3人は深く息を吐いていた。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

それは唐突に現れた。

冥夜たちを倒し、勝利に浮かれたオレたちに水を差すかの様に、唐突に。

不知火 正式に配備されている機体。練習機などでは無い、正真正銘の実戦機。

それが廃れたビルの上から、ただ此方を見下ろして佇んでいた。

『聞こえる、白銀？』

《夕呼先生！？ あの機体、何ですか……？》

『ちよつとしたテストよ。旧OS搭載型の不知火1機、そいつに勝つてみなさい』

それだけ告げ、夕呼先生は唐突に通信を切った。

動揺する委員長と、不思議そうに不知火を眺める彩峰に先生からの旨を伝え、目の前に佇む機体が敵である事を告げる。

あの冥夜たち3人を倒した後とあって、2人とも気分は大分高揚していた。

そして、戦いは突然始まりを告げる。

眼前のビルから不知火の姿が掻き消えたかと思うと、目の前に居た筈の委員長の吹雪が吹き飛んだ。

《あつ……?!》

ガーン、と響く様な音と共に吹き飛ばされる委員長の吹雪。

隙を見せた委員長の吹雪の腹を蹴り飛ばした不知火は、吹き飛ばされた委員長に視線を向ける事無く、此方へと視線を這わした。

次いで、不知火が狙いを付けたのは自身から然程離れても居ない彩峰の吹雪。当然と言えば当然だ、何せ援護の心配も無く、真っ向から攻める事が出来るのだから。

ただ、相手はあの彩峰である。そう易々と崩される事など無い。敵の動きを見切るかの様に長刀を構え、堂々と仁王立ちして居た。何処からでも来いと、その姿は語っている。だからこそ、機体が一度地へと伏した瞬間には正直に移動先を目で追っていた。

《消え、っ！》

瞬間的な上下運動。

地に伏せると思いきや、既に上空へと飛び立った不知火からの突撃砲が彩峰の吹雪へと狙い付け、射撃を開始する。機動の割には飛び抜けている射撃技術では無かったが、それでも正規兵のそれと比べるのが馬鹿馬鹿しい程に正確な射撃である。

新OSの力で即座に対応こそ出来た物の、弾丸の一部が右肩装甲の一部を抉っていた。

《01！ 機体は無事か！？》

《え、ええ……操作に問題は無いわ》

《04、両脇から一気に叩く。2機連携で錯乱させるぞ》

《……分かった》

委員長は後方支援に。

彩峰はオレの後に続き、目の前で右腕に突撃砲を携えた不知火へと突進する。

オレが放つ支援砲の牽制を回避した不知火の移動先に、長刀を構えた彩峰が強襲を仕掛ける。が、不知火は意図も容易くそれを回避。

彩峰の攻撃を嘲笑うかの如く吹雪の頭を蹴り、更にもう一段高く跳躍してみせる。此方の動きは総じて、完全に先を読まれていた。

尚且つ、敵も別に攻めに徹し切れないと言っ訳でも無い。此方の動きは既に手玉に取られ、先程の委員長と彩峰が曝した隙 あそこ

で2人を撃墜する事だって出来た筈だ。

それだと言うのに、この不知火はそれをしなかった。

嘗めているのか、それとも試しているのか……どちらにせよ、易々と勝ち星を譲る訳にはいかない。この新OSにはオレの未来が詰まってるのだから。

《04、もう一度だ！》

《……了解》

また前に出るオレと吹雪の機体を前に、何度でも来いと言わんばかりに棒立ちする不知火。その様を見て頭に血が昇り、トリガーを握る指に力が込められた。

両腕から放たれる弾丸が隙間無い弾幕を作り上げ、不知火もそれを当然の如く1つずつを丁寧回避して行く。右ステップからの軽いジャンプ、ジャンプ時にブーストを吹かして右へと移動。そうだ、それで良い。その位置が良いのだ。

《彩峰！！》

《貰った……ッ》

ブーストジャンプの先、長刀を振り被った彩峰の吹雪が不知火の後方に待ち構える。

後方、しかも上段から振り下ろされる長刀は完全にタイミングを捉えており、誰もがこの戦いが終わったと確信した。

そう、不知火の衛士を除いて

2機の間で起こる爆発。

突如として、2機を襲った衝撃に彩峰の機体は吹き飛ばされ、不知火はと言うと屁でもないと言わんばかりに寂れたビルの上に華麗な着地を決めていた。

何が起こった？ そう考える間も無く、まりもちゃんからは驚きの言葉が告げられる。

《彩峰機、管制ユニットに被弾。戦闘続行不可能！》

誰もが、耳を疑う言葉だった。

あの爆発はつまり、彩峰の機体が爆発した事を指し示しており、あの奇襲ですら当然の様に回避されたと言うのか。

後方で長刀を振り被る吹雪に感付いていたからこそ、銃口は後方に向けていたのか。

後ろにも目があるのかよ、チクショウ……ッ！

だが、攻撃が届かなかった訳じゃ無い。

寂れたビルの上で此方を見下ろす不知火の左腕、肩口から先は既に無い。

先程の彩峰の攻撃。見事なカウンターを決めたのは良いが、その代償として左腕を持って行かれたのか。なら、勝機が此方にも必ず出来た筈である。

腕を失った事で手数が減った敵1機。

それに比べ、此方はまだ万全な状態の吹雪2機だ。数を利用した攻めを見せて、少しでも見せた隙を付いて行くしか此方に手は無い。もしも無理に攻め込もう物なら彩峰の二の舞すら踏みかねないからだ。

《委員長、今度こそ仕留めるぞ。長期戦はこつちに不利だ！》

《ええ！ 油断無く行くわよ！》

先程とは変わり、彩峰では無くオレが前衛に。後衛に委員長を置いたスタイルで不知火へと突進する。敵もその突進に真っ向から立ち向かうべく長刀に手を掛けようとするが、それをさせまいとして放たれた委員長の弾丸に行動を中断し、上空へと逃げた。

《んなるおっ!!》

上空へ追撃する為に追い掛け、先に振り抜いた長刀を構えて突進する。

するのだが、速度が違う。元々が第三世代の練習機である吹雪とその完成型とも言える不知火とはトップスピードも、そこへ至るまでの時間にさえ差異がある。此方がトップスピードに乗っていたとしても、向こうもそれに便乗する形で速度を上げて間をどんどん離されてしまうのだ。このままでは逃げ切られる、オレがそう思いやった瞬間の事だ。

背後から向けられた銃口が、不知火へと弾丸を発射していた。

委員長の吹雪が跳躍噴射で此処まで飛び上がり、不知火に向けての射撃を開始したのだ。

《委員長!?!》

《06、貴方はあの機体に攻撃を》

ガチャン、と金属同士が擦れ合う様な音が耳に届く。

先程まで不知火に銃口を向けていた筈の委員長が乗る吹雪の頭が千切り飛ばされ、その両腕に両足を絡めた不知火が、

《ッ!?! や、やめろおっ!!!!!!》

躊躇い無く、管制ユニットに長刀を突き刺した。

機体が爆発する事も無く、委員長は不知火と共に引力に従って地上へと堕ちて行く。

シミュレーターだとも分かっている。

不知火に誰が乗っているのかは分からないけど、別に相手だって殺すつもりが無かった事もちゃんと自分でも理解している。頭が記憶

している筈なのに。

その光景が、その姿が、哀しくて、嫌で、虚しくて

《この野朗おおおおおおおおおおおつ!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!》

咆哮と共に、左腕を失った不知火の頭を殴り飛ばす。

大きく仰け反った不知火が大破した委員長の機体を放し、此方に視線を向けようとする前にもう一撃。今度は腹を蹴り込み、委員長の後を追う様な形で不知火が地面へ激突した。

『白銀、もう止めなさい！ 新OSの力は実証出来たから、これ以上は ツー！』

夕呼先生の制止を振り切り、仲間を奪った不知火に止めを刺さんと地上へ降り立つ。

舞う土埃の中に敵の姿を探しては居るのだが、レイダーにすら引つ掛からない。

落下しながらもダミーを周辺にはら撒いたのだろう。と言う事は、まだ敵は倒れちゃ居ないと言う事に他ならない。

《何処からでも来い…… ツー！》

『演習は終わりよ！ アンタは直ぐにシミュレーターを降りて、コッチに来なさい！』

《イヤですよ！ あの不知火には……あの不知火には負けたくありません！》

『向こうは手負いでアンタは無傷。これだけで十分でしょう！？』

”見るな”

相手からの通信なんて無いのに、それでも心に刻まれる様な声が聞こえた。

空耳だと言われれば、それで終わりかも知れない。

だけど、空耳なんかじゃ無い。こんなハッキリと聞こえる声が、空耳の筈が無い。

目の前に居る不知火の顔にはオレの吹雪から飛び散ったオイルがまるで涙の様に張り付いていて、その顔は泣きじゃくる子供にしか見えなくて。

そんな、最早何度目かも分からない程に拳を振り上げた不知火の動きが、突如として止まる。いや、その場面では”止まらざるをえなかった”とも言えるのかも知れない。

自身の胸元に空いた風穴。それを見詰める事も無く、不知火の動きは突如として停止した。

風穴を開けた張本人はと言うと、その後方で銃口を構えている。

下半身は両足とも拉げて、辛うじて動く腕で何とか狙い撃つたのだろつ、その姿。

先程叩き落された筈の、委員長の吹雪がそこにはあった。

《ぶ、無事……？ 06》

《委員長……委員長！？ 何で、だって管制ユニットに……ッ！》

《軍曹の話を聞きなさい。突き刺さったのは管制ユニットじゃなくて、ラジエーター》

《……え？》

《兎に角、不知火は撃墜……お疲れ様》

ほうつ、と溜息を吐いて緊張を緩める委員長とは対照的に、オレは何とも言えない感覚を伴いながらもシミュレーター用の筐体から出る事しか出来なかった。

筐体を出たオレ達に告げられたのは、207分隊は新たに新OSの実験部隊として扱われる事になった事が夕呼先生から告げられる。それに反論しようとしたまりもちゃんだったが、夕呼先生はそれを圧殺した。

無論だけど、この後にはさっきのシミュレーターでの上官の命令を無視した事によって、先生からの大目玉とまりもちゃんからの説教が飛び交う事になった。

仲間内でも助け舟を出してくれる者は誰一人として居らず、オレはそのまま涙枯れ果てるまで延々と説教をされ続けた。

勝った筈なのに……何だよ、この仕打ち。

香月

八百長をする筈が、八百長とは思えぬ行動を取っていた。その事を自粛してか、いつもより龍二は大分も大人しい。その姿は何とも元気が無く、萎れた華をすら印象させる物である。

「アンタねえ、あれ如何言う事よ」

「……申し訳ない」

「危うく白銀撃墜する寸前じゃ無い」

「何とお詫びして良いか……」

「あたしの言ったプランと懸け離れた行動は困るのよねえ」

「ううっ……」

いつも飄々とした態度を崩さない龍二が此処まで萎れていると言うのも珍しかったので、取り敢えずあたしはコイツを苛める事にした。いつもよりも反撃が少ないので、面白い様に言葉が龍二の心を抉って行く。一言一言を受け止め、その度に涙すら瞳に溜めるコイツの顔を見て、漸く嗜虐的な物も形を潜め、龍二の話を聞く気になっ

ていた。

「で？ アンタ、何であんなことしようとしたのよ」

「頭に血がカーツと昇った訳だ。人間、怒ると怖いよねえ」

「……………あ？」

「す、すみません、冗談です、調子に乗っていましたが、ごめんなさい。

……………まあ、その、あれだ。弔い合戦って言うか、敵討ちって言うか……………ねえ？」

「ねえって、知らないわよ」

知らない、と言うのは嘘だ。

コイツの事だから、自分の前に戦っていた御剣の戦闘を見て居た堪れない気持ちになったのだろう。旧OSでは新OSには勝てない。

工夫しても何の意味すら無い。

そんな思いを汲み取ったからこそ、コイツはそんな概念をすら超越しようとしたのだ。

結果としては、3機の新OS搭載機に対して1機を叩き落とし、1機を戦闘不能直前にまで追い込むと言う大健闘で幕を閉じた。

だが、きっと、それでもコイツは納得出来なかったのだろう。勝てなかった。

その一念が、剣崎龍二の心を蝕んでいる。

だからこそその弔い合戦であり、だからこそその自粛でもあるのだから。

「奮戦した事に付いては、こっちも良いデータが取れたから褒めてあげるわ。イカサマの失敗も、まあ結果として負けたから有耶無耶

にしてあげる」

「おおっ!」

「でもね、命令無視は頂けないわねえ」

「へ?」

「散々の制止の声も聞かずに、戦闘を続行したことよ」

「……………記憶に御座いません」

「こつちには証拠があんのよ、証拠が」

「ぐっ! しかし、考えてもみたまえ! 人とは己の欲求には勝てぬ生物であり、私は己の持つ勝利すると言う欲求に従っただけのことなのだ! つまり俺に罪は無い!」

「軍人でしょ、アンタ。理不尽に対する耐性くらい付けなさい。あと誰よ、それ」

「くっ……………軍人とはこうも縛られた者なのか……………ッ!」

わざとらしく悔しそうに唇を噛み締める龍二の頭を書類の束で引っ叩き、あたしは自分用の椅子に腰を掛ける。恨みがましく此方に非難の視線を送っていた龍二ではあったが、急にその視線を改めると徐に立ち上がった。

「新OSの件だが、オレのF?型にも搭載しておいてくれ。試してみたいからな、新作の出来栄えってヤツをさ」

「目の前で見せられたじゃない。それだけじゃ不満？」

「当然。自分の身体で体験しないと、信じられない性質だからな」

軽やかな伸びをすると、龍二は何とも晴れやかな表情を浮かべていた。

今日の敗北。

実は、コイツ自身がそれを一番喜んでいるのでは無いだろうか？

孤高の存在の様に佇んでいた自分に、漸く比肩する人物が現れたかも知れないと言う事実。

そして、その存在がもしかすれば自分すら叩き潰す可能性を秘めている。

最早、危機感を浮かべても良い筈だろうに。

それでも尚、剣崎龍二は笑顔を浮かべて、その登場を心から喜んでいた。

孤高ゆえの孤独。

強さゆえの喪失感。

そんな物から漸く離れる事が出来る、それを思い　　龍二は子供の様に、笑った。

79 11月29日(2) 斬り捨て御免(後書き)

次回は龍二が唯依たちと共に新OSに挑戦する話

ポロリもあるよ(吐瀉物的な意味合いで

つまり、グロ注意だと言うこと

80 11月30日 徹夜訓練(前書き)

キャラ重点での書き方が出来なくなった……

もう一方の小説で第三者ポジションで書きまくった所為だ……不味い
ひっじょーに不味い……

取り敢えず話は出来たので、投稿しておきます
因みに、今回はノット・シリアス

試作型XM3の開発によって、俺の求めていたOSの問題は全て解決された。

その為に、早速試運転だと言わんばかりにシミュレーターに乗り込んだのは良いが

《クソツ、またかよ！》

過敏過ぎると言っても過言では無い機体の反応に戸惑いすら覚える。前進と言う命令を入力した際に、それを迅速に反映してくれている事は実に素晴らしいのとはあるが、次の操作を入力しない限り全力で前進を行い続ける。精密機械を弄る容量で動かさなければ、到底使いこなせる物では無い。それはどんなに機体を弄って来た龍二であろうと例外では無かった。

寧ろ、旧OSに慣れ過ぎている彼にとっては鋭敏過ぎる動きに頭が付いて行かない。

テストパイロットとしてあらゆる機体に乗り込んだ彼にとって、それは屈辱にも近い出来事である。

《このヤロウ……！》

F?型が全力で疾走し、ドローン相手に射撃。

無論、ドローンは攻撃をしては来ないが、反撃を想定して左右に機

体を揺する。

右から左、左から右。実に単純な事ではあったのだが、小刻みにブーストする事によって移動する速度は歩行の非では無い。クイック、とも言える行為である。

その後、ドローンの肩部分を足場にして上空へと跳躍。

上空で機体を制御し、直下に居るドローンを狙い打つ様に射撃を行った。

空中で新体操の選手が如く機体を一回転させ、地面へと着地する。
100、100、100。

何故か知らないが、龍二の頭の中では此方に拍手を送る3人の爺さんが見えたと言う。

それでも自分の機動に納得が出来ないのは、頭に描くイメージが既にそんな物を兎戯と笑い飛ばしているからだ。機体を空中で回転させる時も、眼下に居た敵を撃つ時も、最後の着地をする時だって、敵にとっては幾らでも食い付く隙があっただろう。

処理速度の向上を頼んで、夕呼はキチンと仕事をしたと言うのに今度は俺が、その動きにすら付いて行けなくなった。

《クソが……ッ》

屈辱に、唇を噛み締める。

滴り落ちる血すら気にも留めず、龍二はもう一度強く操縦桿を握った。

《千枝、AIだ！ AI込みの敵を出せ！》

『ですが、まだ機体に慣れて』

《戦って慣れる！》

『……了解。確りして下さいよ、ボス』

動かない敵では戦う意味すら無い。

動く敵を射抜き、斬り、避け、学習しなければ何の意味すら持たないのだ。

白銀は 動かせていた。

彼にとっては、このOSこそが本当に力を発揮出来る物なのだろう。そして、それに乗っている自分だからこそ分かる。この状態で戦場に出れば、どれだけ機体やOSが優秀でも負ける。即ち、死ぬ。

今の龍二にとっては、誰かに負ける事や恥を曝す事など問題では無かったのだ。

死にたく無い

そんな当たり前の欲望が彼の心を満たし、強く、大きく育て上げていく。

回数を重ねる事に早く、そして鋭くなる機動。

敵の凶弾によって穿たれる事が多かった最初に比べて、回数を重ねる事にOSの特性を掴み、そのクセを自分の物へとトレースさせようとする。

戦術機にとってのOSとは、脳とも言える部分に当たる。

ならば自身もその脳を持ちえなければ、OSの性能を100%発揮させる事は不可能だ。

では、如何すれば良いのか。

実に単純で明快な答えではあるが、数を重ねてOSを理解してしまえば良い。

今回はそれ以外に、有用な方法は無いのだ。

シミュレーターの筐体に乗り込んでから、もう10時間は経過する

だろう。

座りながら管制するだけとは言え、流石の千枝も疲労は隠せないで居る。

何せ、段々と機体の動きが良くなる龍二に合わせて、ステージの設定や敵のレベル調整、はたまた数や条件の設定などを1人で受け持つしか無いのである。

疲れるな、と言うのも実に酷な台詞だろう。

《……疲れた》

『!! え、ええ、疲れましたよ、疲れましたとも!』

龍二の独り言に大きく反応し、自分が疲れている事を身振り手振りでアピールする。

画面越しの龍二も確かに疲れているのだろう、額に滲んだ汗を何度も何度も自らの手の甲で拭っていた。その様子を見て、漸くこの生き地獄の様な訓練から開放される、千枝は1人そう確信して、喜んで居た。

《……あと2時間で終わりにするか》

『え、!?!』

そんな彼女とは別に、集中力が持続する龍二にとっては、彼女の様子にすら気付けさえしない。疲れたとアピールする千枝の努力は水泡と化し、龍二はそんな彼女に労いの言葉すら掛けず 訓練を続行するべく機体を立ち上げた。

『~~~~ツ! 泣きますよ、泣きますからね……!!?!』

《????》

恨みの籠った瞳で自分を睨み付ける千枝を、龍二はただ呆然と見返す事しか出来なかった。

千枝の涙と、龍二の汗と、タップリと使われた時間によって 黒獅子は大空へ羽ばたく純白の翼と、大地を踏み締める力強い足を手に入れる事に成功する。

その時の事を千枝は語る。「死ぬかと思った」と。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n
9 9

PXにて、死んだ様に眠る龍二。

グーグーと寝息を立てながらも、腕はピクピクと忙しく動いていた。

たまに呟く寝言では、「操縦が〜」や「着地キャンセル〜」等と戦術機の戦闘概念の単語だろう台詞を幾つも呟いている。

また何かに熱中して居るのだろう、今は食事中だと言うのに、それすら厭わずに起きる気配すら見せずにグースカピーと眠っているその姿。

隣では同じく、机に突っ伏して眠る千枝の姿があった。

PXに到着して直ぐに眠り始めた龍二から唯依は何も話は聞く事は

出来なかったが、目の下に隈を作った千枝からは話を聞く事が出来た。何でも2名共々、昨日の夜からシミュレーターで10時間連続耐久訓練を慣行したのだと言う。その反動として、現在は日も高く上がっていると云うのに眠っているのだ。

「グウツ……スカー、ピー」

「……スウ……スウ……」

持って来た筈の食事には手も付けず、2名とも椅子の上で完全に熟睡して居る。

それ程までに焦燥して居たのだろうか。本来ならば食事を残した事を怒鳴るのである。京塚曹長も困り顔を携え、2名が起きるのをただジツと待っている。

「あ、あの、中尉……少佐？」

「……で……ゲソ……」

「……きゆう……べえ……」

起きない。

意味不明な単語を口にするだけで、起きる気配すら無い。

現在、この状況から既に1時間は経過して居るだろう。それでも2人は昨日の睡眠分を取り戻すのだと言わんばかり眠っていた。何をしても起きない。

・肩を揺する。

ダメ、全く効果が無い。

・脇腹などを擦ってみる。

効果など無いと言わんばかりに無視された。

・恥かしいが、耳元で名前を囁く。

鬱陶しいと言わんばかりに頭を叩かれた。

「唯依ちゃん、もう諦めた方が良いでしょう。2人が起きたら唯依ちゃん
の事は話し」

「まだやれます！ 少佐の、部下ですから！」

京塚曹長の優しい言葉すら意に介さず、唯依は2名を起こす事に躍
起になっていた。

此処まで来れば、最早それは意地とも言えただろう。

折角恥かしい思いまでしたのに、痛いのも我慢したのに、起きや
しない。

これでもしも他人に起こされよう物なら 狂いかねない。

「少佐！ 藤代中尉！」

キリッとした、いつもの調子。

「りゅ、りゅうじ！ ちえ！」

ふんわりとした、シエスチナ少尉の調子。

「駄犬共が！」

鋭く尖った、ビャーチェノワ少尉の調子。

「兄さんも姉さんも起きてよー！」

ハツラツとした、エニックス少尉の調子。

“全て”無駄。

依然として前方で眠る両名は起きる気配などありもせず、寧ろ先程

よりも一層深い眠りについてしまった様にすら感じられた。此処まで来ると、流石に1人では到底敵う相手では無い。今のこの2人ならば多分、BETAが蔓延る戦場のど真ん中に置き去りにしたとしても堂々と眠り続けるだろう。

と、言う訳で応援を呼ぶ事にした中尉なのであった。

しかし、彼女も決して人脈が広いとは言えない。おまけに口下手でもある。

その為に集まった人材は、現状を詳しく理解して居なかった。

「りゅうじ……りゅうじ……！」

エントリーNo.1 イーニア・シエスチナ

「あの馬鹿が起きないとは如何言う事だ！ 事故なのか！？」

エントリーNo.2 クリスカ・ビャーチェノワ

「少佐と中尉が心臓発作で倒れたって本当ですか！？」

エントリーNo.3 セレナ・エニツクス

「少佐が王子様で、誰かがキスしないと起きないって聞いたから来たわよ〜！」

エントリーNo.4 速瀬水月

「えっと、水月に習って来てみました……」

エントリーNo.5 涼宮遙

計5名。

PXにて死んだ様に眠る2名を起こす為に立ち上がった英雄達である。

とは言え、目の前に居る男と女もまた人類の頂点に立つ英雄コンビ。

並大抵の実力では、起こす事すら出来ずに倒れる事になるだろう。唯依も例外では無い。

龍二の放った投げ遣りなチョップが脳天に直撃し、涙目になった。

「で？」

「……………は？」

そんな折、唯依が龍二と唯依を取り囲む5人の英雄に問い掛ける。

「で？」だけと言うのはあまりにも簡潔過ぎたのか、5人はそれぞれが頭の上に？マークを浮かべ、唯依の次の言葉を待っていた。

「この中で、少佐を起こせる者は居るのか？」

無言。否、無言になるしか無かったとも言える。

何せ、此処に集まった彼女達は龍二と千枝の危機だと聞いてやって来たのであるからして、

まさかただ起こすだけと言う馬鹿げた事態とは思ってすら居なかったのだ。

まあそも、そんな原因を招いたのは唯依自身ではあるのだが、それは一度置いておく。

自分のこと棚に上げて偉そうにしゃがって、的な発言をした水月が涙目になっている辺り、その場で何が起こったのかは各々の想像に任せるしか無い。

「取り敢えず、叩いてみましょうよ」

そう言って徐に龍二の前に立ち、その頭に平手を振り下ろす。

相手は眠っているとは言え、白兵戦のプロフェッショナルである人物だ。

油断も慢心もせず、平手を振り下ろし、突如として”セレナ”の動きが止まった。

「オウフツ……何と言つ反撃……ッ！」

そう呟いたセレナの鼻の穴に、龍一の人差し指と中指が突き刺さっている。

後ろでザワザワとする仲間達。

そんな彼女達にコツチに来るな！ などと言つてしまえば、興味も湧き上がると言う物である。チヨコチヨコと最初に足を踏み出したイーニアがセレナの顔を覗き込み、噴出した。

その異常な光景に戦慄さえ覚ええたクリスカがイーニアを回収する為にセレナの下に近付き、条件反射の如くセレナの顔を覗き込む

「……プフツ」

嘲笑を噛み締めた様な笑いが、思わず洩れる。

あの鉄仮面クリスカでさえ笑ってしまったのであれば、どんな事になつているのか遂に水月や遙、そして唯依までもがセレナの顔を覗き込んでいた。

「……プハツ！」「」

ほぼ同時に噴出す3名。

お前ら龍一と千枝を起こしてやれよ、と言つ天の声すら無視して、唯依たちはセレナの豚鼻をただ笑い続けたと言つ。

《 少女お色直し中 》

「不用意に近付けばエニツクスの二の舞か……」

「ああはなりたく無いわよねえ、遙」

「う、うん………ブフツ」

「セレナ、おもしろかったよ？」

「やめて……今その話題にだけは触れないで……」

先程の《セレナ豚鼻事件》から数分後、現在床に”の”の字を書き続けるセレナ以外のメンバーは、目の前に居る難攻不落の要塞を如何陥落させるか思索して居た。

不用意に近付けば、どんな事をされるか分からない。

運が良ければ”キス”出来るかも、と言う甘い思考など切り捨て、聳え立つ2つの強敵に対して全力で望まなければならぬ。そうしなければ

（この馬鹿が他の誰かに起こされるなど………気に入らない）

（少佐が他の誰かに起こされるって言うのも、癪よねえ）

（エニツクス少尉面白かったな………プフツ）

と言う訳である。若干1名は斜め上の事を考えては居たが、本人だつて龍二の事は結構気に入っているので、そこ等辺の事は割合させて貰う事にする。

兎に角、昼食の時間までに2名を起こさなければ押し寄せて来る大多数の人々の音で2人が起きることになるだろう、寝覚め最悪の状態だ。

それだけは断固阻止しなければならないのだ。

「大声で起こすとか、どうよ？」

「先程試したが、全く効果が無かった。それでは無理だ」

「美味しい物の匂いで釣る、とか……」

「目の前に京塚曹長の食事が置いてあっても、見向きもしなかった2人だ。望みは薄い」

「……殴り抜ける」

「ビャーチエノワ少尉、エニックス少尉の様になりたいのなら止めはしない」

完全にチェックの状態である。

因みに、もう心の傷もクソも無いセレナが千枝を起こしに接近した場合も例外無く鼻の穴に指を突っ込まれたと此処に追記して置こう。

もう諦めるしか無いのか。

それとも、自らのプライドすら棄てて起こしに行かなければならないのか。

究極の二択に各々が慟哭して居た時、その”救世主”はその場に現れた。

「ちょっと、此処に龍二の馬鹿居る？」

「あ、副司令」

「何よ、アンタ達……って丁度良いわね、そこに居る馬鹿に用があるのよ」

そう言つてズカズカと龍二に歩み寄ると、その手に持っていた書類の束を叩き付けた。

最早この頃定番となつた書類折檻。

誰もが、その程度起きる筈が無いと目を瞑る。その程度で起きているのであれば、誰も苦勞などしないのだから。

「んぎいつ!?!」

「……………ん?」「……………」

そんな彼女達の思考とは裏腹に、脳天を叩かれた龍二は奇声と共に飛び起きた。

あまりの衝撃に椅子から転げ落ちて、後頭部を強かに打ち付ける。痛みに悶え、震え、それでも怒りに燃えなかつたのは未だに思考のモヤが晴れないからこそ。

そんな龍二の様子に呆れながらも、夕呼は手に持っていた書類を龍二に手渡す。

そこには簡潔な文字で『新武装企画原案』とだけ記されている。

つまりは、千枝へと伝えた長刀の耐久度向上の件が可決されたと言う事なのだろう。

また新しい武装　今回は単純に耐久度を上げただけなので従来程運用性に違いは無い長刀のテストをする事になつちまったと言う訳だ。

「……2人の所為です(だ)(だよ)!!」

「え？ あ、あらそう……御免なさいね」

6名の思いの外に凄まじい剣幕に少し引き気味になってしまった千枝ではあったが、その動揺を押し殺して丁度良いと言わんばかりに微笑む。

目の前に居る彼女たちはどうせ、将来的には新OSを触る事になるのだ。

自分は武装の案件で副司令の下へ行かなければならないので、彼女たちに確り・ミツチリ少佐との訓練地獄を楽しんで貰う事にしなければならぬ。

二度と私に火が飛ばない用に。

「丁度良かったわ、貴方たち。折角だから少佐の訓練に付き合ってくれないかしら？」

「少佐の訓練、ですか……？」

「……それは良いが、何を考えている」

「別に？ 何も？ それじゃ、私はこれから副司令と武装の案件で話し合うから」

チャオ、などとウィンクして去って行く千枝と副司令を見送り、6人は取り敢えず床に伏している二度目の眠りに入った龍二の頬を軽く叩く。今回は先程の様に反撃される事も無く、アツサリとその両目を開いてくれた。

「……此処は……？」

「PXです、龍二さん。それより藤代中尉から訓練に参加する様
と言われたのですが」

「訓練？ うおおおっ！？ 何だ、お前ら勢揃いじゃねえか！！」

「誰の所為よ、誰の」

「まあまあ水月。それよりも少佐、昨日の夜から一体何の訓練を？」

遙の問い掛けに思い出したと言わんばかりに立ち上がり、その場で
大きく伸びをする。

休憩終わり、と自分に発破を掛けて、龍二は後ろで此方を見据える
唯依たちへと振り返った。その顔を見た時 セレナだけは表情の
意味を理解出来た。

この中で龍二の扱きをフルで受け続けたのは彼女しか居ないのだから
無理も無い。

故に、セレナは自分の終わりを悟っていた。

「新OSのテストだ。さっ！ お前たちにもタップリ付き合っ
て貰
うぞー！」

自分たちに降り注ぐ厄に、セレナは涙を流していた。

ああ神よ、貴方はそんなに私たちがお嫌いなのでしょうか……？

そんなセレナの涙の理由など露知らず、ヴァルキリーズ含む彼女
たちは快く”地獄の扱き”に対して首を縦に振ってしまったのだった。

《まだ3時間だぞ？ 今日も徹夜で挑むからな、覚悟しやがれよ》

グツタリとする唯依、クリスカ、イーニア、セレナ、水月。

その介抱の為に奔放する遙と龍二を除いて、その場に健康な者は誰一人として居なかった。

彼女たちの顔を立てる為に名前は伏せてあげるが、1人は吐いた。

1人は泣き喚き、訓練の中止を求めて却下された。

1人はあまりの疲労にぶつ倒れ、そこを即刻叩き起こされた。

1人は楽しみながらも部下を扱き続ける龍二に怯え、1人はそんな妹の様な可愛い存在を護る為に尽力しようと思ったのだが 訓練

中の龍二は笑顔が、黒い事に足が竦んだ。

ドス黒いソレは、彼のサド心の現われでもあったのだが、それを知る者が此処には居ない。

“実はサドでした”

“この訓練も日々のストレス解消です”

そう言っただけの方がどれだけ殴り易かったらうか？

だが、これは龍二からの善意なのだ。自分出来る精一杯を部下に叩き込み、そして戦場での生存率を数%でも上げようとする。結果としてはそれが自身の生存へと繋がり、最終的には部隊の存続にすら繋がっていくのだから文句の言い様が無い。

《さあ来いやっ！今日は珍しくフルで頑張っちゃうぞ、俺！》

()()() お願いだから頑張らないで…… ()()()

新OSの素晴らしさは良く分かった。

確かに、今後の戦術機界に革命を齎す品であると言う龍二の言葉も理解出来る。

だが、それに伴う疲労は途轍も無い。

特に疲労の色が濃いのはセレナだ。ただでさえ、急加速・急停止のギミックを搭載しているF型に乗っていると言うのに、この新OSの所為で更にその行動に磨きが掛かっている。

唯依もF型には搭乘出来るのだが、訓練前に嫌な予感がしたので現在は通常の不知火で水月と共に挑んでいる。

《りゅ、龍二さん……そろそろ休憩に……》

《ん？ 2時間前に休んだだろ。それより訓練だ》

《こ、このままでは身体が……休憩を要求すると言っているだろう！？》

《訓練 続行》

キラッ

などと舌を出し、指で良く分からない形を作ってモニターへと笑い掛ける。

その顔を見た時に少なからずともイーニアを除く彼女たちの中で何が弾けていた。

あ この馬鹿、殺してえ……

そんな彼女たちの殺意とも言える闘志を感じ取ってか、龍二は喜んで長刀を構えた。

何処からでもいらっしやいと言わんばかりの彼に向って

唯依と水月の不知火が、

クリスカとイーニアのチエルミナートルが、

セレナのF?型が、

ほぼ同時に隙間の無いレベルで、密度の濃過ぎる弾幕を張る。回避など出来る筈も無い。否、させるつもりなど無い。

上空へと回避したF?型を追い掛ける様に跳躍した水月の不知火が、ガツシリとF?型の足首を掴んで離さない。

《うおっ!?!》

《つかまえたあつ!?!》

《速瀬中尉、そのまま地面に下ろせ。

”袋叩き”だ》

黒く、怪しく笑う唯依に恐怖を覚え、全力でその場から離脱しようとする龍二ではあったが、セレナのF型が空いた片足を掴み、F?型を地面へと叩き付けていた。

無様に地面へと叩き落されたF?型の周りを4機の機体を取り囲み、ほぼ同時に足を上げて、振り落とす。

《いい加減にして下さい! 長時間の訓練は身体にも悪いと言ったでしょう!》

《貴様は如何しようも無いクズだな! ああ、クズだ! クズクズクズクズクズ!》

《……………クセになりそうだな、これ》

《疲れたっつってんでしょうが！ アンタねえ、権利濫用なのよおっ
っ！！》

後に龍二は語る。

もう絶対、調子に乗らないから許して。

それと あの子たちと徹夜で訓練するのは、今後一切止めよう。

80 11月30日 徹夜訓練（後書き）

このままでも十分読みやすいと言う意見がくれば、このまま続行しますが

前の方が良いという意見がくれば何とか前の物に戻そうかと思えます

うわ……まさか書き方の違い1つでここまで影響が出てくるとは……
正直、予想外でした

『俺たちの唯依姫がこんなに可愛いはずがない』(前書き)

誕生日記念SS

楽しんで下さい

『俺たちの唯依姫がこんなに可愛いはずがない』

宵闇に、2つの影が浮かび上がる。

「静かにして下さいよ、巖谷さん！ 唯依ちゃんが起きちまうでし
ようが！」

「うるせえのはお前だろ！？ 大体何だよ、別に忍び込む事は……
ッ」

「ロマンですよ、ロマン」

「うわ……」

2つの影、龍二と巖谷は真夜中の唯依のアパートへと来ていた。
辺りが寝静まっていると言うのに何故？ そう思う者が居る事は最
も意見だろう。

何故 その理由は『3月13日』が唯依の誕生日であるからなの
だ。

現在の日付は3月12日。

深夜に誰よりも早くアパートのポストにプレゼントを入れようとし
たのだが、それだけではあまりにも味気無い。と言う訳で、「唯依
ちゃんの寝顔を見ちゃおう作戦」が決行された訳なのだ。勿論、計
画したのは龍二であるが。

「現時刻1159。3、2、1で鍵開けますよ？ 良いですか？」

「なあ、やっぱり止めようぜ？ 見付かったら……パーン、だ」

「だからでしょうが！ 俺はね、巖谷さん。このまま主導権を唯依に握られっ放しはいけないと思う訳ですよ。何故って？ そりゃアಂತかねえ、女の尻に敷かれて喜ぶ男は居ねえ！」

心からの龍二の雄叫び。

そのバインドボイスを受けて、巖谷も諦めた様に溜息を吐いた。

ポケットから取り出した合鍵を龍二に手渡し、顔を覆う。もしも見付かってしまったら、今からでもそんな事を考えてしまうのは相手が唯依であるからだろう。

暴君、暴虐王、破壊神、帝王、鬼神。

付けられた肩書は数知れず。教師である龍二すら頭の上がらない、凶悪な生徒の1人。

勉強も出来て、スポーツも出来て、料理も出来る。

女性としては完璧で言う事は無いのだが、兎にも角にも彼女は龍二にだけは手が早かった。口から言葉を紡ぐよりも早く、拳が飛来するのだ。

龍二からすれば、それは恐怖以外の何物でも無かった。

故に、日頃の復讐を兼ねた今回の件。

誕生日を迎える相手に嫌がらせをする龍二の幼稚過ぎる精神は一先ず放り投げ、物音を立てない様に鍵を開ける。

玄関から香る、朗らかな女性の香り。

最早殴る度にこの香りを嗅ぐ事になる龍二にとっては慣れた物だったが、久しぶりに娘の家に入る巖谷にとっては貴重な体験だろう。感心した様に何度も頷いている、が今回の目的は部屋の物色では無

い。

まあ 下着の一枚二枚は持ち帰って学校の変態共に売り捌くかも知れないが、本来の目的は唯依の寝顔を拝む事なのである。

「おつ、ベッド発見」

「……………（ガクガクブルブル）」

いやらしい手付きをしながらベッドへ近付く龍二とは別に”何か”に感付いた巖谷は、この部屋から一刻も早く脱出しなければ後が無い事を悟った。

ヤバイ

危険だ

危ない

このままでは、確実に される

「りゅ、龍二、不味い……………帰ろう、帰るしかない、そうしよう」

「此処まで来て何を！？ 俺たちに撤退の二文字はありませんよ！」

「違う！ 最初から俺たちに選択肢は無かった！此処に来れば死ぬしかない！」

その言葉を聞き、直感的に危機を悟る辺りは流石の剣崎龍二であった。

物音すら立てずに俊足で玄関まで到達し、サッサとこの修羅の巣窟から逃げ延びようとして、ふと気付く。

はて？

此処に無断で侵入した時、自分たちはチェーンを掛けただろうか。いや、流石にそこまでの余裕は無かった筈である。

ならば何故、このドアには”チェーン”が掛かっているのだろうか？
正確に言えば 誰が、チェーンを、掛けた、と言うのだろうか、
だ。

「……ま、まあ所詮はチェーンだ。外せば良いだけのこと」

楽観的に考えて、チェーンに手を掛ける。

手を掛けた瞬間にバーン、とかそんな事も無く、チェーンロックは
アツサリと外れてくれた。今程焦らない自分に感謝した事は無かつ
ただろう。

額に付いた汗を拭い、後ろを振り向き巖谷へ脱出への通路が確保出
来た事を告げようとした時、後ろに 巖谷は居な
か
つ
た。

不味い、

不味い、

不味い。

脳が警報を鳴らし続け、この場に居る事が自らの首を絞めていると
言う事を悟る。

所詮はガキの浅知恵、全て釈迦にはお見通しだったと言う事だろう。
アパートのドアを開けて、後ろを振り返る事も無く、ただ全力で道
を駆け抜けた。

肺が痛い。足が痛い。寒い。だから如何した、死ぬよりはマシだ。
向う先は己の家。

あそこに行けば流石の鬼と言え、追い掛ける事は不可能である。要
塞と同じ意味を持つ、最後の砦にさえ辿り着けば俺の勝ちだ ツ！

皆まで辿り着いた後の龍二の行動は迅速だった。

直ぐに鍵を閉め、自らの寝室へと籠り、カーテンを閉め、ベッドの

上の布団を被る。

電気を消し、自らの気配すら消して此処には居ない様に見える。
来るな、来るな、来るな。

龍二の心の声を神が聞き届けたのか、やがて周辺は静けさを取り戻していた。

「逃げ切ったか……」

安心した様に被っていた布団を投げ捨て、大きく溜息を吐く。
逃げ切ったのであれば、良い。怒りが最高潮では無い時の唯依ならば適当に言い包めて話その物すら有耶無耶にしまえば良いのだ。

「おかえりなさい」

誰も居ない筈の家から、声が聞こえた。

声の先は龍二の、真後ろ。

その首筋に掛かる冷たい吐息と、自らの前に伸びる2つの綺麗な腕。見紛う筈が無い、コレは唯依の……

「ぎゃあああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

「夢!?!」

フラグだろうが何だろうが、そう叫んで現実を逃避したいと願う。がしかし、”どの”世界もあまり彼には優しくなど無かった。バラバラになった自らの仕事机を見て、昨日『鬼』が来襲した事を思い出し、身震いする。

何か良く分からないスイッチの入った唯依は驚異的な強さだった。あわや貞操すら奪われてしまう。そんな折、決死の思いで龍二が放った全力の手刀が見事唯依の意識を刈り取ったのだった。

自らの上にある重みを確認し、まだ彼女が眠っている事に僅かばかり安堵する。

もしも起きていれば、考えただけでも恐ろしい結末が龍二に降り掛かった事だろう。具体的に言えば顔面に鉄拳による制裁が下るとか、そんなパターンである。

眠っている唯依を自分のベッドに寝かせ、キッチンへと向う。

コーヒーを淹れ、昨日の疲れを癒す様に溜息を吐きながら苦味の残るそれを口に含んだ。

朝の一杯は最早定番。その定番は龍二にも適用される事で、少しば

かり落ち着いたのかいつも通りの余裕すら含ませた笑顔を含ませた表情でコーヒーを口に運んでいた。

『おいっ、俺！ このカオスな運命を断ち切ってくれ！ ちょ、やめ、ゆッ』

そんな至福の一時を楽しむ龍二の耳に、聞き慣れた”誰か”の声を聞いた気がした。

“運命を断ち切れ”

全く意味の分からない幻聴に、遂に自分が痴呆でも患ってしまったのかと心配になる。

だが、幻聴にしては妙にリアルだ。それに『カオスな運命』とは一体……？

まあ今は兎に角、唯依を起こさねば話は始まらないだろう。

飲み終えたカップを軽く水洗いして、自室にて眠る唯依の下へと足を向ける。今日が休日だったから良かった物の、もしも平日ならば2人一緒に登校なんてふざけた展開も有り得た事だろう。学校で噂になるのは勘弁して欲しいので、そうならなかった事は素直に感謝して居る。流石の龍二も、行き当たりバッタリの自身の計画がこうも上手く事を進めていたとは思ってすら居なかったのだが。

「おい、お姫様。俺のベッドの上から即刻ご退場願うぜ」

ドアを開けた先には、呆けた表情で立ち尽くす唯依が居た。

その事に一瞬身構えそうになるが、昨日あれだけ殴られたのでもう怒られる事も無い筈。

それに、今日は折角の誕生日である。

唯依の為に1日を捧げるくらい、何て事は無いだろう。

「何だよ、ポーっとしてさ」

「あ……しよ、少佐!？」

“少佐”？

聞き慣れない言葉を不審に思いながらも、乱れたベッドの布団を整える為に布団へと手を掛ける。やけに重いな、そう思いながらも布団を一気に引つ張ると

「ふにゅっ!？」

布団の中から、”唯依”が出て来た。

…

……

……

……

………目の前にも唯依が居る筈だが、布団の中からも唯依が出て来た。

え、ちよっと、待て、如何言う事なの？ お兄さん分からない。これって如何言う事なの？

困惑する龍二とは別に、2人の唯依はお互いに目を擦りながら目の前に居る自分とソックリの存在へと視線を向けていた。

「私が、もう1人……?」

声まで同じかよ、龍二はこの惨状に頭すら抱え込みたくなった。出来る事なら逃げ出したい。だが、無理だろう。

まあつまり、何が起きたかと言うと、夢でも何でも無く、マジな話

だが、唯依が2人になっちまったらしい。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n
↳誕生日が一緒だから

唯依誕生日記念SS『俺たちの唯依姫がこんなに可愛いはずがない』

「……いただきます」「」

龍二は考える事を拒絶した。

先程からチラチラと2人の唯依からの視線を感じては居るのだろうが、それすら眼中に収めずに自身の前に置かれた朝食へと箸を伸ばして居る。

「あ、あの……ところで、貴方は一体……」

「あ、わ、私は……日本帝国軍及び国連軍ジャッカル隊に所属して居る篁唯依中尉です。あの……そう言う貴方たち、は……？」

「わ、私は白陵柊学園生徒の篁唯依です。それで、此方が教師の龍二様か」

別の世界から来たらしい唯依にとって、目の前でひたすらに朝食を

食べ続ける龍二は日頃目にして居る”彼”からはあまりにも懸け離れていた。

否、根本は何ら変わる事は無い。

ただ彼女の知る彼は少佐と言う立場で、人の上に立つべく人間だった。

だが、この世界の龍二は隊を率いる訳でも無く、教壇に立って教鞭を振るうと言うのだから信じられない。

似合わないな、と龍二の顔を見て唯依は思わず微笑んでしまった。

誰かを導く姿勢はあちらでも変わりはしなかったが、それを率先してやる様なタイプでは無かった筈である。少なくとも、唯依にはそう見えたのだ。

「俺の顔に何か付いているのか？」

そんな唯依の様子を見て、龍二は片目だけを向けて唯依を見詰めた。

「あ、いえ、あまりにも似ていないかと……貴方の方が人間らしいですから」

「人間らしい？ ……物騒な物言いだな」

食べ終えた朝食の皿を台所の水洗い場に置くと、龍二はサツサと階段を上って自室へと閉じこもってしまった。機嫌を損ねてしまった、別の世界の龍二であると言うのに胸をチクリと刺す痛みに唯依の顔は思わず顰め面へと変わる。

「きつと、貴方の事を思って悲しんでいるんだと思いますよ」

「え？」

悲しむ様な表情をする唯依の姿を見たもう1人の唯依は、そんな彼女を氣遣う様に声を掛けた。自分がもう1人居ると言うのに、驚く事も無いのは劍崎龍二と言う存在と共に居るからこそ鍛え上げられた忍耐力故の産物か。到底、一般人の感性では理解し得ない事ではあるのだが、今は割合する事になる。

「貴方の言う世界では、龍二さんの大切な人たちは命を賭けて戦うしか無い。それが彼にとっては苦痛と代わらない事だから」

「……何処に行っても、龍二さんは変わりませんね」

「ええ、だって……」

「龍二さんだから」

2人同時に呟いた言葉を耳にして、お互いに微笑む。

どんな世界に居ようと、結局は皆が皆龍二を愛して居てくれる。だからこそ、人は彼に惹かれ、やがてはその隣に居ようと努力するのだ。

彼女たちもそれは変わらない。世界が違おうと、その根本は違えない。

「おい、夕呼の所に行くぞ。唯依ズ、支度しろ」

そんな折、コートを着込んだ龍二が階段から降りてきた。唯依（異世界）に少し大きめの自分のジャケットを貸し与え、2人の唯依を見比べた後に疲れたように溜め息を吐く。

何故こうなったのか……頭を抱えなくなる気持ちを抑え込み、2人の唯依の頭を乱暴に撫でて、龍二はリビングを後にした。

「夕呼に頼むのは癪だが、この際我が儘は言えない。この力オスな運命を断ち切らなければ 俺の命がねえ」

龍二の言葉からは確かな凄みが感じられた。それは1人だけの唯依ですら命が危ないと言うのに、何故か2人になりやがった唯依による圧倒的な重圧を感じての一言。つまり、焦っている。

死にたくない

死にたくないと言うあまりにも具体的な願い、そして生命の根本。異世界から来たと言うもう1人の唯依にジャケットを貸した辺りから無口になって此方に視線を向ける唯依を今振り返れば、きっと自分分は危ないだろう。

「そう言えば、向こうの世界の俺はどんな奴だ？ まあいい男には変わりはないだろうけど」

話題の方向性を変えるために茶化して笑う龍二とは相對して、ユイは何とも言えない表情でもう1人の唯依を見やる。言っても良いものか、そう迷っている様に思えた。

「……悲しい人でした」

遠くを見詰める様な、ユイの表情。

父すら殺し、自らを律し続けている彼の悲しき姿を思い起こし、こ

の世界の龍二との違いに愕然とする。

何故、あんな悲しい思いをしなければならなかったのか。

ユイにとってそれは、理解し難い内容。

そして自分と同じ思いを持つのである。唯依にも我慢出来る事では無かっただろう。

「でも、愛おしい人でした」

だから言える。

自らだけでなく、もう1人の自分である唯依の前である。ユイは決して揺るぐ事なくその言葉だけは口に出せた。

「な、なんか恥ずかしいな……自分じゃねえのに」

ユイの真つ直ぐな言葉に明らかに狼狽える龍二を見て、唯依はつまらなそうに頬を膨らませる。

そんな彼女の顔を見て、ユイは楽しそうな、嬉しそうな、笑顔を見せた。

夕呼は学校に居る。

そう踏んだ龍二の考えは正しい物であり、少々間違っていた物でもあった。何せ、そこへ向かう為には街を通るのではあるが、もしもその場で知り合いに出会えば大変な事になる。

唯依とユイ、有り得るはずの無い2人の共存。

夢でも何でもないリアルは龍二にとって否定したくなるリアルにな

っていた。

だが、神は龍二に残酷であった。
どの世界の龍二であろうが、平等に厳しいのである。

「りゅうじー！」

「何だ、お前か」

龍二の胸の中に飛び込むイーニアと、龍二の顔を見て僅かに頬を緩ませるクリスカ。いつもならば、イーニアをなで返してやるだろう。いつもならば抱き締めてやるだろう。クリスカにだって微笑み掛ける筈である。

だが、今は不味い。

後ろに2人の唯依が居る今はマズいのだ。

バレたら面倒臭い事に巻き込まれる、そうすれば苦勞するの結局は龍二なのだから堪ったものではない。

「イ、イーニア、こんにちは。今日はお散歩かな？」

「うん。クリスカもいつしょ」

「そう言うことだ。お前は篋と一緒に……もう1人は、誰だ」

バカ

バカバカ

バカバカバカ

バカバカバカバカ

バカという単語が頭からゲシュタルト崩壊するまで思い浮かべ続け、不振に思われる為に流せない涙を心の中で発散し続ける。

クリスカの鋭い所は今に始まった訳では無いが、それにしたって今この場で発揮する事もなかるうに、そんな愚痴を漏らしたい龍二だが、クリスカの怪しむ姿は変わらない。

どうしたものか、と考えていた龍二に救いの手を差し伸べる様にユイは自然な拳動でクリスカへと当然の如く言い放った。

「双子の姉の”ユウ”です。妹がお世話になって居ます」

整った笑顔。

流れるような動作。

確かに、唯依には出来ない芸当だろう。感心すると同時に、何故こうも2人に違いが出るのか全く理解が出来ない。

「龍二さん、ちょっと」

「何だ？ モノホンの唯依」

「いや何ですかモノホンって……って違う！ そうじゃなくて、何であの私が姉認定されるのか分からないんですが!？」

龍二は自分の胸に聞け、と言う言葉を口に出す事も出来ず、円滑にクリスカたちとの会話を進めていたユウ、もといユイを連れて漸く学校に向かうことになった。

「篋が2人になったあ？」

「まあ見てくれ、コイツを如何思う？」

「す、凄くソツクリじゃない……ッ」

意味深な夕呼の発言。

そんな夕呼の言葉を聞いて、唯依たちは顔を引き攣らせた。

何と言うか 脳内に『ヤマジユン』と言う単語が浮かんだのだから仕方が無い。

「で？ 戻す方法は無いのか？」

「戻す方法って言うか……」送られて来た”って事は何か目的があるって事でしょ？」

そう言っつてユイを見る夕呼。

確かに、ユイの表情は何かを迷っている様に感じられる。だが、此処まで来て何を迷う必要があるのだろうか？ それを達成しなければ帰れない。例え向こうの世界が危機に満たされていようと”

唯依”であるのならば、それを放つて逃げる事はしないだろう。

だからこそ、何故？

龍二の疑問は決して尽きる事は無かった。

「少しだけ、龍二さんとお話をしても宜しいでしょうか？」

気まずそうに呟くユイの様子を見て、夕呼も只ならぬ物を感じたのである。

そのまま唯依を引き摺って部屋から退室してしまった。
部屋の外では唯依が夕呼へ抗議をしているが、それも全て上手く夕呼が聞き流している。
こうなれば、後は龍二がユイの話を聞けば何の事も無く全てが終わる事になるのだ。

「3月13日。何の日だか分かりますか？」

「お前の誕生日」

ユイの問い掛けに、龍二は迷う事など無く即答した。
真っ直ぐにユイを見詰める瞳。
その純粹さすら秘める瞳を見て、ユイは満足そうに微笑んで居た。

「正解です」

夕焼けを背に佇む少女の姿は美しく、珍しくそんなユイの姿に龍二が言葉に詰まる。
今の彼女の姿は美しい、と世辞無しで言い切る事が出来た。

「もしも年を越せたら　　もしも、また此処に来られたら……祝つてくれますか？」

「……当然だ」

ユイの瞳の端に流れる涙の粒を拭い取り、龍二はただ優しく微笑んだ。

今の龍二は知らない。
そして、ユイも知らない。

ユイの時間間隔では、まさか今日が3月13日である事など。
龍二の時間間隔では、3月13日以外の日付など有り得る筈が無い
と。

だからこそ

「唯依」

「はい？」

「 来年も、必ず会おう」

この話は、此処で終わるのだ。

光の粒が少女の身体を包み込み、淡く儂い夢物語は幕を閉じる。

1人は戦場へ。

1人は平穩へ。

本来ならば許される事の無い記憶を消して、尚 人は前へと進んで行く。

「来年も、必ず……」

光に負けず劣らず輝いたユイの笑顔を見た瞬間、龍二の脳内から”
もう1人の唯依”の記憶は一瞬で掻き消えていた。

「龍二さん、早く帰らないと……龍二さん？」

教室のドアを開け、顔を出した唯依を振り返る事無く、龍二は夕闇
に染まる空を見上げた。
美しく染まる夕空は今日も変わる事無く、彼らの頭上に広がってい
る。

それが酷く寂しくて、哀しく思えたのだ。

「今日の俺はセンチメンタルだな」

自分の心情を察したのか、頬をポリポリと掻いた龍二は笑顔で唯依へと振り返った。

今日は唯依の誕生日。

折角なのだから、盛大に祝ってやるべきではないだろうか？

ならば話は早い。どうせ暇なのだろう夕呼やユウヤたちも誘って、誕生パーティーでも開くでしょう。

今は盛大に唯依を祝ってやりたいのだ。

それが何故なのか、今の龍二には分からない。
ただ

「唯依」

「はい？」

「　　こんな俺と一緒に居てくれて、ありがとう」

礼だけを呟いて、龍二は何かに思いを馳せる様に夕空へと視線を向けた。

彼の後ろで、羞恥に染まった唯依が立ったまま気絶して居る事など露とも知らずに。

少女は、夢を見ていた

《夢を、見ていました》

《あん？ 今から人類の命運が決まるって言うのに、随分と余裕だな》

《少佐が先生。私やクリスカ、イーニアやセレナが生徒……美しい平穩の世界》

《……コイツが教師？ 有り得んな》

《なんだか、たのしそうだね》

《僕は絶対少佐と同じクラスにはなりませんよ……扱われますもん、徹底的に》

《それで、約束をしました》

《へえ。どんな？》

《誕生日を、祝ってくれと》

《そっか》

『あと120秒で衝撃来ます。各員、戦闘準備を』

《だつたら勝とうぜ。この戦いに勝つて、全員で年を越せば良いさ！》

《《了解！！》》

《”桜”の”花”が舞い散るにはまだ早い！ 死ぬ最後の一瞬まで、俺は美しく咲き誇る！》

その夢の結末が、如何なつたのかは分からない。

彼女たちが全員揃つて年を越せたのか如何かも分からない。ただ

これは有り得たかも知れない可能性の物語。

枝分かれした未来の、隣り合った2つの世界が偶然重なつた瞬間の物語。

奇跡はまだ手元に残して置こう。

全てを掻き消す炎の如き英雄の覚醒は、まだ 先に控えているのだから。

「何だ、今の夢……気持ち悪い……」

「龍二さん、副司令からの呼び出しですよ!？」

「ああ今行くよ。つたく、唯依は何処に居ようが唯依だな、オイ……」

……

「如何言う意味ですか?!」

「何処に居ようが可愛い女の子って事ですよぉ〜っとな」

「〜!?!? 龍二さん、待ちなさい!?!」

「嫌だよ。止まったら唯依に怒られるから」

全ての原点であり、

全ての頂点であり、

全ての起点である世界は未だ 変革の時間が訪れては居ないのだから。

『俺たちの唯依姫がこんなに可愛いはずがない』(後書き)

私たちの姫様がこんなに可愛いはずが無い？

NO!!

私たちの姫様はこんなに可愛いのだ!!

加筆しました

8 1 12月1日 『人』と『ヒト』 (前書き)

この龍二の設定は賛否両論かも知れない……

寧ろ、「マジかよ!」ってなるのかも知れませんが

ただこれだけは言える

私は我を通し続けようと思っています

……なんちって

「帝国でどんな事が起きて、その結果として誰が犠牲になったとしても興味は無い」

その言葉を紡いだ龍二の顔は確かに、危惧されているクーデターを重要視して居る様には見えなかった。眼中に無い、そんな言葉が実に当て嵌まっている。

会議室にて、国連の重鎮を前にしてすら豪語出来るこの男の強靱な精神力は最早異常と言っても差し支えは無い域にまで届いているのだろう。

内心で、あの夕呼ですら冷や汗が止まらなかった。

基地司令だけで無く、もしかすれば帝国とパイプを持っているかも知れない人物たちを前にしてのこの発言は 命を売りに出している様な物だった。

剣崎龍二だからこそ許される？

否、そんな事は無い。

帝国に椅子を用意された事のある男が、掌を返した様に口を切ると言う事は決して許される行為では無いのだ。事実、目の前に居る重鎮たちは射る様な視線で龍二を見詰めている。号令一つで龍二は殺されるだろう。

武術の類に流通していない夕呼でも、その程度の事は分かる。

ガードマンが数人とは言え、各々がエージェントクラスの精鋭であろう。

自らの後ろに控える龍二を夕呼が強い視線で睨み付けると、龍二は困った様に肩を竦めて彼女の後ろへと身を留めた。

「帝国内部での不穏な動き。それを予防、対策する為に集められた会議の筈ですわ。あまり此処で無駄な話をしている暇は無いのではなくて?」

「……自らの狗の手綱も締められぬ女狐が、今更何を言うかと思いきや」

「なら忠告ですけれど、その”狗”に噛み殺されない様に確りと注意する事ですわ」

主導権を譲るつもりは無い。

舌を鳴らした重鎮の1人が次に進む様に催促すると、夕呼は納得した様に頷いた。

これから起こり得る最大の事件 決起軍との戦いに備えての大事な会議だ。

1つでも多くの情報と、装備を整えなければ乗り越える事が出来ない。

一応、”ジャツカル”と”ヴァルキリーズ”と言う反則的な切り札もあるが、今回の戦いではジャツカルの隊長格である龍二には別の任務が課せられる事になる。

実質、その戦力は6割程度にまで落ち込む事になるだろう。

「戦略研究会なる勉強会が発足された事により、今となっては帝国内で決起の臭いが更に色濃い物となりましたわ。更に、国益に聡い”あの国”ならばこの機に乗じる事も目に見えています。結果としては 計画の今後にすら関わる事態です」

オルタネイティヴ計画

人を導き、そして救う為に夕呼が率いる救いの一手。

だが、現状でそれを快く思わない連中が居る事も事実の1つである。もしも今回の決起でオルタネイティヴ勢力が便乗してオルタネイティヴ計画を潰そうとすれば 或いは、決起軍すら利用し、自らの手すら汚さずに計画を潰そうとしているのであれば。

これは重大な事件になって来るのだ。

幸いな事に、向こうが動いていると言う事は此方にも伝わって来ている。

後手に回る事にはなるが、対策が決して立てられない訳では無いのだ。それを考慮すれば、まだ現在の状況は不幸中の幸いと言える物だったのだろう。

「君は如何するつもりなのかね、香月博士」

パウル・ラダビノット司令の催促する様な問いを受け、夕呼は笑う。それを後ろから眺めていた龍二はその笑顔の持つ意味を良く理解して居た。夕呼が、あの残忍で獰猛な笑みを浮かべる時は大抵 自分が不幸を買う時ばかりなのだから。

「生憎、此方も掃除のプロを配備してあります。掃除はプロに任せ、と言う事で」

その掃除のプロが自分だと言う事は龍二も直ぐに理解出来た。

成る程、面倒な話し合いや計略を練る訳でも無く、今回の決起は正面切つての肉弾戦で攻め入るらしい。その為に自分が此処に居るのかと思うと、少々複雑な気分になる龍二くん。自分は獰猛な獣の類じゃ無いぞー、と意見を言おうかとも思ったが場所が場所なのでその単語を口の中に留める事にした。

部屋に戻ったら、この女許さん。

貼り付けた笑顔の裏に想像も絶する怒りを溜め込んでいるとは、流石の夕呼も想定しては居なかっただろう。後ろで重鎮たちに笑顔を振り撒く龍二の頼もしさを、今はただ自らの背中で受け止めていた。

それから直ぐに会議はお開きとなり、廊下をただ無言で夕呼と龍二が歩く。

これから先、お互いにやらねばならない事は腐る程に残っている。夕呼は鎧衣に一刻も早くXG-70の仲介と回収を急がさねばならない状況になり、龍二としては一分一秒でも長く部下たちに戦闘での心得を叩き込まねばならなかった。

生きる為に。

生き残る為に。

この程度の嵐など、所詮はもう慣れた物だろう。

最早国の危機を危機とすら思わない豪傑2名は、堂々と会議室へと背を向けた。

決起軍など、眼中に無い。

2人の前に立ち塞がる敵はいつであろうと己の限界であり、いつであろうとその限界に打ち勝ってきたのだ。だからこそ、今回も同じ事。

当たり前のように勝って、当たり前のように次へと進む。

そう、信じていた。

現時点で龍二に分かる事は2つ。

1つは自分の父親である剣崎剛が、このクーデターでアクションを起こすと言う事。

長かった憎むべき敵との決着が間近に迫って居ると言うのに、不思議と龍二の心は平静を保つ事が出来ていた。父親を殺す事に躊躇いは無い、恐れも無い。ただ 憎むべき敵であった父も、今では老いた。何れは天寿を全うするだろうその身に、わざわざ刃を突き立てる意味が果たしてあるのか如何か。

その答えは、結局出ない。

2つ目。

このクーデター騒ぎにて、兄弟 即ち彼の同類が出て来ると言う事実。

少なからずとも、この”戦争”は全ての勢力が全てをぶつけ合う事になるだろう。

国連も、

帝国も、

決起軍も、

米軍も、

オルタネイティヴ勢力も、

反オルタネイティヴ勢力も、

己が持つ最高にして最強の戦力を投じる事で、戦局を支配しようとする。

それをさせまいが為の剣崎龍二ではあるのだが、今回は少しばかり勝手が違う。

『4人の兄弟』

アラスカで遭遇・戦闘した際にも理解する事が出来たが、日々進化するアレは最早剣崎龍二の持っているキャパシティを越えている可能性すらある。

ある意味ではBETAよりも性質の悪い、最悪の敵になる可能性もあるだろう。

いよいよ、話す時が来たのかも知れない。

剣崎龍二の過去、そして生い立ち。

何故横浜基地に居て、何故香月夕呼と共に行動するのか。その全ての理由を。

龍二の招集礼を聞いた後の、オルタネイティブ勢力の行動は早かった。

ヴァルキリーズ、それに夕呼を含む総勢11名。

美少女・美女揃いの光景は圧巻ではあるが、龍二はそれに興味も示さずに口に啜えた煙草に火をつけた。煙草から立ち上る煙と、吐き出される煙。

龍二のその様子に何か感付いたのか、夕呼は目を閉じてただ龍二の次の句を淡々と待っている。彼女は知っているからこそ 龍二の”覚悟”を今理解したのだろう。

普通ならば、出来る筈も無い事。

それでも尚、共に戦うのならば知らなければならぬ事。

「さて、それじゃ 自己紹介をするか」

力無く笑う龍二の顔には、いつもの飄々とした態度は無い。

着飾る事の無い本当の自分。

能面の様な無表情に少しばかり浮き出た、皮肉気に歪んだ笑み。

しかし何故自己紹介を？

この場に集まった夕呼以外の面子はその言葉の意味を理解せず、龍二に対して鋭い視線を送る。当然だろう、職務を放つて此処まで来たとなれば重要な話でなければ釣り合わない。だと言うのに、自己紹介の為に呼び出されたとなれば大変遺憾に思う事だろう。

だが、これも必要な手順。

暗い部屋に申し訳程度に輝く電灯を見て、龍二は決心する様に深い溜め息を吐いた。

最早これは1人だけの問題では無くなった。

情報を共有しなければ死人が出る確率があるとなれば　喋らない訳にもいくまい。

「俺の名前は剣崎龍二、出生は”試験管”。良くある話だろ？　人体実験つてヤツだ」

人と人の交わりで産まれる者では無く、自らは無から産み出されたのだと龍二は語る。

その言葉の持つ意味が理解出来る者がその場に何人居たのだろうか？　恐らく、誰1人として居なかっただろう。

誰よりも母を愛し、誰よりも妹を慈しんでいた彼が”試験管ベイビ”だと言っただから。

それは、笑えない冗談とも言えた。

「それじゃ、次は」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！」

矢継ぎ早に自らの秘密を明かそうとする龍二を止めたのは、水月だった。

ワナワナと龍二を指差す手が震え、その瞳も信じられない様な物を見ていると言わんばかりに見開かれている。その気持ちは分からないでも無い、人間の犯してはならない禁忌の結晶体が目の前に居るとすれば　驚くな、そう言う方に無理があるのだ。

「アンタ、自分の母親の事……ッ！」

「正式な母親じゃ無いが、確かに”母さん”は俺の母さんだ。お前が聞きたいのは、そこに至るまでの過程だろう？」

話を途中で止められた事に対する不快感なのか、龍二は気にする事も無く水月の言葉を切って棄てる。どうせ話すのだから、焦る事も無い。その目だけが、そう語っていた。

「まずガキの頃の話だが、割合する。どうせクソみたいな肥溜めでの話だ、聞いたって胸糞悪くなるだけで終わる。それで……ええっと、次は母さんとの馴れ初めか？　だったら俺よりも　夕呼の方が詳しいと思うがね」

終始無言を貫こうとして居た夕呼だったが、龍二の呼び掛けによって片目だけを僅かに開いた。見れば、ヴァルキリーズの面々は夕呼へと視線を向けている。話さなければならぬだろう、こうなってしまえば。話さなければ　それは自らが龍二の覚悟を踏み躪る事に繋がってしまう。

「……………禁忌、手を出してはいけない領域」

独白の様に呟かれる夕呼の言葉を、ヴァルキリーズは黙って聞き入れる。

最早この場は龍二と夕呼、2人だけの独壇場だった。

周りに居る面々は聞き手であり、ただ物語を彩るだけの2人は淡々と自らの知っている全てを語る。それだけなのに、たったそれだけの事には恐怖があった。畏怖があった。

「怖がったのは、僅かな者たち。そしてその中には剣崎千代美が居た。正確には、怖がった者たちの部下だったと言えば良いのかしらね……」

おどけた様に肩を竦めて、彼女は言葉を紡ぐ。

それは大変貴重であり、大変重要な　世界すら揺るがしかねない大事件の一幕だった。

全ての始まりは禁忌を恐れた者たちによる集団粛清。

手段を正当化する為の、理を掲げた虐殺。

その矛先は当時名前すら決まっていなかった龍二の下へも向っていた。

何処とも知らない基地の、何処とも知らない場所。

そこで眠っていた『後の龍二である少年』は最初、施設を揺らす衝撃で目を覚ました。

何故揺れているのか、それすら分からない少年にとって施設が揺れると言う事は恐怖以外の何物でも無い。自らの肩を抱き締め、その恐怖が一刻も早く過ぎ去ってくれる事を少年はひたすらに懇願するしか無かったのだ。

銃弾と断末魔の叫び。

鼻を突き刺す嗅いだ事の無い香りと刺激臭。

知らない、知らなかった、知りたくも無かった。

一生を檻の中で過ごし、そして終わらせて逝くのだと少年は疑う事すらしなかった。
それが当然だと、彼は思っていたのだ。
しかし、彼は檻の”外”を見てしまう。

崩れ落ちた施設の壁から覗く青い空を見て、少年はただ心を奪われた。

自らの上に広がる、何処までも広い空。

自分は、今まで何処に居たのだろうか？ 外に行きたい、外に出たい。出る事など許されない少年は 空を見て、外への強い期待と淡い思いを抱いた。
だからこそ、

えっ、子供！？

少年は彼女と出会ったのだ。

運命と呼ぶに相応しい出会いだったのだろう。

少年は、初めて自分を肥溜めのクソと同等にしか見てくれない”誰か”とは別の 1つの生命として見てくれる女性に出会いに、瞳を奪われる。

強化装備にアサルトライフルを構えた女性だったが、そんな無骨な姿だろうと今の少年には美しく思えた。否、本当に美しかったのだ。
彼女は 剣崎千代美は。

「あの時母さんに会わなければ……俺はきっと、此処にも居なかっただろう」

あの場所で千代美以外の人物に見付かったのならば、考えるまでも無く龍二は死んでいた。

あの日、千代美の懷に抱えられた龍二はそのまま基地へと帰還する事になる。

勿論、部隊内の仲間たちから龍二の事を聞かれただろう。

それ等全てを乗り越えられたのは、千代美の　ある種では龍二にも受け継がれた　仲間との強い信頼関係故なのか。

「元々殺す為に出て来た様な存在にそれ以外の価値は無い。英雄だの何だのと言われて来たが、強くなきゃ生き残れないなら強くなつちまうのは当然のことだ」

さも当然とばかりに、肩を竦めて龍二は呟く。

強くならなければ生き残れない。

あの日、あの場所から抜け出ても、結局それは変わらなかった。

護る為には強くならなければならない。

貪欲に、強欲に、欲しなければ上には行く事は出来ないのならば

剣崎龍二の欲望は深く、浅ましく、黒く、醜い物なのだろう。

「さて、と。それじゃ前菜は終わりだ」

「前菜……？」

龍二の前菜、と言う言葉に逸早く反応出来たのは伊隅であった。

彼女は　龍二がどの様な存在であれ、彼と育んだ友情だけは違えないと強く信じていたからだろう。別段、龍二の強烈なカミングアウトにうろたえる事も無く、ただ彼の言葉を強く胸に刻み込んだだけで済んでいた為に、龍二のその台詞に逸早く反応する事が出来た。これで前菜だと言うのなら、主賓とは一体……？

「今後起きるかも知れない」一件で投入されるかも知れない兵器”
について、だ」

会議室のモニターに投影された映像。そこに写る、4つの何か。軍人故に、難しい事よりも目先の”危機”に反応する辺りは流石と
言う所だろう。

全員の視線がモニターへと注がれたのを皮切りに、龍二は自らの出生と僅かばかり関係のある最悪の兵器たちについて、ヴァルキリーズへと説明を始めたのだった。

「アンタさ、辛くないの？」

「は？」

全ての説明を終え、沈痛な面持ちで会議室を後にして行くヴァルキリーズの面々。

一応、鍵担当と言う事で最後に出なければならぬ龍二を待つて居たのだろう水月が、扉の前で腕を組みながら龍二を見詰めた。

水月の放った第一声の意味が分からない龍二は、ただ首を傾げて彼女の次の句を待つばかり。それを理解して居るからなのか、矢継ぎ早に　とはいかなかったが、1つ1つの言葉を噛み締めて居るかの様な強い口調で、水月は龍二を見やる。

「……そんな生き方で、辛くないのかって意味よ」

試験管ベイビーで、親も知らず、人なのか如何かも怪しい現状。

それでも尚、迷う事すらせずに戦う龍二はあまりにも異質だっただろう。

何の為に？

誰の為に？

何故？

如何して？

そんな疑問、それら全てを笑い飛ばす様に、一度鼻で笑った龍二は皮肉気な笑顔と共に水月の沈痛な面持ちを笑い飛ばす。

「ウジウジ文句言っても何も変らねえだろ？ だったら気楽に前向いて、ポジティブに生きて行くっきゃねえ。もう終わっちゃまった事は戻せない訳だしよ」

言葉で言うのならば、簡単だろう。

だが、行動に移すにはあまりにも難しい事柄。

戦場に勝利を舞い込む英雄の過去は重く、黒く、そして人を憎んでも良い物だった。

人に加勢するなど、馬鹿馬鹿しく思える過去。

生きる為に強くなるのでは無く、戯れで強くさせられた従属の屈辱。それは尚 剣崎龍二の中で強く燃え滾っているのだろう。

『鎖を嫌う狗』

成る程、確かに過去と照らし合わせれば実に辻褄が合うでは無いか。鎖で縛られる屈辱を知っている男だからこそ、鎖を嫌い、引き千切つて行く。

縛られる事を嫌うのは至極当然の話だった。

「何でアンタよりもあたしが落ち込まなきゃなんないのよ……最悪だわ」

「何だ、落ち込んでくれたのか？」

「は、はあっ!?」冗談じゃ無いわよ、アンタの事なんて如何でも良いわ!」

「ちえっ、リユウちゃん残念」

おどけて、笑って見せる龍二の姿を見た水月は居た堪れない気持ちになった。

如何して? 何故、こんな少年の様な男が地獄の様な従属を強いらねなければならなかったのか。そして何故戦いは尚も激化し、この男を更なる地獄へと誘おうとするのか。

それも全ては仲間のお蔭?

なら、もしも

「……」もしも”、の話よ?」

足を止めた水月を振り返った龍二は、水月の自らの服の袖を握り締める様子を見逃さなかった。何かを思い詰めている、そう理解するには十分な時間。

「もしも、アンタの部下がアンタの事を受け入れてくれなかったら如何するの?」

その問いに対する答え。

もう既に、龍二の中ではとっくに出ていた答えである。

まさか彼女の口から聞くとは思いもしなかったが 苦笑と共に、龍二は少しだけ俯いた。

”もしも”なんて、考えたくも無かった。

それでも考えなければいけない時が来たとしたら、自分はきつと

「その時は、勇ましく特攻でもして死んで来る」

胸を張って、そう言ってやれる自信だけはあった。

「え？」

「アイツらに受け入れて貰えないなら　生きていたって仕方が無いだろ」

哀しそうに笑い、思う。

千枝の事を、唯依の事を、クリスカの事を、イーニアの事を、セレナの事を。

もしも受け入れて貰えなかったとすれば……考えるまでも無い。

“死んだ”方がマシなのだ。

誰よりも生きる事に固執する英雄ですら、死んだ方がマシと思える様な世界。

剣崎龍二にとつての世界とは、彼女たちの存在だった。

彼女たちが生きて、自分を慕い、自分の下で働いていてくれる。

それだけが全て。それだけが生き甲斐。それだけが願望。

それが適わないのなら、死ぬ。

当たり前のように紡いだ答えは、しかし一般人から見ればどの様に写るのだろうか？

狂った男の狂言と笑われるのだろうか？

いや、それでも構わない。

剣崎龍二にとつては　世界中命運など、狗の餌にすら匹敵しない屑同然の物なのだ。

彼にとつての全ては、”仲間”。

だが、それでも水月には龍二が死ぬと言う事だけは許容出来ない事だった。

“これだから、人間って奴は見捨てられねえよ”

可笑しそうに笑いながら呟き、怒って先へと進んでしまった水月の後を、龍二も遅れる形になったが追いかけて行く。

人を恨む？

確かに、そんな時も一時はあつた

だが、水月の様なバカ正直で真つ直ぐな人間の『光』を見せられた日にはそんな物も空の彼方へ高々と吹き飛んで行ってしまった。

改めて人の素晴らしさを再確認し、再び強く護りたいと思える。

人間って素晴らしい。

心の中で呟いた龍二の足取りは、憑き物が取れた様に軽やかな物だった。

龍二は基本的に、人の様な人では無い存在です

・何処ぞのシヨッ〇ーで生まれたバツタ仮面共の様に超人的なパワーを最初から身に付けていたと言う訳では無く、そこは全て母親仕込になっております

- ・社やイーニアたちの様に特殊な能力はありません
- ・あくまで”出て来た”だけの存在です
- ・ただ、普通の人間に比べればかなり頑丈です

チヨクチヨク伏線チツクな物を仕込んでいたのですが、あつて無い様な物でしたから此処まで来るまで気付いた人は居ないかも知れない

物語を作った初期からの設定で、何処でカミングアウトしようか迷っていましたが漸く龍二の過去を少し紐解く事が出来ました
もっと詳しい母親との出会いは、後日談の時にでも……

82 12月2日 同調(前書き)

ガンダムUC半端無いですね、ブルーレイ買って良かった

私はマリーダさんとダグザさんが好き(はあと

煙草を口に啞えた寝惚け眼の龍二が、「うー」と唸りながら自室を後にする。

久しぶりに昔話をした所為なのだろうか、可笑しな夢を見た気がした。

内容はハッキリ覚えちゃ居なかったが、とても温かな夢。そう、誰も泣く事の無い平和で穏やかな世界の夢 自分には縁も無い場所だが、良い夢ではあった。

とは言え、まだまだ寝足り無いと言うのは正直な本音。

もう少しくらいベッドで横になって惰眠を貪りたいと言う本心がありはしたが、それを押し殺した覚束無い足取りにて龍二は夕呼の下へと向かった。

何やら今日は重要なイベントがあるらしく、龍二にもそれを手伝えと言うのだ。

基本的に頭を使う作業は敬遠してしまうクセのある彼ではあるが、頭腦的な意味合いでは決して粗悪と言う訳では無い。戦術論や兵器類の新案をスラスラと述べる辺りで頭腦的には十分使い物になるレベルではある。

ただ、「1+1は？」などと聞かれれば即答で「田んぼの田」と答える類のガキみたいな性格をして居る事でデスクワークに召集される事は滅多に無い。

あくまで”戦闘面”でのみフル回転させる事の出来る頭脳と割り切

らなければ、中々辛い物があるのだ。それだとしても、余りある知識の蓄積はあるのだが。

「おはよおちゃん、朝はダメだわ……フラフラする、ホント」

夕呼の執務室へと登場する際の、間の抜けた挨拶。

それに対して社は頭をペコリと下げ、夕呼は相手にする事も面倒だと言わんばかりに右手だけを挙げて挨拶を返した。

特に何を言うでも無く、ソファへ乱暴に腰を降ろした龍二はボサボサの頭を手で梳かしながら、目の前に置かれていたまだ温かい飲み掛けのコーヒーへと口を付けた。

どうせ夕呼の物だろう、頭が確りと覚醒し切って居ないのだから仕方あるまい。

つう訳でコーヒー寄越せ、と言う原理である。

しかし 相変わらず夕呼の淹れたコーヒーは不味い。決して味が酷いと言う訳では無いのだが、毎日毎晩龍二の淹れた物を飲んでいるのであるから学習程度はして欲しかった。

それも無理難題なのだろうか？ あれ、何だか哀しくなってきた。

簡易キッチンへと赴き、先程まで自分の飲んでいた物とは別に新しく1杯淹れる。

それと同時に、社の為に甘めのカフェオレを1つ作成。

さり気無く飲み掛けのコーヒーも棄てようかと思っただが、流石に材料が勿体無いと言う事でそれを躊躇いながらも、また口を付けた。酷い味だ。

本当に、酷い味だ。

強調する為に繰り返しているが、本当に酷い味なのだから仕方が無い。

「ああ、疲れた。ねえ、コーヒー」

「淹れてある。お前の飲み掛けは俺が飲むから、お前はソツチの新しいヤツ」

「気が効くじゃ無い？ まあアンタが新しい方だったら無理矢理引っぺがすけどね」

「極悪にも程があるわあああああッ！！！！」

「……………」

「ああそうだった。それ、お前さんの分だぞ。朝から頑張ったな」

社の頭を撫でてやれば、無表情ではあるがウサ耳が嬉しそうにピコピコと揺れていた。

感情表現が乏しいのかと思っていたが、別段そう言う訳でも無い。ただ、感情を表現する為にウサ耳の”カチューシャ”が揺れるって如何言う事なのだろうか？

その辺り気になって来るが、永遠の謎なのかも知れない。知らぬが仏、とも言える。

「それにしても…………何だ、そのヘンテコな装置」

「ヘンテコな装置が人類の未来を救うとしたら、アンタ如何思う？」

「表には出すなよ。拍子抜けする」

ヘンテコな機械。

夕呼の執務室に設けられたそれは、最早この部屋の彩りすら完全に変えていた。

至る場所へと伸びるコード。
部屋の3割程度を占めるウェイト。
無骨で居て繊細、とか良く分からない構造をして居るそれを龍二は
マジマジと見上げた。
見れば見る程用途の分からない

分からない？

「あ？」

見上げた先で、ふと龍二の視線が止まる。

知らない筈だ。知って居る筈も無い。当たり前的事だろう、それが。
ならば何故これを見上げた俺は、安心したのだろうか？ ホツと息
を吐いたのだろうか。

何だ、これ。

何だと言っのたろう。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、
気持ち悪い、
ッ！！

「これはね、白銀を元の世界に戻す為の装置よ。莫大な電力を消費
するけど、まあ人類の未来を考えれば些細な事よね。それで、アン
タには今から電力供給のアシストを」

「……」

「ちょっと、龍二ー!？」

「……ん？ あ、ああ、アシストね、アシスト。了解」

別段何も無かったかの様に、龍二は自分に用意されていたパソコンの前に座り、無言で作業を開始する。電力供給する為に何処からの程度電力を奪い取って行くか、事細かで緻密な計算を文句一つ言わずこなして行く。

その姿を見せられ、夕呼も先程のボーっとしていた事に付いては何も問い掛けてはこなかった。それは龍二にとっても有り難いことだろう。

執務室の奥 シリンダーに浮かぶ脳髓。

確か、『カガミ スミカ』だったか？ 名前は忘れたが、社やイーニアたちが懐いていると言う事は『カガミ スミカ』もリーディング系統の能力者なのだろう。

先程の薄気味悪い感覚も、もしかすれば……

（まさかな……）

自分の考えを笑う様に、龍二はまたパソコンへと向き直った。そんな自分の姿を、社が見詰めていることなど知らずに。

それから時間は過ぎ、正午近く。

件の問題児である白銀が執務室に到着する事で、今回の件は漸く最終局面を迎える。

念を押す様に武へと何度も注意事項を伝える夕呼とは相反して、龍二は既に夢の世界へと半ば旅立っていた。朝早くからの作業の成果もあって電力供給のライン確保は既に成功している。本来ならば基地内の電力全てをフツ飛ばしかねない転移装置ではあったが、龍二

の省エネ具合　正確には他の基地から電力を奪い取るという強攻策　の甲斐もあって、基地の運営には何の問題も来たす事は無くなった。

「コイツにも、感謝しなさいよ」

「え？」

「アンタの為に他の基地のプロテクト掻い潜って、電力引っ張って来たのよ？　コイツが居なきゃ、基地内電力全部使っちゃう所だったわ」

「龍二さん……」

ソファの上、国連軍の制服で顔を隠して眠っている龍二。

微かに聞こえる寝息からも、既に疲れ果てて眠ってしまった事は察する事が出来た。

何から何まで　夕呼もそうだが、龍二や社にも迷惑を掛けている。そんな事を思い浮かべ、一瞬でも不甲斐無い自分へと戻ろうとした自らの頬を強く叩く。今回の実験で成功しなければ、装置は破壊される。

チャンスは1度だけ。

世界を救うチャンスは、今を逃せば二度と来ない。武は自分の肩に掛かる、世界の命運と言う重みを感じた。もし龍二が起きていたのなら「気張るなよ」と気楽に肩を叩いてくれたかも知れない。それが無いと言うだけで、手に汗すら握っていた。

「いい？　向こう側の”あたしたち”以外との干渉はなるべく避けること。向こうに引っ張られて、何かしらの影響が出るかも知れないから」

「分かりました！」

「それと、これ。向こうのあたしに渡せば分かるから、頼むわね」

装置の中に武が入り、それと同時に霞が電源装置を入れて行く。

1番から4番。

足りなければ5番、思い切って6番まで。

「行けるわね、白銀？」

『行けます!!』

思い浮かべる、友人たちの顔。

そして 幼馴染である純夏の笑顔。 たった3年前の、元々居た自分の世界。

帰ることが出来る。

平和な、世界。それが当たり前だったあの頃に

「これが成功すれば、00ユニットは完成する……！」

武の身体が粒子の粒となって消え行く最後の瞬間。

夕呼は、自らの悲願にチェックを掛けた事への喜びと希望に打ち震えていた。

そんな中でも、またもや社は龍二を見詰めている。

読めない心。だが、一瞬ではあったが今心が揺らいだ。それは”戸惑い”。

何故戸惑うのか？

その答えを彼女が知るのは、もう少しばかり先の事になる。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

夢に見るのは、何処か別の世界。

丘の上から眺める何処かの学校の景色に、俺の様な誰かは歓声を上げていた。

(…… 誰だ、コイツ)

此処が何処なのか、

何故此処に自分が居るのか、

彼 剣崎龍二にとっては些細な顛末である。如何足掻こうが変わらない未来がある様に、如何喚こうが分からない事もあるのだから、今回だってそれに順ずる物なのだろう。

達観した龍二の意思とは別に、誰とも分からない自分は学校へと向って行く。

校門を抜け、廊下を走り、一直線に向ったのは職員室だった。

何故に職員室？ 龍二は疑問を持ちながらも、黙って 実際喋る事は出来ないのだが 事の成り行きを見守る事にした。

「夕呼先生！！ 大事な、大事な話があります！！」

声の主は、職員室でゆっくりと休んでいた1人の女性教師に声を掛けた。

夕呼、そうだ。自分にとっても馴染みの深い夕呼だ。

白衣と国連の制服と言う姿では無く、何だか派手な格好に身を包んだ夕呼は声の主を「白銀」と呼んだ。どうやら、この身体の持ち主は白銀武であるらしい。

(何で俺が少年に……)

困惑するしか無い現状ですら、龍二は溜息を吐くだけで済ませて見せた。

もうどうにでもなれ、投げ遣りな態度を取る龍二を他所に、2人の話は進んで行く。

『因果律量子論に基づく多元宇宙の実証考察』

その資料を見せる事で、自分が因果導体と変わり果てた事を夕呼に説明し、この因果律量子論の完成型を3日後までに用意して貰う様に頼み込む。

一生懸命な武を他所に、龍二は別の所で驚きを隠せないで居た。

あの夕呼が教師を務めている。

何とも似合わない、そして型に合わない職業だと思っただが、案外とあの自由気侷な性格や他者を振り回す唯我独尊な一面が教育上宜しいのでは 宜しくないだろう、きっと。

有り得ないだろ、常識的に考えて。

「天才やってて良かったあ〜！」

「はあ………」

(自称を付ける、自称。お前みたいな天才が居て堪るか)

呆けた武の態度とは別に、鋭いツツコミを入れる龍二。
何処に行こうが、夕呼と言う人物は寸分もずれる事の無い野朗だった様である。

「へえ〜？ じゃあ、やっぱり向こうにもあたしが居るのよね。ア
ンタの取り巻きとか、まりもとか……それ以外は？」

「えつと、基地を歩いている時は知っている人をチラホラ見かける
くらいですかね……オレの所には、あんまり知り合いが居なくて…
…あつ、でも凄え人なら居ますよ！」

「ふうん？ 男？」

「はいっ！ 龍二さんって言う、先生と仲が良い人で」

嬉しそうに龍二の事を喋る武。

まさか現在ベタ褒めして居る相手が共に居ると言う事に気付いたならば、彼はどんな態度を取るだろうか。いや、結局コイツも揺るぐ事は無いだろう。寧ろ、「この人が〜」なんて嬉々として龍二を引っ張り出して紹介してくれる筈である。

良くも悪くも、一番恥かしかつたのはこれを聞かされ続けるしか無い龍二だろう。

(があああああつ！ 止める、タコツ、俺を褒めるな！！)

あまりの気恥ずかしさに、遂には呻き始める程である。

ガンガンと見えない壁を叩き、ガリガリと頭を掻き毟っている姿はヒステリックを起こした者に似通った部分があるだろう。

ただ、此処で2人とはまた違った反応を見せる者が居た。

夕呼は龍二の名と、武の語る龍二の武勇伝に聞き惚れていた。本当に嬉しそうで居て、哀しそうな笑顔。

誰よりも逸早くそれを察知した龍二自身が、夕呼の浮かべる笑みを見詰める。

こんな夕呼の表情は 彼は見た事が無かった。

「そつちに居るアイツ、元気みたいね」

「夕呼先生、こつちの世界の龍二さんは何処に？ オレ、会えないですけど顔くらいは見て置きたくて」

「……無理ね」

武の気軽な問い掛けに、夕呼は鋭く切り返した。

この時点で、龍二自身も自らの身に何が起きているのか凡そに予測を立てる。

別の世界の自分だと言え、何だか妙な気分になってしまつのは何故だろうか。

自分で自分の心配か、と龍二は自嘲気味に笑った。

それから夕呼の口から語られる、この世界の龍二の事。

昔、とある少女を救う為にトラックに轢かれた男が居たそうだ。

何の変哲も無い日常。

隣を歩いていた男が突然走り出し、少女を突き飛ばして、代わりに自らがトラックに突っ込まれる映像。飛び散った血痕は今でも尚、ハッキリと覚えている。

その場面こそ、夕呼が自分と会話を出来る龍二を見た最後の瞬間。最早二度と自らの気持ちなど伝える事が出来ないと思っていた。だが、この場には武が居る。

伝えて貰わなければならない。この世界の、香月夕呼の思い。その記憶、全て。

そして　あの時、返す事の出来なかった言葉の返事。

「白銀、龍二に伝えて欲しい言葉があるわ」

「え？」

「……………愛してる、って伝えて頂戴」

人だからこそ持ち得る愛と言う可能性。

この時、夕呼は自らの思いを本当の意味で解放する事が出来た。

例え、違う場所に居る違う剣崎龍二だろうと、何だって良い。

龍二に伝える事が出来たのなら　　漸く、夕呼の人生は始まってくれるのだ。

（……………馬鹿野朗）

無理矢理に夕呼の言葉を聞き流す様に、龍二はただ朱の差した自らの頬を隠す様にその両目を瞑った。この台詞を言われた武も、自分の事では無いと言うのに僅かばかりに取り乱しているでは無いか。アホ、と呆れを含ませた罵倒を最後にして

龍二の、不思議な体験は幕を閉じる事になる。

「やっと起きたわね。アンタ、いつまで寝惚けるつもりよ？」

寝惚け眼と擦りつつ、辺りを見渡せど知らぬ景色。

何処だ、此処は。

そう問い掛けるよりも先に、自分が何故此処に居るのかを思い出した龍二はふと自らの腕時計へと視線を移した。既に経過した時間は数時間弱、一体自分は何をして居たのか

「ちよつと、アンタ大丈夫？」

自らの顔を覗き込む夕呼を見詰め、暫し呆然とする。

そう言えば俺、コイツに愛してるなんてって言われたっけ……寝惚け眼のまま夕呼を抱き寄せた龍二は、そのまま抵抗すら許さずに彼女の唇を奪う。

ほぼ無意識だったとは言え、夕呼はそれに反応を返す事も出来ずに龍二に唇を奪われていた。

「……やる」

「は？」

「……お前が悪い」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！？ アンタ、此処で何を」

「”ナニ”だろ」

久しぶりに目が据わった龍二に白衣も衣服も脱がされる。
何と言う手際の良さ。

「アンタ、ただじゃ済まないわよ……ッ！」

「……据え膳食わぬは男の恥」

「あたしは誘って無いでしょうが！……あっ！」

剣崎龍二、寝惚けた様子を見せながらも夕呼に襲い掛かる辺り変態の気質を除かせる。

夕方。

奥のシリンダーに今日の顛末を報告しようとして居た社が、2人の情事を目撃してしまい、顔を真っ赤にして武の所へやって来たのは
「こゝ愛嬌。」

82 12月2日 同調(後書き)

リア充爆発しろ

それは一先ず、取り敢えず次回予告

始まるのはクーデター

終わるのは人の命

今日も今日とて、当たり前のように戦場へ馳せ参じ様とした英雄の前に
とある1つの苦難が襲い掛かる

動き出す反乱の意思

躍動する影

次回Muv-Luv Condition-Red of hum
an『龍二、死す』

リア充爆発します

83 12月5日 龍二、死す（前書き）

難産……

その言葉が相応しい物でした

修正するかも知れませんが、この話がクーデター編の皮切りになります

龍二やT Eメンバーを交えたクーデター、スタートです

元から壊れていた物に、何かを期待する事すら間違いだった。

俺は俺のまま。ありのままの自分で、ただ其処に揺蕩い続ければ良かったのに。世界つつうのは残酷で、冷酷で、非道で、何もかもを投げたしたくなる程に素敵だ。

今更かも知れないが、剣崎龍二は人殺しである。

何人殺したか分からない程に殺した。凄え殺した。殺して、殺して、殺しまくって、で 今更に殺されそうになって居ると言ったら、誰か同情してくれるのだろうか？

それは何処かで間違ったかも分からない小さなミス。それは何処で失ったか分からない些細な喪失。失ったのが先か、間違ったのが先か。それとも両方同時だったのか。

どちらにせよ、人間としては致命的なミスだった。

俺は最初に、自分の意思を殺していた。
次に感情を殺して、引き金を引く。撃鉄が起きて、銃弾が発射されるまでの数秒。もしくはコンマ、俺は殺される側の人間を見て何を
した？

決まっているだろう。

弱者と強者に優劣な差が生まれたとすれば、それを感じた人間が行う行動はただ1つ。

いや、まあ、人間つつうのは少々間違いがあるかも知れないが……

笑顔とは時として凶器になる。

狂喜だったり、狂気だったり、凶器だったりと忙しく面倒にクルクルと変わり続ける物が笑顔だ。笑顔で人は殺せない。でも、凶器。だってそうじゃないか。

笑顔を向けた時、目が笑って居なければ相手に「自分は怒っている」と教える事が出来るだろう。

オレが言いたいのは単純で、相手を精神的に殺すには笑顔が一番と
言う事なのだ。

「終わったか」

目の前で泡吹いて倒れる何処その重鎮を前に、俺は銃をホルスターに収める。

仕事は終了、これから安くて落ち着ける店で美味くもねえ酒とつまみを食って1日も終了。それで金も入って、世は全て事も無く、ただ平凡な日常へと返る筈だったのに。

筈だったのに。

「ひっ……」

ほぼ反射だったのか。

声がした方向へと銃を向け、反射的に鋭く睨み付ける。視線の先に居た見た事も無い少女。当たり前か。この重鎮殿に会ったのも今日が最初で最後なのだから。を目にして、自分の不手際を呪い
たくなつた。

ああ数分前の自分。仕事をする時はキチンと周りを確認して欲しい。

こう言った面倒に巻き込まれるのは、数分後の俺なのだから。
少女の姿から察するに、従者とかその類だったのだろう。怯えた視線を此方へ向ける少女に、俺は笑顔を向けた。そう笑顔。営業スマイル、ニコリ。

「失礼。少々探し物をしていましたね、家主に見つかりと面倒なのですよ」

「え……？ あ、え……？」

「この場の出来事を見なかった事にして、180度反転して頂けると幸いです。ホラ、分かるでしょう？ 今この場に出てしまった自分の愚かさとか、そんな事が」

拳銃を持った男の行った何かの現場を目撃したとなれば、自らの保身へと走るのは人間として酷く当たり前の事だった。だからこそ、少女は異常に目を瞑って正常へと意識を戻そうとする。ビクビクと此方に背を向けて、おっかなびっくり扉を閉じようとした。

ああ、でもお嬢さん《フロイライン》。此処で1つ異常者から警告をするとすれば、異常を目撃した者が都合良く日常に戻る事なんて出来はしない。

だって 不公平だろう。最初から闇の中を歩いて居た者は其方に行けないのに、其方側は自由自在に間を行き来出来るなんて事は。

「え？」

だから正常へなんて戻さない。

お前が戻るのはいつもの平和では無く、^{ウヤウヤ}苦痛と共に襲い来る喪失の恐怖《死》。

弾丸が扉をブチ破り、扉の向こうで安堵の息を吐いていたのだろう

少女に命中。

ドサリ、と倒れ伏す音と共にドアの隙間から此方側へドロリとした血液の波が流れて来た。血は掃除するのが大変だぞー、などと人様の苦勞を勝手に嘆いて俺は俺で仕方無く重鎮殿の頭も撃ち抜いて置く。本当ならば命が助かる筈だったと言うのに、可哀そうな人である。でもまつ、運が無いと言うのは俺の専売特許。誰かが苦痛を味わうと言うのはちょっとした優越感に浸れるので凄く良い。具体的に言えば、誰かの不幸に伴った表情を見るのは非常に気分が良い。自分だけだと勘違いしなくて済むからだ。

さて。

扉の向こう側で、まだ息をする可哀そうな少女。

その金色の髪を指で掬い、ヒューヒューと息も絶え絶えに呼吸をする彼女に笑みを向ける。

笑顔とは時として狂喜にも、狂気にも、凶器にもなる。

この時俺が浮かべていた笑顔は何だったか。どれにせよ、碌な物じゃねえのである。

つまり、運が無かったのはお互い様。

此処はお相子と言う事で、お互い要らぬ荷物を背負いましょう。

あ、いや、そっちは背負う事も出来ないか。もう身体は動かない訳ですから。

肺を撃ち抜かれたのだろう少女の胸に、銃口を充てる。

出来る事ならば 俺を恨み殺してくれ、と願いを込めて。

では、いつも通り。その命の重みだけ、俺の背中が請け負いましょう。

剣崎龍二は人殺しである。

殺した数？ 知らない、覚えている暇も無い。

ただ 最初に殺した、無関係の少女の顔だけはいつまで経っても覚えている。

/ D i s c o n n e c t i o n

12月に入って、どれだけ経っただろうか。

少しばかり肌寒くなった今日この頃、龍二はいつもと同じ様にコーヒー片手に部下の訓練へと目を向けていた。

空をビュンビュン飛びまくる姿とか憧れちゃうなー、あんな純粹無垢に飛び回ってみたいなー、無理だけどさー。心の中で悪態を吐きながらもそれを表面にだけは浮かべる事無く、シミュレーターの中を飛ぶセレナに次の命令を下す。

「 A f t e r h a v i n g t u r n e d , I m a k e n
o s e d i v e 」

『 y e s S i r ! 』

鋭い返事。流石だと感心はするが、それにしただって随分とテンションが高いセレナである。

それを別段咎める事も無く、龍二は足を組み直してコーヒーを飲んでた。画面の向こうでBETA相手に素晴らしい立ち回りを演じているセレナなどアウト・オブ・眼中。今の彼の頭の中にあるのは自らの手の中にあるコーヒーにどれだけの砂糖を入れるのかと言う

思考のみであった。

哀れ、セレナ。お前の頑張りは無駄にならないと思うぞ。コンピュータに蓄積されるデータの意味で。龍二にとっては関係の無い事ではあるが。

「嫌な感じだな」

背筋に氷水を流し込まれた様な寒気、そして悪寒。

それを感じた龍二はブルツと大きく身震いして見せた。いつもと何かが違う様な感覚、いつもの自分との差異。そう言えば朝もクリス力に”何かあったのか”と問いかけられて居た事を思い出す。別段何も無かった筈だ。

だが、何と言うか 空気が嫌な感覚を孕んでいると言えば良いのだろうか。

淀んでいる。そう、まさにそれだ。空気が穢れていると言えばピッタリ当て嵌まる。

オドオドとした邪気、ザワザワとした気配。

如何考えてもコレは真つ当な人間が放つべき物では無い。

『少佐、少佐 ツ！！』

「え？ あ、うん。如何した」

素っ頓狂な声を上げる龍二を前に、セレナは大きな溜息を吐いた。吐きたくもなると言う物だ。こんな耳を劈く様な爆音で鳴り響いている警報すら意に介さない、彼の豪胆な精神を前にしてしまえば。

『如何したって……警報ですよ、警報！ 防衛レベル2だって……』

「あ……？」

『何ですか、これ！？ まさかBETAが……ッ！』

「いや、違う」

焦り始めるセレナを諭す様に、龍二が手で制する。

最早いつ起きても可笑しくは無いと思っていた出来事の1つが今や、目前に迫っている。

帝国内で決起軍が反旗を翻したのだ。

即ち 人と人の殺し合い。

龍二にとっては全ての戦いに対する決着でもあり、開幕でもある舞台。

『クーデター』。今その劇場が、堂々と開演したのだった。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

「首相官邸、帝国議事堂共に完全に制圧されました！！」

「帝都周辺の状況は！？ 報告を急がせて！！」

「相良湾沖の米軍第7艦隊以前沈黙！」

「都内の浄水所や電力施設が制圧された……！？　ダメです、新聞社や放送局にも！」

「だったら衛星でも何でも中継しなさい！　何の為のH.Q.!?」

「りよ、了解！」

中央作戦司令室は怒号の嵐で包まれている。

無理も無い。一部の者以外は誰も予測して居なかった帝国軍内部での決起。易々と鎮圧出来る量や質では無い事もそうだが　今回の決起でアメリカが何処までズカズカと入り込んでくるかと言う事にも彼女たちは気を裂かなければならなかった。

「随分と……連中も手際が良い」

「ルートの確保が出来ていたのか、それ程の手勢揃いなのか。どちらにせよ、鎮圧しなければこっちに未来は無いわよ」

「だからこそその紅の姉妹だ。アレなら、十分俺の代役を務められる」

喧騒が沸き起こる中央作戦室の中で、異様な静けさを持つ場。

此処　夕呼と龍二が控える1つ上の段となっている場所である。

そこで椅子に座りながらもモニター内の決起軍へと目を奔らせる夕呼と、地形と陣形や情報を徹底的に頭へと叩き込む龍二の2人が敵の動きを今か今かと待っていた。

そう、待っているのだ。

正式に討伐出来る為のお膳立て、狗の鼻先に置かれた餌の類。鼻息荒く待ち伏せているのは　決起軍等と言う獲物では無い。

龍二を単独、尚且つ”万全”で投入したとしても仕留め切れるか如

何かすら怪しい程に凶悪な敵であるオルタネイティブ？推進派の実働戦力。

殺したくて仕方の無い相手である、剣崎剛。

今回のクーデターは元より、その2つを挫く為に用意されたお膳の様なものだ。

故に 2人は自らの動くべきタイミングを見計らって居るのである。

「それよか、將軍の安否は如何ですか。鎧衣さん」

「殿下の事ならば心配には及ばんよ。それより君も、覚悟を決めたら如何だね」

「覚悟？ 親父を殺す事なら、最初から躊躇う事は」

「口に出して言葉を紡ぐ者程に覚悟とやらは高が知れるぞ」

左近の紡いだ言葉に、龍二が口角を吊り上げる。

気に入ったと言う意味だ。勿論友好的な意味合いでは無い。敵対の意思を多く含んだ恐ろしく獰猛な肉食獣さながらの笑みである。狂笑とでも称すれば良いのだろうか。

笑顔は時として人に牙を剥く。

今の龍二が浮かべる笑顔は、確かにそれを忠実に体言している様だった。

「アイツを殺さなきゃ、俺の人生は終わらない。俺は 始める為に殺す」

「矛盾している様で、筋だけは通している。ああ、確かに君は……」

喉をクツクツと鳴らし、左近は笑う。

確かに君は『剣崎剛の息子だ』と、その後に言葉を続けようと思っていたが今の彼にそれを言う事は自らの命すら惜しんで居ないと言う事に他ならない行為である。

故に言葉を有耶無耶にする事で留めたが、正直な話をすれば左近は2人の激突を今直ぐにでも止めてやりたいと言う人間としての情があった。

食い違いから発生する憎悪、これも所詮はその延長上の戦いの1つ。だが最早剣崎龍二の憎しみは簡単に拭える物では無い。だからこそ、剛は息子と正面から敵対する道を選んだのだ。

“哀れ”

剣崎の家系は、その一言に尽きる。最終的にはこの男ですら

「あ、俺ちよっと部下の様子見て来ます。帝国の子も居ますから」

「篁唯依の事かね？ 君も、些か彼女にご執心だね」

「違いますよ。ただ……あの子には返し切れない借りがあるだけです」

恥かしそうに頬を掻き、龍二は中央作戦室を後にした。

この場で得られる情報はもう何も無い。ならば一刻でも早く、部下たちとのコミュニケーションや自らの不在を伝えなければならぬ。外道だ、と龍二は自らを貶す。この一大事に部下の傍に居てやれない自分を、ただ復讐と言う個人的な理由で人の命すら投げ出す己の屑具合を。それでも

「……………あと、少し」

復讐に燃える心だけは、止まる事を知らなかった。
燃え滾る殺意だけが今の龍二を動かす原動力なのだから。

ジャツカルに与えられた個室に、唯依・クリスカ・イーニア・セレナの4人は集まっていた。千枝は如何やらこの緊急警報の所為でハンガーから呼び出しを食らったのだろう。此方に来るには大幅な遅れが出来ると言う事だった。

都合が良い、のだろうか。彼女が居ると如何にも冷やかな意見が恐ろしい物であるから。

「現段階で榊首相は暗殺され、内閣閣僚も数名が死亡したとされている。この時点で臨時政府は事実上の崩壊。遂には帝都周辺で斯衛もクーデター軍と一戦交えたそうだ」

その言葉に、誰よりも先に唯依が息を呑む。

彼女は生粋からの帝国軍人だ。今回の様な事を頭では否定しながらも、心の何処かでは肯定して居る自分との差異に戸惑っているのだろう。

今はそこに突っ込むつもりは無い。その問題は自分で解決すれば良いのだから。

「現時点での敵勢力数は不明だが、帝都防衛軍や富士教導隊の一派も此方の敵に周る可能性が高いだろう。各々十分に注意し、敵勢力鎮圧に向って欲しい」

「その口振りからすると、お前は何処に行くつもりだ」

「道中のクーデター軍を排除しながら、単機で帝都へ向う。副司令からの特命だ」

「ならば私も　　ッ!」

「唯依を含むお前たちは207の新米たちのケツに付け。本来ならヴァルキリーズと共に共同戦線を張らせる予定だったが、こつちにも色々と都合がある。お前たちは現時点を持って直系指揮下を俺から藤代千枝中尉へ移行する」

「「なっ……!」」

「ちょ、ちょっと待って下さい！　如何言う意味ですか、それ!？」

「セレナ、座れ。此処でお前とギャーギャー喚いている時間はハッキリ言つて、無い」

一気に話し込んだ為、疲れた様に龍二が椅子に腰を降ろす。

それを心配そうに見詰めるイーニアに、龍二はただ申し訳無さそうに微笑んでやる事しか出来なかつた。最早この戦いは　彼女たちを巻き込む訳にはいかない私闘である。

ならばせめて、安全が少しでも保障される207部隊の殿を務めさせてやる事が龍二に出来る最後の配慮でもあつた。

生きて欲しい、彼女たちには。如何しても　死んで欲しくは無い。

「最後に、俺から貴様らに伝える言伝がある」

部隊の面々が抗議の視線をありありと此方へ向ける中、龍二は鎮痛な面持ちで彼女たちの面を見返す。伝達する中で最も重要な事柄の1つ。

それは、『自らが死亡した後の事』

「俺が戦死した場合、貴様らは副司令の命令に従ってA 01の追加要員として」

誰も、そんな話を聞きたい訳では無かった。

剣崎龍二が1人で任務に赴く。そして今回の戦いは共に戦う事が出来ない。

クーデターと言う一大事の中で、特命が出たとなれば彼女たちの心にも不安の影は出る。

だからこそ、彼女たちは龍二の気楽な一言を切望して居たのだ。

「大丈夫」

「安心しろ」

「俺が居るさ」

そんな言葉よりも先に出た、「戦死した場合の処理」

その言葉に誰よりも先に怒りを覚え、龍二の顔面を殴り飛ばしたのは　クリス力だった。

「貴様ああああつ！！！！！！！！！！」

「クリス力！？　ちよつと、ダメだって！！　暴力で訴えるのはアウトだから！」

「戦死した場合だと！？　イーニアに死なないと言つてのけた後にそれか！！　貴様が自分で言った誓いを自らの手で早々に引き千切るつもりか！？」

「……これは任務だ。私情を持ち込む訳にはいかない」

「それがお前の本心か、龍二……ッ！」

悲痛に歪むクリスカの顔。

それを直視しない様に、顔を伏せる龍二。

口の端から垂れた一筋の血筋を手の甲で拭い、地面にへたり込んでいた龍二は徐に腰を上げた。身体に付いた埃を軽く払い除け、困った様な笑顔を浮かべる。

「悪いな。今回は俺でも死ぬかも知れない」

悪びれる事も無く、それだけ呟いて。

龍二はその場へ背を向けた。何も思い残す事は無い、と心に思っ

彼女たちさえ生きていればそれで良い。

そう思える様になった。彼女たちは、それだけ龍二にとって大切な存在なのだ。

自らを犠牲にしても あの笑顔だけは護り抜く。

自らが死ぬ事によってその笑顔を失わせてしまおうと言う事にすら気が付かぬまま、龍二はただ戦いに赴く為に格納庫へと歩を進めるだけであった。

既に仕掛けは終わっております

では目標が指定ポイントへ到達した瞬間、仕掛けを作動させた

まえ

しかし、宜しいのですか？

何がかね？

巻き込まれる者も中には居るかと思いますが……

大を得る為に小の犠牲は付き物だよ。君は指示された通りに動けば良い

「少佐、F?型のスタンバイは終わっています」

「おっつ、サンキュー」

格納庫では既にF?型が出撃を控えている状態で待機して居た。この短期間に此処まで機体のコンディションを持って来る事が出来る頭はやはり一級の腕を持つ最高の技術者である。

「頭、後で美味しい酒でもご馳走しますよ」

「そりゃ有り難い。難儀な仕事ですからね、酒もオチオチ飲めやしない」

油塗れの頬を首に掛けていたタオルで拭いながら、頭は「よっこいしょ」といかにも”おっさん”らしい口調で龍二の隣に腰掛けた。

長い付き合いだからこそ、頭は龍二が何かしらに迷っている事が分かる。だからこそ、彼はこの出来ない息子とも言える上官に気を掛けているのだ。

「また部隊の子と喧嘩かい？」

「いや、まあ……そうかな。喧嘩しちゃったよ」

「何が原因で？」

「今回のクーデターで、俺に特命が来て……俺が死んだ時は夕呼に従え、って」

「そりゃ怒るわ」

「何でえ〜！？ 軍人だからさ、仕方無いだろ？」

「そりゃ男の考えさ。女には、女のやり方や考え方があってのが世の常よ」

「頭には理解出来るのか？」

「仕事一筋で生きて来た俺には理解出来ねえ。まっ、仕事馬鹿はこんなモンさ」

「……俺も馬鹿になりてえな」

「十分馬鹿だろうさ。龍二、おめえは十分馬鹿だ」

「その馬鹿は主に頭腦的な意味だな。頭、少しは上官に気を使って

くれよ」

「冗談じゃねえ、この馬鹿息子」

ゲラゲラと笑って、頭がF?型を見上げる。

堂々と輝く黒のメタリックフレームは、確かに戦場に立つ龍二に酷く似合っていた。

黒獅子。苛烈で凶暴な戦場の時の姿とは違い、日常での龍二はあまりにも幼い。

故に、頭のような年配組は龍二を息子の様に見守り、導こうと日々務めているのだ。

そして

「なあ龍二、この大戦が終わったら」

幸せとは、唐突に終わりを告げる物である。

身体を襲う衝撃、

耳を引き千切るばかりの爆音、

駆け抜ける熱風、

2人の後方で作業をして居た者たちの”肉塊”が、2人の目の先へと飛んで行く。

後ろを振り返る間もなく、頭と龍一は熱風の中にその身を飲み込まれた。

クーデターが火蓋を落とされた瞬間、横浜基地にて原因不明の爆発が発生。

剣崎龍一含む整備班数名が巻き込まれ、現在

“生死不明”

83 12月5日 龍二、死す（後書き）

怒涛過ぎるだろ、この展開……

取り敢えず次回は武視点で12月5日の龍二生死不明までお送りします

207分隊や唯依たちとの衝突にご期待下さいな

上記修正 武視点で龍二生死不明からの話をお送りします

良いのか、主役……死ぬぜ……？

まりもちゃんも……死ぬぜ……？

84 12月5日(2) Wake up! (前書き)

すまん

ありや嘘だb(ゲッ

上記の意味は本編にて

俺あ、死んだのか

ふとした瞬間。

身体を覆う浮遊感と脱力感、そして絶望。死への恐怖。

死にたく無いなどと言う渴望も、望みも、何もかも奪われて行く事に何も感じられない。俺あ死ぬのか。死ぬしかないのか。

そう、死ぬべきなのだ。

今まで殺して来てしまった命の重みを知る為に、自らの命を持って死と言う恐怖を経験すべきなのだ。人を殺したのならいつか報いを受ける日が来る。

覚悟していた。知っていた。

なら諦める。

足掻くな。

迫り来る運命を受け入れる。

それで良いのか？

それで満足なのか？

それで諦めきれぬの？

.....俺あ

この命尽きるまで貴方に尽くすと決めました。

お前が死ぬ時は孤独ひびではない。私が傍そばにいる。きつとずつと一緒にですよ。イヤだと言ってても付いて行きますから。

あれ。

死にたくねえや。

まだまだ死んで良い訳ねえじゃねえか。可愛い部下と相棒残して死んだ日には生き返ったとしても後悔と災難でまた南無三しまいそ
うで恐ろしい。

腕はある。

ならば拳を握り、この痛みに震える身体を支えてやれ。

脚はある。

ならば地を踏み締め、前へ進む為に力を込める。

心臓はある。

ならば 諦める事などせず、意地汚く生きて行け。

「たく……ねえ……」

声を出せ。

声を出せ。

声を出せ。

声を出せ！！ 死にたくないのなら喉を潰す程に声を出して、懇願しろ。

神でも他人でも世界でも、ましてや救助隊でも誰でも無い。自分自身に頭を下げる。

この灼熱の地獄の中を生き抜くだけの体力と精神力を尽きさせるなと、必死になって頭と思いを込めて言葉を紡げ。

然らば、歩むべき道は勝手に自ずと開けてくるのだ。

「死に、たく……ねえッ！」

ジリジリと焼ける肌。バチバチと焦げる肉の臭い。鼻を突き刺す火薬の臭い。
まだまだ、彼に与えられた地獄は始まったばかりである。

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

火災現場から担ぎ込まれた龍二の身体は、燃え盛る火の粉に曝され様とも美しい物だった。彼の身体を護る様に覆い被さった整備班のリーダーが、炎の驚異から龍二の身体を護りきつたのだ。痛みに耐えながらも、龍二一人を護る道を咄嗟に選んだのだ。痛みに耐誰に真似出来ようか。

上官だとは言え、所詮は他人の子。
それを護る為に命を平然と投げ捨てる事など、誰に真似出来ると言
うのだから。

「っ………ありがとうございます」

人生の年配者たる整備班のリーダーに、夕呼は一人感謝の言葉を述
べる。

今は見る影も無く、黒く焼け爛れた一人の死体を前に唇を強く噛み
締め、誓う。死なせない。死なせる訳にはいかないと。
死なせたくない。

まだまだ腐る程に、一緒にやっていかねばならぬ事はあるのだ。それに　この前急に襲われた責任も取って貰わねばならない。やり逃げ程に後味の悪い物は無いのだから。

「担架用意して！　手の空いている者は消火活動！！」

夕呼の号令よりも一瞬素早く、担架を担いだ医療班が直ぐ様に龍二を担架へと移す。

火災現場にて最も恐ろしい物は火である。

だが大抵の火災現場では焼死する事で死に往くのではなく、一酸化炭素中毒で身動きを取れなくされてからジワジワと燃やされて行く事が主である。

そう言う意味合いで言えば現在の龍二の容態は絶望的とも言えた。

密閉された空間で一酸化炭素と炎と言う二重の恐怖に煽られるだけでは無く、精神的にも大人数の部下をこの爆発で失ったダメージは言葉では現しきれない。

立ち直ったとしても、彼に待ち受けるのは　贖罪の気持ちのみ。

「帝国にも医療班の応援を呼びなさい！　最善の状態でコイツの処置に持って行くわ！」

それでも尚　香月夕呼は龍二の治療を望んだ。

折れた両手足を叩き起こす為に、変わりの両手足を繋ぎとめる道を選んだのだ。それがどれだけ本人から恨まれる結果に繋がったとしても彼女は『自らの道』を歩むことを止める訳にはいかない。それは何よりも、今眠っている龍二との約束を果たす為なのだ。

『人類に勝利を導く』

『誰も泣かせない』

そう大見得を切った。夕呼は、そう言い切って見せた。だからこそ龍二は夕呼と共に歩む道を選ぶ。共に歩み、共に助け合い、共に朽ち果てる道を選んだ。生涯と自らの人生を尽くす絶対的守護者としての道を進む事に決めたのだから。

死なせない。

それは基地全体の意思なのか、それとも日本国民全員の意思なのか。

「ダメです、心停止!!」

「アドレナリン注射しろ！ バソプレシン1？用意！」

「電気ショック用意出来ました！」

「連れ戻せ、何としても連れ戻せ！ この人を此処で亡くす訳にはいかんぞ!!」

真っ黒に焼けた制服を破り捨て、乳頭と乳頭の間 丁度身体の中 心部分へと電気ショックが送り込まれる。その度に大きく揺れる身体。

変わらず0と言う無常な数字を映し続ける心電図。

剣崎龍二の生命活動停止。それは その場に居合わせてしまった 唯依の精神に多大なる負荷を齎す。ただ、彼女の脳内ではそれを処理しきる事は出来なかった。

蘇生法を試し、何とか蘇生を試みるも心電図は変わらずのまま。

嘘だ、と。

有り得ない、と。

彼女は胸の内で呟く。こんな事は有り得ない、今直ぐ何事も無かった様に起き上がるのが剣崎龍二ではないのか？

“死んだ”

医療班の蘇生も虚しく、その場にいた国連軍と帝国軍の兵士達の見守る中で

英雄がその短い生涯に幕を下ろす。

黒い獅子の眼が開かれる事は無く、此処に生涯の終わりを迎えた事を辺りに知らしめた。

12月5日

今日この日

剣崎龍二が、死んだ。

同時刻

その頃の207は個室にて待機が命じられていた。

「さっきの爆発って……やっぱり、決起軍がもう此処にまで
？」

「決起軍が此処に来た訳じゃ無いわ。今は待機よ」

委員長の号令を聞くまでも無く、オレ達は耐え忍ぶしか無い。

それに、今一番辛いのは委員長の筈なのだ。

親父さんを殺され、それでも部隊長として隊を率いなければいけない。それはかなり、いや凄く辛い筈だ。

そんな委員長が耐え忍んでいる時にオレが取り乱す訳にはいかない。

「みんなあ、大変だよっ!!」

そんな中、207が待機する小部屋へと血相を変えた美琴がドアをブチ抜きかねない勢いで入室した。ゲホゲホと咳き込み、何とか息を整えて部屋の中にいる仲間たちの顔を見渡す。

その表情　あまりの戸惑いと焦りに、武は僅かばかりの不安を覚えた。

「如何したの、鎧衣さん……？」

「そ、それが、さっきの爆発で少佐が……っ」

一端言葉をそこで止め、深く息を吸う。

武たちは美琴の次の言葉を待つことしか出来なかった。龍二の身に何が起きたのか、一体先ほどの爆発で何が起こったのか。それを知りたかったのだから。

「……剣崎少佐が死んじゃった」

言葉の意味など必要ない。

最早その言葉に意味など無く、残された結果だけを反復する様に耳へと入れるのみ。

武は、自らを支えてくれた上官の顔を思い出した。

冥夜は、自らの背を押してくれた父親の様な彼の笑みを思い出した。

慧は 憎んでいた筈の男の死に、明らかな動揺を隠し切れない自分に動揺していた。

「死んだって……如何して!? 医療班は!」

「間に合わなかったみたいで……で、でもっ、まだ医療班は諦めていないみたいだから」

諦めなければ、結果が出る訳ではない。

それを知っているからこそ、慧の足は自然と火災現場の方へと駆け出していた。

此処で龍二に死なれる。

それが堪らなく嫌なのだ。嫌いだ、憎い、殺してやりたい。だが、こんな事でアツサリ死ぬなんて事だけは絶対に許容出来ない。

まだ何も成し遂げずに、父の後を追わせるなんて事は絶対に許さない。

「彩峰!？」

冥夜の制止の声。

知らない。聞こえない。

慧の足は最早誰をも寄せ付けない俊足へとランクアップし、今も轟々と燃え滾る火災現場へとその足を向かわせていた。

誰も彼女を制止する者はいない。

火災現場。

放水活動を続ける人々とは別に一箇所に大人数が集まり、まるで祈る様に手を合わせている場所があった。そこには国連だけではなく、あの帝国軍の姿すら見える。

お願いします、とか。

助けて下さい、とか。

何かに縋る様に呟く人々の横顔を振り切りながら、慧はズイズイとその人混みを掻き分けていく。やはりと言うべきか、彼女の目的の人物は人混みの中心地に居た。

少々の火傷を負おうが、決して色褪せない白髪。

剣崎龍二の身体は健在である。ならば何故　目を開ける事は無いのだろうか。

彼の手を握り、ポロポロと涙を流す少女がいた。

信じられない物を見る様に、膝から崩れ落ちて放心している副司令。必死に何度も何度も蘇生活動を繰り返す医療スタッフの努力を、慧は冷めた目で見詰める事しか出来ない。最早無駄だと、顔が悟っているのだから。

「……退いて」

手を握り締めていた少女を軽く押し退け、慧は龍二の隣に膝を付いた。

やはり起きない。

呼吸停止、心配停止。確かに死んでいる。

“許可無く、死んでいる”

「勝手に死ぬな　……ッ！！！！！！！！！！」

ゴウンツ。

バウンドする龍二の身体。

ただし、電気ショックを流した訳では決して無い。彩峰慧の振り上げた握り拳が、彼の心臓のある左胸へと向かって一直線に振り下ろされたのだ。

まさしく粉碎の一撃。トール・ハンマー

肋骨を叩き割るのでは無かろうかと言う一撃を受けた龍二の身体が大きく跳ね上がり、その凶行を傍で見つめていた唯依は彩峰に直ぐ様殴り掛かった。
拳が、慧の顔面を射抜く。

「貴様……貴様あつ!」

拳の衝撃にて倒れこみそうになる身体を支え、次の二発目を掌で受け止める。

ギリギリと顎税合いの様に睨み合う唯依と慧の両者。

死者に　それも自分の愛する相手に鞭を打つと言う慧の凶行は、唯依にとっては逆鱗に触れるクソツタレな行為と同義であった。許せない。有り得ない。

「……泣き虫」

「黙れ!!　貴様に何が分かる……貴様に、私と彼の時間が分かるのか!？」

「知らない。興味も無い」

激昂する唯依とは相反し、興味無さ気に唯依では無く龍二を見詰める慧。

誰もが唯依を止めようとしていた。

大きく振り被られる拳のモーション。訓練兵が相手とは言え、此処で手を上げる事は大衆へのモチベーションや指揮にすら影響する可能性だつてある。

だからこそ、夕呼は2名のバカ騒ぎを止めようと声を荒げようとした。

最早死んだ男の事をこれ以上思っている　そう、自分の中に結

「一時的な後遺症でしょう……大丈夫、直ぐに良くなる筈ですから。それよりも肋骨は痛みませんか？ 何か不備があれば直ぐにでも……」

「？」

「あ、ああ、いえ、此方の話です、此方の！」

とは言え、やはり十全と言う訳にはいかなかったらしい。

一時的な後遺症の所為で、現在龍二は暫くの間喋る事が出来ないと
言う事だ。

今回の任務では単機行動なので仲間内が居ないと言う事が不幸中の
幸いだが、上官に何か通達する事は億劫になるかも知れない。

まあ、それも

「このバカッ！ アホッ！ 木偶の坊！ 死ぬなら死ぬ、この大馬
鹿！！！」

「！？」

夕呼が涙を堪えながら何度も何度も龍二の頭を殴る。

唯依が涙を流しながらも、龍二の胸で心臓の鼓動を確かめる様に耳
を当てる。

生きていた。

龍二は、生きていた。

奇しくもそれは 彼を憎む少女の力によって、ではあったが。

「貸し、一つ」

「……(グッ)」

慧の言葉に、龍二は仏頂面にてサムズアップを決めてみせた。
任せろ、と。

このクーデターの首謀者の事を含めて、全てを背負う覚悟を龍二は
此処に決める。

F?型は先ほどの爆発にて半壊したのが痛いことこの上無いが、ま
だ戦えない訳では無い。まだまだ剣崎龍二は健在なのだ。

『ビシッ!』(帝都へと向けて指を向ける龍二の図)

待っている、悠陽。

必ずこの馬鹿な戦いを終わらせてみせるからな。

「カツコよく決めているところ悪いけど 起きたならサッサと仕
度しろ!」

「!?(コクコクコクッ!!!)」

取り敢えず、12月5日に剣崎龍二が死亡したと言ったが……

すまん。

ありや嘘だ。

85 12月5日(3)

死ぬな!! (前書き)

風邪を…ひきました

体調管理が疎かだった所為でしょうね……アホらしい

取り敢えず、お待たせしました

クーデター編です

85 12月5日(3)

死ぬな!!

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

白一色の強化装備。

それは黒を好む龍二からすれば異色とも言える色だった。純白、純潔、清廉潔白を示す様な白。医者や教師など『白の正義』を掲げる者達と同じ色。

そんな物は自分に似合わない。

だからこそ、その真逆である黒を好んでいた龍二からすれば異例とも言える事態。

だが、今回は国連軍として戦うのではない。

帝国の、それもある意味では私情すら持ち込んだ戦い故に黒の強化装備を着込む訳にはいかない。アレは英雄としての剣崎龍二が着込むべき物なのだから。

歩む先に鎮座された銀の武御雷。

帝国軍でも無く、ましてや国連軍の為でも無い。ただ剣崎龍二の為だけに奉仕する事を義務付けられた、彼を案ずる悠陽から送られた専用の1機。

触る事は無いと思っていた。

これに乗ると言う事は、日本”だけ”を護ると言う束縛の証。それだけは認可出来ない。

助けたい人々は、世界中の至る処に居るのだから。

銀の閃光がキラリと輝き、そのシルバーのフレームに腕がピタリと触れる。ひんやりと冷たい装甲板を軽く撫でると、この機体を整備していた人々の顔が思い浮かぶ。

頭、俺は……

自らの上に覆いかぶさった、あの男の事を思い出す。

まだまだ話したい事も、やりたい事もあった。

だと言うのに頭は死んだ。真っ黒に焦げ付いて、二度と喋る事は無くなってしまった。

こんな俺の為に命を捨てたと言う事実が、我慢ならない。

こんな世界の為に命を投げ売ったと言う現実が、洒落にならない。

俺は、誰かを殺してまで生きようとは ツ！！

……やめよう。この慟哭は無意味だ。

『 剣崎少佐、至急作戦司令室までお越し下さい。繰り返します、剣崎少佐は至急 』

呼ばれている。

殺せ、と。殺し尽くせ、と。

俺の仲間を殺したクソ野郎共を殺し尽くせと神様が俺に言っている。

ああ行かなきゃ。

殺さなきゃ。

たくさん殺さなきゃ。

たくさんころさなきゃ。

そんな調子でノロノロと歩み、向かった先は地下に備えてある中央作戦室。

既に整列していた唯依たちに視線を向ける事は無く、龍二は疲れたと言わんばかりに壁へと背中を預けて瞑想を始めてしまった。

「全員揃ったみたいね」

その龍二の後に登場したのは夕呼である。

彼女の言葉に反応する様に、その場を集まっていた全ての衛士が即座に敬礼を返した。

伊隅ヴァルキリーズ。伊隅大尉以下9名。

207分隊。神宮寺軍曹以下6名。

チーム・ジャツカル。剣崎少佐以下5名。

火災現場にて事故に会い、それでも尚すぐ様復帰する龍二にヴァルキリーズや207分隊の一部（武とまりも）からは凄まじい抗議を浴びたが、その全てを夕呼が黙らせる。

現時点でこの全員を無事に生かす為には龍二の手は確実に必要なであろう。

白の強化装備に身を包んだ龍二は何か行動を起こす訳でも無く、ただ壁に背を預けていた。此処まで来れば人と話す事など無い、そう勝手に決め付ける様に。

その無言の重圧が辺りに重く押し掛かる。

存在するだけで侵食する恐怖。それは結果的に毒素の様な物だろう。

「207が此処に居る事は、別に説明は要らないわね？ 使えるから使う。それだけだから」

夕呼のあまりに唯我独尊な言動にまりもは顔を歪めたが、それを突っ込むべき存在である龍二は口を開こうとはしない。我関せず、と言った言葉がピツタリだった。

口に啜えられた煙草にも、今は火が付けられてはいない。

そんな龍二を気にする事無く、夕呼は簡潔にこの横浜基地が米軍の受け入れる甲斐を説明した。事態の収拾には流石に帝国と国連だけでは手を焼くとの事で、渋々ながらも米軍の介入を承諾したとの事だと言つ。

正確に言えばもう少し別の理由があるのだが　ある意味でその当事者になる龍二は未だに口を閉ざしたままなのである。

誰も何があるのか、などと命捨てる覚悟で突貫するつもりにはなれなかった。

「それと、首相官邸で起こった事だけど　」

手元にあつた資料をチラリと流し見、興味無さ気に首を振る。

その意味する事は結局、誰よりも先に榊自身が理解してしまつた。

「榊首相を含む閣僚数名は既に暗殺されたとの情報が入っています」

夕呼の言葉を受け継ぐ様に、ピアティフが情報を伝達する。

誰よりも動揺したのは榊、そして次点に彩峰。衝撃を受けたと言つ意味合いでは武も同程度ではあつたのかも知れない。が、龍二にとつては如何でも良い事なのである。

それが天命だと、割り切るしか無いのだから。

「今回の作戦で207分隊には篁中尉、ビヤーチエノワ少尉、シエスチナ少尉、エニックス少尉を随伴機として。管制には藤代中尉を付ける事になります。何か意見はありでしょうか？」

「部隊全員！？　で、では少佐の随伴機は　」

「無しね。コイツには単機で動いて貰うわ」

「そんな！ 先ほど事故にあつたばかりで急な復帰を強いられた拳
句、単機で戦闘など許容出来ません！ せめて誰か随伴機を付けて
頂く訳にはいかないのですか！？」

「これは命令よ、簞。アンタはアツチ。コイツはコツチ」

龍二の処遇に真つ先に噛み付いたのは唯依である。

有り得ない、そう言わんばかりに夕呼に詰め寄るがそれもアツサリ
と流されてしまった。

復帰と同時に単機での任務遂行など確かに真つ当たとは思ひ辛い。
だがこれが出る人材が彼しかないとなれば夕呼は常識など平然
と投げ捨てる。

それは龍二も同じであろう。

夕呼の要請に反論など唱える事無く、当たり前如く煙草に火を付
けていた。今の彼にとって一番重要な事は誰が如何だとか言う下ら
ない話では無く、何処に誰がいて、誰なら殺しても構わないのか。
それだけの事なのだ。

「副司令、通信をキャッチしました」

「モニターに繋いで」

夕呼の号令の下、パイティフ中尉が直ぐ様にモニターへと通信をス
イッチさせる。

発信源は 不明。

だが、この場で大規模な通信を行うバカなど最早誰の頭にも過ぎつ
ている。

それは決起軍だ。

『親愛なる国民の皆様、私は帝国本土防衛軍帝都守備連隊所属。

沙霧尚哉大尉であります』

クーデター軍の首謀者。

人類対人類と言う馬鹿げた戦いの幕開けの1人。

そして、龍二にとつても浅からぬ縁を持つ男の1人。友、と呼ばれた数少ない者。

白の軍服が此処では何の因果か龍二と同色である。

目指すべき先は『調停』。だが、振り返る2人は鬭争の道を辿る事を選んだ。

故に相容れぬ。相容れる事は永久に無いと知る。

その当の本人である龍二だったが、興味の対象としても捉えずに啜えた煙草をプカプカと吹かしていた。『勝手に抜かせ』。表情のみがそう語っている。

無論、彼の部下の中には彼の態度とは正反対の物を見せる者だって居た。

その例たる1人が唯依だ。

沙霧の声明に終始無言ではあるが、額には青筋すら浮かばせている始末である。

無理も無い。誇りやら何やら、『義』を重んじる彼女からすれば沙霧の内容は到底我慢ならん事の筈だ。その証拠に憎き敵を睨む様に沙霧へとドスの利いた睨みを利かせている。

そして この場で浮いているのはある意味ではクリスカとイーニア、そしてセレナたち外人3人組だろう。

沙霧の言っている『義』や『誇り』など到底彼女たちには理解出来ず、ただBETAと戦うべき戦力を対人戦に向けるバカな男としか見る事など出来やしない。

結局 テメエの汚点はテメエで拭うしか無いのだ。

「ピアティフ、映像消して。これ以上聞いても無駄だから」

そろそろ頃合と見たのか、夕呼はピアティフ中尉に映像を消す事を命じる。

闘争本能を煽ると言う意味合いでは、これ以上は無駄でしか無いのだ。

現に唯依は怒りの頂点。

龍二に至っては 既に敵対する勢力の皆殺ししか考えてはいない。

「それじゃ、各自出撃の用意をなさい。それから龍二、アンタは待機よ」

「……フンッ」

声が出ないと言う事で、鼻を鳴らす事で返事を返す龍二。

とは言え、不機嫌そうな面で鼻を鳴らすと言う時点で中々に相手を虚仮にしている態度ではあるがそこは最早龍二の成せるクオリティと言う始末である。

「はいつ、じゃあ解散ね。まりも、アンタは確り教え子の面倒見なさいよ」

「はっ、了解しました!!」

夕呼の解散の一声で各自が中央作戦室を後にする中、イーニアの寂し気な瞳が龍二を静かに見詰める。だが、視線を向けられている本人はそれに気付く事も無く

ただ無然とした態度で黒くノイズの走ったモニターへと目を向けていた。

「アンタに残って貰った理由だけどね、後継機の事もあるけどもう一つだけあるのよ」

「……？」

「藤代が沙霧を探しに向かったわ」

「ッ！？」

夕呼の突如としてのカミングアウトに、龍二はその両目を目一杯に見開いた。

敵の、それも総統の下へ向かうなど自殺行為も甚だしい。

その事實は、冷徹な心を取り繕おうとしていた龍二に大幅な痛手と動揺を与える事に成功した。いや、してしまったと言うべきか。

「アンタの理解者はやっぱアイツね。決起軍の親元の処に行ったみたいよ」

ガンッ、と衝撃音が辺りを揺らす。

夕呼の胸倉を掴み上げた龍二がその線の細い身体を一切の躊躇い無く壁へと叩き付けたのだ。鍛え上げた相手ならばいざ知らず、技術畑出身の夕呼に身体を襲う衝撃に耐える事の出来る程の耐久性は無い。

突然のショックに、何度も大きく咳き込んだ。

「ッ！ー！」

「何故止めなかったのか、ってツラね。止められる筈ないでしょ。何事も”死ぬ気”でやるうとしてしているヤツには準備もなしに勝てないのよ。だってそうじゃない？ アイツは自分の命を賭けて、物事を成し遂げようとしている。命より重い準備ってあるのかしらね」

「っ……………！！！」

今の龍二のツラを、千枝が見たならば何と云うだろうか。

夕呼は離された胸元を治しながら、ふとそんな事を思い浮かべた。横合いからハンマーか何かで殴られた様なツラを見せた龍二は、明らかに動揺している。更には声すら出せないのだから尚の事に性質が悪い。

また死ぬのか

また死なせるのか？！

“死”。

そのブロックワードが、龍二の怒りに油を注ぐ。

完全燃烧していた筈の炎に更に投与された燃料は毒でしか無く、龍二の自らの”敵”に対する怒りと憎悪、そして父親に向けられる殺意は限界を容易く突破した。

最後の防波堤。

それは理性。

それすら決壊し、止められる物など何も無い。

今や剣崎龍二は基地を飛び出せば、1匹の獣の如く暴れ狂うだろう。それこそ因縁など関係無く、餌を狩るだけの悲しき性を背負った野獣の様に。

「……っ」

切羽詰ったのならば、後は簡単だ。今回に限って言えば龍二はある意味で『副司令権限』と言う後ろ盾がある。

わざわざ発破を掛けたのだから、誰かの制止など聞く事も無く戦場へと向かうだろう。

それも帝都へと 真っ直ぐに。

中央作戦室を早足で後にする龍二の背中を見送り、夕呼は力無く地面へとへたり込んだ。

「……これで良いのよね、藤代……」

「 私はこれより帝都へ向かいます」

「 帝都！？ 如何言うつもりよ、アンタ！ あそこは渦中の 」

「 あの人が向かうよりは何倍も良い……今の少佐では、きっとお父様を……」

「 それがアイツの悲願よ？ それを邪魔するのは部下として如何なのかしら」

「 私は部下としてでは無く、藤代千枝として此処に居ます」

「 ……何が言いたいの？」

「 彼を護るなら、死んだって良い。だから力を貸して下さい」

「無茶、よねえ……」

本来ならば龍二の行くべきだった筈の帝都　剣崎剛への強襲作戦。
それを千枝は、それこそ戦術機と言つ兵器すら持たずに行つと言つ
のだ。

たった1人の男の、『人』としての尊厳を護る為に。
アイツは自分の死すら厭わないと言つてのけた。

「敵わないわ……藤代、今回はアンタの勝ちよ」

物の見事に成功した藤代の策略。

それは対価として　あまりにも大き過ぎる”命”と言つ贄を必要
としていたが。

白の強化装備。

あまりにも荒々しく尖れた両の瞳。

この場に用は無いとばかりに誰とも会話せずに武御雷へと乗り込ん
だ龍二は、そのまま黙々と機体のチェックを始めた。

それに驚いたのは今から出撃をする事になっている、ヴァルキリー
ズたちである。

「……確か、少佐は単機で任務では……」

「事情が変わったのよ」

「ふ、副司令！？ け、敬礼ッ！！」

「止してよね、そう言うの。堅苦しいのは嫌いなのよ」

ヒョッコリと顔を覗かせた夕呼の姿に動揺を見せた伊隅ではあったが、直ぐ様にその動揺を押し殺して軍人としての顔を表へと出して見せた。

これだから 伊隅みちるは優秀なのだ。

こう言った面では感情を殺し切れない龍二に比べれば、何倍も。

「アイツへの任務はキャンセル。新しい任務はA 01の援護だから、上手く使って」

「う、上手く使えと申されましても……」

「そう言えば一時的な声帯障害だったけ？ まあ言いたい事言えば向こうも理解するわよ」

それだけ告げて背を向ける夕呼だったが、もう一度伊隅へと向き直ると銀の武御雷へと指先を向けた。それに首を傾げる伊隅ではあったが、夕呼の意図する事は1つだけである。

『アイツを頼む』

つまりはそう言う事なのだ。

何処まで行こうが。結局は心配性な友人なのだ。香月夕呼と言う人物は。

「全員集合！！ これより今回の任務の概要を」

それを汲み取ってなのか、伊隅は部下たちを集めてもう一度作戦の概要を説明する事にした。少しでも長く生き抜く為に。この戦いを生き残る為に。死にたくない。殺させはしない。その思いは、誰だって 同じなのだから。

今から俺が赴く場所は敵陣の中央。求めている『標的』からは、あまりにも懸け離れた場所にあるその場所。

正直 これが良いのか、と迷ってはいる。軍人として、何よりも母さんの子として、俺は今一人の悪を取り逃がそうとしている。

良いのか？ これは本当に正しいのか？
……分からない。
何も、今の俺には分かりはしない。

「あー、少佐……？」

「!？」

「お、お久しぶりです！」

いつの間にか、考え込んだままなのか。武御雷の中で黙々と考え事をブツ続けていた俺の処へ、茜がその顔を覗かせた。

強化装備　　そうか。彼女の実戦はコレが初めてになるのか。
運が悪い。

よりもよって、最初に銃を向ける相手が人間になるとは思いもし
なかつただろう。

「下でお姉ちゃ……じゃなくて、涼宮中尉が全体ブリーフィングを
しますから降りて来て下さい。一応、大尉が少佐のポジションとか
も考えたらしくて」

……そつか。

敵中央に切り込むって事は、必然的にヴァルキリーズとも行動を共
にする訳か。

そんな事も思い浮かばなかったのか？

ハハッ、惨めだなー。

……ホント、惨めだよな。

「つて、ちよつ、少佐!？」

考え付いたら即行動。

それが俺だ。

それが剣崎龍二だ。

復讐？　憎悪？　殺意？　冗談じゃねえ、アホらしい。落ち着けよ、

バカ野郎が。

今のテムエには何がある。

今のテムエを此処まで支えて来た物は何だ。

仲間だろ？

家族だろ？

唯依と、クリスカと、イーニアと、セレナと、千枝が居たからこそ

「我々も後方より援護を」

ズギヤーンッ！！（演出的な効果音

ま、間に合ったか？！

あれ？ 何だよ、皆まるで動物園の珍しい物でも見るみたいに。

つうか神宮寺。お前もその信じられないみたいな目は止めなさい。決るぞ。

あー、違う。そうじゃない。

取り敢えず少年たちの後ろ、何だか暗い顔で作戦の概要に耳を傾けていた唯依たちを発見した。君たちが俺の目的な訳ですよ。

神宮寺が説明の為に事細かく言葉を書き連ねていたホワイトボードを裏返し、そこにデカデカと文字を書き連ねる。

時間がねえつつうのに、喋る事が出来ない自分のハンディが煩わしい。

ガンッ！（ホワイトボードを殴る音

スパンッ！（ホワイトボードを叩く音

ビシッ！（この場に居る全員へと指を向ける

伝えたからな。

伝えたぞ。

あつ、バカッ！ イーニア、泣くなよ！？ 俺もっ時間ねえから、

慰められねえし……

あれ！？ クリスカさん、その手のシッシって何気に酷くないですか！？

何だよおっ、良いよ。

帰るよ。

「つたく、人の好意まで無駄にしゃがってよお……」

「少佐！！」

「？」

「任せて下さい。私が、必ず守り抜きますから」

去り際、神宮寺が俺へと声を掛けた。

その顔は何処か吹っ切れた様で、何故かは知らんがやけに満足気である。

「如何した？ 何かあったのか？」

「まっ、今はそれより任務だろ。早く千枝も探しに行かねえと。」

軽く右手を挙げて、俺は行きと同じ様に全力でその場を後にした。

「えぐっ、ひぐっ……りゅうじっ、もどった……いつ、もの、りゅうじ……」

「うん。そうだね。もう大丈夫……きつと私たちを護ってくれるよ」

「いやー驚きましたね。さっきまでの沈黙が嘘みたいですよ」

「ふふっ。龍二さんらしい……」

龍二の部下4名。

ホワイトボードに書かれた乱雑な文字を見て、安心にも似た感情を吐露する。

「漸く 黒獅子としての『誇り』が戻って来た様だ。」

「殺意でも無く、激情でも無く、ただ”護る”と言う願いがあから」

こそ剣崎龍二は誰よりも強く気高い獅子として君臨するのだ。

『俺は死なん！ お前らも死ぬな！！』

ホワイトボードに書かれたその文字。

207 武たち、訓練兵メンバーもその文字を見てクスクスと笑みを零した。

彼ならばやってくれそうな気がするのだ。

このクーデター！。

誰も失くす事など無く、笑顔を携えて終わらせる事が出来る様な気がしてしまう。

それはやはり、

剣崎龍二が『英雄』だからだろう。

85 12月5日(3)

死ぬな!! (後書き)

因みに龍二の乗っている武御雷は以前募集した機体の名前『雷牙』
になります

正式に命名されるのはもう暫く後ですが、そう言うことでーっ……

あっ、ご意見ご感想お待ちしております

……っーあー

86 12月5日(4)

嫌な"センパイ" (前書き)

……書くの遅いですね、私

一瞬にして目の前に現れ、私の駆っていた撃震の四肢を全て切り落とした武御雷

あれは何だったのだろうか

今にして思えば、あの武御雷は私たちに訴えていたのかも知れない人間同士で戦う事の愚かさを

無益な戦いで流れる命の尊さを

私たちは、結局最後まで彼の言葉に耳を貸さなかった

盲目的なまでに日本と言う国の為に命を賭け、戦い、傷付き、倒れていく

それで良いと思っていた

“私たち”は

《投降しろ、悪い様にはしない!!》

《誰が貴様らの言葉などに従うか！ 日本の面汚し共が……ッ!》

達磨へと変貌した私の機体を取り囲む、3機の不知火。

全てが国連カラーで統一されており、先程まで共に戦っていた同志は全て 死んだ。

悔しかった。

恥かかった。

何も変えられずに死ぬ事が、生き恥を曝すかも知れないと言う事が。だから抵抗は無い。私の腕は真っ直ぐに自決装置へと向かって行く。後悔など無い。

“バカか、貴様”

そんな私のウィンドウに、突如としてその文字が現れたのだ。

国連軍からの、文書？

何故私にこんな文が…… その時の私はその文に随分と困惑を抱いていた物である。

”死ぬくらいなら出て来るな。根性無しが”

文書からでも伝わって来る程に憎々し気で皮肉気な口調。

この文の送り主は、散々私たちの部隊を甚振った武御雷の衛士からだった。

どうやら喋る事が出来ないらしい。故に、こうして文書でわざわざ此方へと自身の意思を伝えているのだろう。

《き、貴様…… ツ！貴様の様な輩が居るから日本は ツ》

”日本を腐らせているのは他の誰でもねえ。『俺たち』だろうが。なあ新米、お前たちにはまだまだ未来がある。此処で死ぬには早過ぎやしねえか？”

《国すら救えぬ命など有ろうと無かろうと同じ事だ！！》

”国、国、国。どいつもこいつも国ばかり。クソツタレ、バカだろ”

目の前に佇んでいた武御雷が此方へと悠然と歩み寄った。

スラリと伸びた刃の切っ先を此方へと向け、その爛々と光る凶悪な瞳が私を射抜く。

酷く恐ろしく感じる。

が、同時に何処か空ろな安心感がある。

” 国じゃねえ、テメエの意味だ。俺がテメエに問うのは生きる意志だ。此処で何も成し得ないまま犬死するのがテメエの運命か？
違えだろ。購えよ”

” 『 生きたい 』 って言葉は、案外と正直な物だぜ？ ”

生きたい

生きたい

生きたかった

でも、私には……こんな生き方しか無いから

やっぱりアンタの言葉は 受け止めきれないよ

M u v - L u v C o n d i t i o n - R e d o f h u m a n

閃光。

次に来る、爆発。

装甲板を叩く金属の軽快な音の、あまりにも軽い事に龍二は苦笑を漏らすしか無い。

命を賭けて行った事が、結局はこの程度の事なのか。惨めだ。死んで逝く者が惨め過ぎる。

《……あたしたちの仕事は慈善活動じゃないわ。次行くわよ》

分かっているともし。

水月のキツパリとした言葉に何か返す事も無く、龍二は武御雷を反転させた。

もう何人死んだだろうか。

数える事すら、今は億劫なだけである。

爆煙の中から機体を露にした龍二の武御雷のカメラアイから流れる、一筋の跡。

結露して大量の水滴が現れたのか。

敵の機体に積み込まれていたオイルか何かの液体を浴びたのか。

最初こそそう考え様と思っていた。

がしかし、あまりにも不自然だろう。何故目の下にしか跡が無いのか。

原因すら分からない不思議な出来事。

銀の鎧武者は明らかに慟哭していた。

それは世界が産んだ奇跡なのか、それとも鎧武者の意思なのか。

どちらにせよ、水月はその光景を忘れる事は無いだろう。

だが、水月にとってのそれはある意味で別段気になる事ではありはしない。

隣で戦う男は涙など流さず、淡々と敵を切り倒している。
ならば 此方も女々しい事を言っている暇も余裕も何もありません。
無いのだ。

《前方に4機！ 蹴散らして行くわよッ！！》

《 ！ 》

弾かれた様に武御雷が動いた。

弦を力一杯引き絞り、飛び抜けた光臨の如き矢の一撃は躊躇無く敵の顎を引き千切る。

弾丸の様な加速力から振り被られた刀による一閃。

躊躇無く振り下ろされた一撃にて1人が絶命する光景は、一刀一殺と呼ぶに相応しい。

二撃目。

敵の反応すら許さず、力を込めた渾身の一撃が胸を軽やかに薙ぎ払って行く。

振り返るオイルが美しい刀身を汚すが、直ぐ様それを振り払った武御雷の刃に汚れが残ることは無い。そこには美しい銀の装甲を掲げた一機の鎧武者が写るのみである。

《……また人間、か》

水月の哀れみとも取れる、静かな独白。

それを受けて龍二も何とも居た堪れない気持ちを顔に出してしまった。

本来ならば戦うべきでは無い自分たちが戦うしか無い現状。何と馬鹿馬鹿しい事だろう。

それでも戦う。

理由はいつだって、くだらない権利とか利害とかそんな事しかあり

はしない。

ああ 本当に救い様が無い。

《……？》

リーダーに反応が出る。

数は…… 5機程度か。小隊規模の機影を確認し、龍二はふと自分の部下たちの事を思い起こした。彼女らは現在207の護衛に付いて貰っている筈だ。

それに、あの子たちの実力ならきつと無事だと確信出来る俺が居る。今は信じよう。

俺も、俺にしか出来ない事を今は全力でやって行けば良いだけの事だ。

《って、何よ。大尉たちじゃない》

臨戦態勢を取っていた水月が拍子抜けした様に銃器を下げる。

リーダーに映った機影、それは如何やら伊隅たちの物である様だ。助かった、連戦は流石に辛い物がある。俺も歳だからな。

《合流するわよ。延々と狩り続けるのも良いけど、そろそろ潮時だし》

《》

了承の意を伝える様にサインを送ろうと武御雷の右腕を上げた時、ふと何か違和感を覚えた。誰かに見られている様な、そんな違和感。

監視？ 何の為に。

相手はヴァルキリーズ？ それとも、俺？

どちらにせよ……此処で行動を起こすのは得策じゃ無いと言う事か。

《どうかした？》

《……》

網膜に投影された水月が首を傾げるが、特に問題は無いと首を振って伝える。

神経質になり過ぎている、と言う節もある。慎重に行動してもバチは当たらないだろう。

精々、奴さんは自分の仕事を果たせば良い。

水月の不知火の後に続く様に武御雷が動き、翻弄するかの様に不規則な軌道を見せる。

それは挑発。

出来るなら、やってみると言う挑戦。

“俺に勝てるのなら掛かって来い”

そう語るかの様に

《来るぞ》

伊隅と合流後、直ぐ様に防衛の為に決起軍と戦う事が決定した。

新人 茜たちは、初陣が人間だと言う事にやはり戸惑いを隠せない様である。

当然だ。

このクソ面倒な時期に人間と戦う？ 冗談じゃ無い。そんな事をしたい訳じゃ無い。

俺たちの敵はBETAだと言うのに、人は いつだって欲深い。だけど戦わなきゃ死ぬと言うのだから性質が悪い。

まったく……何だって戦争つつうのは無くならないのだろうか。

『大丈夫か？』

静かな新人たちへと文書を送る。

網膜投影と共に彼女たちへと送られる俺の意思を読み、漸く彼女たちの顔に色濃い戸惑いと”恐怖”が見えた。

それは 誰かの悲しみを作ってしまうかも知れないと言う恐れ。

『お前たちは後ろに居る。俺とアイツらで片付けられる』

《で、ですが……！》

『お前たちには次がある。此処で死ぬのも馬鹿らしいぞ』

茜の反論を切り捨て、通信を切る。

我ながら随分と大胆な話をする物だ。この戦いを”馬鹿らしい”で切り捨てるとは……

案外、俺も怒り心頭なのかも知れん。

沙霧でも、

決起軍でも、

反？勢力でも、

親父でも無い。

あまりにも不甲斐無い自分と言う存在に、俺自身が見限りを付けているのだろう。

……敵が来る。
帝国防衛軍。今まで国を護つて来た英傑揃いの特殊部隊の様な連中。
あの馬鹿も所属している、盲目的な宗教団体みたいな奴らの集まり
だ。
さて

此処から先を通りたければ、その命を置いて行かねばならない。
指1本触れる事適わず。

弾1つ掠る事適わず。

刃1本届く事適わず。

この場に獅子が居る事に恐れ、慄き、嘆き、そして戦慄せよ。
絶対守護者。英傑たちの道を阻む者。

白銀に輝く獅子の牙が、月光を浴びる様に光り輝く。

美しく輝く刃、美しく煌く装甲、美しく照らす日輪の如き双眼。

英傑たちの前に、絶対不落の鉄壁なる守り手が存在した。

《帝国軍を下がらせろ！ 奴らの相手は我々がするッ！！》

良い指示だ、伊隅。

《上等よッ！！ 遅れないでよね、しょ・う・さ！》

……愚問だ、小娘。

先行は不知火と武御雷。水月・龍二のツートップが彩り飾る。

いつも通りの光景。何も変わらない。

いや、変わらせはしない。

絶対に終わらせてたまるものか。

此処を突破されれば南に 207の下に増援が送られる。

そうなれば、唯依たちに無駄な戦いを強いる事になっちまうではな
いか。

それは是非ともご遠慮願いたい出来事である。

千枝搜索の一件もあるが、今は兎に角自分に出来る最善を尽くさねばならない。

敵の侵攻阻止。

それが今の俺に出来る、最大の精一杯。

来いや、クソガキ。

テメエらの先輩が愛しの個人レッスンで手解きしてやるぜ？
授業料？

ハッ、気にすんじゃないよ。

勿論テメエらの命で支払って貰うがよおっ！！

《対1で戦うな！ 機動性を使って囲み、孤立した所を撃破しろ！》

《《《《《了解！》》》》》》

新人たちの元気な言葉が結構な事である。

つつ訳で、元・帝国軍の先任としては後輩に先輩の偉大さとかその辺りを是非とも理解して欲しい訳だ。具体的に言えば、力尽くではあるが。

前方から2機の不知火。

1機目の斬撃をサイドステップで回避し、回避先を狙ったもう1機の射撃をもう一段跳躍ユニットを吹かす事で避ける。

空中へと浮かび上がった機体の制御云々よりも先に、足下で長刀を振り被ったまま硬直して居る不知火の頭から管制ユニットに掛けて遠慮無く長刀を振り下ろした。

湧き上がる爆発。

その炎と煙に紛れ、レーダーを攪乱。キョロキョロと滑稽に辺りを見渡す不知火の管制ユニットへ真つ直ぐに長刀を窮し、ほぼ間隔を開けずに2機を速攻で始末した。

2つ

次の獲物。

柏木の機体を追い回していた不知火の顔面を横合いから掴み、そのまま林へとその身体を突っ込ませる。機体制御？ 態勢復帰？^{リカバリ} そんな事をさせてやる程に俺も紳士では無い。

直ぐ様に起き上がるうとする不知火の身体を2つに切断し、此方へ向かつて来ていた3機へ向かつて投げ付けた。

煙幕、爆発。それはチエツク。

炎を突つ切る様に現れた武御雷が突撃砲を構えていた不知火の腕を叩き切り、その腕を仲間の下へと蹴り飛ばす。間髪居れずに背部担架に背負っていた突撃砲が引き抜かれ、未だに弾丸の入っている突撃砲へと直撃した。爆発し、散弾が次々に襲い掛かる。

その爆発を手負いである不知火を盾にする事で避け、龍二は取り敢えず息を吐いた。

7つ

《しよ、少佐、あり》

柏木の言葉を最後まで聞き届ける事無く、武御雷は新たな標的を襲う為に反転する。

次は茜機か。

まったく、面倒事がバーゲンセールで売られている様な感覚である。俺には不要だ。

《 ！？ 》

はい邪魔。

茜と築地を追いかけているファツキンガイズには素敵なプレゼントをやるう。

何が欲しい？ ファツクツ！ テメエらには弾丸以外の物はあげません。

吹き飛ばされる頭部。反転する敵機。

それを見るや否や、問答無用で銃弾を管制ユニットのみに集中させる鬼畜外道。

殺される前に殺す。

これが戦争の鉄則じゃなかるうか。

あつ、と言うか喉に痞えていた何かが取れそうな感じがする。

こう……棒が外される様な。

《……ケホツ……ゴホツ……ん……あ……》

大きく咳払い。

続いて深呼吸。

《……茜、築地。無事か？》

《《少佐！？》》

《何だよ、その『キヤーシャベッター』みたいな》

《あ、いえ、でも……》

《サツサと臨戦態勢！ 巻き上げるぞ、オイッ！！》

《《はい！！》》

喉を何度か咳き込ませれば、まるで詰まっていた物が全て決壊する様に声と言う情報伝達手段が彼の元へとまた舞い戻った。

未だにしゃがれてはいるが、それにしても戦闘中だと言うのに軽口は留まる事を知らない。

《よぉ、水月。声出たぜ》

《ちよっ！？ アンタねえっ、戦闘中に通信入れる馬鹿が……ッ》

《はい頑張つてね。若い子は苦労なさいね》

挨拶返礼、儀式終了。

では今日も楽しく一日虐殺。大量殺人と与えられたお仕事を果たす為に頑張らしましょう。

戦時中だろつが何だろつが、戦わなきゃ生き残れない。なら遠慮など最初から要りはないのだ。

《と言う訳で 駒木、沙霧の場所をサツサと吐いて貰うぜ？》

《剣崎、龍二……ッ！》

《昔の上官にその態度か？ …… キツツイお仕置きが必要だな》

帝国防衛軍、沙霧の右腕とも言える衛士。

駒木、と呼ばれる女性衛士は龍二の登場に大きく唇を噛み締めた。

勝てない事は百も承知である。ならば自分に課せられた事はどれだ

け時間を稼げるかのみ。
この男を相手に

《一手、ご教授願います》

《……来い》

先輩後輩。

それ以前に、敵同士。

帝都防衛の英傑が、今
けた。

帝国が誇る英雄へとその刃の切っ先を向

今回は武ちゃんが殿下と出会うまでの辺りを……

ちよくちよく龍二の名前をはさみながら展開していけたら、と……

はあ

エクバ楽しいよエクバ

クロボンも良いけど運命も捨て難い

友人がトールギスで火消しをしている時は笑いながらチャージシヨ

ットで火事場を増やしてやります

怒られます

ごめんなさい

87 12月5日(5) 過去の清算(前書き)

……文才が欲しい今日この頃

四肢を切断された不知火が辺りに散らばり、その軀達の中央にはこの惨状を招いた者達が次に投じられる一手へと意見を出し合っていた。

伊隅ヴァルキリーズ、オルタネイティヴ？が誇る最高の実働部隊である。

そこに居る異質な者 龍二は一度大きく息を吐いてから、現状の確認をする為にマップを再度表示する。味方・味方・敵。戦局は終局に向かっていている様に思えるが、まだ敵の本隊が姿を現して居ないのだから易々と油断出来る状況では無い。
謀反を企てた沙霧が出ていないと言うのは、やはりと言うか何とも胸糞悪い物だ。

『……大丈夫ですか、少佐』

《遙か……いや、すまん。少しボーっとしちまったみたいだ》

不安が表情に出てしまったのだろうか。

アップで表示された遙の顔に一瞬度肝を抜かれたが、それを何とか苦笑で覆い隠す。

人の上に立つ者として不安を表に出す訳にはいかない。気取られれば、土気も下がる。

《敵が何処から来るにしろ、今の私たちに出来るのは周辺の警戒だけだ。気は抜くな》

《《《《《《 了解！！》》》》》》

伊隅の号令に頷き、新人が周辺の哨戒へと駆り出された。

無論チームを2つに別け、その両方に水月と宗像が付くと言うフオロ―はある。それがあるとは言え、やはり不安は募る物だ。此処が敵陣の真っ只中である限りは永久に。

(……真っ只中、か)

中央。

彼女 千枝も、今となつては敵陣の中央へと1人で切り込んで行ったのだらう。

何と言う無茶をする女だらうか。俺の相棒とは言え無茶が過ぎる。

アレは……いや、結局アレも俺と同じで何処か死に急ぐ体質なのかも知れない。

無論、俺の部下である限りは死なせるつもりなど毛頭無いのではあるが。

シルバーの武御雷はセンサーに敵の反応が無い事を確認すると、策敵を一時的にオフにした。一々ビービーと鳴り喚くセンサーの類は、休息の際には邪魔以外の何者でも無い。

それに、大本の敵は決起軍である。

もしもこの場に反オルタ勢力が現れたとしても、気付けない程に鈍感では無い。

この雑木林ではセンサー類よりも、ざわめく音が敵の接近を教えてくれる。まさに自然が生み出した自動センサーと言う訳だ。

重厚な扉が開け放たれ、漸く吹き込んで来る風を身体に感じて龍二

は大きく息を吐く。

長い戦いは未だに始まったばかり。まだ佳境にすら陥っては居ないのである。これから起こりえるだろう一大事を前にして、やはりと言うか何と言うか龍二は落ち着いていた。

“達観”とも言い換える事が出来るかも知れない。

もしくは 諦め、か。

《なあ、駒木》

先程蹂躪するかの如く倒し続けた帝都防衛軍の1人。駒木と呼ばれた女性へと、龍二は徐に通信を入れた。その声音は何かに疲れた哀愁すら感じさせる。

いや、実際疲れていたのかも知れない。知り合いが殺して来た者たちの中に居たかも知れないと考えると、彼は如何しようも無い程に居た堪れない気持ちになつてしまった。

甘えだと切り捨てたい考えではあるのだが、これも龍二を龍二として形成する為の要員だと言うのなら飲み込むしか無い。遺憾ではあるが。

《アイツは……沙霧の野郎は横浜が飲み込まれた時に壊れちゃったのかな……》

独白。

長くて、切なくて、悲しい程に今更な独り言。

誰も彼の思いに気付けずに居た。だからこそ起きた決起であり、この話はした処で何の意味も持たないのに言葉に出してしまったのは何故？

罪の意識？ ケジメ？ それとも、単なる情報整理なのか？

《それとも、彩峰中将が死んだ時か？》

嘲る様に、笑う。

嘲るのは己か。それとも彼奴か。それとも国か。

《どつちにしろ、アイツはやっちゃまった。もう戻れない。戻らせる訳にはいかない》

“人殺し”が人の中に消え入る事など出来ないのだ。絶対に、あつてはならない。

だからこそ彼女の涙は意味をなさず、龍二の独白も意味など残さない。

ただ此処で2人の間に、一方的な遣り取りがあつただけの事だ。口グにしか残らない。

《覚悟するのはお前も一緒だ、バカ野郎。護りたいなら 傍に居てやれば良かったのに》

龍二の最後の言葉を耳にして、駒木は抑え切れない嗚咽を漏らした。護りたかつたからこそ、此処に来たのに。結局何も護れないまま終わってしまう。

いや、この計画はある一点を以つて破綻して居たのだ。日本と言う国が完全に沙霧尚哉を敵だと認識した時に 決起は既に鎮圧される運命さだめを背負っている。

龍二自身、本当は止めてやりたかつたのかも知れない。

過去の友人。

その凶行を、友人の1人として「待った」の声を掛けたかつたのかも知れない。

《此方ヴァルキリー02、異常なし……って何よ、アンタ如何した

の？》

《……ん？ いや、実際問題としては難しいだろうなって訳だ》

《？ 何それ》

《こつちの話だ。水月、お前は新人たちのサポートを頼む》

まあ、どの道もう遅い。

水月のいぶかしむ様な様子を軽やかにスルーして、龍二は夜空を見上げた。

雪でも降り頻りそうな程に寒い天気だ。

…… ああ、唯依たちが風邪をひかなければ良いが。

何の気無しに関係の無さそうな事を考えて、銀の武御雷の開かれていた管制ユニットの重厚なロックが硬く閉ざされる。

さて。今からもう一仕事、乗り越えなければならぬ。

労働の基準を無視した様な過労に溜息と涙が出そうになるが、それを噛み締めてご主人様に仕える奴隷が如く仕事をするとしようか。気に入らないけれど、これが役割だ。

《剣崎龍二、哨戒に回る。残った者は拠点を固める》

黒く吸い込まれそうな夜空に、一筋の閃光が奔った。

同時刻 207分隊 + a w i t h 米軍 a n d 帝国軍

「寒い……！」

開口一番が、それだった。

セレナが喚きながらもブレンドテイーを口に含み、何とか息が白く成る程の寒さに耐える。戦術機の操縦をしながらコレでは、確かに堪える。

これに関しては唯依が苦言を申す事も無かった。彼女自身、寒さに身を震わせている。

案外と寒いのは苦手なのかも知れない。

「休息としては……十分か」

ホットコーヒー片手に木へ凭れ掛かっていたクリスカが顔を上げる。その横では温かいミルクに息を掛けて冷ましているイーニアも顔を覗かせていた。

ジャツカル分隊、国連の中でもトップクラスの技術と問題を持った者達の集まりだ。

現在龍二が別件で行動している為、実質的な現場指揮は唯依が握っている。

が、彼女もまだまだ若い。

命令と言うよりは、あくまで統括を主観に置いた部隊運用をしていた。

まあ彼女たちの場合は各々の実力が纏まり過ぎていてのでチームワークなど無くとも大抵の敵など軽く蹴散らせるのだから困り物ではあるのだが。

「それにしても撃破比率が0：27なんて……少佐の化物ツブリが証明されたね」

現在彼女たちが殿を務める殿下護衛の部隊ではあるのだが、その逃避行は良好だった。

後方 ヴァルキリーズだけでなく、米軍が居る事も大きなウエイトを占める。

とは言え、何よりもマップを見る限りたった一箇所が勢力が集中している事が出来た。

ヴァルキリーズと共に居る帝都防衛軍を蹴散らす剣崎龍二。

その場に、決起軍が徐々に集結しているのである。それは殿下よりも先に倒さねば未来は無いと言う彼らが示した本能なのであろう。

剣崎龍二とヴァルキリーズ。それ程までに恐ろしい軍勢と言う事だ。

「概ね、順調だな」

「りゅうじならだいじょうぶだね」

クリスカの言葉に、イーニアが微笑む。

心配は要らぬと言う事なのだろう。それ程までに今回の戦いが”軽い”と言う事なのか。

それとも十全には程遠い龍二ですら戦いきれると信頼しているのか。どちらにせよ、此処に彼が居たのなら泣いて喜んだだろう。

親バカ極まると言う事か。

ヤツの場合は親バカと言うか、単なるイーニアバカだけなのだが
割合。

「中尉帰って来ませんね。話し合いも難解なのかな？」

「今後の方針を決める重要な物だ。当然と言えば当然の結果だろう」
現在この場に不在の唯依だが、部隊代表と言う事で米軍のウォーケ
ン少佐たちと共に今後の指針を決めるべく会議へと出席しているの
だ。

今の所帰って来る気配は見えないが、彼女が帰還した瞬間に休憩は
終わりを迎える事となるだろう。元々、この休憩自体がその会議を
目的とした物だったのだから。

帝国軍・国連軍・米軍会議場

「後方から迫って来る剣崎少佐を合流させる事が最善だと思われま
すが」

「しかし、あまり時間を割けないのも事実だ。彼の實力は此処まで
の道中で理解しているつもりだがこの大所帯を護りながら決起軍か
ら逃げ切る事は難しい」

「まりもの意見に苦言を申し出るのは、米軍から派遣された衛士」ア
ルフレッド・ウォーケン”少佐である。巨軀と威つい顔付きが如何
にもの軍人を連想とさせる。

そしてこの場での議論は決起軍との戦闘関連から、既に新たな物へと移行して居た。

後方から迫る決起軍を蹴散らしながら此方へ向かって来る劍崎龍二。それを迎え入れる事は、ハッキリ言えば無理に等しい。向こうから此方に接触するのならば兎も角、此方が向こうの歩調に合わせると言うのは最悪を想定した場合是最善とは言い難いものがある。もしも彼らの到着を待つまでに決起軍と鉢合せでもすれば、それこそ逃げ切る事も難しくなるのだ。

「しかし、”Black Lion”か……是非とも一度はお眼に適いたいものだ」

米国圏内でも有名な話は多々聞き及んだ。米国が日本に対して、あくまで表面的な友好を示す先にあるのは有る意味では全て劍崎龍二と言う存在が居る事に他ならない。

生かすにしろ、殺すにしろ 劍崎龍二と言う存在はあまりにも大き過ぎた。つまり、異物だ。たった1人の為にどれだけの人間を犠牲にすれば良いのだろうか。

そう考えると、向こうもあまり此方に手を出す事は出来ない。大き過ぎる異物。

人は、それをイレギュラーと例える。

「現在少佐は敵機の追撃を妨害しながら此方へ向かっているとの事です。『伊豆スカイラインCCまでには全ての敵を叩き落して其方に合流する、此方の心配はせずに全力で撤退して欲しい』とも。」

「彼ならばやりかねん……とは言え、過信は禁物と言うことか」

唯依の報告を聞き、顎に手を添えて物事を整理するウォーケン少佐。此処まで来る為に既に月詠中尉ともトリアゾラム投与で一悶着があ

ったのだ。日本人の事になると部隊の士気の為にも慎重にならざるを得ないのが彼の一番の悩み所である。

混合部隊など、所詮はこんな物か。

何処か諦めた様に結論付け、ウォーケン少佐は自身の部下の1人へ此処に残る事を指示した。それは日本の衛士たちの事を考慮した指示でもあり、同時に

彼の持つ、ほんの僅かな興味と言う私事を満たす物だったのだ。

《すまないな、ハンター02。悪いが此処で剣崎少佐の到着を待つて欲しい》

ハンター02 イルマ・テスレフがその命令を出され、この場に待機してから何分の時が経過しただろうか。もしくは何十分なのだが、今の彼女には何の意味もなさない。

目の前に現れる一個中隊。

その先頭を陣取る銀色のTYPE 00と国連軍カラーのTYPE 94だ。

2機が地面をガガツ！と抉りながら、私の前に綺麗に着地して見せる。その様子を見ればこの人たちが待ち合わせして居た人物を見て間違いは無い様だ。

《合言葉を聞いても宜しいですか？》

《泰山府君其は我也……俺、日本人だけどな》

心底呆れた様に呟いて、彼　　剣崎少佐は大きく息を吐いた。

《悪いが、管制ユニットから出て顔を見せてくれ。一応此方も其方の隊長さんから顔の確認は取っているが用心に越した事は無い》

言うや否や、龍二自身が管制ユニットの重厚な扉からその身を踊り出した。

風に揺られる白髪と、顔に僅かに残る痛々しい火傷の痕。確かに

本物である。

剣崎龍二。

疑う事など無い、本物の英雄が目の前に居る現状。

「……………あ、あの……………如何なされましたか……………？」

「……………おうふ」

恐縮した様に身を縮こませていたイルマは、龍二から出る無言の圧力に気圧される。

何と言うか、視線が凄く鋭い。

此方の様子を伺う様なその様は、まるで

《オイコラ、エロ親父！　サッサと出発するわよ！？》

「あ、テメ、速瀬！　ぐぬぬぬうっ……………ちっ、わあつたよ。行くよ！！」

速瀬、と呼ばれた衛士の言葉に忌々しげに舌打ちをして少佐はTYPE 0の管制ユニットへと戻って行った。その隣で静観を決め込んでいたTYPE 94の衛士からも通信が入る。

87 12月5日(5) 過去の清算(後書き)

武ちゃんが……空気だ……

どうにかしたいです、本当にどうにかしたいです

つうか前回に武ちゃんの話って言ったじゃんかよおおっ!!!

けっきょく龍二じゃねえかよおおっ!!!

死ぬしかない……死んで詫びるしかない……

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（前書き）

馴れ初めの様な話

日頃の感謝を込めて

特別短編その？

特別短編？ 月詠真那編

何故、とか。

如何、とか。

そんな物は関係無かったのかも知れない。

人の出会いとは即ち宿命であると私は考える。少なくとも彼との出会いはそうだった。

宿命 格好良く現したが、私にはそれに対して購える程の力はない。

だが、彼は違った。

そつだ。彼が彼女に 妹君の様に可愛がっている殿下にこう言つたのはいつだったか。

『寄り道をして、遠回りをして、グチャグチャに道を進む事が人生を楽しむコツだ』

たった数十年、まだまだ若造と言われても可笑しくは無い彼の見せた境地。

私はそれに酷く感銘を受けた。
強くあれ。

何よりも彼を強者として押し上げたのは、例外無く包み込む器の大きさだった
気高くあれ。

気高かった。誇り高く、決して己の敗北だけは認めようとはし

なかった。

凜々しくあれ。

た。凜々しかった。戦場で返り咲く大輪は、それだけで視線を集めた。

英雄と呼ばれる前から、彼は英雄としての片鱗を見せていたのだ。人の上に立つ者としての責務、強さ。

生まれ出でた瞬間から見出された英雄としての素質。彼は 赤子の時から戦士だった。

それは今から何年前。

記憶の果てに薄れて果てた、2人の記憶。

紹介したい人が居る。

そう、殿下からお伝えされた私は内心では戸惑いと動揺を隠せないで居た。

何せ彼女は気高き將軍家系の血筋である。その様なお方が何処の誰とも分からぬ者と接点を持っていたと言うだけでも一大事だと言うのに、拳句の果てには紹介までされてしまえばこれこそ大問題であろう。

隠れて遊ぶ分には 真那は何か口を出すつもりは何も無かった。

殿下の辛い現状は理解しているつもりだし、妹君 冥夜様の事も殿下の心を強く締め付ける。故に、真那はこの悠陽が隠れて行っていた遊びも黙認して居たのだ。

だが

無垢な彼女には分からないだろう。
目を背けていた現実、それを突き詰められてしまえば目視しなければならなくなる。

当然だ。そこに現実があるのに、誰も逃避する事など出来やしないのだから。

殿下と下々の者たちが娯楽を共にする。

真那は敢えて、その現実を”見ない”選択肢を選んでいた。

が、最早この瞬間にその選択肢は消え失せる。その両眼にて見つめるしか無いのだ。

“現実”と言う非道な仕打ちを。

何も知らない少女の背中を見る事が辛い。
自分の口から彼女に事を伝える事が辛い。
そう産まれてしまった彼女が不憫で辛い。

「あつ、悠陽ちゃんだ〜！」

「悠陽ちゃん、こんにちはー！」

「うしろの人だれえ〜？」

元気良く、子供たちが笑う。それに悠陽は笑みを返しながらもその間を縫う様に通り過ぎて行った。如何やらこの子供たちを真那に会わせたかったと言う事では無かったらしい。
では誰を？

その疑問は　　悠陽が、背の高い木の下に行くまで気付く事も無かった。

「お兄様　！」

木の上に向かつて、悠陽が叫ぶ。

何があるのだろうか？ それに、お兄様とは一体誰なのだろうか？ そんな真那の疑問に答える様に、てっ辺に近い枝から誰かが此方を見下ろしていた。

目に付く真っ白の髪。

ヤル気を失くした両の瞳。

眼下に広がる全てに対して「あー、うわー、面倒くせえ」みたいに端的な意識しか持ち合わせていないフェイバリット・オブ・ナマケモノ。

「昨日の一日耐久地獄鬼ごっこで俺の体はボロボロだ……今日は勘弁してくれ」

心底嫌そうに呟き、読んでいたのであろう本を畳んで木の上から飛び降りる影。

その姿を見て、驚かない者は居ないだろう。

いや 正確に言えば斯衛たちの間では、と言う前提ではあるのだが。

“ 神童 ”

神が遣わした人の形をした戦の化身。

疎まれ、毛嫌いされ、それでも尚斯衛として戦い続ける孤高の獅子王。

剣崎龍二。

未だに実戦に出た回数は少ないとは言え、新兵とは思えぬ活躍をする新星だ。

「……斯衛の……月詠、センパイですか」

ポリポリと頬を掻きながら面倒臭そうに此方を見やる剣崎を見て、漸く私の意識が此方へと戻って来る。そうだ、彼は私の後輩である。実際年齢が如何とかでは無く、斯衛に入った時期が早かっただけではあるが。

と言つても両者共に面識がある訳では無い。

龍二からすれば真那は月詠の姓を持つ將軍の護衛家系と言う認識しか無く、真那からすれば龍二も噂でしか聞いた事の無い虚像でしか無いのだ。

「剣崎龍二、だったか……」

「どうも。で、今回は 尋問ですか？」

一度悠陽に視線を流し、それから龍二は真那を冷ややかに見詰める。まるで『馬鹿野朗空気を読みやがれ』と目だけで罵倒している様だった。流石は剣崎龍二。昔だろうがいつだろうが、その度胸は変わる事は無い。

と言つか、自重しないクソガキだった分だけ性質が悪かったかも知れない。

「……そう敵意を向ける事もない。私は殿下から貴様を紹介すると言われただけだ」

そう言つてやると、龍二は頭を抱え始めた。

気持ちは分からない事も無い。子供故に配慮が至らなかつたのだろうが、この関係が周知の事実となれば彼女が外に出る事も難しくなつてしまつだろう。

そうなれば 流石と一緒に遊んでやる事も出来ない。

と言つか、こうして遊んでいるなどと知れたら自分の身が危ない。

まあ紅蓮中將が救いの手を出してくれるとは思つが……面倒事を押

し付けると言うのも忍びないのだ。

「……如何するつもりですか、センパイ」

最早その問いに此方の様子を伺うつもりは無いらしく、不愉快極まりないと言わんばかりの敵意が滲み出ていた。如何やらこの男は

あくまでも現状を維持したいらしい。

何故、とは問わない。

そこに至るまでに何があったのかとも問うつもりはない。

ただ1つ疑問に思う所があるとすれば、そう……

「何故だ」

「あ？」

「何故貴様が今の今まで殿下の護衛を勤めていた。何故兄と呼ばせる」

「……いや、呼ばせて無いですよ。勝手にそう呼ぶだけですからね」

「現に呼んでいるだろう」

「だーからあっ！！ あっちが勝手に俺をそう呼ぶだけだったっの……」

「……そう言う性癖か？」

「アンタいい加減にしろよ、オイ。人の話を聞きやがれ」

額に青筋を浮かばせた龍二が頬を引き攣らせながら拳をボキボキと

鳴らす、真那はそれに興味を示す事無く殿下へと歩を進める。
悠陽は現状に付いて来ている訳ではない様で、真那と龍二の会話に小首を傾げていた。
主に性癖の行は彼女程度の年齢では理解が追いつかないのだろう。
しかし、まあ……何と言うか、小首を傾げる悠陽はリスに見えてしまうのだが何故だ。
小動物的なイメージでもあるのか？

「殿下、お部屋に戻りましょう」

「ダメです。今から皆と遊ぶ約束をしています」

「ですが、人の上に立つ者として下々の者とあまり係わり合いになつては」

「良いじゃ無いですか、別に。本人が遊びたいって言っている訳ですし」

「貴様は黙っている、異常性癖者」

「誰が異常性癖……なあ、アンタブツ飛ばして良いのかな？」

「ダメなんです！」

真那の制止を振り切り、悠陽はそのまま友人たちの下へと走り去って行った。

それを止めようと一歩踏み出す真那の前に、制止の為の手が割り込む。

龍二だ。

此処から先には行かせる訳にはいかないと言わんばかりに、その手

は力強く真那の進行方向を制していた。

「何故止める！？ 貴様も斯衛ならば殿下の御身を護る事も使命だろっ！」

「俺が仕えるのは上つ面の將軍じゃ無い、煌武院悠陽だ。あの子が望む物があるのなら俺はそれを彼女の元に届ける為に決死を尽くす……と言っるのは建前でさ」

真剣な龍二の頬がそこで歪み、何とも言えない気の抜けた物に変わった。

肩に乗っかっていた重圧が降りる様に、龍二は柔らかな笑みで子供たちと遊ぶ悠陽の背中を見詰める。

「あんなに笑う悠陽の笑顔、取り上げるのは酷だと思っけどね」

ケラケラと笑って、龍二はゆったりとした足取りで子供たちの下へ歩み寄った。

一際大きく誰かが彼の名前を呼ぶと、皆がゾロゾロと集まり出す。子供に人気なのだろう。苦笑混じりに近場に居た少年を肩車して、まるで託児所の教員の様な面持ちで子供たちの遊び相手に乗り出していた。

「……笑顔、か」

1人、その言葉を呟く。

そう言えば 私は殿下の笑顔など見た事が無かったと此処で気付いてしまった。

「と言う事がありましたえ」

人脈の広さが龍二の持ち得る大きな武器の1つでもある。

それを理解したからこそ、武は龍二にその情報網形成の一手である人脈作りの根本を聞こうと思ったのだが 成る程。

到底、真つ当な神経の者が真似出来る内容では無い。

打ち首獄門、その危険を乗り越えてまで人脈作りを出来る自信が自分には無いのだ。

「何と言うか……凄いですね、龍二さんの人生」

「ああ？ べつつに普通だろうがよ……俺は周りの奴らが可笑しいんだ」

その可笑しいメンバー筆頭がアンタだよ。

そんな寒い突つ込みを自分の中で噛み殺し、武は手元にあつた麦茶を煽る。

隣に座る龍二は酒を掻つ込んで居るのだが、その様子はいつものペースとは程遠い。

何か忘れたい事でもあるのか。

それとも、今日はそんな気分なのか。

少しずつチョビチョビと口に含む様子は普段から懸け離れたもので

あつた。

まあどちらにせよ、障らぬ龍二に崇り無しである。

「月詠さんって龍二さんの先輩なのかあ……でも、今は龍二さんの方が偉いですね」

「あの人は欲が無いからな。今の身分に甘んじるタイプなのよ」

「それに比べて龍二さんは意欲が凄い事で」

「積極的なんだよ。何事もチャレンジしねえと勿体ねえだろ？ 折角の人生だし」

「は……時たまに、ホント勉強になります」

「オイコラ、坊や。”時たまに”は余計だろ」

「オレ、明日も訓練あるんで先になりますよ？ 龍二さんも無理しないで下さいね」

「あつ！ 流しやがったな、テメエ!？」

地味な成長をした武に悪態を付きつつ、「サツサと行っちまえ」と言わんばかりに手でシッシと武を追い払う。それに苦笑を漏らし、武もサツサとその場を後にした。

此方を振り返る事無く歩き去った武の背中を横目でチラリと確認すると、漸く肩の荷が降りたとばかりに龍二は肩から力を抜く。

「何で俺の周りの女は危険極まりないのかねえ」

夕呼に始まり、唯依で終わる。

この女運の悪さ。負の連鎖は簡単に留まる事を知らない。と言うか、知りたくない。

酒をチビチビと飲むのも興ざめするので、一気に煽ってカップの身を空にする。

明日も 新人や部下の事で頭を悩ませる日々だ。夜の空いた時間くらい、自分の好き勝手の為に使っても文句は言われないう。つうか言わせない。

「……お前もそう思わないか？」

誰も居ない空間にそう愚痴で、龍二は唇の端を吊り上げた。返事の無い返答。

それを前にして、龍二は何とも楽しそうにその顔に笑顔を張り付かせる。

昔から何一つ変わらない、何とも堅苦しい女であろう。

冗談の1つも理解しやがらねえのだから。

「酒の一杯でも奢らねえと、捻くれるぞ」

鼻を大きく鳴らして、空になったグラスだけを残して龍二はその場を後にした。

「よう、死神太夫。遊女みたいに俺と遊んでくれんの？」

「開口一番、貴方は自由ですね……あと死神太夫って止めてくれま

すか？」

月下の下。

殿下に連れられて出会ったあの時の様に　いや、此度は私が上で彼が下か。

不満タラタラ、と言えば聞こえは良いが今晚の彼は不満と言うよりも苛々が募っている様に感じられる。凡そ日々部下とのコミュニケーションに疲れを溜めているのだろう。

……何と言うか、女難だけは飛び抜けた人だから。

「つるせえー、死神太夫」

「遊女と遊び呆けると、妹君がお怒りになると思いますが？」

口籠る龍二を見て、真那は笑った。

この人は悠陽の名前を出すと強く出られないと言う事を知っているのだ。

「お前、意外と嫌な性格ね」

木の上で楽しそうに笑っている真那を龍二が半眼　ジト目で睨み付ける。

堅苦しい女と言ったが、アレは訂正しよう。何故かは知らんが真那は日々退化していた。

主に精神的に。捻じ曲がっている的な意味で。

まあ、でも……これで良かったのかも知れない

ギスギスする生き方は嫌いだし、お互い気楽な方がやり易い。昔と今じゃ、遥かに今の方が良い関係と言えるだろうし。

「良いぜ、最高だ。今のアンタともう少し早くこうなっていれば…
…惚れたかも」

「ご冗談を。夜も更けて参りましたし…：月夜の下で、暫しの休息
を」

2人がニヤリと笑い、酒瓶を手取る。

暫しの休息がこの後に飲み比べに変換され、それでもって最終的に
唯依に拳骨を落とされる事になると言うのは 別の話。

月夜の下で。

男と女が静かに夜を楽しむ様は、とても美しかった。

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（後書き）

次回はイーニア編の予定です

あと、一応此方でも聞いておきますが

? 真那・イーニア編の2つでいい

? 9本で良い（キリッ 他キャラも見たい

? クロニクルも出たことだし、イルフリーデたんのいるユーロフロ
ントへGO

? ここは空気を読んで学園モノだろjk

の上から1つ

気に入った物があつた場合感想欄へ書き込んでください

しっかし……夏ですねえ

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（前書き）

イーニア編です

虐殺 イーニアは後日…

日頃の感謝を込めて

特別短編その？

「銃器を扱った事は？」

「……ありませんよ、そんなもの」

「だったら何で銃を奪った!？」

「見てくれだけでも整えりや敵も怯むでしょ。その隙に殴ります」

「物理って……如何考えても引き金を引く速度の方が早いだろう!？」

そう言った御剣家の男の目前に、龍二が放った神速の拳が出現する。寸止めされたとは言え、僅かな拳圧が男の前髪をフワリと浮かび上がらせた。

拳のみで、である。

昔はヤンチャしたとは龍二談だが 昔何をやったのか是非とも問い質したい。

そんな怯んだ男など見向きもせず、龍二は誘導の為に一階で交渉を開始した御剣家の従者である真那に感謝しながら非常階段を駆け上った。

その後続くのは御剣家から先発された優秀な護衛部隊。

警察の特殊部隊にも勝るそうだ。寧ろ、龍二要らなくない? とは

言っちゃダメ。

「レベル上げて物理で殴りゃ良い。つまりはそう言う事です」

「いやいやいや、如何言うこと!？」

「くだらない問答をしている暇があるならサッサと次の階に上がりますよ」

「君の所為だからね!？」

御剣家従者（男）の正しくも虚しいツツコミを華麗にスルーして、龍二はデパートの中へと侵入する。デパートとは言え、1階から3階部分は全て真那様の管轄だ。

そこから上 4階と5階は龍二の管轄と言う事になる。つまり、犯人のリーダー格を捕らえる事が可能なのは龍二のみ。全てが、龍二に一任されたのだ。

天下の御剣財閥とは言え、ただの一般人にそれだけの事を任せても良いのか？

その問いの答えは 龍二が己の力のみで証明する事だろう。

「それじゃ、派手に楽しく清々しいまでに華麗に遂行しますよ」

「矛盾の申し子だな、君……」

無表情で非常ドアを蹴破り、龍二が今犯行現場であるデパートへと潜り込む。

その際、何故こうなったのかともう一度頭の中で振り返ってみた。

作者の愛が天元突破 特別短編？

イーニア・シエスチナ編

ちよつと待ってくれ、すぐに戻って来て遊んでやるからな

そう龍二に告げられてから、どれだけ時間が経過しただろうか。

まあ実際それ程までに時間は経っていないのだが、イーニアの体感時間では既に2時間は過ぎ去っている事になっている。子供は短気なのだ。

唯依に呼ばれて仕事を片付けに行ってから凡そ30分。

今日1日はイーニアの遊び相手になる筈の龍二だったのだが、思わぬアクシデントと陰謀と1割くらいのウツカリによって仕事場へ舞い戻る羽目になったのである。

俺は悪くねえ。全部アイツらが悪い。つまりはそう言う事、だが

「……………ムスッ」

「イ、イーニア……………俺が悪かった。確かに唯依と2人で休憩したのは悪かったよ」

「イーニア、龍二さんが休憩に入ったのは私が誘ったからであって

……」

「ムスツ」

我らがお嬢様は聞き耳を持たぬ様である。

頬をプクーツと膨らませ、まるで風船の如く顔を真っ赤に染め上げる様相はキューティクルとは言い難いものがある。強いて挙げるとすれば　タコ、だろうか。

その内に冗談抜きでスミが出て来そうなので比喩は此処までにさせて貰うが。

現在の時刻は13時45分。

ちようどお昼が終わり、人々が仕事場へと舞い戻る時間帯。因みに今日の龍二は非番だ。

1日をイーニアの為に費やすと決めたのだから、仕事などして居る暇は無い。

全てはイーニアの為に。

イーニアラブ、ライクじゃなくてラブ。アイ・ラブ・ユー。

「機嫌を治してくれ、イーニア。ホラ、可愛い顔が台無しだろ？」

「……りゅうじは、ゆいのほうが好き」

「えっ？」

「……りゅうじなんてきらい！」

そんな棄て台詞を残し、イーニアは龍二の前から風の様走り去って行った。

ポロポロと瞳の端から流れ出る涙を拭う事も無く、一直線に。

「イーニア!？」

走り去るイーニアを追い掛けようとする唯依ではあったが、いつもならば直ぐ様にでも走り出す筈の龍二が動かない事に疑問を抱いた。いつもならば、「イーニアが嫌いでも俺が好きだあああっ!!」と抱き締めに行く筈だ。

だが、今回は違う。

動かないのだ。一歩たりとも。まったく、ピクリともしない。

まるで石像……その場にコンクリで固められてしまった石像の様に、動かない。

「……龍二さん？」

「唯依、俺を東京湾に簀巻きにして沈めてくれ」

「一昔前のヤクザみたいですね、それ」

まあ正確に言えば、動けないのではなくショックのあまり動く事が出来ないのだが。

その辺りは関係無い。動けないのならば仕方が無いではないか。

Q・イーニアどうする？

A・命懸けで探す。

と行きたいのは山々だが、両足が生まれ立ての小鹿の様にカクカクと震えるのだ。

ああ恨みます、神様。如何して僕の両足はチタン合金で出来ていないのですか？

それはね、重すぎて動かないからだよ。

そんなこんなで、唯依は龍二の職場 白柊学園の職員室に龍二を

担いで来た。

心此処に在らずの如く、無言で身体を床に投げ打った龍二とそんな彼の周りに集まる彼の同僚である先生方。無論、その中にはまりもと夕呼の姿もある。

「と、言う訳で龍二さんがイーニアに嫌われてしまったんです……」
事情を説明する唯依の表情は重い。

両親の居ないイーニアの義兄である龍二だが、まさか此処に来て「大嫌い」宣言されるとは思ってもいなかったのだ。いつも「りゅうじ」「りゅうじすき」と連呼しながら彼の後ろを付き従うまるで天使の様な笑顔を持つイーニアの口から 嫌いと言う単語が出たのだ。

最早それは「お父さんのパンツと私のパンツ一緒に洗わないで」と言う思春期なお嬢さんから出て来る軽蔑的な視線よりも更に重く、キツイ。

「キ、キキキツ……ツマらないツマラナイ、私ナンテツマラナイ！
自滅シロ自滅シロ、ツマラナイナラ自滅シロ……！」

そんな一撃を真正面から受け止めた龍二は無論、破碎した。脳髓が床に倒れ伏しながらも「キキツ！」と笑っている様は完全にドラッグがキマったアレな人を彷彿とさせるのだ。教育に携わる者の姿とは懸け離れていた。

と言うか、完全に逝っていやがる。

「つつてもねえ、コイツの問題でしょ？ 部外者が関わる問題じゃないわ」

「わ、私も……家族間のことは、ちょっと……でもっ、出来る限りの協力はするね！」

神宮寺まりも談

「兄としては二流だな」

ファイカーツィア・ラトロワ談

「思春期は複雑ですから。まあそれにしても貴方は唐変木だと思いますが」

藤代千枝談

と言う訳で、彼の同僚は彼を見放しちまった訳である。家族の問題は家族の問題。

イーニアの姉代わりであるクリスカも交えて、最終的には家族会議にまで持つて行くしか無いのだろうか。と言うか、いっその事龍一の母親である千代美に頼るべきでは？

解決策も握っている様な気がする。

ああ、だが

だが……

「俺が……イーニアを探さなきゃならん。俺1人の手で」

「龍二さん……」

「俺の出来る最大現の、あの子に対する礼儀だ。今日と言う1日はイーニアに捧げた」

だから、と言葉を一度そこで区切って床で死に体となっていた己の体に鞭を打つ。

一度嫌われたから如何した。

ならば何度でも、自分の愛を伝えてやれば良い。
届かないのならば叫べば良い。

それでダメなら筆談だろうが何だろうが、兎に角気持ちを伝えなきゃ始まらないのだ。

コミュニケーションが大事。

絆を育むにはコミュニケーションが重要。

「イーニアの……兄代わりとして、俺はイーニアを探さなきゃならん」

グツと強く拳を握り締めて、龍二は立ち上がった。

その両眼に宿る不屈の炎は地獄の業火よりも熱く、不死鳥の如く際限が無い。

「行くぜ……！」

心に決めた龍二が歩を進めた瞬間だった。

職員室の扉が開かれ、顔を蒼白にした1人の教員が汗を額に浮かびながら龍二たちの前へと現れたのだ。それに驚く龍二たち一同。
だが、もっと驚くのはその後である。

「シエ、シエスチナさんが……」

「ッ、イーニアが如何かしましたか!？」

「シエスチナさんが……人質になってしまいましたあああゝ!!
!!!」

へニヤへニヤと地面に座り込む男の教職員の言葉を受け、龍二は頭

に「？」を浮かべる事しか出来なかった。
いやだつて、人質つて……何よ？

何処にでもある平々凡々なデパート。

そこで何と現在、立て籠もり事件が発生。現在人質の身元割出の為に動いている警察から、この高校の生徒であるイーニアが人質となつている事を告げられたのである。

ダ ハードなのか。

ブルース・ウ リスなのか。

どちらにせよ、一般人が手を出せる訳も無く

「ああダメですよつ、剣崎先生えっ！ 此処は警察に任せて……」

「つるせえつ！ イーニアを1人にするかよ、俺が迎えに行く！！」

「迎えて……銃を持った犯人が……！」

「ハジキ1つで怯えちゃアイツらの兄は務まらねえつ！ 離しやがれコノヤロー！」

「いけませええんつ！ 何よりこの学校の名に傷が付きますううつ
！！」

「家族の命と比肩すりゃ小さいだろうが！ 行かせやがれチクシヨ
ウがあああつ！！」

一般人の枠組みから外れる事を選んだ龍二は、銃器類を持つ犯人相手にすら特攻する事を望んでいた。無論それを止める為に男性教諭が彼の腰にしがみ付くが、その頭を先程から龍二がスパンスパンと叩いている。

殴らないのは、せめてもの情けだろう。一応そこ等辺は情に厚いのだ。

と言う訳で、現在へと戻って来る訳である。

無論彼一人の特攻など成立される訳が無く、彼の教え子である悠陽の手配で御剣家から彼のボディガードとして3人のエリート兵が配備されたのである。

しかし　ハッキリ言って剣崎龍二の行動力は想像を絶するものがあった。

「ぶべらっ!？」

「ひでぶっ!」

「あべしっ?!」

見張りも兼ねていたのだろう3人をほぼ無言で殴り飛ばし、その銃器類を窓からポイポイと投げ捨てる。何と言うか……サマになつていた。流石は元・不良少年である。

彼の後ろを付いて来ている御剣家従者たちですらポカンと口を開けている様を曝した。

龍二の行った制圧方法は実に単純な正攻法であつた。

まず3人の内の1人が此方に気付くよりも早く腹に拳をのめり込ませ、2人目が此方に気付いたとしても仲間の身体を放り投げる事で銃器の使用を封じる。

次に仲間を放り投げられた者を見やる3人目をボコボコに殴り飛ばし、放り投げられた仲間を退かして起きようとする2人目の顎を蹴り穿ってノックダウン。

実に清々しく、手際の良い作業だった。

お前、絶対犯罪者だろ。

「サツサとイーニアに不敬を働いたクソツタレを潰しに行きますよ」

「……りよ、了解!!」「」

今では戦闘のプロが龍二の指令に付き従うと言う可笑しな形態にまでなっている。

面白いが、根本的に間違っていると思うのは何故だろう。

もう何も言つまい。龍二だから。

通路から飛び出して来る犯人2人にはデパート内の売り場にあった縄跳びを首に巻き付けて一瞬で締め落とし、銃器類を抱えて後ろから走り寄って来るアホの顔面にはフライパンが吸い寄せられる様に飛来する。

何と言うか、彼にとってデパートとは武器庫の様な物であろう。

手に取る物は全て武器、武器、武器。これも全ては愛する妹の為だと言うのならば、イーニア・シエスチナとは罪な少女である。

「4階まで無事制圧、と……残るのは5階だけですな。5階は……ええっと」

男性従者が確認する様にGPSを操作し、龍二はそれを気にする事も無く懐に仕舞ってあった煙草へと火をつけた。何処に居ようが、何をしようとも、結局剣崎龍二にとって女よりも手放せない物は残念ながら煙草なのである。

もしかしたら　この男は世界の命運と煙草を天秤に掛けて、煙草を取るかもしれない男なのだ。まあ身近に居る親しい者たちは例外として扱うのが前提条件だが。

「5階はおもちゃ売り場ですね。犯人の死に場所としては相応しく無いですよ」

皮肉る様に締め括って、男性従者は銃の弾丸をリロードする。

殆どの敵を龍二が倒して来たとは言え、彼らも何もしなかったと言う訳では無いのだ。

龍二が殴りに行き易い様に後方から支援射撃を行い、確りと弾薬を消費していた。

流石はエキスパート。プロフェッショナルである。

とは言え、そんな彼らですら”ひく”程に恐ろしい龍二とは一体何なのだろう。謎だ。

「……そんな事は後でも考えられます。今は、突っ走りますよ」

何処に誰が居るとか、何故こんな事になったのか。

そんな事は如何でも良い。

下で保護された人質の中にイーニアの名前が無かったのならば、あとは主犯格をブツ飛ばしてでも人質を如何したのかを徹底して聞くまでの事だ。

それで、”もしも”があつたとすれば　例外無く、躊躇い無く、龍二は至近距離で主犯格の頭蓋へ向かって拳銃の引き金を引く事になるだろうとも。

「……5階までは如何やって移動しますか？」

「良いじゃ無いですか。正攻法で」

「エスカレーター、って事ですか……?」

「人質が居るなら向こうはそれを盾にして来る筈です。俺が真正面から行きますから、皆さんは後方から主犯格以外の敵対勢力を潰して下さい」

気軽にそう言つて、「じゃっ」などと言いながらシユピツと手を拳げる龍二ではあるが彼らもそう易々と彼を行かせては問題が残る。と言つた、彼らの主にコレが知れたら説教どころか最悪打ち首獄門までありえる始末なのだ。命懸けは、どちらも同じである。

「いえいえっ、今回ばかりは此方に任せていただきたい!」

「ええ〜……如何してですか?」

「如何してもです!」

「じゃあ、アレにしましょう。俺が真正面で罠を引き受けるので、その際に」

「変わつてねえだろうがああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

上に凶悪犯罪者が居ると言つのに、何とも暢気な連中であつた。

と言つ訳で

真正面。エスカレーターから悠然と赴いた龍二はエスカレーターの前、ちょうど子供が遊ぶ為に設備されたのであるうぬいぐるみ置き場の中で此方に銃口を向ける主犯と、その主犯に捕まっているイーニアの姿を目にしたのである。

「……」

「テメエ、警察か!？」

「いや」

「だ、だったら何の用だ! サツサと消えろ、撃つぞ!」

「少し、その子と話をさせてくれ。アンタは俺に銃を向けたままで構わない」

「はあっ?!」

素つ頓狂な悲鳴を挙げる犯人を無視して、龍二はイーニアの手前

ちようど向かい側にあるベンチへと腰を降ろす。

何とも疲れた様に溜息を吐くと、ニコリと笑ってイーニアに手を振った。

「嫌い」、そう面と向かつて言われた男の様子とは到底思えない。菩薩か何かなのか、それともそんな物など超越した先にある極へと片足を突っ込んでいるのか。

どちらにせよ、龍二は銃を突き付けられようとイーニアへの微笑みだけは止めなかった。

「怪我はないか?」

「……うん」

「お腹、空いてないか？ 昼飯も食い損ねただろ」

「……だいじょうぶ」

「そうか」

短い遣り取り。

それでも、龍二にとっては重要なものなのだ。イーニアが無事で居ると言うのならば、それは 剣崎龍二にとって命よりも重要な大切なことなのだから。

安堵の溜息を吐き、心からの笑みを浮かべ、龍二は言う。

“良かった”、と

なればこそ、最早この場に居る意味は不要。

サッサと全てを終わらせて、一刻も早くイーニアを家に返してやらなければならぬ。

それが家族の義務ならば尚の事である。

「アンタブツ飛ばして帰るわ。色々と迷惑被った訳だし」

「お、お前……っ！」

「俺は銃も何もねえ、正真正銘の丸腰だ。人質を盾に……なんて真似はするなよ？」

犯人の神経を逆撫でする様にニヤリと笑う龍二の額に、ヒンヤリと冷たい物が当てられた。銃口だ。

それを見て、犯人の後方から接近していた御剣家の従者たちが。そして、誰よりもイーニア自身が、悲鳴を挙げたい程に目を見開いた。

「如何した？ 撃てよ、オッサン。サッサと殺してみせろ」

「や、野朗…… 本当にブチ殺すぞ、テメエ！ いい加減その口閉じやがれよ！」

「撃てよ……！」

怯える主犯に、龍二は怯むこと無く撃つ様に命じた。

引き金を絞る指に力が籠るのが分かる。誰もが、龍二の死を瞬間的に察知したからこそ一歩を踏み出そうと足に力を込めて前へと出ようとする。

だが、それよりも早く

「……ハア、ハアッ……」

引き金は絞られ、

「……ウソ、だろ……？」

「ウソ……？ ハンッ、良い見本になっただろ。銃じゃ何も解決しねえよ」

あるう事が銃口を自身の額から瞬間的にずらしていた龍二は何事も無かったかの様にそこで息をして居た。未だに、主犯をその両眼で鋭く睨みつけている。

しかし無傷と言う訳でも無い。

弾丸が通り過ぎて行ったのだろっ側頭部からは僅かに血が滴っていた。

が、最早今の一発すら外した主犯に抵抗の意思は無い。

ヘナヘナと地面に膝を付き、まるで信じられない物を見る様に龍二へと視線を向けた。

「教えてくれ……アンタ、何者だ……？」

「フンツ、通りすがりの教師だ」

信じられない存在　その正体は、何と言う事も無い高校教師である。

それを聞いて男は何を思ったのか。

自嘲気味に笑った。本当についてない、と。世界で一番不幸だ、と。

「馬鹿言え。うちの女神様の姿を見られただけで、アンタは幸福だぜ？」

そんな主犯の腕から逃げ果せたイーニアが、泣きながら龍二へと飛び付いていた。

こっ酷く警察の方からのお叱りを受け、半ばヤケクソとなっていた龍二がアパートの会談を上げる。既に時刻は11時を過ぎており、もうクリスカとイーニアは眠っているだろう。

ああしかし……明日、校長からもお叱りを受けるのだろうな。

きっと父母さんからも怒られる。

叱責三昧になる事が確定したが、まあ……愛する家族を護れただけ結果オーライだ。

静かに玄関を開けると、やはり家の中は静まり返っていた。

眠っているのだろうクリスカとイーニアを起こさない様に居間へと移動し、着ていたボロボロのシャツを脱いでシャワーを浴びに洗面所へと移動する。

寝巻きを先に用意して、龍二は熱いシャワーをその身で一心に浴びた。

今日起こった全てを流す様に。

無言で、静かに今日一日の出来事ごと汗を流す。

「……ふう」

サツと身体を拭き、そのまま居間へと上半身裸のまま姿を現した龍二は迷う事無く冷蔵庫へと向かって、その中から冷えたビールを取り出してソファに腰掛ける。

長く、忙しない一日であった。

振り返れば　イーニアに嫌いと言われて始まっちまった一日である。

ああ、そう言えば……まだイーニアに許して貰えていなかった。

「……難しいなあ」

生徒に物を教えるよりも難しい。

こんな事を平然と出来る千代美はやはり偉大と言う事か。母は強し、である。

とは言え、自分は自分なりに必死でやっているのだ。易々と負けてなるものか。

そんな訳で、ビールを半分ほどまで飲んだ龍二はソファに身体を預

けてそのまま夢の世界へと身を落として行った。

……完全に落ちる前。

自分の身体に、何か重圧が掛かった気がするが 気のせいだろう。

「りゅーじ……ありがとう」

「……だいすき……」

翌朝、龍二の胸元に顔を埋めていたイーニアの姿をクリスカに発見され、お約束と言えばお約束だが龍二がブツ飛ばされたのは仕方ねえことだ。

「りゅーじ」

「ん〜？」

「ふっつかものですが、よろしくおねがいします」

「……ん〜」

「貴様アツ、イーニアに何を吹き込んだああああっ!!!!!!!!!!」

「ご、ごごご、誤解だ、クリスカ！俺は何も アーッ!!!!!!!!!!」

日頃の感謝を込めて

特別短編その？（後書き）

ユーロフロントを先にしようか…

学園モノを先にしようか…

如何しよう

まあ如何にでもなるだろう

そんな最近

PS：寝違えて首が痛い

The Euro Front #1 (前書き)

ifストーリー

清十郎ではなく、龍二が研修に来ていたら

トンネルを抜けた先に広がる景色は一面が明るく、間の抜ける程に煌びやかだった。

今も尚、太陽が爛々と輝く空を見上げた。

国が変わろうと太陽と言う物の鬱陶しさが変わる事はない様である。それは安心と喜ぶべきなのか、それとも煩わしいと嫌うべきなのかは個人の見解だろう。

無論、自分は後者であるのだが今は関係の無い話であるのだが。

旅行鞆を肩に掛けながら、暫く生い茂る木々の間を縫う様に歩んで行く。

集合の時間までは腐る程に時間がある。

ならば周辺を見て周っても咎められる事はないだろう。先方には元々そう伝えてある筈だし、何よりも自分自身欧州と言う踏み入った事の無い地に思い入れを抱いている。

何とも 形容し難い程に美しい土地だろうか。

戦乱の世だと言うのに、生い茂る木々が優しい木陰を作る林。

それを潜り抜ければ生い茂る青い芝生が顔を見せた。

こんな場所、日本を探し回っても見付かる事は無いと断言出来る。それ程に美しい。

「此処が欧州……」

独白を呟き、太陽の陽射しを手で遮りながら空を見上げる。

俗称”地獄門”　グレートブリテン島の南端である英仏海峡を睨むドーバー城周辺一帯に建設された周辺一帯に連なる複数の軍事拠点、要塞線の総称だと聞き及んでいる。

しかし、この景色は如何だ？

地獄などと言う言葉とは程遠い場所にある様にしか思えない。天の園、そう言われても何ら遜色が無い程までに美しいではないか。

日本から研修生　今更、その様な事をする意味が分からないが

として此処に赴く事が決まった時、正直自分には欧州と言う国は重たくて仕方が無かったものだ。

“騎士道”　武士道とは違った、武人の道。

そんな重苦しい物を引つ提げている国は正直、此方からご遠慮願いたかった。

の、だが……紅蓮中将には逆らえない。

渋々欧州の地獄門にこうして研修、もとい観光に来たのだ。休日返上の意義を求む。

「しかし……基地も見えんな」

美しい景色を眺めながらの散歩も、あまり長く続けば意味を見出せなくなる。

流石に数十分も歩き続ければ自分が迷子にでもなったのかと心配にもなるのだ。

見知らぬ土地で迷子と言うのは、まあ百歩譲って笑い話になる。

だが、この歳で迷子のレッテルを貼られるのはプライドが許さない。是が非でも基地に己の足で辿り着かなければならない、のだが……芝生しか見えない。

舗装された歩道など既にある筈も無く、ただ宛ても無く歩む足は止

まる事を知らず。
何とも恐ろしい。無限ループ怖い。

暫く歩き続けると、舗装 には程遠いも獣道に比べればマシな道が1本見えた。

是非も無い。新たな道があるのならば、其処に吸い寄せられるのは当然の事だ。

実際問題、もう獣道は嫌だ。頭に引っ掛かる葉の類が鬱陶しいことこの上無いのである。

頭に付いた葉を取り払いながら、漸く歩く事の出来るマトモな道に一息吐いた。

さて……

「基地は何処だろうか」

右も左も分からない。

北も南も分からない。

そんな場所に来て取り敢えず一服出来るかと思つた俺が馬鹿だった。寧ろ、何も分からないのが現状であろう。此処は何処？ 私は誰？

そんな状態だ。

取り敢えず風向きをチェック。

指に掛かる風の向きからして、あっちが北で……

1人思考の渦に耽っている自分の耳に、耳慣れない音が響いた。

パカラツ、パカラツ

軽快なりズムを刻む4つの音は、段々と音を増しながら此方へと向かって来る。

しかし風向きを確認している彼が音に気付く事は無い。

うん？ と首を捻りながら、先程から何度も方位を確認している最

中なのだから。

パカラッ、パカラッ

依然状況は変わりなし。

方位も依然として分からず仕舞い。

パカラッ、パカラッ

上に同じく

音がどれだけ近付いて来ようが、まるで何も感じえない様に彼は風に意識を集中させる。異国の風だからだろうか。いつもならば直ぐ様にピンツと来る彼の方位レーダーも少しばかりの翳りが見え始めている。だからこそ時間を掛けて、確実に行きたいのだ。行きたいのだ、が……

パカラッ、パカラッ……ヒヒイインツ！！

「っ、あいつ!?!」

ヒキガエルを踏み潰した様に不気味な声。

それを出した本人は、急に自身の喉から出た声に驚くよりも先に現状 自身の身に一体どんなトラブルが降り掛かったのかを理解する為に知識が総動員していた。

何が起きた？

今の音は何だ？

自身の周りを霧が覆っている事にすら気付かず、呆けていた自分を叱責する。

見知らぬ土地でアホ面を引っ提げる馬鹿が何処に居るだろうか。少しは緊張感を持つべきなのだ。それがこう行ったトラブルを自分へと呼び寄せるのだから。

半ば諦めながらも、霧の向こうから此方へと迫る影に注意を向けて

おく。

大きい……人などと比べるまでも無く、大きい。地を踏み締めるのでは無く、まるで弾く様に軽快な足音に疑問を抱きながらも、此処で引下つては状況の整理が付かないと彼も霧の中を恐る恐る前に出て

「ヒヒインッ」

「くあすえ drift gyふじこーp」

又ッ、と自分の前に出て来た馬面に口から漏れ出す奇怪な言葉。最早言語と形容する事すら難しい言葉の羅列に、馬の乗り手より誰よりも自身が驚いた。

人間ってこんな声も出せるのか、と。

……現実逃避以外の何者でも無いのではあるが。

息を整える為に馬から僅かばかり遠ざかり、騎手であろう人物を確認する為に視線を上へと向けた。後ろから照らす太陽の光が鬱陶しいが、その光を手で遮って眼を凝らして馬の 美しい白馬に跨る騎手の顔を見詰めた。

朝霧に反射され、金の髪が砂金の様に輝き、

切り取った一枚の絵画の如く白馬が似合うその騎手は、

「驚かせて御免なさい。こんな所に人が居るとは、思いもしなかった物ですから」

俺に向かって、そう語り掛けた。

しかし、その口から出る言葉は英語では無い。如何やらドイツ語の様である。

分からない事は無いが、国連軍共通の英語の方がまだ流暢に話せる
と言つのが現状だ。

「いえ、怪我はありません。少々驚いてしまいましたか……」

「御免なさい。まさか、此処に人が居るとは思いもしなかった物で
すから」

シユンツとしよゑる仕種を見せて、騎手は肩を竦めて見せた。
成る程。

どうやら此処は、トライアルランコースだと言つ事だろう。馬の事
は良く分からないが、欧州では如何やら基地内で馬を走らせて気分
発散でもすると言つ事か。

……帝国でも馬を嗜む者は掃いて捨てる程に居るが、正直馬に乗る
意味は分からない。

このご時勢、己の両足を磨いてこそだと思つのだが根付いた”武家
”としての意識としては”馬術”が出来なくては斯衛の恥なのだ
と言つ。

つまり、俺は斯衛の恥曝しも良い所だと言つ訳なのだ。酷い話であ
る。

「あつ、私つたら馬からも降りず……」

「お気になさらずに。綺麗なお召し物が汚れてしまいます」

馬から降りようとする騎手を制して、俺は肩に掛けていた旅行鞆を
もう一度背負い直した。元々、此処には研修として馳せ参じた訳な
のだから無駄に時間を食う事も無い。

と言つのが建前。

実際は口に出した様に、騎手である少女の召し物に汚れを付けたく

なかつたからだろう。

折角の綺麗な召し物なのだ。それに汚れを付けたとあっては男の恥
……だろう、多分。

お言葉に甘えさせて頂きます、と小奇麗にペコリと頭を垂れる騎手
の姿を見て、此処でもやはり礼節　　と言う名の重苦しい社交辞令
に追い掛け回されるのかと思ひ、俺は自然と皮肉気に口元を歪めて
いた。逃げ切れないのは仕方の無い事なのだろう。

だが、もしも許されるのであれば……もう少し、フレンドリーな研
修先に行きたかったと言うのが正直な気持ちではあるのだが。

「改めてお詫び申し上げます。盲信が油断を生みました。この一帯
は部外者立ち入り禁止エリアなので、つい……」

「いえ、非は此方にあります。立ち入り禁止区域とは知らずに、申
し訳ない」

ペコリと頭を下げ、立ち入り禁止区域に入ってしまった事に詫び
を入れる。

何とも　　企業の間職種ではあるまいし、形振り構わず下げて良い
程に俺は自身の頭を安売りしているつもりは無いのだが……今回は
仕方の無い事だと諦めよう。

顔を上げ、もう一度騎手の顔を見詰め直す。

が、向こうは少しばかり呆けている様で先程から視線が此方に向き
つ放しである。

何か無礼を働いただろうか？

自分の行動に何かあったのだろうか、と記憶をもう一度サルベージ
するが該当する件が全く無い。寧ろ、此処までの動作は平然な物で
あったと記憶するが……

「白髪……?」

「白髪?」

「あ、い、いえつ、お気になさらないで下さい」

取り繕う様に手を振り誤魔化す騎手を見て、それ以上の追求はせず
に置いた。

今の俺は日本人特有の黒髪である。

騎手のバツクにある陽の光で照らされたからこそ、偶然白髪にでも
見えたのだろうか。

疑問は尽きないが、気にするなと言っただから追及も野暮だ。

「そう言えば、貴方の名前。お伺いして居ませんでしたね」

騎手が、笑顔で問う。

まあ此処で答えても此方に不利益は無い。今の俺の身分は研修
生だ。

たかが研修生が”偶然”あの名前を名乗っていたとしても、不思議
は無い。ただの同姓同名、そう言う事なのだから。

「私の名は」

「いえ、今は伺わずに置きましょう」

が、其処でまたも騎手が俺の言を制する。

まるで楽しむ物を見つけた子供の様な無邪気で居て、悪戯を考え付
いた悪ガキの様にくすぐりたい微笑を浮かべて、騎手は言った。

此処一帯は我が隊が占有する、一般人立ち入り禁止エリア。

お互いに事情があるのだから詮索は無しにしよう、と告げたのだ。

絶対に何か隠しているとは思うが、それはお互い様。隠し事の数で言えば、そう易々と負ける気は無い。

「では、この一時を与えて下さった神にでも感謝を抱きましようか」

「ええ。思いがけず楽しい一時でしたわ」

皮肉に対しても歴然と返す騎手の様を見て、如何にも肩透かしを食らった。

馬に鞭打ち走り去る背中を見詰め、思う。

ああ言うタイプを天然と言うのだろう、と。皮肉を皮肉と思わない様など見ていて鳥肌すら立ってしまふ物であった。

皮肉に頬を引き攣らせる相手を見るのが好きなのに、天然相手だと通用しない。

何と言うか……

「ああ言うタイプは、苦手だな……如何にも」

The Euro Front #1

無事基地に辿り着き、早速だがアイヒベルガー少佐と挨拶を交わす

事になった。

ヴィルフリート・アイヒベルガー……ブリテン防衛の七英雄と呼ばれる、欧州の英傑。

“黒き狼王”の名を冠するだけの事はある。

帝国軍には肩書を名乗る様な者は居なかったが、紅蓮中将の様な凄みを感じられた。

成る程。確かに腕は上等の様だ。流石は英雄、とでも褒めるべきなのか。

「国連軍大西洋方面第1軍・ドーバー城要塞基地所属西ドイツ陸軍第44戦術機甲大隊大隊長、ヴィルフリート・アイヒベルガー少佐だ」

「申し送れました。日本帝国斯衛軍第零師団所属、剣崎龍二研修生です」

「……卿の活躍は、聞き及んでいる」

「同姓同名です、少佐。私はただの”研修生”でしかありません」

アイヒベルガーの一言へ、直ぐ様に龍二は反論の言葉を述べた。今の自分は研修生。

肩書を名乗る様な大層な活躍をする事も無い、一般的な衛士なのだ。故にアイヒベルガーが畏まってしまえば此処までの努力が全て無駄になる。

そも、これは此方側では無く、其方側が望んだ事なのだ。幾らアイヒベルガーが望んでいようと今回は諦めてくれとしか言い様がない。はしない。

「すまなかつたな、剣崎研修生」

「いえ、差し出がましい真似をしました。申し訳ありません、少佐」
「ぎこちない、か？」

いや、まだ許容の範囲内ではある筈だ。此処から挽回して行けば良い。

「楽にしてくれて構わない。君を歓迎しよう、剣崎研修生。ようこそ
”地獄門”へ」

アイヒベルガーの一言には、確かな凄みを感じられる。

地獄とまで形容される欧州戦線生き残ったのは腕前だけでは無いと言ふ事を、否が応にでも理解させられる凄みだ。肌を突き刺す様な殺気を飛ばす訳でも、空気をギラつかせる闘気でも無い。人の持ち得る才、カリスマと言ふのはこう言ふ物を言ふのだろうか。兎にも角にも着任当初から学ぶ物があるとは、流石は研修である。不貞腐れず、真面目に”研修生”として望んでも十分意義を見出せそうな研修になりそうだ。

「ふっ……流石に、新人の様に”楽にしろ”と言わずとも肩の力を抜いてはいるか」

いつの間にか緩んでいた頬を気取られたのだらう、アイヒベルガーも先程までの気迫を霧散させて此方を見詰めていた。

いつの間にか、俺自身も気を抜いてしまっていた様である。これは良くない、気を引き締めなければ紅蓮さんに会わせる顔が無くなってしまうではないか。

「力の入れ所は心得ているつもりです」

「……成る程。コレは、私も学ぶ事が多いやも知れん」

あまり良い切り替えしでは無かったか……

研修生としては出過ぎた真似をし過ぎてている。これはもう少し自重しなければならぬ。

まあ流石に、今まで”人の上”に立つ者として振舞って来たのだ。

昨日まで行っていた事を今日変えろ、と言われても急に出来る事では無いだろう。

仕方が無い、と言えば仕方が無い。

ただ、仕方が無いで諦められないからこそその任務なのだ。

ああ面倒臭い。いつその事、こんな社交辞令の無い気楽な国に行きたかった。

……後悔先に立たず。

最早諦めるが良い、俺。とは言え欧州から学ぶ事も多いだろう、悲観する事は無い。

「件の研修生……ふふっ、研修生とは思えない佇まいですね」

「研修生だとも。”今”は、まだ」

アイヒベルガーの隣に控えていた女性、ジークリンデ・ファーレンホルストが口を開く。

ファーレンホルスト。ブリテン防衛の七英雄の1人である女性だ。

黒き狼王に付き従う、白き后狼。

ああ……やめてくれ。そんなに熱っぽい視線を向けられては

「剣崎研修生、どうやら研修生らしからぬ思惑が生じている様だが

……っ？」

「っと、失礼……私も未熟な様です」

「私としては、是非とも研修生では無い貴方にお会いしたかったですわ」

そう残念そうに言うファーレンホルストに苦笑を返しながらも、何とか滾る身体を冷却する為に外の空気を身体に循環させる。

スーハー、と何度か空気を入れ替えるだけで思いの外に身体は軽くなつた。

研修生としては有るまじき行いだ。

まさか、研修先の上官を睨み付けるなど言語道断、紅蓮中将の拳骨モノだろう。

恐ろしい、割かし本気で。

「では貴公の在任中に身の回りの世話をする者たちを紹介しよう。

入れ！」

「ゲルハルト・ララーシュタイン大尉以下三名、出頭致しました」

少佐の言葉に対して間髪入れず、後方のドアから言葉が帰って来る。如何やら待機していた様だ。何とも、まあ……先ほどの会話を聞かれていなければ良いのだが、それも神頼みと言う事になってしまうのは非常に残念な事である。神様嫌い。

しかし、ゲルハルト・ララーシュタイン……

七英雄がこれで3人に増えた訳か。黒き狼王、白き后狼、そして”音速の男爵”。

さて、どのような人物なのか……

実際に本人を見た事は無いので、地味に楽しみではあるのだが

「第二中隊を預かる、ゲルハルト・ララーシュタイン大尉である」
な、何だ、2 mはあるぞ!?
山かよ、でけえええっ!!!!!!

「研修期間中の貴官に関わる一切は吾輩の責任である。何かあれば遠慮なく申し出よ」

すみません、申し出辛いです。

身長180はある筈の自分ですら小柄に思えるビツクメン。
天元突破って言うレベルじゃねえ。最早ジャックと豆の木に出て来る豆の木並みの大きさとインパクト。記憶容量の8割をララーシュタイン大尉はデカイで埋め尽くしそうだ。

……これが冗談では無いから困る。

「どうぞ、宜しく願います」

嫌な汗が背中を伝う。

アイヒベルガーを相手にした時は何と言う変化も無かった筈なのだが、ララーシュタインを前にして龍二の背中を滝の如く汗が流れ落ちている。

今までの自尊心とか、そういった物が碎け落ちる感覚
それは良い。
見下ろされると言う初体験
これも、別に良い。
ただ……

「むうっ……!?!」

ヒゲをピンツ、と弄りながら俺の顔を覗き込む事だけは止めて頂きたい

アンタ怖えよ、紅蓮さんとは別の怖さだよ。

圧迫感とかヤベえ。

このまま押し潰されるんじゃないかねえのかつつう程の圧迫感だ。圧死する、このままじゃ、
と言っかヒゲを弄るなよ。

「んんん……?」

ヒゲを弄るなつつつてんだろっがよあつ

最早何も言い出せねえよ。

アンタヒゲと俺、どっちが大事だよ。俺の視線は既にアンタのヒゲにチエツクだよ。

アンタの本体はヒゲか？ ヒゲだろ。ヒゲだよな、そうだろう。

だから、そうやってヒゲをピンツと弄る訳だろう？ それともクセなのか？ クセであってくれ。そうだったのなら それはそれで、
凄く嫌だ。

「らアくにしたアまエエ、剣崎イ研修生イイイイ!!」

コイツ絶対変態だ

ツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

知らない。

こんな英雄、知らない。確かに英雄と呼ばれる存在はクセのある存在だとは思うが、だからと言ってコレはやり過ぎだろう。

最早クセのある、と言うよりクセしか無い。

クセと言うよりも変だ。故に、人はそれを総じて『変態』と言う俗称で呼ぶ。

ま、まさか在任して間も無く変態とご対面とは……欧州、一体何を考えて居るのだ。

頼むからお家に帰して、お願い。もうお家帰りたい。

つうかアンタ偽者だよな!? ソックリさんだろ!

「否、本物である」

心読むんじゃねえええつ !!

何なの、この人!? 絶対危ない、かなり危ない、近寄っちゃいけない。

ママ、如何してあの人は変なポーズ取ってるの? 見ちゃいけません

ん並の危険度数。

つぶねえよ、欧州。

つぶええよ、欧州。

って言うか　恐るべき、ゲルハルト・ララーシュタイン卿……ッ！

「大尉、候補生の硬さも解れた様ですので、以降は私が」

え？　この大尉の奇怪な動きには突っ込まないの？

日常生活でコレなの？　嘘でしょ、こんな人と一緒に居ると身体が変になる。

具体的に言うとは有り得ないってくらいに変なポーズ取りながら、効果音で「ズキユウウン！」とか「メメタア」とか鳴り響きそうなくらいヤバイ。

これが日常だと言うのなら、俺の体験した帝国での日常とは一体……？

あ、いや、待て。

向こうも向こうでデンジャラスじゃないか。

一日中何故か刀を持った悠陽に追い回され、紅蓮中将与デスマッチして、主に肉体的な……肉体……

あ、俺も十分に変態なのか。

「……では、ベスターナツハ中尉。貴卿に任せよう」

渋々引下るララーシュタイン。

見ている、あまりにも残念そうなのは見なかったことにする。

頼むからコツチを見るな。ヒゲを弄りながら此方を見ないで下さい、お願いします。

「第2中隊所属、第3小隊を預かるブリギッテ・ベスターナツハ中尉だ」

「……帝国斯衛軍所属、剣崎龍二研修生です」

明らかに抑揚を失った俺の声を疑問にも挙げず、ベスターナツハ中尉は言葉を続ける。
たぶん普通だ。

あまりにも普通過ぎて両眼が潤んでいるが、問題無く普通である。

「短期間ではあるが、貴君が多くのものを吸収し、日独連帯の絆となる事を願う」

「尽力させて頂きます、中尉」

ぜってえ大尉だけが狂っている。

普通と言う枠組みの中に居るからこそ際立つのかとも考えたが、あの人は変人と言う枠組みの中に居たとしても問題無く光り輝くオーラを持ち合わせている。

アイヒベルガーのオーラがカリスマであるのならば、
ララーシュタインの持つオーラは…… 「通報します」的な物だ
と思われる。

「貴君の案内をするのは正確には私では無く、私の部下だ。 フ
オイルナー少尉！」

ベスターナツハ中尉の呼び声に、後方から凜々しい声が響く。

律儀に敬礼もしているのか、カツンツと軍靴同士を合わせる音が耳に届いた。

律儀だ。故に安息地の様に安らいでしまう。

「貴君の世話役に任命された、イルフリーデ・フォイルナー少尉だ」

「我が隊へようこそ、剣崎研修生。今日から10日間貴方の世話をさせて頂きます。以後お見知りおきを」

この美しい髪色、それに聞き覚えのある声……あの時の騎手か。先程は安全帽の様な物を被っていたので後ろ髪しか見えなかったが、やはり髪色が美しい。

成る程……彼女が俺の身の回りの世話を引き受けてくれる、と言うのか。

流石は欧州。やったね、欧州。

此処に来て、こんなサービス精神は聞いていないが良いサプライズだ。

ララーシユタイン大尉じゃなくて本当に

「吾輩が良かったのであるか？」

お呼びじゃねえよ、デカブツ

残念そうに頂垂れるな。気持ち悪い。

頂垂れながらも、ララーシユタインが懐から此方へと何かを手渡して来た。

それを手に取り確認する、如何やらIDカードの類のようである。

「カードにはチップが搭載されており、それが貴君のIDとなる。

それがある限り貴君の基地内での生活と安全が保障される事になる」

セキュリティカードの様な物が。

これ1枚が結果としては身分証と鍵を兼任している訳だ。

「各ゲートは勿論、部屋の出入りにもそのカードを使う。肌身離さず持ち歩くこと」

「了解しました、中尉」

「既に貴君は任官しており、相当階級は”少尉”である。その為、機密レベルも自ずとそのレベルまで引き上げされる事になっている。その事に付いて質問は？」

「いえ、ありません」

「IDの再発行は不可能だ。紛失した場合、国際問題にも発展しかねないので注意しろ」

「肝に銘じておきます」

……国際問題か。

流石にそうなれば、紅蓮さんに揉み消して貰う事も難しくなるだろう。

それだけは本当に注意しなければならない。国民から受け取った税を糧として、此処まで来ているのだから問題まで引き起こせば紅蓮さんに八つ裂きにされかねない。勘弁願いたい内容だ、それだけは。

「冗談はさて置き、基地内の行動に付いて説明する」

俺で遊ばないでくれ

「体調不良などの理由以外での単独行動は極力控えること。ただし、カリキュラムに従った施設間の移動はコレに含まれない事とする。また」

オイ、ララーシュタイン。

アンタ自重しろよ。

さつきから何でフォイルナー少尉とベスターナツ八中尉の後ろを
き来するのだ。

頼むから勘弁してくれ。既に俺の視線はアンタに釘付けだよ。

……オイ、やめろ。顔を赤らめるな。

「 従って、部屋と食事は仕官待遇だ。給仕に関しては快適を保
障するが、食事のクオリティーに関しては……諦める。此処が欧州
だと言う事を呪うが良い」

すみません、ベスターナツ八中尉。

後ろの変態が気になって言葉が耳に入りやがりません。

「ブリーフィング後の本日の予定は基地施設見学、その後自由時間
1900より歓迎の晩餐となる。当要塞基地の指令官以下幕僚が多
数出席するので正装着用のこと」

「了解しました」

「ふむ。では、解散であるな？ ベスターナツ八中尉」

「 解散ッ！！」

ベスターナツ八中尉の凜とした声を最後に、その場は解散となった。
この後直ぐ様にフォイルナー少尉に案内され、基地内の施設見学に
移る訳だ。

1日目から実に詰め込まれたスケジュールに痛み入る。

何ともまあ、涙すら流れ落ちそうになる程である。

「まっ、何とかなるか……」

欧州での長い様で短い10日間。
それが漸く、スタートした。

The Euro Front #1 (後書き)

The Euro Front

短編と言ったのに、それなりの話数になりそうです

これ短編じゃないよね……

許して、とは言わないわ

88 12月5日(6) 皮肉な再会(前書き)

… 8月が、終わる…

どうも、ガン＝カタです…

最近執筆ペースが劇的に減衰している…

まさに最初と比べると劇的ビフォーアフター、欠陥住宅の完成です
匠のせいですね、チキシヨー！

《全員無事か？》

《はい、現在負傷者は1人も出ておりません。道中で殿下を護衛すると言う新たな任務も加わりましたが、今の所は順調ですね》

《悠ツ……、殿下を？》

《はい。現在は白銀訓練兵のTYPE 94で護送中です》

《気付かぬ内に面倒事を抱え込むな、あのバカ……》

前方を疾走しているのであろう日米混合軍を追い掛ける為に全力疾走するヴァルキリーズたち。その道中、現在の隊の状況を聞くべくイルマへと通信を入れていた龍二は”白銀”の名前を聞いて嫌々と言わんばかりに溜息を吐く。
事を中心に居るのはいつでもアイツだ。いい加減、自重や自粛を知れば良いと思う。

《急ぐぞ、何か起こりそうな気がする》

各員に命令を下し、跳躍ユニットが一際大きく火を吐き出す。

何かあってから

何かあった後

それでは遅過ぎる。打てるのなら、先手を打って置きたいのは常識だろう。

現状、此方が後手に回っている事是否定出来ない事実である。故に

こんな小さな場面だとしても戦力を万全にしておく事に異論を唱える者は居ない筈だ。

少なくとも、征夷大將軍と言う護るべき存在が居る今は尚更のこと。そこに個人的な感情　後手回りが好きでは無い　と言う事が少しばかりでも含まれているのが、龍二の上官としてのダメな処なのはご愛嬌。

個を出し過ぎるくらいに独走するのが彼だから。

《伊隅、先導を任せる。俺は後方に回って新人共の尻叩きにでも励むよ》

《了解したが……素直に殿しんがりをする、とは言えないものか……？》

《ヤダ》

伊隅の言へ一瞬で否定の意を示し、龍二はスゴスゴと後方へ向かって行った。

成る程。

あんな上官にはなるな、と言う良い反面教師だ。コレをネタにして部下たちには”命令違反”や”戦鬪に私情を挟む”と如何なるのかを教え込むのも良いかも知れない。

《宗像、風間。少佐の援護に周れ》

《了解》

《了解しました》

《大尉、あたしはあっ!?!》

《副隊長然として居る。後方に居る部下に笑われたくは無いだろっ》
つまらなそうに唇を尖らせる辺り、速瀬も龍二に通ずる物を持って
いるのだろっな。

頭痛の種は日毎に増えて行くばかり。

伊隅が安息出来る日はいつになることやら……

まだまだ、先は長そうである。

マブラヴ コンディションレット・オブ・ヒューマン

《前方に中隊規模の部隊を確認……件の隊のようです、少佐》

《案外と早くに追い付けたな……って、何だ？ どいつもコイツも
睨み合いか》

伊隅の言葉に頷き、前方を見やるが其処に居る連中は如何見ても仲
睦まじいとは到底言えた物では無かった。百歩譲って犬猿の仲、程
度である。

どちらにせよ、最悪だ。

誰が好き好んで戦乱の最中に突っ込まねばならないのだろうか。
いや、突っ込むしか無い。

何せ 彼はある意味では現状この隊を率いるべき国連の佐官なのだから。

涙を流せるのなら、言うだろう。

何故俺の周りに正常な人間は1人も居ないのだろうか、と。

《ウィーッス。戦力のデリバリーサービスですよ〜っ》

《少佐!?!》

《龍……っ、ご到着なさいましたか》

《どうした? みんなでワーワー大騒ぎ、お祭り騒ぎ? 良いね、俺も混ぜろ》

驚き慄くまりもと月詠は捨て置き、龍二の口角が鋭く上がる。

野生的と言っよりは、悪戯を考え付いた悪ガキの顔をしているのだが

まりもたちがそれに気付ける筈も無い。

そのまま龍二は現状の把握をする為に軽く辺りを見回して、それから取り敢えずオープンチャンネルで怒鳴り声をあげた。

《まりもっ!!! この大馬鹿、いや能無し、ゴミクズ! あとで尻叩き百回ね》

《ええっ!?! ちょっと、龍二くん!!!》

《素に戻ってる》

《うっ……?! し、失礼しました!!》

赤面するまりもの顔を確認すると、龍二は満足そうにケラケラと笑みを浮かべた。

人の気も知らないで、まりもは恨めしげに龍二を睨むが無論龍二が気付く訳も無い。

龍二は早々に、仲間たちとの通信を切って現在部隊の実質的な指揮官である米軍少佐のアルフレッド・ウォーケン少佐へと通信を入れた。

屈強な肉体を持つ、頑固親父の様に眉間の皺が深い男である。一目見たときには、流石の龍二も一瞬呆けた程だがその感情の揺らぎも一瞬のものだ。

《……少しは気分も紛れたでしょうか、アルフレッド少佐》

《君たちの夫婦漫才が見たかった訳ではないが……時間稼ぎと場の沈静化、か》

《俺はただ彼女を苛めたかっただけですよ》

《 恩に着る》

《いえいえ》

現時点、横浜基地が用意出来る最高戦力が此処に揃ったことになる。伊隅ヴァルキリーズ、チーム・ジャツカル。世界に誇る事の出来るであろう最強部隊の2つが、此処に一拳に集う事になったのだ。これ以上の戦力を望む、と言う事は非常に困難だ。

指揮も、龍二が居る事によってウォーケンの進言は先程よりも通り易くなる筈だろう。

ウォーケンはキチンと物を考えて進言する男である。

少しホットな所もあるが、それを差し引いても龍二が力を貸す理由は十分含んでいる。

逆の場合は悲惨な結果しか待ち受けていなかったが。

現状、帝国・国連・米国全ての混合部隊だが統率が取れていない訳では無い。

元々新人たちはお互いの腕をカバーする様に鍛えられており、まりもはそんな新人たちのお守りに夢中。

月詠に問題はなく、ウォーケン少佐に至っては考えるまでも無いだろう。

そこに伊隅たちヴァルキリーズと龍二や唯依たちも含めれば如何なるかなど明白だ。

結局、統率が無くとも個人技で敵をスタボロに引き裂いているだけのこと。

まあ結果を出すまでの過程の効率を考えれば統率が取れているに越した事は無い。

そんな各々の仲間たちのレーダーに、何か動きがあった。

速度は……速い。真っ直ぐに此方へと向かって来る様子に増援か、と気を緩めそうになった龍二ではあったが輸送機の識別が帝国の971航空輸送隊だと確認した瞬間に弾ける様に動く。

《伊隅、971航空輸送部隊だ！ 厚木の連中 ” 奴ら ” だ！！》

厚木基地は既に陥落し、敵の手に落ちている筈だ。

そんな場所から輸送機が飛んで来る？ そんな物、何が中にあるか

など口に出すまでも無い。

やられた　　っ、命を棄てた空挺作戦まで展開するとは思ってもいなかった。

裏を掛かれたとかのレベルじゃない。

最早、こんな捨て身の作戦なんて誰も考え付くものじゃない。後手に回った　　！

《ヴァルキリーズ、全機武装解禁！》

《時間を稼ぐ！　訓練兵共、敵が撃つて来たら遠慮無く応戦しろ！》

ヴァルキリーズの不知火が銃口を上空の輸送機へと向け、それを掻き分けて武御雷が大きく跳躍する。空挺作戦の為に上空を飛び回っていた輸送機の一機を軽やかに叩き落とす為の飛翔だ。

中から敵が脱出暇も与えず、操縦席を叩き壊してそのまま地面と熱烈なキスを強制してやる。眼下で爆発が始まると大慌てで仲間を降下しようとハッチを開く輸送機が数多く居たが、それを逆に待っていたとばかりに龍二は嬉々として叩き落して行く。

エンジンを撃ち抜き、機体を両断し、両翼を削ぎ落とす。

簡単な作業だが、高度な技術を必要とするのは明白だ。

足場は撃墜した輸送機で補い、炎に包まれた輸送機を踏み台にしながら次の獲物へと跳躍する様はハッキリ言って味方であろうと戦慄するものがあつた。

恐ろしい　　人を簡単に殺す事が出来るなど。

《……蛮族が如き戦振り、相変わらず節操の無い》

何機の輸送機を撃墜したか、先程の如く両断してやろうと長刀を振り下ろした龍二の武御雷の腕に両断した時とは別の感覚で支配されていた。

上空、しかも撃墜されるかも知れないと言う瀬戸際。脱出するのでは無く、正々堂々賊を討伐しに来る男など　龍二は1人しか知らない。

《裏切り闇討ち誤魔化し何でも御座れのテメエに言われちゃ終わりだな……ッ》

輸送機の上から不知火と武御雷が地面へと落下し、砂埃を上げながらもお互いへと長刀を真つ直ぐに向ける姿からは凄まじいまでの殺気を臭わせる。

出会った。

遂に、出会ってしまった。

帝国と国連。2つの軍のトップエース。

最高の組み合わせであり、最悪の組み合わせでもある2人の戦い。

《久しぶりだな、　　剣崎》

《会いたかったぜ、　　沙霧》

感動の再会とは程遠い、数年ぶりの再会は戦場の真ん中であつた。

《直ちに戦闘行動を中止せよ。我々の目的は戦闘では無い。繰り返

す、直ちに戦闘行動を中止せよ》

沙霧との斬り合いから一度離れた龍二は、唯依たちの下へと戻って来ていた。

難しい顔のまま仏頂面を引つ提げた龍二を、それでも唯依は当然笑顔で出迎える。

沙霧の長つたらしい言葉よりも何よりも、先ずは部隊長の無事を祝う。つまりジャツカルの隊員たちはそう言う事らしい。流石はミニム混合部隊だ。

国の意向よりも何よりも、親しい者の無事を祈るとは 当然の事ではあるが。

《唯依、悪いがコーヒー淹れてくれ》

《ふふっ、了解しました》

現在動く必要も無く、向こうからまさか都合良く休戦まで申し込んでくれたのだ。

それを利用するチャンスは無い。

龍二は緊張の糸を解き、管制ユニットの重厚なロックを解放した。外から吹き込んでくる風を感じながら、ダッシュボードに入っている煙草を口に啜える。

やはり、休憩中の一服は重要だ。これ一本で今後の作戦に影響してしまうだろう。

《剣崎少佐、君は一体何を 》

が、それを理解出来ない人物もいる。

ウォーケンだ。帝国軍人という物を知らない彼からすれば、この休戦は殿下を奪取する為の前段階だと考えて居るのだろう。

《向こうから言って来た協定ですよ、破るわけ無いでしょ。華の帝
国軍人が》

《しかしっ……》

《気位とか武士道精神とか、良く分かりませんが言葉だけは曲げ
ませんよ。特にアイツは……絶対に、破りません》

それでも、龍二は知っている。

帝国軍人が如何言った人間たちなのか。そして、沙霧尚哉とは如何
言った人物なのか。

知っているからこそ、安心して言える事がある。

この休戦協定は必ず護られる。

だからこそ、龍二は暢気に煙草まで吸って居るのだ。まあ納得しろ、
と言う方に無理がある。誇りや精神の話などウォーケンに理解出来
る筈も無いだろう。

だからこそ、今はこの”休戦”が必ず護られると言う事にだけ注目
してくれば良い。

《この休戦……此方にとっても好都合、か。受け入れるとしよう》

《是非とも。少しは休まないで、貴方も気苦労で倒れますよ？ 深
い皺です》

《……悩まされているのでね、祖国でも。此処でも》

《「」愁傷様です》

口だけの挨拶を済ませ、龍二は武御雷から降りた。

胸の中に沈められ、頭の上を顎でゴリゴリされることが心地良いの
だろう。

イーニアも気持ち良さそうに龍二の体へと手を回し、その身体を
密着させていた。

先程まで戦闘を行っていた筈の人物たちとは思えないが、これが此
処に集まった龍二含め部下たちの恐ろしい処である。

公私混同はしない、と言うか”私”の部分の思いつきり楽しむ辺り
流石と言う事だ。

「少佐、ボクも……」

「ホラ、おいで。高い高いでも何でもしてやらあっ!!」

イーニアがグリグリされている様が入ったのだろうセレナも、
龍二に甘える為にその服の裾を遠慮がちに引つ張ってみる。

無論、龍二に拒否の姿勢などありはしない。

快くセレナの両脇を掴み、天高く持ち上げると頭が花畑の人の如く
クルクルと周り始めた。ハッピーである、脳が。

「わ〜い、高いなあ〜!!」

「つぎ！ セレナのつぎ！」

キャツキャツウフフ。

何故か戦場のど真ん中にて展開される夢色ピンクワールド。周囲一
帯花畑計画始動。

それも厭わず、取り敢えず全力でイーニアとセレナに愛を注ぐ龍二
では会ったが

「うひよひよひよっ!!」

滅茶苦茶気持ち悪い笑い声を挙げていた。

最早奇声とかその類を超越してしまつて一步先に行つて1つ宜しくな如く。

人じゃねえ、と言われれば素直にYes!! と答えるだろう。

だつてアレは人じゃない。シリアスを一瞬で崩せる人間なんて居る筈が無い。

緊迫した状況下の中、何処のバカが夢色ワールドなど建設するだろうか？

すみません、此処に居るバカでした。

その場は既にある意味では修羅場、一步踏み込めば人外魔境。

想像できるだろうか。楽しそうに笑っている少女たち、狂った様に笑い続ける男、そして 笑顔で額に青筋を浮かべる美少女の図式が。

(^ ^) (^ ^) イーニア&セレナ

(。 。) アヒヤヒヤヒヤヒヤ 龍二

(# ^ ^) ビキビキ クリスカ

分かり易い補足説明である。

何が恐ろしいって、クリスカの中にある自身を抑える為の理性と言つりミッターが既に限界を突破し、天元すら突破して行つちまつた現状が恐ろしい。

そして何よりも龍二がその事に気付いていない事が恐ろしい。

恐ろしいが2つ合さり、滅茶苦茶な程までに恐ろしいのが現在の状況。

拳をバキバキ鳴らしながら、無表情で龍二へと近付く幽鬼1名。

「少佐、コーヒーを」

(# ^ ^) 唯依

追加で1名。

此方の少女は手っ取り早く始末したのであるう、手には黒光りして弾を発射するブツが握られていた。此処でその武装の呼称を表現する事はしない。

ある意味、生死に関わるからである。

くくしばらく音声のみでお楽しみ下さいくく

ドスッ

「あふんっ!!」

パンパンパン!

「アーツ!」

ドスドスドスドスゲシゲシゲシゲシ

「ら、らめえええええっ!! □から、□から内臓出ちゃっつううううっ!!!!」

ガガガガガガガガガッ

「ちよっ、それはちが ひぎいッ!!!!!!!!」

くくお待たせいたしましたくく

「決起軍側はマーカーを隠そうともしない……つまり、この休戦は確約と言う事か」

クリスカの前に表示されるマップには、確かに数多く決起軍の戦術機がチエックされている。が、その機体1つ1つに動きなどは全く無い。

あくまでも、彼らは殿下との謁見を希望する者なのだろう。それこそ、此処で逃げられては困ると言う事なのか？ どちらにせよ、自分の真意を伝えたいと言う気持ちは強い様だ。

「国連の、殿下の為を思う彼らからすれば当然だろう……それ故に口惜しいが」

「俺は人の顔をボコボコにした君らが平然とシリアスに戻る態度が口惜しい」

「あゝ？」

「すみませんでした、ちょっと頭冷やすついでに煙草吸って来ます」
申し訳無さそうに、体面だけ変えた龍二はその腰を上げた。

此処で話し合いをしたとしても結果は何も変わらない。今は 少しでも考え事をしたかったのだろう。未だに動きの無い？ のこと、父親のこと、沙霧のこと、千枝のこと。

数多くの難問を抱えるからこそ、こうでもしなければ録に席からも

立ち上がれない。

人の上に立つ責任、と言う物はやはり重いものである。それを悟ったからこそ、唯依は決して龍二の歩を止める様な真似だけはしなかった。

とは言え、龍二も何処かに行く宛などある筈も無い。

ただボンヤリと何も考えもせず、深く林の中へと潜っていく。この先に何があるのか。この先に光はあるのか。

それすら分からず、手探りで辺りを探し回る様な人生の如く……

「チツ……哨戒かよ」

それ故、迷い人同士は惹かれ合う運命にあるらしい。木の幹に凭れ掛かる様にして頂垂れていた少女　彩峰慧の顔を見るなり、龍二は苛々しげに舌打ちを零した。出会いたくなかった、と言わんばかりの勢いである。

「何の用？」

「撃つなら今だぞ」

シレッと言い放つ辺り、龍二自身相当面倒臭がって居るのだろう。慧の凭れ掛かっていた木の幹の反対側へと腰を下ろし、退屈そうに指先でライターを弄んでいた。

「……」

「俺は沙霧を殺す。それはお前が望む事か？」

「……関係ない」

「関係ねえなら、テメエが握る拳の意味はなんだ？ 任務中に私情を挟むな」

「お前が……ッ！」

「テメエが死に腐るなら勝手にすりゃ良いが、俺の部下にまで危険があるなら話は別だ。今のテメエが生きていると俺が困る、此処で死ぬか吹っ切れるかしゃがれ」

言い放ち、煙草を胸ポケットから取り出して火をつける。

吐く息すら白く染まる銀世界の中で、煙草の火は龍二の虚しい心象風景を現して居る様にすら思えた。圧倒的な別色に対して、あまりにも理不尽な程に孤立した赤。

それは孤独。

あまりにも、孤独だろう。

「……何も、知らないクセに……」

「知らねえよ」

「だったら」

「腐っちゃいねえだろ。俺も、沙霧も……進む道は違ったとしても」

「っ……！」

「俺もアイツも自分の言葉で”あの人”の言葉を理解した。だから

アイツは決起なんて馬鹿な真似を起こして、俺は……こんな苦労を
しなきゃならねえ」

「どっ、……して？」

「理解はするな。共感もするな。ただ、お前はこんな馬鹿共がいた
と覚えておけ」

龍二は言い、虚仮にする様に鼻で笑い飛ばした。

お互い、何をやるうとしていいるのかは理解しているのだろう。

だからこそ馬鹿げたお互いの阿呆な行いに対してもう鼻で笑ってや
る事しか出来ない。

鼻で笑って、その後には殺し合いだ。

もう、笑えなかった。笑える余裕すらそこには無かった。

煙草の火は掻き消えた。

そろそろ、時間が迫っている。

「まあ、馬鹿が2人からどちらか1人に減るのは口惜しいか」

それはどちらかの死で終わる、悲しい戦争遊戯。^{ウォーゲーム}

それが常人に理解などされる筈も無く、故にこの場に於いて沙霧尚
哉と剣崎龍二は何処までも異物でありながら何処までも共通してい
るのだ。

誇りを重んじる沙霧、生命を重んじる龍二。

相反する2名が、それでも尚何故共通していると言われるのか。単
純である。

この男達は、決して約束を破らない。

それこそ 今は色褪せた、悲しき性を背負った契りであろうとも。

「虚しいねえ……人は直ぐに過去を忘れる」

静かな独白は風に乗って、やがては虚空へと消え去る。
何処かの誰かに、その言葉を乗せて。

88 12月5日(6) 皮肉な再会(後書き)

クリスマスたちの顔文字を書きたかっただけでござるの巻

亀だ！ 亀が此処にいる、亀エ ツ！！

次回投稿も亀ペース

そう言えば、ユーロフロントよりも先に本編あげちゃった……
やっちゃまったア……
もう首を吊るしかない

89 12月5日(7) oath signing(前書き)

ユーロフロント……書置きの手直しが、終わらない……

懐かしく、儂く、虚しく、切なく、悲しい。

目の前に居る人は昔から外見だけは何も変わっておらず、しかして心象風景はあまりにも逸脱した物へと変化していた。

一言で表すのならば棘の様に鋭く、誰かを傷付ける物のよう。

それが外に向いているのならば 悠陽は彼を此処まで慈しむ事は無かつただろう。

全ての棘を己の臓腑へと向け、己を蝕む様に毒牙へ手を染める。皮肉だ。

結局、この男の生き様を変える人物は誰も現れなかったと言つことなのだから。

「生身で戦術機に乗っていると聞いた時は冷や冷やとしたが……」

「白銀のおかげでしょう。よく気遣ってくれましたから」

「そうか……後で礼を言わねばならんな」

木に寄り添う様にして身体を休めていた悠陽と龍二は膝を着く形で見えていた。

その目から見える気色の色は既に無い。

最早全てを見放している様な、それでも尚縋り付く様な不可解な瞳だ。

悠陽はその瞳を見る都度、堪らなくなる。その瞳を見る度に、龍二

の死を幻視する自分。
そして龍二は帰って来る。
帰って来るが、必ず彼は何かを無くしているのだ。
今度は何が失われるのか　もしかすれば、命かもしれないという
危惧。

恐ろしくて、身体が自然と震える。

「震えているぞ。これを着込むと良い」

悠陽の身を案じてか、龍二は自らが着込んでいた防寒具を悠陽へと
掛け渡した。

少し煙草臭いかも知れんが、と舌を出して笑った様は成る程いつも
の龍二であろう。

いつも通りだ。

何も変わらない。

故に　恐ろしくて堪らなくなる。如何して死ぬかも知れない、と
わかっている戦場の真っ只中で彼はいつでも笑って居られるのか。

諦めている？　違う。

余裕がある？　違う。

いつでも限界のギリギリを突っ走っているクセに、いつでも余裕を
持って振舞うのは彼が人の上に立つ為の心得を自然体で演じている
からこそ。

剣崎龍二は、やはり、如何しようも無い程に、人の上に立つべき人
材だった。

「……恐ろしいのです」

「なにが？」

「お兄様が、お兄様が……っ」

まるで細木に縋る様だ、と龍二は静かに内心で呟いた。今にも滑り落ちてしまいそうな自身を支える為に掴んだ枝は、苦しい程に細い。

それでもそれに頼るしか無い。それは 頼る者がそれしかないから？

痛い程に右腕を掴む悠陽を慰める様に、龍二は空いている左腕を悠陽を抱き締める。

放って置けば、龍二は自由気儘に歩き回るだろう。

それはいつの間にか国の存亡や、世界の命運すら握る戦いの渦中へと彼を招き入れる。

縛られて欲しくなど無かった。

縛られ、雁字搦めになった龍二など悠陽は見たくなど無かったのだ。

自由気儘で、いつでもしかめっ面と余裕を見せる皮肉気な笑みを携えた兄として、いつまでも”あの場所”に居て欲しかったのに。

世界がそれを許さない。

彼女が支えようとした、”日本”と言う国がそれを許さない。

強要するのは、戦い。

強要するのは、命の遣り取り。

「ごめんなさい、ごめんなさい……私が……ごめんなさい……っ」

「……何故謝る？」

「私が、お兄様を……」 殺して”しまっ……ッ！」

「俺を殺すのか？ 悠陽は。殺したいのか？」

「違いますッ！ でも……国を導く者としての私が、きつと……お兄様を……」

口籠り涙を流す。

悠陽のそんな言葉を聞き、その様な姿を見てしまった龍二は、何とも救いの無い彼女の言葉に思わず呆れた様に息を吐く。

彼女は俺を利用して殺すと言う。まさに過労死、と言った具合か？それとも、純粹に戦へと赴かせる事に対する罪悪感から出た言葉なのか。

どちらにせよ、国の上に立つ者が一兵卒の心配まで 何とも見当違いな悩み事だ。

「いいよ」

「え……？」

「大事な”妹”からの頼み事だ。俺はどんな言葉でも 受け入れる」

いい加減泣き止んでも良いだろうに、年甲斐にも無く泣きじゃくる悠陽を見て

龍二は心底彼女を愛おしむ様に、その震える背中を撫で続けたそう
な。

散歩から帰って来たと同時に、龍二は徐にその腰を木の根へと降ろした。

身体は十分な休息を得たと言うのに、その顔は疲れ切っていると言つても過言では無い。

それにも、キチンとした理由は存在していた。

今も尚彼の身体を蝕む存在は確かに払拭されてなどいない。寧ろ増える一方なのは心労である。敵、味方、部下、征夷大將軍など挙げればキリがない。

それを背負い込みながらの戦闘は、きつと自分自身を死の淵へと誘うだろう。

だと言うのに止まれないのだ。それは成る程、確かに愚の極みとも取れる。

「クリスカか……如何した」

「……いや」

そんな龍二が座る木の反対側へ、クリスカはその腰を落ち着けていた。

何か用があったと言う訳ではない。

今は戦乱の最中。誰も彼も取り乱すかの如く走り回るのが常の筈である。その中でもクリスカはただ、この男との時間を思つたと言っただけのこと。

そう　それだけの事だ。

「彼女は……お前の妹、なのか……？」

ふとした瞬間だろう。

降って沸いた様な疑問をクリスカはその口から龍二へと投げ掛けていた。

それに戸惑うのは龍二だ。先ほどの遣り取りを見ていたのか？ そう言葉をぶつけそうになったが、別段彼女の事を責めるつもりにはなれなかった。

模索している、様な気がするのだ。

人とは何なのか。そして 愛とは何なのか。そう、感じた。

「幼馴染、みたいなモノだ」

「幼馴染？」

「昔から一緒に居たってだけの話。でも、そうだな……妹みたいに愛おしいさ」

苦笑一つで、龍二の言場は途切れていった。

最早語る事は無い。

そう、語っている様な気がする。今のクリスカにはこの沈黙が龍二から漏れている。「語らずとも」流れる気迫なのだ。と認識せざるをえなかった。

自分の背中、木を一つ挟んだ向こう側で龍二はどんな顔をしているのだろう。

笑顔なのか、怒っているのか、悲しんでいるのか、それとも……懐かしんでいるのか。

クリスカの知らない過去。クリスカの知らない顔。それを思い浮かべ、胸がチクリと痛む。知らない事が多過ぎる。

世界も、彼と言う存在も、自分自身のことも。

「俺には」

「？」

「俺には、妹がいた……鼻屑目があるかも知れんが、本当に良い子だった」

独白、だ。

それは誰かに語っている訳ではない。

背を向けるクリスカにでも、ましてや己に言い聞かせる訳ですらない。

ただ”咳いている”だけだと言う事実は、クリスカの心に大きな動揺を呼び寄せる。

何故語り掛けない。

何故教えてくれない。

もつと知りたい。人々の営み、世界の理、知識の矛盾、なんでも良い。

もつと知りたい　唯依のことも。セレナのことも。そして、龍二のことも。

「なんで死んだのかなあ……」

「死んだ、のか……？」

「ん？ ……あ、いや、もしかしたら生きているかも」

「……遺体は？」

「ない。死んだって一報だけ貰った」

「なら、まだ……ッ！」

「5年待っても音信不通だ。もう、諦めも付くさ……仕方ないことだから」

乾いた笑いが漏れる。

今まで、いや、これから先も龍二の愚痴を聞かされる人物は早々現れないだろうに。

クリスカはその価値をあまり理解して居なかった。

しかし、龍二が自分に寄り添っていると感じるこの瞬間は……強ち嫌いではない。

龍二も 自然とクリスカになれば言葉を選ぶことなくスラスラと物が言えた。

それは彼が彼女を好いている、とかそんな単純なことではない。

生き写しの様な、自分自身の様な……クリスカに自分を重ねているからこそ、行い。

「イーニアは大切か？」

「ああ」

「即答出来る辺り迷いなし、か……立派な姉妹愛だ」

「……そうなのだろうか？」

「そうだろ」

「……そうか」

「そつち」

その問答だけして、両者共に口を瞑る。語るに及ばず。

この問答だけで、両者は共に自身に突った新たな思いを噛み締めていた。

龍二は己に与えられた新たな家族である彼女たちを護ってみせると固く決意し、

クリスカは人との繋がり先の先にある”何か”に大きな興味を抱こうとしている。

成長していた。

クリスカ・ビャーチエノワは、アラスカにいた頃よりも人として格段に。

ただ

「クリスカ」

「どつした」

「……いや、何でもない」

その内、「子供は如何して産まれるの？」なんて純粹無垢で穢れを知らない質問をして来そうで怖かった。

あ、いや、ホント。割かし真面目に。その手の質問の回答は………実技以外知らんのだ。

野獣で悪かったとしか言えない己が何とも恥ずかしい。

まっ、それも己だと認めるしかあるまいて。

「龍二さん、と……ビャーチエノワ少尉か。殿下から招集令が」

「殿下、から？ 分かった。今行くよ」

そんな折、両名に唯依から伝令が伝わった。

何やら白銀から殿下に頼まれ、皆を招集していると言つ旨であると言つ。あまり、白銀のことを良く思っていないのだからクリスカはその名を聞いただけで顔を顰めた。

南無三、白銀武。

クリスカに嫌われると、後に待ち受けるのは気苦労と心労だけなのだ。

……………ザマーミロ！

周りを見ればまりも含め、月詠にウォーケン少佐まで勢揃いの有様だ。

これを見れば確かに、招集令と言つのも白銀の戯言では無いのだろう。まあ殿下の名を偽って命令など、不敬やら不忠やら色々難癖付けられて斬られるだけの事だと思つが。

「煌武院悠陽殿下に向け、敬礼 ツ！！」

ウォーケン少佐の号令の下、その場にいた皆がぶれる事無く敬礼を悠陽へと向ける。

こういつた場面で、自分たちが同じ軍人であると理解するとは何とも悲しい事だ。

「この様な火急の折……皆を呼び寄せたこと、お詫びします。そして」

スツ、と悠陽はその頭を下げる。

その行為に誰もが息を呑んだ。無論、それは龍二として例外ではない。一国の主が一兵卒風情に頭を下げるなどと、それは……論外だ。有り得ない、絶対に。

有り得てはいけない事態だ。

これは、国民にすら必要のない混乱だけを生む様なモノであろう。

「我が国の此度の混乱……全てはこの悠陽の力不足に端を発すること。日本国將軍として、何よりも日本と言う国を預かる者として。この場にいる国連軍ならびに米国將兵の皆様我心よりの謝意を表します」

「人の心を知るには、貴方はまだ若過ぎるだけのことだ！ 此度の決起は事が早急だっただけの事……貴方は、易々と頭を下げてはいけない！」

「劍崎少佐……未熟故に、謝意を表するのです。国を背負う者として、私には未だに覚悟が足りかねます。結局はそれを貴方たちに拭わせようとしている」

「覚悟云々ではなく、貴方と言う存在が持つ影響力をお考え下さい……こんな……ッ」

「……赦すが良い」

「許しますよ。これも……殿下の言葉です」

溜息一つで、龍二は己の中に渦巻く感情を全て飲み込んだ。

最早悠陽は悠陽の道に行くのだろつ。ならば、この言葉は邪魔に
かなりはしない。

黙って送り出すことも、時には必要になるのだ。

「つて、劍崎少佐あつ!？」

「ただの便所だ、便所。今は叱咤激励の手筈だろ？ 年寄りにや勿
体ない」

年取つてねえけど、とまりもの言葉を一蹴するかの様に龍二は悠陽
へと背を向けた。

普段ならばしよつ引かれても文句は言えない不敬ではあるが、最早
龍二故に仕方がない事である。それに 彼女の言いたい事は理解
しているつもりだ。

なればこそ、今の場に年寄りが居ては冷や水にしかなりえない。居
らぬのだ、年寄りには。

「劍崎少佐」

「はい？」

「此度の混乱……治めるには、そなたの力が必要不可欠でしょう」

「……」

「どうか、この愚将にその武勲を貸し与えて下さることをお願い申
し上げます」

「今は国連に居ようが、元は斯衛です。忠義は……忘れて居ません」

「では尽力を期待します……龍二”お兄様”」

「!!! 意地悪い……混乱を招く様な発言はご遠慮下さい、でん・か!!!」

「ふふふつ、失礼しました」

突然のお兄様発言に、その場で話を聞いているだけの皆様は勢揃いで口を開いてビックリ仰天である。それは龍二も一緒だが、一瞬でその口元は傲慢な程に吊り上った。

この程度の悪戯、昔と比べれば愛苦しい物である。耐えられる、余裕だ。

だが、しかし……何とも悠陽が夕呼に通ずる、”悪女”の片鱗を見せている現状は見るに耐えないものがある。

さらば、幼き頃の純粹な悠陽。ウエルカム、ブラック悠陽。心の中だけに留めた叫びだが、今は無性に叫びたくなる龍二であった。

89 12月5日(7) oath sign(後書き)

お久しぶりです

まずは謝罪から

すみません、マジでリアルが忙しい今日この頃

出来ることなら長期休暇とか長期休暇とか長期休暇とか欲しい

そしてもう一つ

……いやー、今期のアニメは楽しいですね!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0989m/>

Muv-Luv Condition-Red of human

2011年10月25日04時17分発行